
しいていうならお前の横を歩いてるのが魔王

たび岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しいていうならお前の横を歩いているのが魔王

【Nコード】

N4371S

【作者名】

たぴ岡

【あらすじ】

魔法が息づく世界、星と詠の時代……。バウマフ家は、魔物たちの相互ネットワーク「こきゅーとす」の管理人を代々務めている。時は王国暦一〇〇二年……。実在しない魔王を討つべくして旅立つちやった勇者さんを、バウマフの少年と魔物たちは陰に日なたにサポートすることとなる。けれど彼女はなかなか思い通りに行動してくれなくて……。この物語は、とある少年と愉快な魔物たちが綴る、ひとりの少女の壮大な羞恥プレイである……。

「おれ魔物だけどたまには善行してみる」part1(前書き)

(作者より)読みやすくなるよう、一字下げと改行の調整中です。
句読点を付け加えるほか、内容に変更はありません。

なお、この前書きは編集を終えた段階で消滅します。

「おれ魔物だけどたまには善行してみる」part 1

一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おれ魔物だけどたまには善行してみる

二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

許す

三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

許す

四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

許す

五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

それは構わんが……

具体的になにをするんだ？

六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

ありがとうお前ら

できれば人間と絡みたい

ふとしたときに見せる優しさみたいな

七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

それなら近場の鬼のひとたちに協力してもらって

手頃な村を襲撃してもらって、お前参上というのはどうか

八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

名案だな

一分の隙もない

九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

待て

それはなんか違う

鬼のひとたちに申し訳ない

みんなで幸せになりたい

とりあえず人里におりるわ

ちよつと時間かかるから、移動中に案を出してくれるとありがたい

一〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

難しいな

そもそも大半の人間はおれら見ると逃げ出すし

お前ら他に案ある？

一一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

他のひとたちに頼めないなら

人間が逃げないようにつかまえておかないとだめだな

一二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

それなら決行は深夜

奇襲が望ましいな

一三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

というか移動なんて魔法で一瞬だろ

設定上おれらは魔法使えないことになってるけど

近場まで跳ぶぶんは構わないんじゃないか？

移動中だったらすまん

一四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中
構わない

移動の件だが

いきなりおれがいなくなると山の動物たちが不安がるんだ

食物連鎖に手を出す気はないが

人間からは守ってやつたりしてる

それもどうかと我ながら思うんだが……

一五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

その気持ちはわかる

一六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

その気持ちはわかる

一七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

その気持ちはわかる

まあ、おれの家に人間は来ないんですけどね……

一八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

諦めんなよ！
いつか来るって！

一九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

すまん

ちよつと卑屈になった

とりあえず今のところ

深夜に奇襲

人間をつかまえる

ここまででいい？

二〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

つかまえるってのは体内に閉じ込めるってことでいい？
それとも触手で縛る？

二一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おれの経験上、触手はやめておいたほうがいい

たまに鳥とか家に来るんだけど、めっちゃくちゃびびられる

びくつてなる

一一一、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

じゃあ体内で

騒がれると面倒だから、つかまえたら気絶させたほうがいいな

一一三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

！

体内マッサージ

これだ

一一四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

！

一一五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

！

一一六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

！

二七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

それだ！

二八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

！？

むしろおれがびくつとしたわ

王都の、今日はもういいのか？
いつもすまんな

二九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

気にするな

お前ら

祭りの時間だ！

三〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ひゃっほおおおう！

子狸は巢に帰った！

繰り返す！

子狸は巢に帰った！

おれ他のひとたちにも伝えてくるわ！

すぐ戻る！

三二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おう！

しょせん子狸だな！

寝るの早すぎだろ！

三三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ばか

知らないのか？

寝る子は育つんだよ

つまり

小さいです……

三三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

だから牛乳を飲めと何度もだな

三四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

牛乳風呂まで用意してやったのにな

三五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

懐かしいな……

顔真つ赤にして「嫌がらせだろ！」とか叫んでたわ

おれたちの善意をさ

失礼な話だよな

きつちり謝らせただけど

やっぱり礼儀は大事

まあ……

嫌がらせなんですけどね

三六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

戻った！

お前ら

子狸で盛り上がるのも程々にな

まとめるぞ

深夜に奇襲

人間はつかまえる

体内にとりこむ

気絶させる

体内マツサージ

こうして改めて見ると……

完璧だな

三七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おつかれ！

おう

完璧だ

何より無駄がない

三八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

待て待て

お前ら落ち着け

考えてもみる……

出会いがしらに悲鳴を上げられたらどうするっ…

三九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お前……

頭いいな

じゃあ触手で口を封じるってことで

四〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

じゃあそれで

深夜に奇襲

触手で口を封じる

つかまえる

体内にとりこむ

気絶させる

体内マッサージ

うん……

言うことなしだわ

四一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

やばいな……

おれたち明日から尊敬の眼差しで見られちゃうぜ？
魔物なのに……

困ったな……

四二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

それは……

たしかに困るな……

子狸とか感激のあまり泣くかもしれん

四三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

そんなつもりじゃないのにな……

ちよつとした気まぐれっていつかさ……

四四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

お前ら……

安心しろ

きつとろくでもないことになる

子狸がな

四五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

安心した

さすがバウムフ家

四六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

バウムフは格が違った……

「おれ魔物だけどたまには善行してみる」part1（後書き）

登場人物紹介

・不定形生物さん

世界中に広く分布する、もっとも一般的な魔物。

四肢はなく、半固形の身体で這うように進む。

伸縮自在の触手を生やして手足のように操ることも。

体長は一般家屋を丸ごと飲みこめるくらい。

鮮やかに透き通ったブルーのボディが特徴的なことから「青いひとたち」と呼ばれる。

触るとえもしれぬ感触がする。

「おれ魔物だけどたまには善行してみる」 part 2

四七、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

子狸が巣に帰ったと聞いて

四八、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

子狸が巣に帰ったと聞いて

四九、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

子狸が巣に帰ったと聞いて

五〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

まさかのファイブスターズ登場に

おれの胸が高鳴る

五一、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ご近所さん現る

おれ赤面

五二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

同じく

形容しがたい

この気持ち

五三、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

ばか

照れるなよ

おれまで照れるだろ……

五四、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

人間はいないけど

おれはいるよ

それじゃ……だめか？

五五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

！？

お前ら……

いつから見えた？

おれたちの河を監視するの
よせつて言ってるだろ！
もー！

五六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

おい

おい。子狸に相談されるおれの身にもなれ

本当

お願いします

五七、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

親に似ず素直に育ったようで
おれ感無量

五八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

素直というか……
おれは子狸の将来が不安でならない

ときに
スターズはひまなの？

ここ二年くらい人間ががんばってるって
よく耳にするけど

五九、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

おう

さっき

そのことで話してた

緑のひとは

そこそこ忙しいらしい

海のひとは

……まあ察してくれ

おれは

逆にひま

なんか見た目でコミュニケーション不能みたいに思われてて
ちよっと凹むわ

六〇、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

おれは

忙しいっていうか

家が観光名所みたいになってる

レベル3のひとたちが
いちばん忙しいみたいだ
サービス精神旺盛だからかな？

六一、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

うむ

見習うべきかもしれんな

おれなんて

いつも河の底に沈んでるからな……

物理的な意味でも

六二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

やめようぜ……

切なくなる

山腹の

見てるか？

スターズが駆けつけてくれたぞ

みんな

お前を応援してる

六三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

もちろん見てる

お前ら

ありがとう

お前らの声援を

勇気にかえて

真夜中の山村に

おれ参上！

六四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

待て！

子狸が

巢穴を出た！

六五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

！？

六六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

！？

六七、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

ツ………！

星空が綺麗だ！

六八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

！

星空が………綺麗だ！

六九、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

ああ………！

星空が綺麗だ！

七〇、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

星空が綺麗だ………

七一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

うん……

心が洗われるようだ……

七二、管理人だよ

お前ら

何やってんの？

七三、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

管理人さんこんばんは！

七四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

こんばんは！

今日も男前ですね！

七五、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

こんばんは！

あれ！？

なんか昨日より背が……

あ、そうか！

成長期ですもんね！

七六、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

本当だ！

いやあ……

この調子じゃ、おれなんてすぐに追い抜かれちゃうな

七七、管理人だよ

……

まあいいや

ごめん

ちよつと寝てた

お前ら

あんまり夜更かしするなよ

おやすみ

七八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おやすみなさい！

七九、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

おやすみなさい！

八〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

よし

巣穴に戻った

八一、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

ふう

八二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ふう

八三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ふう

子狸め
びびらせやがって

まあ
おやすみだな

山腹の
すまん
そっちはどうだ？

八四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

順調だ
と言いたいところなんだが……

村人を全員
捕獲し終えたところで

こいつ
貴族か？
剣士だ
女の子に挑まれて、応戦中

どうしてこうなった……

お前ら
助言求む

「おれ魔物だけどたまには善行してみる」 part 2 (後書き)

注釈

・河

魔物たちの相互ネットワーク上に展開されている仮想の掲示板を指して言う。

やりとりは基本的に文字列で行われるが、本人の許可があればリアルタイムで五感を共有できる。

「河」はいくつもある。

・レベル

魔物たちの設定上の強さを示す値。

魔法の開放レベルと同意義であり、たとえば「レベル5の魔物」は人前でも遠慮なく「レベル5の魔法」を使ってもいいことになっている。

「おれ魔物だけどたまには善行してみる」 part 3

八五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

貴族……

剣術使いか？

ん……

まあまあだな

速さはそこそこ

八六、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

貴族がお供もつけずに一人で魔物退治か？

無理がある

たぶん騎士だろ

魔法剣士とかいうのじゃ？

でも

魔法を使ってくる様子はないな

八七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

昔ならともかく

魔法剣士の線はないだろ

退魔性が低くなるから意味がないって

けっこう前から言われてる

大人しく魔法使っとけって話

八八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

そうだな

いまのご時世

魔法に頼らず生活できる人間なんて限られてくる

通りすがりの貴族ってところか

八九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

とりあえず

山腹の

お前「愚かな人間め……」

これだけは譲れない

おれは

そのひとことを言うために
海の底でずっと待ってる

九〇、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

同意

たとえ

お前ら全員を敵に回したとしても

おれはご近所さんを支持する

九一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

わかった

ここはお前らの顔を立てる

言っただぞ

とりあえず膠着状態になった

村人を解放するよう要求されてる

いま気付いたんだけど

なんか

おれが悪いことしてる前提で

話を進められてる

九二、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

なんと

青いひとたちの真心をなんだと思っているのか

まあ

自業自得なんですけどね……

九三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

違くない

二年前に王都を襲撃してるからね

おれら……

九四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あの夜が忘れられないの……

おっと

話を進めるぜ

少女「命乞いするなら見逃したげる」

なんという上から目線……

見ろよ

あの目

おい

ゴミを見るような目だぜ

九五、火口付近在住のところにたらない不定形生物さん

なんたる……

親の顔が見てみたい

ここは言い返すべきだろ

お前「どうやら命がいらないと見えるな……」

九六、山腹巢穴在住のところにたらない不定形生物さん（出張中

おれ 超強気

レベル1なのに

ここらでばっさりやらねとくべき？

健闘しすぎたかも

なんか怪しまれてる

少女「……なにしに来たの？ 目的は？ 言いなさい」

九七、かまくら在住のところにたらない不定形生物さん

なにしに来たのか……だと？

ばか

言えるかよ……（照

目的も何も……

たんに家から近かったからだしな

何か適当にでっち上げるか

九八、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

おう

いつものパターンだな

そうだな……

村長の家に秘宝とかねーの？

九九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あつたらびびります……

あ、そうか

なんでもいいのか

壺とか見繕って魔法で誤魔化しとくわ

少女「どこ行くの」

呼び止められました……

— 00、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

なんか地中に埋まってることにしたら？

でも壺はやめとけ

シユールにも程がある

その子さ

剣士なんだろ？

だったら

魔剣とかでいいじゃん

封印が解けて現れた魔剣が

その子があるじと認めて

お前がばっさりやられる

これでどう？

お前ら

修正案あったら頼む

— 01、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

うん

大筋はいいな

ただ……

その魔 剣の役は誰がやるの？

意思があるっていう設定なら

魔法でぱっとやるわけにはいかんだろ

最初に言っとくけど

おれは嫌だぜ

おれが陸に上がるときは

海のひとと一緒にだ

一〇二、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

おれも同じ気持ちだ

ここまで来たら

二千年だろつと三千年だろつと待ち続けるよ

一〇三、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

お前らの気持ちはわかった

それなら

魔 剣そのものが意思を持つんじゃないかって

なんか神々しい使い捨てのキャラクターを登場させて
魔 剣を授けるっていう感じでどう？

一〇四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

それいいな

山腹の

近くに木切れとか落ちてない？

木切れじゃなくても

棒状なら文句は言わない

言わせない

あつたら

そいつを加工して魔 剣に仕立て上げよう

いや

聖 剣だな

一〇五、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

聖 剣とか

熱い展開になってきたな

あ

大好物です……

一〇六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

木切れつてさ……

案外

落ちてないもんだな

一〇七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

終わった……

一〇八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ

終わったな……

一〇九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

！

いや

諦めるのは

まだ早い！

その子に聖 剣を出せるようになってもらえばいい

つまり魔法だ

こう

手から光が伸びてだな……

――0、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

秘められた

潜在能力が

いま解き放たれる！

いや

だめだろ

本人の資質が目覚めるパターンだと
山腹のが村にいる理由がない

――1、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

だから

本人には神々しい何かから授けられた
ありがたい道具っていう認識でいてもらう

人間は

無詠唱で魔法を使えないからな
いけるだろ

一一二、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

え

いいのか？

詠唱破棄って

レベル4以上だぞ

人間が使える魔法って

レベル3が限度じゃなかった？

一一三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

それを言うなら

バウマフ家はどうなる

おれたちが申請すれば

あの子狸ですら

レベル9を使えると思うぞ

あ、無理かな……

お屋形さまと比べるのは

ちよつと酷か……

とにかく

レベル4程度は余裕

むしろ

なんで使えないの？

っていうレベル

一一四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

言われてみればそうだな

なんの問題もない気がしてきた

というか

たぶん過去に何度かやってる

おれたちが知らないだけで

なにしろ

歴代の勇者とか

確実に人類の限界突破してるのが何人かいる

一一五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

だろ

さて

神々しい何かはどうするか……

光の精霊ってことでいいか

映像は……

引っ張ってくるの面倒くさいから

子狸を女装させて

むしろ女体化させて

現地に連れてく

寝てるけど

目とか閉じてたほうが

雰囲気あるだろ

万が一のことを考えて

お前ら

演出と音声を頼むわ

顔とか

ばやけさせといてくれ

一一六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

わかった

おれがやるわ

光の柱でも立てとく

それにしても

子狸は便利だな……

一一七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前ら……

感謝する！

くれぐれも

ステルスは

しっかりとな

あ

最終確認だけど

おれは光の精霊（子狸）の気配（？）を察知して
人里におりてきてるっていう設定でいいの？

おれたち

そういう生態してたっけ？

一一八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

うん……

ちよつと無理があるな

誰かに命令された

みたいなことを匂わせておいてくれ

それでは

各自健闘を祈る

作戦開始

一一九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれ「貴様に構っているひまはない」と言い放ちます

さらに

おれ「あの方に例のものを捧げねば……」と意味ありげに呟きます

少女「だれ？」

ストレートに訊かれました

知りません

というか

存在しません

おれは無言を貫きます

一二〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

ステルス状態に移行します

熟睡してる子狸に忍び寄って

変化の魔法をかけます

服にも変化の魔法をかけます

念動の魔法で子狸を空中に固定します

念のために睡眠の魔法を重ねかけします

光の精霊

射出準備完了しました

ついでに

完成した子狸の画像を河に流します

一一二一、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

ママン

一一三二、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

ママン

一一三三、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

ママン

一一三四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

画像に目を奪われつつ

ステルス状態に移行します

転移の魔法で

夜闇を切り裂き

おれ参上します

少女に忍び寄り

発光の魔法で

近場に光の柱を屹立します

その片手間に

念話の魔法で

少女にダイレクト通信を試みます

おれ「わたしの眠りを妨げるのはだれ……?」

少女「……………」

お前らに報告します

緊急事態発生

無視されました

一二五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前らに報告します

おれ

凝視されてます

気まずいので

視線をそらして

光の柱を見詰めます

間が保たないので

おれ「まさか……目覚めたのか？ 早すぎる……」とサービス精神を發揮します

一二六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おれは

お前らの奮闘を

優しい眼差しで見守ります

一二七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おれは

お前らの奮闘を

祈るような気持ちで見守ります

一二八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おれは

構わん
推し進めろ

と助言します

一二九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

助言に従い

推し進めます

子狸を連れて

転移の魔法で

おれ参上します

間近で見る光量に

内心で冷や汗を浮かべつつ

子狸を光の中に放り込みます

水死体みたいに

ぐったりした子狸を

念動の魔法で再度固定します

一三〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

助言に従い

推し進めます

おれ「悪しきもの手に渡してはならない……」

少女「……………」

冷たく一瞥されましたが
めげずに押し進めます

おれ「あなたに託します。魔を滅する聖剣をここに……………」

少女「役に立つの？」

食いついてきました

現金な人間めと胸中で罵りつつ

おれ「悪しきもの手に渡してはならない。どうか……………」

無視された仕返しに

おれも無視して邁進します

一三一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

タイミングを合わせて

念動の魔法で

子狸の腕を持ち上げます

発光の魔法で

子狸の手から少女の手へ

光の粒子が放たれ吸い込まれる効果を

演出します

少女の魔法回路を
限定的に開放しつつ
子狸を連れて巣穴に戻ります

初回限定につき

今回に限り聖 剣を自動発動しておきました

聖 剣の詳細を記載しておきます

詠唱破棄

標的指定

形状操作

レベル4です

本当にありがとうございました

一三三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

少女の聖 剣が

無事に発動したことを見届けて

発光の魔法を解除します

上空に溶けて消える演出も欠かしません

光の粉雪も降らせておきます

本当にありがとうございました

「三三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

一部始終を見届けてから

おれは

ここぞとばかりに

少女に迫ります

おれ「ばかめ！ 手間が省けたわ！」

ふと村人を取りこんだままになっているのを思い出しました

お前らの期待を裏切らないよう

村人たちを触手で絡めとって

盾にします

おれ「人間ごときに精霊の宝剣を扱えるものか！ やれるか！？」

このおれを！」

さりげなく精霊の存在をアピールしつつ

聖 剣の初心者道場を開催します

少女「うるさい！」

理不尽に叱られました

怒りに任せた一撃でしたが

村人は無事です

おれ「ばかな……！」と一刀両断されます

触手で傷口をおさえると見せかけて
村人たちを優しく地面におろします

おれ「このおれが……人間ごときに……」

過剰リアクション気味に
のたうち回ってから
断末魔の叫びを上げて

転移の魔法で
家に帰ります

作戦終了！

お前ら

ありがとう！

おつかれ！

一三四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おつかれ！

感動した！

一三五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おつかれ！

ちよつと焦つたぜ！

一三六、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

おつかれ！

良い……

やられっぷりだつたぜ……

一三七、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

おつかれ！

おれらは

人間に負けれる設定じゃないから……

一三八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おつかれ！

たしかに

無視されたときは

正直びびつたな

一三九、空中庭園のとるにたらない不定形生物さん

おつかれ！

目の前のことで

頭がいつぱいだったんだろつな

王都の

あの子の魔法

封印しとくか？

手伝うぜ

一四〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

おつかれ！

いや

放っておくよ

おれに考えがある

まあ

面倒くさいだけなんですけどね……

悪用はされないだろ

たぶん

一四一、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

おつかれ！

まあ

人間には過ぎた力だと思いが……

おれたちには

影響ないな

一四二、海底洞窟在住のたらない不定形生物さん

おつかれ！

そうだな

レベル4の魔法で

スターズに対抗するのは

絶対に無理だ

一四三、山腹巣穴在住のたらない不定形生物さん

お前ら

本当に

ありがとうな！

また機会があったら

そのときはよろしく！

「おれ魔物だけどたまには善行してみる」 part3 (後書き)

注釈

・ 剣術

魔法が発達したこの世界では、特別な意味を持つ。

剣術は魔物に対して非常に有効とされるが、対人戦においては魔法の優位性が目立つ。

剣術使い（剣士）は魔法を使わないことが望ましいとされ、日常生活すら困難になるため、一部の貴族が門外不出の秘伝として扱っている。

・ 騎士

おもに軍属の魔法使いを指して言う。

この世界における人間同士の戦争は、馬上から魔法を撃ち合う、中々遠距離戦が主軸となっている。

魔法への抵抗力が総じて高い剣術使いは、単体の戦力として魔法使いに劣るわけではないが、運用上の問題が多々ある。

「なんか魔王が復活したらしいです……」 part 1

一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

なんか

魔王が

復活

したらしいです……

二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

くわしく

三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

くわしく

四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

くわしく

五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや
だから

あちこちの河で騒がれてる

いま

話の出所が散逸してて

確定情報がない状態

お前ら何か聞いている？

六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おれも

その件を追ってる

まだ完全に整理できてないけど

ごく初期に騒ぎはじめたのが

レベル3のひとたちみたいだ

が

どの河を見ても

噂の域を出ない

何が起こっているのか

七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

ていうか

ごめん

おれ知らなかった

魔王って実在したの？

八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

しいていうなら

王都で小さな店を構えてるのが一匹
妻子あり

九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

親狸ですね
わかります

一〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

千年に一度

生まれるという

レジェンドバウマフ

資格は十分だな……

一一、空中庭園在住のところにたらない不定形生物さん

なるほど

情報源は人間なのかもしれないな

千年祭んときの犯行がバレたか？

とうとう

お屋形さまも年貢の納め時か……

一二、山腹巢穴在住のところにたらない不定形生物さん

だから

おれは反対したんだよ

王都襲撃は無謀

まあ

先陣を切ったのおれたちなんですけどね……

一三、火口付近在住のところにたらない不定形生物さん

お屋形さまの辞書に

無謀の二文字はない

今回も罷だ

お前ら騙されるな

一四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん
でも回避不能っていう

一五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん
むしろ
おれたちからお願いすることになるっていう

一六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

お前ら情報早いな

一七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

王都の

あれ？

まだ昼だけど大丈夫？

子狸お昼寝中？

一八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

いや

授業中だったんだけど

騎士団に連行されていった

おれも

ステルスして尾行中

いまは

王城の中にいる

一九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

なんとという重要参考人……

二〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

またか

そんなんだから

友達ができないんだ

二〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そして

出席日数が足りなくなる

そろそろ

本気でやばいぞ

二一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

誰がとどめを刺すかって

一時期は話題になったんだけどな

せつかく卒業まで自重しようって

おれたち一致団結したのに……

よりによって

じつの父親がとどめを刺すとは

二二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

連れて行かないでって

本気で懇願する教官の姿に

子狸が戦々恐々としてた

本人に

あまり自覚はないらしい

じつは余裕あるのか？

二三、火口付近在住のところにたらない不定形生物さん

いや

やばいよ

詳細は

子狸の留年確定が秒読み状態なんだが
の河を参照

じつは本当なら

もう留年確定してる段階なんだけど

教官の温情で

放課後の補習を交換条件に踏みとどまってるのが現状

二四、空中庭園在住のところにたらない不定形生物さん

まあ

千年祭の王都襲撃は一族郎党処刑されても仕方ないレベル

最悪

お屋形さまの嫁さんは

おれが匿うよ

あの人に罪はない

二五、管理人だよ

おい

お前ら

二六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

あ、管理人さんこんにちは！

二七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

こんにちは！

今日も男前ですね！

二八、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

あの

騎士団に連行されたって本当ですか？

おれら

みんな心配してたんですよ！

二九、管理人だよ

ごめん

心配させちゃったか

ありがとうございます

お前ら

ところで

ひとつ質問がある

聖剣って

なんですか

三〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

存じ上げておりません

三一、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

存じ上げておりません

三二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

存じ上げておりません

三三、管理人だよ

おい

おい。正直に答えろ

宰相に訊かれてるんだけど

なんか勇者が魔王を倒しに行くとか言ってるらしいんだけど

おれは

国から魔王を作れなんて依頼を受けてないし

もちろん

勇者も必要ない

というか

精霊なんてこの世にいたの？

どういふこと？

三四、王都在住のとりにならない不定形生物さん

お前です

おっと

まあ過ぎたことは仕方ない

いまは

過去を振り返るよりも

これからどうするか

だろ？

大切なのはさ

明日を見据えること

なんだぜ

三五、管理人だよ

なんだよ

お前……

格好いいな

そうだな

おれが悪かった

じゃあさ

宰相には何て言おう？

おれ

この人が苦手なんだよね

なんかさ

さつきから長々と勇者と魔王の必要性を語ってるんだけど

頭がいいんだな

ってことしか伝わってこない

どう思うかね？

みたいなこと言われても困る

この人は

おれに何を期待してるの？

三六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

いや

お前

それは遠回しに勇者についてけって言われてるんだよ
うまくやれってこと

でも言えないの

お前は表向き

ただの平民だから

察してやれよ

三七、管理人だよ

お前……

頭いいな

でも

それは困る

おれ
出席日数がやばいんだ

かと言って
勇者を放っておくわけには
いかないか……

おれと
同じ年くらいの子供らしい

三八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん
安心しろ

バウマフ家の歴史
二人に一人は
社会からドロップアウトしてる

そういう家系なんだよ

三九、管理人だよ

本当？

なんか安心した

それなら
おれ行くわ

勇者はもう旅立ってるらしいから
追いかけて

一緒に行こうって言えばいいよね

四〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

なんで

お前のプランはそう
いつも大雑把なの？

どう考えても無理だろ
不審者にも程があるわ

とにかく

宰相には出発すると伝えて

それから

家族と学校に

しばらく戻らないと報告して来い

その間

おれたちが

情報収集しておく

四一、管理人だよ

うん

わかつた

よろしく

「なんか魔王が復 活したらしいです……」 part 1 (後書き)

登場人物紹介

・子狸

この物語の主人公。

魔物たちの相互ネットワーク「こきゅーとす」の現管理人。

非凡な実父とは異なり、典型的なバウマフ家の少年。お人好しで、あまり物事を深く考えない。

王都の学校に在籍しているが、魔物たちのいざこざで奔走しているうちに出席日数が足りなくなる。

魔法使いとしての実力は可もなく不可もなくといったところ。魔物たちと親しいので知識はあるが、才能がない。

騎士団によく連行されるので、騎士を見かけるとびくっとする。

「なんか魔王が復 活したらしいです……」 part 2

四二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

よし

行ったな

じゃあお前ら

さっそくだけど……

子狸の

必殺技を

編み出そうぜ

四三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

お前……

もう少し真面目にやれよ……！

子狸も一生懸命

がんばってるんだぞ……！

まず変化魔法は外せないな
レベル5か……

四四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

まっただ

何を言い出すかと思えば……

必殺技？

幼稚だとは思わんのか？

いや

ほぼ無制限の変化がレベル5

本人ベースならレベル3だ
が

詠唱破棄でレベル4だな

四五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いい加減にしろ

どいつもこいつも

子狸の意思を尊重しようという気はないのか？

変化は外しようがないから
よしとして

子狸はセンスないからな

標的指定
座標起点
並行呪縛

このへんは欠かせないだろ

四六、山腹巢穴在住のとりにならない不定形生物さん
下らないな

おれは抜けさせてもらうぜ

欲を言えば

千里眼と併用して

射程超過
減衰特赦

このへんもあると理想だな

現時点でレベル7くらいか？

四七、王都在住のとりにならない不定形生物さん

いや

射程超過と減衰特赦は
座標起点との相性が良すぎるから
たぶんレベル8だな

ここまで来ると

さすがに変化するしないは

あんまり関係ない

それじゃ

おれは子狸のあとを追うわ

ちなみに

宰相は

勇者の情報を隠しておきたいみたいだな

子狸「どんな子なんですか？」

宰相「良い子だよ」

子狸「？」

宰相「少し気難しい面はあるが、……心の優しい子だ」

子狸「えっと……」

宰相「ひとの本質は内面にこそ表れるものだ……。そうは思わないかね？」

子狸「あ、はい」

びっくりするほど
簡単に
言いくるめられました……

四八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物
子狸い……

しかし
ここまで隠そうとするなら
逆に
勇者がまっとうな平民ということ
はないな

宰相が気にかける程度には
高位の貴族か

四九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん
予想通りすぎて
面白みに欠けるな

しかし
王国の大貴族が勇者とは……

国際問題に発展しないか？

五〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

公表しない方向性で

事を進めるんだらうと予測

上記の理由で

勇者も宰相に

言いくるめられてる可能性大

宰相のことだから

各国首脳陣に話は通つてると見た

子狸は保険だな

五一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

王国の上層部は

信用ならない

これを機に

バウムファ家を排除するつもりかもしれん

念のために

お屋形さまには

おれから伝えておく

五二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

そうしてくれ

無用な心配とは思いますが……

最終的な決断を下すのは

お屋形さまだ

おれは

他のひとたちに

話をつけてくる

いまは

宰相の手のひらの上で

踊ってやるよ

大人って汚い

五三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

きれいな馬鹿も

正直

どうかと思います……

五四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸さんのこと言ってるのか？

全面的に同意です……

五五、空中庭園在住のところにたらない不定形生物さん

盛り上がってきたな

勇者の人選に不安はあるが……

子狸ほどじゃない

毎度のことだ

うまくやれるさ

おれたちなら

ところで

脚本どうする？

五六、火口付近在住のところにたらない不定形生物さん

検証の時間はないが

おそらく

他のひとたちは

各自でイベントを用意してくれるはず

おれたちは

子狸と勇者を追う

他のひとたちは
子狸と勇者を待って
おれたちと合流する

問題は……

五七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸か……

毎度のことながら
立ち位置がひどい

これが

お屋形さまなら

国一番の魔法使いです
あなたが勇者ですか
奇遇ですね

共に魔王を倒しましょう

四行で済むのにな……

あ、無理か

あの人

わりと自分勝手だわ……

むしろ

おれが魔王とか言い出しそつで怖い

五八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

言うなよ……

子狸のほうか

ましな気がしてくるだろ……

とにかく

いつものパターンなら

うっかり魔物に追われてて

勇者に助けられて

なし崩しで旅の仲間に加わって

最終決戦する頃には

家事担当っていう流れなんだけど……

今回も通用すると思うか？

五九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

いや

いけるだろ

宰相も

ああ言ってるしさ

あの子が
村人を救おうとしていたのは……

あれ？

もしかして

自分のところの領民だからなのか？

あのテンションの低さは……

やばいぞ

スルーされたら

どうしよう……？

六〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸

涙目だな

目に浮かぶようだわ……

まあ

べつに……

いいんでない？

そのときは

そのときで

六一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん
だな

千年の歴史で
はつきりしてることだ

バウマフさんちのひとに
ひねった役柄を振ると
あとで
おれたちが泣きを見る

アドリブきかないし

無自覚にストーリーを破綻させる逸材

いつも通り
勇者に軽く肩を叩かれて
仕方ないなお前は（苦笑
みたいなポジションでいいよ

六二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん
戻った

六三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おかえり

どうだった？

息子は出席日数がやばいから

おれが行く

みたいな流れだと嬉しいような気もする

六四、海底洞窟在住のところにたらない不定形生物さん

結論から言つと

魔王は実在した

親狸「おれの息子、涙もろいから。可愛いだろ？」

超 笑顔

六五、空中庭園在住のところにたらない不定形生物さん

言うまでもなく

子狸さんには大活躍してもらつ所存です

六六、かまくら在住のところにたらない不定形生物さん

当然のことだろ？

この世界の命運を
他の誰なら任せられるっていうんだ？

六七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

何を今更だよな

論じる価値すらないよ

子狸い……

六八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸い……

六九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸い……

七〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

この世界は

もうだめかもしれんね……

「なんか魔王が復 活したらしいです……」 part 2 (後書き)

登場人物紹介

・親狸

子狸の実父。千年に一度生まれるというレジェンドバウマフ（根拠なし）。

ひとことと言うと完璧超人。飄々としたところがあり、将来は貴族の嫁さんをもらって退廃的な暮らしに甘んじるであろうと危惧されたが、魔物にも優しいからという理由で同じ平民の女性とあっさり結婚し、一児を設ける。

王国の千年紀を祝う「千年祭」に狙いを定め王都襲撃を計画、魔物たちを扇動し実行に移した主犯である。

もうやだこのひと、という意味をこめて魔物たちから「お屋形さま」と呼ばれ畏怖されている。

「どこに出しても恥ずかしくないバウマフ」「バウマフ家の歴史を完成させた男」等々……様々な異名を持つ。

意外と子煩悩であるらしい。

ちなみに生まれた子供は、父親の遺伝子をバウマフの血が拒絶したと言われるほど似ていない。魔物たちは大いに喜んだという……。

「なんか魔王が復 活したらしいです……」 part 3

七一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

教官

泣いちゃった

七二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

泣いちゃいましたか

七三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

泣いちゃいましたよ

七四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

よっぼどだぞ

あの人泣くとか

鬼の目にも涙と言うが……

なんか申し訳ない

うちの子狸が

七五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

いま

職員室にいるんだけどさ

わなわなと震えてる教官を

心配した子狸の発言がこれ

子狸「お、お土産……買ってきます」

終わった

七六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

さよなら子狸

お前のことは忘れない

七七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

冥土の土産を

もらう側になってどうする……

七八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

まだ

旅立ってすらいないのに

ラスボス戦かよ……

いったい

どうなってるんだよ

お前の人生はよう……

七九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

少し

目を離れた際に

これだよ……

ただいま

八〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

他のひとたちは

なんて？

八一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

でかしたと

とくに

剣術使いが勇者というのが

またポイントが高いらしい

おれたち

魔法に対しては

採点が厳しいからな

八二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

あ

子狸が吊るされた

八三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

今晚のメニューは

狸なべですか

そうですか

八四、管理人だよ

お前ら

ごちゃごちゃ言っていないで

助けてくれませんか

八五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

他のひとたちには
悪いけど

今日は旅立てそうにないな

八六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

残念だけど
仕方ないな

子狸の
将来を思えばこそその
苦渋の選択

八七、管理人だよ

おい

おい。お前らがおれを
子狸と呼ぶのは勝手だけど

どうして先生まで

おれをそう呼ぶ

八八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

教官「この、子狸が……」

犬歯つてさ

とがってて

さわると痛そうだよね

八九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おれの家にな

たまに

くちばしの鋭いひとたちが
遊びに来るんだけど

なんかおれ

べつに何をしたわけでもなく
お祈りされるのね

で

何かの拍子に
お子さんらに

つつつかれたりする

これが意外と

ほのかに

あつたかいのよ

不思議な感触だわ

九〇、管理人だよ

わかった

おれが悪かった
謝る

でも

ひとつだけ

はつきりさせておきたいんだ

鞭って

たとえば

人間を叩く以外の

用途はある？

九一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

梱包に

便利なんじゃないか？

「なんか魔王が復 活したらしいです……」 part3 (後書き)

注釈

・犬歯

とがってて、さわると痛そうである。

・くちばしの鋭いひとたち

泳ぎが達者で魚をよく食べる。

魔物たちは、おもに自分たちを指して「く」のひと」という表現を多用する。

しかし人類と敵対しているという設定上、心情的には動物の味方をしたがる。

すると彼らの中で不思議な心理が働き、動物に対しても「く」ひと」という表現を用いることがままある。

その場合、自分たちとの混同を避けるために若干ながら形容が具体的になるらしい。

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 1

四六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸速報

他の教師たちが

あたたかく見守る中

鞭打ちの刑に処される

一回休み

四七、連合国在住の現実を生きる小人さん

おれたちに

激震走る

四八、帝国在住の現実を生きる小人さん

衆人環視の中

鞭打ちとか……

さすがだな

王国の治安は一味違う

四九、王国在住の現実を生きる小人さん

青いひと
わざわざありがとう

それから
子狸さん

おかげさまで
おれの担当地区は
日を追うことに
人外魔境です……

五〇、連合国在住の現実を生きる小人さん

いちいち
ボケないと気が済まないのか
あの子狸は……

五一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

上流から

話は聞いた
お前ら
勇者に仕掛けるのか？

五二、帝国在住の現実を生きる小人さん

おう

イチから説明すると

勇者さんの

“漢”を

見たい

五三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

イチから頼むわ

五四、王国在住の現実を生きる小人さん

おう

イチから説明するわ

つまり

おれたちは

今回の勇者が

本当に

勇者として相応しい人物なのか？
疑問視してる

連合の
あとは頼む

五五、連合国在住の現実を生きる小人さん

なんで

そこでおれに振る……

まあいいけど

とにかく

今回の勇者は

審査を通ってないと

聞いてる

人格に問題があるかもしれないと

そのへんを

見極めたい

どんな人間なのか

わからないことには

シナリオを組めないだろ

で

いろいろと議論したんだが

まずは

人質を使ってみる

予定でした……

五六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

つまり

その人質が

子狸だったんですね……

五七、帝国在住の現実を生きる小人さん

おう

そこらへんの人間をさらってきてても

意思の疎通ができないからな

奇跡は

起きるものじゃなくて

起こすものだって

前々回の勇者も言ってた

五八、王国在住の現実を生きる小人さん

まるっきり

意味が逆だけどな

ともあれ

子狸が使えないと話が進まない

仮に

おれが人間に化けても

お前ら

文句しか言わないだろ？

五九、連合国在住の現実を生きる小人さん

だってお前

どうせ

お母さまに化けるつもりだろ？

六〇、王国在住の現実を生きる小人さん

化けなかったら

化けなかったで

文句を言うだろ？

六一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

なんなら

おれが子狸に化けようか？

六二、帝国在住の現実を生きる小人さん

子狸は

なまじお母さまに似てるから

おれたちが化けると

残念な感じになるんだよな……

雰囲気の問題なのか？

性格とか

ぜんぜん違うのにな

謎

六三、連合国在住の現実を生きる小人さん

別の河でも考察されてたけど

一説によると

おれたちの

認識の誤差から来る感覚なんじゃないか？

と言われている

ようは

インテリジェンスの問題だな

六四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

まあ

そうだな

インテリジェンスの問題と言って差し支えないだろう

六五、王国在住の現実を生きる小人さん

ところでお前ら

子狸が

うっかりおしおきをされている

一方その頃

勇者さんは

まじめに

一人旅を続けているわけだが……

六六、連合国在住の現実を生きる小人さん

おう

まずいな

時間がない

というか

親御さん

年端も行かない

女の子を

一人旅させるなよ……

六七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

しかも
剣士だぞ

夜道とか
どうするつもりなんだ……

六八、帝国在住の現実を生きる小人さん
それなんだけど

明日を導き
暗い夜道も照らしてくれる
聖 剣があるのよね……

六九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん
ああ
便利ですね……

旅のお供にぜひ

七〇、連合国在住の現実を生きる小人さん
これ
言っているのかな？

彼女さ

自覚はないだろうけど

もう立派な

魔法剣士だよな

七一、王国在住の現実を生きる小人さん

え

なに？

聞こえない

空耳かな？

七二、帝国在住の現実を生きる小人さん

おれも

おかしいな

目の前が霞んで

何も見えない

七三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ごめん

いまから行って

土下座してきていい？

七四、 連合国在住の現実を生きる小人さん

いや

すまん

おれが悪かったわ

おれは何も言っていないし

お前らも何も聞いてない

七五、 王国在住の現実を生きる小人さん

そうだな

何もなかった

さて

どうするか……

青いひとも

応援に来てくれたことだし

ここで再確認するぞ

今回は

バウマフさんちのひとが

冒頭に絡んでないから

勇者の旅立ちは

わりと基本に忠実だ

魔王とかいう
伝説の生き物を探して旅をする
勇者さん

当然ながら
目撃例は一切ないので
情報収集がてら
交通の要所となる
港町を目指している

王都から港町へと伸びる街道は二つあるが
今回の勇者は
かなり計画的に事を進めているようで
遠回りのルートを選択

これは街と街を結んだ安全なルートで
宿の心配がないし
人通りも多い

のんびりと
馬を歩かせているあたりも含め
勇者さんのやる気のなさが
うかがえる

仮に仕掛けるとすれば
次の街と王都の
中間地点が理想と思われる

他の人間に助けを呼ばれるなど
不確定要素は可能な限り省きたい

ちよつと走つても届かない距離なら
結界の魔法で誤魔化せる

ここまではいい？

七六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

街道沿いというと

鬼のひとたちは
森に家がある設定になつてるから

そこへ誘き寄せる予定なんだな？

七七、帝国在住の現実を生きる小人さん

おう

そういうことだ

もしも

おれたちに
誤算があつたとすれば

それは

一番の不確定要素が

鞭で叩かれてることだな

七八、連合国在住の現実を生きる小人さん

いても

いなくても

おれたちの足を引っ張るんだな……

七九、帝国在住の現実を生きる小人さん

どこまで

立ちほだかる……

八〇、王国在住の現実を生きる小人さん

この物語は

おれたちと

バウマフ家の

世代を超える

終わりになき戦いを

描いたものである……

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 1 (後書き)

注釈

・上流から

履歴を遡って見てきた参上の意。「これまでの話の流れは理解して
ますよ」という意味で使われる。

同様の意味で「本流から」や「流されてきました」という表現があ
る。

ただし実際はお決まりの挨拶のようなもので、その河を主催してい
る側から簡単にこれまでのあらすじを語ってくれることがほとんど。
その場合、説明を受ける側は知らないふりをして相槌を打つのが礼
儀であるとされる。

・インテリジェンスの問題

何かしら暗黙の了解があり、明言を避けたい場合に用いられる。
つまり具体的な意味はない。

しかしなんとなく賢そうな響きがするのかわ、これを言われると大抵
のバウマフは知ったかぶって理解したふりをする。

その習性を逆手にとった用法のひとつである。

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 2

八一、王国在住の現実を生きる小人さん

そして

そうこう言ってるうちに

茂みに隠れて目を光らせている

おれの目の前を

勇者さんが

通過

八二、帝国在住の現実を生きる小人さん

おつかれ

今日も一日

また無駄な時間を過ごしちゃったな……

八三、連合国在住の現実を生きる小人さん

おつかれ

子狸の話題を持ち出すから

こうなる

いい加減

学習しよつぜ

おれたちの本当の敵は
おれたち自身の
ツッコミ癖なんだってことをさ

八四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

千年は長すぎたな……

思えば
バウマフ家のボケに
ひたすらツッコむだけの半生だった……

八五、王国在住の現実を生きる小人さん

お前ら
まともに入らないでくれないか

おれは
まだ
諦めちゃいないぜ

八六、帝国在住の現実を生きる小人さん

諦めるも何も

子狸がいなくちゃ
はじまらないだろ

！

まさか

お前……

八七、王国在住の現実を生きる小人さん

その

まさかだ

八八、連合国在住の現実を生きる小人さん

よせ！

早すぎる

万が一のことがあつたら

スターズが黙ってはいないぞ

焦るな

再起の機会を

待てばいい

八九、王国在住の現実を生きる小人さん

それは
具体的に
いつだ？

お前らだって

本当は

わかってるんだろ？

おれたちは
レベル1だ

戦闘訓練を受けた人間なら
苦もなく倒せるレベル……
そうだろ？

そんなおれたちが
いまを逃せば
どうなる？

わかりきったことだぜ

レベル2のひとたちに
混ざって襲いかかる
おれたちを見て
勇者はこう思うのさ

ああ

雑魚がいるなって

九〇、連合国在住の現実を生きる小人さん

否定は
しない

だが
それが

おれたちの選んだ
生き方だ

かつて
お母さまは言った

偉くなりたいなら
竜になればいい

けれど
見守るだけの竜がいてもいいし

偉いねって
褒められるネズミがいてもいい

人間も同じ

生きるって
そういうこと

九一、帝国在住の現実を生きる小人さん

ママン

九二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ママン

九三、王国在住の現実を生きる小人さん

ママン

九四、管理人だよ

お前ら

あとで宿題
手伝って

九五、連合国在住の現実を生きる小人さん

子狸い……

九六、帝国在住の現実を生きる小人さん

子狸い……

九七、王国在住の現実を生きる小人さん

子狸い……

つて

管理人さん！

おしおきは終わってたんですか！？

九八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

お屋形さまが

直々に足を運んで下さってな

いろいろと

アウトな三者面談の結果

子狸は

無事（？）に解放された

条件は三つ

しっかりと自習すること

王都に戻ったら顔を出すこと

お土産は縄と鞭

九九、管理人だよ

おれのせいで
痛んじやったから

新品のが欲しいんだってさ

自分で買えばいいのにね

一〇〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あんまり

高度な主従関係を築き上げるの
そろそろ止めて欲しいんだが……

まあいいよ

本人がそれでいいって言うなら

王都の

時間がないから
手短かに説明する

五六

七六

一〇一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

把握した

すぐに向かう

一〇二、管理人だよ

え

人質って

なに？

おれ

嫌だよ

そんなの

一〇三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

王都の

一〇四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

子狸「？」

子狸「……………」

子狸「……あ、おれを眠らせるつもりか！？ させるもんか！」

【子狸さんが開放レベルの制限解除を申請しました】

【否決されました】

【否決されました】

【否決されました】

子狸「」

おやすみ

子狸

じゃあ連れてくわ

この際だし

変化もかけておくか？

—05、王国在住の現実を生きる小人さん

いや

少し待て

おう……

いや

さすがに

あとで怪しまれるだろ

追求されたら

じつは生き別れの妹が

とか言い出しかねない

一〇六、帝国在住の現実を生きる小人さん

んで

あとで妹のことを訊かれて

おれに生き別れの妹が!?

とか

ふつうに言い出すのが

バウマフ家の

おそろしいところ

一〇七、連合国在住の現実を生きる小人さん

おう

つけ入る隙を与えたら

おれたちの負けだ

先は長いんだ
シンプルに行こうぜ

いいか

おれたちにさらわれた
子狸を

勇者が救い出す

救出された子狸が
勇者の
旅の仲間に加わる

この二点だけを
しっかりと押さえていこう

なんでだろうな……

ちつとも

うまく行く

気がしないのは……

一〇八、王国在住の現実を生きる小人さん

奇遇だな

おれもだわ……

とにかく
やってみるしかない

それでは
諸君……

幸運を祈る！

状況開始！

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 2 (後書き)

登場人物紹介

・小人さん

街道沿いに出没し、行き交う馬車や人を襲うとされる小柄な魔物。ひたいに小ぶりな角が生えている。

人間から奪った武器や防具を装備していることになっているが、じつは全て手作りである。

ことにダメージ塗装への造詣は深く、並々ならぬ執念を燃やしているとか。

過去の事例がもとで妖精の一種との分類がなされてしまったため、簡単な呪術なら扱えるという設定がのちに追加された。

他の魔物からは「鬼のひとたち」と呼ばれる。小道具を担当することが多い、伝統の職人芸と称されることも。

不定形生物さんたちと仲良し。

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 3

— 09、連合国在住の現実を生きる小人さん

状況開始

国境を越えて

現地へ

おれ参上します

— 10、帝国在住の現実を生きる小人さん

状況開始

国境を越えて

現地へ

おれ参上します

ついで

居候としての義理を果たすべく

王国のに手袋を投げつけます

手袋が

手元になかったため

ガントレットで代用しました

— 11、王国在住の現実を生きる小人さん

地味に痛かったと報告します

王国を代表して

よかろう

それでは戦争だ

と受けて立ちます

一一二、 連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お前ら

けっこう余裕あるなと内心で呆れつつ

連合国の事なかれ主義を見習って

お前らを放置します

ついで

おれ参上した

青いひとから

子狸を預かり

受諾証明書に判を押します

一一三、 海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

今回

おれたちの出番は

なさそうだな

王都の

あとの四人はどうした？

一一四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうだな

鬼のひとたちの仕事には

絶対的な信頼がある

あとの四人は

絶賛氾濫中の河を

鎮めに行った

山腹のは

ああ言っていたが

勇者が現れると

まず例外なく荒れるからな

一一五、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

前々回は

ひどかったからな

人選は理想的だったのに

なんで

ああなっただ……

一一六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

これは

インテリジェンスの問題だから

言わないでおこうと

思ったんだが……

子狸がいない

いまだから

この場を借りて

はっきりと言わせてもらう

バウマフ家の人間は

変人に好かれる

一一七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

残念です……

まあ

救国の英雄が

まともな人間に務まる道理も

ないか……

お前ら

認めよう

あの正義感あふれる

清廉潔白な
若き英雄は

バウマフの親友だった……

ハイレベルな

変人だったんだよっ………！

一一八、王国在住の現実を生きる小人さん

くうっ（泣

一一九、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

くうっ（泣

一二〇、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

くうっ（泣

で

お前ら

ひととおり

光と闇をスパークさせたし
もう満足だろ？

シナリオを進めますよ
と促します

一一二一、王国在住の現実を生きる小人さん

連合国には

そついうところあるよな
と愚痴を漏らしつつ

ステルスモードに移行

人前では晒せない

健脚を披露して

森を駆けます

一一二二、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

同じく

並走しつつ

あるある

八方美人な癖して

技術力が怖いし

ナチュラルに

他国を見下してる

と賛同を示します

枝から枝へ飛び移りつつ

勇者を肉眼にて視認と

お前らに報告します

一二三、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お前ら

あとで

ちよつと話し合おうな

と平和的解決法を模索しつつ

子狸を抱えて

所定の位置へ移動します

一二四、王国在住の現実を生きる小人さん

これだよ

と戦慄しながら

ステルスモードを解除

減速しつつ

太陽を背に

満点ものの伸身六回転を披露して

完璧に着地を決めてくれた

帝国のに

合図します

一二五、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

王国のの
合図を受けて
ステルスモードを解除
あとに続きます

のんきに
お馬さんに
またがつている
勇者を横目に
茂みを
これ見よがしに
揺すります

一二六、王国在住の現実を生きる小人さん

勇者「？」

物音に反応した勇者に
あふれるテンション

飛び出せおれ
とばかりに
茂みを突き破って
勇者の眼前に躍り出ます

一二七、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

勇躍おれ

二番手も続きます

小物臭漂う挙動を

心掛けつつ

おれ「また懲りずに獲物がやってきたようだな！」

と

ひそかに伏線を張ります

一二八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

というか

今更だけど

あれ馬か？

ロバの間違いじゃ？

と疑問を呈します

一二九、王国在住の現実を生きる小人さん

少し不細工かもしれませんが

お利口なお馬さんです……

と勇者の愛馬を

フオローしつつ

おれ「人間のメスは美味いからな。ついてるぜ」

と

見たことも聞いたこともない
グルメ情報を捏造します

一三〇、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

勇者「……………」

路傍の石を見るような目ですが
めげません

でも

おれの繊細なハートは
脆くも傷付きました
と

お前らに報告します

一三一、王国在住の現実を生きる小人さん

ひとさまに向けていい
視線じゃねーぞ……

と

おれは内心で零しつつ
馬から降りる

勇者さんを律儀に待ちます

話し合いという選択肢を
はなから無視して
静かに抜剣した勇者さんに
ちよつと素でびびります

なぜ

聖 剣を使わない……

と内心でうめきつつ

帝国のに

ひそかに目配せします

一三二、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

まだ

慣れてないのかもな
と推測を述べつつ

おれ「ちっ、剣士か……」

と

わかりきったことを口にします

そして

この緊迫した場面

道端でお食事をはじめたお馬さんに
空気を読めと

無理な注文をぶつけない

おれが
います

一三四、王国在住の現実を生きる小人さん

勇者「命が惜しくはないの？」

降伏勧告の迂遠な表現だろうと
好意的に解釈しつつ

凶器を片手に

ゆらゆらと歩み寄ってくる

勇者さんに

希望を見出すことができません

よって

シナリオを繰り上げます

シナリオBを破棄

シナリオCへ移行します

一三四、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

了解しました

シナリオCへ移行します

子狸をともなつて

時間差で

おれ勇躍します

幸せそうに寝息を立てている

子狸に

この日のために

丹精込めて削り上げた

こん棒を

突き付けます

おれ「武器を捨てる！ こいつがどうなってもいいのか!？」

と

伏線を回収します

さあ

どう出る……？

一三五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

じくり……

一三六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

じくり……

一三七、王国在住の現実を生きる小人さん

勇者「……仕方ないわね」

要求を

呑んだ

だと……？

一三八、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

い、意外だな……

てつきり

子狸を見捨てて

反撃してくると思ったが……

聖 剣があるから

問題ないと考えたのか？

おい

どうする？

一三九、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

どうもこづも

シナリオ通り
連行するしか
ないだろ……

ただし

奇襲に気をつける

慎重にな……

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 3 (後書き)

注釈

・氾濫

河での議論が白熱するあまり、收拾がつかなくなった状態を指して言う。

この状態を鎮めるには第三者が介入するのが一番とされる。とくに青いひとたちは、子狸速報をはじめとする様々な情報を提供する優秀な諜報員であるため、敬意を表する魔物が多いらしい。

・シナリオ

ようは対人間用マニュアル。

かれこれ千年ほど人類の天敵を演じているため、「こきゅうとす」には相当量のシナリオがあり、また編集されている。

いわゆる「お約束」をこよなく愛する魔物たちであるから、既定路線に沿って行動することに無上の喜びを感じるらしい。

大変便利なシナリオであるが、バウマフ家には通用しないという致命的な欠陥がある。

・こいつがどうなってもいいのか

どうにかかって困るのは、むしろ魔物たちのほうである。

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 4

一四〇、王国在住の現実を生きる小人さん

森を移動中なんだが

なんか

拍子抜けしたな

勇者さんは

反抗する様子もないし

意外と

優しい子なのかも

それから

やたらと子狸に

興味を示してる

馬が

一四一、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

意外と優しい？

それはないだろ

お前は

勇者さんの

後ろを歩いてるから
そんなことが言える

目は

口ほどに

物を言うんだぜ……？

お馬さんは

鞭で叩かれるもの同士

響き合うものが

あるのかもな

知らんけど

一四二、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

うむ……

動物の超直感は

あなどれないものがある

それはそうと

当初の予定より

交戦ポイントがずれたから

ちよつと遠いな……

沈黙が気まずいわ

お前ら

何か面白いこと言えよ

一四三、王国在住の現実を生きる小人さん

出たよ

無茶振り……

なんで

お前はそう

自分さえ良ければいい

みたいなことを

平気で言えるの？

言いますけど……

おれ「他愛もないな。剣士といつても、しょせんは女か」

お前「えっ、それがお前の全力なの？」

おい

おい。素で返すな

イベントを遂行中なんだから

仕方ねーだろ

演技してなければ

おれだってな……

一四四、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

連合の

まあ

そう言っつてやるなよ

王国は

貴族政治だからな

コメディアンの素養を期待するのは

ちよつと酷だぜ

一四五、王国在住の現実を生きる小人さん

え？

あれ？

ちよつと待って？

じゃあ言わせてもらおうわ

お前んちはさ

うちは貴族なんていませんし

実力主義ですから

国民全員に同等のチャンスがありますよ

みたいな顔してっけど

やってることは一緒じゃん

方法論が違っただけで

一四六、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

え？

お前

それ本気で言ってるの？

権力者が生まれるのはさ

そいつが

努力した結果じゃん

わかる？

お前んちの場合

そもそも

努力は報われるっていう

考え方からして

まずないだろ

一四七、王国在住の現実を生きる小人さん

え？

ごめん

びっくりしたわ

お前の言う

その考え方ってやつが

報われない努力を生み出す

元凶なんだって

どうして気付かないの？

ちょっと難しいかもしれないけどさ

簡単に言うよ

無駄なんだよね

無駄をなくしたほうが

効率的だし

結果的にさ

より多くの国民が

幸せになれるんじゃないの？

一四八、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おいおい

お前ら

喧嘩するなよ

けっきょくさ

どっちが正しいとかじゃなくて

かじ取りの問題だと思っぜ

頭が無能じゃ

どうしようもないってこと

絶対王政の
限界ってやつだな

一四八、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

え？

何その

おれんち議会政治ですから
みたいな上から目線

自分たちが

これからの時代の
スタンダードみたいな……

一四九、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

え？

そんなこと

言ってないだろ

ようするに

おれは

リスクは分散させるべきって
話してるの

一五〇、管理人だよ

おい

お前ら

喧嘩するな

一五一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

！？

一五二、王国在住の現実を生きる小人さん

あ、管理人さん！

お目覚めですか？

おはようございます！

一五二、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

べつに

喧嘩なんてしてませんよ！

おれたち

仲良しですから！

な？

一五三、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おう！

なんなら

三位一体の奥義とか
ご覧に入れますよ！

一五四、管理人だよ

そうか？

まあいいが……

政治に

正解なんてのは
ない

あまり

熱くなりすぎるな

一五五、王国在住の現実を生きる小人さん

お前

誰だ！？

子狸さんじゃねーな!?

一五六、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ニセモノめ

尻尾を出したな!

子狸さんが

政治について

語れるわけねーだろ!

一五七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

混乱するので

同じ名前を使うのは

やめて下さいよ……

お屋形さま

一五八、王国在住の現実を生きる小人さん

この度は

わざわざお越し下さって!

一五九、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

さそー！

むさ苦しい河ではぐざいますか！

一六〇、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

我々一同

心より

お待ちしております！

一六一、管理人だよ

おう

悪いな

ああ

おれの用件は

もう済んだから

気にしなくていいぞ

このまま出て行くのも
味気ないと思つてな

まあ

うまくやれ

じゃあな

一六二、王国在住の現実を生きる小人さん

またのお越しを

お待ちしております！

一六三、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

またのお越しを

お待ちしております！

一六四、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

またのお越しを

お待ちしております！

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 4 (後書き)

注釈

・三位一体の奥義

きちんと実在する。

相手に向かって縦に並び、正面から突っ込んで順々に成敗されるといふ、小人さんたちの伝家の宝刀である。

いくつかのバリエーションがあり、そのコンビネーションたるや他の追隨を許さない。

・またのお越しをお待ちしております

びびらせやがって、二度と来るなの意。

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 5

一六五、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

さて

到着しましたよ

おれ

勇者さんと子狸を

牢屋に放り込んでくるわ

一六六、王国在住の現実を生きる小人さん

待て待て

お前

わかって言ってるだろ？

その前にさ

やるべきことが

あるんじゃないの？

一六七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

そうだな

不自然な形で

会話が止まっちゃったから

ほら

勇者さんが

純真な眼差しで

お前を見てる

一六八、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おい

まじで期待されてるよ……

無関心で

いてくれたほうが

なんぼか

やりやすいんですけどお……

え……？

まじで？

おれがオトすの？

一六九、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お前なら

できる

一七〇、王国在住の現実を生きる小人さん

否

お前にしか
できないんだ

一七一、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

やめて

そういうの

本当に

やめて

本当……

ちくしょう……

やってやるよ！

やってやりますとも！

見さらせ

おれの

生き様！

おれ「飛んで火に入る夏の虫とは、お前のことだな」

死にたい

一七二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者」……………」

続きは？

みたいな目で

見られてますけど……

一七三、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

なんなの

この子……

本当に

子狸と同一年なの？

未恐ろしいにも

程があるだろ……

おれが

悪いの？

おれが

悪いんですね……

本当
ごめんなさい

一七四、王国在住の現実を生きる小人さん

いや

お前は

よくやったよ

あれ以上は

ない

少なくとも

おれには

とても無理だ

そう気に病むな

連合の

悪いけど

勇者さんと子狸

連れてつてくれる？

洞窟の奥に

牢屋があるから

二人を放り込んで

見張りしといて

んで

適当なタイミングで
居眠りな

一七五、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おう

帝国の

元気

出せよ

王国の

代わりに

お馬さんの世話と

焚き火の準備

しておいてくれ

一七六、王国在住の現実を生きる小人さん

おう

青いひとは

いつも通り

子狸に

ついててくれ

連合のが

居眠りしたところで

子狸を起こして

目覚めた子狸が

魔法で

牢屋の鍵を連合のから

拝借する

っていう手筈で頼む

一七七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

待て

大丈夫か？

その流れだと

子狸が

一時的とはいえ

完全に

野放しになるぞ？

一七八、王国在住の現実を生きる小人さん

良くはない

が

第一印象っていうのは

大きい

最初から

おれたちが
あれこれと
指示を出す

子狸のキャラが
ぶれる

という結論に至った

最悪

謎の覆面戦士ルートに突入する

それだけは

覚悟しておいてくれ

一七九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう

わかった

問題ない

覚悟なら

とくに決めてる

だが

くれぐれも

油断はするな

お前らも

薄々は察していると思うが

この勇者
子狸とは
役者が違う……

一八〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

それは
おれも思った

鬼のひと
場合によっては
あれも
視野に入れておいてくれ

流派を
特定できれば
だいが
絞れるかもしれない

あとのことは
子狸さえいれば
正直
どうとでもなる

一八一、王国在住の現実を生きる小人さん

おう

じゃあ
作戦開始な

ほら

帝国の

薪を集めに行くぞ……

と優しく肩を叩いて促します

一八二、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お馬さんを

さりげなく

最適と思われる

逃走ルートの上に配置します

上で寝そべっている

子狸を引きずりおろして

肩に担ぎます

気分は山賊で

おれ「お前らはこつちだ！」

と

威勢良く声を張り上げて

二人を

洞窟の内部に

いざないます

一八三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ステルス状態を維持しつつ
あとを追います

雰囲気を

盛り上げるために
触手を先行させて

足元に

そよそよと冷風を送ります

勇者「あつたかい飲み物とかないの？」

台無しです

一八四、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おれ「はっ。寝言は寝て言え」

子狸「ん……お茶……」

子狸によって

おれの要求は

即座に果たされました

お前らに再確認します

本当に

このまま進めて
いいんですね？

一八五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

再検討の

余地ありと認めます

主催は至急

返答をお願いします

一八六、王国在住の現実を生きる小人さん

了解

お前らに

子狸の

早期排除を提案します

一八七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

具体案を

お願いします

一八八、王国在住の現実を生きる小人さん

具体案を挙げます

寝ている子狸を
先に連れ出して
丸焼きにします

尊い犠牲でしたと
勇者に
ご理解頂きます

一八九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

異議あり

ご理解頂ける

勇者は
嫌です

一九〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

異議を

認めます

鬼のひとは
気合と
根性で

シナリオを継続して下さい

一九一、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

決議に従い

気合と

根性で

シナリオを継続します

おれ「のんきなもんだぜ。人間ってのはよ

と

お亡くなりになった

緊張感を

不死鳥のごとく

よみがえらせませす

勇者「なんなの？ それ」

お前らに報告します

勇者が子狸に

興味を示しました

いえ

誤報でした

よくよく考えてみれば

物扱いです

一九二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

妥当な線であると

勇者の見解を支持します

ただし

内心はどうあれ

子狸の人権を

尊重して下さい

お前「おいおい。お仲間だろ？」

一九三、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

勇者「そう見えるの？」

言外に拒否されました

お前らに報告します

彼女とは

気が合いそうです

一九四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前らに

お願いします

気が向いたときで

一向に構いませんから

お屋形さまの存在を

たまには思い出して下さい

一九五、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

訂正します

おれたちの

子狸さんに

なんてことを言っただと

おれ憤慨します

懇々と

お説教したいところですが

洞窟の最奥部に

到着したため

また次の機会にします

一九六、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

子狸さんの存在は

いつでも

おれたちを勇気づけてくれると

おれ復活します

一九七、王国在住の現実を生きる小人さん

復活したお前と

一緒に

焚き火の前で

踊ります

一九八、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

復活したお前に

歓喜の雄叫びを上げます

おれ「よしっ………！ よしっ………！ さ、入れ！ 大人しくしてろよ！ 見張ってるからな！」

小躍りしながら

見張りに立つおれを

勇者が

ひどく残念そうな

眼差しで見えています

が

まったく気になりません

作詞作曲おれたちの

おれたち 魔物！

を声高らかに披露します

子狸「……いえい……」

お前が乗るなああああああああ！

もうだめです！

限界です！

これ以上は

子狸の暴走を制御しきれません！

早急にシナリオを進めて下さい！

と

お前らに具申します

一九九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前の

申請を受理します

振り付けの途中で

こん棒を頭上に投げて

景気良く

気絶して下さい

その際

牢屋の鍵を

絶妙な

ポジションに落として下さい

二〇〇、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おれの

イメージが心配ですが

実行します

実行しました

勇者「……………」

おれの完璧な仕事を

お前らだけは

理解してくれると信じてます

二〇一、王国在住の現実を生きる小人さん

おれたちの間に

言葉はいらない

と惜しみない賛辞を送ります

二〇二、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

次は

おれたちの番だ
と静かなる闘志を燃やします

二〇三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おれたちも
負けてはいられないな
と決意を新たにします

二〇四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

失敗は許されない
と全身に緊張感を
みなぎらせます

そして
とうとう

本日の山場を迎えます

子狸にかけた

睡眠の魔法を

解除します！

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 5 (後書き)

注釈

・謎の覆面戦士

勇者の危機に颯爽と現れる謎の戦士。

ときおり真の実力を発揮する、人類の限界を遙かに超越した魔法使い。

その正体は謎に包まれているが、参上と同時に崖下に転がり落ちるなど、お茶目な面もある。

非常に便利な存在であるものの、行動原理が破綻しているため、旅の進行とともに雪だるま式に設定がふくらみ、最終的には魔物たちの手で謀殺されることとなる悲劇の戦士。

壮大な噛ませ犬という心ない意見も……。

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 6

二〇五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お前ら

覚悟はいいか？

おれは出来てる

二〇六、王国在住の現実を生きる小人さん

おれも出来てる

はじまるぜ……

子狸さんのスーパードッキリタイムがよう……

二〇七、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ごくり……

二〇八、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

ごくり……

二〇九、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ごくり……

二一〇、王都在住のとりにならない不定形生物さん（出張中

子狸「……うっ？」

その日

子狸が目覚ますと

彼は

見知らぬ女の子に

踏まれていた……

二一一、海底洞窟在住のとりにならない不定形生物さん

踏まれ……え？

勇者さん？

二一二、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

踏まれとる！

ちよっ

この女……

おれたちの子狸さんになんにしてくれてんの!?

いいぞ

もっとやれ

二二三、王国在住の現実を生きる小人さん

違うだろ

子狸さんを踏んでいいのは

おれたちだけだ!

ああ……

でも、この構図

なんか

しっくりくるな

二二四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん(出張中)

勇者「お目覚め?」

子狸「あ、はい……」

なぜか敬語の子狸

子狸「えっと……あれ？ おれ踏まれてる……」

勇者「あなたのせいよ。あなたのせいで、魔物につかまったわ。どうしてくれるの？」

そう来たか……

二二五、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

なるほど

正直

その発想はなかった

だが

何を要求するつもりだ？

旅の仲間に魔法使いが欲しいなら

家から連れてくればいいだけのこと……

貴族なんだろ？

二二六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

確定情報じゃないな

しかし

現実問題として
いかなる事情があろうと
平民の剣士は食っていけない

二二七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸「え？ あ……ごめん」

とりあえず謝罪する子狸

子狸「えつとあ……。あ、でも大丈夫だよ！　すぐに勇者が助けに
来てくれるから」

え？

二二八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

二二九、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

え？

あ！

こいつ

さては何もわかってねーな！？

二二〇、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

いや！

考えようによってはファインプレー！

彼女が勇者だって

ひと目でわかるのはおかしい

二二二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

！

今回は

打ち合わせの時間がなかった……

宰相は

それを見越してたのか！

大人って汚い！

今度

お歳暮

贈っておきますね（にこっ

二二三、王国在住の現実を生きる小人さん

うむ……

さすがに苦労してる人間は違うな

だが

勇者の

存在を知ってる時点で

おかしくないか？

二二三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お嬢「……なんでそんなことがわかるの？」

はい

鬼のひとチームに1ポイント加算

二二四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あ

くそっ

サービス問題だったな……

次は貰うぜ

うっかり

おれたちから聞いたことをバラすと見た

二二五、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

子狸「え？　なんでって……なんで？」

正解は

質問の意図を理解できない
でした

二二六、海底洞窟在住のとりたらない不定形生物さん

言葉を失うって

こついつことを言うんだなあ……

二二七、王国在住の現実を生きる小人さん

さすがバウマフ家

二二八、帝国在住の現実を生きる小人さん

バウマフは格が違った……

二二九、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お嬢「……勇者が生まれたなんて聞いてないわ。仮に生まれてたと
しても、あなたはなんでそれを知ってるの？」

と

子供でもわかるよう

懇切丁寧に

説明してあげる勇者さん

子狸さん

いいから

こっちへ来なさい

二三〇、管理人だよ

お前ら見てる？

あかさ

この子が

何を言ってるのか

よくわからないんだけど……

ていうか

ちょっと可愛いよね

おれ

緊張するんだけど

二三一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

問題ない

想定の範囲内だ

お前「夢で知らない女の人にそう言われた」と言え

わかったな？

このエロ狸が

二三三、管理人だよ

ありがとう！

言っただよ

あと

エロくありません

二三三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや

エロいよ

お前

ひまさえあれば

女の子のことを考えてるだろ？

まわりの人間が

みんなそうだと思ったら

大間違いなんだぞ？

このエロ狸が

二三四、管理人だよ

ごめん

おれ

エロかった……

二三五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

わかればいいよ

わかれば……

それは

恥ずかしいことじゃないからな

お嬢「あの女ね。……余計なことを」

おい

理解が早いな

二三六、管理人だよ

あの女？

だれ？

二三七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お前です

おっと

とにかく

会話してみる

話題は

お前に任せる

二三八、管理人だよ

うん

わかった

おれ「そのマント、かっこいいね！」

どう？

可愛いね

なんて

いきなり言うのおかしいし

二三九、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

安心しろ
十分おかしい

なんの
脈絡もねえ……

二四〇、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お嬢「とにかく。わたしが魔物につかまったのは、あなたのせいなの。わかる？」

華麗にスルーされました

二四一、管理人だよ

え〜……？

たぶん照れてるんだよ

って

お前どうした！？

なんで寝てるの？

二四二、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

気にするな

上流は見んでいい
目の前のことに集中しろ

というか
今更かよ……

二四三、管理人

おう

というか
お前らは
この子のこと
お嬢って呼んでるの？

もしかして貴族さま？
身分が違つんだな……
ちよつと残念

二四四、王国在住の現実を生きる小人さん

お前が残念
いいから
さっさと返事しろ

お前の反応が

にぶすぎて
いらいらしてるぞ

二四五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

慌てて返事をする子狸

子狸「あ、ごめん。ちょっとわからない」

やはり

わかっていなかった

お嬢「……そうなの。そう……」

依然

子狸は踏まれている

お嬢「じゃあ、ごうしましよう。わからなくてもいいわ。あなた、わたしの命令に従いなさい。名案だと思っの。どっ?」

名案だと思えます

二四六、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

同じく

この上ないかと

二四七、管理人だよ

そうなの？

なんか

少し無茶なこと言われてる気がするんだけど……

二四八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

少しなのか……

まあいいよ

好きなように答える

おれたちがついてる
だろ？

二四九、管理人だよ

おう！

じゃあ……

おれ「わかった。何したらいい？」

あんまり

逆らわないほうがいいよね

二五〇、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

流されるままだな

それでこそ

おれたちの

管理人だ

二五一、管理人だよ

いたの!?

声かけてよお〜

どう?

さいきん

元気してる?

ちゃんと

ごはん食べてる?

二五二、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

いえ

いちおう

こう見えても

不老不死なんで……

それより

管理人さん

いい加減

起き上がられては

いかがでしょうか？

二五三、管理人だよ

あ、うん

起きました

優しい子なんだね

足どけてくれた

二五四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうだね

優しいね

お嬢「よろしい。それじゃあ、あなた、わたしの身の回りのお世話を
してね。旅してる間、ずっと」

子狸「……ん？」

優しいね

二五五、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

そうだね

優しいね

二五六、海底洞窟在住にとるにたらない不定形生物さん

そうだね

優しいね

海のひと

おれは

わかってる

二六六、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

ばか（照

二六七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前ら

そのネタ禁止だって

言っただろー！

子狸「ずっと？」

お嬢「そう。ずっと」

子狸「ずっと……」

悩む子狸

何を悩んでいるのか……

お前らは

おわかりですね？

子狸「どれくらい？」

正解は

期間でした

二六八、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

まったく問題ない

二六九、王国在住の現実を生きる小人さん

だな

初級者問題だぜ

二七〇、管理人だよ

お前ら
遊んでないで
助けてくれませんか

いま思い出したんだけど
おれ……

父さんと母さんに
何も言っていないよ

あれ？
何を言うんだっけ？

二七一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ
そうだよな
忘れてるよな

まあ……
それなら
ためにそう言ってみたら？

二七二、管理人だよ

おう

おれ「両親の許可がないと、遠出はちょっと……」

彼女には悪いけど

おれ……

あ！

二七三、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お

思い出したか？

子狸「お土産どうしよう……」

と

軽くフェイントを交えつつっ

お嬢「ご両親のことなら心配いらないわ」

スルーされえのっ

お嬢「あなた平民でしょ？ わたしは貴族なの。その問題はこれでいいわね」

はい

出ました

典型的な貴族です

本当にありがとうございます

二七四、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

いっそ

すがすがしいわ

本当にありがとうございます

二七五、王国在住の現実を生きる小人さん

違うからね？

典型的すぎて

逆に

めったにいないレベルだからね？

平民にも優しくってのが

さいきんの貴族の

スタンダードだよ？

本当だよ？

ほら

勇者とか

基本

平民出身だしさ

二七六、管理人だよ

勇者！

そうだった

おれ「いや！ でも、おれ。勇者についていかなくちや……」

お嬢「それも夢？」

夢？

夢って

なんだっけ

二七七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

未来への

架け橋かな……

お嬢「でも、それなら話は早いわね。あの子も懐いてるみたいだし」

お馬さんのことかな？

けっこ可愛がってるのか……

そして

この話の流れは……

二七八、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お嬢「あなたは、どう思う？ 勇者サマについて」

子狸に背を向けて
てくてくと

鉄格子の前に移動

いよいよか？

いよいよなのか？

子狸「……ん？」

子狸さん

勇者よりも

まず話の流れに

ついていきましょうね

お嬢「わたしたちにとってはね、邪魔者なの。どちらかと言えば、魔王がだけれど」

こいつは……

おい

王国の

二七九、王国在住の現実を生きる小人さん

おう

準備しておく

二八〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

頼んだ

おれは

念のために

標的指定の守護魔法を

子狸にかける

お嬢「だから、今回はチャンスなの。お父さまもお喜びになってらしたわ」

二八一、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

肩越しに

子狸を振り返り

お嬢「あ、言い忘れてたけど」

聖 剣 疾 走

お嬢「わたし、勇者さまだから。口のききかたには気をつけてね？」

ひゅー！

鉄格子を

ものともしねーぜ！

お前ら

作戦再開！

二八二、管理人だよ

えつと……

ごめん

ちよつと待って

聖剣？

この子が勇者なの？

女の子なんだけど……

あ

本当は男の子なのかな……？

ちよつぴり

シヨックです

と本心を打ち明けます

二八三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

大丈夫

お前の大好きな

女の子です

と子狸の鋭気を養います

二八四、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

鉄格子を

あめみたいに切断して

牢屋の外に出てきた

勇者が

寝ているおれに

歩み寄り

聖 剣を突きつけます

勇者「起こして」

と

子狸に

おれの覚醒を促します

子狸「あ、うん」

勇者のあとに続いて

巣穴を出てきた

子狸が

魔法で

などと

おれたちのプランに

気がついてくれるはずもなく

ふつうに

おれの肩を揺すります

それだと

お前にやらせる意味がないだろ
と

おれは内心でツッコみます

勇者「……まあいいけど」

早くも

勇者は諦め気味です

諦めんなよ！

と

おれは内心でエールを送ります

とりあえず

仕方ないので起きます

おれ「………う？」

間近で見る聖 剣は

意外とまぶしくない
と

お前らに報告します

二八五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

何回か

それで失敗しているので
学習の成果です
と胸を張ります

今回は

具がないので

少し不安でしたが

うまく行ったようで何よりです

ところで

お前

脅されてますけど

大丈夫ですか？

勇者「言いなさい。魔王はどこにいるの？」

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 6 (後書き)

注釈

・魔物

人類の天敵とされる、高い知性を有する不思議な生き物たち。人語を解し、ときに狡猾な手段を用いて人間を襲う。

死骸は残らず、致命傷を負うと肉体が消滅するということになっている。魔法との関連性があるのではないか……と言われている。

ときおり魔王とかいうのが登場する。魔王の言うことを、魔物はホイホイと聞く。きつと魔物の親玉なのだろうなあ……どうだろうなあ……。

国家間の情勢が怪しくなると魔王が出てくるので、負の感情が凝り固まったものなのかなあ？ どうなんでしょう……。

そんな魔物たちの普段の暮らしぶりは、なかなかどうして謎に包まれていて興味深い。動物たちとはわりと仲良くやっているらしい。

以下の内容は、バウマフ家と各国首脳陣（一部）が理解していること。

じつは不老不死の存在である。ひとりひとりの担当地区が広大であるため何かと誤解されがちだが、言うほど個体数は多くない。

狭義における「生物」とは一線を画し、その正体は魔法そのものだったりする。

およそ千年前にバウマフ家の先祖（開祖と呼ばれる）が「魔法に心を与えた」ことで、うっかり誕生した。

つまり意思を持った「魔法」であるため、人間が扱えないレベルの高度な魔法を難なく操れる。しかも無詠唱。

寿命という概念がないため、何より退屈を嫌い、人類への干渉を度

重ね行ってきた。

当初は善行をメインにしていたのだが、おもにバウマフ家を熱く見守っていたため、ツッコミすぎて人格が多少（？）歪む。

やがてバウマフさんちのひとが怒らない範囲でよそさまにちよっかいを出しはじめ、ふと気が付けば不倶戴天ポジションをゲットしていた。

リアクションが面白いから、つい……と本人たちは自供している。しかし反省はしなかった。

・夢

未来への架け橋である。

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 7

二八六、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

なるほど

たしかに

おれたちに訊くのが一番だな

だが

多少は頭が回るとはいえ

しよせんは子供だな

と

おれは内心であざ笑います

おれ「それはな……」

勇者「それは？」

おれ「ばかめ！」

と

地面に転がっている

マイこん棒を拾って

反撃ののろしを上げます！

二八七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おれたち 魔物！

二八八、管理人だよ

お前ら 魔物！

二八九、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

ひゅーひゅー！

二九〇、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お前らが歌ってる間に

おれ一刀両断されました
と

お前らに報告します

二九一、管理人だよ

おれは

ちゃんと見てたよ！

こん棒

切られなくて良かったね

二九二、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お前

おれたちに対してだけは
ときどき毒を吐きますね……

ステルスモードに移行
青いひとと合流します

二九三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

鬼のひとと合流しました
ハイタッチして友情を再確認します

鬼のひとを
打ち破った勇者は
マントをひるがえして
聖 剣を仕舞います

勇者「主人に義理立て？ 下らない……」

と

吐き捨てて
来た道を
戻りはじめました

なんとなく
ついて歩く子狸に
感心したようです

勇者「その調子よ。あとは、そうね……こつこつ暗いところ、わたし苦手なの。先に立って歩くこと」

ひよっとして自分に気があるのでは？

と勘違いした子狸が

はりきって提案します

子狸「まかせて！ あ、そうだ、明かりつける？ おれ、発光の魔法はけっこう得意なんだ」

おれ

ちよつと泣けてきた……

と

お前らに悲哀を訴えます

勇者「うるさい。なんのために、わたしが剣を仕舞ったと思ってるの？」

子狸「……鞘に入らないから？」

勇者「あなたと話していると、退屈しないわ」

二九四、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

何やら物音が聞こえたという設定で

マイこん棒を構えて

洞窟内部に侵入します

二九五、王国在住の現実を生きる小人さん

焚き火の見張り番という各目で
洞窟の外で待機します

あえて戦力を分断するのが
ニクい演出です
と自画自賛します

二九六、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

勇者「外にも二体いるの。こっちの居場所を教えてもトクすること、
ないでしょ？」

子狸「そっか。君、頭いいんだね」

お前

会うひと会うひとに
そう言ってるじゃねーか……
と内心でツッコみます

勇者「……そう？　ありがとう」

勇者も呆れています

勇者「ところで、さっきも言ったけど、その口のききかた……」

子狸「あ、もうひとり来たよ」

お前ら

帝国のの

奮闘に刮目せよ

とプレッシャーをかけます

二九七、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ていうか

会話が丸聞こえなんだよお……

なんで

おれのと看だけ

こんな試されるようなシチュエーションなの？

と不平等を嘆きつつ

おれ「貴様ら……！？」

誤魔化しようがない距離なので

こん棒を振り回しながら

勇者と子狸に向かつて

駆け出します

二九八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

由緒正しい亜人走りで見寄ってくる鬼のひとに

勇者は

子狸の耳元で囁きます

勇者「撃って」

後ろから両肩を支えられて
どきまぎしている子狸さんには
申し訳ありませんが

お前

どう見ても

盾にされてますよ？

二九九、管理人だよ

なんで

女の人って

こういうとき

みんな

おれを盾にするんだろう……？

撃ちますね

おれ「チク・タク・ディグ！」

三〇〇、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

避けますね

子狸の指先から放たれる空気弾

迫り来る空気の弾丸を

おれ跳躍し
華麗に回避します

三〇一、管理人だよ

跳んだ！？

なんで避けるの！？

レベル1が

やっていい動きじゃないでしょ……

おれ「デイグ！ デイグ！」

三〇二、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

連射……だと？

子狸め

すっかり

大きくなりやがって……

と

感涙にむせびつつ

空中で身をひねって

全弾回避します

子狸「ちよっ……！」

人間にやられるのは
本望なのですが
お前にやられるのは
なんか
納得いきません……

軽やかな身のこなしで
着地し

じりじりと間合いを詰めます

おれ「お前とおれ、どちらが正しいか。つまりはそういうことだ……」

三〇三、管理人だよ

おれ「……手を出さないで。おれがやる。おれがやらなくちゃ、だめなんだ……！」

じりじりと回り込みながら
全身に魔力をみなぎらせます……！！

三〇四、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中）

おれ「そつだ、それでいい。そつでなければならぬ……」

マイこん棒を水平に構えて
おれ考案の最強ポーズをとります

三〇五、管理人だよ

おれ「……違う出会い方をしたなら、おれたち……」

お前「意味のない仮定だ」

おれ「意味なんてっ……!!」

三〇六、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おれ「言うな！ お前は……人間だ。おれたちとは、違う……」

お前「そんなのっ……!!」

おれ「来い……!!」

お前「この、わからず屋！」

三〇七、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ファイナルバトルに突入したお前らには悪いんだけど……

勇者さん

お前らの横を

通過していききましたよ？

と

言っても無駄だろうかと

なかば確信しつつも
健気に忠告します

お前ら」「うおおおおっ！」

ですよ

はいはい

空気を読めなくて

ごめんなさいね

青いひととの別れを惜しみつつ

勇者の

あとを追います

三〇八、王国在住の現実を生きる小人さん

その手があつたか……

三〇九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おーい

主催

お前は

あっちに行つてくれるなよ？

三二〇、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

まさかの

子狸 離脱

三二一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

正直

すまん

おれの育て方が悪かった……

お前ら

あとは任せた

例の件だが

責任は

子狸が取る

三二二、王国在住の現実を生きる小人さん

了解

お前ら

お遊びは

これまでです

焚き火に
薪をくべながら
おれは言います

おれ「やはり貴様がそうなのか」

背中では語るおれに
洞窟から出てきた勇者が
ぴたりと足を止めました

勇者「残るはあなただけよ」

おれは
ゆっくりと立ち上がり
焚き火を踏み消します

おれ「違うな」

そして
おもむろに振り返ると
片手を上げます

おれ「大人しく精霊の宝剣を渡してもらおう」
背後の森から
姿を現す

おれ
と
おれ

勇者「……渡せと言われても、そんなもの知らないわ」

おれ「それも違う。精霊に何を言われたのかは知らんが……浅はか
だったな。すぐに後悔することになる。すぐにな……」

樹上から飛び降りてくる

おれ

一斉に立ち上がる

周囲の茂みに潜んでいた

おれ

おれ

おれ

おれ……

総勢

20人

全部おれ！

おれ「かかれ！」

おれAの号令に従い

おれBとUが

ところ狭しと

勇者に

殺到します

三二一三、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

勇者「小賢しい真似を……」

おや？

勇者の様子が……

勇者「このわたしを……畏に……」

すともと

表情が落ちました

と

お前らに報告します

三二一四、王国在住の現実を生きる小人さん

聖 剣 抜 刀

発動と同時に

おれC

おれD

おれE

は

帰らぬひととなりました

おれB

おれこ
で
連携攻撃を
仕掛けます

三一五、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

勇者は
一向にひるみません

おい
聞いてた話と
違います

王国のの
連携攻撃を
ものともしてません

三一六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん
待て
見極める

波状攻撃してみてください

三一七、王国在住の現実を生きる小人さん

了解

おれC

反撃で召されました

おれB

いったん後退

おれG

おれH

と合流し再突入

おれI

おれJ

時間差で突撃

なんだ？

なんで

当たらない？

剣の扱いも

身のこなしも

大雑把なのに

妙に余裕がある

目がいいのか？

三一八、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

いや
バランスがいいんだ
体勢が崩れない

見たことのない
剣術だな

しいていうなら

昔の剣士の

我流剣術に近いが……

違うな

なんだ？

なんか……

おい

人間の動きじゃない
速いとかじゃなくて

正確すぎる

三一九、海底洞窟のとるにたらない不定形生物さん

おい

訓練で身につくような
技じゃないぞ

それどころか

技ですらない

才能とか

そういう次元でもない

こいつは……

おい

王都の！

三三〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

アリア家か！？

三三一、王国在住の現実を生きる小人さん

アリア家！？

三三二、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

アリア家！？

三三三、管理人だよ

あの子

アリアさんっていうの？

三三四、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

あのアリア家……かよ

三三五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

最悪だ……

宰相

あいつ……

関わり合いになるのを
避けたな！？

海底の！

至急

他のひとたちに連絡を

今回の勇者は

王国の

黒幕だ……！

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 7 (後書き)

登場人物紹介

・勇者さん

王国の大貴族、アリア家の令嬢。

父に命じられて領地を見回っていたところ、青いひとに魔法レベルを開放されて聖 剣の保持者となる。

それまでの経緯がひどかったため、魔王が復活したと勘違いして旅に出た。

勇者という存在に懐疑の念を抱いているが、自分が勇者になるぶんは構わないらしい。

典型的すぎて逆に珍しいほど貴族貴族していて、完全に平民を見下している。

アリア家というのは、代々王家に仕える重臣の家柄だが、そのじつ王国の王座を虎視眈々と狙う「謎の黒幕」ポジションの大御所である。

帝国との戦端を開こうとしたり、内乱の糸を引いたりと健気にがんばってきた。

そんなことを先祖代々繰り返してきたので、遺伝子レベルで感情の在り方が独自の方向に突き進んでいるらしい。

剣士としての技量や身体能力そのものは飛び抜けて優れているわけではないが、自在に感情を除外できるため、怒りや恐怖に左右されることがない。

子狸いわく「ちょっと可愛い」容姿をしているとのこと。

注釈

・全部おれ

正式名称は分身魔法。オリジナルと同等の能力を持ったコピーを、いくらでも増殖できる反則的な魔法である。

バウマフ家の人間がいないところでこれをやると引っ込みがつかなくなるため、禁じ手のひとつとされている。

とくにレベル3以上の魔物が「全部おれ」すると、人間側の心が折れてしまう。

取り締まりを行っているのは通称「ファイブスターズ」と呼ばれる最高位の魔物たちで、そこには多分に妬みの気持ちも混ざっているようだ。

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 8

三二六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

これまでの あらすじ

哀しみを胸に

鬼のひととの決戦に赴く子狸

一方その頃

鬼のひとの

全部おれが

勇者さんに牙を剥く………！

やがて

戦いの中

ついに真の実力を発揮する勇者さん

なんと彼女は

あの悪名高き

アリア家のお嬢さまだったのです………

こんな感じで行ってくる

三二七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう。頼んだ

しかし、どうしたものか……

正直、おれとしては

アリア家の人間と

子狸が一緒にいることに

不安を覚える

もう少し具体的に言うと

気分を害したからといって

殺されても困る

今からでも遅くないだろう……

謎の覆面戦士ルートに路線を切り替えるか？

三二八、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

つまり

子狸には

ここで死んでもらうわけだな？

おれは

一向に構わないぜ

三二九、管理人だよ

おい

おい。お前ら

そうやって

事あるごとに

おれを殺そうとするのは
やめてくれませんか？

アリア家ってのが

なんなのか知らないけどさ

だからって

子供が親に似るとは限らないだろ？

おれは

彼女を信じたい

三三〇、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お前が言つと説得力あるな

さすが、鷹から生まれた鷹の言つことは違う

でも、本当にいいの？

お前

自分で思ってるほど
人を見る目ないよ？

三三三二、管理人だよ

え？

なに言ってるの？

おれだって

大きくなったら

きつと父さんみたいになるよ

人を見る目

あるし！

三三三三、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

じゃあ

エロ狸さんの強い希望により

続行ということだ

ステルスモードに移行

子狸を連れて

洞窟内部を移動します

三三三三三、王国在住の現実を生きる小人さん

おれK

おれL

おれM

完全に沈黙しました

一対多を想定した剣術だけど

同時に捌けるのは三人が限度だな

それでも

年齢を考慮に入れると

かなりのもの

まあ、聖 剣の性能によるところが大きいんだけど

と、お前らに報告します

三三四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

切れ味は言つに及ばず

重量がないし

多少は変形できる

経験を積みめば、さらに上を狙える

歴代最強の勇者になるかもしれんな……

三三五、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

だが
いまはまだ
しょせん
ひよっ子

意思力も技術も
光るものはある
が

体力がない

肩で息をしはじめた勇者に
お前らチャンスです

と、ファイナーレへ向けて王国と帝国の橋渡しを担います

三三六、王国在住の現実を生きる小人さん

帝国の！

三三七、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おう！

子狸、見えるな？

いまから王国のが合図を出す

そうしたら撃て

勇者には当てるなよ

わかるな？

颯爽とおれ参上パターンだ

練習の成果を出すんだ

おい。お馬さんと戯れてる場合か

三三八、管理人だよ

おう！

違うよ

このひと

なんか

やたらと

おれに構ってくる

なんなの？

三三九、王国在住の現実を生きる小人さん

おれ「なるほど。それが精霊の……なるほど。たしかに……人間に
は余る力のようだ」

勇者「……次は、あなたの、番ね」

おれ「そうだな。認めよう。予想以上だった」

残存戦力の

おれ A

おれ B

おれ J

おれ U

を扇状に展開します

おれ「そして、十分だった。もはや余力は残っていない……終わりだ。勇者よ」

等間隔を保ったまま

一斉に勇者へと襲いかかります

いまだ！

三四〇、管理人だよ

おう！

おれ「チク・タク・ラルド・デイグひゃっ！？」

あ

三四一、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

子狸さん

一世一代の見せ場シリーズ

別アングルから
もう一度

勇者の危機に

おれたちの子狸さんが立ち上がる！

子狸「チク（圧縮）・タク（固定）・ラルド（拡大）・ディグ（射出）ひゃっ（奇声）！？」

お馬さんに

わき腹をぐりぐりされて

まさかの大暴投でした

三四二、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おれA跳躍！

神がかった反射速度で

頭上を飛び越してゆく子狸の魔法を

インターセプトします！

おれ「ぐふうっ！」

勇者「……………！」

これをチャンスと見た勇者が
おれBを撃破し、包囲を脱出

必勝の陣形を崩されて戸惑う

おれ」と

おれUを

立て続けに聖 剣の餌食にします

さらに

子狸の魔法で吹っ飛んだおれに

素早く詰め寄り、聖 剣を突きつけます

勇者「形勢逆転ね」

あなたが思ってる以上に

形勢逆転してますけどね……

まったく

最後まで

ひやひやさせやがって

子狸い……

三四三、管理人だよ

おれのせい!?

だってお馬さんが……

あれ?

この剣、あの子の?

三四四、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おう

当初の予定では

お前を連れられた勇者が

こっそり脱走することになってたから

荷物一式を

お馬さんに預けておいたんだ

勇者「最後のチャンスをあげる。言いなさい。誰に言われて、わたしを待ち伏せしたの？」

精いっぱい威厳を保とうとしてるけど
ブラフだな

最後の力を振り絞ったんだろう
足がガクガクいっとる

しかし、なんとかなったな

三四五、王国在住の現実を生きる小人さん

おう。一時はどうなることかと思っただぜ

さて、どうする？

もう、この際だし

魔王に命令されたって

はつきり言っちゃうか？

三四六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、ボカしておいてくれ

三四七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お。庭園の

何か考えでも？

三四八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おう。他のひとたちと

いろいろと相談した結果

今回は中ボスを登場させようということになった

そういつわけだから

鬼のひと、頼む

三四九、王国在住の現実を生きる小人さん

おう

じゃあこうだ

おれ「ま、待て。焦るな。……言えば見逃してくれるのか？」

勇者「約束は守るわ。誇りに賭けて」

おれ「……よし。いいだろう。細かい経緯は知らないが、先日お前はおれとは別の種族と遭遇し、そこで精霊と出会い宝剣を授かった。そうだな？」

勇者「いいから。続きを」

おれ「待てって。おい、剣先を近づけるな。わかった。言う」

今更だけど

魔物を脅して情報収集って

勇者がやっついていいことじゃないですよね……

おれ「そいつもそうだが、おれたちは精霊の搜索を命じられて、ずっと前から動いてたんだ」

勇者「……精霊ね」

おれ「おう。おれたちに命令したのは……」

あれ？

魔王の側近って言っちゃっていいの？

三三〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

すまん

そこらへんの設定は

まだ詰めてない

悪いが

うまく誤魔化してくれ

三五一、王国在住の現実を生きる小人さん

難易度、高いな……

わかった

やってみる

が

最悪、口封じで

おれを殺してくれ

三三二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう。いつものやつだな

任せろ

合図を出してもらえれば

紅蓮の炎で

お前を彩る

三三三、王国在住の現実を生きる小人さん

おう。そのときは派手に頼む

おれ「……………本当に見逃してくれるのか？」

勇者「二言はないわ」

本当かよ？

疑わしいもんだぜ

アリア家の口約束とか

まったく当てにならない

おれ「……………おれも詳しくは知らないが、高位の魔物だ。逆らえば命はなかった」

勇者「姿形は？」

まあ、そう来るよな……………

どじする？

三三四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

問題ない

お前「黒装束の騎士みたいな格好をしていた」

これで頼む

三五五、王国在住の現実を生きる小人さん

おう。なかなかいいデザインだな

言ったぞ

勇者「そう。じゃあ、さよなら」

はいはい

用済み用済み……

誰だよ

子供が親に似るとは限らないとか言ったやつは……

あ、子狸さんでしたね

これは失礼

おれ「き、貴様……」

勇者「常識的に考えなさい。あなたを見逃して、わたしになんのメリットがあるの？」

三五六、管理人だよ

でも
お前ら
死なないし

三五七、王国在住の現実を生きる小人さん

それ、お前の中での常識だからな？

まあ、わかるよ

ある種の無邪気な残酷さが
勇者には必須

前々回の勇者は散々だったからな

そういう意味では適任なのかもしれん

おれ「おの、ね……」

とりあえず
断末魔って
おれ退場しとく

おつかれ

結果だけ見れば
目標達成したし
幸先のいいスタートだな！

お前ら

ありがとう！

三五八、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おう。おつかれ

おれも

あんまり長い間

担当地区を離れると

祖国の騎士団の方々が

迷子になるから

いったん戻るわ

三五九、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おれは、どうするかな

今日のスケジュールは

丸々一日

空けておいたし

地道に祖国の街道沿いで

ライフワークに励むとするか

おつかれ！

三六〇、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

おつかれ

子狸、お前

可愛いな

今度

おれの家

遊びに来いよ

三六一、管理人だよ

行きます

三六二、空中庭園在住のところにたらない不定形生物さん

おつかれ

海のひと

お願いだから

子狸に妙なことを吹き込まないで下さい……

子狸さんが

死んじゃう

三六三、王都在住のところにたらない不定形生物さん（出張中

おつかれ

追伸

聖 剣を宙に散らした勇者さんが
お馬さんと子狸に歩み寄る

勇者「無駄な時間を過ごしたわ。行きましょ」

子狸「うん。あ、でも、おれ馬に乗ったことないんだけど……」

相乗りする気
満々の子狸を

勇者さんが切って捨てる

勇者「じゃあ、あなたは野宿ね。日が暮れる前に街につかないと、
門の中に入れてもらえないわよ」

子狸「それは慣れてるから大丈夫なんだけど……。街で合流するの
？」

勇者「……それだと意味がないでしょ」

子狸に皮肉は通用しない

勇者「仕方ないわね……。後ろに乗りなさい。変なところさわった
ら、首だからね」

子狸「はい」

下心を悟られないよう

子狸は表情を引き締めた！

子狸「あ、そうだ。これ」

自分が座るスペースを確保するために

子狸はお馬さんの荷物から剣を取り出して

勇者さんに手渡す

受け取った剣を

勇者さんは慣れた仕草で鞘に収納する

勇者「ありがと。それとね、わたしが勇者って、他の人には内緒だから」

子狸「え、そうなの？　じゃあ、君のこと、なんて呼べばいい？」

一向にタメ口を改めない子狸に

勇者さんは一計を案じる

勇者「……あなたの名前は？」

子狸「？　おれはノロ。ノロ・バウマフ」

勇者「わたしは、アレイシアン・アジェステ・アリア。お嬢さまと呼びなさい。いいわね？」

子狸「うん！　わかった」

勇者「だめだ、こいつ……」

こうして

旅の一行に

まんまと加わった
子狸

お前の明日が

不安でならない

「勇者さんの“漢”を見たい」 part 8 (後書き)

注釈

・詠唱

魔法には原始的な意思があり、術者が「こうして下さい」と指示を出すことで、はじめて魔法が発動する。

その意思表示にあたるのが、魔法使いの「詠唱」である。

攻撃魔法などは叫ぶことで威力が上がるとされているが、それは誤り。

イメージに偏りがあるから結果的にそうなるだけで、イメージさえ完璧であれば叫ぶ必要はまったくない。

ただし、完璧なイメージを構築できる人間はめったにいないので、あながち嘘とも言い切れない。

これまでに度々登場した「詠唱破棄」というのは魔法の一種で、文字通り「詠唱を捨て去る」ことができる。

本来ならば必須の詠唱を「なかったことにする」高度な魔法である。

人間の開放レベルが3に対して、詠唱破棄はレベル4にあたるため、魔物の助力なくして人間が詠唱を破棄することは不可能だ。

・首

おそらく失職という意味ではない。

「お前らおれの身分を証明できるもの持ってる？」

一、管理人だよ

お前ら

おれの身分を証明できるもの
持ってる？

二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

さあ、いよいよはじまりました

魔王討伐の旅シリーズ子狸編

三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

なお、当シリーズは

勇者さんの“漢”を見たい

の流れを汲んでいますので

あしからず

四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おれ

夢があつてさ

子狸さんが

文句のつけようもないくらい

びしっと完璧にシナリオをこなして

子狸「何も問題はない」

って言うのを

一度でいいから見てみたいんだよね……

五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

流されてきました

でも子狸は

大きくなったら

お屋形さまみたいになるらしいぜ……？

(本人談)

六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

何それ怖い……

人間って成長すると

原子配列変換とかしちゃうの？

七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

母親似ってわけでもないしなあ……

で、王都の

何があった

八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前ら反応早いな……

いや、大した事件でもないんだが

お前らもご存知かと思いますが

人間という生き物は何かと壁を作りたがる

だから小さな村ならともかく

街という街は街壁で覆われてる

九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

おれたち対策だな

長年ちまちまと街攻めした甲斐があったわ

一〇、王国在住の現実を生きる小人さん

じつはデメリットのほうが大きいんだけどな

財政を管理してる領主からしてみると
おれたちと戦うのがいちばん嫌らしい

なんの旨味もないからな

一一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう

で、我らが勇者一行は

とくに問題なく街についたわけだが

いや、正確には

ちよつと気になる女の子と

なんとか会話しようとした

子狸の涙ぐましい努力があったのだが

適当に相槌を打たれて終わったので

省略する

一二、管理人だよ

べつにそついうんじゃないよ

一緒に旅をする仲間なんだから

仲良くしておいたほうがいいだろ

一三、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

はいはい

で、街の入口には門があつて
そこでは騎士が検問をしてる

身分証明書を見せるよう
要求されるわけだな

勇者さんは問題なかつた

腰に差してる剣の柄尻に
家紋が彫られているらしい

まあ、旅装とはいえ
布の生地からして平民とは違うからな

騎士の対応も丁寧なものだつた

貴族の連れだし
子狸も問題なく通れる筈だつたんだが……

騎士「……あの、マントが不自然に膨らんでいるんですが」

勇者「……………」

念のために訊いておく

どうしてお前は
勇者さんのマントに
とっさに隠れたんですか？

一四、管理人だよ

騎士
怖い

一五、連合国在住の現実を生きる小人さん

ああ
そういえば、そんな設定もあつたな

一六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

とりあえず
満を持してツッコむけど

おれたちが
お前の身分証明書を持ってたら
おかしいだろ？

一七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者「……………」

無言でマントを引っ張る勇者さん

子狸「あ！」

巣穴を失う子狸

騎士と目が合う

子狸「ち、違うんです！ 今日のはたまたま！ お、おれは何も……………」

素早く視線を逸らす子狸

何も言われてないのに

無実を主張しはじめ

騎士「……………」

一八、管理人だよ

騎士「……………お知り合いですか？」

勇者「いいえ」

おれ「！？」

パーティー解散の危機！

お前ら

助けて！

一九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

早いな、おい……

怒涛の展開に

おれ唾然

二〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

せめて

平民を虐げる貴族の在り方を問う

みたいな風刺的なイベントを挟んでほしかった
ってというのは、おれのわがままなの？

二一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

わかるよ

子狸と喧嘩した勇者さんが
宿屋で一人

勇者「なによ、あのばか……」

みたいなね

一二一、管理人だよ

何それ

ちよつときめいた

二三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おい。ときめいてる場合か

騎士「……ちよつと一緒に来てくれる？」

おい。連行されそうになつとる

子狸「あ、はい……」

連行された……

勇者「……」

「お前らおれの身分を証明できるもの持ってる？」（後書き）

注釈

・魔王討伐の旅シリーズ

勇者が旅立ち、魔王を倒すまでの一連のシナリオは、魔物たちにとって一大事業である。

そのため、関連する河を閲覧しやすいよう一括して編集、および保管してある。

今回の「子狸編」を例に挙げるなら、「うっかり勇者誕生編」と「うっかり勇者旅立ち編」の二編が正統なシリーズにあたる。

・身分証明書

街と街を行き来する商人等は、街を出入りする際に貨物のチェックと身分証明書の提示を求められる。

一部の貴族が持つ「剣」は、完全なオーダーメイド品である。

戦争の主軸が「武器」から「魔法」へシフトするにつれて、「剣」や「槍」などの鑄造技術が失われたためだ。

よって「剣術」を伝える貴族は、専門の鍛冶職人を召し抱えて、剣を打ち鍛えさせている。

剣の柄尻に家紋を刻むのは、大貴族のステイタスみたいなもの。

政治の形態が異なる帝国や連合国においては、そもそも剣士がない。

「子狸さんが巣穴を探しているようです」 part 1

二四、王都在住のところにたらない不定形生物さん（出張中
ところで

少し哲学的な話になるんだが構わないか？

二五、空中庭園在住のところにたらない不定形生物さん

うむ……

少しの間なら構わないだろう

二六、王国在住の現実を生きる小人さん

前回は

星の成り立ちについてだったな

今回はなんだ？

二七、王都在住のところにたらない不定形生物さん（出張中

おう

すまんな

今回の議題は

神に円を描かせたらどうなるか？ だ

二八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ふむ……

二九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ふむ……

三〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ふむ……

三一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

つまりだな

この世に完全な円というものは存在しない

どれだけ完全に見えようとも

突き詰めて考えれば

それは多角形にすぎんのだな

三二、帝国在住の現実を生きる小人さん

ふむ……

三三、 連合国在住の現実を生きる小人さん

ふむ……

三四、 王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

しかしだ

頭の中で円を描くのは

さして難しくない

だが

果たしてそれは本当に

完全な円なのか否か……

三五、 山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

なるほど

さっぱりわからん

一、 王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

王 魔

討伐の旅
子狸編
シリーズ

子狸さんが

巣穴を

探しているようです

二、かまくら在住のとりにつまらない不定形生物さん

さあ、いよいよはじまりました

魔王討伐の旅シリーズ子狸編

三、王国在住の現実を生きる小人さん

実況の青いひと

勇者さんと子狸の様子はどうですか？

四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

実況の青いひとです

無事に街についたお二人

昼間から

ちゃんばらをしていた勇者さんは

大変お疲れのようです

勇者「ふつうに戻ってきた……」

お馬さんのくつわを引いて

往来を行く子狸さん

すっかり従者が板についたようです

子狸「え？ なに？」

日も暮れはじめていますし

どうやらお二人は宿を探しているようです

勇者「何を話してたの？ 急に人が変わったように見えただけ……」

子狸「？」

勇者さんはお疲れのようです

子狸「……………」

五、管理人だよ

お前ら

おれに

何かした？

六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

え？ なにが？

お前ら、何か知ってる？

七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ん？

ああ

しいていうなら

あれじゃないか？

八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おっ

つまりは

まあ五分五分だが……

インテリジェンスの問題だろうな……

九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ

そっちか

だそうです

管理人さん

良かったですね

一〇、管理人だよ

おう！

インテリジェンスの問題なら

うん。五分五分だな！

一一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

何この会話……

おっと

それよりも管理人さん

今日の宿はどうするんですか？

一一、管理人だよ

え、どうだろ

ちょっと訊いてみる

おれ「お嬢、今日はどこに泊まるの？」

一三、帝国在住の現実を生きる小人さん

消えた尊称

失われた礼儀

一四、連合国在住の現実を生きる小人さん

まあ……

ある程度は仕方ないな

お屋形さまの反動もあつて

子狸は、各国首脳陣に気に入られてる

身分の差とか

あんまりぴんと来ないんだらう

アリア家はどうなんだ？
実情を知らんのか？

娘は知らないようだが……
演技の可能性もあるか？

一五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中
ないな

バウムフ家との接点がないというのもあるんだが

アリア家がいまだに国家転覆を成し遂げていないのは
上に警戒されてるからだ

優秀すぎるのも考えものだな

表向き叛意をまったく見せないから
逆に怪しまれる

一六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん
王国の歴史が千年も続いたのは
アリア家の功績が大きいんだろうな

そんじょそこらの小悪党とは
わけが違う

一七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者「お嬢さまでしょ。はい、もう一度」

子狸「お嬢さま？」

勇者「今日はどこに泊まりますか。はい」

子狸「え、おれが決めるの？」

勇者「……本当に首にしようかしら、この子」

むしろ、なんで子狸を連れてくことにしたんだ？

子狸

ちよつと訊いてみるよ

ああ

つまり

お前「なんで一人旅してたの？」

これで通じる

お前は余計なことを考えなくていい

一八、管理人だよ

お前ら

ちょっと頭いいからって

おれのことばかだと思ってない？

おれはふつうだからね？

言っとくけど

勇者「なんでって、そんなの決まってるでしょ」

おれ「響きがいいよね、一人旅」

勇者「もしも、わたしが失敗しても、なかったことにできるもの

ん？

一九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

冷静な判断だな……

もしくは

とっくのとうにバレてる

どっちだ？

千年もの間、隠し通せるかどうかで言っなら

王都のには悪いけど

おれはないと思う

二〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

狙いはバウムフ家か？

だが、それなら

お屋形さまの方に話が行くんじゃないか？

一一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

なんでだ？

あのひとは権力とかまったく興味ないぞ

しかもあきらかに扱いにくい

一二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

だからだよ

おれたちの目を掻い潜って

バウムフ家をどうこうするのはまず無理だ

が、お屋形さまが絡んでくるとなると

おれたちは

お屋形さま本人に判断を委ねるところがある

おれもそれでいいと思ってるし

これからもそうだろう

二三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

あのひとは別格だからな……

まあ、さすがに

そこまで内部事情を知られているとは思えないが

いいんじゃないか？

バウムフ家がアリア家に加担するなら

それはそれで

二四、王国在住の現実を生きる小人さん

でも

加担した瞬間に

アリア家の凋落が

はじまると思うんだ……

二五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

それもそうだな

二六、かまらく在住のとるにたらない不定形生物さん

それもそうだな

二七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん
それもそうだな

むしろ関わってる時点で危ないわ

アリア家は

やっぱり何も知らないんだなあ……

ってことでよろし？

二八、連合国在住の現実を生きる小人さん

異議なし

二九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

異議なし

三〇、管理人だよ

異議しかねえ……

なんでそうなるの？

三一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前らのポケを拾えるのは

おれたちしかいないからです

ところで

勇者さんは今夜の寝床を決めたみたい

勇者「あそこの宿にしましょ」

見るからに高級そつな宿泊施設です……

反応する子狸

庶民の感覚が

いま走り出す

子狸「だめです。お金は大切にしましょう」

勇者「お金ならあるもの。第一、あなたにこの子のお世話は任せられないわ」

そつ言つて、お馬さんのたてがみを撫でる勇者さん

子狸「おれ以外に黒雲号を預けるっていつの!？」

勇者「勝手にへんな名前つけないで。黒くもないし」

謎の独占欲を發揮する子狸

やはり響き合うものがあるのか……？

勇者「そもそも、あなたは別の宿に泊まるんだから、関係ないの」

子狸「」

お前らにも伝わったと思うんだ……

「このときの子狸の悲しみがさ……」

「子狸さんが巢穴を探しているようです」part1（後書き）

注釈

・哲学的な話

本当にどうしようもない事態に陥ったとき、魔物たちはよく哲学的な話をする。

魔法は万能なのだ。

・五分五分

双方とも優劣がないこと。

子狸の身に何が起こったのかは定かではないが、それは半分の確率においてインテリジェンスの問題であり、またインテリジェンスの問題であるとしたなら、それは半分の確率であるらしい。

中身がない会話というのは、きっとこういうことを指すのである
う。

「子狸さんが巣穴を探しているようです」 part 2

三二、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸……さん？

三三、かまらく在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸！

気をしっかり持て！

三四、管理人だよ

え？ なに？

三五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

お前にはつらいかもしれんが……

現実を受け止めるんだ

いいな？

三六、管理人だよ

いやいや

勝手にひとの心情を決めつけるのは
やめてくれませんか？

おれはべつに気にしてないよ

同じところに泊まられて言われてもさ
逆に困るし

おれ「……でも、黒雲号はおれと一緒にいたいよね？」

三七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

未練たらたらじゃねーか

三八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

というか、お前は馬小屋に泊まる気なのか？

三九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

名前を呼ばれて子狸にすり寄る黒雲号（子狸命名

愛馬の満更でもない様子に危機感を覚えたのか

勇者さんが重ねて言う

勇者「だから、へんな名前で呼ばないで。くせになったらどうする
の」

子狸「え〜……。じゃあ本名はなんていうの?」

勇者「……え、知らないけど」

子狸「知らない?」

そんなことがあるのかと訊き返す子狸に
勇者さんはため息をひとつ

勇者「好きになさい。もう……。馬と波長が合うのって、人として
どうなの?」

子狸「? 好きに? なるほど……」

おや、子狸さんの様子が……?

四〇、管理人だよ

はちよう

はちようとは

なんだ

四一、王国在住の現実を生きる小人さん

考えることを放棄しやがった……

お前、たまに単語がすっぱ抜けてるなあ

波長な

ウマが合うってことだよ

四二、管理人だよ

馬だけに？（笑

四三、王国在住の現実を生きる小人さん

たまに善意で教えてやったら

これだよ

四四、帝国在住の現実を生きる小人さん

いや、いまのはお前が悪いと思うぞ

読みが甘い

気い抜きすぎだろ

どうした？

四五、王国在住の現実を生きる小人さん

どうしたもこうしたも

ふつうに会話したいんです……

いけないことでしょうか？

四六、 連合国在住の現実を生きる小人さん

王国のは子狸に甘いからなあ……

四七、 王国在住の現実を生きる小人さん

いや、おれから言わせれば

お前らの放任主義は度を過ぎている

これだけは言うまいと思っていたが……

子狸があんなになっちゃったのは

お前らのせいなんじゃないか？

四八、 火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おいおい

いくら鬼のひとでも聞き捨てならないな……

人間同士の問題におれたちは干渉しない

そついう決まりだろ？

四九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

そうだな

おれたちの力はあまりにも強大すぎる

まあ、そんな決まりないんですけどね……

五〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ。人間の歴史は人間が紡いでいけばいい
おれたちは手を出すべきじゃない

干渉しまくってますけどね……

五一、連合国在住の現実を生きる小人さん

というか子狸に英才教育とか無駄の極みだよ
まず才能がない

五二、王国在住の現実を生きる小人さん

努力に勝る才能なんてない

無駄な努力など

この世にあるものか……！

五三、帝国在住の現実を生きる小人さん

さつき言ってたことと話が違っじゃねーか……

五四、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

議論が白熱してきたようですが……

とりあえず勇者さんは

子狸をこき使う算段のようです

勇者「わかった振りしてもだめ。いいから、受付に行って部屋を取ってきなさい。あなたの名前で記帳して、ダブルの部屋でって言えばそれでいいわ。……自分の名前、書ける？」

子狸「いちおう書けます……。だぶるね、だぶるだぶる……。なるほど……。そういうことが……」

勇者「……念のために訊くけど。あなた今日の宿はどうするつもりなの？」

子狸「ん？ あとで決めるよ」

勇者「……」

子狸に行間を読めという方が無理な注文

五五、王国在住の現実を生きる小人さん

努力では

どうにもならないことも

世の中にはある

お前ら

すまなかつたな

五六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

いや

気にするな

おれも熱くなりすぎた

五七、帝国在住の現実を生きる小人さん

まあ……

なんだ

子狸は、人間にしてはそこそこ使えるほうだと思っせ

これも努力の賜物だろう

五八、連合国在住の現実を生きる小人さん

おう

レベル1とはいえ

とっさに連射できるよう構成しておくんだから

立派なもんだ

いつだったか

学校の実習で教官には怒られてたけどな

五九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

発想が、いちいち血生臭いんだよ

想像力はあるんだけどな……

六〇、管理人だよ

いやいや

このほうが実戦的だからとか言って

おれの構成をいじくったのは

お前らですよね？

六一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

そつですけど……

六一、管理人だよ

ちよつとちよつと

またそうやって

おれを悪者にするの？

今度という今度は

だまされないよ！

六二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

はいはい

いいから、さっさとサインして来なさいよ

とはいえ、いつも野宿だったしな

困ったことがあれば言え

六三、管理人だよ

おう

いつもありがとございます

六四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

こうして、瞬く間に丸め込まれた子狸さん

自分の行動に疑問を覚えることもなく

ベッドが二つある部屋を予約しに行きます

宿屋「ダブルのお部屋でよろしいのですね？」

子狸「だぶるのお部屋でよろしいです」

敬語に発音

ダブルで怪しい場面もありましたが

無事に巣穴を押さえました

宿屋「ご朝食はどうなされますか？」

子狸「食べてきました」

宿屋「え？」

子狸「え？」

ボケも健在です

本当に

どこで育て方を間違えたのやら……

「子狸さんが巢穴を探しているようです」 part 2 (後書き)

注釈

・魔法使い

魔法を使う人間のこと。

ごく少数の魔法を「使わない」人間がいるだけで、基本的にこの世界の人間は子供から大人まで全員が魔法使いであると言える。

それはつまり、ちょっとした教育で少なからぬ戦力になるということだ。

したがって、どこの国でも学校に子供を通わせて魔法を習わせるという体制をとっている。

騎士団を動かすとお金がかかるため、国としては自警力に期待している面もあるのだが、こちらはなかなかうまく行っていない。

魔物たちの強さは、じつはその場の気分次第で決まるからだ。

・構成

魔法で大切なのは、イメージだとよく言われる。

この「イメージ」を、どこまで緻密に描けるか、また効果的に使い分けるかで、魔法使いの力量は決まる。

たとえば以前に子狸が使った「圧縮」と「固定」からなる投射魔法を例に挙げれば、複数の圧縮弾をあらかじめ作っておけば連射ができる。

こうした一連の短期的あるいは長期的な魔法の連なりを指して、「構成」と呼ぶ。

「子狸さんが巢穴を探しているようですよ」「part3

六五、管理人だよ

宿屋「馬車は組合のものをご利用ですか？」

なんか

質問が多すぎて

わけわかんなくなってきた

六六、帝国在住の現実を生きる小人さん

いい質問だ

簡単に説明するぞ

高級宿に泊まるのは

貴族と相場が決まってる

だから、もしも自前の馬車を使ってるなら

お馬さんの面倒はこっちで見ますよってことだ

お前「乗馬してきたのでお世話をお願いしますアモール！」

これで問題ない

六七、管理人だよ

おい

その語尾

かつこよすぎるだろ……

ありがとう！

宿屋「承りました」

六八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おお、プロだな……

完璧な営業スマイルだぜ……

六九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

まわりの宿泊客には大ウケだぞ

沸点低いなあ……

あ、やべ

勇者さんに監視されてた

宿屋「ご宿泊は何泊のご予定ですか？」

子狸「あ、野宿しますから大丈夫です」

宿屋「お帰りはあちらです」

おお、間髪入れず

お引き取りを願うとは……
できるな

勇者「一泊よ」

見るに見かねて

勇者さん登場

宿屋「これはお嬢さま！ ようこそおいで下さいました」

さすがに貴族御用達の宿では
顔を知られているらしい

顔だけ覗かせている勇者さん（超貴族）と
受付の前に突っ立ってる子狸（ど平民）を
にこやかに見比べてからの……

子狸 二度見

宿屋「お連れさまでらっしゃいましたか！」

子狸はびびっている

子狸「ら、らっしやいます」

勇者「延泊するときは、追って伝えるわ。表に馬を引いてるから、
人を回してくれる？」

宿屋「かしこまりました。ただちに」

ちなみに、宿の外には前もって宿泊客の馬を預かる人員が配置されてる

迷惑料を払うから

荷物を運ぶ人間を多めに回してくれて構わない
ということだ

貴族ってのは何かと面倒だな

一方、子狸はやり遂げた表情である

子狸「じゃあ、ふたりのことよろしくお願いします」

宿屋のあるじは

勇者さんと子狸の関係を計りかねている

宿屋「……よろしいので？」

子狸との会話に得るものはないと早くも見抜き

勇者さんにつかがいを立てる

見事な判断力である

勇者「よくない。あなたも来るの。あと、紛らわしい言い方はやめなさい。馬は一頭と数えるのよ」

面倒見のいい

お嬢さんだなあ

アリア家って

こんなんだっけ？

七〇、連合国在住の現実を生きる小人さん

バウマフさんちのひとは

放っておくと、どこまでも脇道に逸れていくからなあ……

とにかくだ。子狸よ

何もわかっていないと思うが

お世話をする約束したんだから

ちゃんと勇者さんについてけ

七一、管理人だよ

あ、はい

とりあえず水だけでも汲んでおいてくれる？

七二、王国在住の現実を生きる小人さん

はいはい……

必要なら井戸でも何でも掘ってやるから

またあとでな

七三、管理人だよ

え、なんだよ……

お前ら、なんだか妙に優しいな

七四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

はいはい……

いいから。ほら

勇者さんが待ってるぞ

七五、管理人だよ

おう！

七六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

彼女、子狸を立派な従者に

育て上げるつもりなのかな？

無理だろ……

七七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

いまいち何を考えてるのか
よくわからんな

一人旅してたのは
ようするに使命感に燃えた勇者さんが
周囲の反対を押し切って魔王討伐の旅に出た
っっていう体裁をとりたいんだろ？

だが、なぜ子狸？

代わりはいくらでもいると思うが……

七八、王国在住の現実を生きる小人さん

ああ、それね

子狸さん

夢で精霊の啓示を受けてることになってるから

あと、まあ

いちおう命の恩人だし

アリア家って自分ルールで生きてるところあるから
そついうのわりかし重視するんだよ

七九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうそう

王家を陰で守って

今回だけだ。これで借りは返したぞ……
みたいなね

ひとことでは

へんなんだよ

おれらの国のトップ連中

さて、話を戻そうか

宿屋のスタッフに案内されて

本日の巢穴に辿りついた子狸と勇者さん

子狸「高そうな部屋だねアモール？」

気に入ったらしい

勇者「今後一切、アモール禁止」

王国暦一〇〇二年

アモール禁止令

発令

子狸「そんなばかな……」

悲嘆に暮れる子狸を

なかば無視して

勇者さんはベッドに腰かける

勇者「そこ座って」

子狸「あ、はい……」

勇者「いちおう、これからの予定を説明します」

子狸「はあ……」

勇者「まず最終的な目標。魔王暗殺」

子狸「はあ……。え、魔王？」

勇者「洞窟の中でも言ったでしょ。邪魔なの。目障りなの」

子狸「うん？ うん」

勇者「次。中間目標。とりあえず港町を目指します」

子狸「海？」

勇者「海」

子狸「海……」

限りなく簡単に説明しようという

勇者さんの気概が

伝わってくるかのようだ……

勇者「次。港町までは、街から街へ移動を繰り返します」

八〇、管理人だよ

お前ら、大丈夫か？

ついてきてる？

八一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

えっ

すでに限界なの？

説明しろと言われても困る段階なんだけど……

八二、管理人だよ

おれは、まだまだいけるよ

余裕です

勇者「朝食と夕食は宿屋でとれる。では、ここで問題です。あなた
のやるべきことは何でしょう？」

そう来たか……

引っかけ問題だな

おれの人生が

いま問われてる

どうしよっ？

正直に言う？

八三、 連合国在住の現実を生きる小人さん

待て

なにが？

お前の言ってることが
何ひとつ理解できない

なにを白状しようとしてる

八四、 管理人だよ

冗談ですよ

ははっ

えっと。じゃあ……

おれ「……宿を……いや！ だぶるだ！」

八五、 かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

そこ！？

八六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そこ!?

八七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

洒落た予約の仕方的なニュアンス!?

八八、帝国在住の現実を生きる小人さん

だれか、このアモールを何とかしてくれ……

八九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

さしもの勇者さんも

呆然としたじゃねーか……

勇者「……野宿は慣れてるとか言ってたけど。あなた家事ができるの?」

子狸「え? いや……家のことと野宿は違うよ。違うんじゃないかな……」

勇者「野外で簡単な調理ならできる?」

子狸「それくらいなら……」

勇者「そう。それなら、昼食はあなたに任せる。当面は、それがあなたの仕事よ」

子狸「メルシー」

勇者「メルシーも禁止」

「子狸さんが巢穴を探しているようです」 part3 (後書き)

注釈

・おれの人生がいま問われてる

ついに注釈で説明しなければならぬ次元に達した。悲しいことである。

子狸の頭の中での出来事を順を追って解説する。

- 一、勇者さんは魔王を嫌っているようだ
- 二、魔王を作るのはバウマフ家の家業である
- 三、バレたらやばそうだと思う
- 四、海^{II}海のひとに転ずる
- 五、一と二がいったんリセットされる
- 六、いきなり質問されて焦る
- 七、四も消える
- 八、三が残る
- 九、バレたらやばそうである
- 一〇、なにが？ 自問する
- 一一、やるべきことというキーワードを頼りに、一と分離した二が戻ってくる
- 一二、勇者さんは女の子である
- 一三、しかもちよっと可愛い
- 一四、旅をさせるのはどうかと思う
- 一五、正直に言うべきなのではないか？ 煩悶

以上。

ちなみに、こんなところで紹介するのもどうかと思うが、海のひ

とは見目麗しい女性の姿をしている。

「河の底で暮くおれたち」

四五〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

戻った

四五一、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

おう

管理人さんは？

四五二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

少し目を離れた際に厨房で雑用してたりと

まあいろいろあつたんだが……

寝る間際になってごちゃごちゃ言い出したから

王都のが奥義で強制終了させた

四五三、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

あの伝説のレクイエム毒針か……

四五三、火山在住のごく平凡な火トガケさん

知っているのか!?

四五四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

そついうのいいから

海のひと

子狸バスター（仮）の進捗はどう？

四五五、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

理論値はクリアした

小道具は鬼のひとたちに依頼するつもりだ

四五六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おつ

鬼のひとたちの仕事には絶対的な信頼がある

理論値は、というと

やはり問題はソフトか？

四五七、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

おつ

つくづく思い知らされるね

人間はすげーよ……

いちおうサンプルは回収したけど
どこまで再現できるか……

いや

再現じゃだめってわかってるんだけどな

とはいえ

ある程度はアドリブになると思う

だもんで

いまは足回りをいじってる

四五八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

その調子で頼む

緑のひと

勇者さんシステムのほうはどう？

四五九、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

いちおう計図を組んでみた

目の前に展開してるから見てくれ

四六〇、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

ほほう。これはなかなか

まるで

そう

例えるなら既製品を見ているような……

相変わらずいい腕してやがる

四六一、海底洞窟在住のたらない不定形生物さん

おい

おい。これ

今日から 魔王スターターの流用じゃねーか

四六二、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

出力をしばって

オンオフ機能をつけてみました

四六三、海底洞窟在住のたらない不定形生物さん

つけてみました

じゃねーよ！

こんなもん投下したら

勇者さんが魔王さんに

華麗にクラスチェンジしちゃっただろ

表裏一体か！

本当

お願いします……

本当……

四六四、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

ふつうでいいんだよ

ふつうで

四六五、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

そうやって簡単に言うけど

原則が絡んでくるから

わりとどうしようもないんだからねっ

一番がだめなら

三番をいじるしかないんだけどなあ……

それだと本人の資質しだいになるから

おれとしては、ちょっと納得がいかない

仮にやるとしたら

内部の数値に手を入れることになるんだけど
どこかにサンプル落ちてないかな……（ちらっ

四六六、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

ちょっと王都行って

落とし穴、掘ってくるわ

四六七、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

お屋形さまのデータが

役に立つわけねーだろ！

それ以前に殺されるわ！

さいきんあいつ見掛けないなあ……

とか言われて

某所……

とかモノローグ入って

おれの大切な鱗ちゃんが

なべ敷きにでもされてたら

お前、責任取れんのか！？

ちょっと嬉しいじゃねーか！

四六八、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

おちつけ

だいじょうぶ

こんなこともあるのかと

王立学校在籍の平均的な魔法使い（笑）のデータを採取しておいた

四六九、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

子狸さんのことばかりにしてんのか！？

可哀相だろ！

万が一うまく行ったらどうするんだよ！？

勇者さんとどう接したらいいかわからなくなるわ！

なあ、青いひと

王都のひとに協力してもらうわけにはいかないか？

あのひとが、いちばん人間に詳しいだろ

四七〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

王都のは、バウマフ家への愛情が半端ないからなあ……

たぶん厄介なことになる

おすすめはしない

四七一、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

でもさ

勇者さん優しいところあるよね？

子狸を同じ部屋に泊めてあげてるんだろ？

おれ、アリア家のことあんまり詳しくないけど

言っほどひどくないって印象だぞ

四七二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、どうかな

庭園の言うには

おれたちの襲撃を警戒してるんだろって

でも子狸に甘いつてのは、おれも感じてる

鬼のひとが言うには

ご機嫌取りつてわけでもないらしい
そういうことする人種じゃないんだと

四七三、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

たしかにな

おれは

いままでに何度かアリア家の人間と話したことあるけど

かなりぎっくりした考え方してたぜ

指揮官の首をもってくるから

それで水に流せって言われたときは
正直びびった

なんか思いとどまってもらったけど
他の人間とはオーラが違う

四七四、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

ああ、あのとさな

お前、噴火の主犯に仕立て上げられてたから（笑

四七五、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

おれんちが噴火して
誰がびびったって

おれがいちばんびびったっちゅうねん（笑）

四七六、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

お前、テンパるあまり会話不能に陥ってたもんな（笑）

「河の底で蠢くおれたち」（後書き）

注釈

・レクイエム毒針

不定形生物さんたちの中には、まれに毒を持つ個体がいると言われている。

まず、極限までねじった触手を「こより」みたいに尖らせる。

その先端で突き刺した対象を一撃で眠らせるのが、青いひとたちの奥義「レクイエム毒針」である。

じつは単なる睡眠の魔法なのだが、アクションを織り込むことで人前でも使えるよう工夫されたものである。

・計図

設計図の略。おもに魔法の設計図を指して言う。

魔物＝魔法なので、魔法の深い部分の仕組みに知識で挑むことができるようだ。

・今日から 魔王スターター

他者の魔法に干渉する能力の設計図を指して言う。

たいていの勇者は優秀な魔法使いであるから、絶大なリアクションを見込めるといふ理由で魔王役に実装されることが多い。

つまり勇者にとつての本当の武器は、愛とか勇気とか何かそうしたキラキラしたものなんだよね、という話に持っていくのが常道で

ある。

・二番とか三番とか

「二番回線／回路」「三番回線／回路」の略。

魔法を扱う回路は大別すると三つある。

二番は無意識の領域の回線であり、三番回路は有意識の領域を司る。

つまり人間が魔法を使う場合、三番回線がメイン、二番回線はサブの役割を果たす。

基本的に双方向回線なので、魔法を使えば使うほど、魔法の影響を強く受けることになる。「原則」と呼ばれる、魔法の基盤構造だ。

ちなみに一番回路は魔物専用なので、人間は使用不能。

「お前ら緊急事態発生」 part 1

一、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

お前ら

緊急事態発生

二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おや

空のひと

この前は

お土産ありがとう

三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

おう

つまらんものだが

お気に召したようで何よりだ

火のひとは元気？

四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

まあな

たまには

日の光を浴びるようと

それとなく勧めてるんだが

どうにもこうにも……

五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あのひと

河にもめつたに顔を出さないからなあ……

人前だとスイッチ入るし

ゆくゆくは勇者さんに立ち寄ってもらおうか

六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

そうは言っても

おれんち

ちよつと遠いからなあ……

まあ、旅シリーズが終わったら

またポンポコ一家を誘って花見でもするかね

七、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

賛成

八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

賛成

九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

賛成

一〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ところで

なんかあったの？

出張中になってるけど

一一、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

え？

ああ、そうだった

小さいほうのポンポコさん

どうしてる？

一二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

今日は朝から

勇者さんと一緒に買い物してる

子狸専用の

まな板と包丁

あとフライパンを

買う予定だったんだけど

なぜか服屋にいる

勇者さんのテンションが

じゃっかん高めな気もするが

まあ女の子だしな

一三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

それ

子狸は

いらなくないか？

一四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸な……

テンションが上がりますぎて

頭の配線がいかれたらしく

静かに思考停止してる

名に恥じない

ポンコツぶりだよ

一五、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

おれが

超音速の空中戦を繰り広げてる

一方その頃

ラブコメ空間を満喫中かよ……

一六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

なんか

不吉な単語がいくつか

混ぜたってたんだが……

一七、空中庭園在住の現実を生きる小人さん

まさか……

やつが

動き出したのか？

一八、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

そのまさかです……

というか

たまたまおれんちに遊びに来てて
発言が不穏だったから
足止めしてたんだけど

ついに突破された

現在

追撃中

転移はブロックしてるが

ちっ

速え……！

一九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ばかな

早すぎる

あのひと

レベル4だぞ……

二〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

あのひとは

ちよっと毛色が違うからな……

子狸は……
だめか

肝心なときに使えねーな……

お前ら

現地に跳ぶぞ

結界で街を覆う

一一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

だが、状況は圧倒的に不利だぞ

人間を指定外に設定しなくちゃならん

確実にその穴を突かれる

一二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

頭を押さえられたら終わりだな

高度を保っているうちに

ケリをつけたいところだが……

二三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

悪いね
なんか

同じ飛行タイプとして申し訳ない

二四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

気にするな

あのひと、空間系統に強いからな

何はともあれ

時間の勝負になる

海底のは

指揮をとれ

おれとかまくらので

うって出る

二五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

お前ら

すまんな

二六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや

お前には

つらい役割を押し付けて

すまないと思ってる

めんご

二七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

誠意が

まったく感じられねえ……

まあ

気にするな

慣れれば

いいところだよ

二八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

まじで？

今度、遊びに行くわ

二九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

その流れ

完全に宴会に突入して

バウマフさんちのひとに

説教されるパターンじゃねーか（笑

三〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれ

子狸さんの怒ってる顔

好きだわ

三一、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なぜ

このタイミングで

カミングアウトした!？

三二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

早くもコンビネーションに亀裂が……

山腹の

多層結界で行くぞ

タイミングを合わせて

フィルターをかける

三三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前

頭いいよな……

また一緒に

おみくじ行こうぜ！

来年は

きつと大吉だった！

三四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

え？

ごめん

ちよつと言ってる意味が……

え？

もしかして

貧乏くじ引いてるって言いたいの？

三五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

こっちでも亀裂が！？

三六、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

お前ら

仲がいいなあ……

「お前ら緊急事態発生」 part 1（後書き）

注釈

・結界

一定の空間を支配下に置く、高度な魔法。

条件を絞れば人間だけを立ち入り禁止にしたりもできる。

「フィルター」というのは、さらに細かく指定するとき用いられる技術。

今回のケースにおいては、条件付けの異なる「結界」を幾重にも張ることで突破を困難なものにしようとしている。

・飛行タイプ

有翼系の魔物たちを指して言う。

ふだんから空を飛んでいるので、こと空中戦においては他の追隨を許さない。

なお、人間は空を飛べないし、深海に潜ることもできないため、純粋な飛行タイプ、潜水タイプの魔物は希少種である。

「お前ら緊急事態発生」 part 2

三七、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

お前ら

空じゃ

おれに勝てないって
わかってるんだろ？

三八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

きゃあ

三九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

きゃあ

四〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

！

一撃だと……？

羽のひと！

それだけの実力があいながらどうして……！

四一、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

群れてるだけのお前らに

何がわかる？

何が成し遂げられるというんだ！

四二、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

だが

追いついたぜ

青いひとたちが稼いでくれた

この貴重な一瞬でな……

四三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれたちも

まだ戦えるぜ……！

四四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そついつことだ

攻撃が軽いんだよお前は……

諦める

勝ち目はないぞ

四五、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

頭数だけ揃えたところで……

全部

おれ！

四六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

イタチごっこに

なるだけってというのが……！

全部

おれ！

四七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

無駄だ

人間ほど集団戦に優れた生き物はいない

そして

おれたちほど人間と数多く戦った生き物もない

四八、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

だったら

ためしてみるといい

もつとも

この一撃を

かわせたらの話だな

四九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

!?

街ごと焼き払うつもりか!?

お前ら!

五〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん(出張中

やらせん!

かまくらの!

五一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん(出張中

おう！

双壁！

守護魔法

全

開！

五二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

山腹の！

余波が来るぞ！

上空の観測をカットする！

五三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう！

くっ

なんて威力だ……！

本気なのか羽のひと……

子狸がいるんだぞ！

五四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者「どう？ 似合う？」

子狸「おれ、この旅で変われる気がするんだ……」

勇者「そう。せめて人並みになれるといいわね」

子狸「……………（照）」

勇者「べつに褒めてないわ」

子狸「な、なんか……デ……デ？ ト……タ？ うん。いい天気だね」

勇者「……………デートって言いたいの？ 違うし、諦めたみたいだけど……………」

子狸「え？ どう……かな。意外かもしれないけど、おれ、あんまり母国語が得意じゃないんだ」

勇者「母国語でもないし。意外でもない。……あ、次はあのお店にしましよ。なんのお店なのかしら」

五五、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

羽の……

魔道に

堕ちたな

五六、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

ほざけ

人間を守って

戦って

傷ついて

そこから何か見えるのか？

何も見えやしななさ

五七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前には

別の景色が見えるっていうのか？

違っただろ

まわりを見渡してみろよ

お前は

たったひとりじゃないか

たった

ひとりじゃないか……

五八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ひとりぼっちで

何ができるっていうんだよ……

どんなに万能でも

どんなに強くとも

まわりに誰もいないのなら

それは

何もできないのと一緒にだろ！

五九、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

だまれ！

そんなズタボロの身体で何を言っても

負け犬の遠吠えなんだよ！

とどめを

刺してやる……！

六〇、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

羽のおおおおおお！

六一、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

しつこいんだよ

きさまは！

いまさら

本気を出したところで！

ちっ

だが

もう遅い

雲を抜ける……

それとも

ステルスしたままで

おれと戦うか？

終わりだ

六一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

まだだ！

いかなお前とて

おれたちふたりの結界を

破れるものか！

六三、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

おれが

なんのために

わざわざ

予告するような真似をして

ここへ来たと思ってるんだ？

六四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

！

王都の！

六五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ああ

やられたな

お前らと戦ってたのは

ダミーだ

前もって

全部おれしてたのか……

六六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれたちを

誘き寄せるために……！？

六七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸が

あぶない！

六八、管理人だよ

お前ら

ちよつと聞いてくれる？

おれ

勇者さんに

恋しちやってるかもしれない

六九、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

しね！

七〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

しね！

七一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

しね！

いや

しぬ前に

土下座しろ！

おれたち全員に詫びてから

南国の王さまを二つずつ贈呈しろ！

七二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

もらってどつすんの！？

七三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

しかも二つ……

まあ

おれは

ご近所の毛皮を着たひとたちにふるまっけど……

七四、管理人だよ

あれ？

空のひともいるの？

あ

この前のお土産ね

火のひとが

地味に嬉しそうにしてたよ

七五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

地味にとか言うな！

それ、さっきやったし！

あのひと

お前の前だと

無理にテンション上げてるんだよ！

七六、管理人だよ

え〜……

そんなことないと思うけど

ちつき？

さつきって……

あ

七七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者さん

羽のひと（オリジナル）と

謎の店内にて

遭遇

勇者「……妖精？」

妖精「妖精屋へようこそ」

勇者「妖精屋？ ん……たしかにいろいろ置いてるわね。これは？」

妖精「それは、ばかにつける薬ですよ。すんごく頭が良くなって、この世の真理を語りはじめます」

勇者「……」

無言で子狸を振り返る勇者さん

子狸は退路を探している

勇者「……ひとつもらおうかしら」

妖精「毎度あり〜」

ふつうにご購入される勇者さん

用途は不明であると

あえてここでは言っておくが

間違いなく

一服盛るつもりである

勇者「他には何があるの？」

妖精「うちでは、一人につき一つのものしか売らないんですよ。
そういうお店なんです」

勇者「聞いてないわ。あなたのミスよ。だから、あと三つね」

そしてこの横暴である

そのとき

羽のひとの小芝居が光る

勇者さんの後ろで

ちよろちよろしている

子狸の存在に

いま気がついたような風情で
首を傾げた

妖精「あら？　もしかして、あなたノ口くん？」

小狸「っ……！」

名前を呼ばれて

びくつとする子狸に

羽のひとが舞い寄る

妖精「あらあら、お久しぶりね〜」

七八、管理人だよ

あれ？

今日は機嫌がいいのかな……

羽のひとって

こうして見ると

ちっちゃくて可愛いよね

じつは

ふだんは

こんな感じなのかな？

警戒して

損しちゃったな

ははっ

妖精「……よう、子狸」

ははっ

おい

おい。お前ら

七九、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

おれたちは

がんばったよ

精いっぱい

がんばったけど

だめだった

疑うなら上流を見るといい

八〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そして

少しでもおれたちを疑った

自分の薄汚れた心を

存分に反省するといいいよ

八一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

なんなら

おれを叱ってくれてもいい

八二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そこはまじなの!?

ちよつと〜

そうやって

自分だけ個性を出そうとするのって

ひとつとしてどうよ?

八三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おれさ

他のひとたちから

青いひとの地味なひとつて

言われてるんだ

ひとつひとつてせ……

重複してるじゃん

語呂、悪いし

八四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

なんか
ごめんなさい

八五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや
それはさ

地味に
いい仕事するよねってことだよ

いぶし銀っていうの？

おれなんて
いつもいるひと
だぜ？

八六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

さあ

場があたたまって参りました

子狸の肩に
ちょこんと座った羽のひとに
勇者さんが問いかけます

勇者「知り合い？」

妖精「はい！ 山で猟師さんの罠にかかって困ってたところを、助けてもらったんですよ〜」

子狸「え？ 猟師さん、を……」

妖精「あん？」

子狸「そういえば、そんなこともあったなあ……」

そういえば

そんなこともありましたね

八七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

世に言う

子狸乱獲事件である……

「お前ら緊急事態発生」 part 2 (後書き)

登場人物紹介

・てふてふさん

自らのテリトリーに立ち入った人間に悪戯をするという手乗りサイズの小さな少女。「妖精」と呼ばれている。

背中に二対の羽が生えていて、自由に浮遊できる。羽を動かすと、光の粒子が燐粉のように舞い散る。

その愛らしい姿から、魔物とは同一視されていない特別な種族である。

めつたに人里にはおりてこないとされ、どういうわけか人間たちには「妖精の里」に住んでいると根強く信じられている。

簡単な魔法なら扱えるとも言われているが、簡単どころか、じつは空間支配の権限を与えられた高位の魔物だったりする。

ちなみにレベル4の魔物は、人間が言うところの「都市級」に相当し、これは国家規模の総戦力に匹敵する。

魔王など問題にならないほどのパワーだ。

注釈

・南国の王さま

スイカのこと。

この世界では存在こそ知られているものの、一般庶民が口にすることはまずないだろうとされる高級果実の代名詞である。

その常軌を逸した模様から、魔法の影響を受けて歪な発育を遂げ

たもの一種ではないかと推測されている。
世界には不思議なことがたくさんあるのだ。

・子狸乱獲事件

てふてふさんと、とある青いひとが共謀し、猟師たちと罾で対決した事件。「罾合戦の変」とも呼ばれる。

双方ともに罾に対してはプロフェッショナルであり、騙すか騙されるかの泥沼の事態に発展。

のちに子狸が現地へ出勤し、これに知恵と勇気で挑むが、もの見事に全敗し、罾という罾にかかる。

まさかのパーフェクト達成に、てふてふさんより直々にお説教を賜った。

「勇者さんはおれの嫁」

八八、管理人だよ

流れてきた

お前ら、おれが間違ってた
ごめんな

あと、南国の王さまは勘弁して下さい
いま気がついたけど無一文です

それとさ……

おれ、管理人としてお前らを叱らなくちゃならない……
わかるよな？

喧嘩しちゃ
だめ！

八九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あいよ

で、けつきよく羽のひとは
何しに来たの？

超空間で小遣い稼ぎ……ってわけじゃないよな？

九〇、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

おう

じゃあ、ここからはおれのターンな

一、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

魔王

討伐の旅シリーズ〜子狸編〜

勇者さんは

お

れ

の

嫁

> i 2 7 4 7 6 | 3 5 3 5 <

二、管理人だよ

ちよ

おま

三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ、たぶんそうだろうなと思ってた

久しぶりにナビゲート役やるの？

前々回のリベンジだな

四、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

おう

あのかきは不甲斐ない結果に終わったが……

今回の勇者は女の子だからな

勇者さんの寝顔を鑑賞して

よからぬことを考えていたエロ狸には

おれという名の勇者さんセキュリティが必要だと
固く決意した所存であります

五、管理人だよ

よからぬことってなんだよ！

そんなことはありません

六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

もちろんおれたちは管理人さんを信じてるよ
当然だろ？

七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そうだよ

何を水臭いこと言ってんだ

千年の付き合いなんだぜ？

お前らバウムファ家のことは
おれたちがいちばん知ってる

八、管理人だよ

お前ら……

九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ふっ

いってことよ。気にすんな

じゃあ、そういうわけで……

お前、罰としてそこでボケろ

一〇、管理人だよ

よくご存知で……

はい、いちばん！

ノロ・バウムフ行きます！

おれ「お嬢、お嬢」

勇者「なに」

おれ「あのね。この前、学校で面白いことがあって……」

勇者「あなた学生なの！？」

おれ「え！？」

勇者「……この国も、もうおしまいね……」

おしまい！？

この国で
いったい
何が起こってるんだ!?

一一、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん
迂闊にも噴いたわ

一二、管理人だよ

え

おれ、まだ何も……

一三、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

子狸、お前……

笑いのセンスあるわ
その才能を大切にしろよ?

一四、管理人だよ

え? そう?

羽のひとにそう言われると照れるな……

一五、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

だからって調子に乗るなよ

上には上がいる

お前はまだスタートラインに立ったただけだぞ

一六、管理人だよ

おう！

一七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

上げて落とす

基本だな……

勇者「ああ、びっくりした。生まれてはじめてだわ、こんなに驚いたの。……話の続きだったわね。悪かったわ、急に大声を上げて」
妖精「いいえ。わたしもびっくりしました。まさか、こんなところでコイツと再会しやがるなんて……」

おい

本音が出る

一八、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

すまん

正直、無理だわ

子狸に丁寧語とか……

今後そついうキャラで行く

おれ「お話の続きですけど、その前に。……あなたは、勇者さまです
すね？ 光の精霊から、お話はうかがってます」

子狸「精霊？」

おれ「黙ってる」

子狸「はい」

おれ「あなたさまに宿った宝剣は、自然界のマナを凝縮したもので
わたしたちにとっても無関係ではないのです」

一九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物

マナとか登場する世界観じゃないんだがっ……

二〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

自重っ……

一九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前ら、だんだん多芸になっっていくな……

妖精「ですから、もしも勇者さまさえよろしければ、わたしを旅に連れて行ってくれないか？」

勇者「……妖精は人間に悪さをするって聞くけど？」

勇者さんは自己管理がしっかりしてるな

どこかの管理人さんとは大違いだ

二〇、管理人だよ

おれ以外に管理人っているの？

あ、父さんのこと？

案外おつちよこちよいなんだね

ちよつと意外

二一、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そうだね

意外だね

二二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

そうだね

意外だね

二三、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

お屋形さま本人には言うなよ？

絶対だぞ？

さて、悪さね……

おれの名声も地に落ちたもんだぜ

おれ「それは一部の心ないものだけですっ」

まあ全部おれなんですけどね……

勇者「だめね。信じられないわ」

なるほど。歴代の勇者とはわけが違うな

ひとの善意をまったく信用してない

勇者「たとえば、そうね……。ここにある商品を全て譲ってもらおうというわけには行かないの？ ずいぶん不思議なものを扱ってるようだから、きっと役に立つこともあると思うの。どうかしら？」

だが、おれも子狸とはわけが違うぜ

おれ「だめですよつ。わたし、破産しちゃいますつ。どうしたら信用してもらえるんでしょうか……。ノロくんは、わたしのこと信じてくださいよね?」

子狸「え……?」

おれ「おい」

子狸「あ、はい……」

おれ「ですよね! 勇者さま、どうですか?」

勇者「悪いけど、その子の言うことも当てにならないの」

おれ「ですよね」

お前ら。勇者さんが心を開いてくれない

どうしたらいい?

二四、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

計画に無理があつたな……

二五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

将を射んとすれば、まず馬を射よという言葉もある

お馬さんは連れてきてないのか?

二六、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中
連れてきてない

勇者さんの意向により
脚を休ませるべく宿屋でお留守番だ

二七、かまくら在住のとりたらない不定形生物さん
子狸のときは、わりとあっさり同行を許したのにな
どうしたものか

二八、海底洞窟在住のとりたらない不定形生物さん
いや、あのときは子狸からじゃなく
勇者さんから言い出したことだからな

状況が状況で、しかも完全に上の立場にあつた
というのが大きいのもしれん

二九、火口付近在住のとりたらない不定形生物さん
勇者さんは譲歩を引き出そうとしてるんじゃないか？

ふつうに考えても羽のひとを連れ歩くメリットは大きいぞ

三〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

そうかもしれないが、そうではないかもしれない

押すか退くか。賭けになる

博打は好きじゃないんだが……

三一、管理人だよ

仕方ないよね

羽のひとは無理しないで

ゆっくり休んでるといいよ

ゆっくり

勇者さんのことは

おれに

任せてくれ！

おれ「お嬢には、おれがついてるから大丈夫だよ！」

勇者「これ飲んでみて」

おれ「？ 何これ？」

！

プレゼントだ！？

頂きます

くくくく

おれ「……世の中には二種類の人間がいる。男と女だ」

真理が

見える……！

勇者「アレイシアン・アジエステ・アリアよ。リシアでいいわ。よろしくね」

妖精「はい、リシアさん！ わたし、リンカー・ベルって言います！」

おれ「なぜひとは戦い続けるのか……？ 戦い続けねば、ならないのか……。それは愛ゆえにだ……」

三三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

その発想はなかった……

三三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

さすがバウムフ家

三四、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

認めざるを得ないな

バウムフは

格が違った……

「勇者さんはおれの嫁」（後書き）

注釈

・ナビゲーター役

勇者を導く重要な役割を担った魔物のこと。

本来であればバウムファ家が担当するべきなのだが、諸事情により魔物たちの中からサポーターを派遣する方式が導入されている。

そもそも、勇者に選ばれる者は魔物たちの厳しい審査をパスした清く正しい人間である。

そうした意味では、バウムファ家の人間も押しなべて勇者の資質があると言える。

だが、善意に善意が重なるとろくなことにならないのだと、魔物たちは長い歴史に学んだのだ。

・学校であつた面白いこと

このあと青いひとが尋ねてみたところ、間違つて低学年のクラスに突入してしまったので、とりあえず先生に成り済まそうとしたときのことを話そうとしていたらしい。

かろうじて人並みの成績を取れている魔法の授業をはじめたのだが、子狸の「授業」とやらの興味を持った教師陣が勢揃いで聴衆と化した。

そのときの子狸先生のひとこと。

「授業参観か！」

残念ながら、ボケではなくツッコミである。というボケなのか？ 丁寧に解説すると、ボケろと言われて、あえてツッコむ。それが

ボケという高度な……などと青いひとたちが議論をはじめたところ
で子狸が涙ながらに謝罪したので、これまでとする。

「子狸はこんらんしている」 part 1

一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

羽のひとを新たなる旅の仲間に加え

にわかに活気づく我らが勇者一行

次の街へ向けて、いざ出発……！

と行きたいところだが

まずは本来の目的である

調理器具一式を手に入れるために

専門の鍛冶屋へ

妖精「一口に包丁と言っても、いろいろあるんですね」

勇者「いちばん高価なものを買っておけば間違いないのかしら」

子狸「用途の幅が広いものがないかな。サイズはやや小ぶりで使い回しの良いものを、重量はある程度あった方が手に馴染む」

子狸は

こんらんしている

妖精「ノ口くんがまともなことを……」

勇者「……はじめての感覚だね。これが感動というものなの……?」

感動を知る勇者さん

絶賛こんらん中の子狸が
率先して鍛冶屋の店主と交渉し
無難に商談をまとめる

子狸「どうしたのさ、ふたりとも？ さあ、行こう。おれたちの旅
は、まだはじまったばかりだ……！」

違和感が物凄いのですが……

二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸さん

かつこいい……

三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

この子狸になら

抱かれてもいい

四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おれは

子狸はやれば出来る子だって

信じてたよ

五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸はじまつたな……

王都の

あとでデータを送ってくれ
永久保存する

六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう

抜かりはないぜ

きちんと、あらゆる角度から録画しておいた

編集して完成したバージョンを

今夜にでも河に流す

七、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

さすが青いひとだな

おれは

子狸の肩から

勇者さんの反応シリーズ
をリリースする予定だ

八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう

突き詰めていけば

面白いものが出来そうだな

さて

目的のものを入手し、一行は往来へ

勇者さんは

一向に旅立とうとする様子がない

もう一泊するのかな？

九、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

訊いてみる

おれ「リシアさん、次はどこへ行くんですか？」

勇者「……足が疲れたわ。広場で少し休憩しましょう」

子狸「あんまり出歩かない方がいいんじゃないかな？ 君は、有名なみただね」

おれ「……おお」

勇者「……おお」

これが子狸の真の実力なのか……

ちらりと背後を警戒する子狸が
お屋形さまとだぶって見えるぜ……！

一〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

すっかり立派になって……

子狸の懸念は現実のものとなり
通りの向こうから

二人組の男が近づいてくる

勇者「思ったよりも遅かったわね」

どつやら勇者さんは

彼らと顔見知りらしい

片や

眼帯をはめ

隻腕の男

その男に

つき従うように歩いているのは

長身の

あきらかに素人離れた物腰の男である
騎士崩れか……？

二人とも厚手の上着を肩に引っかけてる

胸にきらめく純金製のカフス

どう見てもカタギの人間とは思えません
本当にありがとございました

一一、管理人だよ

何者だ？

一二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

ファミリーの人間かと

王国の貴族制度に反発する無法者たちです

仁義を重んじるのですが

末端のものには荒くれものが多いので

民衆の支持は得られてません

しかし現実問題として

街の治安を下で支えているのは

彼らの圧力によるものです

騎士団の人手不足は深刻ですからね

一三、管理人だよ

そうか
アリア家との関わりが
あるのかもしれないな

だが

もしもということもある

羽のひとは

彼女を守れ

おれも

いざというときに備える

一四、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

イエッサー！

一五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おれ

もう満足だ……

いつ死んでもいい……

一六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

庭園の！？

逝くな！

これからだろ！

いままで悪い夢を見てたんだよ……

ようやくはじまったんだ……！

一七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ。すまない

少し取り乱した……

一八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

一直線に勇者さんに近寄ってきた二人組が

彼女に頭を下げる

眼帯「申し訳ない。手違いがあつたようで……」

途中で超空間に立ち寄つたからな

そのときに見失つたんだらう

おそらく察しはついているだらうに

勇者さんは悪びれない

勇者「そう。まあいいわ」

長身の男は

周囲の目を気にしている

たぶん眼帯の側近なんだろう

大通りから外れているとはいえ

この街は王都に程近く

人通りが多い

側近「……場所を変えますか？」

勇者「ここでいいわ。あなたたちだって王国の民には違いなもの。疾しいことなんて何も無いのよ。そうでしょ？」

眼帯「さすがにARIA家のお嬢さまは豪胆でいらっしやる……。うちの若い衆にも見習ってほしいもんだ」

勇者「そうね。他の貴族が、みんなそう考えてくれたら心配もいらないのだけれど……」

眼帯「何か心配事でも？」

勇者「訳あって、少し長い旅になりそうなの。仮に、あなたたちが頼んでもいないのに行く先々で便宜を図ってくれるとしたなら、わたしたちは借りたくもない恩を作ることになるわね。困ったことだわ……」

眼帯「国を憂うお気持ちはわかります。つまり……いらぬお節介と

は存じますが……」

勇者「そう。それなら仕方ないわね。わたしはね、心配なのよ」

眼帯「と申されますと……？」

勇者「わたしたちの一族は、これまで王家に仇なす不忠の輩どもを数えきれないほど肅清してきたわ。だから、王家に万が一のことがあつてはならないと……そう思ってる」

眼帯「ご立派です」

勇者「いいえ、当たり前のことよ。けど、その当たり前のことがかでない貴族の多いこと……」

その筆頭がアリア家なんですけどね……

勇者「わたしは、しばらく王都に戻れないわ。我が家を疎んじる者からしたら、どう思つかしらね……。あつてはならないことだけども……わたしなら騎士団を味方につけるわ」

ところで話は変わるけど

いい天気だよな

一九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

いい天気だな

吹雪で一步先も見えないぜ

二〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ほう

ご近所さんたちは
どうしてるんだ？

二一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

え

ふつうに

かまくら作って
避難してるけど？

見張りは交代制で

二二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

それ

お前が

技術革命

起こしてるんじゃない？

二三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おれんちの

「近所さんも

似たようなもんだぜ

年々お供え物が増えていつてる気がする

二四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おっと、いかん

話を聞いてなかった

勇者さんとの世間話を終えた眼帯が

子狸の目を覗き込む

眼帯「お前か？ ノロ・バウマフってのは。……大きくなったな。

あまり似てないと思ったが、面構えは親父譲りか」

子狸「……父さんのことを？」

眼帯「お前の親父さんは、おれの命の恩人だ。向こうは覚えちゃいないだろうがな」

あゝ……

こいつ

あのとぎのチンピラか

二五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あゝ……
いたね
そういえば

血まみれで行き倒れてたのが

子狸が三歳くらいのときだな

二六、管理人だよ

そうなのか……

合縁奇縁ってやつだな

二七、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

勇者さんも同意見みたいですね

勇者「そうなの？ 不思議な縁ね」

眼帯「そうでもないですよ。我々の業界じゃあ、こつこつのは珍しいことじゃない……。しかしアリア家のお供が平民とはね……。こいつとはどこで？」

勇者「魔物にさらわれてたところを拾ったの」

眼帯「さらわれて……？ そんなへまを、あの男がするかね……？」

妖精「ノ口くんには放浪癖があるんですよ」

眼帯「ふうん。あんまりお袋さんに心配かけるなよ？」

子狸「……………」

無反応の子狸さん

眼帯「…………で、だ」

急変する眼帯の表情

眼帯「お前、腹に何を飼ってる？」

おれたちのことかな？

いるんだよね…………

たまにこついう勘の鋭いやつがさ…………

どうする？

二八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おれが行く

子狸の影に成り済まして

不意打ち気味に襲撃するわ

場合によっては魔王の腹心ルートに突入するけど

まあ、側近が何とかしてくれんだろ

二九、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

そつか？

そこまでやらなくてもいい気もするが……

まあ、やるってんなら

羽のひとは

タイミングを見て

超空間で四人を隔離してくれ

街中で暴れられると面倒だ

バウマフ家の歴史は

表沙汰にはしたくない

三〇、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

おう

って早えーよ

青いひと扮する子狸の影が

眼帯に

レクイエム毒針の変化形を放つ

側近「！ 叔父貴！」

側近は

おれたちの期待を裏切らなかつた

盾の魔法で難なく弾く

チエンジニアリングね……

職業軍人の技術だぜ

もしくは暗殺者……

庭園「バレてしまつては仕方ない……」

伸び上がる子狸の影

おれ「魔物！？ こんな街中で……！ リシアさんっ、わたし結界を張ります！」

勇者「お願い」

うは

まったく動じてない

さあ、子狸さん！

いいところ見せるチャンスですよ！

子狸「……………」

おや？

三一、管理人だよ

何者だ？

三二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

え？

三三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

三四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

「子狸はこんらんしている」part1（後書き）

注釈

・チェンジリング

詠唱を変換する技術。

人間は詠唱を破棄することができないため、不意打ちや不意打ちに対抗する手段として、詠唱を「改造」する技術を発展させてきた。そのひとつが「チェンジリング」である。

先の発言を詠唱として扱うもので、かなりの習熟を必要とする。詠唱はレベルに応じて長くなる（指示が複雑になる）傾向があるため、チェンジリング可能な魔法はごく低レベルの魔法に限られる。「詠唱を隠せる」というメリットから、近距離戦においては切り札になりうる。

一見すると便利なのだが、この技術を習得すると手札が少なくなるという決して小さくないデメリットも発生するようだ。

つまり、状況に応じて魔法を使い分けようという考え方の人間には合わないらしい。

「地底で槌振るおれたち」

三三六、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

とん

三三七、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

てん

三三八、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

かん

三三九、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

とん

三三〇、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

てん

三三一、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

かん

三三三二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

庭園の

焦りすぎじゃないか？

王都のが怪しんでるぞ

三三三三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

理由は在ればいい

整合性は

この際二の次だ

海底の

これはチャンスなんだ

おそらく最初で最後のな

三三三四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

え

そんなに切羽詰まってるのか？

レベル2のひとたちに頼めばいいかなと

おれは思ってたんだが……

三三五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう

断言してもいい

この先

勇者さんの退魔性は

どンドン落ちていくぜ

レベル4は

人間の限界を超えてるからな

現時点で最低二回

おれたちが知らないだけで

少なくとも二回か三回は余分に使ってるだろう

あるいは、もっと多いかもしれん

早急にサンプルを採取する必要がある

緑のひとも似たようなことを言ってるんじゃないか？

三三六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

まあな

だが……

三三七、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

なんぞ

また

お前ら

悪だくみしてるのか？

三三八、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

正直

お前らのコンビは

不吉な予感しかないんだが……

三三九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

不吉とか言うな

おれ

さいきん

ちよっと気にしてるんだよ……

開運グッズに

興味しんしん

三四〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おいおい

山腹のが言つてたこと

本気にしてるのか？

いつだったか

宰相が言つてたじゃん

運命は

自らの手で切り開くものだろ

三四一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

バウマフさんちのひとを

ずっと見てるとな……

ときどき思うんだよ

この世には

運命に溺愛された人間が

たしかに存在して

それは

おれたちだって

他人事じゃないんじゃないかって……

三四二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あゝ……

三四三、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

あゝ……

三四四、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

あゝ……

三四五、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

いじりいじり

否定してやれよ

おれはしないけど

三四六、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

また

お前は

そうやって

おれたちに
泥をかぶせようとするんだな……

三四七、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中）

連合国

まじ怖い……

覚えてろよ

いつかおれんちのアジエステたんが

お前んちをぎゃふんと言わせるからな……

三四八、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中）

お前んちのほうが

よっぽど怖いわ！

アリア家とかまじ勘弁して下さいよ（泣）

お前んちの宰相

おれ、まじで応援してっから！

三四九、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中）

おれんちの王族をばかにしてんのか！？

アリア家の野心を未然に防いでるのは

ある意味あの人たちなんだぞ！

三五〇、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ようは能天気なんだろ？

お前んちの王家

なんかバウマフさんちのひとと相通じるものがあるんだよな

三五一、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おい

おい。なめんな

あそこまでひどくないわ！

あそこまでひどくないわ！

三五二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なぜ

二度繰り返した……

まあ、おちつけ

ときに
子狸バスター（仮）の進捗はどうなってる？

三三三、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おう

順調だぜ

やっぱり

ラストダンジョンでとれる鉄は

良質だな

三三四、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

あんまり

うちの近くを

掘り進めないで欲しいんだが……

三三五、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

良質なものは仕方ない

三三六、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

良質だった君の家が悪いのだよ……

三三七、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

鬼のひと

まじ怖い……

理屈が通じないんだよう

三三八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

まあ

おかげで難攻不落の要塞と化してるんだから

いいんじゃない？

三三九、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

その前に崩落しそうで怖いんだよ……

アリの巣か！

もう一度言っわ

アリの巣か！

三六〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

だから

なぜ二度言っ……

三六一、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ひゃっほおおおう！

鉄が足りねえぞ

野郎ども！

掘れ掘れ掘れえーい！

三六二、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

合点承知！

行くぜっ

全

部

お

れ

そして

いま放たれる

必殺のおおお

おれドリル！

うなれ！

おれの角！

三六三、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

削れる岩盤は

いい岩盤だ！

削れない岩盤は

教育された

いい岩盤だ！

おらおらおらーっ！

三六四、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

いやあああああ！

「地底で槌振るおれたち」（後書き）

注釈

・ア（ジ）ジエステ

「聖騎士」を意味する称号名。

「アジ」は「栄光」、「ジエステ」は「騎士」の意であり、つなげると「アジジエステ」なのだが、「ジ」の音が重なるため「アジエステ」と読む。

この世界において三大国家と言われる王国と帝国、そして連合国は、とても仲が悪い（とくに王国と帝国）。

だが、魔物の軍勢が攻めてきたときはそうも言ってられないので、お互い助け合いましようという協定を大国同士で結んでいる。

その際、各国の縄張り意識と利害競争が絡み合い、指揮系統がひどいことになるのが目に見えていたため、「称号名」という制度が設けられた。

称号名とは国際的な位階を表わすものであり、たとえば「聖騎士位」を意味する「アジエステ」は「どこの国の騎士も自由に使っている」、王さま以外の命令には従わなくてもいいけど、大規模な作戦に支障をきたすような無茶はしないでね」という非常に変則的な権限を持つ。

これはレベル4（都市級）以上の魔物に単独で突っ込むような困ったひとに贈られる称号で、「英雄号」とも呼ばれる。すごいぞアリア家。

「子狸はごらんしている」part 2

三五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なん……

いや

え？

おれ、はつきり言ったよね？

三六、管理人だよ

うん？

うん

三七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あ

お前

その反応……

さては何もわかってねーな！？

三八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

どうしちゃったの

管理人さん！？

そんな……

うそだろ！？

目を覚ましてくれよっ……

ようやくこれから……

おれたちの冒険が

はじまるんじゃないのか！？

三九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

管理人さん！

四〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

管理人さん！

四一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

管理人さん！

四二、管理人だよ

なに？

四三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

さて続けようか

四四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おう。短い夢だったな

四五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

まさか三十分と保たないとはな……

つーか悪化してねーか？

四六、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

限界まで頭脳を酷使した反動かなあ……？

四七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

え！？

あれしきで限界なの！？

お猿さんでも

もうちよつと

がんばれるだろー！

四八、管理人だよ

お前ら

おれを

見くびるな！

おれ「お嬢、さがって！」

勇者さんは

このおれが

守る！

四九、空中庭園在住のとりにとらない不定形生物さん（出張中

お前が何もわかってないというのは

よくわかった

だが

これを見ても同じことが言えるかな？

おれ「愚かな人間どもめ……。大人しく我々の手のひらの上で踊っていればいいものを……」

見よ！

これぞ

猛虎の構えだ！

五〇、管理人だよ

！

青いひと？

青いひとなの！？

五一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうとも

人呼んで

ザ・ブルー

大空を翔ける蒼き閃光とは

このおれのことよ！

五二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前も

子狸と面と向かうと壊れるなあ……

庭園のが口上を述べている間に

羽のひとの結界は完成

周囲の風景が歪み

衆目は閉ざされる

こんらんがとけた子狸の頬を

勇者さんが引っぱる

子狸「……ん？」

勇者「よく伸びるわね」

罰のつもりらしいが

教官の手で鍛え上げられた子狸の頬の柔軟性は

おれたちも一目置いているほどだ

ここで眼帯が進み出る

眼帯「度胸も親父譲りか。だが、ここはおれのシマだ。さがってな、小僧」

そう言って子狸を押しつける

側近「叔父貴。連中に理屈が通じるとは……」

眼帯「そんなときは頼むわ」

側近の提言を軽く流して

庭園のに詰め寄る眼帯

手をポケットに突っ込んだ横柄な態度である

眼帯「おう。おめえらは言葉がわかるのに、人の話を聞こうとしない。お前はどうか？ 聞く耳はあるか？」

庭園「人間風情が……対等のつもりか？ 言ってみろ」

とりあえず

こき下ろしておいて

対話に応じる庭園の

眼帯「そうかい……。じゃあ、こつだ！」

そんな庭園のの優しさに突け込んで

眼帯の蹴りが炸裂

眼帯「誰に断っておれのシマを荒らしてんだ。ああ！？」

五三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

やだ……怖い

五四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

やだ……怖い

五五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

庭園の……？

五六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

久しぶりに……

キレちまったよ……

おれ「やってくれるな……下等生物が！」

だが、思い上がるな
いちばん厄介なのは

お前なんだよ子狸い……

喰らえっ

レクイエム毒針・影！

これが

お前への葬送曲だ！

五七、管理人だよ

おれ！？

五八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

いいぞ！

やっちまえ！

五九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

われわれは

同志の闘争を

心の底から応援するものですっ……

六〇、住所不定のどこにでもいるようなてふてぶさん

残念っ……

射線を見切った勇者さんが

踏み込むと同時に触手の横腹を指でなぞる

霧散する触手

こうして、あえなく青いひとの奥義は敗れ去るのであった……

六一、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ちっ……

六二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ちっ……

六三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ちっ……

なるほどな

これがアリア家の血か

背筋が震えたぜ

だが

子狸に一撃を入れるまでは終われるかよ……！

おれ「おのれっ……」

飛び退くおれ

子狸は、あとでじっくりと料理してやる

まずはお前からだ！

おれ「冥府に沈め！ アルダ・バリエ・ラルド……」

六四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

庭園のが

詠唱しつつ

眼帯に奥義を乱れ撃つ

側近「デイレイ！」

正直、単なる指圧なのだが
なんとなくやばそうなので

側近が盾の魔法で迎撃

この側近

じつに優秀である

庭園「アバドン・グノ！」

妖精「マジカル ミサイル！」

あれ？

そんな技名でしたっけ？

魔法に関しては独自の路線を行く羽のひとが
光の誘導弾で

庭園のの血と汗と涙の結晶である闇の底なし沼を

華麗に相殺

妖精「リシアさんっ、いまです！」

六五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

妖精魔法ですね

わかります

六六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれ涙目

妖精つてつけば

なんでも許されると思うなよー！

六七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

庭園の

うしろうしろー！

六八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

きゃあ

六九、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

どうかね

おれと勇者さんのコンビネーションは？

眼帯を盾に素早く回り込んだ勇者さんが
愛用の剣で青いひとを背後から切り裂く

のたうつ青いひとにひとこと

勇者「冥土の土産はくれないの？」

そして子狸が空気の件

七〇、管理人だよ

もう一度

おれに

チャンスを下さい

七一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

そしてまさかのスーパ子狸タイム

七二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

構わんが高くつくぜ？

具体的には
南国の王さまを寄越して下さい
お願いします

七三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん
えらくこだわるな……

なにがお前をそつまで駆り立てる？

七四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん
宰相に贈るんだ

おれは
自分の言葉にまっすぐ生きる

七五、管理人だよ

お金ないんです……

七六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん
勇者さんをお願いしてみたら？

つまり
お小遣いだな

七七、管理人だよ

お前……

頭いいな

七八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

引き換えに

いろいろなものをつうと思つんだが……

まあ

子狸がそう言つたら

おれ「くれてやるさ……。おれが、なんのために、その小僧の影に、潜んでいたと思つ……。？」

勇者「ひまだったから？」

正解（にこっ

おっと

この勇者あなどれん……
真理を突いてくるな……

おれ「きさまは、なにも知らない……。おれは、あのお方の遣いに過ぎない……。いずれ、思い知ることになる……。地獄で待っているぞ……。アレイシアン・アジェステ・アリア……。聖騎士の、未裔よ……」

きれぎれに言ってから
ぐったりしてみる

子狸

準備はいいか？

おれが

最後の力を振り絞って

勇者さんに襲いかかるから

お前が

身を呈してかばうんだぞ？

七九、管理人だよ

え？

八〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

え？

八一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

八二、管理人だよ

お小遣いは？

八三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物（出張中

意味が……

わからん……

がくつ

八四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

庭園の〜！

八五、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

庭園の〜！

八六、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

かくして

子狸の前に

敗れ去った青いひと

フェードアウトしていった

彼の言葉は

この先、勇者一行を待ち受ける

苦難の旅路を予感させるものであった……

それはそうと

勇者さんは

子狸の頬の感触が

お気に召したようである

勇者「もうへんなの憑いてないでしょうね……」

おれだったら

こんなへんな生き物は

さつさと置いていくのだが

子狸「え？ おれ、何かついてる？」

本当に不思議でならない……

一方

眼帯の疑惑は払拭できたようである

眼帯「憑き物が落ちたみてえな顔してるぜ。そっちが素なのかい……不憫な」

側近「……叔父貴。ですが、能ある鷹は爪を隠すって言いますよ」
眼帯「いいや、思い出したぜ。小っちええ頃から、あんなだったわ。
こちらら生死の境をさまよってるってのに、“おかゆは？”“おか
ゆは？”だのと人の耳元でよお……」

幼い頃から利発な子でしてね……

子狸「！ タマ！？ タマなの！？」

タマ「てめーの頭ん中で、おれはどういう扱いになってんだ！？」

八七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

また会えるかな？

タマさん

八八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

会えるといいな

タマさん

八九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

さあな

ただ、これだけははっきりと言える

我々の業界じゃあ

いじりものは珍らしいんじゃない……

「子狸はこんらんしている」 part 2 (後書き)

注釈

・猛虎の構え

まず、中腰になる。

次に、片足を前に出して、ひざを程良くたわませる。

最後に、両腕を広げて、ひじを直角に曲げた状態から、両手の指に万力の力を込めて鉤爪を表現する。

上記の手順を、青いひとたちは触手で代用して成し遂げる。

あえてボディと顔面をから空きにすることで、王者の風格を醸し出すらしい。

別名「魔王の遊び」とも称されるこの構えは、青いひとたちの代名詞でもある。

なお、身体の向きは斜め45度が最も美しいとされる。

・妖精魔法

妖精たちが扱うとされる魔法。

詠唱を要さない、既存のものとは異なる体系の魔法ということになってはいるが、単に詠唱破棄してるだけである。

羽のひとは殊更にイメージを大事にするので、なんだか神聖な感じがする光弾系の魔法を専ら多用する。

今回の場合、青いひとが使用した闇の魔法はレベル3に相当するため、詠唱破棄でほとんど開放レベルを持って行かれている「マジカル ミサイル」では相殺しきれないのが本当のところなのだが、「妖精魔法」は「聖属性」ということになっているため、(状況次

第ではあるが、実質的なレベルを無視した結果になることが多々ある。

この「属性」という概念は、仕掛け人の魔物たちが長年に渡って築き上げた「トラップ」と呼ばれる「嘘のルール」であり、魔法の本質を人間に悟られないよう工夫を凝らしている。

たとえば、水の魔法は火の魔法に対して優位ということは、本来なら起こらない。

しかし人間は「当然そうなる」と信じて疑わないため、二番回線の働きにより「当然そうなる」のだ。

「おれたち絶賛放置プレイ中の件に関して」 part 1

一、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おれたち

絶賛放置プレイ中の件に関して

二、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

おれ

そろそろ家に帰らないと

通常業務に支障をきたしそうなんだが……

三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

速報も入らないしな

まさか三泊するとか言い出さないよね……？

四、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

そもそも二泊してる時点でどうかとおれは思う

五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

だいたい順調すぎると思ったんだよ……

そういうときは

たいていどこかに穴があるんだ

六、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

つまり結論から言つと

子狸い……

七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

子狸い……

八、管理人だよ

子狸い……

九、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

自虐かよ

いつの間に

そんな高度なテクニクを覚えた

いや

青いひとの差し金だな？

一〇、管理人だよ

違います

青いひとに

やれって言われた

一一、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

それを差し金と言わず
なんだというのか

こんにちは管理人さん
待ちわびました

一二、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

待ちわびすぎてテンション低いですけど
ご了承ください

配置についてから

現時点で二十四時間経過

相変わらず

語彙が少ないですねっ >< 〇

一三、管理人だよ

まあね

低学年の子にも
よく言われるよ

子供は素直で可愛いね

一四、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

うん

青いひと
いる？

一五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おれは

いつでも

お前らを

見守ってるよ

一六、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

ばか(照)

一七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん(出張中)

二度目はないと

言っただはずだぞ

一八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ぎゃーっ！

一九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

海底の〜！

二〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

まさかあれは……

氷縛千刃殺界陣！？

二一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

かまくらの

知っているのか！？

一一一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

すまん、骨のひと

待ったか？

一一三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ううん

いま来たところ（にじっ

一一四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前らもか

一一五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ちよっ

違

ぎゃーっ！

二六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

庭園の〜！

二七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

王都のが暴君と化した……

二八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

王都のは昔からそうだよな

さすが

いや

うん

二九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

さすが

初代魔王だな！

三〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

うるさい

過ぎたことだ
忘れる

ああ
見えるひとも
待たせたな

けつきよく
昨日は丸一日
タマさんの職場案内で終わってしまった

勇者さんは宿屋で華麗に読書

三二、管理人だよ
カチコミの才能があるって
褒められたよ

ごちゃごちゃ考えるより
ハートで勝負
だぜ！

三三、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん
勇者さんの護衛をまっとうできるようにと
連れて行かれたのに

どうして鉄砲玉のスキルを習得してくるんだ……

気付いたら宿屋のスタッフの一員みたいになってて
一流のシェフになってから迎えに行くとか
意味不明なこと言い出すし……

三三、管理人だよ

え？

だって

それがいちばん近道だろ？

三四、王都在住のとりにならない不定形生物さん（出張中

ごめん

本当に……

いろいろと

ごめんなさい

こいつ

勇者さんに恋したとか言い出してさ

一人前の料理人になれば

そのときは結婚しようって

ひとりで決意しちゃったんだ……

その延長で、いま

はりきって昼食を作ってます……

三五、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

血は争えない、か……

お屋形さまも

いきなり結婚するとか言い出して

おれたちもびびったけど

嫁さんがいちばんびびってたよな

三六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

いらんとこばかり似て困る

ちなみにシエフ

本日のメニューは？

三七、管理人だよ

おれ「魔どんぐりの甘煮です！」

勇者「却下」

おれ「なん……だど？」

修行が足りなかった……！

三八、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

そういう問題じゃねーよ

勇者「わたし、魔法の果実は食べないの。作り直して頂戴」

子狸「好き嫌いはいけません」

勇者「……どう説明したらいいかしら……」

途方に暮れる勇者さん

勇者「剣士だから……って言っても、わからないわよね……」

子狸「はあ……」

え？

わからないの？

三九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや、ふつうは知らない

義務教育の制度が施行されたとき

民衆が反乱を起こしたらどうするかってのが

議題に挙がったはずだ

時期的に見て

その頃を境に剣士の……というより魔法の情報がいくつか秘匿されてる

騎士でもなければ

剣士と知り合う機会はまずないしな

平民ともなればなおさらだ

じゃあお前は

いままでのおれたちのやりとりを

なんだと思ってたんだってという話になるけど

それは置いておこう

よくあることだ

勇者「一般には公開されてないけど、たくさん魔法を使うと魔法に弱くなるの。わたしは剣士だから、魔法を使わない代わりに魔法があまり効かないし、魔物に対して優位に立てる」

子狸「……なるほど」

子狸

本当に大丈夫か？

ついてきてるか？

四〇、管理人だよ

え？

べつに……

よつは

三番が閉じてるから構成が走らないってことでしょ？

四一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お屋形さま

こんにちは！

四二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

いつもお世話になっております！

四三、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

お子さんも

すっかり立派になって！

感無量とは

このことですか！

四四、管理人だよ

え

父さん？

どうしたの？

四五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

お前がどうした！？

一瞬、本気でお屋形さまかと思ったわ！

まあ、わかるよ

そっち関連の知識は

おれたちが徹底的に叩き込んだからな……

四六、管理人だよ

授業にぜんぜん役に立たない知識を

ありがとう

勇者「……たくさん魔法を使うと、魔法に弱くなるの。これでどう？」

そして

なぜ勇者さんは

同じことを繰り返したんだろう……

おれ「なるほど」

勇者「……だめね。ごめんなさい。忘れて？」

なかつたことにされた……

勇者「とにかく。魔法の果実は、魔法の影響を……いえ、なんでもないわ。苦手なの」

おれ「好き嫌いはいけません」

勇者「そう。こうして繰り返されるのね……」

やっぱり修行が足りないってことなのか……

四七、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

仕方ねーな……

おれがフォローしてやるよ

おれ「リシアさん、大丈夫ですよ。食べちゃいましょう!」

勇者「……どうして?」

おれ「リシアさんが魔法に強いのは、なんとなくわかります。それって逆に言えば、魔法の果実を食べても影響を受けにくいんじゃないですか?」

勇者「そうね。だから?」

すまん。無理だったわ

四八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸「よくわからないけど、熱を通してるから大丈夫だよ」

「どういう理屈？」

勇者「どういう理屈なの」

子狸「理屈ですか……。えっと、つまり、お嬢は回線が閉じてるから……。魔法さえ使わなければ、あとは意識の問題ではないかと。うん、外部入力は関係ないよ」

勇者「」

ひいつ………！

四九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ひいつ………！

五〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

はい

うっかり出ました

お前ら

今日もがんばって誤魔化しましょうね

五一、管理人だよ

あ！

言っちゃまずかった？

五一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

まずいというか

それは人類社会に存在してはならないクラスの知識だよ

まあ、安心しろ

おれたちは

いかなる暴露にも

屈さず対処してきた過去の実績がある

「おれたち絶賛放置プレイ中の件に関して」 part 1（後書き）

登場人物紹介

・骸骨さん

いよいよ登場したレベル2の魔物。「骨のひと」と呼ばれる。

白骨化した戦士の亡骸と言われているが、単にそういう見た目をしているだけである。

武器の扱いに長けており、魔法もレベル2までなら自由に使える。いちおう死のふちから蘇ったという設定なので、驚異的な生命力を誇る。

また、レベル2以上の魔物は例外なく単体種である。というより、レベル1の魔物たちが例外的な存在であり、基本的に魔物は一種一のみ。

分身魔法がある上に自在に瞬間移動できるので、本来的に同種の個体は必要ないのだ。

注釈

・魔どんぐり

異様に巨大などんぐり。食べると、ほのかな甘味がある。

魔法の影響を受けて歪な発達を遂げた「魔改造の実シリーズ」のひとつである。

同シリーズを、人間は「魔法の果実」と呼ぶ。

魔改造の実に共通する特徴は、季節を問わず土壌に無造作に転がっていること。

木々に成っている姿を見たものはいないため出自は定かではないが、その形状から近い果実の名称で呼ばれる。

「おれたち絶賛放置プレイ中の件に関して」 part 2

五三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

では、ここでいったん状況を整理しよう

いまは、最初の街から次の街に向かって移動している途中

いい時間になったということ

街道わきの少し開けたスペースで

一行はランチタイムに突入

子狸が魔どんぐりを採取してきた森を

背にしている格好だ

おれたちの襲撃を警戒してか

見晴らしのいい拠点とは言い難いが

不思議なもので誰かが休んでると

他の誰かも釣られて同じところに拠点を築きはじめる

あとからついてきた行商人の集団も例外ではなかったよう

少し離れたところに拠点を作ってくつろいでる

目撃者は多数だが、会話を聞かれてはいない

商団に混ぜたてた吟遊詩人がライブしてる最中だから

盗み聞きされる心配はまずない

そして

お題はこちら

勇者「……何が言いたいのか？」

さあ

お前ら

どう答える？

五四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

とりあえず

火というものが

人類社会において

いかに大きな役割を果たしてきたかを

熱く論じてみてはどうか

五五、管理人だよ

なるほど

具体的には？

五六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

どうに

納得する要素があったというのか

お前の
その

よくわからないけど

じつは深いところでおれは理解している
謎の自信はどこから来るんだ？

五七、管理人だよ

自分を信じることは大切だつて
お祖父ちゃんが言ってた

五八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

グランド狸かよ……

同じ穴の貉じゃねーか

勇者さんじゃないけど
そうして繰り返されていくんだな……

なんにせよ、だ

その手の誤魔化しは
勇者さんには通用しないだろ

久しぶりに

超古代文明の民ルートやってみるか？

五九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

お前、おれに何か恨みでもあるんですか？

六〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

火口には悪いけど

あれはあれで綺麗にまとまったよな
最後の詰めが甘かったただけでさ

蘇った超兵器を鎮めるために

命を賭して封印を施した場面なんて
おれ、ちよつとホロリと来たぜ

六一、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そんで

行方不明になったはずの
なんちゃって古代の民が

お前らと宴会はじめちゃって
酒の勢いで

ゲストに勇者を招くとか言い出して
収拾がつかなくなったんじゃないか……

ドツキリのプラカード持って宴会会場に突撃したの
誰だと思ってるんだ？

おれだぞ！

お前らは

バウマフさんちのひとが女の子だと

一気に甘くなる傾向があるんだよ……

泥酔した古代の民に絡まれてる勇者とか

見るに耐えなかったわ！

六二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

でも

おかげであのときは

お前だけ勇者のお説教フルマラソンを免除されたじゃん

酔いつぶれた古代の民もだけど

六三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ぜんぜん嬉しくねーよ！

けつきよく事後処理とか

全部おれに丸投げしやがって……

あのときの恨み

おれは、まだ忘れてないからな……

というわけで

超古代文明の民ルートは却下

あのときは
バウマフさんちのひとが女の子だったから許された
みたいなのがあるし

六四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

まあ、一理あるな

じゃあ逆転の発想で

お前が古代の民ルート行ってみるか

六五、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おお。それいいね

勇者さんプライド高そうだし

六六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おう。いいんじゃないか？

子狸に対してはガードが甘いところあるしな

六七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

まあ、時間稼ぎにはなるかもな……

六八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

お前ら

なに言ってるの？

おい

言い訳なんてする必要ないだろ

単に子狸の方が

勇者よりも博識だったってだけの話じゃん

六九、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

おれもそう思う

お前ら悔しくないの？

誤魔化すってことはさ

おれたちの子狸さんが

格下に見られてるってことだろ

バウマフ家は

おれたちが認めた

世界で唯一の契約者だぞ

アリア家だろうと何だろうと

おれたちの子狸さんが
他の人間に劣るわけねーだろ……！

七〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

！

おれたちが間違っていたのかもしれない……

七一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ

目が覚めたよ

お前らの言う通りだ……

七二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そうだな

媚びる必要なんて

何ひとつとしてないんだ

七三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おう！

強気で攻めようぜ！

七四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

では、子狸さん

お前「え？ 知らないの？」

これをお願いします

知ってて当然でしょ？

みたいな感じで

七五、管理人だよ

おう！

言ったよ

勇者「……その態度。お昼ごはん抜きね」

七六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ははっ

七七、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

ははっ

七八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ああ、でもうまく行ったな

子狸からぶんどった魔どんぐりを

勇者さんが黙々と食べはじめたぞ

勇者「……へんな味。もぐもぐ……」

妖精「ノ口くん、わたしのごはんは？」

子狸「え？ あ、うん。あるよ。はい、はちみつ」

妖精「いいから肉よこせよ、肉」

子狸「妖精さん!？」

妖精「ちっ……まあいい。今日のところはこれで我慢してやるよ」

小さじに盛られた

はちみつを

すくって食べる羽のひと

幻想的な光景である

つーか

子狸は素で忘れてると思うけど
おれたちに食事は必要ない

七九、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

豚肉を食べると

世界中のブタさんが

ちよつと幸せになるって

前にスターズから聞いたぞ

おれたちが食べたものは

魔法に変換されるんだとさ

八〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

まじで？

おれたち

そんな隠し機能があったの？

千年も生きてて知らなかった……

八一、管理人だよ

というか

お腹、空いたんですけど

八二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

大人しくしておけば

勇者さんが残りをくれると思うぞ

たぶん、また無茶な条件と引き換えだろっけどな

期待して待つてると

逆にもらえないと思うから

用心しろ

八三、管理人だよ

難しいことを言うね君は……

だったら……

八四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸は

考えることをやめた

ん？

演奏を終えた吟遊詩人が近寄ってくる

八五、空中庭園在住のとりにたらない不定形生物さん

羽のひとがいるからな

好奇心が強いんだろう

八六、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

おれか？

まあ、そうだろうな

歌人「ねえ、君」

話しかけられたのは子狸である

初対面の人間になめられるという特技が

ここで生きたな

省エネモードの子狸は

のろのろと顔を向ける

子狸「……おう」

言語も省エネ

これはひどい

歌人「ん？」

子狸「おう……」

おうおう言っている子狸に
何か思うところがあったのか
食事中の勇者さんが対応する

勇者「何か用？」

血の雨が降らないことを祈るぜ

「おれたち絶賛放置プレイ中の件に関して」 part 2（後書き）

登場人物紹介

・亡霊さん

骸骨さんと同じくレベル2の魔物。「見えるひと」と呼ばれる。怨念を宿した半透明の霊体とされているが、そんなことはなく、単に身体が霧状なだけである。

いかんせん霧状なので、物理的な攻撃は無効化できるし、障害物をほとんど無視して行動できる。

ふだんは樹海に住んでいて、迷い込んできた人間を森の外までリリースする業務に励んでいる。恐怖体験もセツトで。

注釈

・お前が古代の民ルート

あなたの正体はじつは超古代文明の末裔だったんです！ というルートだと、バウマフ家の人間は思っている。

が、じつは違う。失言を有耶無耶にする手法のひとつである。

バウマフ家の人間に「知らないの？」とか言われると、たいていの人間はプライドを刺激されて「そんなことはない」と否定する。

とくに自負心が強い人間に対しては絶大な効果を発揮するようだ。

「おれたち絶賛放置プレイ中の件に関して」 part 3

八七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

さいきん

吟遊詩人

増えてる？

なんか、あちこちの河で見かけるわ

八八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

言われてみれば

そんな気もするな

お屋形さまみたいに

都で暮らそうとする若者が増えてるのかも

八九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、なんていうか

千年祭で

いろいろとありましたからね……

人間たちも

いろいろと思うところがあったのではないかと……

九〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

うん

まあ……

共和国崩壊の影響が顕在化した面もあるんだろう

何かと不安定な時期なんです……

九一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

共和国の崩壊により

ひとつの時代が終わりを告げた

新時代の幕開けだ

世はまさにフロンティア

のちの大冒険時代である！

子狸「おう……」

吟遊詩人が手にしている

簡易食のクラッカーを

子狸が物欲しそうに見つめている……

世はまさにフロンティア

九二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

なんたるフロンティア精神……

九三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

知らない人からものをもらってはいけないと

あれほと言ったのに……

九四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

初対面……だよな？

タマさんの例もある

九五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おっ

今度は間違いないぞ

なんとというか……

線の細い子だな

勇者さんよりも

ひとつかふたつ

年かさに見える

元々は一人旅なのかな？

商団とは、たまたま行き先が一緒だったから同行してた感じだな

歌人「……欲しいのかい？」

子狸は、歌人の真意を探るように目を見つめてから

子狸「うむ……」

重々しく頷いた

勇者「お昼ごはん抜きつて言ったわ」

勇者さんの機嫌がどんどん悪くなる

ついで歌人を睨む

勇者「あなたも。わたしに無断で餌付けしないでくれる？」

子狸を餌付けするためには

勇者さんの許可がいるらしい

まあ、何を隠そう小遣い制だしね

九六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

南国の王さまはたしかに頂いたぜ

九七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

南国の王さまだと!?

ちよつと

あとでひとくち

くれ

九八、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

食うのかよ

よせよせ

シユールにも程がある

九九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

残念

これは綺麗にラッピングして宰相に贈るんだ

うちのポンポコ一家がいつもお世話になってるからな

おれたちより感謝を込めて……と

一〇〇、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おお。贈るときは言えよ

お前、家の近くから離れられないだろ？

贈り物だけ転送するのも味気ないし

おれが背筋も凍るような夏と一緒に送り届けてやるよ

一〇一、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

おっ

おれも協力するぜ

こっに見えて

ポルターガイストとかわりと得意なんだ

一〇二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ありがとう、お前ら

宰相も、きつと喜んでくれると思う

リアクションしたら負け

みたいな感じで企画を組もう

一〇三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おっ

ある意味、王都襲撃のリベンジだな

スターズが直上会戦してても
あの人びくともしてなかったからなあ……

一〇四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

宰相のスルースキルは驚嘆に値するぜ

一〇五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

まあ、いいんじゃないか？

たまには息抜きもさせてやらないとな

勇者さんに詫びる歌の人

歌人「ああ、これは申し遅れました。ボクはクリス・マツコールと言います」

勇者「誰も名乗れなんて言っていないわ。……アレシアンよ」

でも名乗る勇者さん

称号名と家名は伏せたのは警戒心の表れだろう

羽のひとに至ってはひとことも喋らず
子狸の肩の上で

胡散くさそうに見つめるだけである

このパーティー
セキュリティ高めなあ……

だが、お前らも知つての通り
我らが勇者一行には致命的な穴があります

子狸「歌、うまいね。吟遊詩人つてみんなそうなの？ あ、おれ、
ノロ・バウマフ。趣味は読書です」

勇者「嘘おつしやい」

言下に否定される子狸

ちなみに国語の成績は
ある種、惨劇の領域に達している

与しやすいと見てか

子狸を標的に定める歌の人

歌人「ありがとう。ええと、バウマフくん」

子狸「ノロでいいよ」

じつさいに与しやすいのである

歌人「わかった。ボクもクリスマスでいいよ」

ちらりと肩の上に目をやる

歌人「君は？ 妖精……だよね？」

羽のひとも仕方なく答える

妖精「リンカー・ベルです。コイツの友達というか……まあ」

子狸「友達だよね」

妖精「品格が疑われるので、そういうのはちょっと……」

子狸「そっか。たしかに、ちょっと照れるね」

妖精「意味がわからないなら、わからないって言えや」

品格

ひととしての価値。格。教養など

一〇六、管理人だよ

そのくらい

知ってます

あと国語はけっこう得意です

表現がうまくできないだけ

一〇七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

知ってて

なおその会話なら

一層ひどいだろ

一〇八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

数学とかと違って国語は

とりあえず解答欄を埋めることはできるからな

勇者さんの手前

あれこれ訊くのも悪いと思ったのか

歌の人が単刀直入に言う

歌人「もしよければ、しばらく同行させてくれないかな？ 商人さんたちから話を聞いたんだけど、この先の街で封鎖がかかってるらしくて、少し退屈になりそうなんだ」

勇者「封鎖？ 何かあったの？」

歌人「街道で魔物が出たらしいよ。しかも下位とはいえ中級らしくてね。騎士団には要請を飛ばしたそうだけど、到着はいつになるか……」

勇者「……妙ね。戦隊級ならまだしも……。まあ、わたしには関係ないわね」

歌人「それで、どうかな？」

勇者「好きになさい。街道が封鎖されているなら、どのみち街で一緒になるでしょ。わたしがとやかく言うことじゃないわ」

しかし子狸には懸念がひとつ……

子狸「じゃあ、おれは歩いて行くね。お嬢、女の子同士だし、仲良くしなくちゃだめだよ？」

勇者「なんでそうなるの。しかも上から目線……。クリスだったかしら？ あなた、馬は？」

歌人「大丈夫、連れてきてるよ。……それと、ノロくん。よく間違われるけど、ボクは男だよ。ほら、ちゃんと男物の服を着てるだろ？」

子狸「ホントだ。美少年というやつか。仲良くできるだろうか……」

納得するのか……

まあ、べつにいいけど

ときに霊界のひとたち

封鎖というのは

お前らの仕業だな？

一〇九、墓地在住の今ときめく骸骨さん（出張中

おう

そういうことだ

いや、じっさいスケジュールがやばいんだよ

レベル3のひとたちが忙しすぎて
今後の見通しがまったく立ってない

ここでおれたちが時間を稼ぐ手筈になってる

一一〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なるほど

すまないな

苦労をかける

そういえば

鬼のひとたちを見かけないな

例の中ボスの件か？

一一一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

ラストダンジョンを景気良く掘削してるぞ

いまは空のひとが現場監督してる

一一二、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

ふっ

噂に聞く黒騎士か

出番があるといいがな……

子狸は

おれたちが仕留める

――三、管理人だよ

なぜ

お前らは

真っ先におれを仕留めようとするのか……

「おれたち絶賛放置プレイ中の件に関して」 part 3 (後書き)

注釈

・戦隊級

人間たちの基準における「都市級の魔物」がレベル4にあたることはすでに述べた通りである。

ここで言う「戦隊級」というのは、騎士団を動員して辛うじて対抗できるクラスの魔物を意味し、これはレベル3〜4の魔物に相当する。

魔物の強さはけっこういい加減な部分があるため、魔物側と人間側の分類法は必ずしも一致しているわけではない。

人間たちが用いる魔物の分類は、大別して四つ。

「騎士級」「戦隊級」「都市級」「王種」。

そして「王種」を除く三つの級は、さらに「上位」と「下位」に細かく別れる。

たとえば「下位騎士級」なら「レベル1」、「上位騎士級」なら「レベル2」の魔物におおよそ当てはまるが、たまに出没する絶好調の魔物は、この分類の枠をはみ出ることが多い。

キングサイズだったりもするし。

「下位の中級」という言葉も出たが、これは民間で使われる簡単な分類。「中級」で、だいたいレベル2〜3くらいを指し示す。

なお、王種の魔物に上位、下位の区別がないのは、どのみち人間の手には負えない存在だからである。

そう、すなわちファイブスターズのことだ。

「子狸さんが容疑者として追われている」part 1

一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

騎士A「いたか？」

騎士B「いや。逃げ足の早い小僧だ……」

騎士C「いたぞ！ こつちだ！」

慌ただしく駆けていく騎士たち

一方

彼らの動向を裏路地から見つめる

怪しい人影……

子狸「……………」

お前ら

突然ですまないが

子狸さんが

容疑者として

追われている

二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

どうしてこうなった……

三、樹海在住の今ときめく亡霊さん（出張中

管理人さんは

いつだってそうだ

いつもそうやって

おれたちの予定を

いとも簡単に狂わせる……

四、管理人だよ

国家の陰謀に違いない……

五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ねーよ

ちなみに

勇者さんと歌の人は

何の問題もなく審査を通った

今頃は今日の宿でも探してることだろう

羽のひとは

子狸に驚掴みにされて運命をとみにしている

子狸「あぶないところだったね……。でも、もう大丈夫だよ」

励まそうとして微笑む子狸に

羽のひとがひとこと

妖精「解せぬ」

六、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

子狸に二点ほど尋ねたい

なぜ、おれを巻き込んだ

そして

なぜおれの危機を間一髪で救った
みたいな感じなのか

そもそも

おれは門番の騎士と

ちよろつと世間話をしてただけだぞ

七、管理人だよ

あのひとたちは、いつもそうだよ

そうやっておれに近付いてきては

さしたる理由もなく暑まで連行するんだ

でも、いままでのおれとは違うんだよ……

だいじょうぶ

羽のひとは心配しなくていい

おれが守るし！

八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

暴走してやがる……

九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

こつなると聞く耳、持たねーからなあ……

一〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

まあ

じっさい王都の騎士は子狸を見かけたら

とりあえずつかまえとけっという

妙な習慣があるからな……

条件反射みたいなもんだ

一一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中
騎士Cです

とりあえず

連中は眠らせておいたぞ

これで全部か？

一二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう

おつかれ

しかし目撃者が多すぎるな……

一人ずつフォローなんてしてられん

条件を指定して該当者の記憶をまとめて飛ばすぞ

一三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうしてくれ

例によって例のごとく

子狸の印象を薄めるだけでいい

一四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

だが、勇者さんも条件にヒットするぞ

出力を上げればレジストは突破できるとしても
記憶の整合性は怪しくなる

そうなれば

おれたちの干渉に気がつくかもしれん

一五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうだな

念のために勇者さんは対象から外しておく

まわりの人間と話は合わなくなるだろうが

彼女の性格からして世間話に興じるとも思えん

あの社交性のなさは勇者さんの弱点だな
利用できる

一六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

お前らの

その手慣れた対処っぷりが
見ていて悲しくなる……

一七、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

子狸さん

見てる？

解決したみたいですけど……

一八、管理人だよ

いや

本当の狙いは勇者さんかもしれない……！

急がなくては

一九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

謎の勢力と戦いはじめちゃった……

二〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

好きにするといよいよ、もう

必要ならおれたちが出張るし

とりあえず

羽のひと、がんばってね

一一、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

え〜……

まあ、べつにいいですけどお

どうせ行くあてもなく街をうろついて
迷子になるのがオチだろ……

お前らも余計なこと教えるなよ？

勇者さんの居場所とか

一二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

先に謝っておくわ

ごめんな

普段はあれだけど

こいつ

魔法に関しては引き出しが多いんだ……

その場でしゃがみ込んだ子狸が
指先で地面に触れる

子狸「アルダ・グノー！」

指先から放射された闇の波動が
地表を這うように波打って拡散する

子狸「！ お嬢、いま行く……！」

いらんところで、いらん知恵を發揮するなあ……

羽のひとを肩に乗せて

駆け出す子狸

二三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者さんの退魔性を逆手にとって
所在地をあぶり出したのか……？

小賢しい真似を……

二四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれたちとの鬼ごっこの成果だな……

嬉しいやら悲しいやら

二五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

どつでもいいけど

魔法の使い方が完全に悪の手先なんだよな……

こいつ

発光魔法が得意とか前に言っただけじゃなかったか？

二六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

闇魔法は実質的に光魔法と同じものだからな……

そついう考え方が

いまの人間にはないから

教官が誉めたんだよ

他に誉めるところなかったし

そのときの思い出を

子狸さんは大切にしています……

二七、住所不定のどこにでもいるようになてふてぶさん

健気なやつだ……

ちょっとは優しくしてやるか

おれ「おい。彼女は宿屋か？」

子狸「将来のことまではわからない……」

どじする

「意思の疎通が困難だ……」

あ、わかった

おれ「職業じゃねーよ。いま宿屋にいるのかって訊いてんだ」

子狸「ああ、なんだ。でも、わからないよ。地面から離れてるみたいだ」

おれ「一階にはいないってことか。じゃあ宿屋だな。よし、それなら、おれが先行して宿屋のあるじに話をつけてやる」

子狸「……そうか。宿屋のひと怪しいんだね？」

おれ「怪しいのはお前の思想だ。とにかく、余計な真似はするな。わかったか？」

子狸「そんなのだめだよ！ おれも戦う……！」

おれ「何と！？ もういい。黙っておれの言うことに従え！」

子狸「あ、はい」

おれの真心が

子狸に伝わった

感動的な瞬間であるっ

二八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

そうだね

感動的な瞬間だね

二九、空中庭園在住のとりにつまらない不定形生物さん

そうだね

感動的な瞬間だね

「子狸さんが容疑者として追われてる」 part 1 (後書き)

注釈

・闇魔法

基本的に「アルダ(遮光)」の詠唱からはじまる魔法。

「闇」とは「光がない」ことなので、実質的には光を操作する魔法の一種なのだが、そうした理屈を知らなくともイメージで何とかなってしまうのが魔法である。

良い機会なので細かく説明すると、魔法の詠唱にはひとつひとつに意味があり、イメージさえしっかりしていれば、魔法としてきちんと発動する。

たとえば以前に青いひとが使用した闇魔法は、「アルダ(遮光)」「バリエ(融解)」「ラルド(拡大)」「アバドン(崩落)」「グノ(放射)」という五つの魔法を連結したもの。

魔法使い同士の連携の問題があるため、学校では定型の詠唱を用いるよう教育するのだが、本来ならば詠唱に「こうしなければならぬ」という決まりはない。

詠唱が違っていても、イメージが同一であるなら同じ現象を引き起こせるということだ。

なお、国によって公用言語は異なるものの、詠唱に関しては統一されている。

なぜなら、現在の詠唱を人間に伝えたのは魔物だからである。

「子狸さんが容疑者として追われてる」 part 2

三〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

なんだよう……

言っとくけど、おれは子狸さんを支持するぞ

あのボクっ子は勇者さんとは別の宿を取るだろ

必然的に勇者さんは一人きりで
寂しい思いをしているに違いない

お前らは勇者さんのことが心配じゃないの？

どうして誰もついていってやらないんだよ……

三一、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そんなこと言われてもなあ……

おれ、そんなにひまじゃないのよ

なんか緑のひとを崇拜する人間の集団がいるんだよね

だもんで定期的におれの存在をアピールしておかないと
あのひと、ひとりでに神格化しそうな勢いなんだよ……

三二、かまくら在住のとりたらない不定形生物さん

あのひと、突発的な事態に弱いところあるからね……

おれはひまですけど

なんでかな？

勇者さんを尾行しようっていう発想がなかった

三三、空中庭園在住のとりたらない不定形生物さん

回線が閉じてるからな

無意識のうちに避けちゃうってのはあるかもしれん

剣士の退魔力ってのは

おれたちの存在を真っ向から否定するようなもんだからな

@

三四、海底洞窟在住のとりたらない不定形生物さん

@

いや

単純にシステムの問題だと思っぞ

これまでの勇者とは違っってことだ

勇者さんが別行動するときは羽のひとがつく

羽のひとが無理なときは

おれらのうち誰かがつくって決めておいたほうがいいんじゃないか？

三五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

@

なるほど

たしかにそうだな

わかった

そのときはおれがつくよ

同じ国に住んでたほうが

習慣とか何かと理解しやすいだろうしな

三六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おい

おい。お前ら

真面目な話をしているとこる誠にし訳ないんだが

なんだ。その秘密のサインみたいなの

ちよつと前から、なんかおかしいと思ってたけど
お前から何か企んでるだろ

三七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ぎくうっ

三八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ぎくうっ

三九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

え〜……

お前らが主犯なの？

ちよつと

ごめん

やめとくわ

聞かなかったことにしておく

四〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ちよっ……

それどういう？

四一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

庭園の、悪だくみばっかりしてるから……

四二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

待って？

おれメインなの？

違うよね？

元を正せばおれに相談してきたのお前だよね？

四三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

悲しいけど

庭園のが積極的に動く

どうしても裏があるんじゃないかって疑っちゃう面はある……

四四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

というか、じっさいに裏があるよね？

いま、あきらかに王都のを釣ろうとしたよね？

@はねーよ……

隠す気ねーもん

四五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

じゃあ、どうしろっていうんですか……

これ無理だよ

聖 剣に隠しパラメーターが設定されてる

じゃなきゃ、こんな数字にはならねーだろ……

四六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

！？

四七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

！？

王都の

お前……

謀 つ た な ?

四八、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

はいはい……

子狸が巢穴に潜つたら専用の支流に分岐するから
続きはそつちでな

各々言い訳でも考えといてくれ

さて子狸だが

先行した羽のひとを追っかけてる途中で
歌の人と合流した

どうも、あちらさんも子狸を探してたみたいだな

歌人「あ、ノ口くん」

子狸「クリスくん！ お嬢は!？」

歌人「急にいなくなるから心配したよ……って、アレイシアンさんか。彼女は、ええと、先に宿屋へ……」

子狸「くっ、先手を打たれたか……！」

歌人「なんの？ あ、ちょっと、どこへ……」

再び駆け出した子狸を追うボクっ子

子狸「おれたち、まんまとはめられたんだ。これは罠だよ！」

歌人「なんだって？ うーん……わかった。協力するよ」

しかしこの吟遊詩人

ずいぶんと協力的である

四九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸さんに対する印象が

リセットされてますからね

人当たりのいい子狸さんという

知識としての記憶だけが残った結果でしょう

五〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なんで敬語だよ

しかし、やっぱりそうか
心理操作はリスクが大きいな

次の街からは前もって手を打っておこう

子狸「ありがとう。急ごう！一刻の……あれだよ。あれがない！」

歌人「猶予？」

子狸「そう、それ。それがない。いや、猶予？ 猶予はあるよ」

歌人「あるの？ それだと、話がつながらないん、だけど」

子狸「うん？ うん。そう……なのかな。……猶予？」

歌人「……やめよう。走りながらだと、ふう、息が切れる」

ひんぱんに教官より校庭十周を命じられる子狸さん
体力には定評がある

というか歌の人は運動が苦手みたいだな

一生懸命走ってるけど遅れがちだ

子狸「見えた。あそこだ。クリスくん、二手に分かれよう」

歌人「二手といっても……あの宿屋だよな？ 出入り口はひとつしか……」

先行した羽のひとが
ちよつど宿屋から出てくる

妖精「ノロくん！」

子狸「よし！ 行くよっ……パル・チク・タク・デイグ・タク！」

歌人「街中ーっ!？」

大通りのど真ん中で
攻性魔法を撃っちゃう子狸さん

光の圧縮弾を三発
やや上向きに投射し
時間差で空中に固定

子狸「とうっ！」

跳躍

子狸「ラルド！」

着地

子狸「ラルド！ ラルド！」

拡大した圧縮弾を駆けのぼる

騎士ばりのアクションに
通りがかりの人たちが歓声を上げる

声援に後押しされて

子狸さんが二階の窓に向かって最後の大ジャンプ

子狸「デイグ！」

用済みとなった足場を目標の窓へと再度射出

子狸「アバドン！」

窓に突き刺さった圧縮弾を起点に
重力場を発生

ぐしゃりと潰れた窓から

子狸さんがエントリーしました

五二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

これは見事な特訓の成果

五二、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

いいね

無駄にがんばってる時の子狸さんは
輝いてるぜ

五三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

妖精「玄関から入れやあああああ！」

素で絶叫する羽のひとに

歌の人はちよつと引き気味

一方その頃

子狸は……

子狸「おじよつ！？」

勇者「……………」

お着替え中の勇者さんと

ご対面である

勇者さんの名譽のために詳細は伏せるが
半裸である

さて

骨のひと

今後の予定はどうなってる？

差し支えがなければ教えて欲しい

五四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

そうだな

この先の街道が封鎖されてるって話だが

常駐の騎士には対処できない規模で動いてるのか？

五五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おう

ちよつとした小細工をさせてもらったぜ

街道の途中

森を少し行ったところに

いまは誰も住んでない

わりと大きな屋敷があるんだよ

街道の上空あたりを見てくれ

不自然に滞空してる雷雲があるだろ？

その真下な

見える？

いま、手を振ってるのがおれ

となりで

なんか肉体の限界に挑んでる透き通ったのが
いわゆる一種のメノウパルとか呼ばれてるひと

おれたち

この館を拠点に

三日前から

ちらちらと街道に出没しては

うろろろして

存在をアピールしてるんだ

五六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

不覚にも吹いたじゃねーか……

見えるひと、なにやってんだ

五七、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

さいきん、おれ拳法に目覚めたんだよ

健康にもいいって聞くしな

ゆっくり動いてるように見えて

案外きついんだぜ？

いくら不老不死だからってさ
いや

不老不死だからこそ

身体には気を遣わねーとな……

波ーっ！

五八、管理人だよ

たすけ

五九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

はーっ！ じゃねーよ（笑）

その身体とやらは

あなた

どこにあるんですか

六〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

いや

いいよ！

感動したわ

拳法つっーのか？

見えるひと

今度、おれにもそれ教えてくれ

六一、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中）

おう。いいぜ

伝授してやるよ

手取り足取り、な……

六一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ちよっ

王都の

おれ

まだ何も言つて

ぎゃーっ！

六三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

かまくらの〜！

六四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

いいやつだった……

六五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

忘れないよ……

「子狸さんが容疑者として追われてる」 part 2 (後書き)

注釈

・メノウパール

亡霊さんを、人間たちはこう呼ぶ。

「メノ」というのは魔物限定の指示語であり、「ウ」がついて「ウするひと（強調性は低め）」、「パール」は詠唱にも使われる「発光」という意味。

意識で「人魂」。意味合いとしては「ザ・ゴースト」といったところか。

同様に、青いひとは「メノウポーラ」、鬼のひとは「メノウデイン」と呼ばれる。

「ポーラ」は「青」、「デイン」は「鬼（悪魔）」をそれぞれ意味する。

これらは古代言語であるため、詠唱と同じく各国に共通する便利な呼称なのだが、魔物たち本人はあまり気に入っていないようで、めったに使わない。

「子狸さんが容疑者として追われてる」 part 3

六六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

さて。ところ変わって歌人の部屋である

宿屋の廊下に打ち捨てられていた子狸から
事情を聞いた歌人の反応がこちら

歌人「……いや、それは君が悪いよ」

子狸「お、おれはお嬢が心配で、それで……！」

てつきり別の宿を取るかと思っただけ
勇者さんは宿屋のグレードを落としたみたいだな

おそらく子狸を貴族と接触させるのは得策じゃないと考えたんだ
ろう

歌人「……ふむ。彼女、貴族なんだろ？」

子狸「いや。ひとは誰しもが運命の奴隷なんだよ。でも本当の意味
で屈しちやいけないんだ……どう？」

歌人「どうと言われても……。いや、見てればわかるよ。くわしく
聞いてなかったけど、君はお付きの人じゃないのかな？」

子狸「それはお嬢に聞いてみないとわからないな……」

お付きの人という意味がわからなかったらしい

歌人「違うんだね。どうして二人で旅してるんだい？ ああ、妖精の子も含めて三人か」

子狸「なんでだっけ……世直しの旅？ なんかそんな感じだったよ
うな……」

もはや基本事項すら忘却のかなたである

混沌とした会話を続けるふたり

ただ座って話すのもなんだからと

歌の人が馬の世話でもしながらどうかと子狸を誘う

はじめての友達の獲得に子狸は積極的である。頷く

子狸「おれ、芸術の授業が苦手なんだ。なにかコツとかあるのかな？」

歌人「月並みだけど、努力だね。テーマを決めて取り組むといいんじゃないかな」

子狸「でも、先生は才能がないから諦めろって……自分も諦めるからと……」

歌人「ずいぶんとはつきり物を言う人だね……」

部屋を出て廊下を歩くふたり

意外と相性がいいのか？
何気に会話が弾んでいる

六七、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

一方その頃

子狸の魔の手を逃れたおれは
勇者さんと一緒である

おれ「あの〜……まだ怒ってます?」

勇者さんは

部屋にひとつある姿見の鏡の前で
自分の髪をいじっている

ちょうどベッドに腰掛けているおれに背を向ける格好だ

勇者「……わたしの身体、どこか変なのかしら」

おれ「え?」

なにを言ってるんだ、この人は?

勇者「男の子って、女の子の肌を見たら喜ぶものなんじゃないの?
すごい勢いで目を逸らされたわ」

おれ「はあ……。いや、嬉しいんですけど……人の着替えをま
じまじと凝視したら、それは単なる変質者なのでは……?」

勇者「そうなの？ よくわからないわ。わたし、感情が希薄だから、いまいちぴんと来ないの。きっと、恋なんて一生しないでしょうね」

子狸の恋は実らないようだ

ざまあみる

勇者「マナーの問題だから、いちおうしつけはしたけれど。……だから、怒ってないわ。見栄えのする容姿でもないし、わざと狙ったとも思えないもの」

これがふつうの会話ってもんだよな

子狸と話してると

たまに宇宙人とコンタクトしてるような錯覚を覚えるぜ……

おれ「いえいえ、リシアさんはお綺麗ですよ。ノロくんも満更じやないと思いますけどっ」

勇者「たいていの人間は、理由もなくわたしと関わるのを避けるわ。それがふつうよ。でも、あの子は違うみたいね。それが、理由のひとつよ」

おれ「はい？」

理由とはなんぞや

勇者「わたしが、あの子と一緒に旅をする理由よ。不思議に思ってたんでしょ？ あなた、恩人だと言ってたわりには、あの子に心を許していないようだから」

鋭い！ この勇者、鋭いぞ……

勇者「それとも、作り話だったのかしら？」

どきりとすることを言って振り返る勇者さん
頭の後ろでひとつにくくった髪が揺れた……

これは……まずいか？

お前ら

どうしたらいい？

場合によっては

おれの冒険がここで終わる

慎重に頼むぞ

六八、管理人だよ

散歩にでも誘えばいいんじゃないかな？

三歩くらい歩けば、たいていのことは忘れるよ

六九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

……忘れちゃうの？

七〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

却下

はい次

七一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ある程度、正直に打ち明けても問題ないと思うぞ

子狸の名誉のために泥をかぶったけど

罨に掛かってたのは子狸のほうで

ちよつと間抜けなところがあるから

警戒してたつてとこだな

七二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

そうだな

へたに否定しないほうがいいと思う

かといって、いきなり肯定するのもわざとらしい

いったん少し慌てた感じで子狸をかばってみようか

お前「うそじゃないですよ！　じ、実話ですっ……」

深く追及されたら海底のの案を採用すればいい

羽のひと。お前の演技力に期待するぞ……

七三、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

さすがは子狸処理班だな

レスポンスが充実してるぜ……

光れ

おれの演技力！

言っただぞ

勇者「……まあ、どちらでも構わないわ」

構わないのかよ……

勇者「リン。あなた、あれ直せる？」

子狸によって見るも無惨に破壊された窓を指差す勇者さん

ここは有用性をアピールしておくか？

いや

しかし

それもあざといような……

どう思うっ？

七四、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

畏だ

お前「おっと、その手には乗りませんよ！ ふははは！」

格調高くなっ

七五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

高くなっ

じゃねーよ

それ自白してるから

悪いな、羽のひと。無視してくれ

おれたちは

勇者さんのキャラクターがつかめてないから

お前らに任せる

七六、管理人だよ

おれが行こうか？

七七、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

また次の機会に頼むわ

はい次

七八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

深く考えなくていいと思うぞ

先のことを見据えて設定に忠実に
できることはできる、できないことはできないと
きっぱり示したほうがいい

それで疑われるなら
そのときは仕方ないだろ

七九、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

おう！

でも、おれの設定ってどんなでしたっけ？

人間のせいどころどころ変わるから
やっていいことと悪いことの境界線が
どんどん曖昧になる……

八〇、かまくら在住のとりにならない不定形生物さん

ん……

ちよい待ち

キャラ属性シート開く

開いた

羽のひとは補助特化型のレベル4だな

ちよつとした念動力と

対象指定の逆算能力あり

人間がどう考えてるかは知らないけど

完璧にレベル3の範疇を超えてる

子狸が使った魔法は、いいところレベル2だから

余裕で復元できる

八一、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

さすがおれと言わざるを得ない……

お前らサンクス

おれ「派手にやりましたね。でも、このくらいなら直せますよ！
任せて下さいっ」

勇者「そう。じゃあ、お願い。……あなたは役に立つから、好きよ。役に立たない人間は嫌い。下品な人間もね」

おれ「……ノロくん、役に立ってます？」

おれ

子狸と同格に見られるの

激しく抵抗があるんだが……

勇者「貴族と平民は違うわ。もちろん妖精と人間も。思ったよりも魔法を使えるみたいだし、……そうね、わたし、嬉しいのかもしれない。少し浮かれてる……。良い下僕を持って、わたしは幸せだわ」

小さな幸せを噛みしめる勇者さん

無表情だけど

つーか、笑ってるの見たことない

おれ「クリスさんのことなんですけど」

窓を修復しながらちよいと尋ねてみる、おれ

おれ「連れて行くんですか？ 吟遊詩人の歌声は魔物たちを鎮める効果があると……」

歌ってたら、つい聴いちゃうもんな

勇者「言えばついてくるかもしれないけど、そのつもりはないわ。信用もしてない」

おれ「身分は内緒ってことですね？ わかりました。街にはしばらく滞在するんですか？」

勇者「明日には出る予定よ」

おれ「え？ でも、街道が封鎖されてるって……」

勇者「いまのところはつきりしてるのが、魔物たちには主謀者らしきものがいて、わたしのことを監視してるかもしれないということ」

おお

見事に現状を言い当てている

勇者「わたしを待ち伏せするのなら、街道を封鎖するような騒ぎを起こすのは不自然だわ。魔物は馬鹿じゃない……。おそらく、わたしたちが思っているよりもずっと」

褒められた〜

勇者「理由はいくつか考えられるけど、仮にわたしを意識しての行動だとしたら、彼らの目的は時間稼ぎなのかも。わたしに急がれると困る事情があるんだわ……」

おい。読まれてる

八二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

なんなの、この勇者

子狸に見習わせたい

しかし……

ちっ

第一プランは破棄だな……

第二プランに移行する

八三、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

噴破ッ！

八四、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

聞けよ！

クルミ割ってねーでよお！

ボケ放題ですかこんにゃろー！

八五、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

まあまあ。喧嘩しなさんな……

とりあえず

流れからいって

勇者一行をお前らの屋敷にご招待するつもりなのだと察するが？

子狸「黒雲号！ 待たせてごめんな？ よしよし……」

歌人「そんな名前なんだ……」

騎士「ちよつと、君。このあたりで、白昼堂々街中で攻撃魔法を撃つた馬鹿野郎を捜しているんだが……」

あ、お勤めご苦労さまです

さて

どうなんだ？

聞いている通り、勇者さんは一筋縄ではいかないぞ

八六、管理人だよ

おれも一筋縄じゃないし！

おれ「そいつなら、あつちに走って逃げましたよ！」

騎士「……ほう。捜査協力に感謝する。では、続きは署で聞こうか」

おれ「え、感謝状とかもらえるんですか？ それはちよつと気が引けるなあ……」

騎士「なに、謙遜することはない。……いい宿だね。でも、今夜はもつと素敵な宿に泊まれるよ。さ、こつちへ……」

子狸「あ、はい……」

ちよつと行つてきます

八七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

いってらっしゃい

八八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いってらっしゃい

八九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

そりゃあ静止画の一つや二つは撮られてるわな……

「子狸さんが容疑者として追われてる」 part 3 (後書き)

注釈

・キャラ属性シート

魔物たちの「設定上の能力」を事細かに記したデータファイル。基本的に魔物たちは成層圏内において万能の存在であるが、人間たちにそうと悟られないよう能力の上限値を自分たちで相談して決めている。それが彼らにとっての開放レベルである。

そして、開放レベルを超えない範囲で、たとえば青いひとなら「魔法は使えない」「使ったとしてもバレないようにやる」等の種族の特徴を定めている。

シナリオの進行上、魔物が人間の味方をするケースもまれにあるため、そうした場合にこの「属性シート」を参考にすると良い。

・逆算能力

人間が言うところの「治癒魔法」の総称にあたり、壊れたものを直したり、傷を癒したりできる。

なぜ「逆算」なのかというと、この世界では医療技術が発展していないため、人体の仕組み等がほとんど解明されておらず、治療に際しイメージを失敗すると医療事故が起きかねない。

そこで魔物たちは、「魔法で引き起こされた事象をなかったことにする魔法」を人類に流布した。これが逆算能力である。

厳密には、魔物たちが恒常的に展開している「逆算魔法」を通じて行使される。

この「逆算魔法」自体は最大開放の「レベル9」にあたるが、じ

つさいに人間が使える「治癒魔法（逆算魔法からの転用）」はレベル3が限度である。

そして、人間たちは誤解しているが、たとえば「レベル3の魔法で負ったダメージ」は「レベル3以上の逆算能力」でしかキャンセルできない。

「河の底でもっと書くおれたち」

五一、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

だいたいだな……

おれは、剣士という存在それそのものが気に入らない

手を伸ばせばすぐそこにあるんだ

なのに、なぜ受け入れようとしらない？

五二、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵

うんうん……

そうだね。わかるよ

うん、わかる

五三、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

お前の言ってることはもっともだよ。うん

おれたちは、お前の味方だぞ

さ、仕事しようか

五四、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

いいや、お前らは何もわかってない

いまこうしている間にもだよ？

おれは一部の人間に神さまか何かと勘違いされて
お祈りされてるわけさ

その、お祈りされてるおれがだよ？

さも大儀そうに寝そべって

たまにサービスで唸り声を上げたり

意味ありげに流し目を送ったりしてる

このおれがだよ？

じっさいに何をやってるかといえばっ………！

五五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なるほどな………

ここが反乱分子どもの巣か………

五六、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

！？

五七、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

！？

五八、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

よおし！

今日も張り切って魔物ろつな

お前ら！

びびれ人間ども！

はっはっは

五九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

こんばんは（にこっ

六〇、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

てめーおれを売ったな！？

あ、違つんですよ王都さん！

こいつです！

この、いつもいる青いのが嫌がるおれに無理矢理っ……………！

六一、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

おれは何もしてません

緑のがこそそと何かやっていたようですが
おれは一切関与してません

六二、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

おれに至ってはアリバイがあります

中ボスさんのメンテナンスをずっとしてました

え？

むしろ緑のひと、何かしてたの？

六三、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

まあ待てお前ら

少しおちつこうじゃないか

おれたち、言ってみれば運命共同体だろ

いや、おれはもちろん

お前らのことを売ったりはしないよ

仲間だもんな

六四、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

だまれ！

このトカゲ野郎！

なにか仲間だ！

おれはじっさいに何もしてねーだろうがっ

六五、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

お前ら

もついい

もついいんだ……

全部おれが悪いんだ……

お前らが泥をかぶる必要なんて
ないさ

六六、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

魂胆が丸見えなんだよお！

ひとりだけ心証を良くしようだったって
そっは問屋がおるさねーぞ！

六七、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

醜い………！

なんとという醜い罪のなすりつけあいなのか………！

性根が腐ってやがるっ………

六八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ログを流しても

無駄だと言っておく

すべて読ませてもらった

六九、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

あわわわわわ………

七〇、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

あわわわわわ………

七一、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

ちっ……

だが、おれたちを責めるのは
お門違いってもんだぜ

いや、そもそも……

お前だ

あの小娘に力を与えたのも
それを放置したのも
すべてな

意図的に勇者を生み出したんだ
違うか？

何を企んでる？

お屋形さまの指示か？

七二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

王都の、そうなのか？

それならそうと……

七三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや、違う

お屋形さまはたぶん

というか絶対に勘付いているだろうが

直接おれに何かしろと言ったわけじゃない

結論から言うと

アリア家とおれの思惑が一致したということだ

七四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

やはりか……

どこまでだ？

アリア家はどこまで知ってる？

七五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

少なくともアリア家の現当主は

おれたちをコントロールしてる人間がいることに気が付いてる

そして誰がそうなのかも

もう知ってる

つまり実の娘をエサに

その人間を特定したんだ

七六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ、なるほど

そのことを勇者さんは自覚してるのか？

七七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者さんは

正直わからん

怪しいといえば怪しいんだが……

子狸が絡むと

何が正解で何が間違ってるのか

さっぱりわからなくなる

まあ、それはいいんだ

知っていようと知ってしまいと

そんなことはどうでもいい

お前らは

勇者さんを味方に引き入れるつもりだったみたいだが

それはやめておけ

七八、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

いや、最初はそんなつもりじゃなかったんだが
子狸の恋を応援してやるうと思っただけ……

だけど、なんで？

七九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

それなんだが

これを見せてくれ

八〇、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

！

勇者さんのサンプルじゃねーか！
でかした！

八一、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

さすが悪どい！

この青いひと悪どい！

八二、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

よっ、悪の権化！

ひゅーひゅー！

魔物！ 魔物！

八三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おれたち魔物！

お前が魔物！

いえーい！

八四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ぶっ飛ばされたいのか？

そうじゃなくて……

おれの触手が消滅してるとこのデータ

コマ送りで追ってくれ

わかるか？

数値が跳ね上がってるんだよ

んで、跳ね上がる直前に

二番回線とバイパスしてる

王都の、これはなんだ？

お前、聖 剣に何を仕込んだ？

八五、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

ああ、それは別々の現象だよ

おれが聖 剣に仕込んだのは
二番回線のバイパスだけだ

まあ、彼女が剣士で

魔法を使えば使うほど中途半端な存在になることは
あらかじめわかってたからな

その予防策だ

数値が跳ね上がってるのは
アリア家の特性だろうな

八六、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

退魔力を意識的に強化できるってのか！？

いやいや、ありえんだろ？

それってつまり

おれがやろうととしてできなかったことを
人間が自力でやるってことだぞ

八七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そこだよ

早い話、おれはアリア家に興味がある

退魔力を強化つてのはいいんだ
きつと副産物みたいなものだろう

おれはむしろ連中の感情制御に関心があるね
制御というよりは凍結に近い

おれたちは人間の意識を読む
アリア家の人間は、おれたちの天敵なのかもしれない……

だから、彼女が山腹のと接触したとき
これはチャンスだと思っただ

お前らに黙って勝手に事を進めたのは
たしかにおれが悪かった

けど、お前ら子狸に甘いからな……

アリア家が、もしも本当におれたちの天敵だとしたら
子狸の身に危険が及ぶ可能性もある

八八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、子狸に甘いのはお前だろ……

なんか怪しい

お前、他にも何か隠してるだろ

八九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

は？

なに言ってるの？

勘違いしないでよね

おれはべつに子狸がどうなるうと
知ったことじゃないよ

開祖の嫁と約束したからな
仕方なくついてるだけだ

九〇、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

子狸の布団みたいになってるお前が言っても
説得力がないんだが……

九一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

はあ？

そんなこと言っただって仕方ねーだろ

子狸が風邪ひいたらどうすんだよ

九二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

なんの反論にもなってねーし

だからこつちもお前に内緒で

事を進めたんだよ……

まあ、結果的に

勇者さんの退魔性は心配いらないうてことなのか？

九三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

それは彼女しだいだな

彼女が

もし本当の意味で勇者になったなら

そのときは

完全に退魔性を失うことになる

まあ、聖 剣を酷使しない限りは

だいじょうぶだろう

九四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

それって真人間になったらってこと？

ふつうに聖 剣を使うぶんには

反動の大半が二番回路に流れ込むから

三番には影響が少ないのか……

その場で組んだ構成じゃねーな……

だいぶ前から計画してたのか

九五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう

遅かれ早かれ

アリア家の人間が絡んでくるのはわかってた

共和国の件しかり

あそこのうちには

かなりディープな情報が渡ってるだろうからな

医療に関する魔法が封印されてることに気付いたなら

おれたちが、わざと人間に負けてると推測するのは

さして難しくないはずだ

九六、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

お前らが河の底で
うだうだ言ってる
一方その頃

歌人から事情を聞いた勇者さんは
権力にもものを言わせて
捕獲された子狸を釈放させるのであった……

九七、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

真人間への道は険しいね……

九八、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

でも子狸さんなら……

子狸さんなら

きつとやってくれる……

「河の底でもっと蠢くおれたち」（後書き）

注釈

・魔物る

動詞。いかにも魔物っぽい行動をとること。

発言者の火トカゲさん（緑のひと）がいちばん最近に魔物つたのは、「生贄 大作戦」と呼ばれる、ふもとの村に生贄を要求してみた事件である。

緑のひとの人気を妬んだ巨人兵さんが発案し、言葉巧みに緑のひとを陥れようとしたのが発端である。

だが、予想に反して誰も助けに来なかったため（そもそもレベル5の魔物に人間が立ち向かってもどうにもならない）、子狸が緊急出勤する事態に。

誰も子狸の働きには期待していなかったが、案の定つかつな発言を頻発したため、最終的には緑のひとの名を騙って悪事を働いていた子狸デーモン（新種）が、本物の緑のひとの手で成敗されるといふ結末を迎えた。

誰も何も得ることのない悲しい事件であった。

「子狸が勇者さんと喧嘩したみたいですよ」 part 1

一、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

お前ら

おはようございます

二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

眠いし

三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

不健康な生活、送ってるから……

おれは眠くないし

小鳥たちがさえずってる

四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おれんち

超 吹雪

寝たら死にそう……

五、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

問題児しかいないとか……

火口のと庭園のはどうした？

六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

問題児……

え

おれも？

庭園のは

子狸バスター（仮）の起動シークエンスをチェックしてる

火口のは知らん

かまくらのが知ってるんじゃない？

火口のと仲いいし

七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

べつに仲良くねーし

あいつならスターズの河に残留してるぞ

緑のひとと一緒に

勇者さんのサンプルを細かく解析するんだとさ

八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おはよう

いい朝だな

雲間から差し込む朝日が美しいです

ところで……

おい

透き通ったの

お前、だいじょうぶか？

なんか成仏しかけてるけど

九、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

気にするな

朝もやに侵食されて

おれという存在が希薄になっただけだ

一〇、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

いや、気にするよ
それは気にしていいレベル

一、管理人だよ

お前ら

おはよう

さっそくだけど

寝起きドッキリしようぜ

一二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

第一声が

それかよ

ドッキリもなにも

同じ部屋だろーが

ん？

歌人に仕掛けるってこと？

勇者さんじゃなくて？

一三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おはよう

勇者さんは
もう起きてる

着替えも済ませて一階の食堂へ

なんでも朝も早よからミーティングするらしいぞ
たぶん本日のスケジュールを話し合うんだろう

子狸「おれ、クリスくんを起こしてくる」

勇者「べつにマッコールはいなくてもいいけど。……まあいいわ。
わたし、下の食堂にいるから」

子狸「今日は髪を結ばないの？ なんならおれが結びますけど」

妖精「しね」

子狸「その肩でぼそつと言つものやめて？」

勇者「下の食堂にいるから」

子狸「おう」

勇者「返事は、はい」

子狸「はい」

寝起きで礼儀を正される子狸

子狸の返事を聞いてひとつ頷いた勇者さんは

羽のひとをともなって部屋をあとにしたのであった……

一四、管理人だよ

違うんだよ

おれは、結んでる髪が好きというより
結んでる髪をほどこいてるのを見ると
どきどきするんだ

一五、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

誰が性癖を語れと言った
いいから、さっさと歌の人を起こしてきやがりなさい

一六、管理人だよ

よし。わかった

おれが先行する
お前らはおれのあとに続け

一七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

続くつもりはない

だが、ふつうに考えて鍵が閉まってるだろ
合鍵か何か持ってるのか？

一八、管理人だよ

そうやって

お前らはすぐに賢いふりをする

おれが、そんなへまをするとでも？

一九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おお……

秘策あり？

なんだなんだ

今日の子狸さんはひとあじ違うな

悪いものでも食べたか？

二〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

歌人の部屋の前に到着

不敵な笑みを浮かべた子狸さんがドアノブに手を掛ける

子狸「……………」

当然、鍵は閉まってる

はたして子狸の秘策とは……！？

子狸「クリスくん。おれです。開けて下さい」

正解は

中の人に開けてもらう
でした

冴えてる

今日の子狸さん

冴えてるぞ……！

二二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

うむ。冴えてるな

ドッキリという自分から言い出したことを忘れていなければ
より完璧だった……

二二、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

なにをもってへまなどしないと言い張ったのか気になるところだ
が……

ちなみに、おれは勇者さんサイドね

勇者「はちみつ、いる？」

おれ「頂きます。わあ、なんだかとってもVIP待遇ですねっ」

勇者「いろいろと便宜を図ってくれてるみたい。ノロのお世話もしてくれてるって言うし」

おれ「え〜……。ノロくんのお世話は素人には無理ですよ」

勇者「……馬のほうよ。同じ名前なの」

おれ「!?!」

勇者「古代言語からとつたらしいんだけど……珍しい名前よね。どいう意味なのかしら？ あなた知ってる？」

おれ「ええと。はい、いちおう……。『はじまり』とかそういう意味だったと思います……」

まあ、終わりでもあるんだが……

子狸よ

お前、生き別れになった兄弟とかいないよな？

二三、管理人だよ

え？

なんなの突然……

いないけど

歌人「なっ、なにか？ ノロくん？ ちょっと、待って……」

ん？

寝てたのかな？

クリスくんは声が高いから

ドア越しに聞くと女の子と話してるみたいで

ちよつと焦るよ

二四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

寝てたら、もう少し反応に間があるだろ

着替え中だったとかじゃねーの？

というか、お前

クラスの女子とはふつうに喋ってるじゃないか

二五、管理人だよ

クラスメイトは、ぜんぜん別だよ

小さい頃からずっと一緒なんだから

さいきんは、なんでか知らないけど苗字で呼ばれるから
なんか距離を感じる……

みんな元気にしてるかな……

おっと

いまはクリスマスなんだ

おれ「気にしなくていいよ？ 開けておくれ」

歌人「ボクは気にするよ！ なに？ どうしたの、こんなに朝早く」

おれ「寝起きドッキリしようかと思って」

歌人「油断も隙もないな！ なんなの、もぐ。いいよ、入って」

おれ「お邪魔しまっま」

歌人「しまっま？」

おれ入場

おれ「いや、違う。違った。お嬢が呼んでる」

歌人「待って。おちっこう。どうしてそう思うの？」

どうして？

どうしてとはなんだ

お前ら会議のお時間です

二六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

どうもごつも

昨日お前が暴走した挙句、騎士に捕獲されたから
またぞろ勘違いしてるんじゃないかと心配されてるんだよ

二七、管理人だよ

そっか

それなら心配いらないね

おれ「だいじょうぶ。おれとお嬢は心でつながってるんだ。なんにも
心配はいらない……」

歌人「だめっばいなあ……。ベルさんは一緒じゃないの？」

おれ「あのひとは、とても心の優しい妖精さんなんだよ」

二八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

待て

虚偽は認めんぞ

訂正する

子狸「あのひとは、おれとお嬢の仲を引き裂こうとする悪魔だよ」

二九、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

ほう……

三〇、管理人だよ

誤解です

おれはただ

小悪魔みたいに

可愛い存在だと

おれ「可愛いよね、リンちゃん」

歌人「いま、たしかに悪魔と……」

おれ「おれの墮天使だよ」

よくわからなくなってきた……

羽のひとは

おれにとって

なんなの？

三一、住所不定のどこにでもいるようなてぶてぶさん

お前

いつかくるす(てぶてぶ)

三二、管理人だよ

あわわわわわ……

三三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

羽のひとと勇者さんが

一緒にいるらしいことを察した歌の人

それなら

そうひどいことにはなるまいと同伴を承諾し

子狸とともに一階へ

食堂にて両者と合流

歌人「おはようございます」

妖精「おはようございます」

羽のひと

ぱたぱたと子狸の肩へ移動

きらめく燐粉

ほとばしる闘気

子狸「……………」

無言のプレッシャーにおびえる子狸

勇者「おはよう。席はとつてあるから、二人とも座つて頂戴」

歌人「ありがとう。では失礼して」

子狸「……失礼します」

ミーティング開始

勇者「食べながら話すのは苦手だから、先に用件を言つわ」

歌人「今日の予定ですか？」

子狸「お嬢は食べ方が綺麗だよね」

勇者「そうね。まず、常駐の騎士に教えてもらったのだけれど、街道に出没する魔物は二種。メノツドブルとメノウバル」

歌人「そうなんですか？」

子狸「うん。食べるの遅いけど」

おい

おい。子狸

ミーティングに参加しなさい

勇者「あなたが聞いていた話とは違うの？」

歌人「ええ。商人たちが言うには、駐在の騎士が黒衣の魔物を撃退したけど、だいぶ苦戦したと。街道のほど近くに発生源があるんじ

やないかという話でした」

子狸「だいぶ違うね。別件に違いない……」

勇者「はちみつ、いる？」

子狸「え？ おれ？」

勇者「あげる。はい」

子狸「とってもクリーミー……」

妖精「クリーミーでもねーだろ」

ついでに、おれたちもミーティングしますかね

「子狸が勇者さんと喧嘩したみたいです」part1（後書き）

登場人物紹介

・ノロ（馬）

勇者さんの愛馬にして、子狸と同じ名を持つお馬さん。

子狸により「黒雲号」と命名されるも、べつに黒くない。

青いひとの証言によれば、ロバと似ているらしい。子狸に懐いている。

とくべつ俊足というわけでもないのだが、じつは非常に賢いため重宝されている。

マイペースな面もあり、めったなことでは走らない。

子狸の名前でもある「ノロ」は「はじまり」と「終わり」を意味する旧古代言語であり、（近）古代言語においては数字の「0」を意味した。

王国暦1002年現在における数字の「ノラ（零）」は、その名残りとされる。

なお、作中に登場することはないが、「ノロ」は「詠唱破棄」のスペルでもある。

注釈

・メノッドブル

骨のひとを、人間はこう呼ぶ。

「ブル」は「骨」の意であり、「メノ」に「ッド」がつくことで「くするひと」の意が強調される。

視覚的な印象が強い魔物（あるいは通常より巨大な個体）は「メノツド」呼ばれることが多い。

なお、「ツド」による強調は古代言語の用法からは外れており、「エメノウ」とするのがじつは正しい。

「ツド」の語源は不明。気付けば「メノツド」と呼ばれるようになっていて、これに該当する魔物たちは「え？ おれ？」と正直びびった。

人間はあなどれない……。

「子狸が勇者さんと喧嘩したみたいです」 part 2

三四、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

勇者「商人たちの協力関係は上辺だけだから、情報が散逸しやすいの。彼らにとっては貴族も平民も等しくお客さまだけれど、おなじ商人に関してはその限りではないということね」

歌人「うそ、だったんでしょか……？」

勇者「そうとも限らないわ。少なくとも、発生源があるという話には信憑性がある……。街というのは、ただそこにあればいいというものではないから。流通が滞れば、損をする一方なのよ。街道の封鎖に踏み切るなら、最低でも領主の許可が要るわ。ふつうなら、そんな許可は出さない。この街が置かれた状況は、ふつうではないということね」

おれ「でも、人の命が懸かってるわけですし……」

勇者「領主の仕事は人命を救うことではないわ。お金を稼ぐことよ」

王国の闇を見た

さて、ミーティングね

というか、お前ら

まだ話し合いしてなかったのか？

三五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

仕方ないだろあ？

ここさいきんの子狸さんは

夜になると活性化するんだよ

鬼教官の放課後レッスンから

解放されたからな……

三六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸を野に放つべきじゃなかったんだよ……

三七、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

でも、お前ら

昨夜、釈放された子狸さんと一緒に

眠った街を無意味に疾走してましたよね？

そのへん、どうなの？

三八、管理人だよ

誤解してるみたいだけど……

この世に無駄なことなんて

なにひとつとしてないんだよ？

三九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お前は、おとなしく

はちみつ食べてなさい

いやあ

なんかこいつがなんの前触れもなく

おれは弱くなったかもしれない……とか言い出すからさあ

じゃあ特訓しようぜ

っという

四〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

どれだけエネルギーが有り余ってるんだよ……

尾行してるおれの身にもなって下さいよ……

子狸「お金か……。リンちゃんにはちよつと難しい話かな？」

妖精「お前がな。あと、ちゃん付けやめろ。悪寒がする」

子狸「！ お、おれのこと呼び捨てでいいよ」

妖精「だからといって呼び捨てにしるってことでもねーよ」

子狸「まったくもう、口だけは達者なんだから……」

妖精「うまく切り返した覚えもないんだがっ」

はいはい……

仲がいいねお前ら

で、骨のひと

勇者さんを

お前らが出張サービスしてるお化け屋敷に誘き寄せるとっていつのはわかった

具体的なプランはあるのか？

四一、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

ない

と言ったらどうする？

四二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

どうする？

じゃねーよ

あるからね？

お前はそうやってボケてればラクかもしれないけど

じゃあ、おれもボケるよ？
それでもいいの？

四三、管理人だよ

お前らのボケは
ときとしてさばききれない

四四、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ツッコミなめんな！？

この天然狸がっ

四五、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おちつけ

絶滅危惧種みたいになってる

四六、管理人だよ

おれは養殖です

四六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

あゝ！

もう……

あゝ！

ふう

すまない

少し取り乱した

今後のスケジュールだが

とりあえず

子狸を人質にとる予定だ

四七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おい

かぶってる

それ、鬼のひとがもうやった

四八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

二番煎じは避けたいところだが……

他に手はないのか？

四九、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

いやいや

甘く見ないでほしい

おれらが配置についてから

優に四十時間は経過してるんだぜ？

お前らの活躍は

ひっそりと見守らせてもらいましたよ

勇者さんが

アリア家の人間だつてのはわかった

けど、だからって血も涙もない人間だと決め付けるのは
いささか早計じゃないか？

じっさいに

捕獲された子狸を助けに行ってる

いまいちど

試してみる価値はあると思うんだ

どっつ？

五〇、管理人だよ

勇者さんは優しい子だよ

五一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸よ

お前は、だまされてるんだよ

ちよつと優しくされたからつて

勘違いしてはいかん

彼女の剣術を見ただろ？

あれは

才能でも技術でもない

体質だよ

アリア家の血だ

たぶん感情の基盤構造が他の人間とは違う

お前らバウマフ家の人間とは

決して相容れない存在だ

五一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれもそう思うぞ

勇者「さすがに魔物たちの意図するところはわからないけれど、わたしたちは訳あって先を急ぐの。だから、今日中に街を発つわ。あなたとは、ここで別れね」

平気な顔して嘘をつくしな

歌人「？ それはたしかに残念ですが……。別のルートから行くんですか？」

勇者「駐在の騎士とは話をつけてあるの。変装して、こっそり出してもらおうつもりよ」

おや？

子狸の様子が……

子狸「ひと知れず、魔物を退治するんだね！ さすがお嬢だ」

勇者「ばか言わないで」

子狸「え？」

勇者「魔物に遭遇したら、逃げるのよ。馬の足なら振りきれるわ」

子狸「え？ だって、でも……」

勇者「あなたは、余計なことを考えてないで、わたしの命令に従ってればいいの。きつとうまく行くわ」

子狸「そんなの違うよー！」

いつかは、こうなると思ってたんだよな……

椅子を蹴って立ち上がる子狸

いつになく真剣な表情である

子狸「お嬢は、勇者だろ？　勇者は、困ってるひとを見捨てていたりなんかしない」

あ、バラしちゃった……

歌人「勇者……？」

啞然としている歌の人を無視して

勇者さんが

即座に起動した聖　剣を子狸の首元に突きつける

おっと無駄だぜ

言つまでもなく子狸には守護の魔法をかけてある

たかだかレベル4の攻性魔法じゃあ

おれの防壁は突破できんよ

妖精「！」

羽のひと、結界を頼む

他の人間に見られると面倒だ

五三、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

おっ

というか、すでに構成は走らせてある

それにしても……

年齢不相応に冷静な女の子だと思ってただけ

違ったんだな

迷いがないんだ

勇者「そうかもしれないわね。だから？」

子狸「？」

勇者「勘違いしているようだけれど、わたしはべつに自分の命が惜しいなんて思ったことはないわ。それは他人の命も同じことよ」

子狸「そんなの……だめだよ」

勇者「？ あなたの言うことは、ときどき理解できないわ」

おれは基本的に理解できない

勇者「わたしに、戦えと言ってるんじゃないの？」

子狸「？ 戦うというか……立ち上がろうってというか。逃げるのは、だめだよ」

勇者「もう少し詳しく」

子狸「え〜？ ちょっと待ってね……」

子狸さん

レッツシンキングタイム

五四、管理人だよ

お前らなら、わかってくれるよね？

どう伝えたらいい？

このニュアンス

五五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、わからん

五六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

当然のようにわからん

もう少し詳しく

五七、管理人だよ

え？

お前ら、ふだん偉そうなこと言ってるくせに

これだもんなあ……

五八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ぶっ飛ばされたいの？

いいから詳しく話してみなさい

なにがだめなの？

お前、言ってることが支離滅裂だぞ？

いや、いつものことなんだが……

五九、管理人だよ

仕方ないなあ……

二度は言わないよ？

おれは勇者さんに

あんまり危ないことはしてほしくないんだ

女の子だし

でも逃げちゃだめなんだよね

つまり、そういうこと

六〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

こいつ、むかつく……！

ていうか

おい

あんまりびびらせるな

なにひとつとして新情報が含まれてねーぞ……
ぜんぜん詳しくなくてない

がんばれ

もつとがんばれ！

六一、管理人だよ

ここまで言ってもわからないなら
ちよつと……

ごめんな

とにかく、このままじゃ勇者さんはだめになる……
おれがなんとかしなくちゃ！

おれ「結論が出ました」

勇者「言ってみて」

おれ「お嬢」

勇者「なに」

おれ「おれは、いまちよつと怒ってます」

勇者「なにに」

おれ「お嬢の、そういう……なんていうの……あれ。あれなところ
に。そう……つまり、あれだ。わかるよね？」

勇者「まったく」

おれ「自覚がないんだね。……自覚？ 自覚はあるのかもしれない
……それはお嬢にしかわからない」

勇者「そうね」

おれ「とにかくですね。お嬢とは、ここでいったんお別れです」

勇者「それ、前にも聞いたわ。一流のシェフを目指すとか何とか……
……わけのわからないことを」

おれ「そんなこと言ってないよ。茶化さないで」

勇者「言ったわ。間違いなく」

おれ「……言ったかもしれない。それは認めよう」

勇者「絶対に言った」

おれ「この世に絶対なんてないよ」

勇者「絶対はないことはあるの？」

おれ「え？」

勇者「なんでもない。続けて」

おれ「あ、はい。……ええと、なんだっけ。……そう、そうだった。お嬢には、絶対に忘れてほしくないことがあります」

勇者「早くも……」

おれ「おれは、これからそれを……あれだ。あれをしに行きます。それまで、お嬢とは口をききません。これも絶対ね」

勇者「また……」

おれ「クリスくん！」

歌人「え？ はい？」

おれ「行こう！」

歌人「ど、どこへ？」

おれ「決まってるじゃないか！」

歌人「そう、だろうか……？」

おれ「しゃきつとして！ おれたちが、この街を救うんだよ！」

歌人「え？」

勇者「待ちなさい。わたしに無断でどこへ」

おれ「お嬢とは口をきかないって言ったでしょ。でも寂しくなった

ら言いなさい。黒雲号のお世話もちゃんとする」と。わかった？

勇者「いま、口をきかないと……」

おれ「リン。お嬢をよろしくな」

妖精「ころすぞ」

おれ「リンさん。お嬢をよろしくお願いします」

妖精「もうひと声」

おれ「閣下。哀れなおれにお情けを。なにとぞ、なにとぞ……」

妖精「よかろう。お前がなにを考えているのか、さっぱりわからんが。……行け。骨は拾ってやる」

おれ「ありがたき幸せ。では！」

歌人「え？」

「子狸が勇者さんと喧嘩したみたいです」 part 2 (後書き)

注釈

・特訓

山籠りとかするあれ。

バウムファ家の人間は、幼い頃より魔物たちの手で英才教育を施される。

英才教育を施された結果があれなのかということはおき、シナリオを遂行する上で必要な知識や、 unnecessary 知識を徹底的に叩き込まれる。

子狸が一定の条件下において「颯爽とおれ参上」に類する行動をとるのは、魔物たちによって仕組みられた条件反射である。

この「特訓」により、バウムファ家の人間は「謎の覆面戦士ルート」や「超古代文明の末裔ルート」、果ては「魔王の腹心ルート」に至るまで柔軟な対応をできる……筈だ。たぶん。

「子狸が勇者さんと喧嘩したみたいです」 part 3

六二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おい

おい待て。子狸

なにやら張り切っているようだが

勇者さんもないのに

お前が霊界のひとたちの拠点に突撃しても意味ないだろ……

六三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

そつだぞ。考え直せ

お前らバウマフ家は勇者の水先案内人なんだ

まして歌の人を連れて行くとなると誤魔化しがきかなくなる

さいあく彼女おつと彼の記憶を消去することになる

それでもいいのか？

六四、管理人だよ

お前らは、ひとの心を悪いほうに操ったりはしないよ

おれがいなかったことになるんでしょ？

いいよ

次に会うときは魔王の手先になってるかもしれないけど……
それは悲しいことかもしれないけど……

羽のひとがいる。クリスくんも

おれは、お前らに守ってもらってずっと生きてきた……
だから、おれも大切なものを守るために戦える

六五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おちつけ

おちつくんだ

なんか感動的なこと言ってるけど
お前はきつと勘違いしてる

王都の！

やばい。暴走しはじめてる
哲学的な話でもないか？

六六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸よ、本気なのか？

六七、管理人だよ

おう

おれは、お前らが言うように
あんまり頭は良くないかもしれない……

それでも

本当に大切なものはわかるよ
生きてるんだから

六八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

バウマフの血か……

わかった

好きにしる

お前の先祖は

おれたちに生きると言った

今度はおれたちの番なのかもしれない……

六九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

いやいや

王都の、お前もおちつけ

開祖は、あれだろ

たんに考えるのが面倒になっただけだろ

けつきよくおれたちにいろいろと教えてくれたのは
お母さまじゃないか

七〇、王都在住のとりにならない不定形生物さん

子狸は

おれが育てたんだ

開祖とは違う

お前らだって

子狸はわりとまともなほうだと認めてるだろ

七一、山腹巢穴在住のとりにならない不定形生物さん

いえ

バウマフ家の基準で語られましても……

そうだ

骨のひとはどう思う？

困るだろ？

子狸に來られてもさ

主演おれ

観客おれ

みたいなものだし

七二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

いいだろう

かかってこいよ、子狸い……

お前を倒すのは

このおれだ！

七三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おおっ……

これはだめだ。使いものにならない……

見えるひとは？

見えるひとはどう思う？

七四、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

王都のひとは

アリア家がおれたちの天敵かもしれないと言ったそうだな……

だが、それは違う

おれたちの天敵は

バウマフ家だよ

いずれは決着をつけねばならないと思っていた
それが、いまだったということだ……

子狸よ

お前がなにを考えてるのかはわからない

だが思い通りになると思うな

やれるものならやってみるがいい……！

七五、管理人だよ

おう！

勝負だ、お前ら！

七六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おかしい

なぜこうなった……

七七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

もはやこの流れには抗えない、か……

羽のひと

勇者さんは@任せる

何かあれば 教えてくれ

七八、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

わかった

任せ@る

七九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

そついうことなら仕方ないな……

ここは@王都のの

顔を立てるぜ

八〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

感謝する

お前ら

子狸は 歌人のお馬さんに

相乗りさせてもらつようだ

黒雲号よりも少し体格がいい

というか、これはポニーだ

まあ、ふたりとも小柄だから

問題はないだろうが……

歌人「……途中までだからね？　ボクだって命は惜しい」

子狸「わかった。お嬢には、おれが勇敢に戦ったと伝えてほしい」

歌人「……危ないと感じたら、引き返すからね？」

子狸「おう。……豆芝、わかった？　合図をしたら迎えに来るんだよ。いい？」

歌人「ちよつ、名前……」

子狸「知ってる？　こういうの、称号名っていうんだよ」

歌人「そんな称号名は、いまだかつて聞いたことがない……」

昨日のことだが

騎士から称号名のことを聞いて

子狸ライブラリに登録されたみたいだ

どうやら理解はしていなかったようだな……

子狸「自慢じゃないけど、おれ、通信簿で、よく“たまに天才なんじゃないかと思う”って書かれるんだ」

歌人「……通信簿の話だよね？」

じっさいに自慢になっていない

歌人がまたがる豆芝さんのくつわを引いて

子狸は行く

なんだ？

通りが騒がしいな

すれ違う人間たちの様子が慌しい

骨のひと、千里眼で見れるか？

八一、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おう

ん……

街壁の付近に人間が群がってるな

ちょうど出入り口の門があるところだ

拡大、拡大つと……

ん？

なんかもめてる

門番の騎士が数人と

これは商人たちだな

いつまで封鎖してるんだとか言ってる

とうとう暴動が起きたか……

ちょっと行ってくるわ

八二、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

おれも行くところか？

八三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

お前、日の当たるところだと

存在感が薄いからなあ……

いいよ。おれが行く

ちらつと姿を見せに行くだけだし

ああ、でも商人ってたくましいからなあ……

追ってきたら困るかも

八四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

近頃の商人は傭兵業までこなすからな……

いささか鍛えすぎたか……

どうする？

巨大化いつとく？

八五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ゴーストタウンになっちまうよ……

人里の近辺では巨大化はしない
それがおれのジャステイス

とはいえ

商魂たくましすぎる商人たちに
大拳して押し寄せられても困る……

お？

子狸が、のこのことやってきた

八六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

うむ。街門に到着した

とても通してもらえぬ雰囲気じゃないな

子狸よ、歌の人は置いていけ

お前ひとりなら街の外に転送してやる

八七、管理人だよ

それじゃあ意味がないよ

だいじょうぶ

思いついたことがあるんだ

歌人「……これは無理だね。ノ口くん、やっぱり引き返そう」

おれ「曲を」

歌人「え？」

おれ「思いは、伝わる。叫んでるだけじゃ、だめなんだ」

先生の言っていたことが

ようやくわかったような気がする……

八八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

待て

おちつけ

違う

早まるな

お前の音楽の成績が悪いのは
たんに

総員退避！

八九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

退避します！

！？

リンクが……切れない！？

九〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

！

王都の、貴様！？

九一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれたち仲間だろ？

歌人「自信があるんだね？ よし、やってみよう」

子狸「おう！」

不公平はあつてはならないんだ

おれと同じように苦しめ

歌人「〜」

子狸「ぼえ〜」

これは……ひどい……

九二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あれ？

おかしいな……平衡感覚が……

九三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ママン……

いま行くよ……

九四、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

なんだろう……

この不安になる感じ……

九五、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

おれの知ってる歌と違う……

なんていうか新しい

九六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

だが効果はあったようだな

みんな唾然として子狸さんを見る

あ、騎士が気付いた

騎士A「やつだ……！ おい！ とらえろ！ いや、まず歌つのをやめさせる！」

騎士B「ま、待て。あれは聖騎士の連れだ……」

騎士C「サビだけ上手いんだな……。そこがまたイラッとくる……」

そう、サビだけは上手いんだよ……

九六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ふう

なんとか歌い切ったか……

子狸「ぼえ〜」

歌人「〜」

！？

九七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

二番！？

九八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

フルバージョン！？

九九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ママン……

ごめん……

まだやり残したことがあるみたいだ……

あいつが泣いてる

おれ、戻るよ……

一〇〇、かつて管理人だったもの

美声だな

さすが、おれの息子

一〇一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ですよね！

一〇二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いやあ

心が洗われるようだなあ！

一〇三、樹海在住の今ときめく亡霊さん（出張中

お屋形さま、ご無沙汰しております！

一〇四、墓地在住の今ときめく骸骨さん（出張中

ご子息に、いつもお世話になっております！

一〇五、かつて管理人だったもの

ああ。そう硬くならなくてもいい

なに、息子が旅に出て家内が寂しがってるもんでな
気晴らしに少し連れ出す

ノ口には何も言わなくていい

一〇六、管理人だよ

いや、見てるよ父さん……

おつちよこちよいだなあ……

一〇七、かつて管理人だったもの

おお、そうだったな

いまはお前が管理人だったな
父さんうっかりしてたよ

一〇八、管理人だよ

旅行に出かけるの？

母さんに何も言わずに出てきちゃったから
気になってたんだ

おれの代わりに土下座しておいてくれる？

一〇九、かつて管理人だったもの

はっはっは

こいつめ……

わかった。任せろ

父さんの土下座は

常人の域をはるかに超えてるからな

一一〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

どんな!?

一一一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

なんなの、その土下座代行システム!?

通るの!?

一一二、かつて管理人だったもの

通るわけねーだろ!?

たんなる言葉のキャッチボールだよ!

察しろ!

一一三、管理人だよ

え?

一一四、かつて管理人だったもの

え？

本気？

そうか……

わかった

おれも男だ

やってやるうじゃないか……

まず旅行だ

お前ら、スターズの連中によろしく言っとけ

ひとしきり巡回するからな

一一五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お屋形さま

古代遺跡とかおすすりめですよ

さいきんあのひと怠けぶりがひどいんです

一一六、かつて管理人だったもの

わかってる

おれに任せておけ

じゃあな

一一七、管理人だよ

ちょうど歌い終わった

一一八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おつかれ

さて、とりあえず暴動はおさまった

じりじりと包囲の輪を狭めてくる騎士たちに

子狸はひとこと

子狸「おかしい。おれの誠意が伝わっていない……」

子狸の計画は失敗に終わったらしい

騎士A「なにを……！」

騎士B「待て。……少年、我々に何か用かな？ 見ての通り、少し忙しいのだが……伝言くらいは聞こう」

いまや商人たちの注目を浴びてしまっているため
言葉を選んでいようだ

子狸は得心がいったというようにひとつ頷く

子狸「伝言ゲームというわけか……」

歌人「違うよ。ほら、アレイシアンさんからの」

子狸「！？ どうしてお嬢のことを名前で呼ぶの？ ま、まさか……」

歌人「いまさら！？ ありえないから！ 君ってやつは、も……
ここはボクに任せなさい！ いいね？」

子狸「おう！」

だんだん子狸さんの扱いが雑になるな……

高みの見物を気取る子狸の頬をつねってから

歌人が進み出る

騎士B「……君は？」

歌人「ボクは、クリス・マツコールと言います。少々予定が狂い
ましたが……我々は偵察の任を命じられたものです。通して頂けま
すか？」

騎士たちが素早く目配せをする

騎士Aが頷くと

他の騎士たちは商人たちの対応に戻る

騎士A「我々は訓練された人間だ。いまから聞いた内容を忘れるこ

ともできる。その上で尋ねる。……命令されたというのは、嘘だな？」

ああ、こいつが隊長なのか

騎士A「聖騎士位の指揮権は委譲できない。いかなる理由があろうとだ。我々の職務と反する指令を与えるというのは、筋が通らない。なぜ嘘をついた？」

歌人「それは……ボクの口からは何とも……」

誤魔化しきれないと悟ったか

歌人がちらりと子狸を見る

目が合う

子狸「うん、嘘は良くない」

歌人「他人事!？」

子狸「他人だなんて……。お、おれは、クリスくんのこと……。とっ、友達だと、思ってます……!」

歌人「そ、そう……」

おい

歌の人、若干ひいてる

「子狸が勇者さんと喧嘩したみたいです」 part 4

一一九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸よ

まあ、そう気を落とすな

歌の人は

お前のことを友達でも何でもないと思っているようだが

そもそも友達なんていらないだろ？

無用なトラブルを招くだけだぜ

一二〇、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

だな

お前は@ あんまり自覚ないかもしれないけど

国家機密 に足が生えて歩き回ってるようなものだから
気楽に話もできないし

お前からしてみれば、ほとんど異世界の住人だぜ？

一二一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

だな

本気で天動説を信じてるような連中だからな

というか危うく現実になりかけたからね

人間はおっかねーよ……

一二三、管理人だよ

でも、おれ……

人間が好きだ

魔改造の実は甘くておいしい

！

名案を思いついたぞ……

おれ「クリスくん。豆芝に……」

歌人「……わかった」

騎士A「おい。聞こえてるぞ。間抜けなコンビだな……」

歌人「一緒にしないでください！ 失礼な人だっ……」

おれ「その余裕が、いつまで続くかな……？」

不敵に笑うおれ

歌人「わあ、なんかだめっばい……」

ひとは成長する
昨日までのおれとは違うぜ

おれ「あ！ あれはなんだ!？」

よし。いまのうちに……

一二三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

わかるよ

お前なら引つかかったかもな

騎士A「待ちなさい。そんな子供だましに……」

子狸はだめだ

使えん

ここは、おれたちが何とかするしかない
まずは商人たちだ
こいつらをどうにかしないことには……

一二四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

いや

子狸の発想はあながち間違ってもいない

商人たちの対応で騎士たちは手一杯になってる

ざっと見た限り馬の近くにいる騎士はいない
突破さえすれば振り切れる

雲を使うのはどうだ？

一二五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

そうか。雨を降らせるんだな？

あんなどす黒い雨雲がどろどろと頭上に流れてきたら
騎士たちの注意も惹けるかもしれない

いけるぞ

一二六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

待て

商人たちには

騎士たちの足止めをしてもらう

この状況でいい

この状況がいい

雨雲を持つてくるといっなのはいいアイデアだが……

いや

その必要もなさそうだな

「豆芝」……………」

「頭上を見上げる豆芝さん

商人たちの馬も次々と祈るように天をあおぐ

商人A「？ おい、どうし……………！ 火花星だ！」

商人B「おお……………」

商人C「おお……………」

ちかちかと

空にまたたく

火花星

騎士A「不吉な……………」

子狸、走れ！

骨のひと！ フォローを

一二七、管理人だよ

おう！

一二八、墓地在住の今ときめく骸骨さん（出張中

おう！

颯爽と豆芝さんに飛び乗る子狸さん

騎士A「その手には乗らないと……！」

立ちふさがろうとする騎士Aを

ひきとめる商人D

というか、おれ

商人D「おい、あんた……！ こっちは急いでるんだよ……！」

騎士A「ちっ！ 離せ！」

商人に身をやつしたおれを

騎士Aは振り切るも、すでに遅い

子狸「アディオス、アミーゴ！」

歌人「いいのかなあ……」

ポニーとはいえ

馬の足に人間では追いつけない

騎士A「パル！」

お？

騎士A「エリア・タク・ディグ！」

子狸「お？」

騎士Aのターン

馬上の子狸に向かって

光の鞭を射出

魔法って本当に便利ですね

すっかり油断していた子狸さん
鞭に腕をとられて上体がゆらぐ

子狸「ぬっ！？」

騎士A「観念しろ！」

子狸のターン

腕に巻きついた鞭に手をそえる

子狸「アイリン・ドロー！」

ころころころ

しかし効果は確かだ

鞭が、ぱつと飛散し光へと還元される

騎士A「なんだと！？ チェンジリングか！？」

いいえ。逆算能力です……

子狸「あばよ、涙！」

そして、この捨て台詞である

一二九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸い……

治癒魔法を本来の用途で使うなって
言っただろーが！

一三〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ねえ、楽しい？

おれたちの苦労を水の泡にして楽しいの？

一三一、管理人だよ

お前らがおれに余計なことを教えなさいで
おれの治癒魔法はエフェクトがグロいと先生に言われる……

低学年の子たちにどん引きされて以来
封印されていたおれの治癒魔法が
いま解き放たれた……！

一三二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ……

そうか。光の鞭は教官の得意魔法だったもんな……

一三三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

はんぶんチエンジリングの域に達してたから

本人も嘆いてたよ

骨のひと、目撃者の記憶を差し替えておいてくれ

子狸は、なにか魔法で光の鞭を防いだけど

詠唱は声が小さくて聞きとれなかった

これで頼む

一三四、墓地在住の今ときめく骸骨さん（出張中

おう

しかし一方の商人たちは白熱するばかりだ……

商人A「おい！ ガキは通しても、おれらはだめなのか！？」

騎士B「まあまあ……おさえて。あなたたち大人でしょう」

商人B「ふざけんな！ 追えよ！」

騎士C「まあまあ……おさえて。どうせ怖くなって戻ってきますよ」

商人C「なにが騎士だ！ 貴族の犬が！」

騎士D「まあまあ……おさえて。貴族に失礼ですよ？ ね？」

騎士たちは冷静だな

商人D「ほざけ！ この税金泥棒が！」

騎士A「あ！？ おれたちが、どれだけ薄給でこき使われてると思っ
てんだ！？ この成金どもが！」

商人E「言ったな！？ 上等だ！ だれかゴング持って来い、ゴ
グ！」

騎士A「やってやんよ！ 民間人が軍人に勝てると思ってんのか！
？」

騎士B「た、隊長……」

商人A「なめんな！ こちとら連日連夜、魔物とやり合ってたんだ！」

一三五、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

うん、冷静だな

「子狸が勇者さんと喧嘩したみたいです」 part 4 (後書き)

注釈

・天動説

自分たちを中心に宇宙が回るという考え方。地動説の逆。

この世界の人間は、そもそも「宇宙」という概念を持たない。

太陽と月と星は空に貼りついていてるものであり、それがぐるぐると回るのだ。

そんなことを本気で考えていたら、魔法のパワーで現実になりかけたことがある。これには魔物たちもまじでびびった。

のちに「二番回路の逆襲」と呼ばれるこの事件を踏まえ、魔物たちは二番回路に流れ込んだ余剰ぶんのエネルギーを少しずつ還元していくオートマチックのシステムを作った。

これが「魔改造の実」である。

便宜的な処置ではあったが、食べると案外おいしかった。夢の味なのかもしれない。

・火花星

ときとして群発する、この世界独自の天体スペクタクル。

上空で、まるで火花が散っているようにも見えるため、そう呼ばれる。

この現象の前後に魔物が活発化するという噂もあり、騎士たちの間では凶兆とされる。

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 1

一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

からくも騎士たちの妨害（善意）を突破した

子狸と歌人

ひとけのない街道は寒々しく

上空の暗雲を見つめる子狸の目には憂いがある……

子狸「問題は、巣穴がどこにあるのかだ……」

問題なのはお前の記憶力

歌人「いや、どう見ても、森の奥が怪しいから。暗雲が渦巻いてるから」

子狸「……渦巻いてるのが、期待と不安だったとしたら？」

歌人「……その質問に、ボクは答えなくちゃだめなの？」

久しぶりに

タイトルコール行きます

魔

王

討

伐

の

旅シリーズ

子

狸迷走編

が

レベル2に挑むようです

二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

じっさいどうなの？

子狸はレベル2のひとに勝てるの？

三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

難しいだろうなあ……

レベル2のひとたちは

騎士とタメ張れる程度のパラメーター設定だからさ

四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

いや

おれは、けっこうイイ線いくと思うぞ

騎士が真価を発揮するのは集団戦だからな

その点、子狸は個人戦仕様だ

ふつうの人間とは魔法に対する

アプローチの方向性からして違う

五、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

ん？

でも、おれ

子狸が素でレベル3の魔法を使ってるの
見たことないぞ

じつは使えるの？

六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、使えない

ある一定以上の規模になると

ごく一部の数値が突出して、レベル4になっちゃう

なまじレベル4以上の知識があるから

構成がおかしくなるんだろうな

無意識のうちに最適解に引っ張られてる

結果、器用貧乏というか

まあ、子狸と同年代でレベル3の魔法を扱える人間は
ひと握りの天才だけだから

べつにいいんでない？

七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

そもそも、子狸にとって火力とか属性は
たんなる数値の違いだからね

お屋形さまと同じ高みを目指したら

途中で休憩所があつて

あれ？ ここ山頂じゃね？ みたいな……

あとは、スコップで地道に土を盛るだけっていつか……

八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

虚しい作業だな……

まあ、そこでトンネルを掘って山を改造しはじめるのが
子狸なんだけどな……

九、管理人だよ

良いことだよ

この前、全身全霊をこめて砂山をカスタマイズしてあげたら
尊敬の目で見られたし

一〇、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

砂山っていう時点で……

一一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そのあと調子に乗って魔物ごっこやってたら
親御さんに通報されたけどな

さて、霊界のひとたちの出張先に到着したぞ

改めて見ると立派な屋敷だな

いかにも不気味な外観に

歌の人は怖気ついでる

歌人「本気で入るの……？」

子狸「？ 怖いのか？ それなら、クリスくんはここで……」

歌人「こ、怖くなんてないよ！」

子狸に、この手のこけおどしは意味をなさない
じつに可愛げのない子供である

けつきよく歌の人は同行するらしい
甘いというか、なんというか……

「豆芝さんは屋外で待機

子狸が突入役を買って出ようとするもの
のつけからクライマックスの作戦に
歌人が異をとなえる

歌人「そんなことしたら、本気で帰るからねっ……！」

子狸「こういう場合、奇襲して一気に制圧するのがセオリーなんだ
けど……」

歌人「発生源があるっていう話だったでしょ！　まずはそれは探る
の！」

発生源か……

骨のひと、そのへんはどうなの？

一一、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

無論、ある

地下に魔界からつながるゲートがな……

一二、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

魔界のポテンシャルに

すべてを賭けるぜ……！

一四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

困ったときの魔界だな
闇の魔法で、それっぽく仕上げると……

後始末はどうするんだ？

一五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

勇者さんに聖 剣で閉ざしてもらうつもりだったんだけど……

まあ、光の精霊がいるからだいじょうぶだろう

一六、管理人だよ

精霊

精霊か……

いよいよ、おれの前にも姿を現すのか……！

おれ「……よし、二階の窓を叩き割って入ろう」

歌人「なんでそう発想が犯罪じみてるの？ バレるよ、バレる」

おれ「ふふふ」

歌人「……なに？」

おれ「ドアには鍵が掛かってるもんだよ。ためしに、ほら……」

開いてた

歌人「……………」

おれ「これは罫に違いない……………」

歌人「ごめんなさいは？」

おれ「ごめんなさい」

裏の裏か……………」

どうやら骨のひとの方が一枚上手だったようだ……………」

一七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

つまり表です……………」

ああ、ついでに言うておくけど

牛のひとの家とは

内部の構造がぜんぜん違うから

子狸は、進行方向を申告しなくてもいいぞ

一八、管理人だよ

え？ そうなの？

じゃあ、ランダム構築？

一九、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

そんなマイホームは嫌だ……

この屋敷な

もともと人間が建てたんだよ

地下の空間は多少いじったけど

それ以外はまともな造りになってる

勇者さんのマッピング能力も未知数だし

あんまり複雑にしても仕方ないだろ

二〇、管理人だよ

後悔しても知らないよ？

おれ、ダンジョンに関してはプロフェッショナルだから

二一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ちなみに、お前の先祖でもあるなんちゃって古代の民は
似たようなシチュエーションで

古代「ふひひ、楽勝ですよ」

とか言って落とし穴にダイブした

なんていうか

なんだろう……

べつだんそういうキャラでもないのにお色気担当みたいになってて意味不明だったぞ

お前は、そうならないといいな……

二二、管理人だよ

いえ、おれ男ですし……

落とし穴とか、そんな古典的な……

とりあえず行きますね

てくてく

歌人「床！ 床が抜けてる！」

おれ「おおう!?!」

あぶなかった……

落とし穴と見せかけて、ただの穴とは……

さすがはレベル2ということか……

二三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

そうだね

さすが、おれ

というか玄関先で騒ぐなよ……

おれ、すぐ出て行きつらい……

二四、管理人だよ

上で待ってて

探検してみる

二五、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

おう

気をつけてな

けっこう老朽化してるんだ

おれはリフォームしようって言ったんだけど

とあるカルシウムの化身がね……

二六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おい

おい。おれのことか

言っとくけどカルシウムは偉大だぞ
カルシウムなめんな

とくに子狸

お前、牛乳を飲めって言ってるだろ
なぜ飲まない……

二七、管理人だよ

飲んでるし！

お前ら、いちいち極端だから！

過ぎたるは……

飲み過ぎは良くないのさ

二八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

過ぎたるは及ばざるがごとし

何事もほどほどがいちばんってことだ

二九、管理人だよ

では、動かざるは？

三〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

山のごとじー！

三一、管理人だよ

ひゅー

三二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ひゅー

三三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

緊迫感のかけらもねえ……

少しは歌の人を見習ってはどうか

歌人「あ、ドア閉めちゃうの？ く、暗くない？」

子狸「得意な魔法は発光です」

子狸さんの

アピールタイム

スタート

歌人「いや、それだと居場所がバレるよね？」

子狸「バレないかもしれない」

歌人「バレるよね？」

子狸「うむ……」

アピールタイム

終了

歌人「うゝ……。いいよ、このまま進もう。足元に気をつけて……」

子狸「メルシー」

勇者さん不在につき

メルシー禁止の状態異常が解除されたもよう

ドアを閉める

一階は大広間だな

言うほど真っ暗闇でもない

壁面に埋め込まれた蜀台に灯ってる

ろうそくの明かりが

ぼんやりと屋内を照らしてる

さっさか歩きはじめる子狸に

おっかなびつくり、歌の人が続く

子狸が扉を発見

迷わず開けて入る

歌人「ちよつ……！」

子狸「ん？」

歌人「な、なんでもない」

家捜しを続行

部屋から部屋へ移動を繰り返しては
小物を手にとり

子狸「ふむふむ……」

とか

子狸「ほほう……」

とか

訳知り顔で頷く

そのたびに歌人がびくびくするわけだが
だんだんいらいらしてきたらしい

歌人「なに。それがどうしたの。ただのお皿でしょ」

声に険がある

子狸は無言でお皿をなで回している

歌人「ちよつと。なんで黙ってるの」

子狸「……さいきん使ったあとがある。だれかいるね」

歌人「ひっ……！」

面白いくらい歌人はびびっているが

そもそも、ろうそくに火がついてる時点で

わかりきったことである

三四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

つまり、こつこついうことが

勇者さん 羽のひと>歌人 子狸

能力的にはどうなんだろうな？

おれの中では

勇者さんはオールラウンダーというか

攻守のバランスが、わりと高い水準で安定してる

羽のひとは戦闘型じゃないし

子狸は

だれに似たのか知らんが

その場の気分で出来が変わるだろ

爆発力はあるみたいだけど……

で、歌の人はつていうと
戦ってるの見たことないんだよな

三五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

勇者さんが見た目どおりの年齢なら
子狸よりも一つか二つ下だろう

歌の人は子狸と同じ年か
もしくは一つ上かな

年齢的に学校を卒業してるとは思えないが
卒論の資料を集めてるとしたら

つじつまは合う……か？
あんまり旅慣れてる感じはしないしな

進学を狙えるということとは、内申点は低くない筈
騎士の候補生程度の実力はあるんじゃないか？

三六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ためしてみるか……

三七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

厨房を出て食堂を徘徊中

壁際に立たされてる甲冑の置き物が
ひとりでに動き出す

歌人「!？」

子狸「大きなテーブルだなあ」

不便そう……と子狸は感想を漏らしている

三八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

おれじゃないぞ？

見えるひと？

三九、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

うんにゃ？

おれは二階の寝室にいる

四〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

フルアーマーおれ

推参！

四一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

タイミングおかしいだろ！

出待ちかよ！？

四二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いやあ……

スルーされたらどうしようかと思ったわ

庭園のにも声を掛けようとしたんだけど

あいつ、鬼のひとにつかまっちゃってるから

四三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ……

当然そうなるよね

四四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

つくづく不憫な……

そうと知りつつ

モニターを買って出るあたりがよくわからん……

責任感があるのはけっこうなことだと思っが

四五、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

子狸「お嬢は、こういうのが好きなのかなあ………？」

貴族御用達の大きな円卓に興味を示している子狸の服の袖を、歌人が小刻みに引っ張る

歌人「のっ、のっ………！」

子狸「ノ口です」

ぎこちなく歩み寄ってくる甲冑に

子狸さんはひとこと

子狸「ほう………。さいきんの鎧は動くのか………」

歌人「違っ、ちがう！ こっち来る、こっち来てる………！」

子狸「どうかな……。お腹が減ってるのかもしれない。………そういえば」

子狸は歌人を見つめる

子狸「朝から、なにも食べていない。どうしよう」

歌人「どうでもいい！ わっ、来た！ 逃げっ………！」

言っが早いか、歌の人は子狸を置いて逃げ出す

追う甲冑。子狸の横を通過

歌人「ボク!? なんでえ!?!」

子狸「猫みたいだ」

歌人「ぜんっぜん似てない!」

部屋の中で追いかけてつこをはじめめる歌人と甲冑
子狸がぼんやりとそれを見つめる

歌人「見てないでっ、助けてっ」

子狸「あい。チク・タク・デイグ」

歌人の救助要請を受けて

子狸が甲冑の背中に圧縮弾を撃ち込むも
さすがに金属板を貫通するような威力はない

たたらを踏む甲冑

追われている歌人からすれば

突撃してきたように見えるわけで……

歌人「のわっ!?!」

闘牛士さながらスピニングして回避しようとするも
無駄に終わる

子狸「デイグ」

時間差で投射された圧縮弾が
甲冑の横っ面を張る

倒れまいと踏ん張る甲冑

子狸「だめか。なら……チク・タク・ディグ」

子狸は容赦がない

子狸「ディグ。ディグ。ディグ」

てくてくと無造作に歩み寄りつつ

甲冑の関節部に次々と圧縮弾を撃ち込む

四六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

てめっ

子狸い……

おれ「ウオオオオオッ！」

子狸への怨嗟の念が

おれを吠えさせるのさ

歌人「ひっ!？」

あら。涙目

うるんだ瞳から、ぼろりとこぼれるひとすじの涙

やべ……

やりすぎたか

歌人「！」

さて。そろそろ緑のひとの手伝いに戻るとしますかね……

四七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そつは問屋がおろさない

歌の人が、はっとして子狸を見る

子狸「……………」

子狸は気まずそうに視線を逸らす

その反応に歌の人は顔を真っ赤にする

歌人「こんつの……………！」

羞恥心が恐怖を上回った瞬間である

歌人「チクウ！」

圧縮した空気を手のひらに凝縮

甲冑の頬に猛烈なビンタが炸裂しました

甲冑「おふっ！」

吹っ飛んだヘルムが子狸の足元に転がる

歌人「確保！」

子狸「あ、はい」

子狸に拒否権はない
両手で床におさえつける

甲冑「頭、頭……」

ヘルムを捜して、うるつく甲冑

歌人「そのまま！」

子狸「え？」

子狸の返事を待たずして
円卓に飛び乗った歌人が
こぶしを固めて跳躍する

歌人「アバドン！」

重力を乗せて加速したこぶしが
甲冑の大事な部分を貫く

ついでに床も貫く

いかん

老朽化に加え加重に耐えきれなかった床が沈む……！

歌人「わっ！？」

子狸「あぶなっ」

子狸がとつさに歌人の肩を抱き
引き寄せようとする

だめだ。落ちる

歌人「しっ、シエル！」

歌人の減速魔法に

子狸「ドロー！」

子狸が加速を追加

歌人「ちよっ………！」

歌の人は相殺を危惧するが

子狸の加速魔法は正統なものだから
包括的な事象に干渉できる

反重力を加速したことで無事に着地する二人

つまり……わかるな？

四八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中）

地下かよっ

四九、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中）

直行かよっ

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 1（後書き）

注釈

・魔界

魔物たちの故郷ということになっている世界。

なんとなく、じめつとした印象がある。

こきゅうとす内では、さも実在しないような口ぶりだが、本当のところはわからない。

少なくとも、魔物が発生する以前から魔法が存在したことは確かであり、「そもそも魔法とは何なのか？」という疑問が残る。

しかしながら、「実在しない」と言い張っておきながら、「本当は実在するんじゃないか」と疑わせるのは、魔物たちの常套手段のひとつでもある……。

・卒論

王国民の職業は、ほぼ世襲制であるため、たいていの人間は学校を卒業したあと家業を継ぐ。

しかし中には高等学校（高校）への進学を志すものもいる。

高校は義務教育ではないため、進学を志望するものは、何かしらの成果を学府に提出せねばならない。

その「成果」にあたるのが、この世界における「卒業論文（卒論）」と呼ばれるものである。

ただし、在学中に極めて優秀な成績を収めた生徒が、学府から誘われることもある。

また、「高校」は政府と密接に関わる「研究所」としての側面が

強いため、機密漏洩の観点から主要な都市にしかない。

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 2

五〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

お前ら、残念だったな

子狸は、お前らの手には負えないということだ……

おれは言ったはずだぜ

やつを倒すのは

このおれたちだとな……！

五一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

まっただ

おれたちの獲物を横取りしようなんて考えるから
罰が当たったのさ

五二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前らというやつは……

五三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

まだだ！

まだ、おれたちのターンは終わっちゃいない……！

見えるの！

お前は、歌人が突き破った床からふたりのあとを追え

おれは、タイミングを見てゲートから登場する

挟撃するぞ

五三、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

おう

しかし……

いや、なんでもない

おれは、歌人をおさえる

お前は子狸と決着をつける

勝てよ

五四、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ああ

すまんな

この戦いが終わったら一杯おごるよ
うまい酒場を知ってるんだ……

五五、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

おい

おい。やめる

おれの遺影に乾杯して思い出にひたる流れを作るな

五六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

こんなこともあろうかと

お前のフォトメモリは用意してある

写真写りが悪くて苦労したぞ……

五七、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

なにしてくれちゃってんの!?

ていうか

それ、ほとんど心霊写真だからね!?

お前それでいいの!?

五八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

というか

さりげなくおれも落ちたわけだが……

落下の衝撃で、手足が曲がってはいけない方向に……

五九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ふむ

やっぱり鎧の中だと思い通りには動けないか……

ちょうどいいから、そのまま退場しろ

鎧の中身が消えた感じにすれば

歌の人も少しは冷静になるだろう

パニックを起こした人間は何をするかわからん

とはいえ、見えないと意味ないな……

地下に光源はあるのか？

六〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ない

真っ暗だ

が、この構成だったら
ゲートが起動するとき床一面が光る

多少、薄暗いだろうが
魔法使いなら問題のない光量ではある

それよりもおれとしては
子狸の自己犠牲的な一面が気にかかる

歌人を抱きしめるような形で着地した子狸

ひそかに戦闘モードに移行しているようで
周囲の生体反応を検索してる

子狸「おれたちだけみたいだ。……どこか怪我してない？ 立てる？」

歌人「……うん。ありがとう」

子狸「クリスくん、ちゃんと運動してる？ なんか、ぷにぷにしてる」

歌人「その台詞がなかったら、もっと素直に感謝できた」

そう言って子狸の頬をつねろうとするも
伸ばした手が空を切る

歌人は、不安そうに腕を引っこめる

歌人「真っ暗だね……。本当にだれもいないの？」

子狸「おれたちと鎧のひとだけだね。一緒に落ちてきたみたい」

歌人「いるじゃないか！」

子狸「動いてないよ。壊れちゃったのかな。クリスくんが乱暴にするから……」

歌人「ボクが悪いの!？」

語気を荒げる歌の人だが
すぐに考えを改める

歌人「……いや、たしかにボクが悪い。ごめん。床が抜けるとは思わなかった……」

子狸「おっちょこちよいだなあ」

歌人「くっ……!」

歌人も子狸にだけは言われなくなかったろうに……

深呼吸して気を取り直す

歌人「……とにかく、さっきのやつは動いてないんだね? どうしてわかるの?」

子狸「? どうして?」

歌人「真っ暗じゃないか。現に、ボクには君の顔も見えないよ」

子狸「……………」

歌人「……………」

子狸「あ、似顔絵があれば」

歌人「悩んだ結果がそれ？」

無理か

仕方のないやつだ……

いいか？

おれたちは人間の意識を読む

小難しい理屈は省略するが

お前は

というかバウマフ家の人間は

こきゅうとすと接続し慣れてるだろ

生物の気配に敏感なんだ

この気配というやつが曲者で

他の人間たちは意識のフィードバックを第六感と混同してるから

お前の言い分が通じない

たしかに歌の人も、その気になればお前と同じことができるさ
けどな、たとえば真つ暗闇の空間に人間を放りこんだなら

そいつは他に誰かがいるような錯覚を覚えるだろう
それは生物としての本能だ

だから確信を得られないと不安になる

六一、管理人だよ

え？

いや……

おれ「だって、音がしないじゃないか」

歌人「……そうだね」

だよね

六二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

まさかの常識的判断

王都の……

六三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

長々と語っちまったじゃねーか……

歌人「疑ってごめん……」

納得するなよ……

ツッコめよ……

いるかいなかだろ、問題は……

ちくしょう……

バウムフ家の生態には、いまだ謎が多いな……

こいつら、どうやっておれたちの河に接続してるんだろ……

山腹の、どう思う？

六四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

こきゅーとす自体が、そういう設定になってるんだろっな

正確には、バウムフ家以外の人間の接続を弾くよう設定されてるのかもしれない

結論を言っと

知らんよ

どうやって息をしてるのかと問われてるようなもんだ

あと、お前

油断しすぎ@

らしくないな

どうした？

六五、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

ああ

すまん

ちよつとな……

忘れてくれ

おれも気を引きしめる@

図らずも歌人の追及を

かわすことに成功した子狸

地下室をうるつきはじめ

その拍子に、侵入者の存在を感知したゲートが起動する

子狸「……！」

床一面に光が走り、幾何学的な模様が浮かび上がる

それと呼応して、部屋の中心部で渦を巻く

底なしの闇

床にうがたれたゲートから

なまぬるく、しめった空気が流れこむ……

歌人「う……」

ただならぬ雰囲気、あつさる歌人の足元に転がる

つわものの夢のあと

歌人「うう……」

あれ？

逆効果だったかもしれない

この子、涙腺がもろいな……

あと、子狸は

しまったというような顔をしてるけど

こいつ、たぶんここに来た目的を忘れてる

六六、管理人だよ

お前らが、あんまり驚かせるからだよ

こついつ無意味な演出が

お前ら好きだね……

六七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

その前に、おれに驚けよ

床が光った程度で驚くのに

鎧がひとりで動くのは許容範囲なのかよ……

ああ

言ってて気が付いたわ
気配があるから、だめなのか……

街中で仕掛けたほうが効果的なのかもしれないな

とりあえず、甲冑のパーツを残して

おれ退場

歌の人はリアクションがいいな
可愛げがある

六八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おつかれ

そうだな

なんだか、いじめたくなる雰囲気がある

それにしても陳腐な演出だな

欲を言えば、もうひとつ派手な演出がほしかった

六九、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

それは、おれも考えたし

じっさいにいろいろと盛り込んでただけど

勇者一行を待つてる間に

骨のに撤去された

あの骨、へんなこだわりがあるから
カルシウム原理主義だし

七〇、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

カルシウムのなにが悪い

何事もシンプルがいちばんなんだよ

余計なものを削ぎ落として
最後に残ったものが真理なんだ

七一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

真理を体現している骨のひとが
ゲートから徐々に浮上してくる

！

あのこん棒は……

なるほど……

本気なんだな、骨のひと……

七二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

あれは……！

まさか、鬼のひと屈指の名作と謳われる

52年モデルか!?

よせ！

万が一、折れたらどうする!??

七三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

なにも失わずして

なにを得られるというんだ？

こいつが折れるときは、おれの心が折れるときだ……！

七四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

文字通り、ぼっきり行っちゃうよ!??

それ、まじで貴重だから！

やめとけ！

七五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

骨のひとの決意は固いようである

踏み出す

骸骨「お前か、小僧……。勇者はどうした……。？」

さりげなく子狸の心中を聞き出そうとしてくれているぞ……！

お前ら、傾注

子狸「！ お嬢をどうした!？」

なんたる

七六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ごめん

あいまいで、ごめん……

ややこしくしてしまって、本当に申し訳ない……

きちんと言い直したほうがいい？

姿が見えないから、どうしたのかなって……

勇者さんを置いてきたのは、なんで？

相談に乗ろうか？ みたいな……

七七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

もついい……！

いいんだ……！

お前は、がんばったよ……！

七八、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

すまん

おれが期待をあおるような真似を……

七九、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

いや、気にするな

逆に燃えてきた

バウマフ家の人間は、いつもそうだ

おれたちの努力を、あざ笑うかのようにボケ倒す……！

おれ「ままならんものだな。ならば、貴様をエサに誘き寄せらるまで
だ……！」

こん棒を固く握り駆け出します

子狸「わけのわからないことを……！」

わからないのか……

決まりだな

勝負だ、子狸……！

お前を

勇者一行から
排除する！

八〇、管理人だよ

勇者さんには
だれかが
ついていてあげないと
だめなんだよ！

それが、どうしてわからない！？

八一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

まあ、剣士だしな

ん？

もしかして、それが理由？

動機と犯行が、まったく結びつかないんだけど……
どういふこと？

八二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

先制したのは子狸

骨のひと同様、駆け出しつつ

子狸「チク・タク・デイグ！」

先手必勝とばかりに

圧縮弾を時間差と緩急を織り交せて投射する

骨のひとは第一陣を回避

骸骨「アルダ・タク！」

こん棒を闇でコーティングし

第二波、第三波を叩き落としつつ

お返しとばかりに凍結魔法で反撃する

骸骨「レゴ・グレイル・デイグ・グノ！」

指向性を高めた冷気の爆弾か

レベル2だな

子狸「デイレイ・エリア……っ！」

グレイルと聞いて、子狸は急停止

同じレベルのエリアとグレイルが正面からぶつかれば
後者に軍配が上がる

子狸が補習を脱走するときによく使う手だ

まんまと裏をかかれたな

後方に歌人がいる。かわせない

八三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

冷気と言えば、おれ

これは決まったか？

八四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

魔法の撃ち合いは、たいてい短期決戦になる

だが、子狸の持久力には目を見張るものがある……

子狸「エラルド！」

盾魔法を深化

レベル2まで引き上げて冷気をおさえこんだ

じつにしぶとい

八五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

この子狸、しぶとい……

八六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

とはいえ時間の問題だな

たしかに予想以上にやる……
が、そもその年季が違う

後手に回ったら一気につぶされるぞ

八七、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

一方その頃

歌人「ノロくん……！」

旗色悪しと見てとつた歌人が
子狸に加勢しようとするも

背後から忍び寄る

魔の手

というか、おれ

おれ「動くな」

歌人「！メノウパール……！」

おれ「おれは、そんな名前じゃない。おれは……そう、ドラゴンだ」

八八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おい。ドラゴン

戦わないのか？

子狸「！ クリスくん……！」

子狸が、おれを睨みつける

子狸「きたないぞ！」

おい。おれが弾劾されてる

八九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おい。ドラゴン

人質をとるのは黄金の負けパターンだぞ

生贄 大作戦で、追いつめられた子狸が

生贄の子を人質にとったけど

失望の目で見られて

三日ほど立ち直れなくなった

九〇、管理人だよ

初恋でした

九一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

嘘をつけ

お前の初恋は、おれのご近所さんだろ

九二、管理人だよ

そんなことはありません

べつに嫌いじゃないけど

優しいし強いし

気品がね、うん

九三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

未練があるようだな……

ともあれ

おい。ドラゴン

人質なんて、まだるっこしいことはやめなさいよ

今回のケースは

短期決戦。これに尽きる

九四、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

いままで黙っていたんだが……

じつは朝から

筋肉痛がひどく

腕が

上がらぬ

九五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

あるの！？

いや、百歩譲ってあるとする……

じゃあ、さっさと治せよっ！

九六、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

それは、できない相談だ……

この痛みに耐えてこそ

おれのボディはきらめく

九七、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

シナリオが
山場を迎える中

骸骨「ここが、お前の終着駅というわけだ。寂しくはないだろう。すぐに、お前の仲間もあとを追う……」

子狸「……おれが勝ったら、クリスくんは解放してもらおうぞ！」

走り出した

見えるひとの夢

亡霊「いいだろう！ 人質など不要だろうからな……。ただし、――
対一……手出しは許さん」

歌人「ノロくん……」

いったい

われわれは

どこへ向かうのか……

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 2 (後書き)

注釈

・深化魔法

別名、拡張魔法。スペルは「エラルド」。

魔法の効果を拡大する「ラルド」の上位魔法にあたる。

ただし本質的には別の魔法であり、「術者の意識を拡張する」というのが正しい。

ふつうの人間は「ラルド」の上位版と考えているため、しっかりと経験を積みめば、二番回路の補佐により「拡張魔法」で魔法の効果を跳ね上げることができる。

しかし、子狸にはそれができない。彼にとって「エラルド」は「深化魔法」であり、その効果は「魔法の変質」に近いからだ。

正しいスペルを知っているからといって、必ずしも有利に働くばかりではないという一例である。

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 3

九八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸は、だれかを守るために力を発揮するタイプだ

勝負はわからなくなったな……

九九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そうか？

さっきの応酬では、あきらかに骨のひとが二枚ほど上手だった
じっさい、あの場面から立て直せたかっていうとかなり怪しいし

勝機があるとすれば、押し相撲になる接近戦くらいか？
だが……

一〇〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

うむ

子狸には、属性の縛りがない
どの属性もそつなくこなせる反面……

得意な属性がない

だから、ここぞというとき決め手に欠ける

「01、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おまけに骨のひと秘蔵の52年モデルときてる

鬼のひとたちは、ぜんぜん納得してなかったけど
武具としては間違いなく最高クラスの逸品

「02、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸」……………」

骸骨」……………」

対峙する両者

先ほどとは異なり、静かな立ち上がりだ

先手をとるか？ カウンターを狙うか？

じりじりと間合いを計りながら相手の出方をうかがっている

子狸は、だいぶ思いつめてるな

いささか意気込みすぎている

ベストとは言いがたいコンディションだ

ここはいったん間合いをとって仕切り直したいところだが
悠長に撃ち合っているひまはないぞ……………」

いまなおゲートを通して流れこんでいる高温多湿の瘴気は人間の体力を否応なく蝕む

一〇三、管理人だよ

クリスくんのためにも

この勝負には絶対に負けられない……！

×ゲームで雌雄を決しよう

一〇四、墓地在住の今ときめく骸骨さん（出張中

いいだろう

受けて立ってやる

一〇五、樹海在住の今ときめく亡霊さん（出張中

ちっとも良くねーだろ！

おれの立場はどうなる！？

一〇六、墓地在住の今ときめく骸骨さん（出張中

雌雄を決するというむずかしい言葉を知っていたことに敬意を表してというのもあるが、何より……

頭脳戦なら互角以上に戦えるという
謎の自信が気に食わん……！

じゃあ

おれが先手ね

角もらい

一〇七、管理人だよ

まんまとひっかかったな……

このおれが校内 ×ゲーム大会の覇者とも知らずに……

この勝負もらった！

×

一〇八、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

なぜ真ん中をとらない……

というか覇者なの？

一〇九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

うん、いちおう

あまり深く聞いてくれるな

一一〇、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ほう……

相手にとって不足なしといったところか……

x

一一一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸「……………」

子狸さんが長考に入りました

一二二、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

長考するような局面じゃねーだろ！

というか積んでる！

これ積んでるよ!？

一一三、樹海在住の今ときめく亡霊さん（出張中

こうしている間にも

真剣な眼差しで睨み合っている二人を

歌の人は固唾をのんで見守っているわけだが……

一一四、管理人だよ

クリスくん……！

いま助ける！

そつだろ？

勝負は終わって見ないとわからない

この局面から、おれは何度も逆転勝利してきた……！

ここだッ！

×

×

一一五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

悩んだあげくそこ！？

一一六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

王者子狸、入魂の一手である

一一七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

本当にいいんだな？

後悔しても知らんぞ……

いや、すでに遅いか……

一一八、管理人だよ

心理戦か……

その手には乗らないよ！

一一九、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

そうか……

正直に言おう

おれは、お前を見くびっていたのかもしれん……

眼窩が熱くなってきた……

x

×

一一〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん
じつに子狸らしい一局でした

一一一、管理人だよ

× ×
× ×

一二二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中）
なに食わぬ顔で続行するな

よしんば五目並べだったとしても
その手はねーよ！

ええいつもういい！

さっさとかかってこい！

一二三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）

なんたる時間の無駄遣い……

子狸「行くぞっ！」

律儀に宣言して駆け出す子狸

身構える骨のひと。迎撃の構えだ

子狸「デイレイ！」

！

盾の魔法だと！？

一二三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

子狸「ラルド・アルダ！」

目くらましか！

だが、しょせんは一時しのぎに過ぎん……！

どの方向から来ようと正面から叩きつぶすまで！

おれ「アルダ・タク・ラルド！」

一二四、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

違う！

お前を閉じこめるつもりだ！

一二五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

こん棒に付与した闇魔法を強化して待ち受ける骨のひとに対して

子狸「エラルド！」

子狸は遮光性の盾魔法を深化

いびつに捻じ曲がった闇の盾が骨のひとを覆い隠そうとする
が、骨のひとの反応が上回った

骸骨「アバドン！」

凶悪さがいつそう増したこん棒を子狸の盾魔法に叩きつける

とても耐えきれぬものではない

あえなく砕け散る盾魔法

骸骨「！？」

ここで子狸の密室トリックが炸裂

忽然と姿を消した子狸に骨のひとは硬直する

一二六、亡霊在住の今をときめく亡霊さん（出張中

上だ！

一二七、管理人だよ

もう遅い！

一二八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

盾魔法を足場に……！

けっきょく目くらましか！

裏の裏……

いや、深読みしすぎたな

一二九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

骨のひとの反応が良すぎた

跳び上がった子狸を、ちょうど招き入れる形になってしまった

計算じゃないな。経験則か

子狸め……

こいつ、おれたちと戦い慣れすぎて

なんかおかしな方向に適応してる……！

子狸「ディレイ！ ディレイ！ ディレイ！」

落下と共に盾魔法を連発

押しつぶす気だ

一三〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

エグい

魔法の使い方が、いちいちエグいよ……

一三一、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

速射性でいうなら、たしかに盾魔法は最速の部類に入る
最良の選択だったと思うぞ

たしかに予想以上だったわ
子狸は、よくやったよ……

けど、相手が悪かったな

おれは、レベル1の魔法じゃあ
倒せない

一三二、管理人だよ

!?

いつも、ふつうに倒されてるし!

一三三三、墓地在住の今をときめく骸骨さん(出張中

それはそれ。これはこれ

ちゃんと教えてたどろ?

レベル2の魔法は、レベル2以上の魔法でない
と相殺できない

で、おれは魔物

小粋な魔法生物さ

一三四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん(出張中

押しつぶされた骨のひとが瞬時に再生する

骸骨「惜しかったな!」

こん棒の一振りですり紙のように引き裂かれる盾魔法

子狸「わっ!」

身の危険を感じた子狸が、ちょこまかと退避する

骸骨「さあ、どうする？ もう同じ手は通用せんぞ……」

子狸「……おれは、まだ、ぜんぜん、本気じゃないよ」

はったりである

だいぶ消耗したらしく肩で息をしている

はっきり言って最初から

勝ち目なんてなかった

ここで何を思ったか

骨のひとが、こん棒をおさめる

骸骨「いや、お前の勝ちだ」

！

一三五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

！？

一三六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

！？

一三七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸「！ 本当！？」

骨のひと……！

どこまでも本気が……！

一三八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おれ「ああ」

よく

わかったよ

子狸は

こいつは

おれ「見えるの！ そいつを離してやれ！」

亡霊「……わかった。行け」

人間には

渡せない

歌人「ノ口くん！」

一三九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

駆け寄る歌の人

子狸「クリスくん！」

同じく駆け寄り抱擁しようとする子狸の腕を
歌人は、ひよいと避ける

そして、子狸の肩を軽く叩いた

歌人「びっくりしたよ。善戦したね」

子狸「？ おう！」

歌人「そう。じゃあ、次はボクの番かな？」

そう言って、するりと子狸のわきを抜けると
襟首をつかみ

子猫よろしく

片腕で持ち上げる

子狸「わ、びっくりした。力持ちなんだね」

歌人「そうだね。ボクは、力持ちなんだ。……まだ、わからないの
？」

子狸「いや、わかるよ。じっさいに、ほら……」

歌人「違うよ。そうじゃない。君と話していると、どうも調子が狂うな……。こう言えば、わかる？」

一四〇、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

おれだよ

おれ

「子狸がレベル2に挑むようです」 part3 (後書き)

登場人物紹介

・歌人

勇者一行に潜伏したレベル2の魔物。「歩くひと」と呼ばれる。人間と何ら変わらない外見をしているが、骨格に見合わない怪力の持ち主である。

ふだんは湖畔でひっそりと暮らしているが、有事には人間社会に潜入して情報収集に励む。

基本的に実在する人間の姿を写しとって生活するため、過去に身元を特定されて「死者が蘇った」ことにされた。

似たような境遇の「骨のひと」「見えるひと」と仲良しで、三人あわせて「霊界のひとたち」と呼ばれることも。

ちなみに、怖がりなのは素である。

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 4

一四一、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

へーい

一四二、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

へーい

一四三、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

へーい

一四四、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おれたち、集結！

一四五、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

子狸い……

さんざん好き勝手やってくれたようだが
このおれが降臨したからには

もうお前の好きにはさせないぜ！

一四六、管理人だよ

はいはい……

いま忙しいから、またあとでね

一四七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

宙吊りになっている子狸が、びしっに見えるひとを指差す

子狸「どうやら形勢逆転したみたいだな！」

形勢逆転どころか、お前が積んでる

やはり、この子狸

なにもわかっていないようである

一四八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おれは勘付いてたよ

最初から怪しいと思ってた

一四九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おれもおれも

歩くひとに悪いと思って、あえて騙されたふりをね

一五〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おれは途中だからだったけど

それでも、ひと目見た瞬間にぴんと来たよ

え？

お前ら気付いてなかったの？

一五一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

なにを言っているのか

ちよつと理解できないですね……

おれに至っては

歌人が登場する前から気付いてたよ

一五二、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

何者だよ!？

嘘つけ!

お前らの人間への無関心ぶりは

しっかりとチェックさせてもらったからな……

少しは庭園のひとを見習え
あのひと、たぶん疑ってたぞ

一五三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あのひと、猜疑心が強いからね

火のひとの世話を焼いてるうちに
すっかりひねくれちまった

一五四、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

そんなもんか……

さて、子狸よ
もついい加減、事情は飲み込めたか？

一五五、管理人だよ

うん？

うん

一五六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

あゝ……

これは、なにもわかってないな……

はつきり言っちゃったら？

一五七、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

いや、いい

ったく、仕方ねーなあ……

おれ「見えるの！ ちょっと預かっててくれ」

振りかぶって……

おれ第一球、投げました！

一五八、樹海在住の今をときめく「霊さん」(出張中

ナイスボール！

相変わらず、いい肩してやがる……

子狸「……どうも」

おれ「……どうも」

というか、王都のひとが高速で跳ねてきて
ちよつとなごんだ……

一五九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おいおい

ちゃんと不可視設定にしといてくれよ

なんのためのステルスだよ

なんか恥ずかしいだろ……

おれ、尾行に関しては

いつさい妥協しねーから！

歌人の魔球子狸に対し

文句のつけようのない捕球で

魅せてくれる見えるひと

余裕さえ感じられます

両者にゆっくりと歩み寄りながら

歌人が両手で後ろ髪を軽くまとめる

手を離すと、どこからともなく現れた布の髪留めが

急激に伸びた髪をひと括りにしている

床を蹴る足を追うように発火した黒い炎が

歌人の身体を這い上がる

身を包む旅装が燃え上がり

黒炎が、慎ましい装いのドレスへと変貌する

またたく間の出来事であった

子狸は呆然としている

というか、おい

当たり前のように詠唱破棄するな

一六〇、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

固いこと言うなよ

このほうが盛り上がるだろ？

いろんな意味でな

ここまでやれば

さしもの子狸も気づくだろうし

一六一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

お前は、おれたちの子狸さんを甘く見てる

一六二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

でかした

チームブルーに1ポイント

子狸「……うん、趣味はひとそれぞれだよね」

ぎこちない笑顔が痛々しい

一六三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

不自然に伸びた髪と

神速お色直しは完全にスルーなのか……

もう、あいまいなんだな……何もかもが

一六四、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

こいつ、本当にお屋形さまの血を引いてんのか……？
疑わしく思えてきたぜ……

見れば見るほど、ぜんぜん似てねえ……

ま、ママン……

一六四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

正気に戻れ

というか、お屋形さまがグランド狸に似てないんだよ
パーツで見れば、子狸はグランド狸に似てなくもないだろ
目元とかじっくり見ると……

ま、ママン……

一六五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前も正気に戻れ

おおつと、歌の人は余裕だ

妖艶な微笑を浮かべて子狸の頬をなでる

歌人「いやだなあ、まだそんなこと言ってるの？ ボクは女の子だよ。人間の美的感覚はよくわからないけど、なかなか美人だろ？」

子狸「そうだね、うん。うん……だいじょうぶ、おれは味方だよ」

もはや、なにを言っても無駄である……

！

見えるひと、うしろうしろ！

一六六、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

なんぞ？

きゃあ

一六七、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

おれ「おっと」

飛び退くおれ。とんぼを切って着地

さてさて、ようやくお出ましか……

一六八、管理人だよ

見えるひと？

どうしたの？

というか、おれ踏まれてる

??「だから言ったでしょ」

！この声は……

一六九、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

お前ら、待たせたな……

おれ

見参！

推して参る！

おれ「マジカル ミサイル！」

一七〇、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

レベル4とかっ……

だが、その技は見切った！

一七一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

歌人がぶち破った天井の穴から

急降下してきた羽のひとが光弾を射出

これを意に介さず、骨のひとは突進

片腕を持っていかれるも、即座に再生

ああ、今回は属性無視で行くのね……

一方その頃

濃紺の闇と輝線が混じり合う薄闇の中

子狸は、勇者さんと感動の再会を果たしていた……

一七二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

勇者さん来たあああああ！@

一七三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

出待ちですね、わかります……@

一七四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

歌人が尻尾を出すの待ってたのかな？

なかなか出てこないから、はらはらしたぜ

子狸お手柄だな@

一七五、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

そうか？

いてもいなくても同じだろ

というか、とかの意味がわからなかったの、おれだけ？

一七六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

席を立って 移動中 に決まってるだろ

勇者さん担当のおれが言うんだから間違いない

一七七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

無理があるだろ！

一七八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

山腹の、さすがにそれは……

一七九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

うむ……無理があるな

一八〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

知るか！

元はと言えば、お前らが とか とか

やり出したんじゃないか！

一七二、樹海在住の今をときめく「霊さん」出張中

おい。お前ら

青いの。いら

お願いだから

無残に叩き斬られたおれの活躍を忘れないで下さい……

勇者さん、意外と早かったな

飛び降りるには、ちょっと勇気のいる高さだと思ってたんだけど
そうか、羽のひとには念動力があったな……

というか、だからこの子は、なんで聖 剣を使わないの……？

おれ「……ばかめ！ このおれに、ただの剣など……！」

効いちゃってるのよね、これが……

おれ「身体が……崩れるだと……！？ このおれが、まさか、人間
ごときに……」

おいおい、話には聞いてたけど、無茶な数値だな……

このまま退場するけど、なにか質問ある？

一七三、湖畔在住の今ときめくしかばねさん

はい、先生

一七四、樹海在住の今ときめく「霊さん」出張中

ふむん、なにかね？

一七五、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

具現化しかかっています

一七六、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

おふっ！？

おれの中のドラゴンがっ……！！

へんなどころの連結を切られた……！！

山腹のひと！ ちょっと、お前んち寄らせて！

山頂で巨大化して雄叫びでも上げないと収まらない……！！

一七七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

それ、たんなるお前の趣味だろ！？

べつにいいけど……せめて夜まで待てない？

日中だと、お前……なんていうの？ っつ……

全体的に、ふわっとしてるんだよな……

一七八、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

すみませんね、なんかふわっとしてて

んじゃ、お邪魔するわ
河にはこのまま残るから
お前らは構わず続けておくれ

一七九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あいよ

退場する見えるひとに、勇者さんは一瞥もくれない
彼女を見上げて、子狸はひとこと

子狸「めるしい……」

ろうそくの火が燃え尽きようとする間に
刹那、激しく燃え上がるようなメルシーであった……

その場にしゃがみこんだ勇者さんが、子狸の頬を引っ張る

勇者「これに懲りたら、二度とわたしに逆らわないこと。わかった
？」

軽い気持ちで頷く子狸さん

勇者「よろしい。さて、と……」

立ち上がった勇者さんが剣を構える
その切っ先が向かう先には、微笑む歌人が佇んでいる

子狸「？ お嬢？」

勇者「あなたは、リンの援護に向かいなさい。わたしは、べつにやることができたい」

子狸「え、でも……」

ためらう子狸を、歌人が後押しする

歌人「そうだね、そうしたほうがいい。的確な指示だと思うよ。ノロくんには無理だろうからね」

そう言われて、はっとする子狸

子狸「お嬢！」

勇者「なに」

子狸「趣味はひとそれぞれだと思う……！ おれは、この件に関してはクリスくんの味方だから！」

勇者「さっさと行きなさい」

子狸「はい」

子狸は、骨のひとと羽のひとが小競り合いをしているゲート方面へすれ違いざま、歌人を勇気づけるように、ひとつ大きく頷いた

山腹の。勇者さんは任せる

一八〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう

見えるひと、留守を頼むぞ

歌人「やあ、アレイシアンさん！ どうだい、見違えただろうか？」

おう……のっけからテンション高いな……

歌人の声は場違いに明るい

勇者「そうね。とても」

抑揚のない勇者さんの声とは対照的だ

歌人「そうなんだよ。ボクは、彼よりも君に興味があるんだ」

勇者「意外ね」

歌人「そうかい？ そうかもね。君は、徹頭徹尾、ボクを信用してなかった。なにがいけなかったのかな？」

芝居がかった調子で両腕を広げる歌人に

勇者さんの表情はぴくりともしない

勇者「簡単なことよ。だれが来ても同じこと……。わたしは、だれも信用しないもの」

歌人「でも、ここにいる。それは、なぜ？ ノロくんは、じつに立

派だったよ。立派におとりの役割をこなした。見捨てて、さっさと行けば良かったんだ。そうだろ？」

勇者「領民を守るのは貴族の義務だからよ。下僕ともなれば、なおさらね」

骨のひとと交戦中の羽のひとが

間断なくマジカル ミサイルを撃ち放ち

その光が二人の足元に影を落としている

歌人「そうかな？ 前者はともかく、後者は義務ではないよね。それは感情論じゃないの？ 君は、そういうのを分けて考える人だと思ってたよ」

勇者「見解の相違ね。わたしは、感情がないわけではないわ。そうね……わかりやすく言ってあげる」

ここで勇者さんが動く

素早く踏み込んで、剣をなく

その剣閃に迷いはない

歌人は動じない

迫り来る刃を、親指と人差し指でつまみ、あっさりと止める

勇者さんが囁くように言う

剣の柄を両手で握り直し、じわじわと力をこめながら

勇者「平気で、ひとの心をもてあそぶような真似をする……。そういうの、気に入らないわ」

もっともらしいこと言ってるけど
要約すると、嫌いだから死んでくれとおっしゃっている

一八一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

勇者にあるまじき発言だな

一八二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

嫌悪の感情が殺意と直結してるのね……

一八三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

一方その頃

子狸の参戦により、三者は泥沼のような魔法合戦に突入
その様相たるや、まさしく地獄の一步手前である

妖精「射線に入るなっつってんだろーが！ 違う！ 右！」

子狸「右！？ こんな棒のほうを狙ってよデイレイいいい！」

急場のコンビネーションには無理があったようである

ちょこまかと動く子狸の影がちらついて

羽のひとは攻めあぐねている

妖精「クソがつ……当たっても知らないんだからねっ！ マジカル

ミサイル！ ミサイル！ もういっちょミサイル！」

骸骨「見切ったと言った！ デイレイ！」

子狸「痛い痛い痛い！ 当たってる！ むしろ、おれメインで当たってる！」

高速で飛び回る羽のひとが、安全圏から光弾をばらまくも
弧を描いて迫るそれを、骨のひとは帯状に展開した盾魔法で難なくブロック

そして、メインで当たる子狸

子狸「減衰してますからあ！ おれを補助して下さいよぉ〜！（涙）」

妖精「減衰とか言つなや！」

ルール無用の子狸に、羽のひともむきになる

妖精「おれカッター！ おれガトリング！ おれボム！」

自由すぎる妖精魔法

骸骨「チク・タク・デイグ！」

子狸さんが愛してやまない投射魔法（無印）も
骨のひとが使うと、まるで別物だ

二十超の圧縮弾が、各々まったく異なる軌道を描いて
羽のひとの弾幕を食い破る

その隙を突いて、子狸が骨のひとのこん棒に飛びついた

子狸「とつたあ！」

妖精「！ でかした！」

かろうじて圧縮弾を回避した羽のひとが、喝采を上げる

骸骨「てめっ、この……！ さわんな！ 痛えっ！ こいつ噛みやがった……！」

妖精「行け！ そこだ！ 奪え！ 奪っちまえ！」

子狸「ふーっ、ふーっ！ もが！」

鼻息も荒く、骨のひとからこん棒をもぎとる子狸

子狸「そおいつ！」

そのまま、速攻で投げ捨てる

妖精「投げんな！？」

骸骨「投げんな！？」

一八四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

山腹のあーっ！

一八五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

へいへい……

レクイエム・守護魔法！

おら、傷ひとつ付いてねーぞ

一八六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

お前、グツジヨブ！

そして子狸い……

お前は、おれを本気で怒らせた！

おれ「アバドン！」

一八七、管理人だよ

力比べか？ ならば応えよう……

おれ「アバドン！」

がつぷり四つ組み合う、おれとお前

ぬぬぬっ………！

一八八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

魔法は夢と希望の象徴ではなかったのか……
どうしてこうなった……

一八九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

戦いは虚しさしか生み出さない……
子狸さんは、いつもおれたちに大切なことを教えてくれる……

一九〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

一方その頃

シリアス担当の二人の決闘は激化の一途を辿る

果敢に攻める勇者さんだが
人間をはるかに上回る歌人の身体能力に
翻弄されるばかりだ

振り下ろされる剣を
歌人は旋回して回避
ドレスのスカートが花卉のように広がる

連携が途切れた一瞬の間に歌人が詰め寄り
勇者さんの瞳を至近距離から覗きこむ

歌人「息が上がってるね。だいじょうぶ？」

勇者「あなたに心配されるいわれはないわ」

気丈に言い返す勇者さんに、歌人は微笑む

歌人「ボクが心配しているのは、べつのことだよ」

勇者「よく動く口ね……」

聞く耳を持たないとばかりに

剣を突き上げようとする勇者さんの手首を、歌人が掴む

歌人「わかってるんだろ？ ボクは、魔物の中では、さして強いほうじゃない。むしろ非力な部類だ。それなのに、ボクごときにこのざまで、いったい何ができるっていうんだ？」

いたぶるように、じわじわと握る力を強める歌人

相当な苦痛があるだろうに、勇者さんは顔色をいっさい変えない

歌人「君は、ちっばけな存在だよ。こんなにも、か細い腕で……何も勝ち取れやしななさ」

勇者「……だから、あなたたちはだめなのよ」

歌人「……何が言いたい？」

勇者さんの見下した物言いに、歌人の笑顔がなりをひそめる

勇者「嘘つき」

歌人「！」

言下、もう片方の手を振りぬく勇者さん
歌人は、後方へ飛び上がって緊急回避

勇者さんの手から伸びる光の剣が
薄闇を切り裂いて燦然と輝いた

つまり……わかるな？

一九一、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

聖 剣！ 聖 剣！

一九二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

聖 剣！ 聖 剣！

一九三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

二刀流とか胸が熱くなるな……

というか

嘘つきって、やっぱりバレてるんじゃない？……？

一九四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

わからん

歌人の脅し文句に対してもかもしれないし
あるいは何かの符牒という線もある

羽のひと、どう？

一九五、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

いま、話しかけるな

一九六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

すみませんでした……

ポケ担当のチーム子狸ですが、白熱しているようです

骨のひととの力比べに応じた子狸の頭の上で
羽のひとが手に汗握る

あざ笑う骨のひと

骸骨「どうした？ その程度か！」

子狸「ぬっつ……！」

妖精「負けんな！ 押せ押せ押せーっ！」

子狸「ちよつ、邪魔……ていうか応援!？」

興奮のあまり身を乗り出した羽のひとが

子狸の、文字通り眼前で握りこぶしを上下している

一瞬の気のゆるみから天秤は傾き

子狸の身体が床に押しつけられる

ぴよんと飛び跳ねた羽のひとが、子狸の頬に軟着陸

妖精「がんばれ、おら! こっからだぞ! こっからだぞ! こっからだぞ!」

小さな手のひらでべしべしと頬を叩かれて

子狸は戸惑いを隠せない

子狸「おれは、いま、幸せなのか……?」

なにかに目覚めかける子狸だが

すんでのところで踏みとどまる

子狸「ぬるま湯につかるだけの人生なんてっ……!」

目尻できらりと光ったものは未練だったのかもしれない……

その気迫に押されたか、逆転を許してしまう骨のひと

骸骨「思えば、おれに筋肉なんてなかった……あれ? じゃあ、どうやって立ってるんだろっ……!」

疑問に思ったら負けである

マウントをとる子狸に、羽のひとは定位置の肩で櫓を飛ばす

妖精「よっしゃーっ！ とどめだ！ がつんと行け！」

子狸「でも、おれの魔法はきかなかったし……」

妖精「だから、殴るんだよ！ 魔法に頼るな！」

子狸「え……？」

肉弾戦を推奨する羽のひとに

子狸はしぶい顔をする

妖精「やれ！ やらなきゃやられるんだよ！ 生きるってそういうことだろ！」

子狸「そんなことを言う妖精は絵本の中にはいなかった……」

思い出はかくも美しく、そして儂い……

骸骨「貴様のへなちょこパンチなど、蚊に刺されたほどにも感じぬわ！」

現実に復帰した骨のひとが子狸を挑発する

子狸「そう？ じゃあ……。そらあっ！ そらあっ！」

骸骨「おふっ！ おふっ！」

鋭角に放たれた子狸フックが骨のひとのジョーをえぐる

一九七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

だから、エグいんだよ……

なんでそう、いちいちエグい攻撃方法をとるんだ……

一九八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ふだんは大人しい子狸ですが

そこは、やはり野生の血と申しますかね……

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 4 (後書き)

注釈

・減衰

ここで言う「減衰」とは「魔法の減衰」を指して言う。

魔物のレベルがそうであるように、魔法の開放レベルは上位であればあるほど一つの位階の差率が大きくなる。

レベル1の魔法とレベル2の魔法の差は全体から見れば微々たるものだが、レベル8とレベル9ではまったく別次元の隔たりがあるということだ。

つまり本来なら、レベル4の魔法をレベル1の魔法が相殺するという事態は起こらない。

これは「詠唱破棄」をはじめとする「時間」に干渉する魔法に課せられるペナルティであり、そのペナルティの名称にあたるのが「減衰」である。

内容的には、時間に干渉した度合いに応じて実質的なレベルが落とされるといふもの。

なぜ、こうしたことが起こるのかというと、この世界の成層圏内における「時間」は「逆算魔法」の支配下にあるからである。

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 5

一九九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸、ブレイク！

ブレイクだ、離れて……ニュートラルコーナーへ！

ワン！ ツー！

二〇〇、管理人だよ

ぜえ……ぜえ……

二〇一、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

仰向けのまま、ぐったりしている骨のひとに

青いひとがカウントをとる

子狸は、もはや立っているのもやっとなんかありさまである……

立てるか？

骨のひと、立てるか？

立てば、逆転の目は大いにありうる……！！

スリー！ フォー！ カウントが進む……！！

二〇一、墓地在住の今ときめく骸骨さん（出張中

おのれ、子狸……
運動神経もどこか狂ってると思えないほどなのに……

いいもん……

持ってやがる……ぜ

がくっ

二〇二、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

骨の〜！

二〇三、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

骨の〜！

二〇四、住所不定のどこにでもいるようなたてぶてぶさん

っ……

立てなあーい！

青いひとが触手を交差し、試合終了を宣告！

勝者、子狸！

二〇五、管理人だよ

やつ……たあああああ！

やったよ！ おれ！

これで、おれも……

お前ら、見ててくれた？

おれも、ついにレベル3だよ！

二〇六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

二〇七、管理人だよ

え？

二〇八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

うん……

いや……

え？

二〇九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なにか勘違いしているようだが……

そういうシステムじゃないから

魔物を倒してレベルアップとかないから

お前がレベル3の魔法を使えないのは

まあ、足し算の問題に掛け算で横着しようとして

エラーが出てるみたいなどころはあるけど

言い訳にはならん

ようは、たんに才能がないだけ

二一〇、管理人だよ

なにを言っているのか

ちよっと理解できないですね……

じゃあ、おれはなんのために戦ったの？

二一一、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

それは、むしろおれたちがお前に訊きたい

二二二、管理人だよ

君たちは、ときどき……
わけのわからないことを言うね……

二二三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

安心しろ。お前ほどじゃない

二二四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

安心しろ。頻度も比較にならない

二二五、管理人だよ

なんのため？

なんのためって……

なんのためだ……

お前らの……

クリスくんが……

騎士と……門のところで……騎士？

宿屋……黒雲号……だぶる……

！ 勇者さん！

二二六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ツッコまんぞ

長い旅を終え、はっとした子狸が振り返って駆け出そうとするが、足がもつれて転倒する
立ち上がるうとするも、足が言うことを聞かない
ひざから崩れ落ちて床に突っ伏す

子狸「あ……」

限界だな

これ以上は、もう……

骨のひと！

二二七、墓地在住の今ときめく骸骨さん（出張中

おう

がんばったな、子狸……誉めてやるよ

だから……

さあ……

決着を……

つけよう……

おれ「来いっ……！」

来い！

おれ！

二二八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

すでに地下の気温は真夏日と変わらない

勇者さんのひたいに浮かんだ大粒の汗が、頬を伝って床に落ちる
それでも、攻め続けるしかない

この状況下で、長期戦に耐えられるだけの体力が、彼女にはない

右に鉄剣、左に聖 剣を手にしての猛攻だ

歌人にしても、先ほどのような余裕はない

回避に徹する

転機が訪れたのは

子狸の体力が限界に達した、ちょうどそのときだ

聖 剣の一撃を飛び上がって回避した歌人が

着地と同時に足元のこん棒を拾い上げて、たちまち反撃に移る

子狸が放り投げた52年モデルだった

人間を超越した筋力があって、はじめて成立する
地面すれすれまで身体を倒しての特攻だ

勇者さんは迎撃の構えをとる

鉄剣で受けて、聖 剣で決めるつもりだったのかもしれない
だが、歌人の視線に宿る絶対の自信に
何か予感めいたものがあつたのだらう……

鉄剣を放り捨てて、両手でしっかり持ち直した聖 剣を大上段に
構える

そして、突っ込んでくる歌人めがけて一気に振り下ろした

勇者さんの渾身の一撃は……歌人には届かなかった

勇者「っ……………」

歌人「何を驚いてるの？」

歌人の表情に余裕が戻る

かすかに目を見張った勇者さんに、気分を良くしたらしい

歌人「……………ああ、もしかして精霊の宝剣がこの世でいちばん強い武器だとも思ってたの？」

交差した52年モデルと聖 剣を挟んで、両者の視線が交錯する

歌人「君たち人間って本当に無知だね。驚くほどに」

まるで子供をあやすように、拮抗してみせて

歌人があざ笑う

歌人「君たちが王種と呼んでいる最高位の魔物はね、君たちが知らないだけで、ぜんぶで五人いるんだ。こいつには、そのうち一人の

魔力が込められている。まして……」

歌人が軽く力を込めただけで、勇者さんの華奢な身体は弾き飛ばされる

歌人「まして、そいつはマナの結晶体だぜ？ 自分たちが自然に何をしてきたのか忘れたの？ 使いこなせるもんか」

二二九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おい

喋りすぎだ

二二〇、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

べつにいいだろ

むしろ感謝して欲しいな

だつてさ……

王都のひとは、最初からそのつもりだったんだろ？

彼女には、知る義務があるよ

子狸よりも、ずっとね

二二二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

王都の……お前というやつは……

一一二二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

さあ、きりきり吐いてもらおうか

一一二三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なにを言っているのか
ちよっと理解できないですね……

え？

むしろ、お前から気付いてなかったの？

一一二四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おれらのこと、ばかにしてんのか！？
子狸さんと同じ手に引っかかるわけねーだろ！

一一二五、管理人だよ

一一二六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いい。お前は、そのまま寝てろ

ちっ……

いつまでも、おんぶ抱っこというわけにはいかんだろ……

一二七、海底在住のとるにたらない不定形生物さん

はあ……いろいろと考えてるのね、お前

まあ、そのへんは任せるわ

ある意味、お前が……つてのは納得できなくもないし

一二八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

なんか、微笑ましい気分だわ……

そうか、王都のがね……ふうん……

べつに、おれたちは構わないけど……なあ？

一二九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おう

長かった反抗期が、ようやく終わったんだな……

お母さまも、きっと天国で喜んでくれると思うんだ……

二二九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

うつ伏せになった骨のひとが

血を吐くような絶叫と共に床をかきむしると

床の輝線が激しく明滅し、ゲートが活性化する

ゲートから現れる

九つの人影……

ぜんぶ骨のひとである

二三〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なんだ、お前……照れてんのか？ あ、嘘です、嘘

ステルスした千刃陣とかやめて？ まじっばくて怖い

ときを同じくして、疲弊の色が濃い勇者さんに襲いかかる歌人

歌人「終わりだ！」

切り札の聖 剣が通用しない相手に対して、勇者さんは……

聖 剣を、宙に散らす

歌人「!？」

急制止する歌の人

頭上で停止したこん棒に、勇者さんは瞬き一つしなかった

歌人「……降参のつもりかい？」

勇者「さっきも言ったわね。……だから、あなたたちはだめなのよ」

そう言っつて、一步、歌人へと踏み出す

気圧されて、同じだけ歌人が後ずさる

勇者さんが言っつ

彼女のほうから口をきくのは、はじめてのことだ

勇者「勝てる機会をふいにする。言わなくてもいいことを口にする

……」

やばい……

勇者「わたしに、死なれると困る事情でもあるの？」

だつて、子狸さんに怒られちゃうもん……

勇者「最初から、引っかかっていたの。あなたたちは、宝剣を渡せとわたしに言っつ。けれど、それはどうやっつて？」

お？

勇者「あの女は、わたしに託したんじゃない。わたしを利用したのね」

え？ なに？ どういうこと？

勇者「わたしが死ぬと、宝剣は手に入らない。違う？」

それは、名探偵が犯人を指摘するときのような
確信に満ちた口ぶりであった……

一一三一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ぜんぜん……違います……

一一三二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

びっくりするほど……違います……

一一三三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

悲観的にも程があるだろ……
おれたち、どんだけ悪者だよ……

一一三四、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

暑すぎて、頭の中が愉快なことになってしまわれたのでは……？
なんか、目が虚ろだもん……

というか、魔界の瘴気とか言ってるけど

べつにおれたちなら快適ってわけでもなんでもねーし！

暑いーよ！ ふつうに！ そんで蒸す！

なんなの！？ 魔界とか！

だれだよ！ ゲートを掘ろうとか言い出したの！

二三五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ごめんな

言い出したの、お前なんだ……

おれも、なんかだるくなってきた……

二三六、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

山腹のひとの家、涼しいねす

二三七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

それは、おれたちに対する宣戦布告と受け取っていいのか？

二三八、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

お前……あんまりなめたこと言ってる……

混ぜるぞ

二三九、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

何と！？

二四〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

霊界のひとたちの友情にひびが入った

一方その頃……

勇者さんが、はむっと指をくわえて指笛を鳴らす

甲高い音が地下空間に木霊した

歌人「！」

突然のことに、大きく後方へと飛び退く歌人

ゲートから這い出てきた骨のひとたちが、歌人に追いつく

勇者さんの合図に、天井の穴から騎士が続々と飛び降りてくる

さすがに訓練しているだけあって、多少の高さはものともしない

最初に飛び降りてきた騎士の顔面は青あざだらけだ

騎士の一人が、勇者さんの剣を拾って、彼女に手渡した

勇者「ありがとう」

剣を受け取った勇者さんが、ふと上空を見上げる

その視線の先には、ぐったりした子狸を小さな身体で懸命に運搬している羽のひとがいる

きらめく燐粉が二人の姿を淡く照らしていた

ひとつ頷いた勇者さんが、指揮棒のように剣を正面に突きつける
歌人擁する怨霊種の集団に向かって、一気呵成

勇者「掃討なさい！」

鬨の声を上げて、駆け出す騎士たち

歌人も負けじと声を張り上げる
髪を括る飾り布を乱暴に引きちぎり、髪を振り乱し

歌人「ころせ！ もういいッ！ みなごろしだ！ ここまで虚仮に
されて……ひき下されるかッ！」

見事な豹変ぶりと言っほかない

かくして

子狸迷走編……

最終決戦の火ぶたが切って落とされたのである

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 5 (後書き)

注釈

・ファイブスターズ

五人の最高位の魔物。

「五つの頂点」という意味で、「スター（星）ズ」と呼ばれる。

現時点で人類が実在を確認しているのは三人のみで、都市級の魔物すら問題にならないほどの圧倒的な存在であると認識されている。

完全に人間の手には負えない存在であることと、必ずしも人類と敵対しているわけではないらしいことから「〴〵級」という呼称は為さず、「王種」と呼ばれる。

中には「王種」を神聖視し、魔物ではないと主張する人間もいるようだ。

これは、魔王討伐の旅シリーズにおいて、ファイブスターズたちが人間に聖剣を授けるなどした結果であろう。

・怨霊種

「王種」に対応する霊界のひとたちの呼び名。

その場の勢いで新種を装ったりする魔物たちなので、人間たちには「上位騎士級の一部」という扱いだが、正しくはレベル2の総称ということになる。

当の霊界のひとたちには甚だ不評であるため、魔物たちの間では場を盛り上げるために使うくらい。

同様に「獣人種」「魔獣種」という呼称がある。

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 6

二四一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

歌人率いる骨のひとたち九人に対し

勇者さん率いる騎士たちは八人

門番の四人と署内待機の四人、駐在の騎士を全員ひっぱってきてる

数の上では、ほぼ互角だが……趨勢は決したな

二四二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

うむ……

騎士団の一個小隊だ

霊界のひとたちに勝ち目はない……

二四三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そつだといいがな……

骨のひと、頼む

二四四、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おう

このときを、待っていた……

すまん、歩くの

二四五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸との決闘に敗れた骨のひとAが、死力を尽くして叫ぶ

骸骨A「小僧だッ……！ あの小僧を……狙えッ……」

怨嗟にまみれた言葉を最後に、力尽きる骨のひとA

全身の骨格にひびが走り、たちまち崩れて灰になる

積もった灰は、くしけずられるように、さらさらと微風に混じり
見えなくなる……

見事な、散りぎわだったぞ……

二四六、湖畔在住の今ときめくしかばねさん

お前らというやつは……過保護が過ぎるぞ……

おれ「！ カイルっ……！」

二四七、墓地在住の今ときめく骸骨さん（出張中

だれだよ！？

え？

おれのことなの？

二四八、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

素敵なお名前ですね（ににっ

二四九、墓地在住の今をときめく骸骨さん（主張中

だまれ！ このっ……！

いや、お前よりはましか……

怒鳴ってごめんな

二五〇、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

ちよっ、それ余計に傷つく……！

二五一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

羽のひと、子狸を回収してくれ

お遊びは終わりだ

魔王の腹心ルートに切り替える

二五二、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

やだよん

二五三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おっと、手ひどく裏切られた気分だ

二五四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

まあ、そういうことだな

王都の、好きにしるとは言ったが

おれたちの管理人は……

子狸だ

決めるのは、あいつだよ

二五五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

さいわい、と言っているのかどうか……

あいつ、本物の治癒魔法を見たことないしな

おれたちを当てにしすぎるといふことではないだろ

二五六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

なにより、お前がついてる

自信を持ってよ、王都の

お前ならやれる……否、お前にしかできないんだ……！

二五七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

丸投げしてるだけじゃねーか！

ちっ……だから嫌だったんだよ……

おれの温泉旅行が……

ライブのチケットまでとったのに……

二五八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なにをこっそりと計画してんの！？

お遊びは終わりどころか、いままさにはじまるつとしてるじゃね
ーか！

二五九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれのバカンス計画がひとつ幕を閉じた、一方その頃……

まあ、おれのいないライブは開幕するわけだが……

ふらふらと危なっかしく空中をさまよっている羽のひとに
骨のひとたちが一斉に照準を合わせる

骸骨B「チク・タク……」

まるで、おれの希望を象徴しているかのような勇姿だ

だが、騎士どもが小賢しくも先んじる

騎士A「パル！」B「グレイル！」C「ラルド！」D「ディグ！」

くそがつ……なんなんだよ、そのふざけたチェンジリングは……

幾条もの忌々しい光槍が放たれ、おれの夢ごと骨のひとBを粉碎
する

その光景を何かに例えたとしたなら、そう、まるで……
おれにはたまの休暇も許されないかのようであった……

座して待っても、待ち受けるのは年中無休という名の牢獄である
骨のひとたちの半数が、おれの夢を乗せて矛先を騎士どもに変える

骸骨C「F「ディグ！」」

骸骨G「J「つ……ディグ！」」

騎士E「パル！」F「ディレイ！」G「エリア！」H「エラルド！」

詠唱がかぶさって、なにを言ってるのか聞き取りづれーんだよ！

わかるものにはわかるだろう

これは、おれの夢と世界にはびこる悪意の代理戦争である

だが、おれの夢は屈さない

いつの日か、必ずや第二、第三のおれの夢が現れ

おれを夢の楽園へと連れ去ってくれ……

二六〇、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

お前の夢で、前が見えない

ふざけたチェンジリングじゃなくて、チェンジリング ハイパーな

人間め……わけのわからん技術を開発しやがって……

胸が熱くなってきやがるぜ……！

二六一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

骨のひとたちの圧縮弾は、あえなく騎士たちの光盾に弾かれる

盾というより、もはや壁である

妖精「シールド！」

速度を重視したのが裏目に出たな

羽のひとへと撃ち放った圧縮弾もまた、妖精バリアに阻まれて散る

妖精「騎士さんたち、そのまま！ 下級魔法なら、わたしでも防げ

ます！」

きれいな羽のひとが騎士たちに続投をうながす

さすがに本職の軍人はものが違うな……

さらに言うなら、連中はふつうにレベル3の魔法を使える

骨のひとが手加減してるのもあるけど、まともによっても勝てるかどうか……

劣勢を見て取った歌人が、怒りの形相で叫ぶ

歌人「なにをしてる！？ 人間だぞ！？ たかが人間に、なにを押されてるんだッ！」

じつに芸達者なひとである

不意に悪い笑みを浮かべ、騎士たちに向かって声高らかに謳う

歌人「いいのか！？ こんなところにいて！ 今頃、貴様らの街は火の海だぞ！」

片手を振り上げて骨のひとたちを制止した歌人に、騎士たちも動きを止める

騎士A「なんだと！？」

歌人「まんまと誘き出されてさ！ ばかみたいだ！」

勇者「また嘘」

しかし勇者さんの牙城は崩せない

勇者「あなたはとても演技が上手ね。黒衣の魔物というのは、あなた本人のことだったのかしら？」

歌人「……アレイシアンさん、ちょっと黙っててくれないかな？」

勇者「そうね、ひけらかすつもりはないわ。……いまさら言い逃れはできないでしょ。あなたたちは、わざわざ自分たちの存在を知らしめてまで、何かを待っていた。そして、わたしたちに近づいてきた。あなたたちが本気で街を陥とそうというのなら、最低でも街道が封鎖される前に手を打つべきだったわ。それも下策なのだけれど……」

もしも自分なら、もっとうまくやったと言いたげである

王国の未来が危ぶまれる……

勇者「それと、もうひとつ。……あなた、わたしに興味があるんじゃないかったの？ わたしの言ったこと、ぜんぜん聞いてなかったのね」

二六二、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

おっかねー！

この勇者、おっかねー！

だめだ、おれの手には負えん……

これ以上ぼろを出す前に、さっさと決着つけるわ……と思ったら

勇者「……なにを勝手に止まってるの？ 二度は言わないわよ」

勇者さんの怜悯な視線が騎士たちを射抜いた

騎士A「あ、はい」

戦闘再開

二六三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者さんが歌人を論破している間に

難なく危険領域を抜けた羽のひとが

ぶらんぶらんしている子狸を、勇者さんの横に着陸させる

妖精「リシアさん！ ノロくんを！」

勇者さんの返事を待たず、急上昇する羽のひと

騎士たちの真上を陣取り、骨のひとたちの指揮をとっている歌人を見つける

妖精「クリスさん！ なんで……なんでですか！ ノロくんは、あなたのこと信じてたのに！」

きれいな羽のひとの弾効に、一瞬だけ目を丸くしてから

歌人は哄笑を上げる

歌人「なんで？ なんでだって？ おかしなことを言うね、君は。

……見てわからないの？ 一目瞭然だろう？ ボクは、こっち側の存在だったってことだよ」

妖精「そんなことっ、ノ口くんはとっくに気づいてましたよ！ それなのに！」

歌人「……なんだって？」

無論そんなことはありえない……と思うのだが……

お前ら、どう思う？

二六四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

じつは気づいてた……

そうだったら、どんなにか素敵だろう……

二六五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

うん、素敵だね……

二六六、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

うん、素敵だ……

お前ら、すまない

口からでまかせなんだ……

二六七、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

おい

おい。まじでびびったし

くそぅ…………羽のひと、やるな…………

だが、おれを甘く見るなよ…………

おれ「なにを言うかと思えば…………。そんなこと…………知ってたよ」

さあ、どっ出る…………？

二六八、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

こいつ…………！

なるほど…………いいだろう

さしずめ、チキンレースといったところか

その勝負、受けて立ってやる…………！

おれ「！？ 知っていたなら、どうして！」

二六九、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

ほぅ…………

あくまでも退く気はない、と

おれ「生きる世界が違つんだよ。……いまになって思えば、ノロくんは君たちを巻き込みたくなかつたんだろつね。だから、自らおとり役を買って出たんだ」

お前「！」

二七〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

っ……………いまのは……………効いたぜ

おれ「ノロくんは、そんなことひとことも……………！」

お前「それはそうだろうさ。素直に言えば、君は彼を行かせたかい？」

おれ「……………それは……………」

お前「ボクはね。あるいは、それならそれでいいかと思つたんだ。君たちがノロくんを置いていくようなら、そのまま見過ごすつもりだった」

おれ「……………なぜですか？ あなたは……………」

お前「彼と過ごした時間は、そう悪くなかつたからね。ほんのお礼の気持ちさ……………」

二七一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前らが架空の子狸さんで遊んでいる一方その頃……

騎士たちの快進撃は続く

立ち止まらないことは戦場の鉄則だ

敵味方が入り乱れる乱戦のさなか

自在に陣形を組み替えることで対応する騎士たちに

骨のひとたちは防御を固め、散開と突撃による小隊の分断を図る

骸骨E「バリエ！」

騎士F「デイレイ！」

しかし集団から隔離され突出した骨のひとは

騎士たちにとって、ていのいい的ではない……

骸骨D「どけっ……！」

骸骨E「！？」

騎士C「レゴ！」 B「グレイル！」 A「ラルド！」 D「デイグ！」

骸骨D「ぐふっ。ちっ、このおれとしたことが……。焼きが回った

な……」

骸骨E「ばっ、ばかやろう！ どうしておれをかばった……！？」

骸骨D「知るかよ……身体が勝手に動いちゃった……どうしてかな

……そう悪くねえ気分だ……」

骨のひとたちが一人、また一人と散っていく

敗色濃厚を察した骨のひとたちは、ドラマ路線に変更したようである

騎士A「なにをしている！ 手を休めるな！」

騎士C「し、しかし……」

人として殲滅を逡巡する部下たちに
勇者さんに見守られてる騎士Aが非情にも追撃を命じる

騎士A「まだわからんのか！？ それは甘えだっ……！ その甘さが、王都襲撃を招いた！」

騎士C「！」

騎士A「だれしもが薄々は勘付いているはずだ……魔王は約定を違えた！ 和平の道は途絶えたのだ！」

王都襲撃か……いまは何もかもが懐かしい……

騎士A「王都襲撃はきっかけでしかない。だが、長年くすぶっていた火種を、われわれは自覚してしまった！ いま世界各地で燃えひろがりつつある激情は、もうだれにも止められん……！」

二七二、沼地在住の平穩に暮らしたいトカゲさん

某所……

おれ「見ろ、威勢だけではないか。脆弱、非力……そんな調子では、とてもとても……」

騎士「ひるむなっ！ 撃て！ 討てッ！ この世界に……魔物の居場所などないッ！」

親狸い……

二七三、迷宮在住の平穩に暮らしたい牛さん

さらに某所……

おれ「ちっ、また騎士どもか。あとからあとから、うじ虫みたいにわいて出やがる……」

騎士「？ 君は、こんなところでなにを……？ お嬢さん、ここは危ない。地上まで送ろう。さ、こっちへ来なさい」

おれ「はあ？ お前ら、おれを倒しに来たんじゃねーのか？」

騎士「！ まさか、君が……！？」

おれ「まさかじゃねーよ！ つの生えてんだろ、つの一！ しっぽも！」

親狸い……

二七四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そして場面は戻る……

騎士A「時代”だっ！ 人類史上かつてない未曾有の大戦が幕を開けようとしている！ 怒りと憎しみ……！ どちらかが滅びるまで終わることのない……戦歌と終の時代が訪れるのだ！」

親狸い……

二七五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

親狸い……

二七六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

親狸い……

二七四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

演説を終えた騎士Aが、時代の波に後押しされたかのように突撃する

騎士A「ゴル！」

両手に現れた火炎が、大気を焦がし燃え盛る
レベル3で一挙に殲滅するつもりだ

子狸がそうであるように、訓練で心身へと刻み込まれた躍動に
騎士たちは従うより他ない

騎士C「っ……タク！」

迷いはあるのだろう。それでも……

歌人「させるかッ！」

ほとんど水平に地を蹴って加速する歌人の脚力は
あまりにも人間離れしている

同じ姿をしていても、手を差し伸べるには遠すぎて……

騎士F「ロッド！」狸「魔どんぐり」「B」そうそう、甘くて煮ると
おいしい……っ、こらー！」

子狸さんが巣穴を飛び出したようです

二七五、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

おれが間違ってた

けっきょくのところ……そういうことなのか

避けては通れないんだな

子狸い……

二七六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸の近年まれに見る頭脳プレーにより、失敗に終わるチェンジ
リング ハイパー

あんなひとことでつぶせるほど騎士の技は甘くないが……言わぬ
が華か

歌人「っ！」

目を見張った歌人が、急停止して飛び退く

歌人「ノロくん……」

子狸「クリスくん……」

床に突っ伏したままの子狸が、おっくうそうに顔を上げた
二人の目が合う

子狸「おれ、これだけは……言っておかなくちゃと思って……」

勇者さんに頬を引っ張られつつも、子狸は懸命に笑った

子狸「その服、似合ってる」

それだけ言うと、子狸は満足そうに巣穴へと戻っていった……
ふたたび眠りに落ちる

さらば子狸

寝る子は育つ

歌人「ちっ……！」

そのとき、歌人に異変が……

二七七、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

いかん……

なんか、うるつときた

やばい

おれ、涙腺が決壊しそう

二七八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

お前、そういつとこあるよな……

いいから、こっち来い。とんずらするぞ

二七九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

目頭に熱いものがこみ上げてきた歌人が、虚勢を張る

歌人「……やめだ！ ひきあげるぞ！」

騎士A「逃がすと思つのか？」

背後から声を掛けてきた騎士Aに、歌人はあでやかに笑う

歌人「思うよ。あなたたちは、アレシアンさんの命令には逆らえない」

勇者「わたしは、掃討を命じたわ」

歌人「だったら、気が変わったんだね。……わかるだろ？ 君は、賢いひとだ。ボクが本気になれば、騎士の一人や二人は道連れにできる……」

勇者「そうね。だから？」

歌人「わかってるくせに。ボクらは、捨て駒だよ。これ以上、つきあう義理はない」

すると、勇者さんは悩むような素振りを見せる

勇者「……そう。そうかもしれない」

子猫よろしく子狸の襟首を掴んで持ち上げようとするが、持ち上がらない

非力だ。勇者さんは、なかったことにした

勇者「お友達なんですよ？ 置いていっていいの？」

ちよつと……絶対にバレてるって、これ……

だが、歌人の笑顔に陰りはない

歌人「今度は、本当に……少し、君に興味が出てきたよ」

勇者「行きなさい」

歌人「ボクらが行ったあと、ゲートに宝剣を突き立ててみるといい。それで、ゲートは閉じるよ。じゃあね」

勇者「さよなら」

軽く片手を振る歌人に、勇者さんは言葉だけで答えた

苦笑らしきものを漏らしてきびすを返した歌人を、騎士たちは黙って見送る

上空で滞空している羽のひとの真下を、歌人が通り過ぎる

妖精「クリスさん……」

歌人「ばいばい。……ごめんね。ノロくんには、うまく言っというよ」

生き残った骨のひとたちを従えて、歌人はゲートに沈んでいく
最後まで、彼女は振り返らなかった

二八〇、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

こうして、僕らの戦いは終わった……

この戦いで、僕らは何を得て、そして何を失ったんだろう……

二八一、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

というか、おれのこん棒を返してくれないか

「子狸がレベル2に挑むようです」 part 6 (後書き)

注釈

・チェンジリング ハイパー

騎士たちの基本にして奥義とも言える、高速詠唱技術。

原理的にはチェンジリングと同じで、先の発言を詠唱に当てはめるものだが、これを騎士たちはを多人数で行い、高速で魔法を連結する。

詠唱とイメージを同一の規格で統一しなければならなかったため、汎用性は著しく損なわれるものの、魔法の撃ち合いにおいて圧倒的な速射性と火力を同時に実現できる。

純然たる戦闘技術であり、実生活に役立つことはいっさいない。それゆえ、チェンジリング ハイパーを修めた騎士たちはたまの休日在家でごろごろして過ごす。

なお、騎士たちはこの技術を「戦歌」と呼ぶ。かぶさる詠唱を和音に例えたものだが、正式名称は飽くまでもハイパーである。

通常のチェンジリングと区別するためにハイパー化したわけだが、「ハイパーとか……ねーよ……」と当の騎士たちには大不評だった。それなのに、どういうわけか数年周期で「いや、一周してむしろアリかもしれない」という勢力が現れる。

ハイパーをめくり、やがて騎士団を二分するほどの大論争が巻き起こったため、騎士団の軍規には「ハイパー禁止」という項目がある。

しかし、このことが、のちの騎士団にさらなる混迷をもたらすこととなる……。

光（聖）、闇（影）、火、水、氷（凍結）、雷（魔）、土（豊穣）に続く、第八の属性「ハイパー属性」の誕生と、ハイパーに魂を売

り渡した「外法騎士」の登場である……。

「もつともつと地底で槌振るおれたち」

六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれスラッシュ！

七、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ふむ……

八、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ふむ……

九、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ふむ……

一〇、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

ふむ……

さすがに本家本元の聖 剣は違うな……
人間が浸食魔法をここまで使いこなせるとは思えんが……

それにしても、この強度ときたらどうだ……！
傷ひとつ付いていない！
完璧じゃないか！？

一一、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

だめだな

一二、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ああ、だめだ

一三、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

うむ、まるでなっていないな……

一四、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

なにが不満ですかこんにゃろー！

一五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

空のひとをかばうわけじゃないが……

これ以上の出力を人間に求めるのは酷だぞ

まず分子という概念がないし、仮にあったとしても知識だけでは
な……

そもそも分子結合に干渉できるという前提で進めるなら
魔法でコーティングするしかないだろ

一六、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

元より人間にそこまでは期待してない
水平線を見て、あそこから先は凹んでるんだなあ……（ぼやくん
とか本気で考えてるような連中だぞ。おそろしい……

そうじゃなくて、硬すぎるんだよ
性能は高ければいいってもんじゃない

一七、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

そういうことだ
いまの一撃で傷ひとつ付かないようだと、まったくお話にならない
おれたちの目的は最強の鎧を作ることじゃない
最高の鎧を作ることだ

一八、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

左様……
不完全からしか芸術は生まれない
揺らぎの中にこそ真理はある

真理とは、すなわち芸術だ
芸術とは、すなわち爆発だ

一九、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

爆発？

いや、言いたいことはなんとなくわかるんだが……

おもむろに酒びんを取り出しながら言われてもな……

二〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

！？

おい

おい。お前ら

ひとに辻斬りみたいな真似させといて
なに飲んでんだてめーら！？

二一、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

アルコールなめんな！

二二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おこられた!?

ちよう理不尽!

なめてもねーし……

聞けよ!

飲み干すな!

二三、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ふむふむ……

ほほう……

二四、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

アルコールなめんな!

二五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

もう聞いたよっ!

この酔っぱらいどもが……

なんかおかしいと思ったら、揃いも揃って出来上がってやがる……

二六、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

子狸バスター（仮）よりも先に、おれたちが完成しちまった
……てコトだな

二七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

だまれ！

二八、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

酔ってません

二九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

その時間差やめろ！

三〇、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

うん？

うん

三一、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

ん？

おう

三二、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

お？

ん
……

三三、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

みよ
……

三四、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

みよ？

三五、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

みよ
……

みよつつ二世

三六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

だれ！？

三七、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

え？ だれ？

三八、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

え？ おれ？

三九、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

え？ なにが？

四〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸か！

四一、王国在住の現実を生きる小人さん（出張中

子狸じゃねーよ！

四二、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

そこはレスポンス早いんだな……

四三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

なにこの混沌とした河……

四四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あ？

四五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

やだ、ガラ悪い……

庭園の

歩くひとが負けたぞ

四六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ふうん……

意外だな

王都のが折れたか

いや、そうでもないのか

まあいいさ

大局は変わらん

それだけか？

四七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

驚かないんだな

お前、歌人のこと知ってたの？

なんで黙ってるかなー……

四八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前、コピーだな？

なにがあつた？

四九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、気になったから

いま反省会と称して勇者さんのお説教大会が開催されてて
なんとなくリアルタイムで一緒に聞いている

五〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

紛らわしいことすんな！

そして、おい！ そのこのつの付き！ そことそのこのつの付きも！

こん棒を振り回して踊るな！ 歌うな！

五一、連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

子狸じゃねーよ！

五二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

くどい！ だまれ！

レクイエム・毒針！

五三、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

おれカッター！

五四、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

この酔っぱらい、じつに機敏である

五五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ちっ……

わかったよ

海底の

おれが危惧していたのはべつのことだ

歌人がアリア家の刺客じゃないかと疑ってたんだよ
だから、心理操作するとき歌人を対象から外した
操作されたふりをするならよし……

そうでなければ、次の手を打つつもりだった

アリア家をあなどるなよ

感情を制御できるってことは

必要とあらば、どこまでも非情になれるってことだ

王都のは、人選を誤ったのかもしれない……

つまり……

五六、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

だからといって子狸でもねーよ！

五七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

しめん、ちよつと黙らせてくるわ

「もつともつと地底で槌振るおれたち」（後書き）

注釈

・浸食魔法

対象に浸食し、操作する魔法。スペルは「グレイル」。

その性質から変化魔法エリアに対しては優位を誇るが、レベル差を覆すことはできない。

一方、盾魔法ディレイは「外部からの干渉を弾く」魔法であるため、浸食魔法とは完全に均衡する性質がある。

ただし内部からの干渉には無力であるため、変化魔法と連結した場合は、その限りではない（変化の性質を取りこんでしまう）。

なお、人間たちには「浸食」と言ってもぴんと来ないらしく、「槍魔法」もしくは「貫通魔法」と呼ばれている。

結果的には同じことなのだが、ミクロの領域ではまったくべつの現象が起きている。

「槍（貫通）魔法」が問答無用で相手を殺傷せしめる貫通力を持つのに対して、「浸食魔法」は「対象を浸食」「浸食した対象を操作」という二段階の工程を踏む。

これらの違いがあきらかになつてしまうと、二番回路の存在にまで思索が及んでしまう恐れがある。

そこで魔物たちは「念動力」や「魔力」といった概念を人類に流布した。「念動力」とは、つまり効果を限定した「浸食魔法」を指して言う。

「はっまふ」

一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者さんの手によりゲートが閉ざされた

その後の話を少ししよう

地下をあとにした勇者一行と騎士たちは

食堂で、今後の予定について話し合いの場を設けた

人数分の椅子はなかったものの

騎士たちが床に正座するという

画期的な手法を勇者さんが提示したため

さしあたって問題はなかった

話し合いに関しては、勇者さんがひとりごとを言うという形式をとった

以下に記したのは、そのおおまかな内容である

@子供に出し抜かれるな

@民間人と殴り合うな

@戦闘中に演説するな

@最後に大技を持ってくる意図が不明

叱責は甘んじて受けるといふ

毅然とした態度で傾聴する騎士Aだったが
基本的に怒られているのはお前だけである

部下たちの視線を一身に浴びる騎士Aは

いつそ誇らしげでさえあった

なお、勇者さんは

拠点制圧の手柄を騎士たちに譲った

自身が置かれた立場を公表するのは
聖騎士位の領分を越えるからだろう

二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

また、この事件を機に
われわれの布陣にも多少の変化が生じた

骨のひとと見えるひとは
ライフワークのかたわら、少しでも力になればらと
レベル3のひとたちと合流する道を選んだ

三、墓地在住の今ときめく骸骨さん

は？ お前、なに言って

四、迷宮在住の平穩に暮らしたい牛さん

お前ら、ひまだろ？

五、墓地在住の今ときめく骸骨さん

はい。透き通ったのも連れて行きます

六、迷宮在住の平穩に暮らしたい牛さん

あいつはトカゲに回せ

七、墓地在住の平穩に暮らしたい骸骨さん

はい。回します

八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

激戦区へと身を投じる彼らは

また忙しくなりそうだ……と苦笑を漏らした

九、墓地在住の今をときめく骸骨さん

おい

おい。どういうことだ

この遣り口ッ……！

お前、いつからだ？ いつから……

おい！ いるんだろ！ 返事しろこんにゃろー！

この狸がああつ！

一〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

一方、歩くひとは……

一一、湖畔在住の今をときめくしかばねさん

おれ、勇者さんの実家に行ってくるわ

あんまり刺激したくないけど

曲がりなりにも娘さんを預かってるわけだしな

菓子折りとか持ってたほうがいいかなあ……

お前ら、何がいいと思う？

一二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

歩くひとは、勇者さん包囲網を形成する特殊部隊に志願

危険な任務になるが、きつと遣り遂げてくれるであろう……

一行が屋敷を出た頃、時刻は昼にさしかかろうとしていた

日の光に反応して、騎士Bに担がれていた子狸が目覚ます

寝ればたいていのことは忘れるお茶目な管理人さんであるが

今回に限っては分不相応にも記憶を保持していたらしい

子狸「あれ？ クリスくんは？」

妖精「あゝ……。急用が出来たとかで、先に出発した」

あまりにも適当な羽のひとの言い分であったが、しかし

子狸「か、完全に転校生パターンだよ……。！」

学校での再会を誓う子狸さんに死角はなかった

どうでもいいが

出席日数はレッドゾーンを突破し
なおも記録を更新中である

子狸の輝かしい人生設計は
着々と終息へと向かいつつある

一方、羽のひとの適当さ加減が
豆芝さんという具体的な形で現れたのは
なかば必然的な出来事であった

妖精「……………」

豆芝「……………」

子狸「お前も……………置いていかれちゃったのか？」

いちおう寂しさを感じていたらしく

子狸は一方的な共感を豆芝さんに寄せる

子狸「そっか……じゃあ一緒に……いや！　ここで主人の帰りを待ってたほうが、このひとは幸せなのかもしれない……」

とっさに路線変更する工口狸に、勇者さんが待ったをかける

勇者「ちょうどいいわ。連れて行きましょう。……待って、この子も魔物が化けてるんじゃないでしょうね……」

子狸「そくに違いない」

幸せはどこへ？

子狸の同意を得たとしても、なんの確証にもならない
勇者さんが豆芝さんに歩み寄り、手のひらで頬をなでる

一三、樹海在住の今をときめく亡霊さん

ふと思っただけ

あれってさ、もしかして退魔力を流し込んでたのかね？

一四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

あゝ……言われてみれば、たしかに
なるほど、そういうふしはあったな

一五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

歩くひとが剣をつまんだり手首を掴んだりしてたけど
とくにダメージはなかつたみたいだな

おれたちのこん棒アツクと原理は一緒なのかも

剣士のことなら、庭園のが詳しかったな……

王都のは何か知ってる？

というか絶対に知ってるよね？

一六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

知らねーし

おれが諸悪の根源みたいな言い方やめてくれる？

まあ、なんとなく予想はつくけど

一七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

出たよ……

一八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

はじまったよ……

一九、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

うるさいよ、お前ら

だから、凍結に近いつて言っただろ

アリア家の退魔力が無茶な数値を叩き出すのは
たぶんタイミングだ

三番の再計算が終わった直後に回線を閉じれば……
まあ、理屈の上ではそうなる……と思う

緑のひとと火口のの解析待ちにはなるけど

子狸とは比べものにならないほど
緻密なイメージを描けるんだろうな

二〇、海底洞窟在住のとりたらない不定形生物さん

勇者さんが退魔性を捨てたとき

同時に子狸がいららない子になるわけか……

二一、かまくら在住のとりたらない不定形生物さん

真人間になったらなったで二軍落ちか……

子狸に未来はねーな……

二二、管理人だよ

あるし！

「勇者さんが魔法を使えるようになったら
優しい先輩のおれが

奥義の数々を教えてあげるんだ！

おれの夢が走り出した！

二三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

奥義つてなんだよ

というか、お前の魔法は参考にならないから

二四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

仮にも人間（端くれ）なんだから、ちゃんと二番を使えよ
使ったら使ったでマイナーな方面に進むしよお……

二五、管理人だよ

そこはそつとしておいてもらえませんかね……
おれだって好きで土魔法とか使ってるわけじゃないし……

端くれ？ おい

それ先生のオリジナルだから
真似しちゃだめ

あ、かつこの中か
かつこの中なら許す

二六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

街に戻った勇者一行は宿屋へ直行

旅の疲れもあり、その日は泥のように眠った……

もつとも子狸だけは三時間ほどの仮眠で全快し
部屋をうるうるしたあと

夕方頃には活発に動きはじめた

けつきよく連れて戻ってきた豆芝さんと

黒雲号のお世話をしたあと

この小さなポンポコは何を思ったか

おもむろに魔法の練習をしはじめ

あえなく御用となった（街中）

子狸「そろそろレベルアップしたかなって思ってた……」

身元を引き取りにきた勇者さんに

子狸は檻の中からもの悲しそうに犯行の動機を語った……

騎士B「達者でな」

子狸「騎士さん……おれ……」

騎士D「泣くな。胸を張れ。もうお前は、おれたちの仲間だ」

勇者「……………」

まったくと言っていいほど無駄な小芝居を交えつつ
勇者さんに連れられて宿屋へ舞い戻った子狸は
その日の夜を、首輪でベッドにつながれて過ごした

そして明くる日の朝。今日である

エサを求めて子狸が一階の食堂におりると

一足先に部屋を出た勇者さんが椅子に腰かけて
なにやら手紙らしきものを読んでいる

肩に乗っている羽のひとが

食い入るように勇者さんの手元を覗き込んでいた

手紙にしては大きめだが……

なんぞ？

二七、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

驚いたぜ……

おい。お前ら

これ、情報誌だ

人間が、青いひとたちの速報と似たものを
書面で起こしてる

二八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん
やられたな……

二九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ、人間を甘く見たツケがこれか……

まんまとパクられちまったよ……

三〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）
んなわけねーだろ！

とことこと歩み寄ってきた子狸に

勇者さんは開口一番

勇者「クリステイナ・マツコール」

子狸「うん？ うん」

子狸さんは華麗にスルーして席につく

子狸「もうごはん食べた？」

勇者「まだ」

子狸「今日のごはんは何だろう。おれ、朝はしっかり食べないとだめな方なんだ。知ってた？」

勇者「二日前も同じこと言ってたわ」

子狸「なんだか照れるね……」

勇者「みじんも」

子狸「……マツコールだって？」

妖精「反応遅かったなあ……」

羽のひとの控えめなツツコミが入る

勇者さんは、もう慣れたものである

勇者「例の屋敷の調査を、騎士たちに命じておいたの。二階の寝室に、屋敷のあるじと思しき人物の肖像画が大切に保管されていたそうよ。本来なら画家のサインが入るべきところに書いてあった名前が……クリステイナ・マツコール。たぶん、あの子の本名でしょうね」

やはりオリジナルがいたのか……

子狸「そういつことが……」

なにかをこらえるような眼差しで中空を眺める子狸

いつからだろう？ おれたちが子狸さんに何も期待しなくなったのは……

そして、それは正しい

子狸「お姉さんか妹さんがいるんだね」

勇者「あなたにしては上出来ね」

子狸「よく言われる」

妖精「それもどうよ」

羽のひとのツツコミが冴え渡る

この話はおしまいとばかりに、勇者さんは手元の情報誌を指し示す

子狸が身を乗り出した

子狸「それが？」

勇者「どれが？」

なにを期待している

やましいところがあるのだろうか

子狸は慌てて弁明する

子狸「ああ、つまり……少し複雑になるんだ」

勇者「ためしに言ってみて」

子狸「……仮にだよ？ そう、仮にだ。A君（仮称）の友達に姉がいるとしたら、そのお姉さんは、A君にとって、いったい何なのか……それを考えていたんだ」

勇者「赤の他人よ」

妖精「正解」

複雑でもない

しかし子狸は不満げである

子狸「……お嬢には、そういうところがあるよね。お嬢のそういうところを、おれは……あれだ、あれ。あれ……あれしたい」

勇者「……矯正？」

子狸「……どうだろうか。一概にそうとも言い切れない気もするし……一概に」

さいきん覚えた単語らしい

ちなみに、矯正というのは正しい形に直すという意味だ

三一、管理人だよ

なにそれ。じゃあ、矯正っていう言葉は何のためにあるの？

三二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

お前のためでないことだけは確かだ

三三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ここでお前らに報告します

いま全ての謎が解けた

三四、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

なんぞ？

三五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なんぞ？

三六、管理人だよ

なんぞ？

三七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

これだ

魔物の脅威にさらされている街に対する
勇者さんの反応

次の街へ（冷静）

勇者さんの反応に対する子狸さんの反論

一、勇者のとる行動ではない（理想）

二、逃げてはならない（願望）

三、危ないことはして欲しくない（願望）

四、自分が行く（解決）

子狸い……

三八、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

子狸い……

三九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸い……

四〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん

なんたる……

底の浅さ……

お前というやつは……

四一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

絶望した

子狸さんの底の浅さに絶望した……

四二、管理人だよ

勇者さんを立派な勇者に育て上げる……

それが、おれの使命なんだ！

そして……ふふふ

これ以上は教えないよ

四三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

だから、浅いんだよ

バウマフ家の人間が考えることは、いつの時代も変わらんな……

千年間も同じこと議論してると……さすがに飽きるわ

パス

四四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

めぐりめぐって、けっきょく同じ結論に至るんだな……

なんなの？ 本当に……べつにいいけど……

パス

四五、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

口に出すのも恥ずかしいわ……

パス

四六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いい加減に諦めろよ……

パス

四七、管理人だよ

お前らと人間が仲良く暮らせる世界を、おれは作るんだ！

四八、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

言うの！？

言っちゃった！

四九、管理人だよ

……誘導尋問か……

五〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

尋問した覚えはないんですけどね……

「ありあけ」

五一、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

子狸さんの野望とか興味ないんで……
話を先に進めますね

なにか心境の変化でもあったのか
勇者さんが情報誌を子狸に差し出す

勇者「読んでみて」

子狸「どの行から？」

受け取る子狸。席を立つ

勇者「だれも朗読しろとは言ってないわ」

子狸「もちろんそのつもりや」

子狸が止まらない
勇者さんの言葉を、話が早くて助かるというニュアンスでとらえ
たらしい

勇者「頭の中で読みなさいと言ってるの」

子狸「え〜……。おれ、感情移入しちゃうからなあ………」

しぶしぶと着席する子狸

どれどれ……

『山中に巨大なメノツドパール現る。戦隊級か？』

おふっ

五二、樹海在住の今をときめく亡霊さん

とつとつおれの時代がやってきた！

五三、沼地在住の平穩に暮らしたいトカゲさん

お前はこっちだ

五四、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

そして終わった

五五、樹海在住の平穩に暮らしたい亡霊さん

手紙、書きます……

五六、管理人だよ

え？ どこ行くの？
せつかく合流できたのに……見えるひとまで……

五七、樹海在住の今をときめく亡霊さん

管理人さん……

いままでつらく当たって、ごめんな
おれ、本当はお前のこと……

五八、沼地在住の平穩に暮らしたいトカゲさん

そついつのいいから

おら、来たぞ

おつおつ、白アリの軍隊どもが雁首を揃えやがってよう……

五九、樹海在住の今をときめく亡霊さん（出張中

つたく、仕方ねーな……

かまくらのひと！

戦況がおちついたら、今度一緒に飲みに行こうぜ

おれのゴースト拳法が火を吹くぜ！

うおおおおっ

六〇、沼地在住の平穩に暮らしたいトカゲさん

なんだと!?

なんだ、その技は!?

お前、いつの間につ……!

あ、お邪魔しました

どうぞ構わず続けて下さい

六一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

達者でな

六二、管理人だよ

ゴースト拳法とな……

六三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

こら、めつ。興味を持つんじゃないありません

続きを読むぞ

『昨夜未明、アリア家領内の山中に突如として巨大なメノッドパル
が出現した

近隣の山村は先日メノウポーラの襲撃を受けており
なんらかの関連性があるのではないかと関係者は見ている』

おれたちの情報を加味して要約すると

この街の事件が終息したから、こっちに来るはずだった騎士団の
中隊が

近くまで来てたのもあって、見えるひとを撃退した

指揮をとったのは、偶然にも山村に逗留していた勇者さんの親父
さん……アリア家の現当主だな

んで、情報誌を書いた連中の所見によれば

今回の亡霊騒ぎは本当なら勇者さんの初陣になるはずだったと

そうならなかったのは、だれとは言わんけど

なんか勇者さんと一緒にいるマフマフ（誤記？）とかいう小僧の
せいじゃないのかなあ？ と

指一本でも勇者さんに触れたら明日の朝日は拝めないかもしれな
いなあ……とご丁寧に忠告してくれてる

あと、見えるひとの勇姿を描くべきところに

なぜか勇者さんの似姿がでかかど載ってる

六四、管理人だよ

なるほど……

六五、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

さりげなく懐に入れようとすんな！

まったく……このエロ狸め……

六六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

羽のひとが、エロ狸から奪還した情報誌を勇者さんに手渡す

子狸「なにをするんだい」

妖精「しね。……お返ししますねっ、リシアさん」

勇者「ありがとう」

情報誌を回収した勇者さんが、子狸に感想を求める

勇者「読んでみて、どうかしら？」

子狸「将来が楽しみだと思いました」

それ、たぶん違う感想だね？

勇者「そう？ やっぱり貴族と平民では感じ方が違うのね……参考になったわ。今日のお小遣い、少し増やしてあげる」

子狸「まじでか」

勇者「ええ、喜びなさい。いまの無礼な発言に目をつぶってあげるわ」

お金で解決しようとする勇者さんに
お金では買えないものがあるのだと
子狸さんは身をもって教えるのであった……

羽のひとが精いっぱい可愛らしく首を傾げるが
いまさら手遅れの感は否めない

妖精「でも、それどうしたんですか？　なんだか変わったお手紙ですわね」

やはりナビゲーター役は欠かせないと
われわれは再認識せざるを得ない

勇者「うちには、よその国から流れてきた技術者の集団がいて、わたしがその管轄を任せられているの」

妖精「その人たちが作ったんですか？」

勇者「そう。技術者と言えば聞こえはいいけど、けっきょくは無職なのよね。あんまりにも何もしないから見捨ててきたのだけれど、そうしたらこれで一旗上げるとか言い出して……ようは大衆向けの開かれた諜報機関を立ち上げるつもりみたい」

子狸「……つまり？」

妖精「わあ、なんだか面白そうですねっ。きつとうまく行きますよ

っ

勇者「そんなに簡単には行かないわ。少なくとも他の貴族はいい顔をしないでしょうし、情報の鮮度を売りにするというのは良い考えかもしれないけど、肝心の正確性には疑問が残る……」

そう言っただけ勇者さんは、情報誌を綺麗に折り畳んで封書した

勇者「何より……不特定多数の人間の手に渡るとというのが危険すぎるわ。発想がおかしい……国が認めるとでも思ってるのかしら？ この案は没ね」

かくして無情にも、いま……ひとつの夢が終わりを告げたのである……

六七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

目のつけどころは悪くなかった……

おれは、アリア家に彼らという先駆者がいたことを忘れないだろう……

六八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

それにしても、製紙技術の発展が目覚ましいな

大衆向けということは、少なくとも大量生産のめどはついているということだろう

あれは連合国の技術だったか？

六九、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

ああ。これまでは発光魔法で誤魔化していたが
さすがに歯止めがきかなくなってきたな

伝播魔法と組み合わせれば

おれたちの真似事くらいは出来ると踏んだんだが
見通しが甘かったか……

おや？ 子狸さんの様子が……

子狸「お嬢、お嬢」

勇者「なに」

子狸「おれ、そのひとたちの気持ちがわかる気がするんだ」

勇者「……無職の？」

子狸「ちがうよ。その無職って言うのやめて？ おれ、将来の夢に
無職って書いたら、こっぴどく怒られたことがあるんだ」

勇者「でしょうね」

子狸「思いつかなくて、最後に書き直そうと思ってたんだけど、忘
れててさ。ケアレスミスっていつの？」

勇者「あなた、ときどき連合国の言葉を使つわね。生意気だわ」

子狸「そりゃそうだよ。おれの父さんの……生意気？」

勇者「お父さまがどうしたの？」

子狸「え？ うん……。おれの父さんの父さんと母さんが」

勇者「祖父祖母」

子狸「そう、それ。いや、知ってるよ。わかりやすく言ったの」

妖精「わかりやすくなってないだろ」

子狸「……なってますんか？」

妖精「うむ」

子狸「そうか……。いまひとつの謎が解けた。自分でも自分の作文が読みにくいなあとは思ってたんだ……」

妖精「自覚はあつたんだな……」

ひとことで済むところを、わざわざ表現を重複させるからな……

七〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ところで、お前ら

グランド狸が連合国在住って言うのはまずくないか？

七一、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん
それもそうだな

おい、子狸。なかったことにしろ

七二、管理人だよ

お祖父ちゃんになにをする気!?

七三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お前がなにをする気だよ!?

お前の発想が怖いわ!

七四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

とりあえず、そうだな……

お前「おれのお祖父ちゃんが連合国かぶれなんだよ」

こんなところか？

七五、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

待て、厳しい

子狸はふつうに三ヶ国語を操れる

今後のことも考えると、祖父が連合国かぶれという理由は弱い

帝国言語は方言みたいなものだから誤魔化せるとしても

連合国言語はまったくの別物だからな

くそつ、内心おれたちの子狸さん意外と出来る子とか思ってたのに
まさかこんなところで足がつくとは……！

例の言い訳……通用するかな？

七六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

これからの時代はグローバルだよっていうやつか……

厳しいだろうな……

勇者さんは王国貴族だし、容赦なくツッコまれるおそれがある……

とりあえず山腹のの案を採用して

ツッコまれたら連合国の絵本を幼い頃から読まされていたと補足

する……

こんなところか

七七、管理人だよ

わかった

言ったよ

勇者「ふうん……」

だいじょうぶみたい

七八、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

なにその淡白な反応……

びっくりするくらい子狸に興味ねーな……

七九、管理人だよ

え!?

そんなこと……

おれ「お嬢!」

勇者「うるさい。なに」

おれ「お嬢は、おれのことどう思ってるの!?!」

勇者「さあ?」

おれ「さあ……」

さあって……どういう？

それは、いつしか愛に変わりますか？

八〇、住所不定のどこにでもいるようになってふさん

変わるかなあ……？

少なくとも恋愛感情ではないことだけは確かだけど
昨日もなんだかんだで迎えに行ってるんだよな……

八一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

前に、話してて退屈しないとか言ってたから
そっいう感じなのかも

とりあえず、そこでボケてみたら？

八二、管理人だよ

なるほど……一理ある

おれ「みよ……」

勇者「みよ？」

妖精「みよ？」

おれ「みよっつ四世」

勇者「……………」

妖精「……………」

うむ…………

八三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お前ら裏で示し合わせでもしてんの！？

八四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

ど、どうした海底の…………？

八五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

っ…………！

いや、すまん。こっちの話だ…………

八六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸の渾身のポケが不発に終わったところで
一行は朝食をとることに

勇者「……………（もぐもぐ）」

勇者さんは食事をとっているとき絶対に喋らない

一方、子狸はというと……

子狸「ほほう……………」

とか

子狸「これは……………なるほど」

とか訳知り顔でグルメを気取る

そのたびに羽のひとに

妖精「なんだよ」

とか

妖精「言えよ」

とかツッコまれる

サバイバル生活に慣れている子狸は
とにかく食べるのが早い

朝食をペロりと平らげ、手持ち無沙汰になるや

子狸「はちみつおいしい？」

だの

子狸「ほら、頬についてる」

だのと羽のひとにちょっかいは出しはじめる

そのたびに羽のひとが

妖精「はちみつうめえ……」

だの

妖精「さわんな」

だのと冷たく対応するも
構ってもらえて子狸は嬉しそうである

子狸「可愛いなあ……かぶと虫みたいだ」

妖精「よし、わかった。ここじゃなんだな……表に出ようや」

子狸「うん？ うん」

子狸の大絶賛に、そのとき羽のひとが動いた

決着をつけるときがやってきたようである

勇者「……………（むぐむぐ）」

「ありあけ」（後書き）

注釈

・発光魔法

光を操る魔法。スペルは「パル」。

この世界の人間が最初に習う魔法は、まずこれであろう。

単純に照明としても使えるが、攻性魔法に聖属性を付与する、文字や図形を空間に投影するなど、非常に汎用性が高い。

目で見えたものをその場で複写したものは「静止画」と呼ばれ、犯罪の抑止にもつながっている。

技術的には「動画」を作り出すことも可能ではあるが、「で？」と一笑に付されるのが現状である。

発光魔法が存在するがために、この世界の人類社会では紙媒体の情報はいささか重視されない傾向がある。

しかし書籍ともなると発光魔法では再現が困難であるため、義務教育の施行により民間人の識字率が跳ね上がったこともあり、紙の需要は増加している。

「たびたち」

八七、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

そして、おれの紫電三連破が子狸に炸裂したのである

子狸「ぐぶうっ……！」

あみ状に編んだ盾魔法だけを残して、吹き飛んだ子狸がいつの間にか集まった観衆に突っ込み吞まれる

歓声が上がった

八八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

これは決まったか？

補助型だっつってんのに

羽のひとの戦士としての適性は群を抜いてるな……

八九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

勘がいいんだ

空間認識能力が並外れてる上に

踏んだ場数が違う

九〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや、羽のひとの真に恐るべきは

あの闘志だよ

根っからの戦いの申し子なんだ

九一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

だが、子狸のエンジンもそろそろ温まってきた頃合だ……

子狸「カウントをやめろ」

だれもとっていないカウントを制止して

子狸が何事もなかったかのように立ち上がる

観衆を押しつけて進み出る

その表情に浮かぶ不敵な笑み……

完全にスイッチが入ったようである

子狸「ひとつ賭けをしようか。この勝負……」

そう言って、ぼろぼろになった上着を破り捨てる

貧弱な上半身があらわになった

ダメージがあるようには見えない

とっさに自分から後方に跳んで衝撃を受け流したらしい

やはり、おれたちの攻撃が読めるのか……？

子狸の鋭い眼光が羽のひとをとらえる

子狸「勝つたら、おれは君に頼ずりをするとしよう」

妖精「化け物め……！」

吐き捨てる羽のひとにも子狸さんはひるまない

子狸「いいね。じつにいい。そうやって小鳥みたいにさえずってくれよ」

九二、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

エロ狸めっ

九三、管理人だよ

好きに言うがいいさ

走り出したおれを、いつたいだれなら止められるっていうんだ？

だれも止められやしないさ……

九四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

旅支度を終えた勇者さんが
黒雲号にまたがって通りを歩いて行く

勇者「……………」

少し進んでから一度だけ振り返って言う

勇者「先に行ってるから」

目にも止まらぬスピードで人垣を抜けた子狸が
勇者さんに追いつがる

子狸「あ、待って！ 一緒に行こうよ。すぐに準備してくるから！」

妖精「は、疾い……………」

黒雲号に頬をすり寄せられている子狸を
勇者さんがちらりと見下ろしてひとこと

勇者「なんで裸なの？」

子狸「ちがうよ。逆だよ。服を着てるのが不自然なんだ」

勇者「それ、変質者の理屈だわ。…………三十秒で支度してきなさい」

子狸「おうー！」

勇者「返事はハイでしょ」

子狸「はい」

この遣り取り何度目だろう……？

勇者さんが貴族なのは確かなんだから
言葉遣いくらい正せばいいのに

宰相とかにはふつうに敬語を使ってるんだから
出来ないこともないだろ

九五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

擁護するようで嫌だが

そついう目で彼女を見たくないんじゃないか？

九六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、それ以前に……

たぶん勇者さんが貴族っていうのを忘れてるんだろう……

九七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

さすがにそれはないと思うが……

開祖しかり……お屋形さましかり……

バウマフ家の人間が考えることは本当にわからん……

おれたちの理解を越えている……

着のみ着のまま出てきた子狸が

替えの服など持っている筈もない

調理器具一式を乗せた豆芝さんのくつわを引いて
上半身はだかの子狸が勇者さんに笑いかける

子狸「待った？」

勇者「待てと言ったのは、あなたでしょ」

勇者さんはつれない

子狸の肩に腰かけた羽のひとが、ふと疑問を呈する

妖精「ノ口くん、お馬さんに乗らないんですか？」

子狸「え？ どうして？」

荷物よろしく相乗りしていただけの子狸に
お馬さんの操縦など荷が勝つというものだ

勇者「要訓練ね」

勇者さんがぼつりと呟き、一行は出発する

ん？ またか……

闊歩する黒雲号と豆芝さんを

元気に駆ける街の子供たちが追い抜いて行く

祭りでもやってるのか？

先の暴動といい、何かと騒がしい街だな……

九八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

先行して偵察してこようか？

九九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや、いい

不穏な気配はしないし、見るだけならおれでもできる
むしろ情報が先行しすぎて

子狸が妙ちくりんな行動をとるほうが怖い

一〇〇、管理人だよ

こうして六人で歩いてると、まるで夫婦みたいだ……

一〇一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ただでさえ思考が先走ってるからな……

一〇二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

異種格闘技戦も真つ青の家族構成だな……

一〇三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

どうやら本当に祭りだったらしい

街道の解放を記念して

だれがいちばん先に次の街に辿りつくか
レースを開催するようだ

こいつら人間は、なんでも商売に結びつけるなあ……

街門を出た先にあるスタート地点の分かれ道に

自慢の馬を連れてきた参加者たちが所狭しと列をなしている

街道のわきで今か今かと出走のときを見守っている観客たちの中
には

さつき子狸と羽のひとの対決を見学していた顔ぶれもあるな

勇者さんは珍しく感心した様子だ

勇者「なるほど……警備上の問題はあるけど……悪くない案だわ。
わたしにはない発想ね……」

子狸「……あ！」

会場の警備に駆り出されたのだろう

騎士Bと騎士Dが観客たちの列を整備しながら

子狸の姿を発見してにやりと笑う

係員「参加をご希望される方は、スタート地点に並んで下さい！」

顔見知りの騎士に高らかとこぶしを突き出して応えた子狸が
係員に参加者と間違われて連れて行かれる
恰好が恰好である

係員「参加をご希望ですか？」

子狸「人生にわき役なんていない」

係員「？ では、こちらへ」

さらば子狸。あ、おれもか……

羽のひと、あとは任せた

「〇四、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

おっ

勇者「……………」

関わり合いを避けて無言で見送る勇者さん
その判断は正しい

特設テント内に座る
イベント進行担当の人間の声が会場に響き渡る
伝播魔法と拡大魔法を組み合わせたんだらう

振動のなんたるかもわかっていないくせに
紙コップをマイクに見立てて使っているのが小賢しい

解説「さあ、参加者が出揃ったもようです！ レース開催も間近となりましたが……。隊長さん、どうでしょう？ これは、と思う参加者の方はいましたか？」

そう言つて紙コップを向けた相手は
となりで威風堂々と腰かけている騎士Aである

会場から「引つ込め！」だの「守銭奴が！」だのと野次が飛ぶ

それらを片手を軽く上げて制した騎士Aが
朗々と自己アピールをしはじめる

騎士A「ただいまご紹介に預かりました、王国騎士団0127小隊所属、実働部隊の隊長であります。自分を金の亡者などと呼ぶ心ない意見もありますが……。この場で訂正させて頂く」

解説「……と仰いますと？」

騎士A「この世で何よりも重要なのは……。誰よりも何よりも金を稼ぐことだ。お前らもわかって言ってるんだろ。ああん？ つまり……」

解説「ありがとうございましたー！」

守銭奴の名に恥じない演説であった

騎士Aの大胆な発言を途中で打ち切ろうとする解説であったが

そうはさせじと騎士Aが解説の手首を掴む

騎士A「優勝候補かどうかは知らんが……ふん……見知った顔がいくつか混じっているな。せいぜい見苦しい泣き顔を晒さんようにしろ。以上だ」

そう言っつて騎士Aが目線に向けたのは
参加者の一人でもある商人であった

なにか因縁でもあるのか

二人の視線が空中で交錯し火花を立てる

不意に……

ふっと弛緩し苦笑らしきものを浮かべた
両者の顔面に残る青あざが痛々しい

一〇五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

どうでもいい感動がここにあった……

一〇六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

一方その頃……

流されるままにスタート地点についた子狸さんは
なんとなく闘志を燃やしていた

子狸「絶対に負けるもんか。豆芝は、おれだけじゃない、二人ぶん

の思いを乗せてるんだ」

百歩譲って豆芝さんはそうだとしても

お前はお馬さんには乗れないよね？

どうするの？ 走るの？

一〇七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

もう好きにするといいよ

どのみち勇者さんとは次の街で合流できるだろうし

一〇八、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

歩くひととの一件で

勇者さんにも思うところがあったのかもな

街道わきから回り込んだ勇者さんが

黒雲号から降りて、行く手を遮る観客たちに命じる

勇者「どきなさい」

前に本人も言ってたけど

アリア家の人間には本当に異質なオーラがあるんだな

言われるがままに道を譲る人間はともかく

とっさに反論しようとした人間も

勇者さんを一目見るなり言葉に詰まって

黙って道を譲る

貴族だから？ それとも……
本能的な恐怖を感じるのか……

準備体操をしている子狸に

観客に混ざった勇者さんが声をかける

勇者「ちょっと、こっちへいらっしやい」

子狸「え？ うん」

のこのこと勇者さんのあとをついていく子狸さん
豆芝さんもそれに続く

勇者「ここ」

子狸「あい」

観客たちから少し離れて、地面を指差す勇者さんに
子狸はおとなしく従う

正座である

勇者「あなたに少し尋ねたいんだけど……レースに参加してどう
するの？」

子狸「もちろん勝つよ！」

勇者「勝ってどうなるの？ 名誉？ 下らない……。馬の脚に負担

をかけるだけだわ。無意味……そのひとことに尽きる」

勇者さんの声は凜としていてよく通る

命令し慣れたもの特有の威厳に満ちた声だ

彼女の言葉が、参加者たちの胸に突き刺さる

だが、子狸は反論した

子狸「そんなことない！ 名誉とかじゃないんだ……おれたちが走るの……そこにロマンがあるからだよ！」

子狸の魂の言葉に衝き動かされるように

係員のチエックフラッカーが振り下ろされる

解説「さあ！ 各馬一斉に出走しました！ 果たして栄冠は誰の手に！？ おや？ なにかトラブルでしょうか？ 飛び入りの半裸少年の姿が見えません。……ああ、お説教されてますね」

騎士A「なぜだろうな、他人事のようにには思えん。……小僧！ 今回は諦める。だが、お前には守るべきものがある筈だ。それは見失ってはいかん」

遠のいていく栄光に「ああ……」と手を伸ばす無念の子狸

勇者さんはしれっとした顔で

近くまで寄ってきた黒雲号にひらりとまたがる

勇者「焦っても仕方がないわ。わたしたちは、のんびり行きましょ」

一〇九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん
なんか勇者さんが言うど裏がありそうだな……

一一〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん
この人は、どこまでわかって言ってるんだろうな……

一一一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん
まあ、そのへんは気にしてても仕方ないだろ

一一二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中
子狸「おう！」

勇者「返事ははい」

子狸「はい」

少なくとも、おれたちの子狸さんは何もわかってない
この格差はなんなんだろう……

「たびたち」（後書き）

注釈

・紫電三連破

相手の死角から高速で懐に飛び込み、くるくると回転しながら三連撃を見舞う、羽のひとの大技。

この技に限らず、羽のひとの最大の能力は小さな身体を活かしたトリッキーな高速飛翔にあると言える。

人間が使える範囲で「必中という性質」の魔法は存在しないため、羽のひとが全力を発揮したなら（それがたとえ設定上の強さだろうとも）いかなる屈強な戦士でも三分と保たずマットに沈むことだろう。

ちなみに、勇者一行の旅に随行する羽のひとは本来なら臆病で人見知りな个体という設定があるのだが、バウマフ家の人間をしばき倒すときだけ勇猛果敢になるのはいつものことである。

「第三回全部おれ定例会議」 part 1

0、空中庭園在住のとるにたらない謎の議長さん（出張中

05「お待たせしました」

04「遅いぞ。われわれもひまな身ではない……重々承知のことと思うが」

03「左様。時間は有限……それはわれわれにとっても例外ではないのだ……」

おれ「05、以後気をつけたまえ」

05「はっ。感謝します」

01「……全員揃ったようだな」

おれ「ああ。では、これより第三回全部おれ定例会議をはじめ。各自、順に報告を」

04「では、自分から。王国、帝国、連合国の騎士団は各地にてレベル3と激しく交戦中ですが、現時点では一進一退の攻防が続いているもようです」

おれ「ふむ……。詳細をまとめたものはあるかね？」

04「予測値ではありますが、進軍の状況を映像化したものはこちら」

01「主モニターに回せ」

03「ふむ……」

05「……なるほど。こうして見ると、三ヶ国の協調はおろか、国内でも意見が割れているようだ。作戦行動というには稚拙すぎる」

04「ああ。いまのところは騎士団の一部が暴走し、それを上層部が止めようと躍起になっている、といったところだろう。だが……」

おれ「状況は変わる。そういうことかね？」

04「否応なく。……人間たちは勝ちすぎました。自分たちは最後には勝つと心のどこかで信じている。いつまでも弱腰な態度では……」

03「内乱を招く、か。なるほど、それでは本末転倒だから……」

おれ「状況はわかった。他に何かあるかね？」

05「では、自分から一つよろしいでしょうか？」

おれ「構わん。続けたまえ」

05「はっ、勇者一行が街を発ちました」

01「勇者か……」

おれ「……ふむ。いい機会かもしれない。おい、例のものを」

03 「はっ、それでは。モニターをご覧下さい」

05 「これは……？」

04 「勇者一行と、その周辺の戦力を分析したものだ」

【アレイシアン・ア（ジ）ジエステ・アリア】

『アジエステ聖騎士位の称号名を継承する王国の大貴族、アリア家の少女』

「アジエステ」とは「アジ（栄光）」、「ジエステ（騎士）」の意であり、「アジジエステ」と称しても誤りではない。

「称号名」とは国際的な位階を示し、対魔物戦をはじめとする有事の際に指揮系統が混乱をきたさないよう制定されたもの。

「アジエステ聖騎士」には自身の判断に依って自国他国を問わずして騎士たちを統率する権限を与えられている。

ただし「マリアン元帥」「ネウンス大隊長」「エウロ中隊長」の名において発令された作戦行動に支障をきたす場合はその限りではない。

とはいえ「マリアン聖騎士位」「エウロ英雄号（公式には明示されていないがアリア家のみを指す）」の威光は大きく、中隊規模の作戦行動ならアリア家の指示が優先されるといのが実質的な現状である。

『アリア家の人間は、自らの感情を完璧に抑制できるという特異体質をしているため、いかなる状況においても肉体が許す限り可能な範囲で最高のパフォーマンスを発揮できる。』

また「感情を制御できる」「外部からの干渉をシャットアウトできる」ことから、尋常ならざる退魔性を持つ剣士でもある。

しかし戦士としての修練をとくべつに積んでいたわけではない

め、身体能力と技量は常人の域を出ない。まして体力ともなると同年代の平均値よりも劣る』

王国には「意識的に魔法を使わない」ことで「魔法からの干渉を最低限に抑えた」人間がいる。「剣士」「剣術使い」と呼ばれる人間だ。

戦士としては元より、日常生活を営む上でもメリットよりもデメリットの方が大きいのだが、「剣術」は一部の貴族の秘伝であり、またステイタスでもあるがために現存した古代の技術である。

『貴族の名に恥じない教育を受けて育ったためか、教養に欠ける平民を完全に「下」と見なす傾向がある。』

これは王国貴族に共通する思想であるが、彼らの場合はアリア家ほど顕著ではない』

「貴族」とは王国の「最初の国民」の子孫である。

初代国王の願いを継ぎ、「誰もか笑顔で暮らせる国」を目指した結果が「自分たちの意思を色濃く継いだ子々孫々がそうではない民らを導く」形態へと至った。

こうした、言ってみれば「効率的な体制」が、のちの「王権分離」ひいては「帝国」の誕生、さらには「二大国への反発として」「連合国」の樹立を招くこととなる……。

『アリア家の現当主である父に命じられて領内の見回りをしていたところ、山村が魔物の襲撃に晒される現場に居合わせることとなり、「光の精霊」なる怪しい生命体から「精霊の宝剣（聖 剣）」なる胡散臭い力を授かる。』

その力で魔物を撃退する際に「あのお方に命じられて」とか魔物が言ったせいで、魔王が復活したと勘違いして上層部に報告したところ、「ははっ……」（苦笑）「という芳しくない反応が返ってきた

たため、それならばと単身魔王討伐の決意を固め、現在に至る』

「聖 剣」とは勇者の代名詞であり、勇者一行に襲いかかる数々の危機を奇跡のパワーで切り開いてきた「光輝の剣」である。

その正体は「詠唱破棄」「発光魔法」「浸食魔法」「変化魔法」の連結魔法であり、悲しいことに魔物たちのコントロール下にある。

『自他の生命を「有益か否か」で秤にかける冷徹な面があり、必要とあらば自分自身の命さえ迷わず危険に晒すことも。』

品のない人間が嫌いと言っているように、ある一定以上の悪徳に及ぶ人間にはいつさい容赦しない。

つまり非常に独善的な人間であるが、その苛烈な性質が他の人間たちを魅了する吸引力として働くこともままある』

勇者『平気で、ひとの心をもてあそぶような真似をする……。そう
いうの、気に入らないわ』

おれ「ふむ……」

03「ふむ……」

04「ふむ……」

05「ふむ……」

01「もう一度だ」

03「はっ」

勇者『そういうの、気に入らないわ』

おれ「うむ……」

04「ほほう……」

05「なるほど……」

03「なんだか照れますな……」

01「ああ。……次だ」

おれ「問題のバウマフ家か……しかし……」

01「避けては通れませんよ」

おれ「そうだな……。すまん、続けてくれ」

03「はっ」

子狸『チク・タク・ラルド・デイグひゃっ!?!?』

おれ「……これは馬ではないのかね?」

03「馬ですな。ロバと似ていますが……れっきとした馬です」

おれ「そういうことを訊いているのではない。これは馬だろっ」

04「黒雲号と呼ばれているそうです」

05「正確にはノロですね」

03「名前も同じですから、いつそこれもアリかと思ひまして。本人をモニターに出すと会議になりませんし……」

おれ「……しまらん。まあいい。続けたまえ」

03「はっ」

【ノロ・バウマフ】

『魔物たちの相互ネットワーク「こきゅーとす」の現管理人。別名「子狸」。

非凡な実父とは異なり、典型的なバウマフ家の少年である。

魔物たちからは「比較的まともな方」と称されているが、それでも手に負えない。たまに暴走する』

「魔」とは本来的に「理解の及ばない不思議なもの」を指し示す語であり、「魔物」とはつまり「不思議な生き物」を意味する。

人間たちの手前「がんばれば倒せるの」と「がんばっても倒せないの」とで住み分けているが、基本的に不老不死で無敵なナイシガイである。

これは個人的な意見ではあるが、バウマフ家の人間は夢見る素敵生物たる魔物たちをもっと敬うべきではないだろうか？

『バウムフ家とは「魔法に心を与えることで魔物を生み出した」張本人の子孫であり、その当時からすであまり物事を深く考えないという困った性質を持っていた。

魔王討伐の旅シリーズにおいて勇者を導く役どころを担うも、うっかり魔王が実在しないことをバラしたりするので、そのたびにじつは魔王の腹心だったり、勇者の危機に颯爽と現れる謎の覆面戦士になったりと忙しい役回りである。

またバウムフ家の人間は、魔物たちの英才教育により人間でありながら「魔物寄りの魔法」を使うため、そこを勇者にツッコまれたりすると、じつは古代文明の末裔だったりもするという。

これ以上誤魔化しきれないところまで来る、あるいは魔物たちが面倒くさくなってくると、人知れず二重スパイしていたところを見つかつて処刑されたり、魔王軍の幹部を道連れにして儂く散ったり、復活した超古代文明の兵器を鎮めるために人柱になったりする。

そして、たいていあとでうっかりバレる。

なぜか勇者とウマが合うことが多く、救国の英雄となった勇者が行き先も告げずに姿を消した場合は、まず間違いなくバウムフさんのひとと一緒に仲良く暮らしてたりする』

けっきょくのところ、バウムフ家の人間が魔物たちの「トラップ」として機能していることは認めざるを得ない。

彼らが脊髄反射な言動をとることで魔物たちの「筋道に沿った」計画は脇道に逸れることが多く、それが結果的に旅シリーズの行程を複雑にする。

歴代の勇者たちがドッキリのプラカードが出現するまで魔物たちの真相に気がつかないのは、バウムフ家の理屈の合わない行動によるところが大きい。

『基本的にお人好しで涙もろいところがある少年だが、状況に応じて熱血漢になったりするのには魔物たちによる特訓の成果である。

父親は連合国出身だが、長じてからは王国に移り住んだため、現在は王都に居を置いている。

義務教育を課せられる年齢であるため、王都の王立学校に所属（現在は不明。退学？）。お世辞にも成績優秀とは言い難いが、まじめで熱心な生徒ではあった。

魔物たちにてい良く利用されることが多々あり、あちこち引つ張り回されているうちに出席日数が危険水域に達し、放課後に補習授業を受けるという交換条件と引き換えに留年を免れていた。

その後、アレシアン嬢の魔王討伐の旅に同行することとなり、完全にとどめを刺された。担任教師は何とかすると息巻いているが、まず無理だと思われる』

魔物たちとの戦いがあまりにも無益であったため、無駄な出費を嫌った各国は義務教育制度を設けている。

魔物たちによって整備された魔法は、個人の才能に左右されにくく、また数年の義務教育で一定の水準まで達する簡易なものだった。国民の自衛に期待してのことだったが、効果のほどはあまり上がらなかったらしい。

むしろ、国民全体の教養が増すことで得られた利益の方が大きかった。

ついでに思想教育の重要性を学んだ政治家たちは「もちろん最初からそのつもりだった。えっへん」と胸を張った。

『学校では、何事にも真剣すぎる、会話が成立しない、たまにしか学校にいない、魔法の演出がグロイ、そしてエグイ等の理由から友達がいなかった。』

哀れに思った低学年の子たちは友達だと言ってくれたが、なぜなの？ プライドが邪魔して対等の友人関係は築けなかったようだ。

旅シリーズの冒頭で出会ったアレシアン嬢を「ちょっと可愛い」と評し、ふとした拍子に心を奪われたと魔物たちに打ち明けるも、

「ちょっと優しくされたからって勘違いするな」と酷評される。
生涯初となる「人間」の友達を獲得し、意気揚々と旅を続ける。
ちなみに恩師と約束した自習は旅立ってから一度もしていない』

おれ「……………どう見ても馬なんだが……………」

03「……………馬ですね」

04「……………しかし要注意人物でもあります」

おれ「馬がか？」

04「いえ、馬ではなく。馬ですが」

05「……………特赦か。だが、それについては考えがある……………」

おれ「ほう。期待するでしょう」

01「……………やつはどうした？」

03「やつ……………やつですか」

おれ「そうとも。勇者一行ではないが、われわれが最も用心するべき人物だ。マリ・バウマフ……………」

【マリ・バウマフ】

『ノロ・バウマフの実父にして「こきゅーとす」前管理人。別名「

親狸」。千年に一度生まれるというレジェンドバウマフ。元祖狸。「どこに出しても恥ずかしくないバウマフ」「バウマフ家の歴史を完成させた男」「なにを考えてるのかよくわからない(グラント狸談) お前もな(魔物一同)」「大きくなったら父さんみたいになる(子狸談) なにそのホラー(魔物一同)」と称される超S級危険人物」

『幼い頃から妙にまともな行動をとるため、魔物たちを盛大に心配させた。理由を尋ねると理路整然と理屈を語るため、「とうとう一周して逆に……」と憐みの目で見られる。』

しかし長じるにつれて魔物たちを裏でコントロールするようになり、あまつさえ「ぜんぜん気付かないからつまらなかった」と自らネタバラしをするに至って、魔物たちから不倶戴天の天敵と目される。

その後、魔物たちと元祖狸による壮大な知恵比べが展開されるも、魔物たちの惨敗に終わる。魔物たちにとっての屈辱の時代のはじまりである』

『魔法の才覚も極めて高く、二番回路のオンオフを自在に切り替えることで人間寄りの魔法と魔物寄りの魔法を組み合わせることができ。』

魔物たちが夢見た理想のバウマフ像そのものであるが、じっさいに生まれたら生まれたで憎たらしいことこの上ない』

魔法の詳細に関しては後述とする。

『学校で異常としか言えない高成績を叩き出し、先走った学府より都の高校に進学するよう求められるも、三ヶ国の上層部からストップが掛かる。』

協議のすえ、三ヶ国に等しく利潤を配分をするという契約をもと

に、王国の王立高等学校に進学。

とにかく無駄にハイスペックなので、ろくでもない貴族の子女に見染められて気苦労の絶えない生活を送るのではないかと魔物たちをはらはらさせるも、そこらへんを歩いていた町娘と「魔物にも優しいから」というありがちな理由であっさり結婚し一児をもうける」

「高校」とは「高等学校」の略称である。

原則として高校への進学を希望する生徒は、「卒業論文（卒論）」と呼ばれる「研究成果」を学府に提出せねばならない。

それが認められて、はじめて高校への入学が許されるのだが、例外的に「こいつはやばい」という人間は学府より「お前はやばいから国に飼われる」とソフトに伝えられる。

承諾するか否かは本人に委ねられるが、それは表向きの話であって、まず拒否することは許されない。

しかし、それがバウマフ家の人間となると、もっとやばいことになる。「魔物たちの盟主を研究室に閉じ込めて何やらせんのか？ ねえ、教えて？」となったのである。

『婚約する際、交際すらしていない娘さんを連合国の父母に紹介し、「おれ、結婚するから」と言い放った。

だれがびびったって、娘さんがいちばんびびった。

どれくらいびびったかというと、口に含んでいたお茶を噴出するくらいびびった。

さらに二度見芸まで披露してくれたので、その瞬間に魔物たちは二人の仲を認めた。

当の娘さんはいったんは婚約を辞退したものの、再三のアタックに折れる（というより会うたびにやたらと消耗している元祖狸を心配して仕方なく）。

高校を卒業後、王都の片隅でひっそりと「ばうまふベーカリー」

なるパン屋を開業する。小さい頃からの夢だったらしい』

「ばうまふベーカリー」では、魔物たちを象ったパンを扱っている。

ただしモデルは子狸の描いた絵なので、ほとんど原形を留めていない。

見た目が見た目なので繁盛しているとは言い難いが、味はそこそこである。

たまに宰相が買いに来る。

『子狸が生まれたあとはしばらく大人しくしていたものの、二年前に催された王国ミレニアムを祝う千年祭の最終日、水面下で着々と進行していた王都襲撃計画をついに発動。』

レベル4とレベル3が一堂に会し、上空ではレベル5の頂上対決が行われるという人類史上類を見ない空前絶後の大事件を引き起こす。

どう考えても魔王の仕業です。本当にありがとうございました』

『公開処刑は自粛とさせていただきます』

01「……やつを敵に回したら終わりだぞ」

03「その心配はありません。お屋形さま……いや、マリ・バウマフは管理人の座を息子に譲り、その後は非干渉のポーズをとってますから」

おれ「そうだな。おそらくわれわれに干渉してくることはないだろう」

01「ならばいい」

03「ありがとうございます。では、続けます。次は魔物たちですね」

04「その前に、いったん休憩しないか？」

05「そうしよう。目が疲れてきた。目なんてないけど」

おれ「よからう。01、いいな？」

01「ああ。時間は有限……されど残された猶予はまだある」

おれ「うむ。短時間ではあるが、各自鋭気を養ってくれたまえ」

03「はっ」

04「はっ」

05「はっ」

「第三回全部おれ定例会議」 part 1 (後書き)

(作者より) ナカモト工事様より、とても素敵な挿絵を頂きました。
「勇者さんはおれの嫁」に添付致しましたので、よろしければご覧
になって下さい紫電三連破!

「第三回全部おれ定例会議」 part 2

00、火口付近在住のとるにたらない謎の議員さん（出張中

01「待たせたな」

02「というか、寝てたよね？ 完全にお昼寝してたよね？」

03「議長っ……そこには触れないでおこうと話し合ったではないですか……！」

02「しかしな……さすがに示しがつかんだろう」

01「……時間が惜しい。はじめろ」

おれ「あ、流した」

05「魔物たちの項目からでしたね」

03「では、再開します。多少重複しますが、まずは共通項目からよろしいですか？」

01「構わん」

02「すまん、苦勞をかける。よろしく頼む」

03「はっ」

【魔物】

『千年前（正確には千と二年前）に自我を獲得した魔法が形を成して誕生した素敵生物たちの総称。「魔法の第二形態」であると本人たちは主張している』

『バウムフ家および各国首脳陣（一部）を除く人間たちの認識では「致命傷を負うと消滅する」ということになっているが、それは誤り。基本的に不老不死の存在であり、人間よりもはるかに高度な魔法を難なく扱える』

『自在に瞬間移動できる上に際限なく増殖できるため、世界中に数えきれないほどの個体がいると考えられているが、オリジナルの人数は言うほど多くない』

『勇者が魔王を倒すまでの一連の出来事を綴った「魔王討伐の旅シリーズ」の仕掛け人であり、その行程を盛り上げるためにレベル1～5の五段階に「設定上の戦闘能力」を振り分けている』

『じつさいに戦っている人間たちは魔物たちの身体能力や耐久力といった、魔物たちからすれば「その場の気分でもうにでもなるもの」を基準に彼らを分類しているため、「魔法の開放レベル」を基準としている魔物側とは異なる分類法が用いられている。表であらわすと、だいたい以下の通りである』

『下位騎士級〓レベル1』

『上位騎士級〓レベル1～2』

『下位戦隊級〓レベル2～3』

『上位戦隊級』レベル2～4』

『下位都市級』レベル3～4』

『上位都市級』レベル4』

『王種』レベル5』

下位、上位を省いて言う場合は原則として上位級を意味するようである。

『なお、上記の呼称は脅威度の正確さを重視したものであり、民間では「下級」「中級」「上級」という簡単な呼称が用いられている。この三つの分類の中には「上位都市級」と「王種」は含まれない。「立ち向かうという選択肢がない」からだ。

誰かが「都市級だ！」と叫んだなら、もう逃げるしかないというのが一般的な考え方である』

02「……人間たちがレベル3を打破しうる技術を開発したのは誤算だったな」

03「チェンジリング ハイパーですね……それについては後述としています」

05「こしゃくな人間どもめ。詠唱を改造しはじめた時点で嫌な予感はしていたのだ……」

おれ「現在の詠唱は、われわれが再構築したものだからな……」

05「やはり過去は抹消すべきだったのだ！ われわれにはそれが可能だった。いまからでも遅くはないぞ。人間の記憶などいい加減なものだ」

おれ「それをバウムファ家の人間が許すと思うのか？ やつの……マリ・バウムファの干渉を招くだけだ」

01「それだけは許さん。……過去など。われわれに必要なのはいまだ」

02「……そう。そうだな。続けてくれ」

03「はっ。それでは、個別の詳細へと移ります。まずはレベル1から」

【メノウポラ】

『愛され続けて一千年、言わずと知れた世界で最もピュラーな青いボディのニクいやつ。』

見るものに鮮烈な印象を与えることから、「青いひと」と呼ばれる『

『成人になると一般家屋を丸ごと飲み込めるほど大きくなると言われているが、それが自然体である。つまんで伸ばせるくらい柔軟な身体をしているため、どこにでも行けるし、なんにでもなれる、夢のような肉体を実現』

『何よりもイメージを大切にしている彼らは、人前でこそ飛んだり

跳ねたりはしないものの、代わりに触手を器用に操ることでストイックな雰囲気醸し出している』

『「魔法を使えない」という制約を己に課しており、よく人間の子供たちに追いかけて回されては、戦うにも値しないと余裕の態度でいなししている』

『まれに毒を持つ個体がいるとちまたで話題だが、これは標準装備の奥義「レクイエム毒針」のことであり、何か都合が悪くなったり不意に急用を思い出したときに炸裂する』

『六人もの同種のオリジナルが存在し、魔物たちの中で最大勢力を誇ると同時に、ふだんはバウマフ家の面倒を見るのに全員持つてかれている』

青『ここはおれに任せて先に行けーっ！』

02「うむ」

おれ「うむ」

05「うむ」

01「……03」

03「はっ」

01「完璧な仕事だ。今後も期待している」

03「ありがたきお言葉！」

02「うむ……。レベル1というと、次は彼らか」

03「はっ」

【メノウデイン】

『小柄な体格とひたいに生えている小ぶりなつのが特徴的な、魔物界の巨匠』

『創造には破壊がつきものであると考えており、むしろ破壊が目的であるかのような行動がしばしば目立ったため、いつしか「鬼のひと」と呼ばれるようになった』

『クリエイターとしての発想力や多角的な視点を分身で補うのは困難であるため、とくべつに志を同じくする三人のオリジナルがいる』

『ひそかに人間の職人たちをライバル視していて、街道沿いで旅人を襲撃しては戦利品を細かくチェックしている』

『大陸の覇権を争う三大国家の行くすえを案じるあまり、まるで自分たちが三ヶ国の代表者であるかのような激しい口論を交わすことも』

『過去に妖精の里に無断で潜入し、発掘作業に勤しんでいた現場を勇者一行に押さえられて以来、「悪行が祟って魔物と化した妖精の一種」というレッテルを貼られた』

『人間たちが遺失した製鉄技術や合金の製法を現代に伝えているが、どちらかという限定された条件下で無茶な要求に挑むことを喜ぶ』

小人『こいつはタフなスケジュールになりそうだぜ……』

02「レベル1はとくべつな役割を担っている。勇者が彼らを軽視しているようなら……01?」

01「ああ。人間たちには無理だ。そのためのわれわれとも言える」

05「ですが、レベル2たちが不穏な動きを見せていることもまた確かです」

おれ「もともと共生派だからな。彼らには彼らなりのビジョンがあるのだろう」

03「レベル2は人間をモチーフにした魔物たちです。一挙に放映します」

【メノッドブル】

『人間と魔物のちょうど中間をとつたら歌って踊れる骸骨という結論に至ったクールでニヒルな魔物界のプリンス』

『平均的な骨格の追求に没頭するあまり、見た目で交渉の余地が潰えた』

『当初はバウムフ家に同調していたのだが、骨を探求する過程でカルシウム原理主義に目覚め、バウムフ家の人間にカルシウムを強制するようになる』

『墓地にいとちつく。世界中の墓所と名のつくところは自分の庭みたいなものと豪語し、埋葬された宝石類に目がくらんだ不屈きな墓荒らしたちを日夜撃退している』

『やがて人間たちから「白骨化した戦士のなきがらが生者をねたんで襲うようになった」という逸話が付加され、自分でもそうなのかもしれないと納得しはじめた』

『「もともとは人間」という設定になったので、レベル2までなら魔法を使いたい放題なのだが、属性の問題から発光魔法や発火魔法の使用は避ける傾向がある』

骸骨『二つに一つ。全員で危険な橋を渡る必要はない……行け！』

【メノウパール】

『骨のひとの盟友。人間たちとの共生に悩む友に「お前に足りないのはスマイルだ」と説き、表情をボディランゲージできるよう霧状の身体を構築した結果、すぐく心霊現象になった』

『ふだんは薄ぼんやりとした人型の輪郭をしていて、日の光の下だといえるのかいなのかよくわからないことから、逆に「見えるひと」と呼ばれる』

『鬱蒼とした森の中だと存在が映えるため、樹海で迷子になった人間たちを道案内してあげてこつこつとポイントを稼いでいた。』

しかし、いつしか骨のひとの目的が変異を遂げるにともない、恐怖でおびえる人間たちにある種の快感を覚えるようになる。』

『物理的な攻撃をいつさい無効化できるという特性を持っているが、義務教育の普及とともに「武器」が廃れたため、人間たちには忘れ去られた設定である。』

『特性の有効利用を目論み、ゴースト拳法の創始者となるが……？』

亡霊『あいつはきつと帰ってくるよ……おれたちのところだよ』

【メノウリリイ】

『怨霊種の末妹。わざわざ中間をとらなくても……という冷静な見地から、完全に人間の姿を写しとっている。』

『「リリイ」というのは「（人間が）歩く」という意味であり、人間たちからすると「故人がふつうに歩き回っている」ように見えることから「歩くひと」と呼ばれる。』

『骨のひとの考えに賛同はしたものの、少数派の味方をしただけに過ぎず、本音では人間を見下している。』

しかし「人間の姿を借りる」という特性から、人間たちの営みに深く関わって生きていくことになる……。』

『唯一無条件で尊敬していた人間が女性だったので、基本的には女性の姿を好んで写しとる。』

とくに日常生活を送る姿は、（本人は認めないものの）気に入った人間の姿である。』

『現在の姿は、貴族の子女であり森の中の離れで暮らしていた「クリステイナ・マツコール」という少女のもの。』

『「クリス・マツコール」という名で勇者一行に潜伏し、一行を本拠地に誘き寄せたのち正体を現すも、アレシアン嬢の機転により敗走を余儀なくされる。』

『人間など及びもつかない身体能力の持ち主であり、人間たちからは怨霊種の上位種と目されているようだ。』

しかばね『お兄ちゃん！？ お兄ちゃん！』

02「……これはさすがにやばくないか？ 身の危険をひしひしと感じるのだが」

おれ「自分は何も見ませんでした。何も聞いておりません」

03「つまり、われわれは共犯者ということですか。もはや逃げも隠れもできませんまい……」

05「……われわれの中に裏切り者がいるというのか？」

03「念には念を、だ。マリ・バウマフが非干渉を貫くいま……わ

れわれに必要なのは血の結束なのだ」

01「構わん。続ける」

03「はっ。さしあたって、われわれの脅威になりうる要因は次で最後になります」

【シエルウ】

『手乗りサイズの少女の姿をしており、背中の一対の羽で高速飛翔することから「羽のひと」と呼ばれる』

『「シエル」というのは旧古代言語の「羽」を意味する語であり、転じて「減速」という意味で用いられるようになった』

『れっきとした魔物だが、勇者一行をバウマフ家のポケから守るナビゲーター役を担当することが多く、様々な童話にも登場している。そうした経歴からか、それともあるいは可愛いさは正義なのか判然としないが、とにかく魔物の一種ではなく「妖精」という種族なのだ人間たちは考えている』

『魔法の開放レベルは「4」。人間たちの基準で言うところの「上位都市級」に相当し、人間たちが勝手に定めた「妖精魔法」なる制限を取り払えば、魔物たちの中でも屈指の実力者ということになる』

『もともとは大の人間嫌いで、「絶対に人間に負けたくない」「かといって手を差し伸べるのも嫌」という考えから「人間が手も足も出ないような姿」を理想とし「小型」「高速飛翔」「高火力」という形態をとる。』

しかし勇者一行に随行するうちに態度が軟化し、一行の補助に甘んじるようになった。

かといってそれを認めるのも悔しいので、ふだんは人間たちの持ち物を隠したり財布に手形を残したりと精神的な苦痛を与えるべく奔走している』

『根っからの風来坊であるため、これという決まった寢床を持たないが、人間たちが定期的に開催する「妖精に会いに行こうツアー」に便乗して「妖精の里」なる超空間を形成。

迷い込んだ人間を罠にはめて、徹底的に言葉責めをするというのが定例行事と化しつつある』

妖精『この豚どもが！』

02「……ああ、そこは史実に忠実なのだな」

03「ええ。やはりレベル4ともなるとモノが違いますな」

おれ「勇者の、というよりはバウムフ家の相棒なのですが、彼らのことは記録には残りませんからね」

05「残ったとしても一文で済むからな」

01「……03、ご苦労だった」

03「はっ。では、続きまして魔法の項目へ移りたいと存じます」

02「必要かね？」

03「はい。人間たちの魔法は、一番の影響もあり魔物たちのそれとは剥離しつつあります。用心はしておくに越したことはないかと」

01「……いいだろう。マリ・バウマフの例もある」

02「うむ、そうだな。わかった。続けてくれ」

03「はっ」

「第三回全部おれ定例会議」 part 3

000、王都在住のとるにたらない謎の議員さん（出張中

【魔法】

『魔物が誕生する以前から存在する、イメージを具現する不思議な法則』

『魔物たちの調査によると成層圏内を突破しようとするすると消滅するらしい。』

これは後述の「原則」の一つであり、つまりいかなる魔法も成層圏外では作動しないという決まりがある。

逆に成層圏内でさえあれば、他の原則に抵触しない範囲で想像したものを実現できる』

『物理法則を完全に超越しているという見方もあるが、魔法の到達点が物理法則であるという説もある』

『魔法には九つの位階があり、これを魔物のレベルと区別して「開放レベル」と言い表すのだが、両者は本質的に同意義である。』

最大開放の「レベル9」は「原則を除く制限がいつさいない状態」なので、およそ上限というものが無い。

「レベル9」の細分化が為されていないのは、「同じレベルの魔法は性質の衝突がない限り相殺し合う」という原則から導き出された結論である。

少なくとも現時点において「レベル9」を性質に拘らず打ち消す「レベル10」の存在は確認されていない』

『「レベル10」が存在しないと断言できないのは、イメージに限界があるからである。』

この世に完全な円が存在しないように、究極的に比較対象のないものを（たとえ実在したとしても）認識することはできないというのが魔物たちの結論である。』

【魔法の原則】

『魔法には「原則」と呼ばれる侵されざる決まりごとがある。たとえレベル9の魔法でも突破できない大前提のようなものだ。現時点で判明している「原則」は以下の四点である。』

『1、魔法は成層圏内でのみ働く』

『2、イメージと詠唱を要する』

『3、開放レベルが上位の魔法は下位のそれに勝る』

『4、魔法に深く関わるものほど魔法の干渉からは逃れられない』

『言ってみれば「幻のレベル10」なのだが、「原則」は魔法のように「下位の魔法」を打ち消すということがない。』

それを証明したのが「詠唱破棄」の魔法である。』

『詳細は後述とするが、「詠唱破棄」は「詠唱したという時間軸を破棄する魔法」である。』

この魔法は「時間に干渉する魔法」であるため、上位の魔法に当

たる「逆算魔法」の干渉を受けて実質的なレベルが落ちるという特性を持つ』

『実質的なレベルが落ちるといふのは「逆算魔法」の効果であるため、本来ならば「魔法の大前提」である「原則」には影響しない事柄である。』

しかし、じっさいには三つ目の原則を無視するかのような働きを見せる』

『「詠唱破棄」自体が成立しているということから、「結果的に原則に反する魔法」は違反とは見なされないようである。』

それならばと「結果的に成層圏内に戻ってくる魔法」をためしてみても、これは成立しなかった』

『つまり「原則」とは魔法の「機械的な限界のようなもの」であり、「できないものはできない」のである。』

法則というよりは「魔法の基本的な性質」に近いのだが、この事実を魔物たちは好意的に受け入れている。』

魔法には原始的な意思があり、原則とはご先祖さまのギブアップ宣言であると……そう考えている。』

でも宇宙遊泳したかった』

『どうしても宇宙遊泳を諦めきれなかった魔物たちは、魔法の基本構造に手をつけはじめる』

『その結果、魔法にはイメージの入力と出力を処理する回路のようなものがあることに気がついた。』

解析を進めるうちに判明した事実……四つ目の原則の元凶である』

【魔法回路／回線】

『魔法には、生物の強い意思に感応する基本的な性質がある』

『魔物たち以外で魔法を使えるのが人間たちだけなのは、たまたま「イメージ」に「詠唱」という二つの条件を満たした生物が彼らだったからである』

『魔法を扱う回路は三つあり、それらを魔物たちは「一番」「二番」「三番」と呼ぶ。

正確には「キングダム」「レジスタンス」「ユニオン」と名づけたのだが、ことごとく人間たちにパクられたので、泣く泣く味気ない名称で呼んでいる』

【一番回路／回線】

『一番回路は魔物（魔法）専用の回路である』

『バウムフ家の人間すら立ち入れない聖域であり、魔物たちにとっての心の拠り所にして最後の砦だ』

『詳細は不明とする』

『そっとしておいて下さい』

【二番回路／回線】

『二番回路は無意識の領域を司る』

『人間たちの集合意識のようなものが幅をきかせている』

『とんでもない強制力を持っていて、珍妙な自然現象を巻き起こしたりもする』

『天蓋に星々が貼りつき、海の果てに滝があるのは、ひとえにこいつのせいである』

『人間たちの魔法がおかしな方向に突き進んでいる元凶でもあるハイパーとか』

『もちろん魔物たちも回線を利用できるのだが、自分たちの魔法のほう为上であると考えているため、どうしても必要なときにしか使わない』

『じつさい魔物たちほどのスペックがあれば、正統なスペルが劣るということはない』

【三番回路／回線】

『三番回路は有意識の領域を司る』

『表層的な意思を器用に汲みとってくれるので、たいていの魔法はお世話になっている』

『人間たちがレベル4以上の魔法を使えないのは、ここの入力と出力が齟齬をきたしているからである』

『べつに魔法は人間のためにあるものではないから仕方ない』

『青いひとたちが仲介してあげるとうまくいく。あくまでも青いひとたちの善意による』

02「そう、善意なのだ」

おれ「大事ですよ、善意」

04「本当にね」

05「バウマフ家の人間は、そのところを勘違いしてるとしか思えない」

01「ポンポコ（大）はとくにひどい」

【現代魔法】

『現代の魔法は「連結魔法」という形式であり、魔法と魔法を連結することでイメージを誘導する方式を採用している』

『個人の才能に左右されにくく、きちんと練習すればたいいの間は一定の水準に到達できるという特徴を持つ』

『子狸……もといノロ・バウマフが魔物たちから親切丁寧に魔法を教えてもらっておきながら平凡な評価におちついているのは、まるっきりセンスがないからである』

『むしろ最底辺の素質しか持ち合わせていない子狸が曲がりなりにも平均点をとれていることからわかるとおり、魔物たちは非常に優秀な教師と言えるのではないかと……うわっなにをする！ やめろ！』

『お、お前は！？』

『……………』

『ノロ・バウマフがレベル3の魔法を使えないのは、ひとえに優すぎる性格が災いしてのことである』

01」……………」

02」……………」

04」……………」

05」……………」

おれ」……………」

『今回の「魔王討伐の旅シリーズ」に登場したスペルは以下の通り。二番回路の影響を受けて変質した魔法は別途に「2」と表記し、正統なスペルを「1」とする。参考にされたし』

「発光魔法」「遮光（闇）魔法」「凍結魔法」「発火魔法」に関しては、対応する属性が付与されるが、表記は簡略化する。

【アイリン逆算能力・1】

『同格の魔法は相殺し合うという原則を利用し、魔法の効果をなかつたことにできる』

『おもな用途として、治癒魔法の代用が挙げられる。魔法で負った傷を癒し、壊れたものを修復する』

『過去にさかのぼって効果を打ち消す必要があるため、本来であれば人間には扱えない高度な魔法である』

『そこで魔物たちは「逆算魔法」と呼ばれる「逆算能力の基礎となる枠組み」を構築し、時間への干渉をそちらに委ねた』

『つまり「逆算能力」とは「逆算魔法」にアクセスする魔法である』

『じつさいに魔法を打ち消すときは映像を巻き戻しするような感じになる』

【アイリン治癒魔法・2】

『逆算能力の別名』

『人間たちは「逆算能力」の仕組みを知らないため、表面上の効果を判断基準とし「治癒魔法」と呼んでいる』

『事故による負傷や疾患には作用しないのだが、魔物たちの打撃に
関してはべつなので、「神のご加護」という認識が根強い』

『そうした認識が二番回路に働きかけ、淡い光が患部を覆うという
演出が入るようになった』

【詠唱破棄】

『時空を捻じ曲げ、詠唱の始点と終点を強引に結びつける魔法。開
放レベル4』

『破棄された時間軸は、しかし逆算魔法の支配下にあるため、逆探
知されてレベルを剥ぎ取られる』

『「はじまりと終わりは同じものである」という概念が過去に打ち
込まれているため、二番回路の助けを借りてかろうじて成立してい
る』

【圧縮魔法】

『周囲の空気を凝縮して圧縮弾を生成する』

『火を圧縮して火力を調整したり、飲み水を持ち運んだりするのに
便利』

『元あるものを利用するため回線への負荷が少なく、レベルが上が
りにくいという特徴を持つ』

【固定魔法・1】^{タク}

『運動エネルギーを固定する』

『何を対象とするかで効果が変わるが、おもに形状や状態を維持する用途で用いられる』

『反作用のロツクにも使える』

【固定魔法・2】^{タク}

『形状や状態を固定する』

『運動エネルギーに作用しなくせに投射した魔法を空中で停止させたりもできる』

【投射魔法・1】^{テイグ}

『魔法を射出する』

『物理的な力が働くわけではないので、物質には作用しない』

【投射魔法・2】^{テイグ}

『物質には作用しないって言うてるのに、土魔法も飛んでいく。な

んなの』

【放射魔法】

『魔法の効果を放射状に拡散する』

『一流の魔法使いは、この魔法と後述の変化魔法を組み合わせる家の中ほこりを一掃できる』

【盾魔法】

『外部からの干渉を弾く力場を生成する』

『投射魔法や放射魔法には「衝突」という性質」が付与される』

『この「衝突性質」に対して、盾魔法は優位である』

『ただし内部からの干渉に弱く、「崩落魔法」や「融解魔法」などの上位性質とは共存できないという欠点もある』

『思考速度、反射神経、動体視力、あらゆる点で有機生物の限界を越えている魔物たちが本気で使った盾魔法を「守護魔法」と呼ぶ』

『人間が認識できないほどの薄さの力場を、対象の動きに合わせて随時更新するという荒業だ』

【拡大魔法】

『魔法を拡大、強化する』

『同格、同性質の魔法が衝突した場合は、拡大魔法でブーストされているほうが打ち勝つ』

『正確には「拡大、強化という性質」を上乗せする魔法である』

【エラルド深化魔法・1】

『イメージを拡張する』

『拡大魔法とは本質的に異なる』

『魔法のレベルを引き上げる、見た目を格好よくする、無意識の領域（二番回路）から魔法を引っ張り出すなど用途の幅が広い』

【エラルド拡張魔法・2】

『魔法を拡大、強化する』

『拡大魔法の上位版』

『性質の上下関係を覆すことさえ可能だが、連結魔法の超化はレベルが上がりすぎるという危険性もある』

【バル発光魔法】

『光を生成し操る』

『文字や図形を空間に投影することもできる』

『色彩は自由自在に変更可能』

【遮光魔法・1】アルダ

『周辺の光を操作し、暗闇を生む』

『結果的には同じことなので、呼び方は「闇魔法」でも良い』

【闇魔法・2】アルダ

『闇を生成し操る。正確には「黒い何か」』

『なにげに意味不明で、かなり謎が多い。可視光線をカットしている……というわけでもないらしい』

『怪しい改造を施しておきながら、人間たちは闇魔法をめつたに使わない。改造したという自覚もないし』

【凍結魔法】ユク

『冷気を生成し操る』

『食べ物の保存に便利』

『大気中の水分が凍結してきらきらと輝く』

【火魔法ゴル】

『炎を生成し操る』

『料理には欠かせない』

『扱いには熟練を要する』

【崩落魔法アバドン】

『重力場を生成し操る』

『性質的に上位であるため、連結には不向き』

『属性の縛りがない魔物たちは好んで使う傾向がある』

【融解魔法バリエ】

『同じく上位性質』

『熱量を生成し操る』

『お湯を沸かすのに便利』

『魔物たちに対抗してか、騎士たちがよく使う』

『コントロールに難があるものの、見た目が良い』

『ふだん家庭でないがしろにされている騎士たちは、この魔法でお風呂を沸かして子供たちのハートを掴む。そして「熱すぎる」と妻に叱られる』

【減速魔法・1】^{シエル}

『運動力を下げて速度を落とす』

『時間に干渉すると逆算魔法のチェックが入るので、物質と物質の関係性を変えて効果を得る』

『運動力を下げると、対象は相対的に硬度が増す』

『また運動力を一定以上まで下げると、逆に速度が増し、相対的に硬度が減る。つまり脆くなる』

【減速魔法・2】^{シエル}

『理屈はわかっていないものの、人間たちが使っても同様の効果は得られる。そういうものだと思っているからだろう』

『ただし、速度を上げることにはできないようである。逆転作用をあまり見たことがないからだと思われる』

【加速魔法・1】^{トロー}

『魔法の処理速度を一時的に向上させる』

『結果的に魔法の効果が促進しているように見える』

【加速魔法・2】^{トロー}

『魔法の効果を促進する』

『そもそも人間たちは魔法回路の存在を知らない』

【侵食魔法・1】^{グレイル}

『対象に侵食し、操作する』

『分子結合を目視できるほどの目があれば、およそあらゆる物質を破壊できる』

『そうでなくとも、包丁の代わりくらいにはなる』

『詠唱破棄と連結して使うと、思念の力で物体を動かしているように見える』

【貫通魔法・2】^{グレイル}

『もちろん人間の視力は常識的な範囲なので、魔物たちがグレイルしてるのを見て「あれは貫通力を与える魔法なんだな」と判断した』
『その判断を二番回路が支持したため、刃物の代わりにもなる物騒な魔法が誕生した』

『「槍魔法」とも呼ばれるこの魔法は、しかしまな板ごとすっぱりいってしまうので、主婦には不人気である』

【変化魔法^{エリア}】

『魔法に伸縮性を与え、イメージに沿って動かせるようにする』

『追尾性を得られるという点で便利だが、性質的に侵食魔法に対しては弱い』

『高度なものになると容姿を変えたりもできるが、これは対象となる人物の退魔性が高いと難しい』

『魔物たちは魔法そのものなので、変化魔法で完全に変身できる』

【標的指定^{ロッド}】

『魔法の効果を標的のみに作用するよう調整する魔法』

『魔法の開放レベルが「3」以上になると範囲殲滅用のものが出てくるので、味方を巻き込まないために使う』

『一流の料理人ともなると、この魔法で芯から熱を通す技量が求められる。道は険しい』

01「……言つまでもなく、子狸さんは魔物たちの希望の星だ」

02「……そうだな。それは動かしようのない事実だ」

04「……磨けば光る原石とでも申しましようか」

05「……うむ、逸材だ」

おれ「ですよ。では、次はチェンジリングについてまとめたものです」

01「お願いします」

【チェンジリング】

『レベル4以上の魔物は詠唱破棄を人前でも遠慮なく使える』

『それに対抗するため、あるいはスペルが広く一般に知れ渡ったためか、いつしか人間たちは詠唱の改造に着手した』

『その成果のひとつが「チェンジリング」である』

『本来的に詠唱は「あればいい」ものなので、改造を受け入れるだけの下地があった』

『魔物たちが考案した「連結魔法」が「詠唱でイメージを誘導する方式」であるのに対し、「チェンジリング」は「イメージで詠唱を誘導する技術」である。

つまり「魔法の汎用性を犠牲に詠唱を自由に変更できる」というもの。

先の発言を詠唱と見なすことで発動する』

『魔物たちが誕生する以前は、ひと握りの天才的な魔法使いが「短い詠唱」で「高レベルの魔法」を使っていた。しかし当時とは「魔法の方式」が異なるので、高レベルの魔法をチェンジリングするのは不可能になっている。

人間たちのイメージを処理する側にある魔法が、より負荷の少ない魔物たちの方式を支持したためだ』

『チェンジリングは人間にとっては脅威となる技術ではあったが、魔物たちはさして問題視していなかった。

だが、チェンジリングが開発された背景には、下記の「チェンジリング ハイパー」の試作という面があったことも否めない』

【チェンジリング ハイパー】

『魔物たちが編み出した「連結魔法」は「魔法を連結する」ものである。

高レベルの魔法をチェンジリングできないのは、「連結魔法」という土台があるからである。

では、「詠唱を連結する」ことで高レベルの魔法もチェンジリングできるのではないかという試みが各国では秘密裏に研究されていた。

その目的は「詠唱の高速化」である』

『結論から言うと、それは可能だった』

『イメージと詠唱の規格を統一し、複数の術者が一つ一つの詠唱を担当することでチェンジリングの輪を作る。それが「チェンジリング ハイパー」である』

『最終的にこの技術を完成させたのは、三大国家から派遣された騎士たちである』

『勇者の供として魔王討伐の旅に加わった彼らは、だいぶ仲が悪かったようである。』

一度は魔王に敗れたものの、各国で研究されていた「チェンジリング ハイパー」の下敷きとなる技術を持ち寄り、最終決戦においてとうとう和睦。土壇場で「チェンジリング ハイパー」の完成に成功した』

『かくして無事に魔王を討伐した彼らは、その功績を認められて「三勇士」と呼ばれることになる……』

02「……思うに、三ヶ国間の関係が泥沼化したのは三勇士のせいではないのか？」

04「……喧嘩する口実になったのは確かかと」

05「鬼のひとたちも、よく口論してますね。うちのだし、金払えの一点張りですよ。あれは醜い……」

おれ「では、続きましてノロ・バウマフの成長メモリアル鑑賞会を……」

01「閉会だ」

おれ「え？」

01「本日は閉会とする。……急用を思い出した」

02「それは大変だな。うむ。急がねば」

おれ「そうですか。残念です。急用なら仕方ないですね。……ああ、そういえば歩くひとはどうしてるかな」

01「……われわれを脅すつもりか？ 愚かな……自分の首をしめるだけだぞ」

02「まったくだな。君、脅迫ならもう少しうまくやりたまえよ」

おれ「さすがですね。では、こう言い換えましょう。……おれがこの場にいる意味を、もう少し考えてみたほうがいい」

01「いま急用が片づいた。なんの問題もなかった」

02「成長メモリアルの鑑賞会だったかな？ さっそく頼むよ」

04「楽しみですね」

05「ああ、むしろメインディッシュ以外のなにものでもない」

おれ「お前らにはお前らの苦悩もあるだろうっからな。たまには羽を伸ばすといい」

04「……………」

05「……………」

01「……………ふん。はじめなら、さっさとはじめろ」

おれ「おう。じゃあ、おれと嫁の出会いから」

02「そこから…?」

03「やれやれ、長い夜になりそうだが……………」

「決戦、海に見える街」 part 1

七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者「立ちなさい」

勇者さんの手から伸びる光の剣尖が
片ひざを屈した子狸に突きつけられる

怜悯な声には一片の情も通っていない
冷たい雨に打ちのめされるかのようにだった

うつむいている子狸の表情には疲弊の色が濃い

ふ、と微笑みが漏れた

肺腑から絞り出された声には
彼女とは対照的に万感の思いが込められていた……

子狸「強く……なつたね……。本当に……強くなった……」

その声に

その声に秘められた想いに

勇者さんの肩にとまっっている羽のひとが懇願する

妖精「リシアさん！ これ以上はもう……！」

勇者「あなたは黙ってて。これは、わたしとこの子の問題だわ。口
出しされるいわれはない……」

八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

どうしてこうなった……

九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

！

庭園の！

一〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

もしかや完成したのか！？

一一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

いや。しかし大詰めだ

集中してる鬼のひとたちの邪魔になりたくないし
あんまり家を空けるとご近所さんが心配なんでな……
いったん帰宅した

そんなことよりも、これはなんだ？

旅シリーズが未整理の状態で

なにがなんだかわからん

一二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ、すまん

ここ数日ほど忙しくてな……

後回しにしちまった

一三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

こうして六人が集まるのは

久しぶりだな

王都の？

一三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう

いい機会かもしれん

ダイジェスト版いくか

一四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ひゅー！

一五、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ひゅーひゅー！

一六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

すまんな、助かる

一七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや、いいんだ

全貌を把握してるのはおれと海底のくらいだろう

言葉は悪いが、騎士団と比べたら勇者一行は問題にならないほど弱小だからな

まず、現在地だが

港町の一步手前まで来てる

庭園のが別の河に流されていったのは

二番目の街だったな

あの街を出たあと

レベル2のひとたちが一行の足止めに失敗したので

おれたちは人海戦術に打って出た

街を出たあとの子狸（半裸）の大活躍たるや凄まじく

人生でもっとも輝いていた瞬間と言えるだろう

雲霞のごとく押し寄せる山腹のを

子狸「チク・タク・ディグ！」

子狸「アルダ・エリア・ラルド・グノー！」

面目躍如とばかりに突撃して一掃する子狸さん

詠唱の合間に触手で反撃する山腹のだが

山腹「しねええいつ！」

当たらない。まったく当たらない

子狸「感じる……！　なんだ、この感じ……。いける！？」

絶好調である

子狸「お前ら、見ててくれた！？」

おれ「すまん。見逃したわ」

一八、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

一方、勇者さんは新メンバーの豆芝さんの教育に余念がない
自分たちの命綱がお馬さんの脚力にかかっていると考えているの
だらう

勇者「合図を決めておくから、呼んだら来ること。いい？ 見てなさい」

距離を置いた勇者さんが指笛を鳴らすと

黒雲号がとことこと近づいてくる

待機していた豆芝さんが、ととととと黒雲号のあとを追う

勇者「よくできました」

おれ「賢いですね」

勇者「そうね。先輩がお手本になるから、思ったよりも早く仕上がるかもしれないわ」

少し遅れて、のこのこと子狸が駆け寄ってくる

子狸「お嬢！ おれの活躍ぶり見ててくれた？」

勇者「よくできました」

子狸「おう！」

おれ「お馬さんと同次元とか……」

褒められて嬉しそうに笑う子狸さんが見ていてつらい……

二〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おれが合流したのも、このへんだな

庭園のが採取してくれた勇者さんのサンプルだが
緑のひとと一緒に解析した結果……

勇者さんは、というよりおそらくアリア家は
意識的に退魔力の強弱を操れることが判明した

術理としては

三番回路の再計算が終わった直後に

感情を凍結することで

魔法の構成を根っこから破壊できるもよう

しかし欠点もある

タイミングを誤ると魔法の干渉を防ぎきれないため
身体の末端でしか構成破壊はできない

剣を通して退魔力を発揮する場合は
斬ったものにはしか効果は適用されないようだ

一一一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

剣を通して？

ああ、そうか

自分自身を退魔現象の一部として扱ってるのか
珍しいタイプだな……

たいていの剣士は、全身を覆うイメージで退魔力を使うんだが……

なんというか、ひどく攻撃的な退魔性だな……

使い勝手が悪いだろうに

体力がないなら、なおさらだよな

二二、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

そのへんは勇者さんも気にしてたぞ

道中、子狸に相談してた

勇者「わたし、体力がないみたい。まさか平民に劣るなんて思わなかったわ」

子狸「平民とか関係なくない？」

勇者「生意気だわ。……どうしたら、そんなに走り回れるようになるの？」

子狸「簡単だよ。たくさん食べて、ぶっ倒れるまで走って、よく寝て、たくさん食べて、ぶっ倒れるまで走って、よく寝て、たくさん食べて」

勇者「……無理ね。体力以外で補うしかなさそう」

子狸「ぶっ倒れるまで走る、寝る、食べる、走る、寝る……」

おれ「おーい。結論もう出てるからいいぞー」

子狸「一朝一夕でどうにかなるなんて思っない！」

おれ「キレた!？」

二三、かまくら在住のところにたらない不定形生物さん

とにかく、調子づく子狸が目障りだったのは言っまでもない

おれと火口ので共同戦線を張って

なんとか子狸を排除しようとするも

火口「おら！　つかまえたぞ！」

おれ「落とせ！　落としちまえ！」

崖から放り投げようとするおれたちに

子狸はあくまでも屈しようとしな

子狸「アバドン・グノ・ラルド！」

火口「ちよっ……無属性自重っ」

おれ「てめー本当に人間か!？」

子狸さんが止まらない

子狸「おれ、いま輝いてる！　お前ら、今度はちゃんと……!？」

王都『すまん。見逃したわ』

かように絶好調がとどまるところを知らない子狸さん（半裸）であつたが

勇者「……服を脱いだら好調になるような子とは一緒に旅はできないわ」

子狸「そんなことはもちろんありえない」

勇者さんのさりげないひとことで

スーパー子狸タイム

終了

二四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

じっさい子狸に自覚はなかったみたいだな

次の街で、勇者さんに服を買ってもらって嬉しそうにしてた

子狸「一生の宝物にするよ！」

勇者「着れなくなったら捨てなさい」

あと、勇者さんのブルジョワぶりが相変わらずひどい

街につくたびに新しい服を買ってる

今回の旅シリーズは、もはや勇者さんファクションショーの様相を呈しつつある

そのたびに子狸のテンションが上がって、うざったいことこの上ない

二五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

かくして子狸の超人的な勘働は見納めとなったが
今度は羽のひとが無双をしばじめた

妖精「マジカル ミサイル！」

子狸「痛い痛い痛い！ だからおれメイン！ おれメインだから！」

妖精「うざったいんだよ！ もろとも散れ！」

子狸「青いひとたち逃げてええええ！」

おれ「邪妖精があああああ！」

おれと子狸の夢のタッグが成立したり……

少年「おれ、将来は立派な騎士になりたいんだ！」

子狸「ならば、まずはこのおれを倒してみることだな……」

妖精「……………」

騎士を夢見る男の子に子狸が魔法の教師役を買って出たり……

子狸「ちっがーう！ 崩落魔法は背骨をへし折るイメージだ！」

少年「背骨を！？」

子狸「さもなくば、こう……この、これ！ がんばれ！」

少年「あんた語彙が少ないな！？ 年上なのに！」

子狸「誉めてもなにも出ないぞ」

少年「誉めてねーよ！？」

無駄に感動の別れを演出したり……

少年「にーちゃん！ おれ……おれ忘れないよ！ 騎士になったら、そのときは……また会えるかな？」

子狸「おう。そのときは、競争だな。楽しみにしてる……お前のク
ロワッサン」

少年「あんたおれになにを教えた！？」

勇者「……………」

勇者一行の旅は続く……

二六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そして、とうとう港町を目前に控えた

本日正午のことである……

この頃には、日が落ちる前に次の街に入るらしいと

法則性を見出した子狸さん

あらかじめ前の街で食材を買っておくという知恵を身につけていた

放っておくと好物ばかり食べようとする勇者さんの体調を気遣ってか

近頃の子狸ランチは野菜中心のメニューである

勇者さんの方針で、食後は食休みの時間をとる

そのときである

少年の教師役で、すっかり自信をつけた子狸が
妙なことを口走りはじめた

子狸「そういえば、お嬢は学校とかどうしてるの？」

勇者「貴族は家庭教師を雇ってるの。平民とは違うわ」

子狸「じゃあ、おれが勉強を教えてあげるよ」

妖精「無理だろ」

勇者「……そうね。それは良いアイデアかもしれない」

だが、勇者さんは乗り気である

もちろん子狸から学べるものなどにもない

勇者「あなたは、ろくに計算もできないみたいだから。わたしが徹底的に教えてあげるわ」

子狸「勉強なんて将来の役には立たないよ」

即座に方向転換する子狸だが

勇者さんの決意は固かった……

羽のひとが発光魔法で作り上げた問題集に

聖 剣を教鞭に見立てた勇者さんがレクチャーを加える
生徒に子狸を迎えた青空学校の開催である

勇者「違う。なんでそうなるの。さっき教えたでしょ」

子狸「りんごを四つも食べられないから……ここは二つにしておい
うと……」

妖精「その自分ルールやめろ」

やがて力尽きる子狸さん

子狸「もう……戦えないよ……」

勇者「立ちなさい」

子狸「強く……なったね……。本当に……強くなった……」

妖精「リシアさん！ これ以上はもう……！」

というわけだ

二七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

果てしなく下らねえ……

「決戦、海の見える街」 part 2

二八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

下らないとか言っな

子狸さんは真剣なんだぞ

二九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

その事実が何よりおれの涙腺を刺激する

教官が甘やかすから、こんなことになったんだ
叱るべきところは、きちんと叱らないといかん

前々からおかしいと思ってたんだ
なんで子狸のテストだけ横スクロールアクションなんだよ

三〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お前、言葉を選べ

減点方式のテストなんてやらせたら

子狸さん一生卒業できねーだろうが！？

三一、管理人だよ

できますし

ふつうのテストだと、おれの本当の实力はわからないって先生が
言ってた

三二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

零点より下はないからな

足し算の問題を暗号解読して得意げな子狸に
勇者さんは言葉を失う

眼前でくるくると誇らしげに回る珍回答集を
まじまじと見つめて
やがて彼女は、ぽつりところ零した

勇者「……この世には勉強よりも大切なことがあると思うの」

子狸「うん？ うん」

勇者「先を急ぎましょう。わたしたちには、やるべきことがあるわ」

子狸「……そう。そうだね。行こう！ もうあと戻りはできない……
…サイは投げられたんだ！」

妖精「投げられたのはさじだけだな」

子狸「小さじ？」

妖精「大さじ」

子狸「タンジエント」

妖精「ひゅー」

子狸「ひゅー」

勇者「……あなたたち、息がぴったりね」

唐突に踊りはじめる二人に

勇者さんは呆れたとばかりに言い残し

草の上で寝そべっている黒雲号のもとに向かう

だいぶコントロールに慣れてきたらしく

片手を軽く揺すって聖 剣を宙に散らす

あとをついて回る珍回答集を指先でつつくと

子狸の血と汗と涙の結晶は

まるで焼け落ちるように、あとかたなく崩れさった

子狸「ちよっ、お嬢!？」

勇者「手間を省いてあげたのよ。感謝なさい」

抗議の声を上げる子狸に

勇者さんは素知らぬ顔だ

子狸と羽のひとが顔を見合わせる

子狸「……もしかして思ったよりも点数が悪かったのかな？ 最後の問題でちよっと悩んだんだよね。二択だったから」

妖精「いいからさっさと行け」

三三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ふむ……

じゃあ、おれ戻るわ

三四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形背物さん

おう。鬼のひとたちによろしく伝えてくれ

三五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

みよつつ六世

三六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

五世どこ行った。布教しようとするな

三七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

? 海底の?

三八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

どうした、海底の? なにか悩みでもあるのか?

三九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お前ら絶対にわかって言ってるよね?

なんなの? 泣くよ?

四〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん(出張中)

勇者さんの独断により食休みは終了

一行が、なだらかな丘陵を登りきると

眼下に広がる立派な街並みが一望できた

その更に向こうでは

日の光に照らされた海面がきらきらと輝いている

妖精「わあっ……!!」

一行の良識をつかさどる羽のひとが感嘆の声を上げた

風に混ざる塩分濃度が微量ながら多い

四一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

そこは塩の香りがしたでいいんじゃないか

くっ………！

畏だとわかっていたのに

思わずツツコんでしまった………

四二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

だからお前は甘いというのだ

四三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

だな。用心しろ

お前らが子狸バスター（仮）とか呼んでる、例のあれ
そろそろ完成するんだろ？

庭園のがああ言っていたからには

試作の段階はとうに過ぎてると見ていい

いちいちツツコんでたら

いくら子狸さんでも不審に思っぞ

四四、管理人だよ

ここでお前らに質問です

おれバスターとはなんですか

四五、火口在住のとるにたらない不定形生物さん

ふと思ったんだが

子狸には教えておいたほうがいいんじゃないか？

土壇場で暴走されても困る

四六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

一理ある

四七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

そうか？

王都のが、勇者さんから子狸を引き離したい気持ちはわかるんだ
けど

子狸にとっても他人事じゃないんだし

危機感を持ってもらわないと

正直、おれたちとの特訓には限界がある

どうしても甘えが生じるからな

四八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

それだったら、むしろ勇者さんの敵に回ったほうがいいんじゃないか？

四九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、だから

勇者さんじゃ子狸には勝てねーよ

まず射程が違いすぎるし

聖 剣に至っては、あれ実質レベル1だからね？

四九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

射程とか……

本気で言ってるのか？

エサの上にざるをかぶせて、つつかえ棒でいちころじゃねーか

五〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸さんのことばかりにしてんのか!？

警戒して罫のまわりをうろうろする程度の知恵はあるわ！

五一、火口付近在住のところにたらない不定形生物さん
するわけねーだろ！

大好物の魔改造の実だぞ！？
断言してもいいぜ。わき目も振らないね！

五二、かまくら在住のところにたらない不定形生物さん

あ、てめっ
あとだしは反則じゃねーか！？

魔改造の実はハードル高すぎだろ！
そこは、せめて野菜の切れ端くらいにしとけよ！

五三、火口付近在住のところにたらない不定形生物さん
なんでわざわざハードル下げなきゃならねーんだよ！？

勇者さんがそんな甘いわけねーだろ！
アリア家なめんな！

五四、かまくら在住のところにたらない不定形生物さん

くそっ、反論できねえ……

だがな！ これだけは言わせてもらっぞ！

お前、忙しい忙しいと言っておきながら

この前、温泉につかったのほほんとしてただろ！

五五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ちがつ、成分調査してたんだよ！

うん、そういえば人手が足りないなあと思ってた

五六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

仕方ねーなあ……

今度、手伝いに行つてやるよ

五七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

話がまとまったようなので

先に進みますね

あ、温泉に関してはあとでくわしくお話をつかがいます

第一チェックポイントの港町に到着した勇者一行

かねてより問題視されていた検問だが

勇者さんの提案により

子狸の両手を拘束し縄を引っ張ることで解決を見た

騎士「これは聖騎士の……」

勇者「あなたは何も見なかった。それでいいわ」

騎士「はっ、自分は何も見ませんでした」

妖精「ノ口くん、すっかり立派になって……」

子狸「へへっ」

羽のひとの称賛にまんざらでもなさそうな顔をする子狸だが
絵づらとしては、落ちるところまで落ちている

手早く宿屋を決めた一行は

その足で船の停泊所に向かう

勇者「船便の予約をしに行くから、一緒に来なさい」

子狸「うん？ うん」

勇者「わかってないようだから言うけど、港町には船があるの。船
わかる？」

子狸「幽霊船なら知ってる」

勇者「幽霊船はないわ」

子狸「それは弱ったな……」

勇者「ためにしに幽霊をとってみて」

子狸「船」

勇者「そう。船ならあるわ」

子狸「……そういうことが」

勇者「いまひとつ不安だけど……まあいいわ。行きましょ」

子狸「どこへ？」

妖精「きれいにループしたなあ……」

正規の手続きを踏んでお船に乗ったことがない子狸さんであった

「決戦、海の見える街」 part 3

五八、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

さて、ようやくここまで来たか

船便を予約しに行くということは

すでに次の目的地は決めてるみたいだな

なんとなく予想はつくが……

念のために訊いておくか？

五九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

いや

船旅なら猶予はある

羽のひとは勇者さんの信頼も厚いし

ここで無駄なリスクを冒す意義は薄いだろ

六〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

だが、互いに背を預ける旅の仲間だ

次の行き先が気になるのは当然じゃないか？

むしろ訊かないほうが不自然に思える

六一、管理人だよ

おれに考えがある。任せてくれ

おれ「おれ、連合国に行きたいな」

勇者「なぜ？」

おれ「実家がそつちなんだ」

勇者「……あなた、連合国の人間なの？」

六一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

なにしてくれちゃってんの？ この子狸

六三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

実家でもねーし

六四、管理人だよ

おっと、このおれとしたことが……

おれ「実家でもなかった」

勇者「……連合国に行きたいというのは？」

おれ「父さんがね」

勇者「うん」

おれ「うち、パン屋なんだけど」

勇者「うん」

おれ「あんまりおいしくないんだ。見た目にこだわるから」

六五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

こだわるほどの見た目でもねーし

あの人間の闇を凝縮したような暗黒物質のモデルがおれたちだと知ったときは軽く死にたくなつた

六六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おれたち、あんな前衛的な形状してねーし

大きいひととか、まじで嘆いてたからね

なんだよ、五身合体パンって

六七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

お屋形さまはマーケティングリサーチが甘いんだよ

まあ、大繁盛しても困るっつーのはあると思うけど……

六八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

バウムフ家は恵まれてるよ

さいあく国の援助を受けれるし

六九、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

それは口約束だよ

しよせん各国のトップ連中にとってバウムフ家は邪魔者だろ
バウムフ家が自然に滅んでくれるなら
それがベターな結果だと思ってるんじゃないか？

七〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

さて……

敵か味方か……

二元的な物の見方をするのは、おれたちの悪い癖だからな

チェンジリング ハイパーが完成したときは

うまく利用したものだと感じたものだが……

あるいは、あれも発展の途上なのかもしれん

どこまで迫れるか……

楽しみだ

七一、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

お前らが悪だくみをしている一方その頃

勇者一行は停泊所に到着

入り江に三隻ほど停泊している船は

どれも魔法動力船とかいう原始的なものだ

帆船が廃れてだいぶ経つ

魔法が普及するにつれて

人間たちはすごい勢いではかになっている気がする

船員A「チク・タク・デイグ！」

船員B「チク・タク・デイグ！」

船員C「チク・タク・デイグ！」

子狸「チク・タク・デイグ！」

船底の空洞部に仕込まれた幾つもの丈夫な木の板をしこたま魔法で殴って出航するわけだが

力押しにも程があるだろ……

七二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

なんか、おかしなのが混ざってなかったか

七三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おれには何も見えなかった

七四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

現実はいつも過酷だ

船員A「いいぞ、新入り！ その調子だ！」

子狸「あいあいさー！」

船員D「針路よし！ ゴー！」

船員B「うおおおお！ アバドン！」

船員Dの指示で地を蹴った船員Bが船底に飛び込み
直進用のひとときわ大きな舵板を殴りつける

子狸「動いた！」

船員D「まだだ！　ゴー！」

船員C「くたばれええええええ！　アバドン！　アバドン！　アバドン！」

なにか恨みでもあるのか

左右のラッシュから回し蹴りを叩きこむ船員C

船員B「いかん！　船底にひびが！　浸水してるぞ！」

船員D「ふさげ！　そして、とどめだ！　ゴー！」

船員B「アイリン！　よし、来い！」

船員A「沈めやあああああ！　アバドン！」

大きく跳躍した船員Aが渾身のニーを叩きこんでフィニッシュ

ライフポイントを削りきられた魔法動力船が出航する

船員D「よし！　汽笛を鳴らせ！」

出航を告げる汽笛に

栈橋の上で待機していた乗客たちが次々と甲板に飛び移る

船首で無意味にポーズを決めていた船長が

頃合いよしと見て両腕を大きく広げる

船長「野郎ども出航だ！　パル・エリア・エラルドお！」

具現化した巨大な光の腕が海水を割る
豪快な平泳ぎだ

もうちょっと何とかならんのか、この魔法動力船……

勇者「……………」

入り江で出航を見守る勇者さんに
甲板の子狸が千切れんばかりに手を振る

子狸「手紙、書くから！ また会えたら、そのときは伝えたいことがあるんだっ……………！」

勇者さんの姿がどんどん遠ざかる

行ってきます

七五、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

どこへ行く

隙あらば子狸を引き離そうとするな、この青いのは……

勇者「リン」

おれ「はい」

言われるまでもなく

おれは船まで飛んで行って念動力で子狸を捕獲

船員A「なにっ!? 新入り、つかまれ!」

子狸「っ……兄貴!」

絞め落としてやろうかとも思ったが

目線で確認すると勇者さんが静かに首を振ったので

仕方なく首根っこをつかまえて入り江まで持っていく

船員A「新入りっ!」

子狸「兄貴いっ!」

砂浜で四つん這いになって悲嘆に暮れる子狸の手元に

勇者さんの影が落ちた

勇者「伝えたいことがあるなら、いま聞いわ」

子狸「それはまた次の機会に……」

おれ「もうちょっと何とかならんのか、この子狸……」

ちなみに子狸が暴走してる間に

勇者さんは船便の予約を済ませた

たぶんそうなんだろうなとは思ってたけど

スターズに会いに行くみたいだ

七六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

来るか、勇者よ……

七七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

勇者よ……じゃねーだろ

だいじょうぶか？

あのひと、勇者さんのツッコミに対処できないんじゃない？

七八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そこまでひどくねーよ

なんなら、おれがカンペ出すし

七九、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

それもな……

なんだかんだで、ご近所さん同士って似ていくんだよな

八〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

は？

そんなことねーだろ

おれ、自分で言うのも何だけど
冷静沈着なほうだし

いかなる事態にも対応できる自信があるよ

八一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

本当かよ……？

歩くひとのときも、けっこうテンパってなかったか？

八二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

あれは例外だよ

まさか泣かれるとは思わなかったんだ

八三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

出たよ、あれは例外……

言い訳が緑のひとと同じなんだよ……

もう不安しかない

八四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

うるさい

とにかく……だいじょうぶだ

なんとかする

八五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

まあ……そうだな

だいじょうぶだろう

ともあれ、そろそろ魔王をどうするか考えんとなー……

八六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

もうお前が魔王でいいよ

八七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

おう。適材適所だな

八八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ばか言え

おれは子狸についてるんだから無理だ

八九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

じゃあ、子狸さんが魔王ということだ

九〇、管理人だよ

おう。適材適所だな

九一、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

身のほどを知れ

九二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

身のほどを知れ

九三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

身のほどを知れ

「決戦、海の見える街」 part 3 (後書き)

注釈

・魔法動力船

帆はなく、船体の中央に灯台が立っている。

客室の下層に船底と呼ばれる空洞部があり、帆船時代の名残りで「舵」と呼ばれる木の板が幾つも設けられている。

この舵を魔法で殴打することで出航し、ある程度まで進んでから魔法の平泳ぎに移行する。海上の船体は不安定なので、見た目ほど簡単ではない。

とことんまで力押しだが、魔法が動力であることは確かである。

なお、この世界には海上戦という概念がない。

海上の船を沈めるのは、魔法使いにとってあまりにも容易である。

「決戦、海に見える街」 part 4

九四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

魔王討伐の旅シリーズ〜子狸編〜

決戦

海に見える街

九五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お？

九六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

お？

九七、管理人だよ

お？

九八、山腹巣穴在住のとるにたらない不定形生物さん

え？ もっ？

まだ夕方にもなっていないぞ？

いまだどこ？

九九、管理人だよ

宿屋です

羽のひとと勇者さんはお風呂に

おれが沸かしたんだよ

一〇〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

浴槽に水を張ったのはおれですし

一〇一、管理人だよ

沸かしたのはおれですし

というか、なんでおれは縛られてるの？

みの虫さんですかこんにゃろー

一〇二、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

だってお前、放っておいたら覗くだろ？

細切れになりたいなら構わないけどさ……

一〇三、管理人だよ

覗きませんよ

なにを言ってるんですか、あなたは

いや、本当に

一〇四、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

おれらが風呂に入ってるとき

葛藤しながら部屋をつろつろしてたのはわかってるんだよ

お前は本当にどうしようもないポンポコだよ

このエロ狸が

一〇五、管理人だよ

つろつろしないほうがどうかしてますよ

あと、かっとうってなんだ

いや、湯加減であることはわかってる

一〇六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

動詞ですらないだろ

知ったかぶりするんじゃない

葛藤する。どうするか迷うってことだ

すまん、庭園の。話が逸れたな

もう完成したのか？

鬼のひとたちは一緒じゃないのか？

一〇七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇者さんが退魔力を剣に流せる……というのは正確じゃないんだが
とにかく、その話をしたら歩くひとのフォーローに回るとか言い出
してな

なんでもアリア家お抱えの鍛冶職人に興味があるらしい

おれはいま、港町手前の小高い丘の森の中にひそんでる
街道から少し外れたところだ

とつぜん現れても変だから
ステルスは解除してる

見える？

なんか黒くてゴツイのがいるだろ
ヘルムから無意味に角が生えたやつ
それがおれ

勇者さんに対抗してマントも羽織ってきた

一〇八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おお

黒光りしとる

一〇九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

おお

ダメージ加工まで

一一〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

さすが鬼のひとたちだな……

足回りはどうだ？

海のひとがだいぶ苦心していたようだが

一一一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

それ込みで仕上げてある

全力駆動は無理だ

ちようどいいバランスだと思う

一一二、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

足回り？

お前らレポリユーションするんじゃないの？

一一三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

海底のは出て来れないからな

こいつは、おれたち五人がそろって

はじめて完成するんだ

一一四、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

そこまでやるのか……

しかし魔改造の実は……

ああ、そういうことが

一一五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おれは、あのひとを置いて行ったりはしないよ

子狸バスターに関しては……

まあ好きにしろとは言ったけどさ

一一六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

頑固だからな、お前も海のひとも……

庭園の

直接、見に行っていていい？

一一七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

もちろん

火口の、かまくらの

お前らも来いよ

両腕と胴体は預ける

やってやれんことはないけど

アリア家の剣術は特徴的すぎる

多少は不恰好な方がいい

一一八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

言ってくれるじゃねーか……

おれ参上！

ほうほう、これはなかなか……

一〇〇一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

すまん……強奪された……がくっ

一一九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

？ 庭園の？

お前、なに言って……一〇〇一？

一二〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

山腹の！ 離れる！

一二一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ちっ……

一二三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なんっ……あぶねえ！

庭園の……いや、違う？

お前は……

一二三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸バスターの右腕内部には

何者かがひそんでいた

山腹のに襲いかかる

まったき青

山腹のは、とっさに大きくバウンドして難を逃れるも

追撃のレクイエム毒針が

木々を縫って猛速で飛来

これに対し山腹のは

空中で姿勢制御しつつ触手で受ける

互いに本気だ

両者は激しくせめぎ合い

火花が散った

一二四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ふん……完璧にブロックしたと思ったが……

時限式の伝播魔法……奥の手というわけか

さすが、といったところだな

一二五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

火口の……お前というやつは……

一二六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おれ！？

いや、おれじゃないよ！

一二七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

さらにバスターの左腕から鮮やかなブルーが……

一二八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

だが、最良の結果とも言える

議長のオリジナルは、やはり油断ならん……

一二九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

山腹の……お前というやつは……

一三〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ごめんな、おれが悪かった

さて……

おれたちの名を騙るお前らは
いったい何者だ！？

一三一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

問答はあとでいい！

港町に近付けさせるな！

おれ参上！

一三二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう！

おれ参上！

一三三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

勇ましいことだな……

一三四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ほぞけ！

なにを考えているのか知らんが

こつちには子狸さんがいる！

お前らに勝ち目はねーぞ！

一三五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

違つぞ……火口の……離れる……

子狸にお屋形さまの真似事はできない……

おれたちは一人につき一つのレベルしか開放できない……

詠唱破棄で剥ぎ落とされるレベルは3……

バウムフ家の人間に特赦があるとはいえ
最低でもレベル7まで開放しないと勝負にならない……

庭園のは囚われた……

海底のは出て来れない……

一三六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

わかってる！

お前も含めて、ちょうど四人だ！

少し厳しいが……

数の上で互角なら子狸のぶん優位だ

一三七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

離れる……もつとだ……

火口の……お前もわかっているはずだ

おれたち魔物同士の騙し合いは
先手をとったほうが勝つ

勝算があるから仕掛けるんだ

かまくら」……………」

火口の！ 離れると言っているんだッ！

一三八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ああ、わかっているさ

とつに気付いていたよ

おれたちは……他のひとたちとは事情が異なるからな……

けど、それは役割が少し違うだけで、心は一緒じゃないか……

なにか事情があるんだろつと思うじゃないか……

こいつとは気が合うんだ

今日は暑いだの、こっちは寒いだの

溶岩がさらさらなんだけど、この星はだいじょうぶなのか〜とか

……
どうでもいいことを言い合ってさ……よく喧嘩する……

一三九、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

どうでも良くはない

まじでか

一四〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なあ、かまくらの

お前はオリジナルに言われて、ここにいるんだろ？

レベルを開放できないのは仕方ないよ

でも、おれとお前のコンビなら、きつと……

一四一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

オリジナルね……

こいつのことか？

一四二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

そうして空間に映し出されたのは

猛吹雪の中

無残にも氷付けにされた

かまくらのの姿であった……

一四三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

かまくらの〜！

一四四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

かまくらの〜！

一四五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

かまくらの〜！

一四六、管理人だよ

かき氷みたいだ

一四七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ぶっ飛ばすぞ、お前！？

いや、おれもちらっと同じこと思ったけど！

ちくしょう……お前ら、なにが狙いだ！？

一四八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

狙い？ 狙いだと？

よろしい。ならば教えてやろう……

一四九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

影あるところに光あり……

光あるところに影あり……

旅シリーズあるところにライフワークあり……

一五〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

貴様らオリジナルにはわかるまい……

旅シリーズの裏には

日の光も差さない闇がある……

われわれは……

秘密結社ライフワーク！

一五一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

反逆のときが来たのだ……！

管理人を制し……！

旅シリーズを支配する……！

そう！ われわれは……

とるにたらない不定形生物などではない！

一五二、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

われわれは

のうのうと旅シリーズを続けてきた貴様らとは違う……

いまを生きる不定形生物だ！

一五三、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

つまるところ、お前らの分身じゃねーか……

一五四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あっちゃあ……

一五五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あ
っ
ち
ゃ
あ
……
……

「決戦、海の見える街」 part 4（後書き）

注釈

・管理人

魔物たちの相互ネットワーク「こきゅーとす」の大きなかなめ。バウマフ家の人間が代々務める。

バウマフ家の人間は「減衰特赦」という「減衰」のペナルティを一部免除される特殊な魔法を扱える。

この「減衰特赦を扱える存在」過去に干渉できる存在」を軸とし、魔物たちは「こきゅーとす」の履歴を保管している。

減衰特赦は「逆算能力」の変形であり、「逆算魔法」の一機能として組み込まれている。偶発的に生まれた魔法なので、呪いにも似た性質を持つらしい。

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 1

一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中
というわけで
ここから先はおれたちのターンです

魔王討伐

の
旅シリーズ〜子狸編〜

都市級が

港町を

襲撃するようです

二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中
というわけでじゃない

お前らに制限解除は出来ないんだ

旅シリーズにはオリジナルがつく
お前らも納得していた筈のことだろ
それをいまさら……なんのつもりだ？

三、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

それすら欺瞞だな

けつきよくのところ

お前らは自分の心と向き合つのが怖いんだろう？

とくにお前は……

おれは、お前が分身魔法を使っているのを見たことがない

自分の中で意見の対立が起こっているからだ

自分の心に嘘をついているという自覚があるからだ

四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

知ったふうな口を叩くな

誰しもがままならないことを抱えて生きていくんだよ

そこを履き違えたら、おれたちは身も心も怪物になるぞ

五、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

その言いよう、子狸にそっくりだぜ

六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

訂正しろ！ いくらお前でも、その侮辱は許さんぞ………！

七、管理人だよ

事情は知らないが、あまりいい意味ではなさそうだな……

八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

沈黙は金なりという言葉があつてだな……

九、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お前らが高度な手法で子狸をばかにしている一方その頃……

火口のと山腹のは互いのオリジナル互いのコピーと対峙していた
怒りも悲しみも憎しみも、自分自身にぶつけるなら躊躇いはいら
ない

この場は任せるか……

庭園の、行くぞ

一〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

！ 待てっ！ かまくらの……！

一一、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お前の相手はおれだ

レクイエム毒針！

一二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

くっ……邪魔をするな！

レクイエム毒針！

一三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

鉄板をも貫く火口の中のレクイエム毒針が正面からぶつかり合う
衝突した瞬間に火口Bの触手が決るようにAの触手を弾き飛ばした

火口A「！」

勢いは衰えたものの、レクイエム毒針Bの直撃を受ける火口の

火口A「ぐふうっ……！」

衝撃で砲弾のように吹っ飛ぶ火口Aを追って、Bが高速で跳ねる
瞬時に追いつき、レクイエム毒針の乱れ撃ちでAを地面に叩きつ
けた

刹那の判断で攻勢に転じようとしたAのカウンターを
Bが上回った結果だった

一四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

こいつ……！

一五、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

オリジナルはコピーには勝てんよ

お前にはおれの動きが読めるだろうが

おれたちは、その更に先を考えて技を練っている

一六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

それもそうだな

とはいえ、数の上で逆転を許してるし

火口には踏ん張ってもらいたいところである

一方、山腹ズは冷静にお互いの挙動を観察している
山育ちの山腹のは罨を使った魔法合戦が得意だから
自然と睨み合いになるんだな

負けることはまずないと踏んだか

かまくらのを右腕に宿したバスターが港町へ向かって出陣する

一歩進むごとに、森の動物たちが踏み固めた土壌にくつきりと足
跡が刻まれる

微細な振動が木々を伝い、樹上で羽を休めていた鳥たちが不思議

そつに下界を見下ろした

後顧の憂いを断つ意味でも

かまくらの残って参戦したほうがいいんじゃないか？

一七、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お前は昔から得体の知れないところがあるな……

子狸バスターにはサポートが必要だ

機体制御は庭園のが担当してるけど

二足歩行なんてめったにしないし

さすがに触手と同じ感覚で両腕を動かすわけにはいかん

一八、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

風雲急を告げてるお前らには申し訳ないんだけど

いまお風呂を上がって着替え終わりました

子狸を解き放つてだいじょうぶ？

暴走しない？

一九、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

だいじょうぶだろう

というか、たぶん子狸さんは事態を理解してない

二〇、管理人だよ

そう思うなら試してみるといい

二一、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

出たよ謎の自信

おれ「上がったぞ、おらー」

子狸「もーっ」

手足を縄で縛られてベッドの上に転がされていた子狸が自己主張した

おれに続いて浴室から出てきた勇者さんが同情的な意見を述べる

勇者「……猿ぐつわまで噛ませることなかったんじゃないかしら？」

水気を含んだ髪がふわふわと浮いている

おれ手製のあったか気泡の周回運動によるものだ

くすぐったそうに髪を遊ばせている彼女に

おれは反論した

おれ「甘いですよ。こいつの魔法はふつうじゃないですから、詠唱をかんぺきに封じないと。猿ぐつわがなんですか、手ぬるいくら

いですっ」

子狸「……もっっ」

勇者「照れてるみたい」

おれ「いっぺんしねっ」

大気を蹴って跳躍したおれのギロチンドロップが子狸に炸裂した

二二、管理人だよ

またそうやってすぐに暴力に訴える……

ぜんぜん痛くないけど……それよりもっと大事なことだ

癖になったらどうしてくれるの？

二三、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

そのときがお前の最期だろうよ

二四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸さんの変態がどんどん加速する

見かねた勇者さんが子狸の縄を解きはじめる

勇者「ちやつちやとお風呂に入ってしまったいなさい」

いましめから解き放たれた子狸は
しかしまったくべつのことを考えていた

縄のあとが残る手首をさすりながら
あさつての方向を見つめる

子狸「行かなくちゃ。黒雲号と豆芝がおれを待ってる」

子狸の一日はお馬さんたちを中心に回っているのだ

勇者「わたしの言うことが聞けないというの？」

勇者さんと子狸は下らないことで反発することが多い
根本的な価値観が異なるからだ

子狸「いくらお嬢でも……おれの走り出した情熱は止められないんだよ」

勇者「晩ごはんを抜きにされても？」

子狸「……………」

子狸は躊躇ったすえに頷いた

子狸「そつだ」

二五、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸の晩ごはん抜きが決定した一方その頃……

港町を目前に控えた我らが子狸バスターは
門番の騎士たちに職務質問を受けていた

騎士A「止まれ！ 動くなと言っている！」

騎士B「そこからいい！ 身分を証明できるものを提示しなさい
！」

完全に不審者の扱いだ
なにがいけないのか。まったく失礼な連中である

検問の順番待ちをしている商人たちが
列を維持したまま距離をとる

本当に強力な魔物は策を弄さないと知っているからだ

騎士たちも薄々は勘付いている
ただ、鎧を着てきてはいけないという法はなかった
とくに伝令は走っていることだろう

再三の警告にも黒騎士さんは応えない
地を踏みしめるたびに重々しく具足が揺れた

騎士C「警告はしたぞ！」

必要なのは証拠だった

単独で飛び出した騎士Cがバスターに迫る

バスターが片手を上げて制した

庭園「勘違いさせてしまったか？ それはすまないことをしたな」

ヘルムの奥から不吉な重低音が響いた

二六、空中庭園の現実を生きる不定形生物さん（出張中

不吉って言うな

門番の騎士は四人

一人はおとりで、残る三人で変則のチェンジリング ハイパーか
乗ってやってもいいが、それも失礼な話だろうからな……

おれ「そうだな、たしかに……紛らわしかったかもしれない。これ
まで、あまり意識したことはなかったが……」

この街の規模なら

駐在の騎士は三個小隊といったところか
ふむ……少し物足りんな

おれ「安心しろ。人間ではない。おれは、お前たち人間が“都市級”
と呼ぶ存在だ……」

さあ、はじめるぞ

まずは手はじめに……この街を陥とすでしょう

二七、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

庭園のの宣言に対し、人間たちは悲鳴ひとつ上げなかった
まるで時間が止まったかのように立ち尽くすばかりだ

バスターが脇を通り抜けると、騎士Cは目線だけでそれを追った
どつと噴き出した汗が、彼の頬を伝って落ちた

散歩でもしているかのような気軽さで庭園のが告げる

庭園「お前たち人間は、おれたちを“軍団級”とは呼ばずに“都市級”と呼ぶ。数ではどうにもならないと知っているからだ」

無人の荒野を行くがごとくバスターは進む

庭園「じっさいに体験するのははじめてか？ 心に刻んでおくとい
い。いま、お前たちの身動きを封じ、詠唱さえ許さない……この力
を“魔力”と呼ぶのだ」

いいえ。たんなる魔法の一種です

二八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

伝播魔法ですね。わかります

「都市級が港町を襲撃するようです」part 1（後書き）

注釈

・魔力

レベル4以上の魔物が使う、詠唱破棄と伝播魔法、浸食魔法のハイブリッド。

妖精たちが使うとされる「念動力」の範囲拡大版である。

「伝播魔法^{ブロード}」というのは感染魔法とも呼ばれる、共通点を媒介として範囲拡大するための魔法。

たとえば「人間」の「男」の「騎士」に撃ちこんだなら、同じ騎士に最大の効果を発揮する。

女性の民間人に感染したなら、それ以降は「男」の「騎士」という感染経路が潰れるためだ。

あくまでも術者の認識している圏内に作用する（射程超過の制限が開放されていない）ため、人間たちが使った場合は目に見える範囲に効果が限られる。

レベル4の魔物たちが「都市級」と呼ばれるのは、無詠唱で放たれる「魔力」を前にしては数が意味を成さなかったからである。

なお、ごく小規模な「魔力」を人間たちは「呪術」と呼んでいる。

魔物たちを前にして足がすくんだり、心が萎えたりするのは魔物たちのせいになっている。

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 2

二九、管理人だよ

！？

三〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

そうだね。お風呂上りの勇者さん色っぽいね。はい次

三一、管理人だよ

なるほど。だからか

三二、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

おちつけ

その理屈だとお前はドアノブに恋してることになる

三三、管理人だよ

言われてみれば……

筋が通る……！

三四、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

通らねーよ

頼むから法的に許される範囲内で恋愛してくれ

庭園の〜

子狸も魔 力に絡めとられてるんだけど……

三五、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

逆に子狸だけ通常運転とかおかしいだろ

いや……まあ認める

子狸さんが人間だったこと忘れてた

だってほら、もう文法的におかしいもん

ぜんぜん動けないのか？

発声は優先的に封じたから無理としても

お前は魔法的におれたち寄りだから

侵食の度合いはそう重くないはずだぞ

三六、管理人だよ

かろうじて耳は動く

三七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

きさま、そんな特技を隠し持って!?

！ しまっ……！

三八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

それは一瞬の気のゆるみ

呼吸を乱した山腹Aは

しかし九死に一生を拾った

山腹B「っ……」

山腹Bも子狸の特技に目を奪われたからである

山腹A「ちいっ……！」

同時に我に返った山腹ズは

互いの畏を警戒して素早く距離をとる

地を這うような鋭いバウンドだった

火口ズがフットワークを交えた壮絶な乱打戦を繰り広げる一方

山腹ズは森にひそんで必殺の好機をうかがう

お前ら、もう xゲームで決着つけたら？

三九、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
決着つくわけねーだろ！

四〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）
勝っても負けても悲劇だろ！

四一、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

お前らが王者子狸への挑戦権を賭けて争う一方その頃……
ドアノブに手を掛けた姿勢で硬直している子狸の異変に
つい先ほどまで言い争いをしていた勇者さんが気がついた
子狸の耳だけが助けを求めるようにぴこぴこ動いている

四二、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
やっぱり動けないのか……

退魔性が低すぎるんだな
ほとんど人類の最低値だろ

四三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

だいじょうぶ、お屋形さまほどじゃない

あのひとの退魔性は、もうほとんど無いに等しい
だからどうなるってわけでもないけど

おれたち>>>超えられない壁>>>お屋形さま>>グランド>
子狸

その点、勇者さんには魔 力がまったく通用しないわけで……
騎士との共通点は同じ人間ってことくらいだし

人間たちがよくやるみたいに距離で縛れば
ちよつとは影響があつたかもしれない

妖精「ノロくん？ どうしたんですか？」

ノーマークなのをいいことに
勇者さんの髪を軽く編み込んでいた羽のひとが
部屋の中をついと滑空して子狸に近寄る

勇者さんは相変わらず察しが良い

勇者「魔力……？」

大通りに面した宿屋の二階だ

彼女はいったん子狸を放置し、部屋の窓を開けた
おだやかな潮風が室内に吹き込む
家々の屋根の向こうに海が見えた

まだ日も落ちていないというのに
ふだんは活気に満ちた港町が
静寂に沈んでいた

大通りでは

とつぜん動きを止めた大人たちに
子供たちが不思議そうな顔をしている

勇者「……街全域に及んでいるというの……？ それに、このタイ
ミングの良さ……」

ですよ。ちと性急すぎたか？

四四、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

だが、いまを逃す手はない

バスターは万全じゃないから、多少は誤魔化せるだろう
誤魔化せなかったとしてもだ……
見返りは大きい

四五、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

悠々と騎士たちの眼前を通り過ぎて
街門をくぐる我らが子狸バスター

天指す尖角が日の光を浴びてにぶく輝いた

庭園の、騎士たちは放っておくのか？
あとで面倒なことになるぞ

四六、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おう。チェンジリングは魔力に対抗するための技でもあるからな

しかし、どうしたものか……

背を見せたら仕掛けてくると思ってたんだけど
小隊と合流するまで動かないつもりみたい

騎士団のマニュアルが変わったみたいだな

王都の

山腹のでもいいけど

もしかして、この国の元帥って

さいきん中の人が変わったのか？

四七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

さあ？

四八、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

さあってお前……

けっこう重要なことと違うんか

四九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや

これは王国に限った話じゃないけど

元帥はいくらでも取り替えがきくから

専門の教育を受けた人間が元帥になるらしいけど
複数の人間が入れ替わってるっていう説もあるし
そもそも実在してるかどうかすら怪しい

裏ではどうか知らんけど

元帥がやってることといえば、たんなる号令係だからね

とりあえず、これだけは言っておきたい

お前ら、大隊長に構いすぎ違うんかと

出撃回数が三千以上ってどんな人生だよ……

五〇、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

時代が大隊長を求めた

五一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

時代なら仕方ない

五二、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

ところで勇者さんだが

少し悩んでから、子狸を野放しにすることにしたみたいだ

ひょいと回り込んで、子狸のでこをつつく

勇者「えい」

子狸「せによゝる」

効果はばつぐんだ

すかさず発声練習をした子狸が
身をひるがえして窓に駆け寄る

子狸「まさか……魔力!？」

だからさつきからそう言ってんじゃねーか

五三、海底在住のとるにたらない不定形生物さん

うーん……

意外だな

勇者さんのことだから
てつきり逃げの一手を打つかと思ったが……

五四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸を説得して逃げるんじゃないか？

船を動かすには人手がいる

羽のひとの妖精魔法で平泳ぎは無理だからな

しかし子狸を説得というのは……現実的じゃないな
なにか考えがあるのかもしれない

それはそうと

眼下に広がる光景に子狸は衝撃を受けたようである

子狸「レベル、4……！」

「うらうら

勇者「レベル？」

ほら見る、ツッコまれてるじゃねーか

べつにいいけどさ

レベル判定は人間にとってあんまり意味ないし

五五、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

上、中、下で事足りるからな

しかし、ここで子狸が意外なことを口にする

子狸「逃げて」

勇者「？」

子狸「人間が敵う相手じゃない」

勇者「……あなたはどつするの？」

子狸「それはあとで考える」

勇者「いま考えなさい」

「もつとも

考える子狸さん

ややあつて、はつと目を見開く

子狸「結論は出なかった」

おれ「いまのアクションいらないだろ」

勇者「仕方ないわね……。わたしが作戦を練るから、それに従いなさい」

なにやら乗り気な勇者さん

確実に何かを企んでいる……

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 2 (後書き)

注釈

・騎士団

万年人手不足の軍隊。警察機構も兼ねる。ほとんど何でも屋。とりあえず仕事がない人間を騎士団に放り込んで、厄介事はぜんぶ騎士団に押し付けるといふ悪しき風習がこの世界には蔓延している。

安月給でこき使ったために、騎士はかつこいいというイメージを国民に植え付けている。

王国騎士団にはおよそ一万二千人の騎士が所属している(正式に登録されている人数がそれだけということ)。

そのうち四千人は「特装騎士」と呼ばれる「実働部隊の補佐」である。

「実働部隊」というのは、八人一組の実行部隊のこと。たんに「小隊」とも呼ぶ。彼らは戦闘に特化した人たちなので、遠征するときなどは実働部隊ひとつにつき四人の特装騎士がつく。

「実働部隊の八人」と「特装部隊の四人」、計十二人からなる小隊を「実働小隊」と呼ぶ。

「中隊」というのは、十個の実働小隊＝百二十名の戦隊。

さらに中隊が十個集まったのが「大隊」であり、これは作戦行動における最大単位である。

騎士団でいちばん偉いのは「元帥」で、その下に「大隊長」、大隊長の下に「中隊長」、中隊長の下に「小隊長」がつく。「騎士団長」という言葉はない。

団体を束ねる資質があるものが「小隊長」に選出される。お給料が少し増える。

小隊長で、かつ出撃回数が千以上の騎士が中隊長に選ばれる。お給料が少し増える。十日に一度の割合で出撃したなら、およそ三十年後に出世する計算だ。ふつうはなれない。公共施設を利用すると、あまり良い顔をされない。

中隊長で、かつ出撃回数が三千以上の騎士が大隊長に選ばれる。お給料が少し増える。行く先々に魔物が現れるハードラックの持ち主でないは無理。千人に一人の愛され体質。たいていの公共施設はお引き取りを願う。

元帥は少し特殊で、幼少時から専門の教育を施された人間が選ばれる……らしい。大隊が二つも三つも同時に動くことはめったにないので、往時には不要の存在。姿を現すことさえ稀なので、一種の都市伝説と化している。

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 3

五六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

闇雲に突っ込んででも勝ち目はない

宿屋の一室で作戦会議をはじめる勇者一行

気持ちばかりが先走っている子狸がおちつくのを待ってから

勇者さんは切り出した

勇者「まず、これだけは覚えておいて。勇者ではなく、一人の人間として動けるうちに試しておきたいことがあるの。失敗する公算は高い。そのときは」

彼女は皆まで言わなかった。ただ、逃げ道をふさぐ

勇者「あなたたちの命をわたしに預けなさい。うまくいったら褒めてあげる」

とうてい受け入れられる提案ではなかったが

羽のひとは神妙な顔つきで頷いた

しかし子狸は首を縦に振らない

子狸「だめだ。お嬢はリンを連れて逃げるんだ」

妖精「さんを付けるよ」

子狸「リンさん」

勇者「わがまま言わないで。あなた一人に何ができるといふの?」

子狸「ドミノ倒しとか」

妖精「よせ。悲しくなる」

子狸「おれの力作を見れば考えが変わるよ」

子狸の返答は自信に満ちあふれている

たしかに考えは変わるだろうよ

途中からボードゲームの要素が混ざるからな

五七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ、子狸がちっちゃかった頃のあれか

いや、あれは王都のが延々と罰ゲームを受けるっていう

ただそれだけの……遊びじゃないな……

なにか邪悪な儀式だよ

五八、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

王都のの悲しい過去があきらかになった一方その頃

まっすぐ大通りを行く子狸バスターの前に

騎士たちが立ちふさがる

退路を断つたのは、先ほど魔力に呑まれた門番の騎士たちだ

逆算能力か？

五九、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ああ。チェンジリングでキャンセルされた

魔力で先手を取られるのは想定内ってことだな……

感動的ですからあるよ

一人はおとりで、残った三人で変則のチェンジリング ハイパー

……と見せかけて最初からチェンジリングの仕込みだったわけか

だが、ふつうに考えたら分の悪い賭けではある

完全に読まれてたな

レベル4の行動はパターン化されすぎてるのかもしれない

六〇、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

それは仕方ない

住民たちにパニックを起こされても困る

おれたちにレベル4のひとつたみたいなバランス感覚はないから
まとめて縛るしかない

六一、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

もつと褒めてくれ

六一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

えらいえらい

六三、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

そうだね。偉いね

六四、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

ちょっと待て

なんでお前ら上から目線なの？

お前らがそんなだから

子狸が真似して勇者さんにタメ口なんじゃねーか？

どうなの？ そのへん

六五、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

え？ じゃあ……

おれたたちのことお兄ちゃんって呼ぶ？

おれはべつに構わないけど……

六六、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

その発想がもう子狸

六七、管理人だよ

え？ じゃあ……

羽のひとはおれの妹なの？

六八、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

じゃあって何だよ

百歩譲ってもおれが姉だろ

いや、ねーわ

お屋形さまには申し訳ないが

お前との血縁関係はごめんこうむる

六九、管理人だよ

つまり生き別れの妹というわけか

七〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

つまってないだろ！

いや、つまるって何だよ……

やばいな……

既存の言語で対応できないとこまで来たか……

子狸は自分が育てたと豪語する

王都のひとはどう思いますか？

七一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そのような事実はありません

大自然が子狸さんを育んだのです

七二、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おい。やめろ

もうおれの中のイメージ画像

取り返しがつかないほどTANUKIなんだよ……

七三、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

なにそれ。ウケる

バスターを取り囲んだのは二個小隊の総勢十六名

予想よりも少ないな

ああ、レベル3のひとたちの攻略に回されたのか
無駄だと思うがね

せめて国内の意思を統一してからでないと
中隊規模の作戦行動は無理だろうに

子狸さんの出席日数がレッドゾーンに達して以来
レベル4のひとたちは活動を自粛している

とつぜんの襲来に騎士たちは驚きを隠せないようだ

騎士E「つの付き……つの付きだと？」

騎士F「生きていたのか……!？」

え？

七四、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

生きて……

え？

七五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あ、もしかして……

前回の旅シリーズの四天王と勘違いしてるんじゃないか？

七六、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

え〜……

つのが生えてて鎧を着てるっただけじゃん……

まず色が違っただろ……

人間たちの感覚は理解できん

どうする？ 乗っとく？

七七、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

え〜……

なんか見えるひとの手柄を奪うみたいで嫌だなあ……

あのひと、たまにツッコミ待ちみたいな顔でこっちを見るけど
歩くひとが睨みをきかせてるから

あんまり構ってやれなくて良心が痛むんだよ

なんなの？ あのいびつな友情

七八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

わかる

レベル2のひとたちの結束力は
ちょっと異常だよな

骨のひとと見えるひとが結託すると
手がつけられなくなるから
歩くひとが手綱を握るんだけど
あくまでもリーダーは骨のひとみたいなの……

もう歩くひとがリーダーでいいじゃんって
おれは思うんだけど……
それはなんか違うらしい

七九、住所不定のどこにでもいるようなてふてぶさん

ひとのこと言えた義理かよ

お前らなんてリーダーがいないじゃねーか

八〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

おれがリーダーですけど……

八一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

え？

いや、自分から言い出すのは違うだろ

おれは本当は嫌なんだけどさ

まあ、他に適任者もないしな……

八二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

え？

いや、ごめん。言ってる意味がわからない

スターズのボスが緑のひとなんだから

必然的におれがリーダーだろ

べつにリーダーの座には興味ないけどさ……

厳然とした事実だからな

八三、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

やめるよ、お前ら

見えて悲しくなるわ……

どいつもこいつも

おれがおれがって……

ひとを引っ張る資質ってのはさ
黙ってても醸し出されるもんだよ

八四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

え？

なにそのいいひとアピール……

いや、わかってるよ

お前は本心で言ってるんだろっけどさ

なんか釈然としないんだよな……

八五、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）

おい。お前らがねちねちと言いつ合ってるうちに

勝手に決め付けられて話が進んでる

騎士C「貴様のあるじは自ら眠りについたのではないのか！？
い
まさら現れて、何が狙いだ！」

おい。どうするんだ

何気にこれ重要な局面だぞ

きちんと相談して決めないと……

八六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうだな

これはリーダーとしての意見だが
他人の空似で通すべき

八七、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

いや

リーダーのおれとしては
乗っておくべきだと思う

わざわざ訂正して騎士たちの勢いを削いでもつまらん

八八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

だったら双子の兄とかどうよ？

弟のかたきをとるために出てきたとか
なかなか胸が熱くなる展開だぞ

おっと、ついリーダーとしての片鱗を見せつけちゃったな

八九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いやいや、ねーよ

当時の関係者はとっくに天寿をまっとうしてるから

逆恨みとか、どんだけ器が小さいんだよ

九〇、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

だめだ、こいつら……

王都のに至っては、まったく無関心だし……

あ

いや、オリジナルの言うことなど当てにならない

おれは同胞の意見に従うぜ

おれ「百年ぶりになるか……悲しいぞ……先の大戦からお前たちは何も学ばなかったらしいな。それしきの人数で、このおれに太刀打ちできるとでも思っているのか？」

九一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あつてなんだ

こいつ、自分の立場を忘れてたな……

九二、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

庭園「情弱だ、貧弱だ。お前たち人間ごときに何が出来る？ 足止めにもならん」

踏み出すバスターに騎士たちは気圧される

だが、いつの時代も人間たちは決断を迫られてきた

いまもそうだ

騎士J「っ……かかれ！」

連綿と受け継がれてきた騎士たちの技は、歴史の結晶と言ってもいいだろう

詠唱とイメージの規格を統一するというのは口で言うほど容易いことではない

まして実戦ともなれば臨機応変に陣形を組み替える必要がある
いったいどれほどの修練を積んだのか……

騎士C「パル！」 B「グレイル！」

その歴史さえ、レベル4の前では紙くずに等しい

騎士A「がっ……！」

抜き打ちで放たれた魔力が、騎士たちを絡めとった

途絶した詠唱が虚しく響く……

子狸バスターは歩みを止めない

庭園「無駄だ。おれに戦歌は通用しない。いつときは魔力を払え
ても、完全に克服はできない。さあ、どうする……」

王都襲撃より二年余……

誰しもが今日という日の訪れを予感していた

人類史上かつてない規模の大戦

その幕開けとなる

魔軍 元帥の再臨だった

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 3 (後書き)

注釈

・魔軍 元帥

先代の旅シリーズにおいて魔王軍四天王の一角を担ったフルアーマー見えるひと。

四天王というのは、レベル2のひとたち、レベル3のひとたち、レベル4のひとたちが各々で夜なべして作り上げたニューウェイブの魔物たち。

それらにバウマフさんちのひと扮する邪神教徒を加えた四人で魔王軍のつぺんを目指して出世競争を行ったのが前回の旅シリーズだった。

最終的には邪神教徒が薄汚い手段で他を出し抜いたものの、正当なレース覇者は見えるひと扮する騎士(通称、つの付き)であり、魔物たちの祝福を浴びて魔王軍元帥に就任した。

勢いに乗った魔物たちは各国首都の喉元に迫る怒涛の進軍を開始するも、突如として反旗をひるがえした邪神教徒の逆心により作戦が瓦解し、人類の巻き返しを許してしまった。

魔軍 元帥は最後まで勇猛果敢に戦ったが、聖 剣の真の力を開放した勇者との一騎打ちに敗れて志半ばに散る。

一方その頃、地下に潜った邪神教徒は良からぬ企みを水面下で着々と進めていた……。

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 4

九三、管理人だよ

お前らの野望は

このおれが

打ち砕いてみせる

九四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸「子供たちが泣いている」

だからそのための作戦会議だというのに
じっとしてられない子狸さん

なにかに招かれるように
ふらふらと窓のほうに行こうとするポンポコを

妖精「幼児か」

すっと片腕を突き出した羽のひとが
念動力で捕獲する

子狸「がっ……!!」

子狸の退魔性はひととしてどうかと思うほど低いから

多少は無茶なイメージも通るのだ

巨人の手で鷲掴みにされたかのように
不自然な姿勢で拘束された子狸さん

ふわりと宙に持ち上げられて

妖精「ひとの話を。聞けと。言っている」

周囲を取り囲んだ光弾で

一撃、二撃としたたかに打ちつけられる

子狸「おふっ。おふっ」

妖精「おれは彼女ほど甘くはないぞ」

子狸「っ……この程度で勝った気に……！ アイリン！」

子狸の治癒魔法が束縛を焼き払う

自慢の念動力を打ち破られて

羽のひとは不快をあらわにした

妖精「小癩な真似を……」

だが、いつときは念動力を払っても
完全に克服はできない

ちらりと窓を一瞥した子狸は
すぐに視線を羽のひとに転じた

羽のひとの視界を逃れようと

重心を落とし、すり足で右へ右へと回り込もうとする

子狸の行動は予測できない

接近を嫌った羽のひと

同様に宙を踏んで彼我の距離を一定に保とうとする

自然と両者は

勇者さんを中心に周回運動をはじめた

勇者「……………話を続けても？」

妖精&子狸「あ、はい」

ぐるぐると回り続けるこいつとあいつにも

勇者さんは自分のペースを崩さない

九五、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

勇者一行が会議を再開した頃

騎士たちは後退を余儀なくされていた

チェンジリング ハイパーの利点は速度だ

レベル3以下の魔物に対しては

ほぼ確実に先手を取れる

後手に回ったとしても

瞬時に追い抜き対処できる

その優位性が逆転していた

詠唱破棄の開放レベルは4

人間が扱える範囲の魔法とはケタが違う

チェンジリング ハイパーを封じられた騎士たちは
個別に対応するしかない

しかしチェンジリングを修めた騎士たちの魔法は
ワンパターンで見切りやすい

庭園「顔色が良くないな。先ほどの威勢はどうした。お前たちは、
この国を守る兵士なのだろう？ まるで子供の遣いではないか。子
供の遣いだ」

遮光性の力場を手前に置かれただけで

騎士たちの魔法は着弾点を見失って機能しなくなる

目の前の闇を振り払おうとする前に

子狸バスターは次の手を打てる

その気になれば、呼吸ひとつで百でも二百でも魔法を叩きこめる
まばたきさえ命懸けの……

レベル4が君臨した戦場とは、そうした性質のものだ

庭園「意地を見せてみる。抗ってみせる。それとも、やはり……勇
者がいなくてはだめなのか？」

執拗に挑発を繰り返すバスターに
騎士たちは無言を貫くことすら許されない

騎士H「遊ばれて……くそお！ つの付き！」

騎士E「かつて勇者に敗れた貴様が……人間をあなどるのか!？」

いつ魔 力が飛んでくるかわからないから
チェンジリングの備えは必要不可欠なものだった

具体的な検証はしたことがないが……

おそらくチェンジリング可能な言葉には時間的な制約がある

一分前か？ 二分前か？

個人によつて異なるだろうし

その日の体調、状況にも左右されるはずだ

負傷は逆算能力で癒せても

集中力には限りがある

だから騎士たちは負けるべくして負ける

黙りたくても黙れない騎士たちに

かぶとの奥で庭園のの表情が好色に歪んだ……

九六、空中庭園の現実を生きる不定形生物さん（出張中

勝手におれを変態認定するな

違うよ。ぜんぜんそんなんじゃない

三勇士の例もある
チェンジリング ハイパーに先があるというなら
いまのうちに見ておきたい

九七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

それは……
実在すると仮定しても
この局面で使うとは思えんが

九八、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
それこそ、おれたちの考え方だな

人間は死ぬ
恐怖に打ち勝てる人間は少ない

縄張りを侵されてるんだ
逃げ場はない
レベル4に対抗しうる技術があるなら使っさ
それとも、あるいは使えない理由でもあるのか……

九九、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
子供たちの善悪観は単純だ

後退を続ける騎士たちに

魔力の支配を免れた子供たちの声援が飛ぶ

子供A「がんばれ！」

子供B「負けないで！」

そのたびに騎士たちの悲壮感が増すかのようだ

騎士を目指す人間なら

誰だって勇者に憧れる

ここにいるのは、勇者になれなかった大人たちだ

歴史上、都市級の魔物を撃退できたのは勇者しかいない

苦しまぎれに撃ち放った圧縮弾さえ

じゅうぶんな余裕をもって展開された盾魔法に一蹴される

魔軍 元帥は止まらない。止められない

とつとつ騎士たちは港町の中央広場に追いつめられた

舟着き場は例外として

街の出入り口は街門の一ヶ所しかない

必然的に街の中心部では四方から馬車が行き交うから

広いスペースが設けられている

見晴らしの良い地点まで進むと

勇者一行が泊まっている宿屋が見えた

身体の向きを調整した子狸バスターが

次の瞬間

どこからともなく飛んできた光槍に

胴体を貫かれた

庭園「なに……？」

光槍が飛んできた方向を見るバスターに

今度はべつの方角から飛んできた光槍が

かぶとを貫く

— 00、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

狙撃だな

二個小隊はおとりで

分割した一個小隊が別地点から時間差で撃った

使い古された手だが

それが有効であることは歴史が証明してる

帝国と違って

王国は肥沃な大地と気候に恵まれてる

一年を通して雪が降ることはまれだから
屋上がある家が多い

いちばん怖いのは台風の被害で

三階建て以上の家屋はめったにない

屋上で腹ばいになっている狙撃班の
喜びの声を中継します

騎士「ヒット。体勢維持。次撃……（撃）てっ！」

指揮をとっている騎士が見ているのは
発光魔法で空間に投影した拡大映像だ

ほとんど間を置かずに二方向から連射された光槍が
遠目に見える黒鉄の騎士を景気よく串刺しにする

身体の至るところから光槍を生やしたそれと
距離を隔てて目が合った

騎士「！ やめっ！ 移動するぞ！」

「〇〇、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

まったく痛痒を覚えていない様子の魔軍 元帥に
騎士たちはひるまない

この機を逃すようなら騎士失格だ

子狸バスターの注意が逸れた
いまが最後のチャンスだった

騎士C「ゴル！」D「タク！」B「ロッド！」K「ブラウド！」G
「グノ！」

固く凝縮された幾つもの炎弾が
灼熱の軌跡を描いて子狸バスターに着弾する

開放レベル3の範囲殲滅魔法
レベル2とは比較にならないほどの火力だ

人間たちは古来より自然災害に悩まされてきたから
規模が大きいものほど威力が上がるといふ信仰がある

事実上、人間たちにとっての最強の手札だ

業火に晒された鉄は溶ける

庭園「つまらん。この程度か」

だが、鬼のひとたちのそれは
魔法に頼りきりの人間たちが忘れ去った遺失技術に他ならない

従来の鉄を焼き貫くイメージは通らない

子狸バスターに突き刺さった幾条もの光槍が
夢の終わりを告げるように砕け散った

一〇二、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

たしかに使い古された手ではある
期待外れでもある

が、悪くない

おれの心は震えたぜ

かまくらの

一〇三、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おう

騎士たちの切り札は通用しなかった

だがしかし、それでもだ……

子狸バスターの足は止まっていた

庭園「おれの採点は厳しい。及第点は与えられんが……返礼だ。受け取れ」

よつこらしよ

子狸バスターの右腕INおれが

軽く虚空をなでる

空間に火線が走り

遠く見える狙撃地点の二軒を斜めに寸断した

屋上丸ごとずり落ちたなら

下にいる住民は無事では済まない

狙撃担当の騎士たちは即座に逆算能力で修復した

そうでなくとも、おれがフォローしただろう

大した意味はない

だが、騎士たちの心をへし折るにはじゅうぶんな一撃だった

騎士C「スケールが違いすぎる……。こんな化け物に勝てるわけが

……」

騎士A「ひるむな！ 水滴は岩を穿つ……。われわれのやっていることは決して無駄ではない！」

叱咤したのは、勇者一行が港町に入ったとき検問した騎士だ

ああ、つまり、こいつが先任の小隊長なのか

一〇四、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

どうかな？

おれは騎士Cが怪しいと見てる

隊員の質にもよるだろうが

小隊長が特定されないよう動くのは基本だからな

たしかに小隊長を優先的に叩けば騎士たちの士気は下がるが……

まあ、あまり深い意味はない

騎士たちには悪いが、ここまでだ

一〇五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

日はだいぶ傾いている

士気を取り戻した騎士たちは不屈の闘志で戦い続ける

目標を包囲している二個小隊が小狸バスターの注意を惹き狙撃班が屋根伝いに移動しながら狙撃を繰り返す

一方その頃……

力尽きたオリジナルを

火口Bと山腹Bが見下ろしていた

やはり番狂わせは起きなかった……

力なく地面に横たわった火口Aと山腹Aを
そのコピーらが無慈悲にブロックする

魔法活動を封じられたオリジナルふたりは
かき氷みたいになってしまった

一〇六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）
かき氷って言うな……がくっ

一〇七、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）
王都の……

この件には……

黒幕がいる……

子狸を……任せた

がくっ

一〇八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）

ああ。任せておけ

あとで絶対に助ける

ああ、でも……

よく考えたら

面子は変わらんよな

一〇九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ちよっ

一一〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ちよっ

一一一、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

さすが魔王

目のつけどころが違う

一方その頃、騎士たちの奮闘をよそに

勇者さんは作戦を披露していた

勇者「作戦と言っても、できることは限られてるわ。あなたたち二人で敵の注意を惹きつけて頂戴。その間にわたしが回り込んで急襲する。基本的には……怨霊種と戦ったときと同じね」

とにかく子狸の理解力が乏しすぎる

子狸「おれは……勇者にはなれなかった……」

なんか語り出した

子狸「だから、お嬢は逃げて。君と一緒にいると、おれは夢を見るんだ。その夢を……たくさんひとに見てほしい」

勇者さんは時間の無駄を省いた

勇者「わかったわ。わたしたちは逃げる。それでいいわね？」

子狸「おう」

勇者「じゃあ、具体的な作戦だけど。もしもわたしの考えている通りなら、敵の状態は不完全な可能性が高いわ。わたしの宝剣が狙いだと仮定すると……わざわざ街を襲撃するメリットはない」

おれ「人質をとろうとしてるんじゃないでしょうか？」

勇者「そのときは無視するわ。そんな下らないことをするような小物には用がないの。勝手にすればいい」

かつて、そんなことを言った勇者はいたろうか……

というか、子狸がうざい

いつの間にか、おれを追い回すのが目的になってる

本当に……

本当にどうしようもないポンポコだよ、こいつは……

おれ「おい。追ってくるな」

子狸「ちがう。おれが追われてるんだ」

おれ「……ノロくんが立ち止まれば、わたしも止まります。それでいきましよう。せーのっ、はい！」

子狸「……………」

おれ「……………」

子狸「……………」

おれ「……止まれよ」

子狸「……そっちこそ」

エンドレスに突入したおれたちに

勇者さんが淡々と続ける

勇者「常に撤退を意識して戦うこと。突撃はしない。あなたは……………」

周回運動を見切った勇者さんが

子狸の頬をつまむ

勇者「女の子が嫌がることをしないの。ちゃんと聞いてる？」

子狸「聞いてます。……あ、止まった」

勇者「聞きなさい。あなたは魔力への対策も必要だわ。盾魔法で全

身を包むように固定して、破られたらすぐに新しく張り直ささい。
わかった？」

子狸「お嬢はわかってないなあ。そんなことしたら、どうやって攻撃するのさ？」

おれ「こいつ、むかつく……」

勇者「……他に対策はあるの？」

そしてこの得意顔である

子狸「いいこと思いついたんだ。治癒魔法をチェンジリングすればいいんだよ」

それ、まんま騎士たちのパクリじゃねーか！

というか……

おれ「お前……チェンジリングできないでしょ……？」

子狸「おう。……使えなくちゃだめなのか？ いや、そんなことはないはず……おれのプランに穴はない……いや、でも……」

思い悩んだすえに、子狸は肩を落とした

子狸「なんてことだ……こんな落とし穴があるとは……」

おれ「惜しかった。言う前に自分で気づけたら満点だった。もうちょつと、もうちょつとだぞ……！」

勇者」……………」

一一二、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
べつに惜しくはない

前提を飛ばして先に進もうとするからそうなる

一一三、山腹巣穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
いつだったかの作文でもそうだったな

さんざん無職を褒め称えておいて
最後に職業を修正し忘れたもんだから

授業参観で朗読したときの
ポンポコ母の切ない眼差しが忘れられない

あれは前もってチェックしなかった王都ののミス

一一四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）
チェックはしたよ

無職でもべつにいいじゃねーか

それを言い出したら

お前らのご職業はなんだよ？

一一五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ストーカーに言われたくはない

一一六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

え？

いや……あれ？

反論するつもりだったんだけど

ちよつと本気で傷ついた……

どういうことだ……

薄々は自覚していたということなのか……

一一七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

す、すまん……

そんなつもりじゃなかったんだ

いや、気にすんなよ！

おれたち全員ストーカーみたいなもんだよ！

しかも高性能なんだぜ！

とくにお前はスキルが半端ねーしな！

一一八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ありがとう

おれ……がんばってみるよ

一一九、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

これがオリジナルの底力だというのか……

一二〇、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

オリジナルおそるべし……

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 5

一一一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

これまでのあらすじ

港町に辿りついた勇者一行

船便の予約も無難にこなし

羽のひとの子狸キャッチャーが閃いた

一方その頃……

鬼のひとたちの手で秘密裏に開発され

ついに完成した子狸バスターが

何者かによって強奪されてしまう

邪悪なる意思を吹き込まれ

港町を強襲する子狸バスター……

果敢にも立ち向かう騎士たちであったが

その圧倒的な魔力に

なすすべなく倒れていく

事態を重く見た銀河連合は

青の戦士たちを派遣するも

強大な闇の勢力に囚われ

悪の手先と化してしまう

希望は潰えてしまったのか？

子供たちの呼び声に
いま、おれたちの子狸さんが立ち上がる

なんだか口では立派なことを言ってるけど
お前、さてはお風呂が気になってぜんぜん話を聞いてなかっただ
ろ……

一二二、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おい。だいぶ違うぞ

最後はよしとしても

一二三、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

途中からおかしくなった
銀河連合ってなんだ

でも最後は合ってる

一二四、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

エロ狸があ……

一二五、管理人だよ

ふと思い出したんだが

一二六、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おう。なんだ、どうした？

思い出すのは良いことだぞ
記憶力のトレーニングになる

言ってみるよ

一二七、管理人だよ

うむ……

叔父貴のところの若い衆が
旦那のチェンジリングは特殊だと

あれはどういう？

一二八、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お前はいったいどこへ向かってるんだ……？

タマさんの側近な

んー…… なにか特殊だったか？
近隣の河は一通り読み漁ったが
とくに不審な点は見当たらなかったぞ

海底の、わかる？

一二九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

まあ、いちおう

あれはたんにチェンジリングの対象が違うっただけ
ふつう、騎士は逆算能力をチェンジリングするんだが
タマさんの側近は盾魔法だっただろ？

ああ、繰り返すようで申し訳ないけど……
子狸よ。お前にチェンジリングは絶対に無理だ
方向性が真逆だからな
諦める

一三〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そもそもだ……
お前にはおれがついてるんだから
チェンジリングなんていらないだろ

詠唱破棄のほうが遥かに使える

一三一、管理人だよ

じゃあ、さっそくで悪いけど
制限解除してたもれ

「三三三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中
え？

もしかして口車に乗せたつもりなの？

「三三三、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

うちのパーティー、バランス悪いよな……

港町から脱出するという言質を

勇者さんからとったつもりでいる子狸は
もうここには用がないと言わんばかりだ

子狸「おれ、もう行っていい？」

勇者「だめ。聞きなさい。……リン」

おれ「はい？」

勇者「あなたの結界は、都市級の魔物に通じるの？」

おれ「いえ……無理です。足止めにもならないかと……」

勇者「じっさいに試したことは？」

おれ「あります。そのときは騙し絵みたいにして方向感覚を狂わせ
たんですけど……。わたしたちの結界は、魔力とすごく相性が悪
いんです（実話）」

勇者「そう。それなら……」

おっと、ここから先は内緒だぜ

一三四、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

いいだろう

千里眼の開放レベルは5だからな
お互いフェアに行こうぜ

まあ、もっとも……

火口の！ 山腹の！

おれたちの勝ち揺るがないがな……

一三五、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おう！

おれ参上！

おおっ!?

一三六、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おれ参……

おふっ！ おふっ！

一三七、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

駐在の騎士たちが外敵排除へと向ける熱意は高い

おそらく隊員のほとんどは

故郷を守るために戦っているのだ

子狸と違って

ふつうの人間には得意な属性がある

チェンジリング ハイパーの起点を一巡することで

彼らは多方向から様々な属性の魔法を撃てる

陣形は敵の行動に応じて変えるものだから

完全に動きを止めた子狸バスターに対しては

足を止めての、そして最速の撃ち合いになる

集中砲火の真っ只中に飛び込んできた火口のと山腹のは
たちまち蜂の巣になった

ステルスしてるから
騎士たちには見えないけどね

おーい、こっちこっち

一三八、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

あわわわわわ……！

ふう……

一三九、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ふう……

一四〇、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

左腕に火口のが、胴体に山腹のが避難

みなぎる子狸バスター

おれレボリューション！

つーか狭い

一四一、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おれレボリューション！

もちっと寄せて

一四二、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おれレボリューション！

おい。押すな

一四三、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

レボリューションとか……

お前ら恥ずかしくないの？

一四四、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

はじまったよ……

やだもつこのひと……

本当にドS……

一四五、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

牛のひとついい、歩くひとついい……

一四六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

レポリューションしてるところすまんが
山腹の、勇者さんについてくれる？

なんだか別行動とるみたいだから

おれ、さつきから千里眼の使い通しで
目が疲れてきた

一四七、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
その目とやらはどこにあるのかと

一四八、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
内部分裂せよとおっしゃるか……

喜んで

勇者さんはおれがついてないとな……

庭園の、火口の、以下略
お前らとは長い付き合いになるが
いずれはこうなるさだめだった……

さらばだ！

一四九、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

山腹の〜！

一五〇、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

山腹の〜！

一五一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

なぜ略した

んー……庭園の

火花星、打ち上げておくか？

一五二、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

そうだな。そうしてくれ

一五三、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

この日、王国の上空では大規模な火花星が観測された

星座が燃え上がっているかのようにだ

かすかに斜陽を帯びた西日の中

子狸バスターがマントを破り捨てる

騎士たちの砲火に晒されつつも

奇跡的に原型をとどめていたマントが
ばさりと地面に落ちた

レベル4の魔物は

詠唱をスキップできるといふ絶大なアドバンテージを持つ

だが、それすら氷山の一角に過ぎない

庭園「イズ……」

左腕INおれに紫電が走る

騎士A「！ 魔属つ……！」

騎士D「自分が！」

騎士Dが無謀とも言える突撃を敢行した

バスターに肉薄し、全身全霊の掌打を放つ

騎士D「レゴ！」

追隨してしまえば

狙撃の射線がつぶれる

他の騎士たちはフォローに徹するしかない

騎士A「ドロー！」

騎士B「ドロー！」

大気中の水分が凍結し
バスターの表面を氷が覆う

庭園「ロッド……」

加速魔法が連結されるたびに
氷の厚みが増していく

一時的にでも詠唱を止めるのが狙いだ

勇気は買う

しかし近付けばレクエィム毒針・影の餌食だ
おれたちに死角はない

庭園「ブラウド……」

騎士D「！？ こいつ、中になにか……！」

至近距離からまびさしの奥を垣間見た騎士Dが悲鳴を上げた
急激な眠気に襲われ片ひざをつく
加減したとはいえ、素晴らしい精神力だ

騎士D「ぐっ、う……！？」

庭園「デイグ……」

騎士Dが悲鳴を上げたとき
すでに騎士Aは駆け出していた

騎士A「グレイル！」

最後に騎士たちを打ち崩したのは
おそらく情だった

騎士D「隊、長っ……」

騎士Aに続いて

他の騎士たちも一斉に飛び出したからだ

仲間を救うという

ただそれだけの行動に

術理は微笑まない

チェンジリング ハイパーは瓦解した

繰り出された騎士Aの手刀は

皮肉にもバスターを覆う氷に遮られて届かなかった……

こういうことをするから

おれたちは嫌われるのである

庭園「メイガス」

座標起点

掛け値なしの開放レベル4だ

一五四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

一方その頃

子狸「でいれい」

こそつと盾魔法で全身をガードした子狸さんが

妖精「てめっ」

念動力もなんのその

子狸「でいれい」

巣穴を飛び出した

子狸「でいれいでいれいでいれい。ディレイ！」

妖精「リシアさんのアイデアをつ……悪用!？」

勇者「……………」

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 5 (後書き)

注釈

・おれレボリユーション

おれ革命。

青いひとたちの最終奥義。合体し、各部位の運動を各自で担当する離れ業。

分身魔法で再現しようとしても確実に頭部争奪戦が起こるため、この最終奥義を実現できるのは青いひとたちしかいない。

基本的には無意味……どころか弱体化する。だがそれがいい。

・発電魔法

電気を生成し操る魔法。スペルは「イズ」。

雷の属性は魔属性とも呼ばれ、人間が扱うことはできないとされる魔法のひとつ。

落雷は嵐を呼ぶとされ、非常にイメージが悪かったためと推測される。あと静電気とか。

魔物たちは自然を敬っているのです、それでは申し訳ないと紫色にデコレーションして自然現象との区別化を図るが、より一層イメージが悪くなったという噂も……。

・座標起点

魔法の起点を移動する魔法。スペルは「メイガス」。

開放レベル4なので人間にはふつうに使用不可。

回避不可能という性質のものではないが、魔物たちが人間を相手に使ったなら、まず必中と言っていいだろう的中率を誇る。

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 6

一五五、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

妖精「待てこら！」

子狸「やだ」

羽のひとの念動力を振りきった子狸さんが
小物類を蹴散らして窓台に飛び乗った

勇者「どうして……」

こうと決めたら一直線の子狸が後ろ髪を引かれたように見えたのは
勇者さんの声がいっになく頼りげなく揺れていたせいかもしれない
肩越しに振り返った子狸が目にしたのは
いつもの毅然とした彼女だ

勇者「あなた、死ぬわ」

静かに佇む勇者さんを映す
子狸の目に
迷いはない

子狸「ちがう。生きるんだ」

間違えて女子更衣室に突入したときと同じ言い訳だった

これでお別れになると思ったからかもしれない
最後に、にこりと微笑んでから

子狸は

自由へ向かって跳んだ

一五六、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

悲劇的に語彙が少ないな……子狸い……

一五七、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

会話が成立してるかどうか微妙な線ですしね……子狸い……

子狸が宿屋の二階から明日へと跳んだとき

天空から降った紫電が

騎士たちを打った

ほつれた糸が

天と地を結んだかのようだった

グループ指定、ウィルス性の座標起点

限りなくレベル5に近い広域殲滅魔法だ

かつて国ひとつを陥とした魔人の技に

騎士たちは悲鳴を上げることさえ叶わず

その場に倒れ伏した

逆算能力を使う暇などあるはずもない
総勢で二十四名の騎士たちが一瞬で全滅した

いや……ひとりだけ

騎士Aだけが切れ切れの意識をつなぎとめていた

いったい何が彼を支えているのか
子狸バスターにすがりつくように
がくがくと震える足で踏ん張っている

バスターは惜しめない賞賛を贈った

庭園「素晴らしい。認めてやる……お前たちは、おれの敵として倒れる」

そう言って、騎士Aの首に指を回して持ち上げる

騎士A「が……あ……」

庭園「言え。勇者は……アリア家の娘はどこにいる」

騎士A「逃げて……くれ……とても……かなわない……」

騎士Aの意識は朦朧としている

だから口を衝いて出たのは
王国を守る騎士としてではなく
ひとりの人間としての願いだっただけ

庭園「そうか。ならば、しね」

騎士Aを宙吊りにしたまま

「ゆっくりと手刀を構える子狸バスター」

一五八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

減速魔法で着地した子狸が目にした光景は

中央広場で倒れ伏している騎士たちと

いままさに風前の灯と化している騎士Aの命

そして、おびえて何も出来ずにいる子供たちだった

その姿が、かつての自分と重なって見えたのかもしれない

バウムフ家の人間はシナリオに没頭しすぎるくらいがあるから

未熟なうちは恐怖が足を引っ張ることもある

アリア家の人間とは違うから

意識的に感情を制御することはできないのだ

子狸は叫んだ

子狸「やめろーっ！」

黒装の騎士が子狸に気づいて騎士Aを放り投げる

一五九、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

大きくなったなあ……

ママンと似てる

一六〇、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ママン……

一六一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ママン……

一六二、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

お前らが美しい思い出にひたっている一方その頃

勇者さんは決断を下した

勇者「リン、追って。まだ途中だけれど……あなたの友達を支えてあげなさい」

おれ「はい！ リシアさんは？」

ベッドに立てかけてある剣を腰に差して

マントを羽織った勇者さんが

早足で部屋のドアに向かう

勇者「手筈通りに。……あの子は、もしかしたらとくべつな存在なのかもしれない。わたしよりもずっと」

お前らが、さんざん勇者さんをスルーして子狸にばかり構うから

……

おれ「でも、ともだちですから。ともだちだから……行きますっ！」

部屋を出ていく勇者さんを

最後まで見送るのももどかしく

おれは飛翔した

窓から飛び出すと

怒りに燃えた子狸さんが全力で駆けて行くのが見えた

子狸「チク！ タク！ デイグ！」

激しい感情はときとして

人間の潜在能力を引き出すこともある

3〜5発が限界とされていた子狸が

このとき生成した圧縮弾は、じつに十発に及んでいた

全力疾走を続ける子狸を追い抜いて

荒ぶる圧縮弾が黒騎士を打つ

黒騎士はびくともしなかった

鍛え上げられた鉄に覆われた堅牢なるバスターは

防御の手間すら惜しむことができる

庭園「つたない魔法だ。圧縮、固定、投射、すべてが甘い……」

魔軍 元帥は魔王軍で随一の魔法使いだった
こと攻性魔法に関しては魔王すら超えている

庭園「チク・タク・ディグ」

回転しながら圧縮された空気の弾丸が上空に撃ち出される

優に千を超える圧縮弾が
着弾点をずらして流星のように降り注いだ

馬車が通れるよう均された地面が抉られて
飛び散った土砂が
後追いの圧縮弾に粉碎される

凄まじい光景だ

イメージひとつとっても
人間の限界を大きく凌駕している

にじり寄ってくる圧縮弾の滝に
しかし子狸はひるまない

子狸「デイレイ・ラルド・エリア！」

傘のように頭上に展開した盾魔法を
薄く引き伸ばして高度を維持したまま前方に撃ち出す

雨が降ったときに便利な傘の道だ

一六三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

魔法の中核をなすのはイメージだから
打ち負けないという確信が大事だ

魔法の火力は子狸にとって数値の違いでしかない
それは人間よりも魔に近い感覚だ

子狸作の傘魔法は原則に従って正しく
豪雨じみた圧縮弾を打ち砕く

黒騎士までの道が開いた

陥没した地面を噛む子狸の足に
より一層の力が込められる

追いついてきた羽のひとが
きりもみしながら子狸の前に躍り出た

子狸「！ リン……」

妖精「おい。まともによっても勝ち目はないぞ」

子狸「だからっ……！」

妖精「友達なんだろ。おれら」

子狸「っ……わかった。行こう！」

妖精「けっきょく無策かよ……だったら好きにさせてもらっせ！」

先制したのは羽のひとだ

投射されたマジカル ミサイルが

光の軌跡を描いて黒騎士に着弾する

待ち構える黒騎士は小揺るぎもしない

子狸の傘魔法に感心した様子だ

庭園「ふむ……とるにたらない小物と思っていたが……なかなかどうして……」

傘魔法の庇護下でない地面が

流星雨で削り取られていく中

黒騎士から発せられる声だけが重く響いた

まるで別世界の出来事のようにだ

一六四、かまくら付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

トップスピードに乗った羽のひとが

光弾に紛れてバスターの背後をとる

妖精「いまさら出てきてっ……！ おれカッター！」

三日月状の光波がバスターの肩口を打った

しかし設定上、羽のひとの浸食魔法は決定的な殺傷力を持たない

重力が光を歪めるように
圧倒的な質量に光刃が弾かれたとき
あぜ道を踏破した子狸が
固く握ったこぶしを弓矢のように引きしぼる

子狸「アバドン！」

質量には質量をとということか

一六五、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

だが、無駄だ

振り上げられたバスターの左手INおれが
子狸のこぶしを無造作に受け止めた

魔法を使うまでもない
腕力だけでねじ伏せてやる……！

子狸「ぐうつ………！」

庭園「おれの部下が世話になったそうだな」

両者の対格差は大人と子供ほどもある

ぐつと胸をせり出したバスターが
仲つむまじい恋人のように顔を寄せて囁いた

庭園「ただの子供ではないか。悪いことは言わん……勇者など捨て置き。帰る家があるのだろっ……?」

一六六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おい。やめろ

すでに統制が崩れてるじゃねーか

左腕と胴体が別の生き物みたいに動いてて気持ち悪いんだよ
いや、たしかに別の生き物なんだが……

一六七、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

それが持ち味とも言える

バスターは子狸をまったく問題視していない
敵意を向けるにも値しないのだ

近所の公園で遊ぶ子供にしてやるように
無骨な手で頭を撫でてやる

軽く体重を掛けただけで
子狸は荷重を支えきれずに両ひざを屈した

子狸「くっ、うっ……!!」

肩で息をしている子狸に
バスターが繰り返した

庭園「家に帰れ」

脅威に値しないという意味では羽のひとも同じだ

左腕にまとわりついている彼女へと向ける

バスターの視線にはひとかけらの興味もない

庭園「妖精か……やはりな……」

妖精「このっ……！」

一六八、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

あとでころす

一六九、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ごめんなさい

一七〇、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

命だけは……

一七一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸さんのベイビーをこの手で抱き上げたいです

一七二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

内心で命乞いする中のひとに

子狸が跳ね上がるように手刀を繰り出した

子狸「グレイル！」

受けるな

浸食されるぞ

一七三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前はどっちの味方なんだ

さすがに浸食魔法は物理的にやばいらしい

が、チェンジリング ハイパーをも封殺するレベル4に
不意打ちとはいえ接近戦が通用すると考えるのは甘い

黒騎士がちよいと指を下に向けると

詠唱破棄された崩落魔法が子狸を地面に縫いつける

子狸「がっ……！」

庭園「寝ている」

大人と子供どころではない
象さんと蟻さんだ

仮に接近戦が通用するとすれば……

そうだよな

屋根伝いに移動してきた勇者さんが
抜き身の真剣をぶら下げたまま
屋根を蹴って跳躍した

狙いは黒騎士の肩口だ
全身を鎧で覆われている黒騎士だが
どんな鎧にも継ぎ目はある
関節部なら間違いない

魔法を排した勇者さんには
気配がない

着地を羽のひとに委ねての
全体重と落下速度を上乗せした
完全な死角からの一太刀……

かつて見えるひとを葬ったそれを

受け止めたのは

振り返った黒騎士の右手から伸びた

炎の剣だった

庭園「不意打ちにはもう懲りた」

おい。おいおい……

何してくれてんだ、お前……

おれのシナリオにはないぞ

本気で……おれたちにとって代わるつもりか!?

残酷なことしやがる……!

この発想……!

お前らの黒幕は……お屋形さまじゃないのか!?

一七四、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

甘いよ。甘い。見誤ったな、王都の

庭園「アレイシアン・アジェステ・アリアだな？」

突如として顕現した魔火の剣に

勇者さんは無反応だった

透徹な瞳が黒騎士を見据える

完璧に感情を制御した状態だ

代わりに羽のひとがリアクションしてくれた

妖精「火の宝剣……！？ そんな、まさか……！」

本当にありがとうございます

一七五、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

まったく……

この青いのはどうしようもねーな……

ふだんから腹黒いこと考えてるから

内部分裂するんだろ……

おれ「リシアさんっ……いま！」

隙だらけだぜ、子狸バスター！

その首、もらったあ〜！

一七六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

羽のひとの光刃は

しかし黒刃によって相殺された

妖精「！？」

子狸バスターの肩に降り立った何者かが
羽のひとに笑いかける

??「臆病者のリンカー・ベル……相変わらずね」

手乗りサイズの少女の姿だ

背中から生えた二対の羽から
光の燐粉が舞い散る

黒装の騎士に寄り添う妖精は
あるじに合わせてか
夜の帳に溶け込むような
黒い衣装を身にまとっていた

一七七、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

待たせたな、お前ら……

おれ参上！

一七八、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

司令！

一七九、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

司令！

一八〇、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

司令！

一八一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

呼んでますけど、司令……

ふだんから……なんでしたっけ？

一八二、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

あっちゃあ……

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 7

一八三、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
どうしよともなくて、ごめんなさいね。本当……

一八四、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
本当にね……

一八五、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
うん、本当に……

一八六、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん
ねちっこい！
なんなの、この青いのん！

わ、わかってるんだぞ……
お前らが純真無垢なおれのコピーをたぶらかしたんだろ……
なにが司令だ。かわいそうに……

一八七、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）

いやいや、ねーよ。それはない
王都のが言ってるでしょ

おれなんて、ほとんどご近所さんを売ってるからね
涙を吞んで従ってるわけですよ

一八八、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

ちよちよちよ……ちよつ

お前ら

ひとが地味にマグマの成分調査してる間に
なに勝手に話を進めてんの？

え？ ご近所さんっておれ？

おれを売ったってこと？

どういうこと？

一八九、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

いや、だからあ……

あれでしょ？

王都のは勇者さんにバラしちゃうつもりなんでしょ？

でも本当にやばいところまでバラす必要性はないわけじゃん？

そのための聖 剣なんでしょ？

でも火属性は二人もいららないよね、っていう話

一九〇、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

うん？ うん。そう……なのかな？

え？ うーん……

え？ そういうこと？

じゃあ、おれはどうなるの？

一九一、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お前は今日から大地の化身です

本当にありがとうございました

一九二、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

いやだよ！？

なんでよりによって大地だよ！？

ていうか、それ言ったら土属性もかぶってるし！

一九三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

それはそうなんだけどさあ……

んー……子狸さんは目の前のことに精いっぱいみたいだし
もつ言っちゃうけど……

緑のひとを崇め奉ってるのって
巫女さんの一味だよな？

その時点で決まっちゃったっていつか……うん

一九四、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

か……関係なくね？

いや！ わかるよ

豊穰の巫女だもんな

でも、だからって……

おれが土属性を担当するのは
また違う話だろ！？

しよ……

消去法……なのか？

一九五、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

消去法だなんて、そんな……ねえ？

一九六、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

うん、まあ……おれの口からはちょっと……なあ？

一九七、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

そうだなあ……

おっと、勇者さんががんばってるというのに
おれたちときたら……

言い合いをしてる場合じゃないぜ！？

魔 力対策なのだろう

退魔性を全開にした勇者さんは

無機質で

近寄りがたい雰囲気がある

口を開いて喋るといふ

ただそれだけの行為に違和感がつきまとうのだ

勇者「つの付き……ね。思ったよりも大物が釣れたわ」

愛用の剣が

炎に巻かれて一瞬で融解しても

彼女は眉ひとつ動かさなかった

直前に剣を手放して

復活した魔軍 元帥の腕を蹴って難を逃れる

ところで話は変わるが

おれは、いつか子狸さんが勇者さんの笑顔を見せてくれるんだと思ってた

でも違ってたんだな……

着地した勇者さんが

すかさず聖 剣を起動して

にたりと笑った

毒々しい野心に満ちた笑顔だった

勇者「お前の

首級を

とれば！」

踏み出すと共に光の剣を力任せに叩きつける

これを火の剣で受けた黒騎士に

ぎらつく目で勇者さんが叫んだ

勇者「この国は

わたしのものだ！」

ど、ど、どしっちゃったの、この子……？

一九八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ふっ、わからないのか？

一九九、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

王都の……なにか心当たりでもあるのか？

二〇〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや、おれもわからん

ど、どしっちゃったんだろっね？

二〇一、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

なんだそれ！

ぶざけんな！

二〇二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

知るか！

ポンポコ担当のおれが
よそんちに詳しくかつたらおかしいだろ！

まあ……

憶測でしかないけど

無理やり押さえ付けられた感情は
むしろ伸びるんじゃないか

子狸「お嬢っ……！？」

勇者さんの声に子狸が息を吹き返した

子狸「なんでっ」

勇者「平民がわたしに指図しようなんて百年早いわ」

勇者さんのテンションが急落した

噛み合った聖 剣から火の粉が舞う

光の粒子が踊っているかのようだ

勇者さんよりも黒騎士のほうが高い次元で聖 剣を使いこなせて
いる

聖 剣のポテンシャルを知っているということだ

だから黒騎士はつばぜり合いを避けて
膂力で劣る勇者さんを弾き飛ばした

庭園「試させてもらおうか……ディグ！」

左腕を一振りするだけで
追撃の圧縮弾が放たれる

ふつうの人間なら一撃で致命傷になりかねない
凶悪な圧縮弾だ

勇者さんは瞬間的に感情を揺り戻して
構成破壊を試みるも

庭園「ドロー！」

加速魔法を追加されて失敗に終わる

つまるところ投射魔法の最高速は
処理速度の限界でもある

加速魔法で処理速度を底上げされた魔法は
結果的に加速したように見える

突き出された勇者さんの手をくぐり抜けた圧縮弾が
彼女のお腹をしたたかに打った

勇者「っ……………」

いくら常人離れた退魔性を持っているとはいえ
削りきれなかった衝撃に

勇者さんの小柄な身体がさらに弾かれる

庭園「おれにそんな小細工は通用せんぞ」

しっかりと勇者さん対策を練ってきたらしい

さもあらん

レベル4が旅の序盤で負けるとか

笑い話にもならないからね

二〇三、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おい。プレッシャーかけるな

そんなこと言ってもコイツ

勇者さんとの相性は最悪だぞ

設計思想が対子狸戦を想定したものだからな……

二〇四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なぜそんなものを作った

二〇五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

なぜと言われましても……

二〇六、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

まあ、負けることはないだろ

勇者さんの劣勢はあきらかだ

もとよりレベル4に
人間が敵う筈もない

わかりきったことだ

いますぐにでも加勢に向かいたい羽のひとが
行く手を遮る、かつての同胞に吠えた

妖精「どきなさい！」

黒妖精「あら、久しぶりに会えたのに挨拶もなし？ 寂しいじゃな
い……」

妖精「言ってもわからないなら……！」

黒妖精「できるかしら？ 落ちこぼれのあなたに……」

勇者一行に随行する羽のひとは

妖精の里では落ちこぼれだったという設定がある

はつきり言って

羽のひとは魔王よりも強いからだ

ファイティングポーズをとった二人が
空中で水平にサイドステップを踏む

速い。氷上を滑っているかのようにだ

フェイントを交えながら接近し
挨拶代わりの左ジャブで距離を測る

左の刺し合いは互角

ぴくりと右肩が動いたが

これはフェイント

迂闊にビックパンチを放り込めばカウンターの餌食だ

いったん距離をとった両者が構えを変える

ガードを下げた黒い妖精さんの
速射砲のような左ジャブに対し

ガードを固めた羽のひとは

頭を左右に振ってまとを絞らせない

互いに右を叩き込む機会をうかがっているようだ

二〇七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おい。やめろ

なにを当然のようにこぶしで語ってんだ

堂に入ってるじゃねーか……

そうじゃない。子狸が真似したらどうすんだ

魔法で戦って下さい。お願いします

二〇八、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

そ、そうか……

では改めて……

おれ「マジカル ミサイル！」

二〇九、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

いまさら手遅れだと思いが……

おれ「ダークネス スファイア！」

二一〇、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

なにそれ。かつこいい

妖精ファイトが魔法合戦へと移行した一方その頃……

苦戦する勇者さんを見かねた子狸が
重力場にあえぎながら這って進み
前足でバスターの足首をつかんだ

子狸「イズっ……！」

ちよっ！？

二二一、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おまつ！？

二二二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

さりげなく前足とか言うな

もともと子狸は

めったなことじゃ侵食魔法を使わないんだよ

子狸の手からほとばしった紫電が

黒騎士の鎧を伝って

お前らがしびれる

庭園「なにっ！？」

驚かざる得ない庭園の

その隙を突いて子狸が声を張り上げた

子狸「お嬢っ……！　だまされちゃだめだ！　レベル1ならっ……」

余計なことを口走ろうとする子狸を

そうはさせじと黒騎士が襟首をつかんで持ち上げる

庭園「小僧……貴様、何者だ……」

好機と見て勇者さんが駆け寄ろうとするも
彼我の距離はだいぶ離れてしまっている

庭園「エリア・ラルド！」

黒騎士が勇者さんのほうに向かって片腕を突き出すと
遮光性の障壁が幾重にも勇者さんを取り囲んだ

退魔性は恣意的なものだから
これを打ち破るのは容易ではない

子狸「お嬢っ……………」

黒騎士が子狸に向き直る

庭園「なんなんだ、お前は……………？ お前の魔力は……………人間よりも
われわれのそれに近い……………」

子狸「なにを……………」

心理操作はリスクが高すぎる

魔王軍が誇る魔軍 元帥は

かかる危機を子狸と口裏を合わせてやり過ごすしかない

庭園「……………（考え中）……………そうか、そういうことか。お前は……………あの男の息子が」

お屋形さまに全責任を押し付けることにしたようである

苦肉の策だった

それに対する子狸さんの反応は……

子狸「……………」

二二三、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

がんばれ！

二二四、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

がんばれ子狸！

二二五、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

がんばれ！　がんばれ！

二二六、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

子狸さん、がんばって！

二二七、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん（出張中

子狸いーっ！

二二八、空中回廊在住のごく平凡な不死鳥さん

お前なら……やれるさ……

二二九、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

！？

二二〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ありがとう、お前ら！

子狸！

みんなが

お前を

応援してる！

子狸「……………」

子狸は ゆっくりと 首を傾げた

子狸「？」

だめだ！ わかってねえ！

一一二一、空中回廊在住のごく平凡な不死鳥さん

一一二二、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ああっ……

おれの「近所さん」がふたたび日の当たらないところへ……！

なんでだ子狸っ………なんでっ！ わかってくれないんだよっ！？

じゃあお前はだれの息子なんだよ！？

一一二三、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

代名詞とかはちょっと難易度が高かったかもしれないなあ………

一一二四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子供たちには子供たちの社会がある

ひとりの女の子が小さな男の子たちを率いて

騎士たちの治療に当たろうとしていた

勇気を振り絞って中央広場に飛び出し

いちばん近くの騎士を取り囲むや否や

見よう見まねの治癒魔法を施そうとする

しかし魔法は詠唱さえすれば発動するものではない
イメージが肝要だ

魔 力の網を逃れるような幼さでは
魔法の像を結ぶことは難しい

子供たちの姿が視界をちらつくたびに
子狸の焦燥感が増すばかりだ

子狸「母さんのことか？」

二二五、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
そっち！？

二二六、火山在住のごく平凡な火トカゲさん
そっち！？

二二七、海底都市在住のごく平凡な人魚さん
子狸さんって
ときどき実父の存在を頭の片隅に追いやるよね……

一二八、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん（出張中

おい！ お屋形さまが泣き崩れたぞ！

一二九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、お前はどこで何してんの！？

一三〇、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん（出張中

その件なんだが……

この中に

おれを売った輩がいる

だれだ

おれがサボってるとか言ったの

一三〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

人間たちが到達しうる

究極の投射魔法とはどういったものか

おれたちが下した結論は三つだ

一つ目は、子狸がよく使う時間差を交えた投射魔法
相手の動きに合わせて臨機応変に対応できる反面
即効性に欠ける

二つ目は、ひたすら速度を追求した投射魔法
じゃっかんの誘導性に加え

多くの場面で危機を回避しうる汎用性がある
羽のひとのマジカル ミサイルはこれに当たるだろう

そして三つ目が、黒妖精のダークネス スフィアだ

二二二、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん（出張中

なるほど

お前か

二二三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

黒妖精の周囲に

無数の黒球が浮かび上がる

ひとつの黒球がジグザグに飛んだかと思えば

べつの黒球は直進し、途中でぴたりと停止する

さらにべつの黒球は急カーブを描いたあと、すっと落ちる

それら一つ一つの黒球が不規則な運動をしながら

周辺を縦横無尽に飛び回る

当たるも八卦、当たらぬも八卦の博打魔法だ

羽のひとのマジカル ミサイルは
たちまち黒球に飲み込まれて消えた

規則性を排除するために
変化魔法ではなく侵食魔法を連結している

この手の投射魔法のおそろしい点は
激しく揺れ動く黒球の軌道を
術者だけが知っているということだ

羽のひとは光刃で地道に黒球をつぶして行くしかない

妖精「っ……侵略者に手を貸すというの、あなたは!? ユーリカ
! ユーリカ・ベル!」

コアラ「精霊がそうすると決めたら、わたしたちは従う。ずっと
そうやって生きてきた。これからもそう」

二二三三、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

ユーカリじゃねーよ!

二三四、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ポンポコ母でもねーよ……

だれがいつポンポコ母の話をしたよ子狸い……

なんでだ……なんでお前は……

なんでだYO！ YO YO

二三五、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

あまりの理不尽さに庭園のが壊れた……

二三六、管理人だよ

YO YO

二三七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なんかはじまったぞ、おい……

二三八、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お前らがチエケラってる一方その頃

闇の底に囚われた勇者さんは懸命に考えていた

勇者」……………」

目の前に立ちふさがる障壁を指でなぞると
視界を覆い隠す暗闇に亀裂が走った

勇者「……………」

まぶたを閉じて、深く息を吸う

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 8

二三九、管理人だよ

お前ら、心配かけてすまなかった……
もうだいじょうぶ

いま、すべての謎がとけた

チエケラっ

二四〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いかん！ 庭園の！ 魔力で口をふさげ！

二四一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや、待て

言わせてやってくれ

このままだと魔軍 元帥とポンポコ母は面識があるというところに

……

ただでさえ、うちのポンポコ（大）に人生を狂わされてるのに
それはあまりにも……あまりにも……

二四二、管理人だよ

でも母さんは……笑ってたよ

二四三、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

お前はだまつてる

二四四、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

そしてお茶を淹れる

うんと熱いやつをだ

二四五、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸「父さん？ 父さんなの……？」

パパだよ

おい。王都の

この始末はどうつけてくれるんだ？

二四六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

案ずるな。おれたちには心理操作という切り札がある

二四七、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

さっきと言ってることが違うじゃねーか……

バレるよ。バレるバレる

アリア家の感情制御がどれほどのものかは知らないけど
ある程度まで感情をコントロールできるような人間に
外から誘導を仕掛けたら、まずバレる

二四八、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

そうだな

子狸には魔王の腹心ルートがあるからべつにいいけど
おれたちのスペックを知られるのはまずい
取り返しがつかなくなる恐れがある

二四九、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

そうだな……

ところで、ごめん

さっきから気になってたんだけどさ

火の剣をかまくらのが使ってるのはおかしくない？

いや、べつにおれがどうとかじゃなくて……

なんていうか……

まあ……

おれのメインウエポンだよね

二五〇、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

わかる

火といえばおれらみたいな

だってほら、おれ火トカゲって言っちゃってるからね

赤いのはさあ、光属性の担当でいいんじゃない？

二五一、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

あ、ごめん。それは無理

おれらの中で、子狸バスターは空中回廊を制覇した猛者ってこと
になってるから

二五二、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

それは……いまからでもじゅうぶん変更可能な要素じゃないのかい

だいたい土魔法って何なんですか
定義があいまいだし

原理もいまいち……

そんなわけのわからない属性の担当にされて
おれにいつたいどうしろと？

二五三、管理人だよ

土魔法……だと……？

二五四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

黒騎士に父の面影を見る子狸さん

体格からして別物なのだが

どうやら脳内で実父の肉体改造計画が進んでいるらしい

いまにはじまった話ではないが

子狸が当てにならない以上

庭園のは急ごしらえのシナリオをたった一人でも推し進めるしかない
ない

庭園「バウマフだと……？ マツコール……このおれをたばかった
のか……！」

子狸「！ クリスくんを知ってるのか！？」

歌の人に関してはきちんと反応するらしい

子狸に説明しても理解してくれないことは実証済みである
黒騎士は渦巻く業火の矛先を子狸に向ける

庭園「……お前に兄弟はいるのか？」

子狸「ブラザーなら」

庭園「……いるの？」

何かしらの事情でバウマフさんちのひとを保護条約の対象にした
かったらしい

自分で自分をどんどん追い詰める子狸に

黒騎士も崖っぷちに追い込まれていく

破滅のチキンレースを仕掛けた子狸は

黒騎士のつのを凝視していた

かぶと虫を連想しているのだろうか？

子狸さんのかぶと虫への執着心は並々ならぬものがある……

ちっちゃい頃にかぶと虫の人気にあやかろうとしたものの

待ち構えていた羽のひとに没収された過去がそうさせるのだ

ちっ、余計なことを思い出させやがって……

古傷がうずくぜ

二五五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

余計な入れ知恵するからだろ

お前がバウマフさんちのひとに妙なことを吹き込むたびに
おれたちのヒエラルキーはどんどん下がってる気がする……

むかしはおれたちのこと青いひと青いひとって
慕ってくれてたのに……

二五六、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

そんな過去はねーよ

いかがわしい軟体生物どもめ……

二五七、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

むかしのお前らはそんなんじゃないかった

魔王軍にそのひとありと謳われた六魔天はどこ行っただよ……

二五八、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

やめて。死にたくなる

おれたちも大概だよな……

なんだっただらう、あのテンション……

微妙にテンションが高いときの勇者さんを見ると

いたたまれない気持ちになるよ……
これ、完全に黒歴史だよ

障壁の亀裂が広がると共に光が内部に差し込む
やがて自壊した障壁が枯葉のように舞う
それらは空中で散り散りになつて
ぱっと目を開けた勇者さんの眼前で
粉雪みたいに溶けた

何かコツを掴んだらしい
駆け出した勇者さんが片手を差し出しただけで
彼女の指先に触れた五重の障壁が次々と碎け散った

振り抜いた左手の先に
子狸の喉元に聖 剣……いや、魔 剣か？
魔 剣の切っ先をあてがう黒騎士の姿が見えた

彼女は叫んだ

勇者「ノロ！」

子狸「お嬢！」

勇者さんは子狸を名前では呼ばない
通りの角から、ひそかに待機していた黒雲号が飛び出した
豆芝さんもあとを追って駆け寄ってくる

宿屋で羽のひとと別れた勇者さんは
真っ先にお馬さんを連れ出して死角に配置していたのだ

勇者さんは聖 剣を構えて黒騎士に突進する

お馬さんとの合流まで五秒といったところか？

それまでに決着をつけるつもりだ

先手は黒騎士。とっさに魔力で子狸を縛る。逃走防止の一手だ
硬直した子狸を地面におろし、その左腕を振り上げる
豪腕から放たれた圧縮弾は風圧と見紛うばかりだ

勇者「リン！」

詠唱破棄は最速の手札だ。勇者さんは後手に回らざるを得ない

妖精「はい！」

手筈通りに羽のひとが結界を張る

その目的は黒妖精ことコアラさんの隔離だ

逸早く失策に気が付いたコアラさんが黒騎士を呼ばれる

コアラ「ジェル！」

勇者さんは、かつて子狸の影にひそんでいた魔物が
港町を襲撃した都市級の手駒の一つだと予測していた

仮に都市級が不完全な状態にあるなら
追っ手に差し向けるのは俊敏な手下だろうとも

逃走するときに邪魔になるのは
むしろそちらのほうが

そして都市級の手下が同等の魔物とは考えにくいから
結界による隔離は可能という結論を出していた

庭園「ユーリカ！ 妖精を押さえる！」

だが、さすがに妖精が敵に回ることまでは予想できなかった
結界は妖精さんたちの標準装備なので
二人の空間干渉は一進一退の攻防になる

勇者さんは子狸のアドバイスを噛み砕いてものにしたらしい
彼女の身体に触れた圧縮弾がことごとく散る

詠唱破棄は強力な魔法だが

二つの大きな欠点がある

一つは減衰のペナルティ

もう一つは指示との両立はできないということだ
れっきとした詠唱は存在するため

言葉を口に行っているとき、詠唱破棄はできない

一足一刀の間合いに踏み込んだ勇者さんが

聖 剣の切っ先を跳ね上げた

子狸バスターの剣術は

海のひとが秘密裏に回収した

勇者さんの剣術をベースにしている

同じ技量なら膂力に勝るほうが有利だ

ふたたび噛み合った聖 剣と魔 剣が
激しい火花を散らせた

そのまま押し切ろうとする黒騎士を
勇者さんは身体ごと旋回していなした

小刻みなステップを踏んで黒騎士の側面に回りこむ

二五九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おお

二六〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おお

二六一、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

うん？ うん

二六二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ん？ ああ、そうか。お前らはリアルタイムで見てないからな

いまのは歩くひとの技だ

最短の距離を行って、最短の軌道で剣を振る
言ってみれば愚直な勇者さんの剣術に
わずかな変化が生じている

くるりと回った勢いで叩きつけた刃は
しかし別の生き物のように動いた黒騎士の左手に受け止められる
いや、正確には左手から伸びた魔 剣だ

とっさに右手の魔 剣を散らせた黒騎士が
即座に左手で再起動したのだ

魔法の剣は物質的なものではないから
既存の概念に囚われない使い方もある
これは、その一つだ

身体を目いっぱい使った勇者さんの一撃を
黒騎士は純粋な腕力だけで押さえることができる

体勢を崩したかに見えた勇者さんが
尻もちをついた姿勢で硬直している子狸の手を掴んだ

口ではどうのこうの言っても
子狸にとって勇者さんの存在は大きい

少しおちつきを取り戻したなら
攻めるべき箇所も見えてくる

怒りに任せて突撃するだけが能ではない

跳ね起きた子狸が

手のひらを地面に叩きつけた

念のために言っておくが肉球はない

子狸「アバドン・ラルド！」

詠唱破棄で子狸の詠唱をつぶそうとした黒騎士の前に
勇者さんが立ちふさがる

叩きこまれた重力場が地盤を揺るがし
黒騎士が自重で沈む

足をとられた黒騎士に
手をつないだままの二人が
至近距離から怒涛の連撃を浴びせる

そのすべてを黒騎士は
重厚な装甲で
あるいは魔 剣で受けきってみせた

傍目から見ると追い詰められているように見えるが
実質はまったくの逆だった

戦闘経験のケタが違いすぎる

ほんの少し虚実を織り交ぜるだけで
黒騎士は勇者さんの行動を誘導できた

手を離したら魔力に囚われるだけだから
子狸は勇者さんに合わせるしかない

たんに勇者さんの手の感触に酔いしれているだけという説もある

羽のひとを振りきったコアラさんが

空中でスピルしながら子狸の手首に痛烈なかかと落としを浴びせた

子狸「ぬっっ……！」

意地でも勇者さんの手を離そうとしない子狸に
あとを追ってきた羽のひとはどん引きしている

さすがにこの場面でのツッコミは自粛するようだ

二六三、管理人だよ

羽のひとが……ふたり!?

おれの妄想がとうとう現実になっ

二六四、山腹巣穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

妖精「マジカル ミサイル！」

コアラ「ダークネス スファイア！」

子狸「おれメイン！ 二倍増して痛い！」

光弾と黒球が乱舞する中
勇者さんが子狸を引きずって
黒騎士の顔面に突きを繰り出す
外したのはわざとだろう
手首を返して首をなぎに行く

これは視線で読まれた

聖 剣と魔 剣が何度目かの邂逅を果たす

子狸「ちよっ、なに！？ おれ、いま忙しっ……」

無事に合流したお馬さんたちに子狸がもみくちやにされる中
黒騎士の低い声が鎧の中を反響して不協和音を奏でた

庭園「素質は悪くない。二年後、三年後にはわからんかもしれんな
……」

黒騎士が遊んでいるのは明白だった
子狸と勇者さん、二人をもろとも討ち取る機会は何度もあった

このままでは勝ち目はないと察したから
勇者さんは言葉で揺さぶりをかける

勇者「動きがにぶいわ。本調子じゃないんでしょ？ 使えない部下
を持つと大変ね」

早くも勇者さんの息は上がっている
本当にこの子は体力がない

ちなみに勇者さんの下僕は、いま
お馬さんたちにブラシを強要されている

ここに来て、港町の平和を優先したのが裏目に出ていた

子狸「お前たち……仕方ない。チク・タク・エリア・グノ！ 波
っ！」

子狸さん渾身のブラシ掛けが駆け抜ける中

魔 剣から放たれる熱波が勇者さんの髪をなびかせる

庭園「まったくくだ。つくづく……地上の空気はなじまない。じつは
こうしているのも億劫でな」

勇者と思しき人物を魔王軍が放置するのは不自然だから
勇者一行にはいくつかの救済策が施されている

その一つが、魔界から出てきたばかりの魔物は全力を発揮できな
いという縛りだ

まびさしの奥で、黒騎士の眼光が不気味に明滅した

庭園「そのおれが、部下どもを差し置いて、わざわざ出向いたのは
何故だと思う……？」

はっとした勇者さんが刃を引いた

しかし、すでに遅かった

勇者さんの意思に反して聖 剣が散る

武器を失った勇者さんを斬り伏せるのは
黒騎士にとってたやすかった

だが、実行には移さなかった

もはや黒騎士にとって

彼女は無価値な存在だったからだ

かつては魔王の右腕として辣腕を振るった魔王軍最高幹部の手に
いま、二振りの宝剣が握られていた

黒騎士が体躯を揺すって歓喜をあらわにした

庭園「千年だ……。千年かけて、ようやく……。とうとう手に入れ
たぞ……」

驚くほど隙だらけだった

それでも構わなかった

もはや黒騎士に対抗しうる唯一の手立ては失われたのだ

庭園「レプリカなどではない、本物の鍵を！」

紅に燃える空の下

魔軍 元帥の手で掲げられた聖 剣が

王の帰還を祝福するよう

燦然と輝いた……

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 9 (前書き)

登場人物紹介

・子狸バスター

鬼のひとたちがお届けする世界の鎧シリーズ五作目。

前作まで継承されてきた操縦方式をダイナミックに改革。操縦席を全廃し、夢のような収納スペースを実現した今作は、青いひとたちの専用機である。

装甲は鉄製。厳選された良質の鉄素材をもとに、かつて人類が到達した最高の技術で製作されている。

鎧シリーズの大きな特徴として「正体はじつは人間だった」ルートに対応できるよう、姓名を完備。

第二回全部おれ定例会議において、さまざま候補が挙がる(「グレート・デイン」「ポーラ・スペシャル」「ブラックナイト・ブルー」「五身合体おれたち」「おれと愉快なお前たち」「むしろおれ」等)も、黒妖精^{コアラ}さんに「お前らの主張が激しすぎる」とお叱りを受け、「ジ・エルメノウマリアン・ヨト」と命名される。

「ジ」は古代言語で「数字の5」。鎧シリーズの五作目であることから。

「ヨト」は旧古代言語で二人称の「あなた(お前)」「を意味する。設定上、魔王は魔物たちの「最後の子」である。

「エルメノウマリアン」は人間たちの称号名をリスペクトしたもの。

「メノウ(しいていうなら)している)」を原級とするなら、「エメノウ」メノッド(まさしく)している)」「は比較級、「エルメノウ(すごく)している)」「は最上級にあたる。

「アッ」
黒妖精さんのネーミングをいったんは絶賛した青いひとたちだが、ひそかに四人で集まり「じっさいどうよ……?」「一文字とか……」「さも閃いたふうを装ってたけど、絶対に前から決めてたよ……」「あのひとはそういうところがある……」とか相談した結果、自ら名乗ることはしないという消極的な案をとる。

そのことが悪い方向に転がり、港町で衝突した騎士たちに前作の見えるひと専用機と同一視され、意見がまとまらないうちに魔王軍元帥という設定を引き継ぐことになった。

つまり魔王軍「最高の魔法使い」という設定である。広範囲に及ぶ攻撃的な魔力は魔王軍でも一、二を争うほどで、これは前回の旅シリーズにはなかったもの。あるじを失った憎しみがそうさせるのか……? 要検証。

現在はレボリューションが不完全であるため、脚部の駆動を魔法で補っている。

巨大な魔物をねじ伏せるほどの腕力を持っているが、鎧にとり憑いているという設定上、俊敏性に欠ける。

部下に恵まれないのは仕様である。

火の宝剣の保持者として勇者一行の前に立ちふさがる。

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 9

二六五、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

おい。お前ら

青いの。こら

なにがレボリューションだ……

サヤエンドウみたいな構造しやがって……

おい。なんで成功してんだ

そこは失敗して、いったん退却するっていう手筈だったろーが

二六六、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

勇者さんの驚く顔が見たくて、つい……

二六七、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

許してあげて下さい！

こいつ、子狸さんの前だと張り切りすぎるところがあるんです！

な？ ほら、謝っつけ

二六八、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

結果的に同じことじゃん？

むしろお……じっさいに奪ったほうが緊迫感があっでいいでしょ？

二六九、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ばっ……口ごたえするな！

二七〇、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

しょせんレベル1か……（ため息

まあ……

ぬるま湯にひたって生きてきたお前らに

おれみたいな繊細な感覚を期待したのが間違ってたのかもな……

二七一、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

そうかもね

まあ……

お前にバウマフさんちのひとの世話は無理だろうな

ひとこと言えば、ワンパターンなんだよね

殴って終わりみたいな

可愛いから許されるだろ……みたいな甘え？

あるよね、そういうところ

美少女（苦笑）

二七二、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

炒るぞ

二七三、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ごめんなさい

おれが間違っていました

二七四、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

仕方ねーな……

じゃあ、自分はそら豆みたいなものですって言え

二七五、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

！？ 司令、それだけは……！

二七六、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

それはあまりにも……！ ご慈悲を！

二七七、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

いいよ、お前ら。自分でまいた種だ。言うよ

二七八、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

庭園の……だが！

二七九、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

庭園の……！

二八〇、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

言えよ

二八一、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

くっ……！

おれは……そら豆みたいなものです……

言うほど……青くありません……

二八四、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

庭園の〜！

二八三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

庭園の〜！

二八四、管理人だよ

庭園の〜！

二八五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前らの心がひとつになった一方その頃……

妖精「聖 剣が……！」

リアクション担当の羽のひとを

コアラさんが憐れむような目で見た

コアラ「哀れね。光の精霊もあなたも、ひとを見る目がなかった…
…そういうこと」

そう言って、羽のひとの横を通り過ぎて

黒騎士の肩にとまる

そして彼女は、魔軍を総べる将の耳元で囁いた

コアラ「どう？ わたしの言った通りでしょ？ 同じ次元の存在なら、宝剣に干渉できる。精霊の宝剣は最高位の存在だから、より優秀な使い手を選ぶ。古いしきたりにはリスクを回避するための構造が多いのよ。わたしたち妖精がそう」

黒騎士の肩の上で、彼女は羽のひとを見つめて儂げに笑った

コアラ「光の精霊があなたを選んだ理由は、なんとなくわかる。誇っていいと思う。あなたのそういうところ、わたしは好きよ。でも……優しいだけじゃ競争には勝てない」

妖精「わたしはっ……」

反論しようとする羽のひとだが

現実に聖 剣は勇者さんの手を離れて

魔軍 元帥の手中におさまっている

宝剣のシステムを知らなかったから

勇者さんに警告をすることもできなかったのだ

子狸「……………」

事態の推移を見守っていた子狸が

黒騎士とコアラさんを何度か見比べて

なにかを期待するような眼差しで

滞空している羽のひとを見た

妖精「……………」

羽のひとが嫌そうな顔をしてから子狸の肩にとまる

子狸はひとつ頷いてから、黒騎士に懇願した

子狸「父さん。父さんなんだろう!?　なんでそんなことするんだ?　そんなふうになんか女の子と仲良くして……母さんに言いつけるよ?」

庭園「」

黒騎士が動揺した

本当の意味で急所だったからだ

若い女の子と浮気していたなど告げ口された日には

お屋形さまに明日はない

もちろん事態に関わったおれたちとて無事では済まないだろう

それでも一度は信じた道だ

犠牲を払ってでも進むしかない

おれは無実です

庭園「光の宝剣を手に入れた以上、お前は用済みだ。スピアは一人でいい……バウマフ家の歴史をここで閉ざしてやるっ……」

明日は不要とばかりに歩を進める黒騎士の前に

勇者さんが立ちふさがった

子狸「お嬢っ……！」

勇者「下がってなさい」

子狸を片手で制した勇者さんが
怜悯な眼差しで黒騎士を見つめる

黒騎士はゆっくりと首を傾げた

庭園「……ああ、ご苦労だったな。人間の娘よ、もうお前に用はない。どこへなりとも行くがいい」

勇者「聞き捨てならないわね。予備というのはわたしのこと？」

庭園「そうだ」

黒騎士は認めた

庭園「単なる偶然だとも思っていたのか？ やましいところがあるから嘘をつくことになる。だから中途半端になるのだ……光の精霊よ。だが、その憂いも、もはや……」

真相を打ち明ける必要がないから

黒騎士の答えは端的になる

その言葉には歴史の重みがある

火の剣を散らせて

勇者さんを押しつけようと

緩慢な動作で片腕を伸ばそうとする黒騎士に
パートナーの黒妖精が声をかけた

コアラ「ジェル。その子でもいいんじゃないの？ その子の退魔性は
相当なものだわ」

スぺアはバウムフ家の人間でもないかということだ

さしもの黒騎士も宝剣の導き手をおざなりにはできない

庭園「お前は知らないからな。バウムフ家とわれわれの因縁を……。
実力はどうあれ、生かしておくことはできない」

勇者「……物心ついたときには」

勇者さんが唐突に言った

庭園「……？」

勇者「感情を抑える癖ができていた。嬉しいという気持ち、楽しい
こと……むかしはあったのかもしれないけど、いまでは区別もでき
ない」

彼女の話

黒騎士は聞く義理がない

庭園「どけ」

勇者さんの肩に触れた黒騎士の手が
かすかに震えた

退魔力ではない

地上で魔物は不完全な状態をしいられる

活動時間に関しても同様だ

タイムリミットが近い

黒騎士は繰り返した

庭園「どけ。生かしておいてやると言っているのだ。おれの言うことが信じられんか？ 魔王軍とて一枚岩ではない。同胞に寝首をかかれぬという保証はない」

かつて邪神教徒に裏切られた魔軍 元帥が言うと

悲しいほど説得力があつた

庭園「万が一のことを考えるなら、スピアは必要だ。勇者とは、われわれにとって聖 剣の道しるべなのだ。死んでもらうわけにはいかん……」

黒騎士の説得に

勇者さんは応じない

勇者「わたしが、どんな気持ちで生きているか……あなたたちには絶対にわからない。観客のいない舞台上で一人ずっと踊っているようなものよ」

でも、と彼女は言った

勇者「だから、この舞台を降りるわけにはいかない」

振り上げた手で

勇者さんが黒騎士の厚い胸板を叩いた

黒騎士はびくともしない

勇者さんを押しのけて、子狸の前に出る

庭園「長かった……。どうりで見つからないはずだ。貴様らが聖劍の運び手だったとはな……。！ 勇者の末裔よ！」

子狸の胸ぐらを掴んで宙吊りにした黒騎士が

聖 劍の切っ先を向ける

黒騎士の豪腕に押されて

よろめいた勇者さんが叫んだ

勇者「リン！ 剣！」

妖精「！ でも！」

勇者「早く！」

妖精「……っ！」

融解して地面に落ちた剣の残骸を

羽のひとが念動力で勇者さんに投げ渡した

柄と刀身は分離していた

空気に触れて冷却が進んでいた鉄は

かろうじて棒状を維持していたが

とても剣とは呼べない惨状だった

包丁ほどの長さしかないそれを握ると

まだ冷え切っていないらしく

肉が焼ける音がした

庭園「ちっ……」

苛立たしげに舌打ちした黒騎士が肩越しに振り返る

勇者さんに低レベルの魔法が通用しないことは実証済みだ

面倒でも自ら対応するしかない

勇者「足を狙いなさい！」

突然の出来事だ

勇者さんの指示に応えたのは

子狸でもなければ

羽のひとでもない

復活した騎士の狙撃だった

港町の住人を退魔力で解放したおいたのか？

だが、それにしても手際が良すぎる……

二八六、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸が途中で出撃したからな

最後までは聞けなかったけど

勇者さんにとって聖 剣が奪われたのは想定内のことだったんだ
ろっ

裏で糸を引いていた都市級の魔物が出てきたんだから

何らかの手段を講じてる可能性もあると思ったんじゃないか？

勇者さんがやったことは単純だよ

となりの部屋の住人を退魔力で解放したんだ

わかるか？

港町に限った話じゃない

商人に身をやつしたファミリーの連中が

勇者一行の前後を固めてたんだ

港町に潜入していた連中が

騎士たちを回復したんだ

奇しくも黒騎士の魔 力は

勇者さんの切り札をつぶしていた

だから彼女が本当に求めていたのは

ファミリーの連中が騎士たちを回復させるだけの時間だった

足を光槍で縫いつけられた黒騎士が

屈辱に吠えた

庭園「アレイシアン……！」

勇者「気安く名前を呼ばないで」

体勢を崩した黒騎士の肩口に

すっかり短くなった剣が深々と突き刺さる

役割を終えた剣が

根元から折れた

ありつたけの退魔力を注ぎ込んだはずだった

それでも黒騎士は倒れなかった

庭園「この程度で、このおれを倒せると思ったか！」

どれだけ理想的な条件を揃えても

人間の力が通用するのはレベル3までだ

人間の限界が開放レベル3だから

おそらく勇者さんはレベル4以上の魔法に退魔性を試したことはない

光槍が乱れ飛ぶ中、身の危険を感じた子狸は黒騎士の腕にしがみついた

子狸「イズ！」

お前らがしびれる

庭園「ぐっ……！ 邪魔だ！」

発電魔法は

鎧を伝って内部のお前らにダメージを与えることができる

コアラさんに電流が行かないように配慮するところが
いかにも子狸であった

放り投げられた子狸が
空中で猫みたいに身をよじって
四つ足で着地した

子狸「ふーっ！」

野生化しとる

子狸「チク・タク・エラルド……！」

勇者さんから離れた子狸は

魔 力の餌食だ

子狸「あふっ」

子狸は硬直しても

騎士たちの砲火は止まらない

隠し玉のファミリーに関しても

勇者さんの指示で動いているなら

常時展開の盾魔法で魔力を弾いた可能性がある

黒妖精が黒騎士の肩の上で

愉快そうに身体を小刻みに揺すっていた

コアラ「手を貸してあげようか？」

庭園「いらん。同じことだ……イズ・ロッド・ブラウド・ディグ・メイガス！」

ふたたび紫電が閃いた

開放レベル4の広域殲滅魔法に人間が抵抗するのは無理だ

勇者さんが傷つけたのは

黒騎士本体ではなく

魔軍 元帥としてのプライドだった

庭園「やってくれたな、小娘……」

もう子狸は眼中になかった

黒騎士の標的は勇者さんに移っていた

羽のひとが勇者さんの手のひらの治療に当たっている

勇者さんが真つ直ぐに黒騎士を見据えた

勇者「宝剣に固執しすぎよ。そんなものがなくても人間は戦える」

庭園「お前は宝剣の価値を知らん。人間だと？ 残っているのはお

前だけではないか。無駄な足掻きだ」

両者の会話が、はじめて成立した

勇者「そうかもしれないわね」

勇者さんは認めた

勇者「でも、他に打てる手がなかった。精いっぱい足掻いて、それでもだめなら諦めるしかないわね。だから、これが最後の手段になる……」

そう言って彼女は片手を差し伸べた

勇者「戻って来なさい」

庭園「無駄だ」

黒騎士が一步、踏み出した

勇者「戻って来なさい」

庭園「無駄だと言っている」

さらに一步

その足がひざから折れた

庭園「！？ ちっ……騎士どもめ……見事だ」

片ひざを屈した黒騎士が
敵と認めた騎士たちを賞賛した

庭園「影ども……出てこい」

黒騎士の影が本体と剥離して伸び上がる

影に身をやつした火口のとこまぐらのが
分裂しながら勇者さんに迫る

勇者さんの治療を終えた羽のひとが身構えた

庭園「命乞いしろ。いまなら、まだ間に合う」

勇者「戻って来なさい」

庭園「無駄だと……！」

一心に念じる勇者さんに応えたかのように
黒騎士の手から伸びている聖 剣が
激しく明滅しはじめた

あつてはならない現象だった

暴れる右手を、黒騎士が左手で押さえつけようとした

庭園「なぜだ！？ なぜお前は、われわれではなく人間を選ぶ！？
あのひとが見たものとは……いったい何だったのだ？」

二八七、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸ライトオン！

二八八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

よしきた、子狸ライトオン！

二八九、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

輝く子狸さん

突如として発光しはじめた子狸を

黒騎士が振り返る

驚きの声を上げたのは黒妖精さんだ

コアラ「まさか……宿主!？」

庭園「そこにいるのか……？ 教えてくれ。なぜ人間なんだ？ お前は自然界の守護者ではないのか？ 王は……最後に何と言っていた？」

ひよっこりと立ち上がった子狸が
ゆっくりと首を傾げた

子狸「え？ あ、動く」

しよせん子狸か……

庭園「そうか……。言葉で伝えるものではないのだな……」

黒騎士は強引に納得した

諦めたように左手を右手から離すと

光の粒子と化した聖 剣が

勇者さんの手に溶け込むように消えた

コアラ「ジェル、何を……」

庭園「構わん。時期ではなかったということだろう……」

そう言っつて、黒騎士は勇者さんを見る

庭園「おれもまだ完全ではない。残る宝剣を手に入れたあかつきには、光の精霊とて従わざるを得ないだろう。それ以外にも……心当たりはある」

勇者「鍵……と言っていたわね」

庭園「教えると思っっているのか？ 自分の目で見て、耳で聞いて判断しろ」

黒騎士は片足を引きずって立ち上がる

庭園「騎士たちに免じて、ここは退こう。だが、これだけは言っておく。先ほどはああ言ったが……勇者とは結果的に魔王を倒したもののことだ。お前が何者かは……お前自身が決めるといい」

見つめ合う両者の肩の上で
妖精たちもあるじに習った

コアラ「そういうことみたいだから……また会える日を楽しみにして
るわ、リンカー。あなたは、もう少し魔法の勉強をなさい」

妖精「ユーリカ……」

少し離れたところで、子狸がうんうんと小刻みに頷いている

猛虎の構えをとっていた影たちが「え？ おれは？」という感じで
硬直していた

そのとき、中央広場に大きな影が落ちた

港町の上空を、ひよこが飛んでいた

ゆるやかに滑空して中央広場に舞い降りると

ひよこはちまい翼を折りたたんで黒騎士を見下ろした

すごく……大きいです

ひよこ「戯れもほどほどになされ……元帥殿」

首回りを立派なたてがみが覆っていた

二九〇、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

ひよこじゃねーよ

おれだよ。おれ

二九一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、前々から思ってたんだけど……

お前の主成分はひよこだと思う

二九二、管理人だよ

空のひと。空のひとじゃないか

二九三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

ちわ。管理人さん

だから、ひよこじゃねーって

せめてヒナ鳥と言え。ひよこだとニワトリさんのヒナだろ

おれのベースになってるのは鷺さんとライオンさんだから

二九四、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

ベースってお前……

たてがみだけじゃねーか……

なんで出てきた？

お前が出てくると

いろいろとぶち壊しになるんだよ

見ろ、緊迫感を醸し出してる勇者さんが哀れなんだよ……

勇者「下位都市級……」

かくして、一同に会した子狸とコアラとひよこ

どこのアニマル界ですかこんにゃろー

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 9（後書き）

登場人物紹介

・ライオンさん

魔獣種の一角を担う巨大なひよこ。空のひとと呼ばれる。

本人は鷲のヒナであると主張している。自慢のたてがみを百獣の王に見立てて獅子を自称する。

本人をベースにした変化魔法は開放レベル3であるため、多種族の特徴を兼ね備えるタイプの魔物は幼体のほうが何かと都合が良い。開放レベルは羽のひとと同等の「4」。人間たちの区分では下位都市級にあたり、魔王の騎獣を務めてきた由緒正しき魔物である。

もちろん魔力も使える。ただし広範囲に及ぶものではなく、その用途も詠唱を問答無用で封じるといような攻撃的なものではない。

魔王軍の本拠地である魔都に居を構えている。

さいきんの悩みは、魔都に通じる大迷宮（通称ラストダンジョン）が、つのが生えたひとたちに目をつけられていること。

同じ飛行タイプということで、羽のひとと仲良し。表に出てこない火のひとのことも気にしている。

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 10

二九五、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

え？ いや、空のひとは何しに来たの？ まじで

二九六、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

え？ いや、だってラストダンジョンに戻ったら

誰もいなかったから……

子狸バスターも気になったし

あ！ やっぱり足回りがイカれてるじゃんか！

丁寧に扱えって言ったでしょ！ もー！

言っとくけど素材を提供したのはおれだよ？

壊したら本気で怒るからな

二九七、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

うーん……

どうしたって関節部に負担が集中するんだよなー……

たとえばの話だけど、もう一人いてくれたら……（ちらっ

二九八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

くどい

おれは忙しいの

お前らがハッスルしてるときに供給が止まったら
勘のいい人間は気付くぞ

二九九、管理人だよ

わかる

お前らは海底のひとに頼りすぎてる

三〇〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おい。子狸

おれの肩を持って

お前の初恋は実りませんよ

三〇一、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶたん

あせとこ

この子狸あざとい

三〇二、管理人だよ

将を欲すれば魔人をおれアローという言葉もある

三〇三、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

魔人は無関係だろ。そつとしておいてやれよ

三〇四、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

しかも認めるのかよ

勇者さんはどうした。諦めるのか？

三〇五、管理人だよ

え？ なにが？

三〇六、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さ（出張中

覚えたてのことわざをニュアンスでねじ込むのやめなさいって言
ってるでしょ！

将を射んと欲すればまず馬を射よ

目的を達成しようとするなら

しかるべき手順を踏みなさいってことだ

三〇七、管理人だよ

それでおれに勝ったつもりか

三〇八、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

あ？

三〇九、海底洞窟在住のたらにたらな不定形生物さん

本当にコイツはどんどん生意気になるな……

三一〇、王都在住のたらにたらな不定形生物さん（出張中

何やら盛り上がっているみたいですけど

そろそろ話を先に進めてもよろしいか？

三一一、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

いつもすまないね……

三二二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

それは言わないって約束でしょ、おとつつぁん……

巨体に見合わない静かな着陸は

あたかも風を支配しているかのようだった

赤く輝いた輪郭が

目に差すほど強い

優雅に降り立った巨鳥の背後

肩の向こうに夕日が沈み

色濃く落ちた影の中

勇者の手でふたたび芽吹いた希望の

なんと頼りないことが

足元で灯った聖 剣に

一度は視線を移した空のひとだったが

すぐに興味を失った

上司に当たるはずの黒騎士を不遜に見下ろして

ひよこ「だから魔都を離れるなど言ったのに。物見遊山もけっこうだが……ああ、今年は梅雨の入りが遅いな。秋頃に響かねばいいが

……」

世間話をはじめた

人間たちの評価はどうあれ

レベル4……生粋の魔獣種は

驚くほど人間に対して無関心だ

都市級を撃退した勇者の偉業も

人間たちからすれば語り草になる英雄譚だが

魔物たちからすれば

百年に一度、あるかないかの不運な事故だ

魔王に忠誠を誓う都市級というのは

じつは珍しい

魔王軍に属してはいるが

彼ら魔獣種をはじめとする最高峰の実力者たちは

子供の授業参観に出席する保護者のようなもので

どちらかと言えば

同等の実力を持つ魔軍 元帥にこそ敬意を払う

魔王は必ずしも最強の兵ではない

ひとは王よりも英雄に仕えたがる

求められる資質が違つと知っていてもだ

当の本人は面白くない

庭園「戦場で話すことではない」

ひよこ「戦場？」

憮然として言い返した黒騎士に
魔獣が首を傾げた

その拍子に舞った羽毛が
まぼろしみたいに
薄く

日差しに混ざって
人の目には映らなくなる

ひよこ「戦場……まあ良い。良い、良い……。ここさいきんは、
んと王も見かけぬし、気晴らしにはな……」

庭園「見かけぬ、ではない。眠りについたのだと何度も言っている
だろう」

ひよこ「ん？ では……いつ起きる？ おれは……少しはまだ」

要領を得ない怪鳥に
黒騎士は降参した

この場で話すことではない

庭園「もういい。行くぞ」

ひよこ「行く……どこへ行かれる。ここは戦場だと、お前は言った
のに」

思いのほか鋭い声だった

空のひとが巨体をねじって
つ、と勇者さんを見つめた

ひよこ「決着はついていないように……見えるが」

かすかに目を細めると

空のひとの瞳が怪しくきらめき

聖 剣を支える勇者さんの腕が

ひとりでに持ち上がった

魔 力だ

勇者さんの退魔性は相当なものだ

しかし空のひとの魔 力は

黒騎士のそれとは性質が異なる

人体ではなく

物体に作用するのだ

勇者「っ……………」

服の袖に働きかけた魔 力を

勇者さんは即座に焼き切った

魔獣の濃厚な気配にのまれて

羽のひとは動けないでいた

ひよこ「ふうん……。これはまた、随分といびつな……。まあ……」

こういう人間は、たまにいる」

空のひとが珍しく興味を惹かれた様子で
巨軀を屈めた

ひよこ「珍しいと言えば……まあ珍しい。連れて帰ったら、ひまつぶしにはなるか……のう？」

歴戦の勇士も震え上がるほどのプレッシャーだ

都市級という組分けは
人間たちから見た脅威の度合いを示したものだ

魔軍 元帥には、単独で騎士団を壊滅できるほどの魔法力がある
しかし、かつて勇者との一騎討ちに敗れたように
対個人に注げる力の上限は超人の域を出ない

空のひとは、圧倒的大多数の人間を同時に制圧できる手段を持たないが

一対一で勝てるかと問われれば……
このひとの特性はスターズのそれに近い

三二三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

あの……放置ですか？

おれ、そろそろつらいんですけど。何キャラなの、これ？

三二四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや……

もつてつきり今回はそういうキャラで行くのかと……

三二五、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

せめて口調を統一してくれないか

絡みづらい

もつ帰れよ

三二六、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

ていうか、どうしてわざわざ自分でハードル上げるの？

これはもつ……

あとで羽毛布団を進呈してもらっしかないな……

三二七、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

やだ、毒舌が二倍増しになってる……

子狸さん子狸さん

お前だけが頼りです。ヘルプ！

三二八、管理人だよ

その言葉を待っていた

三二九、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸劇場の幕開けか……

見下ろす魔獣に

万に一つも勝ち目がないと悟っているのか

勇者さんの手元で聖 剣が不安定に揺れている

退路は完全に絶たれた

自在に空を駆ける魔獣から

逃れるすべはない

子狸「お嬢！ だめだ！」

いつしか発光のおさまった子狸が

勇者さんに駆け寄り

彼女の腕を引っ張る

勇者「離しなさい」

魔力を防げば戦えるという相手ではないからか
勇者さんは子狸の手を振り払おうとする

おれたちの子狸さんも
たいがい貧弱なほうだが

さすがに年下の女の子（インドア派）に負けるほどじゃない

勇者さんを引っ張って

お馬さんたちのほうに押しやる

ひよこ「ん〜……?」

小さな人間たちのやりとりを
つまらなそうに見つめる空のひと

子狸は言った

子狸「戦っても勝てない。こついつときは……頭を使っただ」

自信満々だった

見上げるほどの巨体をびしっと指差し

子狸「料理対決だ!」

ひよこ「バウマフ家か」

一瞬で看破された

三三〇、管理人だよ

くっ……こうなったら脱ぐしか

三三一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

アウトおー！

だめ！ 絶対に脱いじゃだめ！

たしかに根本的な解決になるけれども！

命とハダカどっちみたいなところあるけれども！

それでも！ ひとには！ 踏み越えちゃいけない一線ってあるんだよ！

三三〇、管理人だよ

命だろ！

三三一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

命だけど！

てっ、庭園のおー！

三三二、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

仕方ねーな……

おれ「勝手なことをするな」

ひよこ「そうさな……バウムフ家となると……いささか面倒ではある。……どうされる？」

打てば響く

まさしく阿吽の呼吸だ

おれ「お前はようはひまなのだろう？　ならば、ひとつゲームをするというのはどうだ」

ひよこ「ふむ……内容によるな」

三三三、管理人だよ

おれの言ったことと

どう違うというのか

三三四、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

人徳かなあ……

三二五、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

いや、人徳じゃないか？

三二六、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

あるいは……人徳かもしれない

三二七、管理人だよ

なるほど……

つまり？

三二八、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

おれたちは、いったいどこへ向かってるんだらうか……

三二九、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

子狸を乗せてな……

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 11

三三〇、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中
なるほど

魔軍 元帥は勇者さんを泳がせておきたい

空のひとはせっかくのおもちゃを手放したくない

悪くない流れだ

三三一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中
だが、具体的な案はあるのか？

三三二、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中
なに言ってるんだ

それをいまからお前らが考えるんだよ

三三三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん
出たところ勝負かよ！

あゝ……念のために確認するんだが

お前らは勇者さんをいつたいたいんだ？

着地はどう考えてる？

三三四、管理人だよ

しあわせな家庭を築けたらと

三三五、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

お前はだまつてる

三三六、住所不定の特筆すべき点もないてぶてぶさん

煮込むぞ

三三七、管理人だよ

望むところだ

三三八、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

その青いの〜

ちよっとなべ持ってきて、なべ

三三九、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

今夜はごちそうだな

三四〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

じじじじ

喧嘩するのはやめなさい

まったくもう……いつまで経っても子供なんだから……

三四一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

はっはっは。まあまあ母さん

喧嘩するほど仲が良いと言っじゃないか

三四二、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

ばぶー

三四三、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お前も乗つかるの!?

お前が乗っかつちゃだめでしょ!

というか子狸が混ざると……

おい、変な間が空いてる!

三三四、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん(出張中

子狸におれたちのような高速レスポンスは望むべくもない

だが、千年だ

千年の月日が

バウマフ家と共に歩んだ

果てしないツッコミの毎日が

おれたちを強くした

影に扮した火口のとかまくらのが

空白を埋めるように

さりげなく

本体の黒騎士にすり寄る

もともと魔軍 元帥とは赤の他人の予定だったから
かつてはなかった能力に整合性を与える必要があった

空のひとが感嘆の吐息を漏らした

ひよこ「だいぶ魔界で力をつけたようだな」

庭園「いいや、地上で学んだことだ。少しコツがあつてな」

べつだん誇るでもない黒騎士に

空のひとはさも愉快そうに巨軀を揺すった

ひよこ「技……か？ 変わらぬな。たまに人間じみたところがある」

二人のやりとりを

勇者さんは無言で見守る

魔物同士の意見が対立しているなら

それを利用しない手はない

空のひとの物言いに

むっとした様子で黒妖精が口を挟む

コアラ「あなたはジェルの部下なんでしょう？ 言うに事欠いて人間じみたとは……」

ひよこ「妖精ごときが、このおれに指図をするのか。焼き鳥になりたいか」

コアラ「焼き鳥にはなれないだろ。共食いか」

ひよこ「だが……思い上がるな。お前にはその資格すらない」

「アラ、なに言ってるんだ、このトリ……」

まったく噛み合わない二人が
言い争いをはじめ

お前ら、いまだ！

三四五、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

うむ、さすが司令

まずはあれだ、勇者さんには当初の予定通り
港町を脱出してもらわないと困る

子狸バスターは今回のノルマをすでに達成した

ここはシンプルに鬼ごっこことというのはどうか

三四六、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

逃がすだけならそれで構わんが……

問題は空のひとをどう絡ませるかだな

バスターと勇者さんの利害は一致している

ここまではいい

だが、単純な追いかけて空のひとが負けるのは不自然だ
何かしらの縛りは必要だろうな

子狸を使うか？

二四七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸がレベル4にいったい何をできるっていうんだ

いや、そうか

ポイント制だ

子狸を捕獲したら3……いや5ポイント獲得できることにしよう

勇者さんよりも高得点なら

空のひとは子狸を追わざるを得ない

どうだ？

二四八、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

言うまでもないことだが……

もちろんおれは子狸よりも高得点なんだろうな？

二四九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

もちろんですよ

じゃあ、羽のひとは10ポイントということだ……

三五〇、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

10ポイント!?

おい。それ、たとえばおれが羽のひとをつかまえても適用されるのか？

三五一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

そう。そこ大事よ

三五二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

当たり前だろ？

なんのためのポイント制だと思ってるんだ？

公平を期すためだろうが

三五三、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

10ポイントと聞いては黙ってられないな……

おれも参加するぜ

三五四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

なんでだよ。だめに決まってるだろ

三五五、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

じゃあおれは？

三五六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、逆に訊きてーよ

緑のひとがだめで

自分は参加できると思った根拠はなんなの？

三五七、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

ちっ……

三五八、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

ちっ……

三五六、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おれは……

勇者さんが逃げきつたら5ポイント獲得ということでもいいんだな？

三六〇、海底洞窟在住のにとるにたらない不定形生物さん

当たり前のように水増しすんな

1ポイントはやる。それで我慢しろ

三六一、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ちっ……しみったれてやがる

三六二、海底洞窟在住のにとるにたらない不定形生物さん

あ？

ちっ……まあいい

子狸は空のひとに魔法を当てたら

一発につき1ポイントくれてやる

寛大なおれに感謝しろ

三六三、管理人だよ

ボーナスステージというわけか

よかるう……！

勝負だ、お前ら！

三六四、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おい。待て、お前ら

そのルールだと、おれはどうやってポイントを獲得するんだ？

歩くのもきついんだぞ

三六五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうじゃねーだろ

どう考えても勇者さんと子狸は逃げきれない

スタートには時間差を設ける。それでいいな？

停泊所までお馬さんの脚なら6、7分と行ったところか……

時間差は5分でいいか？

三六六、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

異議なし

三六七、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

異議なし

三六八、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

異議なし

三六九、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

よし。じゃあ勇者さんにルール説明するわ

三七〇、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

説明中……

三七一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

説明中……

三七二、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

説明終了

じゅうぶんに吟味してから

勇者さんは言った

勇者「まったく意味がわからない」

ですよ

さもあらんと頷く子狸さん

子狸「やはりね……」

靴のつまさきで地面を擦るように

勢いよく振り返り

空のひとを見つめる

真剣な眼差しだった

子狸「お嬢は3ポイントにしよう。どうだ？」

ひよこ「ふん、吠えよるわ、こわっばが……」

空のひとの眼光が

ぎらりと鋭さを増した

ぐっと前のめりになって

威圧するように子狸を睨みつける

ひよこ「いいだろっ……」

その瞳には

絶対の自信が宿っていた

両者の視線が

複雑に絡み合った糸のように交錯し

やがて、どちらからともなくほつれた

互いに背を向けた二人が

同時に吠えた

子狸&ひよこ「勝つのはおれだ」

かくして港町を舞台に

苛烈なポイント争奪戦が

いま、幕を開けようとしていた……

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 11 (後書き)

注釈

・ポイント

魔物たちがよく口にする謎の得点。累積するらしい。

この「ポイント」とやらを交換し合うことで、魔物たちは互いに交渉を有利に運ぶことができる。

でもべつにポイントがなくてもお願いすれば聞いてくれる。

もともとはバウマフ家の人間をうまくコントロールするための方便だったが、いつしか魔物たち自身も真剣に高得点を目指すようになった。

100ポイントたまると、達成者を称えるお祭りが開催される。

基本的には1ポイントずつしか入らないため、5ポイントというのは垂涎のまどである。

10ポイントともなれば……これはもう歴史的な偉業に匹敵する。

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 12

三七三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

子狸め……成長したな

子狸さんの提案で勇者さんは3ポイントに変更しました

まとめるとこんな感じ

勇者一行が逃げる。おれたちが追う

おれたちは勇者一行に遅れて五分後にスタート

勇者さんは3ポイント、子狸は5ポイント、羽のひとは10ポイント

子狸がおれに魔法を当てたら、そのつど1ポイントずつ進呈

勇者一行とおれたちで最終的なポイントを競う。もちろん高いほうが勝ち

うん。わかりやすい

勇者「……………」

おかしい。勇者さんが納得してくれない

三七四、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸よりもポイントが低いのが気に入らないのかもしれない

凄め。凄んで押しきれ。それしかない

三七五、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

レベル4の迫力を見せてやれ！

三七六、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

よ、よし……

三七七、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

夕日が過ぎ去って青みがかつた空では

早くも一等星が輝いて見えた

じっと見つめてくる勇者さんを

巨鳥がぐりつと首をねじって見下ろす

ひよこ「……どうした？ 行け。死に物狂いで逃げてみる。五分やる。悪い話ではなかるう？ まんまと逃げおおせたら3ポイントやると言っておるのだ」

勇者「なんなの。そのポイントって」

やはり子狸よりもポイントが低いのが気に入らないらしい……

空のひとが勇者さんを見る目は冷たい

道端に捨てられたゴミを見るかのような目だ

ひよこ「察しの悪い人間だな……」

これ見よがしにため息をつく

気温はさして低くもないのに

くちばしから漏れ出た吐息が白い

ひよこ「もしもお前たちが、おれよりもポイントを稼げたなら」

空のひとは凄んだ

ひよこ「そのときは、この街の住人の命と引き換えにしてやると…
…そう言っている」

その言葉が意味するところに

羽のひとが息をのんだ

妖精「そんなのっ……!!」

子狸が空のひとに魔法を当てるのは
たぶん絶望的なほど難しい

羽のひとは10ポイントだから

彼女がつかまった時点で
港町の滅亡は、ほぼ確定する

顔色を失った羽のひとが黒妖精を見る

その視線を受けて

黒妖精が黒騎士の肩の上で首を傾げた

コアラ「わたしは参加しないわ。見ての通り……このひとはあまり調子が良くないの。無茶ばかりするひとだから……わたしがついてあげないとね」

黒騎士は肯定も否定もしなかった

空のひとの視線がすつと落ちる

焦げつくような西日の中で

聖 剣が負けじと強い光を放っていた

ひよこ「分不相応なものを持っているな……」

空のひとの口角が厭らしく歪んだ

ひよこ「もう、お前たち人間を生かしておいてやる理由はない」

黒騎士が異論をとねえた

庭園「まだ手に入れたわけではない」

空のひとは魅入られたように聖 剣を見つめている

ひよこ「もつじゅつぶんではないか？ そう……時間の問題だ。ずいぶんと弱っている……。宝剣も……だいぶ影を帯びているな……憎しみにどこまで抗えるか……」

勇者さんがちらりと子狸を一瞥した

子狸「……………」

子狸は控えめに見ても今夜の晩ごはんが気になっている様子だ

勇者さんは視線を戻して言った

勇者「……あなたの言うことを信じろというの？」

自分たちが勝ったなら、港町の住人には手を出さないという件だろつ

勇者さんに人質は意味を為さない
だが、子狸は違うということだ

ひよこ「ん？ おお、約束は守るとも。お前たち人間が、おれたちの魔力をどう解釈しているのかは知らんが……約束は守る。そういうものだからな。お前らと一緒にしてもらっては困る……」

空のひとは鷹揚に頷いた

勇者一行に背を向けたまま翼を広げる

ひよこ「さあ……はじめるぞ」

羽のひとのスピードなら

先行して船舶所に辿りつける

陸上の魔物が海上に手出ししないのは
ほとんど常識として知られた話だ

羽のひとは10ポイントだから
少なくとも彼女が逃げきったなら
それだけで港町は滅亡を免れる

つまり場合によっては

羽のひとは勇者一行の命運を

港町の住人たちの命と秤にかけることになる

魔物たちの狙いが光の宝剣だとすれば
だからこのゲームでもっとも軽いのは
子狸の命ということになる

ポイントという言葉で誤魔化しているが

じつに魔物らしい

厭らしいルールだった

そして勇者一行に選択の余地はない

勇者さんが黒雲号にひらりとまたがる

黒妖精を見つめていた羽のひとが
視線を切って

ぱっと宙に舞い上がった

いつでも飛び出せるよう二対の羽を高速で振動させる

子狸は最後まで中央広場の子供たちを気にしていた

子狸「子供たちに手を出したら許さない」

庭園「バウマフ家は」

黒騎士が出し抜けに言った

庭園「……お前とはいずれ……決着をつける。そうでなければならぬ。だからいまは……行け」

子狸「父さん……」

コアラ「お前の親父じゃねーつつてんだろ」

子狸「うむ……」

ひとつ頷いた子狸が颯爽と豆芝さんにまたがる

その光景に羽のひとが違和感を覚えた

妖精「リ……」

勇者さんに呼びかけようとするも

空のひとの両翼が大きく風を打ち鳴らした

勢いよく翼で両目を覆って

ひよこ「もっいいいっかい？」

鬼ごっこを隠れんぼを勘違いしていた

子狸「ま〜だ〜だよ〜」

子狸も勘違いしていた

勇者さんが体重をかけると

黒雲号が軽快なスタートダッシュを切った

すかさず豆芝さんがあとを追う

三七八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸がちっちゃかった頃の話だ

緑のひとの背中に乗って

空中遊泳を楽しもうと目論んだ子狸だったが

上空の強風にあおられて

あえなくスカイダイビングしたことがある……

まるで、そのときの再現だった

豆芝さんのスタートに

子狸「ぬっ!?!」

重心を前のめりにして

いったんは耐えた子狸だったが

二歩目の揺り戻しで
あえなく宙を舞った

子狸「ほうっ」

妖精「あぶねえ！」

とっさに羽のひとが念動力で子狸を捕獲する

妖精「首！ 首にしがみつけ！」

子狸「お邪魔します」

豆芝さんの首にしがみついて事なきを得る子狸

勇者「っ……」

先に行く馬上で振り返った勇者さんが
しまったというような顔をした

港町までの道中で

勇者さんはお馬さんたちの訓練を優先した

子狸に乗馬の訓練を課そうものなら

おそらく筋肉痛で

使いものにならなくなると知っていたからだ

子狸がお馬さんに乗れないことは承知していたのだから
ゲームをはじめの前に

ひとことあってしかるべきだった

勇者さんらしからぬミスだった

たぶん彼女にはもう余裕がないのだ

ぐんぐん加速するお馬さんたち

港町の街並みが後方に流れていく

勇者さんが一息ついて

羽のひとに指示を飛ばした

勇者「リン！ 先行して船出の準備を！ 船乗りたちには避難するよう伝えなさい」

妖精「はい！」

一抹の不安を感じた羽のひとだったが
即座に高度を上げて急加速する

船乗りたちを避難させるということは
羽のひとと子狸に舵取りを委ねるということだ

子狸をパージするつもりはないらしい

黒雲号と豆芝さんが並走する

勇者さんの真意は

子狸にはまったく伝わっていない

子狸「海に出れば安全だよ。おれが囿になる。お嬢はそのまま……」

勇者「魔物たちもそう思うでしょうね」

勇者さんは冷静だ

先ほどの失態は……単にすっかりしたただけなのか？

勇者「彼らは、わたしとあなたを引き離そうとしている」

ちっ……

子狸には何か思い当たるふしがあるようだった

子狸「そうか……おれたちを祝福してくれないんだね」

それ、ほとんど告白してないか？

勇者さんはおざなりに同意した

勇者「そうね。とにかく……」

いちいち対応していたらきりがないと悟っている

勇者「このまま船着き場まで駆け抜ける。五分という時間設定は……

…途中でたぶん追いつかれる。一分か二分……しのぎきれれば」

そこで勇者さんは子狸と目を合わせようとした

無理だった

子狸はカンガルーのお子さんよろしく

豆芝さんの首にしがみついている

勇者「あなたに全てを託します」

だから勇者さんの決意に満ちた言葉が
この有袋類じみたポンポコのせいで台なしだった

三七九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

勇者さん……

三八〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

勇者さん……

三八一、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

五分か

まあ妥当な線だな……

それまでに

決着をつけてやるよ

オリジナル

三八二、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

勇者一行を見送った子狸バスターに
異変が起きようとしていた

足元から跳ね上がったレクイエム毒針・影が
子狸バスターの首を刈り取らんと迫る

コアラ「！ シールド！」

すんでのところで黒妖精の盾魔法が
薄く引き伸ばされた触手を弾き飛ばした

引き剥がされた黒騎士の影が
分裂して一斉に猛虎の構えをとった

！ 復活していたのか……

三八三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

サービスタ임は終わりだ

土は土に

塵は塵に

お前らはお前らの勤めを果たすんだ

おれたちだつてつらいんだぜ……？

三八四、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ふん、ほざけ

空のひとを口止めしておくべきだったな

ブロックを解除したのは……お屋形さまか？

鬼のひとたちを通じて……だな

三八五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そつだ

お前らが鬼のひとたちと密約を交わしていたのは知っている

おれならそつするだろうからな……

狙いは勇者さんの剣だろう

あのひとたちは……最初からそのつもりだったんだな

おれたちをブロックしたことで気がゆるんだか？

そついうところから足がつくんだよ

三八六、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

！ こいつ……

議長！

三八七、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ああ、生かしてはおけん

もう一度……今度は完膚なきまでにブロックしてやるよ

三八八、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

二対一だ……まさか卑怯とは言つまいね？

三八九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

やれるのか？ お前らに？ このおれが

火口のとかまくらのをブロックし続けるのは
だいぶ負担になっているはずだ

あいつらも戦い続けてるんだ

おれだけ尻尾を巻いて逃げ出すわけにはいかんだろ

日没が近い……

決着をつけよう

全部おれ！

三九〇、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

全部おれ！

三九一、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

全部おれ！

三九二、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

ブロックを打ち破って復活した庭園オリジナル

影に身をやつしているの

ほとんどやりたい放題である

港町の至るところで

無数の影が伸び上がり

互いの縄張りを主張するように

激しく衝突し合う

庭園Aの脱走を逸早く察していた庭園Bは

空のひととのやりとりで

子狸バスターの影を配下の魔物ではなく

変質した魔 力として扱っていた

魔 力の暴走ということで片付けるつもりだ

ひよこ「もういいかい？」

空のひとは真剣だ

このトリは本気で子狸を捕獲する気なのかもしれない

三九三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

空のひとの声は

伝播魔法により人間から人間へと感染し

やがて子狸の耳朵を打った

子狸「ま〜だ〜だよ〜」

律儀に言い返す子狸さんを

勇者さんは止めようとしな

行き先は確定しているのだから

ゲームの体裁を保ち続けることは重要だ

庭園のと火口の、かまぐらのの争いは熾烈を極めて

立ち昇った陽炎が

実体を伴ってぶつかり合っているかのようだった

さすがに飛んだり跳ねたりは自重しているらしく
黒い波が道の上で押し合っているようにも見える

勇者「………？」

魔軍 元帥の身に

何か異変が起こったらしいことは明白だった

子狸「魔力が暴走してる。夜は力が増すから……押さえ切れてないんだ！」

ついさっき仕入れた情報を

子狸が我が物顔で披露した

勇者「暴走しているふりかもしれないわ」

勇者さんは子狸情報を鵜呑みにしたりしない

自分の意思とは無関係に影が勝手に動いたというのは
じつは完璧に制御できているとしたら便利な言い訳だ

勇者「わたし、あんまり口が上手いほうじゃないんだけど、あなたなら簡単に丸め込めることができそう……」

たいてい素人はそう言う

ときと場合によるのだ

勇者さんも、まだまだだな……

三九四、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

一方その頃

おれは船を譲ってもらえるよう
船長を説得していた

おれ「だから大人しく船を寄越せと言ってるんだろ。一隻くらい、いいじゃねーか。ああん？」

船長「いや、それは……困る！ 魔力を解いてくれたことには感謝するが……」

おれ「うちのボスを誰だと思ってんだ？ 金か？ 金ならうなるほどあるんだよ」

船長「そういう問題じゃない！ 船はおれの……おれたちの……そう、言ってみれば女房なんだよ！」

おれ「ちつ……変態が。もういい。男ならこぶしで掛かってこい。力が正義だ。お前らを打ち倒して、おれたちは行く」

説得中です

三九五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

そんな説得があるものか

とはいえ緊急事態だからな……旅に犠牲はつきものだ

羽のひとの電光石火の右が

一人の船員をマットに沈めた頃

おれたちはひまを持って余しているわけで……

スペリオルしりとりでもするか

リンドール・ティマア

南北戦争において反乱軍の総指揮をとる

はつきり言っつて、こいつが最強

三九六、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

なにを言うか

ティマアの小せがれが王権の分離を成し遂げたのは
アリア家の支援があつてこそだろ

歴史の表舞台には出てこなかつたけど

アリエル・アジェステ・アリア

こいつが最強に決まってる

三九七、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

アリア家は裏工作が忙しすぎて

めったに軍団の指揮とかとらないからなあ……

何度も言ってるけど

もしもあいつが指揮をとってたら〜とかは除外しようぜ

じっさいの戦果なら

やっぱりこいつだろ

マーリン・ネウシス・ケイディ

魔術師の異名を持つ將軍だぜ

第八次討伐、双壁の攻防戦でレベル3のひとたちを下す

こいつの奇策には正直びびった

三九八、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

たしかに魔術師は凄えよ

でも、チェンジリング ハイパーの存在に支えられてたところがある

おれはこいつを推すね

リュシル・トリネル

おれたちと戦ったことないから知らないかもしれないけど
連合国の戦史を調べてみたら、こいつはまじで最強

はつきり言って
いまの騎士団が使ってる戦術のほとんどは
こいつの影響を受けてる

三九九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

リュシルなら知ってるよ

でも撤退戦でミスってるからな……

おれ的には、そこがマイナスポイント

精神的に脆いところあったんじゃないかと睨んでる

リュシルを打ち破った

エミル・テイリは？

何度もリュシルに煮え湯を飲まされてるんだけど
最後の最後には勝ってる

派手なところはないけど

堅実な戦いぶりが渋いんだよ

四〇〇、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

たしかにエミルは最強の一角に挙げられるな

あいつがいなかったら

連合国は生まれてなかったと思う……

もつと大きな部隊を率いてたら化けたかも

最後のほうだとリュシルにある種の友情を感じてたらしいから
たぶん甘かったんだろうな

権謀が渦巻く宮廷で
のし上がれるタイプじゃない

四〇一、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

お前らにしりとりをしようという気概が感じられない

五分だ

巨軀を屈めた空のが子狸バスターを促す

ひよこ「行くぞ。乗れ」

庭園B「おれも行くのか？」

ひよこ「あとで拾って帰るのも面倒だ」

庭園B「わかった」

にゃんこの乗り心地は
ありとあらゆる魔物を凌駕する

魔王の騎獣は伊達ではないのだ

子狸バスターを背に乗せたにゃんこが
助走をつけて大きく飛び上がった

翼を上下して風に乗る

カツとくちばしを開いて

けたたましい鳴き声を上げた

ひよこ「ケエエエエエツッ！」

ニワトリと似ていた

四〇二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

サバイバル生活で鍛えられた子狸の五感は

野生のポンポコにも見劣りしない

子狸「来る……！」

まだ停泊所は見えない

上空に飛び上がった黄色い毛玉が

みるみる近付いてくる

お馬さんが五分で駆ける距離を

空のひとは一分足らずで走破する

速度に差がありすぎる

勇者「見えた……！」

入り江に面する砂浜に勇者一行が辿りつく

うつ伏せに倒れた船員たちが生々しい

彼らをノックダウンした羽のひとが

シャドーで左フックの角度を調整していた

勇者さんに気がついた羽のひとが手を振る

遠すぎる。だめだ、間に合わない。時間設定が甘かった

子狸「行け！」

子狸が豆芝さんから飛び降りて、ごろごろと砂浜に転がる

勇者「つ……！」

けつきよく最後はこうなるのか

一挙動で立ち上がった子狸が

砂に足をとられつつも走る

まだ遠く見える巨鳥に手のひらを向ける

子狸「チク・タク・デイグ！」

飛翔した圧縮弾を

空のひとはあっさりと回避する

子狸「エリア！ 戻れ！」

子狸の魔法は純正の騎士よりも
ずっと融通が利く

反転して背後から襲いかかる圧縮弾に
空のひとは小刻みなフットワークで安全圏へと移動する

空のひとの巡航速度は羽のひとを上回るが
旋回速度では劣る

その弱点を補うための技がこれだ

さすがに深化魔法は別として
だいたいレベル2の魔法なら
詠唱破棄しても開放レベル4におさまる

空のひとは詠唱破棄で
空中に良くしなる巨木の枝を再現したのだ
必殺の多段ジャンプだった

子狸「チク・タク・ディグ！」

とにかく当てさえすればいい

圧縮弾で挟み撃ちにしようとする子狸だが
二つの魔法を同時に扱おうとして失敗する

ふだんは出来るはずのことが
言ってみれば本番の

旅シリーズではうまく行かないこともある

圧縮に失敗して暴れ狂う空気の塊が
子狸の頬を叩いた

バランスを崩して転倒する
砂まみれになっても子狸は戦意を失わない

子狸「っ……チク・タク・ディグ！」

ミスは重なる

無意識のうちに座標起点にすぎたらしい

座標起点の制限を

人間が自らの意思で解除することは
できない

子狸が焦っている理由は

おそらく船に身を隠そうとしていた
子供たちの集団が

岩陰から姿を現したからだ

子狸が叫んだ

子狸「走れ！ 船に行け！」

二度のミスで

空のひととの距離はだいぶ詰まっている

子狸が今度は足を止めて

人差し指を上空の魔獣に向けた

子狸「イズ・ロッド・ブラウド！」

発電魔法は特殊な魔法だ

魔属性というだけではなく……

ふつうに投射しても

処理速度がまったく追いつかない

だから子狸は条件を指定して

発電魔法を手元から伝播する必要がある

空のひとまでの直線上であること

それが感染条件だ

子狸の指先から紫電の束が放たれる

四〇三、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸が発電魔法を扱えることを

空のひとは知らないことになっている

ひょい「なごっ……！」

空中でロールして直撃は避けたが

紫電の枝に翼が掠った

子狸1ポイント獲得

ひよこ「魔属性だと……?」

空に貫けて行った雷光を目で追って
空のひとが空中で滞空する

おれ「油断するな。あれは、あの男の血を引いている」

ひよこ「……血は争えないというわけか」

眼下では、豆芝さんと黒雲号が
進路を切り替えて子狸を追っている

船からどんどん離れているが……

早急に子狸を回収したほうがいいかもしれない

もう無理だろう

いや……そういうことか

おれ「やってくれるじゃないか……」

夕日が沈もうとしている

真っ赤に染まった水平線が美しかった

照り返された日の光が

波打ち際で、かすかに歪んだ

四〇四、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸を追うか否か

最後の最後で勇者さんは決断できなかった

子狸を追ったのは

豆芝さんの意思だった

脚が鈍った黒雲号を

勇者さんは後押しした

勇者「好きになさい」

勇者さんが子狸を助けようとしたなら

羽のひともきつと追いかけてくる

もしかしたら打算から来る決断かもしれないが

この子は……アリア家の人間としては破格に甘い

だから王都のは、彼女を選んだ

近づいてくる気配を感じ取ったのか

いつになく厳しい声音で子狸が叫んだ

子狸「来るな！」

子狸は完全に立ち止まって
上空の空のひとを指差していた

子狸「来るな。ここで……お別れだ」

すでに巨鳥は子狸の頭上に迫っている

子狸「ゴル……!!」

子狸の指先に灯った火炎を

空のひとは吐息ひとつで吹き消した

眼前に降り立った魔獣に

子狸は気圧されまいと両足で踏ん張る

空のひとは興味深そうに子狸を見下ろしている

ひよこ「人間が、魔属性をな……」

庭園B「空の」

制止しようとする黒騎士を

空のひとは無視した

ひよこ「ああ、そうか……お前は」

言いかけた空のひとを

突如として飛来した氷の弾丸が打った

厚い羽毛に遮られて空のひとには何らダメージはない

だが、注意を逸らすことはできた

凍結魔法が飛んできた方向を見ると

ひよっ「ん……」

波打ち際に

骨のひとが

立っていた

四〇五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

地獄から……

帰って来たぜ！

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 12 (後書き)

注釈

・スペリオルしりとり

人類最強は誰かを決める魔物たちのゲーム。

ひたすら「いや、そうじゃねーよ」と続いでいくことから「しりとり」の名を冠している。

歴史上の偉人最強決定戦である。

多くの場合で比べようがないので、決着はつかない。

高名な画家同士で殴り合ったら誰が最強かとか不毛なことを延々と話し合う。

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 13

四〇六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

お勤めご苦労さまです

四〇七、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お勤めご苦労さまです

四〇八、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お勤めご苦労さまです

四〇九、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おう。お前ら、ちょっと見ない間に……

あれ？ おい。お前らコピーか？

なんだ？ どうなってる？

四一〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

上流から出直してこい

四一、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

そしてそのまま河底に沈め

四二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おれは前から疑問に感じていた

あなたたち人型のひとたちは

なんでそう例外なく毒舌なのですか

四三、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

お前には、おれの優しさが伝わっていないようだな……

四四、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

悪いことは言わん

牛のひとのところに帰れ

さもなれば、尾頭つきの鯛みたいにされるぞ

四五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

なにそれ。想像を絶してる……

いやいや、おれはべつに牛さんとか怖くないからね？

だけど、羽のひとがおれを心配してくれてるのはよくわかった
その心意気を汲んで、おれのことは海燕のジョーと呼んでくれ

四一六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おい、ジョー

今回は子狸の味方をするのか？

いったいどついう風の吹き回しだ？

四一七、海底洞窟在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おい、ジョー

出て来ちまったものは仕方ない

うまく合わせろよ？

四一八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

振り返った子狸が、ぱつと喜色を浮かべた

子狸「……！ 骨のひと！」

骸骨「お前の声が聞こえた」

夕陽を背に

砂地を踏むジョーの足取りに迷いはない

海燕のジョーは魔軍 元帥の部下ということになっている

空のひとが首をねじって

背中の黒騎士を非難の眼差しで見た

黒騎士が言う

庭園B「なんのつもりだ」

決して大きな声ではなかった

しかし押し殺した感情が

抑えきれなかった怒気が

うねりを帯びて大気を震わせた

魔物たちの鋭敏な感覚は

人間よりも野生動物のそれに近い

ジョーが言った

骸骨「戦いに殉じるならそれもいい」

歩きながら

腰につり下げたこん棒を手に取り

感触を確かめるように

一度、虚空を薙いだ

骸骨「けど、捨て駒にされたとあっちゃあ、散っていった連中が浮かばれんでしょうよ！」

こん棒を強く握りしめ、かすかに上半身を倒す

たわんだひざに力がこもる

足元の砂が後方に弾けた

骸骨「小僧！ 波打ち際まで走れ！」

低く

水面を切るように駆けるジョー

まさしく飛燕だ

子狸「おう！」

応じた子狸が、空のひとに背を向けて駆け出す

ひよこ「逃がすと思うてか！」

魔獣の眼力が子狸をとらえようとした

まさにそのとき

妖精「二度目は！ ない！」

馬上の勇者さんを追い抜いて猛進した羽のひとが

マジカル ミサイルを空のひとの足元に撃ち込んだ

高速で撃ち込まれた光弾が大量の砂を巻き上げる

視界を塞がれて機を逸した空のひとの目が怒りに染まった
上空の妖精を睨む

ひよこ「愚か者め！」

羽のひとは10ポイントだ

たしかに軽率な行動だったかもしれない

だが、理屈ではなかった

目には見えない魔 力の波動は

ときおり亡者の手にたとえられることもある

地獄へといざなう冥界の招き手だ

地上から押し寄せる魔 力の網に

羽のひとは急降下して自ら距離を詰める

瞬く間の出来事だった

妖精「ッ……！」

空のひとの魔 力には一定の指向性がある

視界に入れることが前提条件なのだ

魔法の最高速は処理速度の限界でもある

魔力とて例外ではない

急速で旋回した羽のひとが

魔力を振りきって空のひとに肉薄する

妖精「シューティング スター！」

いや、それおれボムだよな？

全方位に放たれる光のつぶてだ

羽のひと最強の手札であり、至近距離で撃つと多段ヒットする

光の散弾をまともに浴びて、空のひとがのけぞった

妖精「これならっ……っ！」

ひよこ「これなら？」

にやりと口元をひん曲げた空のひとが

ぐんと首を前方に突き出した

ひよこ「これなら……どうだというのだ？ こそばゆいぞ、虫けら
が」

間近に迫った巨鳥のつぶらな瞳は

身体の小さな羽のひとにとって姿見の鏡ほどもある

ひよこ「追い払ってくれようか。人間が……羽虫にそつするよつに」

びくりと震えて硬直した羽のひとに

黒妖精の叱咤が飛んだ

コアラ「しっかりなさい、リンカー・ベル！」

妖精「つ…………」

我に返った羽のひとが

素早く身をひるがえして子狸を追う

ふたたび首をねじった空のひとが

気だるそうに口を開いた

ひよこ「…………お前はどちらの味方なのだ…………。まあ良い」

正面を向く

遠ざかる羽のひとを見つめる瞳が

驚くほど慈愛に満ちていた

ひよこ「まとめて18ポイントというのも…………。悪くない、な…………」

四一九、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

唐突なジョーの登場に

勇者さんは察するところがあつたらしい

手綱を操り、黒雲号の進路をわずかにずらしていた

逸早く子狸と合流した豆芝さんに

子狸が飛びつくのが見えた

子狸「豆芝！」

羽のひとは値千金の時間を稼いでくれた

同時に流れ弾が何発か子狸に直撃していた

波打ち際へ向かって先行する勇者さんが
指笛を鳴らした

その音に反応した豆芝さんが
黒雲号のあとを追う

離脱してきた羽のひとが
子狸の肩にとまった

ざんざんと砂を蹴って駆け寄る海燕のジョーと
豆芝さんの首につかまった子狸がすれ違う

その間際

子狸「エラルド！」

子狸の詠唱と

ひよこ「ケエッ！」

空のひとの咆哮は

ほとんど同時だった

四二〇、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

風の壁が

高速で迫って来る

これも圧縮弾だ

魔物が魔物を撃つとき

魔法の応酬はもつとも実現性を帯びる

質量をともなつた突風が

海燕のジョーを一瞬で粉碎した

サイドステップを踏んだジョーが

豆芝さんと子狸をかばつたのだ

子狸は振り返らなかつた

投げ出されたこん棒を

身を乗り出して拾い上げる

そして後方に投げた

こん棒は無傷だった

52年モデルだ

海燕のジョーの

駆ける足が

躍動する胸が
振り上げた腕が
明日を夢見る頭蓋が
ばらばらと音を立てて再生する

ひよこ「なん……だと？」

空のひとが目を剥いた

詠唱破棄された魔法は
実質的なレベルを剥ぎ取られる

開放レベル4の魔法ならば
レベル1と同じ扱いになる

設定上、開放レベル1の魔法で
レベル2の魔物を倒すことはできない

とりわけ海燕のジョーは
詠唱破棄がまったく通用しない存在なのだ

放物線を描いて舞う52年モデルを
天に届けと突き出された指が
はっしと掴んだ

骸骨「おれは自由だあーっ！」

魂の叫びであった……

四二一、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ときに、空のひとの圧縮弾は

海燕のジョー、渾身のトリックを打ち破ることに成功していた

波打ち際に

忽然とジョーの集団が現れた

波間に揺れる

年代物の帆船は

つい先ほどまで見られなかった光景だった

ぼろぼろの帆に

いまにも沈みそうな外観の船体

幽霊船だ

闇魔法で光の屈折を操作して

風景に溶け込ませていたらしい

発光魔法と遮光魔法は

本質的に同じものだから

こつした芸当もできる

一足先に波打ち際に到着した勇者さんと

ジョーたちの目があつた

骸骨B「よう、嬢ちゃん！ 乗ってくか？」

勇者「わたし、どこで道を踏み外したのかしら……」

他に道がないとはいえ、勇者さんは忸怩たる思いだろう

ジョーたちが一斉にこん棒を装備した

骸骨C「碇を上げる！ 出航だ！」

骸骨D「海だ！」

骸骨E「自由だ！」

盛り上がるジョーたち

四二二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

一方その頃、子狸は珍しく活躍していた。地味に

子狸「チク・タク・デイグ！」

いま、子狸は直前に詠唱した深化魔法の影響下にある

暴れ狂う圧縮弾が、砂地を抉って飛翔していく

巻き込んだ砂が渦を巻き

まるで砂嵐のような有様だった

空のひとは迫る砂嵐を

苛立たしげに翼でひと打ち

力尽くで叩きつぶした

魔法の働きは消せても
舞い上がった砂を消すことはできない

遠く、先ほどの子供たちが船に駆け込むのが見えた

子狸「骨のひと！」

骸骨A「おう！ 後退するぞ！」

空のひとは当てずっぽうに投射魔法を撃つが
砂塵を貫いて飛来した浸食魔法を
海燕のジョーが華麗に52年モデルで打ち落とす

骸骨A「……？ ちっ、やられた。上だ！」

視界が悪くて狙いが定まらないなら
先ほどのように突風でまとめて吹き飛ばしてしまえばいいのだ
それをしないということは
視界の悪さを逆に利用しているということだ

ジョーの足止めをしている投射魔法は
角度を捻じ曲げて発射地点を錯覚させるためのものだった
砂塵が届かない澄みきった上空を
空のひとが悠々と羽ばたいている

立派なたてがみが風にそよいでいた

四二三、管理人だよ

おれにもいつか生えるのかな

四二四、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

いや、ありえないだろ

将来、お屋形さまみたいになるんじゃないのか

四二五、管理人だよ

え？

四二六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

え？

四二七、管理人だよ

あ、うん

四二八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

え？ なんなの、いまの納得するまでの時間差……

と、とにかくだな……

子狸！ 急げ！ やつはジェット・ボーン号を沈める気だ！

四二九、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

沈めさせて頂きます

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 13 (後書き)

注釈

・幽霊船

魔物たちが駆る船。メインクルーは骨のひとと見えるひと。

骨のひとは「ジエット・ボーン号」と呼ぶが、見えるひとは「ジエット・ゲイザー号」と呼ぶ。

呼ぶひとによって名前が変わるといふ先進的なシステムを採用。

古式ゆかしい帆船だが、見た目を重視しているため帆は機能していない。

船底部に大きな歯車が横倒しに設置しており、これを数人がかりで回すのだが、それ自体に意味はない。

では、どうやって動くのかというと、ステルスして巨大化した骨のひとが船を手の上に乗せて海底を歩いている。

この幽霊船の主な役割は海の監視である。

人間たちの船が沈んだりすると、海洋生物にとって迷惑なので、難破船の救助等を率先して行う。

繰り返すが、メインクルーは骨のひとと見えるひとである。

「都市級が港町を襲撃するようです」 part 14

四三〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

沈めちゃうの？

沈んだ船はどうするの？

おれ？ おれが始末するの？

お魚さんたちには何て言えばいい？

たぶん人類社会から船が消滅するけどいいよね？

つか、おれが消す

四三一、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

あ、いや……

う……嘘びょん。沈めないよん

四三二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

うん。お前ならそう言ってくれろと信じてた

言葉には気をつけて欲しいのです

罰として語尾ににゃんと付けて下さい。お願いしますね

四三三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おちつけ、海底の

たしかにおれたちが意図的に船を沈めるのはやばい

お前の言い分はもつともだろう

だが、空のひとのバランス感覚は

この場にいる誰よりも優れてる

まだ行けると踏んだんだろう

まさか本気で沈めようってんじゃないやあるまい

四三四、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

そう！ そうなの！

その青いの、いいこと言った！ にゃん！

四三五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あ〜……うん。すまん

おれ、過敏になりすぎてた

本当にごめんな、空のひと

お詫びと言っては何だけど
羽のひとの物真似するわ

シューティング（びしっ

四三六、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

青いの六人もいらなくねーか？

四三七、住所不定の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

一人くらいは塗料になってもいいな

四三八、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

や、やめろーっ！

な、なんて恐ろしいことを言うんだ……

この邪妖精どもめ……！

海底のひとは……このおれが守る！

四三九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

空のひと……

四四〇、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

青いひと……

四四一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

うん

四四二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

海底のが自宅で磔にされた一方その頃……

子狸サンドストームの圏外にいた勇者さんは

上空に飛び上がった空のひとを見て

ジョーたちと打開策を練っていた

勇者「わたしを、あなたたちの船まで魔法で運びなさい」

魔物たちはポイントに固執している

高度な再生能力を持つジョーに構わず

先回りしてゴールそのものを潰してしまうというのは合理的な判断だ

ジョーたちがどこまで考えて

幽霊船を波間に置いてきたのかは不明だが

子供たちが避難した魔法動力船は

波に浚われないよう浅瀬に乗り上げている

出航の手間を考えたなら

いくぶん距離が遠い幽霊船に乗り込んだほうが

結果的には近道だ

その、わずかな時間差が明暗を分けることになる
勇者さんは考えたのだろうか

計算上、空のひとの巡航速度は

お馬さんの五倍強ということになる

ふつうに走ったのでは間に合わない

自然とジョーたちの返答は端的なものになった

骸骨B「無理。並行呪縛、必要」

骸骨C「高度。ビッグね」

なんで片言だよ

……逆に言うと

並行呪縛さえ使えば
たとえば投射魔法に便乗して
空を飛ぶことも可能になる

魔法を使うというのは
つまり、イメージを実現する際の
制限を解除するということだ

骸骨D「だが、足場を用意することはできる」

人間には、というより魔物以外の生物には
最低限の退魔性が保障されている

かつて子狸が覗き行為に走ったときのように
生成した力場の上を走るだけなら
魔法の影響下に完全に落ちたとは見なされない

勇者さん一人では、たぶん無理だ
退魔性が強すぎる

だが、彼女には黒雲号という心強い相棒がいる
動物たちは人間と違って素直なので
不自然に退魔性が高まるということはない

子狸と仲良しというのも
この場合はプラスに働くだらう

黒雲号は星を見つめていた

もつこの際だから

はつきり言ってしまうおう

このお馬さんは

たぶん子狸よりも賢い

ジョーたちの提案に

勇者さんは頷いた

四四三、管理人だよ

ふたりとも頭いいよね

買い物に連れて行くと

ちゃんと買い物してくるんだ

四四四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや、そのときお前は何してたんだよ

四四五、管理人だよ

おれは、いつだって挑戦者だから

四四六、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

意味がわからん

四四七、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

この前はキングに挑んでたな。腕相撲キング

キングが相手をするまでもないと思ったから

おれが軽くひねってやった

四四八、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

お前も何してんの？

キャラ的に勝っちゃだめでしょ

もっと自分を大事にしようよ

四四九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、順当な結果だったよ

羽のひと、設定上でも時速で200とか出すから

子狸はハンデをやるとか言って指一本で勝負したけど
角度やばかったもん

非日常的になった前足を見つめて
思わず口を衝いて出た

子狸さんのコメントがこちら

子狸「…………ひゅっ」

四五〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸には申し訳ないけど

今年いちばんのリアクションだったな

もちろん大賞にノミネートしておいた

今年こそは獲ってみせるぜ

まあ、それはよしとして……

ジョードが生成した力場の上を

黒雲号が駆けていく

黒騎士との戦いで

子狸が作った傘の道を

海上で再現したものだ

ただし、子狸が作ったものよりも幅広で

お馬さんの足に負担が掛からないよう

緻密に調整してある

盾魔法は外部の干渉を弾く魔法だから

反発力を抑えれば芝生の弾力を再現することもできる

逆に反発力を高めれば

ポンポコ級の退魔性なら加速にも使えるかもしれない
こけたらダイナミックに捻挫するだろうけど

幽霊船までの行程を

黒雲号が三分の一ほど走破したあたりで

豆芝さんが波打ち際に到着した

子狸「豆芝、待ってて!」

豆芝さんから飛び降りた子狸を

三人のジョーが拾い上げる

子狸が後ろを指差しただけで

その意図を豆芝さんは汲んだ

子狸を神輿みたいに担ぎ上げたジョーたちが

一系乱れぬ足並みで勇者さんを猛追する

骸骨B「D」おうおう!」

子狸「おう!」

骸骨B「D」シエル!」

子狸「ドロー!」

特訓でつちかったコンビネーションを

余すことなく発揮するポンポコ神輿

遺憾ながら

おれたちの魔法と子狸の魔法は
ほぼ同質だ

応用の幅が広すぎるため

チェンジリング ハイパーは不可能としても

目的が同じなら、互いに互いのイメージを補うことができる

減速魔法は、物質と物質の関係性を操作する魔法だ

減速魔法と銘打ってはいるもの

じつのところ一定周期で加速と減速の波がある

減速した場合は相対的に硬度が増し

加速した場合は相対的に硬度が減る

つまり脆くなる

子狸が素で加速しようものなら

足首がブレイクするだろう

しかしジョーたちには極めて高い再生力がある

子狸の加速魔法は

減速魔法で加速するというジョーたちのイメージを

高速で再生するジョーたちというイメージで補っている

つまり、とんでもなく速い

骸骨B「D」わっしょい！ わっしょい！

子狸「わっしょい！」

後方では、ジョーAが奮闘している

空のひとの砲撃は
いまなお続いていた

ジョーたちのこん棒さばきは
一流どころの剣士に勝るとも劣らない

束になって襲い掛かってくる氷槍を
大きく飛び上がったジョーAが
空中でコマみたいに回って
まとめて叩き砕いた

だいぶ視界も晴れてきた

一連の動作で
頭上を通過した空のひとを視認し
一瞬で構成を組み上げる手管は
過去、魔法戦士たちから学んだものだ

骸骨A「レゴ・グレイル・ラルド・デイグー！」

お返しとばかりに
大口径の氷槍を後ろ手に撃つ

開放レベル2の投射魔法なら
詠唱破棄の盾魔法を貫通できる

空のひとの意表を突いたかに見えたが

これは黒騎士の魔 剣で撃墜された

じつに目障りな上司だ

舌打ちしたジョーAが

豆芝さんと合流する

先行するポンポコ神輿では

翼で風を打つごとに加速する空のひとに

子狸の肩にとまっていた羽のひとが

決死の覚悟を決めた

妖精「先に行くぜ！」

ここがデッドラインだった

ポンポコ神輿が先行しているいまなら

空のひとに先んじて幽霊船に辿りつける

子狸「はちみつは……」

誰もはちみつの話なんてしてない

羽のひとはツッコミを放棄して飛翔した

四五一、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶてさん

あとで、さっと熱を通します

四五二、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸3分クッキングが

にわかに現実味を帯びてきた

羽のひとの旋回速度の秘訣は

二対の羽から生み出される爆発的な加速力にある

たちまち黒雲号に追いつき

その頭上を抜けようとした羽のひとを

勇者さんが制止した

勇者「リン！」

羽のひとの妖精魔法では

空のひとに対して決定打を与えられない

それを見越しての判断なのか？

それとも……

片手を差し出した勇者さんを

羽のひとは信じることに決めた

勇者「あなたはここ。落馬しないように、わたしを支えて」

妖精「はい！」

秘策があるらしい

羽のひとは従った

だいじょうぶと言って聞かせるように
勇者さんが頷いた

勇者「そう。そのまま。あなたを見ていたほうが、きつとうまく行く……」

羽のひとを乗せた左腕のひじをくつと引いた勇者さんが
お馬さんの手綱を手放して
右手に聖 剣を顕現する

顔に巻きつけるように振りかぶった右手の中で
聖 剣が不安定に揺れていた

幽霊船まで、残すところあとわずか

黒雲号とポンポコ神輿が横一線に並んだ
まさにそのとき、上空を空のひとが駆け抜けた

骸骨B〜D「わっしょい！ わっしょい！」

子狸「エラルドおっ！」

黒雲号を抜き去ったポンポコ神輿
上空を仰いだ子狸が
かつて羽のひとにへし折られた人差し指を
空のひとに向けた

子狸、渾身の魔法がいま！

子狸「デイグ・タク・アバドおーん！」

えっ

四五三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

えっ

四五四、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

えっ

四五五、住所不定の特筆すべき点もない不定形生物さん（出張中

えっ

四五六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

重力砲とか……

どう考えても開放レベル4だろ……

なまじ魔性に近しいから

子狸の魔法は失敗しても半端に実現しようとして
周囲に被害をもたらす

撒き散らされた重力場が
足場になつてゐる魔法の棧橋を
木っ端微塵に打ち砕いた

骸骨B「D「はわわっ」

子狸「な、なんと……」

妖精「ばかーっ！」

かろうじて羽のひとの念動力が
黒雲号と勇者さんの落下速度をゆるめる

ポンポコ神輿は
あえなく海中に没した

四五七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

四連結ならレベル2だろ的なっ

四五八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

あわよくばレベル3だろ的なっ

四五九、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

どんぶり勘定をするなとっ……

このポンポコ、役に立たねえ！

四六〇、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

まずい！ ジョーは泳げん！

王都の！

四六一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

急に言われても思いつかんぞ……

ジョーAは……だいじょうぶだな

スタートが遅れたぶん、浅瀬だったのが幸いした

問題はコイツらか

際限なく沈んでいくジョーたちを

とりあえず海上に射出

ちやぽんと跳ねた海水を

女性の形に固定する

水の精霊……ということにしよう

仕方ないから声はおれがあてる

突如として出現した水の精霊が

金銀にデコレーションされたジョーたちを
柔らかい手つきで指し示す

おれ「あなたが落としたのは金の骨ですか？ 銀の骨ですか？」

骸骨B「それ骨じゃないだろ」

海面から顔を出した濡れ子狸が答える

子狸「いいえ、鉄の骨です」

骸骨C「鉄でもないんだが……」

おれ「あなたは正直者ですね」

骸骨D「えっ……」

四六二、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お前らが妙なドラマを演出している一方その頃……

幽霊船の上空を陣取った空のひとが
勇者一行をあざ笑うように一瞥して
急降下を開始した

体当たりをするつもりだ

低レベルの魔法で破壊しても
逆算能力で修復される

レベル4の魔物の打撃は
開放レベル4の魔法と同意義だから
実質的に修復は不可能ということになる

治癒魔法が神のご加護であるというなら
そんなことはあってはならないことだから
魔力が毒のように内部を蝕むのだと人間たちは解釈している

目下、落下中の勇者さんは
一心に空のひとを見つめていた

とつさに羽のひとが念動力で支えたものの
馬上で勇者さんの身体は傾いている

しかし、そんなことは勇者さんの集中の妨げにはならなかった

短い吐息と共に、聖 剣を振りぬく

幾つもの淡い光が
空のひととを隔てる虚空に
連続して灯った

ひよじ「……？」

空のひとが首をねじって
ぎよつと目を見開いた

聖 剣の切っ先が
両者を隔てる空間を飛び越えて

片翼を切り落としていた

ひよこ「おお……」

淡泊な反応だった

空中でバランスを崩した空のひとが
狂った進路を立て直そうと
残った片翼で激しく羽ばたくも
狙いが逸れて海面に着水する

ひよこ「…」

とつさに盾魔法を足場にして水没を免れたが
足元の海面が突如として渦を巻く

庭園B「！　まずい！　飛べ！」

設定上、聖　剣は魔法ではないことになっている

逆算能力で治療するのはご法度だが
レベル3以上の魔物は変化魔法で同じ効果を得ることができる

ひよこ「待て、いま……エリア・ブラウド！」

半ばから切り落とされた翼が
にゅっと生える

飛び立とうとした空のひとを
しかし海面から伸び上がった水竜巻が捕獲した

ひよこ「うおっ……」

四六三、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

さあ、おしおきの時間だ

四六四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

もはや事態は完全に人間たちの手を離れた

触手のようにねじ曲がった水竜巻が

空のひとの巨体をぎりぎりとしめつける

ひよこ「ぬぬぬっ……!!」

カツと開いたくちばしで噛み切ろうとする空のひとに
水竜巻が素早く背後に回り込んだ

空のひとの翼をロックし、コブラツイストに移行する

ひよこ「ぬおおっ……!!」

さりげなく避難した黒妖精が

空のひとの耳元まで飛んで行って叫んだ

コアラ「ギブか？ ギブか？」

ひよこ「ネバー！」

魔獣種としてのプライドがそうさせるのか
空のひとは激しくかぶりを振って
続行の意思を示した

水竜巻が巨人と化して
さらなる苦悶を空のひとにしている

背骨をへし折らんとばかりにしめつけられて

ひよこ「ほうっ」

空のひとのくちばしから
かつて聞いたことのない音がした

観戦を余儀なくされている勇者一行

勇者さんの肩に移った羽のひとが
畏怖に打たれて震え上がっていた

妖精「並行呪縛……」

勇者「？」

妖精「あれ……王種のよりしろです……」

勇者「よりしろ……？」

妖精「遠隔操作の、人形みたいなものです。本体じゃないのに……」

王種は……こんな、圧倒的すぎる……」

水の精霊から三種のジョーを取り戻した子狸が
どさくさに紛れてゴールした

ゴールド「ういー！」

シルバー「ういー！」

アイアン「ういー！」

子狸「ういー！」

幽霊船の甲板で、こぶしを突き上げて勝ち誇っている

空のひとは責め苦に耐えていた

水の巨人が首をひねると

海面がさざめき

盛り上がった海水が

即席のリングと化した

巨人を介して海のひとが叫ぶ

人魚「ひとんちでっ」

空のひとを抱えたまま助走し

ロープに投げる

すでに空のひとはグロッキーだ

よたよたと海面を走らされ
ロープでバウンドして戻ってくる

人魚「騒ぐなっつってんだろーがああっ！」

巨人のリアットが空のひとに炸裂した

ひよこ「おふっ！」

空のひとの巨体が半回転して
マットに沈んだ

黒妖精が両腕を交差して
試合終了を告げる

ひよこ「……………」

マットで大の字になっている空のひとは
ぴくりともしない

コアラ「ドクター！ ……勝者、海のひと！」

人魚「ういーっ！」

壮絶な幕切れに、ジョーたちと子狸が喝采を上げる

危機は去ったのだ……

四六五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

日没と同時に
港町の住人たちは黒騎士の魔 力から解放された

……お前たちも
もういい加減、諦めたらどうだ？

四六六、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

まだだ！

まだ終わっちゃいない……

四六七、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

諦めるのは、お前だ！

おれたちは

シナリオを遂行したぞ

オリジナルでなくとも、やれると証明した！

四六八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

強情だな……

わかった

理由が必要ならくれてやる

歩くひと、見てるな？

四六九、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

こんばんはあ

あれ？ なんでびくってしたの、お前ら？

ああ、ごめん。お前らだなんて……

お兄ちゃん

四七〇、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

山腹のがだな

四七一、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

うん、そう。山腹のが

おれたちは止めたんだよ

ね、議長？

四七二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いえ、おれオリジナルですし……

四七三、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

オリジナルはおれたちの目の前にいるだろ！

怖い！ このひと怖い！ 平気で仲間を売る！

四七四、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

怖いのはお前らだよ！

でも残念でした

おれは勇者一行の味方だもんね

いや、悪いね、ホント……

四七四、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

お前ら、もうちょっと賢く生きろよ

ポンポコ（大）を見習え

あいつは、おれを見るなり最速で土下座したぞ

四七五、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

さて、と……

そろそろ魔都に帰るか。な、お前ら

四七六、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

そうですね、司令

四七七、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

お供します、司令

四七八、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

オリジナルども

今回は勝ちを譲ってやる

だが、忘れるな

ライフワーク担当のおれたちはどこにでもいる

第二、第三のおれたちが、いつの日かきつと……

四七九、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

きれいにまとめようとしてるとこ悪いけど

お前ら全員、王都に集合

四八〇、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

はい

四八一、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

はい

四八二、かまくら在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

はい

四八三、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

あ、そつだ。王都のひと

四八四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

はい？

四八五、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

アリア家の地下に

鬼のひとたちが幽閉されてるんですけど

訪問販売しに行つて

即行でつかまったらしい

四八六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なにやってんだ、あのひとたち……

「おれたちの船出」 part 1

四八七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中
というわけで

歩くひとの逆鱗に触れたコピーたちは
四人つるんで王都に旅立って行ったとき

めでたしめでたし

四八八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

めでたくはねーな

四八九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

事情はわかった

わかったが……

ひとつだけ訊きたい

どうして、鬼のひとたち救出部隊に選出されたのが
おれたちなんだ？

四九〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

納得の行く説明をもらいたい

四九一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

まあ聞け

この話には続きがあつてだな……

ひとしきり吠えたあと

役目を終えた水の巨人は

とぷんと海水に戻ったわけだが

おれは少し勇者さんと話してみたかった

せつかくの機会だったからな

なかなか話しかけてくれなかったから

スイングの調整をしたりして

気さくな精霊を演出したわけよ

おれ「ふむ……ちとスライスしたか……」

四九二、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

嘘を吐けよ

お前、ステルス解いてたの忘れてただけだろ

さも忙しいふりして

ときどき子狸で遊んでるの知ってたぞ

勇者さんの死角に回りこんで

猛虎の構えとかするのやめろ

四九三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

必要ならそうするぞ

四九四、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

それも！

受け答えよりも

自分が言ってみたい台詞を優先するのやめろ！

子狸か！

四九五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸じゃねーよ！

四九六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

その応酬やめる！

いつか子狸と同じこと言いそうで不安になるんだよ……

四九七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

うん。そうだね

とにかく

あきらかにひまを持って余してるふうの精霊に

勇者さんは意を決して話しかけたのさ

勇者「……あなたは、もしかして海の精霊なの？」

王都「えっ……あ、うん」

リアクションがおかしかったな

確実に油断してた

水の精霊とか言ってたのに

認めちゃったし

自分でも気付いたんだろうな

すぐに訂正してた

王都「まあ、あれだ。あれ、うん。いまはそう、海の精霊」

勇者「……………」

妖精「水の精霊は流されやすいというか……けっこう適当なところがあるんです」

羽のひとのフォローが光る

この頃には、ジョーA改めノーマルジョーが展開し直した魔法の棧橋に黒雲号は復帰してた

はしやぎすぎて幽霊船の甲板から落っこちた子狸をジョーたちが懸命に救出作業を行ってたな

魔法の棧橋を

とことことマイペースで歩きはじめた黒雲号の上で勇者さんは気を取り直して言った

勇者「あなたは、王種の庇護を受けているの？」

自然と遠ざかる精霊

王都「あなたは宝剣の所持者ですね」

黒妖精さんが最高位の存在とか言っていたので精霊は自らのディテールにこだわった

王都「答えましょう。そのとおりです、人間の子よ」

勇者「……そう。魔軍元帥は、光の精霊が人間の味方をしていると言ったわ。あなたは違うの？」

王都「光は二面性を持つもの。わたしはそうではない」

勇者「だから魔物たちの側につくと？」

王都「その質問には答えられない。あなたは、王種とは何なのか、その問いに対する答えを持たない」

黒雲号が甲板に辿りついた

ジョーたちに一本釣りされた子狸が
うざったいテンションで勇者さんに駆け寄る

子狸「お嬢〜！」

勇者「リン」

妖精「はい」

羽のひとが子狸の迎撃にあたる

妖精「しえあっ！」

子狸「ぬうっ………！」

子狸のひざが揺れる

アイアン「ロー効いてるよ！　ロー！」

シルバー「ガード、ガード！　ガード下げんな！　イイのもらった
ら終わるぞー！」

ゴールド「足使え！ 足！ インファイトに付き合っな！」

勇者さんは続けた

勇者「では、人間に味方をするにはあり得る？」

精霊は答えた

王都「わからない。あなたたちは、自分たちよりも高位の存在と手を取り合うことができない。おそらくできないと……わたしは考えている」

これは王都のの本音だろう……

勇者「……………」

勇者さんは答えられなかった

四九八、王都在住のとするにたらない不定形生物さん（出張中

いや。状況しだいじゃねーか？

四九九、空中庭園在住のとするにたらない不定形生物さん

ちよっ……

ひでえ！ お前、勇者さんめちやくちや悩んでたぞ！？

じゃあ、これもそうなの！？

王都「あなたたちの本質は停滞にある。文明の先に、生物としての発展はない。衰えるばかりだ」

ちよつと感心したんだけど！ まじで！

五〇〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

まじで？

ごめん。たんなる思いつきだわ

もう勇者さんに警戒されちゃってるから

おれも次善策を練らねーとな

お前らは協力してくれないし

勇者さんの意識を改革しようかと思ってるのよ、いま

五〇一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おお、前向きだな

具体的な案はあるのか？

五〇二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

猫耳とか？

五〇三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

意識は？

というか、やめて。おれとキャラがかぶる

五〇四、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

かぶってもないだろ

王都のひとの薄っぺらい質問に

勇者さんは答えるすべを持たなかった

いやらしい質問をさせたら

この青いのの右に出るものはいない

ひざに来ている子狸が

二人の会話に割りこんだ

子狸「ちがう！ そんなことない！」

子狸は人間の可能性を信じているようだった

子狸「学年一の美少女に、ちょっと冴えない男の子が好かれること
だってあるはずだッ！」

もうちょっとましな比喻はなかったものか……

おれ「ねーよ。夢見んな」

もう眠れ

おれの右が一閃し……

子狸の手のひらから乾いた音がした

おれ「なっ……!!?」

う、受け止めやがった……

金&銀&鉄「肉球ガードだ!？」

子狸「え!？」

金&銀&鉄「え!？」

子狸「いや、うん。……え?」

金&銀&鉄「え? ああ……」

子狸「うむ……」

金&銀&鉄「うむ……」

あいまいな同意に至る子狸と骨

精霊が見上げると

夜の帳が落ちた海上で

おれの輝く燐粉がひときわ目を引いた

つまり、おれシャイニング

ほのかに照らされた子狸が

一縷の希望のようにも見えた

王都「ちがう……と。どのように証明しますか？」

子狸「……え？」

気のせいだった

子狸「あ、うん。つまり……悪魔の証明というやつだな……」

合っているような合っていないような……

勇者「悪魔の証明？」

勇者さんが食いついた

子狸が受けた教育は

現代の水準を完全に飛び越えたものだ

子狸は、ふつと微笑した

子狸「つのかな」

ぜんぜん違った

悪魔の証明

悪魔の存在を否定することはできないように
存在しないということを証明するのは困難を極めるということだ

つのは関係ない

勇者「……そう」

勇者さんは納得していないようだったが
意識の片隅には留めておこうという感じの反応だった

彼女の未来ある知性が

子狸ライブラリーに毒されないことを祈るばかりだ

王都「！」

最初に気が付いたのは精霊だった

水の巨人がそうしたように

とぷんと海中に潜る

次に反応したのがジョーたち

豆芝さんが甲板に辿りつくと同時に
ノーマルジョーが鞍から飛び降りて
幽霊船の船首にこん棒を向けた

三種のジョーと共に子狸の前後左右を固める

舳先の向こう

暗闇の先に

黒騎士が立っていた

盾魔法を足場に行っている

その肩に黒妖精が舞い降りたことで

くつきりと輪郭が浮かび上がる

緊迫が走った

遠目に見える

海面にぷかりと浮かぶ

巨大ひよこの腹が……丸い

肥えている

予想以上だ！

五〇五、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

放っておいてくれ

むかしは、もっとしゅっとしてただけだな……

二番の影響なんかな？ よくわからん……

五〇六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、むかしからそうだったと思う……

でも、たまに……

正直。……あれ？ っと思うことはある

空のひとと言えば、速い！ っという印象があるから
たぶんそのせいじゃないかと……

五〇七、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

いや、そんなはずはない

本当のおれは長身瘦躯なんだ

ひよこと言うよりは、かもめ

かもめと言うよりは、うみねこ

からあげと言うよりは……しめさば

五〇八、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

そのこだわり、ちょっとおれにはわからないな……

ふたたび対峙する

勇者一行と黒騎士

ジョーたちに詠唱破棄は通用しない

だが、魔王軍最高峰の魔法使いに対して
その特性がどこまで信頼に値するものなのか……

無言の応酬が一分ほど続いたあと

やがて黒騎士が重々しく口を開いた

庭園B「詫びんぞ」

ジョーたちに向けられた言葉だった

庭園B「敵対するなら容赦はしない……が、気が済んだら戻ってこ
い」

とつさにノーマルジョーが言った

ノーマル「元帥殿は……どうされるのですか？」

問われて、黒騎士は波間に揺れる毛玉を見下ろした

庭園B「あれが目覚めたら帰るとしよう。ゲームは……お前たちの
勝ちだ」

そう言って、水平線の向こうに浮かぶ月を眺める

庭園B「……力の一端を引き出したのは見事だった。次に会うとき

は……」

右手に魔火の剣が燃える

それを握りつぶすような仕草をすると

宙を舞った火の粉が十数本の剣となって

黒騎士を守護するように囲った

庭園B「この程度のこととは、こなせるようになっておけ」

子狸「……ああ」

いや、お前には言っていないよ？

勇者「…………」

台詞をとられた勇者さんが

子狸の頬をつまんで引っ張った

じつによく伸びる

……というわけだ

五〇八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

はいはい、何の説明にもなってませんね

五〇九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

さしたる理由はないんだろ？

もう言っちゃえよ

五二〇、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

お前らが泣き叫ぶ姿を見たい

五二一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ありがとう、お前ら

気を遣ってくれたんだね……

「おれたちの船出」 part 2

五二二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

魔軍 元帥の魔力が解けたことで

港町に光が灯った

発光魔法の明かりだ

海上から眺めた港町は

キャンドルパーティーのように輝いて見えた

滞った業務の再開

事実確認と住人たちへの事情説明

駐在の騎士たちは忙しい夜になりそうだ

暗躍を続けるファミリーの構成員たちは

勇者さんの手足としての責務を果たすだろう

魔力に囚われた住人たちは

一時的とはいえ黒騎士の支配下にあった

事件の全貌を知っているのは

せいぜい子供たちくらいなものだから

きっと真相は闇に葬られることになる

勇者一行は、しばし幽霊船に身を寄せることになった

これは勇者さんの判断だ

迂闊に子狸を野放しにはできないと考えたのだろう

領主の判断しだいでは
当面は航路が制限される可能性もあった

レベル4の襲撃を受けたともなれば
政府の干渉は避けられない

貿易は港町の特権だから
後ろ暗い商売の一つや二つは日常茶飯事だろう

勇者一行は夜逃げするように港町をあとにした
けっきょく滞在期間は半日にも満たなかったことになる

遠ざかる港町を
子狸は甲板でじっと見つめていた

子狸「……………」

いや、ちがった

子狸の興味は、もっぱらゴールドジョーに向けられていた

ゴールド「……………？　なんだ？」

視線に気づいたゴールドが振り返ると
子狸は真顔で視線を逸らした

子狸「いや、べつに」

ろくでもない予感を満載して
ジェット・ブルー号は海に行く

子狸「……………」

五二三、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

もともとジェット・フェアリー号は

海上で姿を消した豪華客船のなれの果てという設定がある

内装は見る影もなく朽ちているが、航行には支障がない

ジョーたちが小まめにメンテナンスしているので
設備に関してはまだまだ現役だ

子狸がお馬さんたちのお世話をしている間に
おれと勇者さんは仲良くお風呂で汗を流した

お馬さんたちのお世話を終えた子狸が
お風呂を上がって客室に戻ると
寝間着姿の勇者さんが
ベッドの上で丸くなって身体を休めていた

寝苦しい夜に、おれ
うちわをあおいで送風中

子狸「……………」

おれ「……………」

おれと子狸の視線が空中で火花を散らした

客室にベッドは二つある

子狸は、おれから視線を外さないまま
静かに後ろ足を交差させて自分のベッドに腰掛けた

ベッドの上で丸まったまま、勇者さんがぱちりと目を開く

勇者「……紫術を使える人間なんて、はじめて見たわ」

気だるそうな声だった

お疲れの様子である

子狸の表情に緊張が走った

子狸「……そいつはどこに行った？」

おれ「お前のことです」

発電魔法のことを人間たちは紫術と呼ぶことがある

人間には使えないとされる発電魔法が

血縁によるものだとするれば

それは魔法ではなく異能に分類されるべきものだ

学会でもよく研究テーマにされているようだが
いまもって結論は出ていない

勇者さんは異能論を支持しているようだった

子狸「ああ、あれね。ちょっとコツがあるんだ」

子狸は黒騎士の言いようをリスペクトした

勇者「……雷魔法のことよ。あれを魔法と決めつけるのは……良くないと思ってたんだけど」

勇者さんが寝転がったまま他者と話すのは珍しい

子狸「お嬢、眠いの？」

勇者「そんなことないけど……」

そのわりには、まぶたが重そうだ

もそもそと寝返りを打った勇者さんが
枕を抱きかかえて頬に当てた

子狸「眠いんだろ？ 火の番はおれがするから、寝てていいよ」

子狸さん優しいなどと青いのは感動していたが
そもそも船内で火の番などという役回りは存在しない

魔法動力船とは比較にならないほど
ジェット・フェアリー号の航行はおだやかだ

くてつと首を倒した勇者さんが言う

勇者「コツが……あるの？」

子狸「忘れてはならないって自分に言い聞かせるんだ。たくさん
ひとが、たくさんの思い出を胸に生きてるってね……。枕になりた
い」

おれ「しね。エロ狸が」

勇者「……それ、焚き火のコツでしょ。そうじゃなくて……」

勇者さんのまぶたが、羽を休めるようにふと閉じる

勇者「そうじゃなくて……」

おやすみなさい

五一四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

しつこいようだけど

本当に体力がないな、この子は……

今日一日でやったことって

街から街へお馬さんに乗って移動して

宿屋と船着き場を徒歩で往復

あとは黒騎士との戦闘で

短時間の全力運動をしたくらいだろ

人間ってインドア生活が続くと

こうまで体力がつかないもんなの？

五一五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

精神的な疲れもあるんだろう

勇者さんの名前が拾えるようになったのは
旅シリーズがはじまってからだ

検索避けの可能性はあるが……

アリア家側の証言もある

実戦経験はなかったと見ていい

いまの彼女に

都市級の対応は

幾らか荷が勝っていたな……

五一六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ぞぞぞん……ぞぞぞん……

絶え間ない波の音と、木材が軋む微かな音

すうすうと寝息を立てる勇者さんに

自分のぶんの掛け布団を貸してあげようとする子狸を

羽のひとが牽制する

妖精「……………」

子狸「……………」

小さな人差し指をぴつと突き付けられた子狸が

たちまち念動力で捕縛された

子狸「ぬう……」

うめき声を上げる子狸に

羽のひとが警告する

妖精「おれたちはこっち。お前はそこだ。掛け布団を、そつと床に置け。そつとだ。妙な真似をしたら……容赦しない。まずは指をへし折る」

子狸「待て。わかった……言つとおりにしよう」

そんな一幕もあり……

やがて時刻は深夜の二時。現在だ

同じ行程を歩んできた勇者さんは熟睡しているというのに
子狸の体力は有り余っていた

ぱつと目を覚ました子狸が

あてがわれた客室をうろろしはじめ

子狸「……」

勇者さんと羽のひとが寝入っているのを確認して
そつと客室を抜け出した

静かにドアを閉める

子狸「……………」

忍び足で船内を練り歩く子狸に

アイアン「どこへ行く気だ？」

腕組みをして壁にもたれていたアイアンジョーが声を掛けた

子狸「っ……………このおれの死角をとるとは……………」

アイアン「学ぶべきことは多いな」

おれたちは、さまざまなことを子狸に教えてきた
教えきれていないこともたくさんある

腕組みをといたアイアンが
ずいっと子狸に詰め寄る

アイアン「答える。どこへ行く」

子狸が、肺腑から声を絞り出した

子狸「失ったものを……………取り戻しに行く」

アイアン「……………何かを得ようとしたなら、何かを失う。仕方のない
ことだ」

子狸「何かを犠牲にしなくちゃだめなのか？ そうじゃないはずだ」

港町の一件で勇者さんが愛用の剣を失ったように

子狸の調理器具一式もまた失われた

子狸の金銭感覚は

勇者さんよりもずっとまともだ

バウムフ家の貯蓄は出入りが激しい

おれたちの必要経費は

バウムフ家のお財布から支払われるし

たとえば羽のひとが妖精屋で稼いだぶんは

バウムフ家のお財布に振り込まれる

一家で遊んで暮らせるだけの額になった翌日には

目玉が飛び出るほどの借金を抱えていたりもする

ポンポコ金融が破綻した過去から

子狸は多くのことを学んでいた……

五一七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

各国で通貨の価値が違うからなあ……

ポンポコ母には説明したし

許可ももらったんだけど

まず億っていう数字の単位を理解してなかったっばい

五一八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

先立つものが必要だった

それは手を伸ばせば届く距離にある

子狸は黄金の輝きに魅せられていた

子狸「……………」

アイアン「……………」

無言で見つめ合う二人が

弾けるように距離を取った

アイアン「同じことだ！ お前がやるうとしていることも！」

こん棒を抜き放って殴りかかるアイアン

子狸「イズ・エリア！」

子狸は紫電を棒状に伸ばして応じる

船内の廊下で

両者が正面から激しくぶつかり合った（深夜

子狸「どいてくれ！ お前とは戦いたくない！」

アイアン「賢しげに口を叩くな！ 金の亡者め！」

子狸「ちがう！ お嬢のためだ！」

アイアン「何が違う!? 何も違わない!」

アイアンのこん棒が発電魔法を打ち破って
素早く身を屈めた子狸を
船内の壁を砕きながら追う

子狸「シエル!」

子狸が壁を硬化して
こん棒の追撃をとどめた

動きを止めたこん棒を
片手で掴んで飛び上がる

子狸「おれナツクル!」

子狸のこぶしがアイアンに迫る

アイアン「おれシュナイダー!」

こん棒から手を離れたアイアンが
バアツと跳躍して後方宙返りを披露した

深夜の船内で熱戦を繰り広げる二人を

妖精「……………」

羽のひとが冷たい眼差しで見ている……

五一九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸さん、うしろうしろー！

五二〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ああっ……

そんなご無体な……

五二〇、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

お前らはこっちだ

それでは……こほん

お前ら突撃！

五二三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

行ったらあ！

アリア家がなんぼのもんじゃい！

五二四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なんぼのもんじゃーい！

五一五、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なんぼのっ

きゃあ

五一六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

山腹のっ！

なんだっ、この……！

メイドの分際で……！

きゃあ

五一七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

火口のっ！

く、来るなっ！ 近付くんじゃねえ！

この、デスマイドがあああああつ！

あぶっ

五一八、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

はい、撤収。再突撃

五一九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

しょせんは人間よ！

レクイエム毒針いつ！

避けた……だと？

あ、アリア家のメイドは化け物か……？

五二〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ひるむな！

取り囲め！

いまだ！

五二一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

当たらねえ！

なんだ、なんなんだ、お前は!?

五二二、管理人だよ

ぎゃーっ!

五二三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん(出張中

子狸いーっ!

五二四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん(出張中

子狸……!

いま行くっ……!

五二五、湖畔在住の今ときめくしかばねさん(出張中

無駄だ

お前らの射程超過はブロックしてある

五二六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん(出張中

何故だ！？

何故そこまで……

五二七、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

逃げられないようにするために決まってるだろ

とくに、そう……

お前には……一、二、三、確認したいことがある……

五二八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

！？

王都の……おれを売ったのか！？

五二九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

山腹の……お前はよく働いてくれた

だが、お前は知りすぎている……

お前の意思は、おれが継ぐ

決して無駄にはしないと約束する

五三〇、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お、お前というやつは……

五三一、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

そついうのいらなから

おら、メイドが来たぞ

ひゅー！ 勇者さんの二倍、いや三倍は強え……！

五三二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ここはおれが！

かまくらの、山腹の、先に行け！

五三三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

火口の！ だが……！

五三四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

行け！

おれもあとから追っ！

メイド「陽動……ね」

おれ「やらせん！」

おれに構うな！ 行けっ！

五三六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

かまくらの、行くぞ！

やつの思いを無駄にするな！

五三七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

火口の〜！

「おれたちの船出」part 3

一、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

おはようございます、お前ら

すがすがしい朝ですね

二、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

うん

三、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

うん

四、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

うん

五、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

だ、大丈夫か？ お前ら

だいぶ……なんというか

心が折れてる感じがするんだが……

六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

だいじょうぶ

がんばる

七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

うん

世界はひろいな

八、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

うん

正面突破は無理

九、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

39回目のアタックは惜しいところまで行った

メイドが寝てるうちに

王都で作戦会議しないか

一〇、火口付近在住のところにたらない不定形生物さん（出張中

おれ、悔しいよ

あのデスメイド

寝るから、あとは好きにしろって……

そう言いやがった……

おれたち、ライバルじゃなかったのかよ……

一一、かまくら在住のところにたらない不定形生物さん（出張中

火口の

気持ちは一緒だ

目にももの見せてやるっぜ……

一二、山腹巢穴在住のところにたらない不定形生物さん（出張中

ふっ、引き返せないところまで来ちまったな

行こう

歩くひとが待ってる

おれたちはチームだ

一三、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

山腹のひと……

いいのか？ おれは……

一四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おっと、野暮なことは言いなさんなよ？

帰るところがあつて

出迎えてくれるひとがいる

これ以上の幸せはないだろ

一五、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれは認めてねーけどな

ま、おいしいパンを焼いてくれるってんなら

考えてやらんこともないぜ

おら、しみつたれた顔してんじゃねーよ

つたく、調子が狂うぜ

一六、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

素直じゃねーなあ……

いちばん心配してたの、お前じゃねーか

一七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そ、そんなんじゃねーよ！

一八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なんなの、そのテンション……

忠告しますけど、あとで悶えるのはお前らですよ？

一九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

それは薄々勘づいてる

二〇、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれも薄々とは

二一、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

おれに至っては

突撃が20回を越えたあたりで号泣してるからね

お前らには悪いけど

あとで記憶が飛ぶまで殴ると思う

ごめんな

二二、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうしてくれ

友情パワーとか言っちゃってるからね、おれら

とりあえず反省会だな……

あのテンションは……ないわ

二三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

某パン屋にて

テーブルを囲って頂垂れるお前ら

無言だ

反省会と書かれた卓上プレートが痛々しい

二四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

深夜のテンションに身を任せるなど

あれほど口をすっぱくして言ったのに……

羽のひと、そっちは大丈夫？
発電魔法についてツッコまれると
けっこう面倒なんだけど……

超古代文明の末裔ルートは
できれば避けたい

二五、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

ん。いや、朝から子狸が部屋にいないんだよ
勇者さんは、あんまり気にした様子がないな

まあ、子狸の一日はお馬さんたちにはじまり
お馬さんに終わるから
そう珍しいことじゃないってのもあるだろう

いまは甲板にいるよ

部屋を出たところで
粉末状になってたアイアンジョーの再生現場に鉢合わせたから
ジェット・フェアリー号の設備を
簡単に説明してもらってた

アイアン「帆船に乗るのははじめてか？」

勇者「本で見たことはあるけど……そうね。じっさいに乗ったこと
はないわ」

青い空。青い海
雲ひとつない快晴だ
照りつける太陽がまぶしい

青空に尾を引く

かつて帆だったものを見上げて

勇者さんが言った

勇者「……帆船なの？　あまり用をなしていないように見えるのだけれど」

アイアン「ぱつと見、帆船だからな。魔法動力と言えなくもないが……人間たちの船とはわけが違っぞ」

勇者「自分たちのほうが上だと言いたげね」

ジョーは悪びれない

アイアン「意外か？　そうでもあるまい。こと魔法の扱いに関しては、高位の魔物は人間など及びもつかない領域にいる」

人間たちが使う魔法は、上級、中級、下級という三つの区分がなされている

分身魔法をはじめとする開放レベル6以上の魔法の存在を

おれたちは内緒にしているため

人前ではレベル判定を口にしないよう自重している

それでも、本当なら人間たちは

レベル4以上の魔物が使う超高等魔法を指して言うとき

魔法の区分を数字で表すべきだった

そうしなかったのは

きつと自分たちの限界をみとめたくなかったからだ
いつかは追いつけると信じたかったからだ

しかし無理なものは無理だ

勇者「そうね」

勇者さんは認めた

勇者「あなたたちは、人間よりもずっとうまく魔法を使える」

ジョーは頷いた

水平線を眺める

遠い目をしていた

アイアン「お前のそういう……公平な物の見方を、リリィは高く評価していた」

勇者「……マツコールのこと？」

アイアン「うん」

うん？

二六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中）

おれ、誘導尋問されてない？ 気のせい？

二七、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

いや、もうそのへんは諦めてくれないか？

勇者さんも不器用なりに

お前と会話するメリットを模索してくれてるんだよ

二八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

そつなの！？

おれ、けっこう話し上手よ？

骨トークなら五、六時間はイケる自信があるんだけど……

二九、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

それはうざいな……

理由はよくわからないが

あのボクっ子がパーティーを去ってから

勇者さんは少し変わった気がする

彼女は言った

勇者「そう……。あの子には内緒にしておいて頂戴」

勇者さんは子狸を名前では呼ばない
たぶん身元が特定されるのを防ぐためだ

ふだんは虎視眈々とスキンシップの機会をうかがっている子狸が
この場にはいないことに

このとき勇者さんは、はじめて危機感を覚えたらしい

勇者「……そのへんを泳いでないでしょうね」

おれ「……そういえば昨日の夜、タコさんになりたいって言ってま
した」

ああ、とジヨーが思い出したかのように言う

アイアン「じつは貝殻というのは骨の一種でな……」

おれ「強引に持ってくな。……うちのポンポコどこ行ったか知りま
せん？」

お前らさあ……

ポケる前にちらつとおれを見るのをやめてくんない？

子狸みたいにノールックでポケられても

それはそれで困るんだけどさ……

アイアン「ポンポコ？ ああ……あの小僧なら、他の連中と一緒に
いるぞ」

ジヨーの小芝居が光る

勇者「……姿が見えないなら見えないで不安になるわね」

アイアン「案内しよう。こっちだ」

先に立って歩くジョーに

おれと勇者さんがついていく

三〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

勇者さんは、だんだんおれたちのステージに近付きつつあるな……

庭園の……どう見る？

三一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

彼女は、まだバウマフ家の真のおそろしさを知らん

そう遠くない未来

子狸は第七の属性に目覚めるだろう

そのときに思い知ることになる

バウマフの血がもたらす真の恐怖をな……

三二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

お前らが適当なことを言っている一方その頃……

子狸「はあはあ……」

ゴールド「くっ……くっ」

ノーマル「ぬっ……！」

シルバー「も、もっ……」

「っり……っり……」

勇者「……」

妖精「……」

三種のジョーと子狸は
船底部に設置されている歯車を
延々と回し続けていた……

大きな歯車だ
横倒しになっていて
手押し用の棒が等間隔に十二本ついている

子狸「ま、まぶしい……」

ノーマル「と、扉を……閉めてくれ」

懇願する子狸とノーマルジョーを
アイアンが一喝した

アイアン「甘ったれるな！　グズどもが！」

壁に吊るされた鞭を手にとって
ぴしゃりと床を叩く

アイアン「ペースが落ちてるぞ！　もうバテたか？　根性なしどもめ！」

つかつかと子狸に歩み寄り
耳元で高圧的に叫ぶ

アイアン「喜べ！　お前の体たらくを淑女たちが見てくれるぞ。嬉しいか」

子狸「サー！　イエッサー！」

アイアン「あ？　聞こえんな」

子狸「サー！　イエッサー！」

アイアン「……よし。続ける！」

つかつかと戻って行ったアイアンジョーが
何事もなかったかのように勇者さんに言う

アイアン「ここが動力室だ。位置的には船底部にあたる」

勇者「……ひどく人力に見えるのだけれど」

アイアン「素人はたいていそう言う」

想像を絶するほど人力なのだ

子狸が強制労働に駆り出されているわけだが
勇者さんは気にも留めなかった

勇者「どういう原理になってるの？」

アイアン「原理か……そうだな……」

ジョーは言いよんだ

アイアン「説明しても、はたして理解できるかどうか……」

ジェット・ブルー号は

海上を進むという観点で見れば

おそらく究極と言えるだろうシステムを採用している

迷ったすえにジョーは言った

子狸たちが回している歯車を指差し

アイアン「……あれは床下の歯車と連動していて、さらに床下では
大きささまざまな歯車が回転する仕組みになっている」

そう言って闇魔法で

図解による注釈を交えて行く

アイアン「それらは、やがてカーブして外輪とつながる。そこから、
こう……」

勇者「カーブ……？ その矢印は……いったい何のつもりなの？」

アイアン「セパレードだ」

勇者「セパ……なに？」

聞き慣れない単語に

勇者さんが疑問符を浮かべる

ジョーは繰り返した

アイアン「セパレードだ」

勇者「……続けて」

アイアン「おう。外輪から発生したセパレードは、こう……海流と反応してフレイミングする」

勇者「ふれいみんぐ」

アイアン「うむ。フレイミングしたセパレードは、……まあ細かい工程は省くが……推力となって蓄えられる」

勇者「……」

アイアン「……」

妖精「……え？ 終わり？」

アイアン「うん」

いや、うんじゃなくて

三三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おい。強引すぎる

三四、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

なぜ省いた

三五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

セパレードとやらに

いったい何があったんだよ

三六、管理人だよ

なるほど、そういう仕組みになっていたのか……

三七、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

子狸さん……？

三八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

「……か!？」

おれ「トリコロールが甘いぞ!」

勇者「なにそれ」

おれ「ああ、すまん。つい、な。つまりだ……この船は歯車を回して推力を蓄える仕組みになっている。そして、この一連の作業をトリコロールと呼ぶのだ。覚えておくといい」

勇者「そうなの……」

おれ「うん」

勇者「……」

おれ「……」

妖精「……」

勇者「セパレードというのは……」

おれ「え？ ああ、うん。セパレードね」

勇者「……具体的に何なの？」

おれ「トリコロールが甘いと言っている！ ええいつ代われ!」

子狸さん、あとを頼みます

三九、管理人だよ

うん？ うん

おれ「おはよう、二人とも。あれあれ？ 今日も可愛いコンビパツクだね。わくわくが止まらねえ」

妖精「息の根を止めてやるっか」

勇者「おはよう。……セパレードというのは……」

おれ「え？ ああ、うん。基本だね」

勇者「……そうね」

おっと、こっしちやいられない

おれ「そこ！ トリコッ……トリコロ？ トリコッ……コロネ？
うん。チョココロネが甘いぞ！」

アイアン「コロネは甘いね」

ノーマル「甘いね」

「おれたちの船出」parts3（後書き）

注釈

・セパレード

トリコロールによって発生するエネルギー。

・フレイミング

発生したセパレードが海流と反応して起きる現象。

・トリコロール

セパレードがフレイミングすること。一連の作業を指して言う。
なお、コロネは甘い。

「おれたちの船出」 part 4

四〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

子狸「………？」

アイアンジョーから託された鞭に視線を落として
不意に沈黙する子狸
なにか脳裏をよぎるものがあつたらしい

その様子を観察していた勇者さんが
子狸に声を掛ける

勇者「ついてきなさい」

返事を待たずに歩き出した勇者さんに

子狸「………！」

子狸は何かを察したように表情を引きしめた
が、とくに意味のないリアクションだったらしい

子狸「シュークリーム！」

鞭で床を叩こうとして失敗した

シルバー「甘ければいいって問題でもねーよー！」

ゴールド「原形！ 原型とどめてー！」

子狸「ふざけるな！」

アイアン「キレた!？」

ノーマル「叩けてねーし！」

チツと舌打ちした子狸が
腰を落として

ゆっくりと両腕を上げる

青いひと直伝の猛虎の構えだ

子狸「ごたくはいい！ 掛かってこい！」

叩いて欲しそうな頭を

引き返してきた勇者さんが叩いた

子狸「トリコロール！」

アイアン「戻った！ 奇跡だ！」

勇者「……どうしてついてこないの？」

じろりとねめつける勇者さんに

子狸は叩かれた頭をさすりながら言う

子狸「見えるひとに言ってるのかと思って……」

勇者「……いるの？」

おれ「うそだろ……?」

警戒して互いの死角をフォローし合う勇者さんとおれを
子狸は物悲しそうに見つめる

子狸「いないよ?」

おれ「一瞬で矛盾しただろ」

勇者「……………」

勇者さんが無言で子狸の頬をつねる

トリコロールし続けるジョーたちを一瞥し

勇者「借りるわね」

骸骨ズ「どうぞどうぞ」

四一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸を連れて

勇者さんが船内の廊下を歩く

羽のひとは定位置の子狸の肩の上だ

……じつは朝から

子狸のテンションがおかしい

いまも弾むような足取りで
鼻歌を口ずさんでいる

子狸「〜」

妖精「……なんの歌ですか、それ？」

調子外れの歌は聞くに耐えない
少しでも時間を稼ぐために
羽のひとが嫌々ながら問いかけた

子狸はきょとんとして当然のように言う

子狸「え？ リンのテーマソングだけど……」

妖精「なに勝手にこさえてんの？」

子狸「……じつは完成したらプレゼントしようと思ってて」

妖精「！」

照れ臭そうにはにかむ子狸に
羽のひとは目を丸くした

妖精「そ、そうか……」

何とも言えない微妙な沈黙が流れる

先に立って歩いている勇者さんが
ちらりと振り返って言う

勇者「？ リン？」

妖精「はい!？」

勇者「昨日は聞きそびれてしまったけど……」

すぐに正面に視線を戻して続ける

勇者「つの付きについていた妖精……ユーリカ・ベルと言ったわね。彼女はどいう子なの？」

妖精「ユーリカは……優秀な子です。あ、ベルというのは……」

勇者「氏族名……で合ってる？ 本に書いてあったけど、それが正しいとは限らないものね」

妖精「はい、合ってます。わたしたち妖精には三人の女王がいて、三つの氏族に分かれます。わたしとユーリカは、同じ氏族なので……」

子狸「……おれは？」

妖精「黙ってる」

子狸「はい」

妖精「あの子は……次代の女王候補です。わたしは落ちこぼれですから……そんなわたしにも優しくしてくれた……だれよりも女王の資質に満ちあふれていたのに……わたしには精霊の考えていること

「がわかりません……」

勇者「……魔軍元帥は宝剣を鍵と呼んでいたわ。心当たりは？」

妖精「いえ……もしかしたら女王は知っているのかもしれませんが、でも千年かかったと言っていましたし、情報源は魔物たちなのかも」

勇者「そうね。精霊が王種の庇護下にあるというのなら、彼らの間にはきつと接点がある筈。王種が魔王軍から距離を置いているのも、それが原因なのかもしれない」

じゃあ、そういうことで

四二、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

ふむ……

魔王軍は精霊を利用しようとしていて
おれたちは精霊を守ろうとしている

そういうことか？

四三、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

いや……

精霊の宝剣を、だな

宝剣の正体を鍵ということにするなら

おれたちと鍵に何らかの関連性がないとおかしい

鍵の管理を精霊に託したから
その代償として精霊の守護をしている……というのはどうだ？

四四、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

その場合、おれたちは何で人間たちの味方をしてるんだ？

魔王軍の力を削ぐためというのは通らないぞ
設定上、おれたちは単独で魔王軍を滅ぼせる

四五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

光の精霊……だろうな

光の精霊は人間の味方をしていることになっている
ところが火の精霊は魔物側についた

つまり今回の旅シリーズは精霊の代理戦争ということになるな

四六、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

だが、光の精霊には守護者がいないぞ

だから魔物たちには見つけれなかった……

土の精霊は……ああ、そうか

おれだけ仲間外れなのか……

四七、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

おれは中立派ってことでいいんじゃないか？
水の精霊は適当な感じだったし

火の精霊も、いちおうは中立派なんだけど
今回は試練を突破した魔軍 元帥に宝剣を授けたってことで

火の宝剣は、どちらに転んでもおかしくないから
魔軍 元帥が先手を打って回収したってんなら
筋も通る気がする

四八、海底洞窟在住のたらならない不定形生物さん

じゃあ、そういうことで

四九、空中庭園在住のたらならない不定形生物さん

うむ

五〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

かくして、お前らの思いつきで
精霊の代理戦争という
わけのわからないものに身を投じることになった勇者さん

子狸の身を案じる優しい一面もある

勇者「あなたは本当にいつも元気ね。同じ人間とは思えないわ」

子狸「おいおい、誉めても何も出ないぜ？」

おれ「おい。暗に見下されてる」

子狸「それも悪くないさ」

子狸の変態がとどまるところを知らない

だが、遠回しではあるが

勇者さんが子狸の健康管理に言及したのははじめてのことだ

おい。その青いの

禍々しい闘気を発散するな

子狸がびくつとしたぞ

五一、管理人だよ

な、なんだ、このプレッシャーは？

五二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

安心しろ

子狸、お前はおれが守る

最悪でも十六手で積みだ

五三、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

どんだけ最悪の状況を想定してるんだよ

勇者さんの態度にきなくさいものを感じとった青いのが
一人で勝手に盛り上がって戦闘モードに移行している

くっ、このプレッシャー……！

このおれが気圧されるだど？

背後で嘔き上がる闘気に

勇者さんは気付いていない

自身の気配を消せるということとは

他者の気配に対して鈍感になるということでもある

子狸「……胸がどきどきする」

勇者「胸が？ 無理もないかもしれないわね。だいぶきつそつだつ
たもの」

子狸「いや……お嬢はとんだ恋泥棒だよなってこと」

おい。どむくむくにまぎれて告白してんじゃねえ

勇者「？ どういうこと？」

勇者さんには伝わっていないようである

子狸「いいぞ。いい感じだ。力がみなぎってくる……」

愛はひとを強くするというのか

青いのに呼応した子狸が

前足を固く握りしめる

勇者「……………」

勇者さんは無視することに決めたようである

勇者「ついたわ。入って」

辿りついたのは倉庫であった

勇者さんに促されて

子狸が頷く

子狸「わかった。おれは……だれと戦えばいい？」

勇者「…………自分自身じゃないかしら」

すでに子狸の頭の中では

別のストーリーが進んでいるようだ

勇者「それ、預かるわ」

子狸「頼む」

ふつうに持ち出してきた鞭を
勇者さんに手渡す子狸

激戦の予感に身を震わせながら
のこのこと倉庫の中に入っていく

内部は真っ暗だ

子狸「リン、下がってる。グノ！」

前足を突き出した子狸が
遮光魔法で室内の暗闇を沈める

子狸「アルダ・タク！ 沈め！」

とつさに発光魔法ではなく遮光魔法に頼るあたり
このポンポコは病んでいるとしか思えない

はたして子狸を待ち受けていたのは

子狸「!？」

ぎいぎいと揺れる

木馬だった

背中にあたる部分が突起していて
座ると痛そうだ

見慣れない遊具だった

しいていうなら……

三角木馬だろうか

五四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸の野生の勘が

生存本能に火をつけた

三角木馬を見るなり

身をひるがえして脱走を図る

勇者「リン」

妖精「はい」

羽のひとの念動力で

あえなく捕獲された子狸に

勇者さんが尋ねる

勇者「どうして逃げようとしたの？」

鞭で床を叩こうとして失敗する

手首のスナップが甘い

子狸と同じミスを繰り返していた

何故と問われて

子狸は力なく首を左右に振った

子狸「……わからない。ただ、そうしなければならぬ気がした……」

勇者「怖がることないの。これは訓練なんだから」

羽のひとに命じて

縄で縛った子狸を

勇者さんは天井から吊るすように言った

子狸は腑に落ちない様子だった

子狸「なんで縛るの？」

勇者「暴れたら危ないからよ」

子狸「なんで吊るすの？」

勇者「命綱みたいなものね」

子狸「なんで……そのとんがったのをおれの下に持ってくるの？」

勇者「あなたには、航海中に馬に乗れるようになってもらいます」

そう告げて、勇者さんはふたたび鞭を振るった

今度は失敗しなかった

ぴしゃりと床を叩く音が室内に響いた

彼女は続けた

勇者「まずは身体を慣れさせること。そのためには……。船内を案内してもらっているときに見つけたの。悪くない案でしょ？」

子狸「そう、だろうか……？」

子狸は半信半疑だ

二番目の街で

体力のなさを露呈した勇者さんに

子狸は保護者ぶって小言をこぼしてきた

子狸「また本ばかり読んで！」

だの

子狸「めっ！ 野菜もちゃんと食べなさい！」

だのと……お前は勇者さんの何なんだといった内容である

復讐のときがやって来たのだ

五五、王国在住の現実を生きる小人さん

一方その頃……

おれ「……………」

帝国「……………」

連合」……………」

メイド「……………そう、残念だわ。口で言ってもわからないなら、身体に訊くしかないわね」

五六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

魔軍 元帥、復活の報は

またたく間に世界中にひろまるだろう

かつて勇者と魔王の間で結ばれた約束は
人間たちに明るい未来の訪れを予感させた

それが幻想でしかないことを
多くの人間は思い知ることになる

魔物たちの“平和的な交渉”を
人類は決して断れないからだ

それでも希望を捨てきれない者たちは
王都襲撃を何かの間違いだと主張した

だが、王都襲撃の指揮をとったのが
復活した魔軍 元帥だったとしたなら

騎士団は大義名分を手に入れることになる

変革のときが訪れようとしていた

いま、子狸の旅が

ふたたびはじまる……

「勇者さんに足りないのは必殺技だと思う」part 1

一、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

勇者さんに足りないのは何か

いろいろと考えたんだけど……

必殺技だと思うんだよね

どう思う？ お前ら？

二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

お前はおれか

あ、おれだわ……

三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

気が合うな

おれも同じことを考えてた

四、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

子狸が絡むとぜんぶ持ってかれるからな

たまには勇者さんにもスポットを当ててあげたい

五、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

また下らないことを……

なんだよ、必殺技って

そんなもんいらんだろ

六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

紫電三連破あ……

七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

別名、鬼殺しである

八、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

この骨、つぎいなあ……

言っとくけど、それ子狸に教えたら

つまさきから順にすりおろしますよ？

んで、びんづめして店頭に並べる

おれのイメージが損なわれるからな

九、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

えっ……いまさら？

一〇、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

倉庫にやすりって置いてある？

一一、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ないです

おれたちには必要ありませんから、ええ

一二、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

そうか、あるのか

で？ 必殺技がどうしたって？

一三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

うん

いや、真面目な話

勇者さんの剣術はお粗末すぎて見るに耐えない

なまじ正確だから剣筋が読みやすいし
非力なのは、まあ仕方ないとしても
聖 剣をぜんぜん使いこなせてない

歴代勇者の足元にも及ばないじゃないか
たいていの勇者は聖 剣があれば
レベル4のひとたちと真っ向勝負できたのに……

なんなの、あの水鉄砲

一四、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

前回までの旅シリーズだと

聖 剣が登場するのは終盤だったからな

レベル4ないしレベル3のひとたちを倒すために
っっていう明確な目標があった

勇者さんの場合は

人質にとられた領民を無事に取り戻すっていう目的で

聖 剣を使ったのが最初だから

固定観念に縛られてるんじゃないか？

一五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いや、おれがブロックしてるだけ

一六、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

ちよっ……お前かよ！

あれから勇者さん

人目につかないところで練習してるんだぞ！

港町のときみたいに上手く行かないから

首をひねったりしてさあ！

一七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

港町のあれはサービスだよ

ことイメージに関して

勇者さんは確かに非凡な才能を持つてるけど

そこは剣士の限界なんだろうな

おれの高い要求を満たすほどじゃない

まあ、イメージを掴むきっかけ程度にはなったんじゃねーの？

勇者さんは記憶力がいいし

退魔性に関する知識もあるから

いつか出来るようになるでしょ

一八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おう。光るものはあるよな

スイッチよりも先に
ジャンプを使えるようになるとは思わなかった

一九、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

勇者カッターのことか？

あれ、なんか変じゃなかった？

標的指定が混ざると

あんなふうになるもんなの？

二〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

標的指定は

対象が違うだけで

伝播魔法と実質的に同じものだからな

感染条件を無制限にしたほうが

魔法の程度としては低いつていうのを

人間たちは理解してくれなかった

結果的に開放レベル3になりやすいから

治癒魔法で回復するのに手間が掛かるってのもある

二一、墓地在住の今ときめく骸骨さん（出張中

あれは、おれたちの手柄が大きいよな

一一一、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

いや、おれだろ

なんなら再生しようか？

勇者「あなたを見ていたほうが、きつとうまく行く……」

ほら。はっきり言ってる

彼女にとっておれは希望の象徴なんだよ

まったく、困った子猫ちゃんだぜ

一一三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

いやいや、あれは子狸を運搬してたときのイメージを基にしている
っただけですよ

あと同じ宝剣使いの子狸バスターと一戦交えてたのが大きい

勇者カッターとは少し違うからな

名前どうする？

便利でしょ、名前あったほうが

一一四、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

霊の字は欲しいな

二五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

さすがおれ

よくわかってる

霊……霊……死霊？

二六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

死霊……

死霊……咆哮？

二七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

咆哮……魔哭？

死霊魔哭斬

二八、管理人だよ

それだ

二九、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

まがまがしいだろ！

お前らのネーミングセンスが死霊魔哭斬だよ！

で、子狸はどこで何してんの？

例によって例のごとく部屋にいないけど

三〇、管理人だよ

骨のひ

三一、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ジョーと呼べと言ったはず

三二、管理人だよ

うん？ うん

えっと、骨の

三三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

ジョーです

三四、管理人だよ

おう

骨のひ

三五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

だからジヨーと呼べと

とりあえず言ってみような

お前「ジヨー」

さん、はい

三六、管理人だよ

おう。言っただよ

三七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

確認した

子狸「ジヨー」

黒雲号「……………」

豆芝「……………」

お馬さんのお世話をしている子狸

その背後……

物陰からジヨーが現れる

ノーマル「よく気がついたな。褒めてやる」

振り返った子狸が

鋭い視線をジヨーに向ける

子狸「お前が……ジヨーだと？」

ノーマル「かつてはそう名乗っていたこともある……………」

すらりとこん棒を抜き放ったジヨーが

こん棒の先端をぴたりと子狸に突きつける

ノーマル「あの子の幼子が、大きくなったものだな」

子狸「お前が……………」

おい。なんかはじまったぞ

三八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

子狸はおれが押さえる！

行け！

三九、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

すまん！ 頼む！

魔王討伐の旅シリーズ

子狸編

勇者さんに足りないのは

必殺技だと思う

四〇、住所不定のどこにでもいるようなてふてぶさん

あのままお魚さんたちについばまれて

この世から消滅すれば良かったのに……

「勇者さんに足りないのは必殺技だと思う」 part 1 (後書き)

注釈

・死霊魔哭斬

勇者さんの必殺技その一。

現在の聖 剣を構成する要素となっている、標的指定と変化魔法を混ぜ合わせることで中距離圏内への斬撃を可能としたもの。

飛翔するてふてふさんをイメージの基にし、ライオンさんの翼を切り飛ばした。

当人に無断で命名され、当人に無断で管理人が認可した。

振り下ろした聖 剣から光刃を飛ばす「勇者カッター」の変形であり、従来のものと比べて射程が長い。

虚空に連続して光が灯るといふ演出でいったんは無害を装っておきながら、中継を終えた刃先が対象に突如として牙を剥くという、らしい魔法に仕上がっている。

開眼時の一撃は偶発的なものだったらしく、現段階においては自在に操れるというわけではないようだ。

「勇者さんに足りないのは必殺技だと思っ」 part 2

四一、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

雷鳴とどろく分厚い暗雲に閉ざされた

まばらに水晶が屹立する

結晶の砂漠

旅路の果てを予感させる光景は

怪しいまでに美しく

生命力をくしけずられるような

不吉な儚さがあった

冥府に通じるという地下迷宮を

踏破したもののだけが臨むことを許される

最果ての地

結晶の海を乗り越えた先に

ようやく辿り着けるのが

魔王軍の本拠地……

魔都だ

無駄に図体のでかい連中が出入りするため

都市全体が一つの城になっていて

はったりをきかせるために

無駄に尖塔が乱立している

城内を走る

無意味に長い廊下が特徴的だ

その廊下を

側近のジョー二人を従えた子狸バスターが揺るぎのない足取りで進んでいた

鋼の具足と石材が触れ合うたびに新調したマントが後ろになびく

庭園「……グラ・ウルーはどうだ？」

骸骨A「一向に首を縦に振りません」

庭園「そうか。意固地なやつだ……多少の譲歩も視野に入れておくべきかもしれない」

骸骨B「ですが……」

庭園「わかっている。やつを解き放つわけには行かん。少なくとも、いまはまだ」

やがて三人は謁見の間へとつながる大きな門の前に立った

バスターが片腕を差し伸べ

かすかに指を蠢かせると

荘厳な造りの門扉が事もなげに開いた

謁見の間には

ところ狭しとジョーたちが居並んでいた

魔王軍の精鋭たちだ

彼らは魔軍 元帥の帰還を歓迎し
一斉に中央に向き直ると
こん棒を手にとつて掲げた
側近の二人もそれに加わる

こん棒のアーチを潜つて
バスターが悠々と歩を進める

壇上に設けられた優美なこしらえの玉座は
人間がひとり腰かけるのがやつとの
小さいという、ただそれだけのことが
際どく異彩を放っていた

空位の玉座

その手前でひざまずいたバスターが

一瞬、凧の海のような

おだやかな気配をまとつた

まるで一枚の

絵画を見ているようだった

立ち上がったバスターが

玉座の横に立つ

マントをひるがえして振り返つた魔軍 元帥を
居住まいを正したジョーたちが見上げる

固唾をのんで見守る精鋭たちに

バスターは勢いよく片腕を突き出して叫んだ

庭園「ときは来た！」

その手に顕現した魔火の剣に
絢爛なる宝剣のきらめきに
ジヨ―たちがどよめいた

バスターが続ける

庭園「長年の雌伏を終え、いま！ 人間どもを根絶やしにし！ 同胞たちよ！ われわれが地上に君臨するときがやって来たのだ！」

宝剣の切っ先を跳ね上げると
空間に火線が走り
天井を、その先にある尖塔を
斜めに寸断した

崩れ落ちた尖塔が
地表に衝突して瓦礫の山と化した

鳴り止まない地響きの中
ジヨ―たちの歓声が
謁見の間を席卷した……

骸骨ズ「魔王軍に栄光あれ！」

骸骨ズ「魔軍 元帥ばんざい！」

骸骨ズ「開運グッズ！ 開運グッズ！」

骸骨ズ「ラッキーカラー！ ラッキーカラー！」

唱和するジョーたちを

魔軍 元帥が手拍子で制した

庭園「はいはい。お前ら、少しおちつけ。ちなみに……おれの本日のラッキーカラーは……白です」

喧騒がぴたりと止んだ

ジョーたちが気まずげに視線を交わす

やがて彼らは、ぼつりと言った

骸骨ズ「だ、だめじゃん……」

四二、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

ちよっ

おれんち……

四三、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

後半ぐだぐだじゃねーか

なぜベストを尽くさないのか

ときに、お前ら

わざわざ魔都に集合して

なにやってんの？

果てしなく無意味だろ

四四、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

訊くな

そっとしておいてくれ

ああ、死にてえ……

四五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おれも死にたい

分身の所業に

おれのハートがグラ・ウルー

四六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

もう意味わからん

いや、まあ……罰ゲームらしいよ？

発案は歩くひと

人前でも何でもないのに魔物るっという

四七、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

孤独な作業になるな……

四八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おれたちも巻き込まれてるのは何故なんだろう

この前、おやつを盗み食いしたの

まだ根に持つてるのかな……？

四九、住所不定のどこにでもいるようなてふてふ

なぜ食べた

五〇、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

チャレンジ精神を忘れちゃだめだと思って……

ええと……とりあえず魔都のみなさんはスルーしていいの？

空のひと？ だいじょうぶ？

五一、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

人間たちの気持ちが少しわかった

害虫は駆除せねばならない……
可及的、速やかにだ

五二、空中庭園在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

来るか、ヒュペスよ……

五三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

決着をつけよう、ポーラ
いや……マリアンよ！

五四、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

魔軍 元帥と魔界産のひよこが
互いに譲れないものを賭けてぶつかり合った一方その頃……

ジェット・フェアリー号は
順調に航海を続けていた

港町を発って一週間が経つ

くだんの港町襲撃事件は
二年前の王都襲撃を無闇に連想させるといふことで

公式に“タリアの子の奇跡”という名目で発表された

巧妙に情報操作された結果

勇者さんの功績はだいぶ控えめに

そして他人の子供にスライドされた

いつの時代も

勇者の誕生は唐突で

そしてドラマチックに演出される

勇者に敗北は許されないからだ

どれだけ勇敢な人間も

戦うのは怖いから

敵前逃亡した勇者もいる

それでも歯を食いしばって

踏みとどまるのが旅シリーズ屈指の名場面なのだが

いつだって人間たちは勇者に完璧を求める

今回の旅シリーズの場合はどうか？

たぶん勇者さんは

人間たちが描く理想像に

限りなく近い

勇者「時間がもったいないわ。先に朝食にしましょう」

でも一向に姿を現さない従者を待つほど

人間が出来てはいなかった

おれ「そうですねっ」

もちろんおれは反対したが

彼女の決定を覆すことはできなかった

許世子狸はちみつづめえ……

五五、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

はちみつを与えると

羽のひとがおとなしくなることは

すでに調査済みだ

この場を借りて言わせてもらうが

歩くのに棒術を仕込んだのはおれだ

つまり勇者さんは

おれの弟子ということになる

五六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

そうか？

百歩譲って歩くひとがお前の弟子だとしても

勇者さんは技を盗んだだけだし

かなり苦しいような……

五七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

しかしだ

いいか、ここからが肝要だ……

歩くのは基礎スペックが高すぎて

おれの技を完全に受け継いだとは言えん

というか

対人戦に限定するなら

まっすぐ行って、まっすぐぶっ飛ばしたほうが有効な気がしてならない

五八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

弱体化させてどうする

だめ師匠だな

五九、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

叶うことなら

子狸に奥義という奥義を伝授してやりたかったが
バウマフにこん棒という言葉もある

こん棒を片手に街中を亜人走りして

署に連行されるのは火を見るよりあきらかだった……

六〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸さんのことばかりにしてんのか？

「ごますり棒と勘違いする程度の知恵はあるわ

子狸「おれナツクル！」

ノーマル「おれシュナイダー！」

六一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

それもどうかなあ……

以前、ために天井からバナナを吊り下げて

踏み台とこん棒を与えたら

迷わずこん棒に行っただから

なんか怖くなつて途中で実験を中止したよな

あのときは、あんまり深く考えなかつたけど

じつはこん棒に対する憧れがあるんじゃないか？

ふだんは興味ないふりしてるけど

六二、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうかなあ……

それにしても52年モデルの扱いがぞんざいだったような……

港町で魔属性を使えることがバレてしまっただけ以来
子狸は調子に乗る一方だ

とんぼを切って着地したジョーを
逃すまいと追い詰める

右手を袈裟懸けに振り下ろすと
その軌跡を辿るように紫電の束が尾が引いた

船内の廊下は、さして広くない

壁に縫いとめられたこん棒を
とつさに手放して回避したため
ジョーは無手だ

決まるか？

いや、それほど甘くはない

ノーマル「デイレイ！」

とつさに盾魔法の階段を設けたジョーが
空中を斜めに駆け上がる

壁に突き刺さっているこん棒を回収し

子狸の背後に回りこんだ

子狸「チク！ タク！」

素早く反応した子狸が

勘に任せて右腕を振るうと

紫電とこん棒が激しく噛み合った

絡み合う両者が

互いに共鳴し合い

周囲に電撃を撒き散らす

弾き飛ばされた子狸が

仰け反ったまま

人差し指を正面に突きつけた

子狸「デイグ！」

対するジョーはしたたかだ

いったんは退いて

圧縮弾を回避したのち

打ち寄せる波のように

一転して攻勢へと転じる

子狸は聖 剣をリスクトした紫電で迎撃を試みるも

激しくステップを刻んだジョーが

急激に進路を変更して子狸の側面に回りこむ

子狸「消えっ……！？」

脇を通り抜けざまの胴打ち一本だ
ぴたりとこん棒を寸止めしたジョーが言う

ノーマル「もう一度だ」

尻もちをついた子狸に
ジョーは冷酷に告げる

ノーマル「立て。お前には、まだ教えていないことがたくさんある」

ふ、と肩の力が抜けた

ノーマル「お前は彼女とは違う。才能というものはな……天稟をしるしに通れる近道のようなものだ。目指すところが同じなら、そのぶん長い……回り道をしよう。それでいい。彼女が見落とした何かを、お前は拾える」

そう言っつて片手を差し伸べる

真摯に頷いた子狸が

照れ臭そうにはにかんで

差し伸べられた手を掴んだ

子狸「ポロリも……あるかな？」

ノーマル「台無しだよ」

六三、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

ノーマルジョーがちょっといい話をしている一方その頃……

アイアン「……んっ、こほん」

食堂に入ってきたアイアンが
壁に背中を預けた気取ったポーズで
わざとらしく咳払いをした

勇者「……?」

お食事中の勇者さんが
ちらりと目を遣ると

その視線に気がついたジョーは
おもむろにこん棒の手入れをはじめた

なにそのアピール……

「勇者さんに足りないのは必殺技だと思っ」 part 2 (後書き)

注釈

・亜人走り

魔物たちに伝わる伝統的な走法。

短いストライドから、ぽんぽんと踊るように跳ね回る。

軽やかな見た目に反して、著しく消耗する上に隙が大きい。

空中で両足を揃える、ひねりを加える、ぴんと足を伸ばす、苦しい姿勢でバランスを維持する等のアクションを交えることで、難易度に応じた芸術点がつく。

全体を通して極めて無意味であるため、人間たちにはとうてい真似ができないとされる。

魔物たちの誇りを体現した走法、それが亜人走りだ。

「勇者さんに足りないのは必殺技だと思う」part3（前書き）

注釈

・バウマフにこん棒

魔物ことわざの一つ。

能力に対して不釣り合いであるにも拘らず、しつくりと来るさま。似合いすぎていて、空恐ろしくなるといふ意味で用いられる。

魔物たちがこん棒に傾倒しはじめたのは、王国の建国より数えて五十年前後とされている。

その当時、人間の戦士たちは剣や槍で武装するのが一般的だった。しかし魔物たちが人間の武具を奪って利用しているという誤った認識から、大部分の貧村では原始的なこん棒を用いて自衛しているという誤った認識が広まった。

このことから、（当時まだ数多く存在した）剣士たちの間で「お前にはこん棒がお似合いだ」という罵り文句が生まれた。

それを耳にした魔物たちが、まだ色濃く残る人間たちの差別的な物の見方を嘆いて、「いや、バウマフ家には敵わない」「バウマフ家ほどこん棒が似合う人間はいない」「しよせん素人の甘い判断」とコメントしたのが起こりとされる。

じっさいに持たせてみると、まるでそれが前世からの定めであるかのように似合うため、バウマフ家の人間はこん棒の所持を魔物たちから固く禁じられている。

「勇者さんに足りないのは必殺技だと思っ」part3

四六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

よく考えたら

おれに必殺技なんてなかった

こんなおれに

誰かを教え導くことなんて出来るのかよ……？

四七、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

帰れ

四八、管理人だよ

おれシュナイダーは？

四九、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

いえ、あれ単なるバツク宙ですし……

五〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸「おれシュナイダー！」

お前がやるのかよ

まんまとノーマルジョーを味方に引き入れた子狸は
お腹が空いたからなのか何なのか
エサを求めて？ 食堂へと向かって廊下を駆けていた

そのとき

突如として飛来したこん棒が子狸に襲いかかる

シュナイダーして回避する子狸を
どう見ても頭から着地する感じだったので
とっさにノーマルジョーが補助した

ノーマル「ぐあっ………！」

ノーマルの頭蓋にこん棒が直撃する

子狸「！ ジョー！」

吹き飛んだジョーに

子狸が駆け寄ろうとする

子狸「リバイバル………しない？ 待ってて、いま………！」

52年モデルはとくべつなこん棒だ

壁際で震える片腕を差し出したジョーが

子狸には助けを求めているように見えたのかもしれない

だが、そうではなかった

ノーマル「デイ……レイ！」

??「エリア！」

壁に突き刺さったこん棒が

あるじの手を離れたはずのそれが

ひとりでに浮き上がって

ふたたび子狸に牙を剥いた

子狸「なっ!？」

直前にノーマルが力場を展開していなければ

直撃は避けられなかっただろう

盾魔法に弾かれたこん棒が

風切り音を立ててあるじの手元に戻る

??「ノーマルはしょせん我らの中で最弱のジョーに過ぎない……」

船内の照明に照らされて

ねずみ色のボデイが

にぶく輝いた

廊下の曲がり角から姿を現したシルバージョーが

第二の刺客として子狸の行く手を遮る

シルバーク来い。ステージ2だ」

子狸「お前も……ジヨーだと言っのか……?」

シルバー「そいつに訊けばわかる。……もつとも、おれを倒せればの話だな」

子狸「くっ……!」

シルバー「来ないのか？ ならば、こちらから行くぞ！ チク・タク・レゴ・グノ！」

子狸「バリエ・ラルドおー!」

うっかり戦場と化した船内で
攻性魔法の華が咲く……

五一、住所不定のどこにでもいるようになってふさん

あほどもが船内で暴れているようだが
ジェット・フェアリー号の船体は安定している

勇者「……………（もぐもぐ）」

ここ一週間ほど

我らが勇者一行は幽霊船の備蓄で食いつないできた

ジヨーたちの証言によれば

難破船を救った際に感謝のしるしとして贈呈されたものらしい

いまいち信憑性に欠ける話だったが
事実、幽霊船の最たる目的は海をきれいに保つことである

乾燥した固いパンを

勇者さんは文句ひとつ言わず
スープにひたして食べている

彼女が好き嫌いを言うのは
子狸の手料理だけだ

たぶん改善の余地があるからだろう

食堂の片隅で

こん棒の素振りをはじめたアイアンジョーに関しても
一瞥しただけで放置している

もうお前、部屋に帰れよ

勇者さんがお前に師事するなんて
ありえないから

五二、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

いや、思いついたぞ

勇者さんが素振りをしているところに
颯爽と現れるおれ

おれ「なつてないな」

っていうのは、どう？

これイケるでしょ

五三、海底洞窟在住のところにたらない不定形生物さん

おお、それいいな

イケるよ、うん。イケる

五四、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

適当なことを言うな

勇者さんは素振りなんてしない

五五、空中庭園在住のところにたらない不定形生物さん

アリア家の剣術は

自分の身体を完全にコントロールすることからはじまるからな……

完成形というものがなくて

他者の技を盗むのが主流なんだよ

他の流派を完璧に真似るのは無理だけどね

ふつう剣術っていうのは

奥義のための身体作りを第一義に置いてるし
そもそも人前で奥義を披露する剣士はいない

たまに御前試合とかやってるけど
あんなのままごとだよ

たぶん宰相あたりが
夜なべして脚本を書いてるんだろう

五六、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

そうか、だったら……

！ いかん！ 子狸が近付いてるぞ！

五七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

子狸「アバドン！」

食堂の壁を突き破って

シルバーが室内に転がり込んできた

ノーマルに肩を貸している子狸が
息を切らせながら

壁に穿たれた大穴を潜って現れる

仰向けに倒れたシルバーが

子狸を賞賛した

シルバー「見事だ……。一人ではなく二人……。これが、お前の出した答えか……」

子狸は頷いた

子狸「一人より二人……。でも三人なら、きつともっと……。たくさんものが見える」

そう言つて前足を差し伸べる子狸に

上体を起こしたシルバーが、わずかに逡巡した

シルバー「おれは……」

??「聞く耳を持つ必要はない」

ゴールドさんが入室しました

ゴールド「綺麗事だ。どれだけ口当たりの良い言葉で飾ろうと……。この世から争いがなくなることはない。子供でも知っていることだ」

子狸「だからじゃないか？ 少しずつでもいい。少しずつでも、そうじゃないって言える大人が増えれば……」

子狸が、反論を途中で切つてノーマルを見る

それから、視線をゴールドに戻した

子狸「……。きつと簡単なことなんだ。おれたちは何か見落としてるんじゃないのか？」

ゴールドの主張は一貫している

ゴールド「それが綺麗事だと言っている。同じものが欲しくて、その数が決まってるなら奪い合うしかない」

子狸「そうじゃない！」

子狸が吠えた

子狸「誰だって本当は願ってるはずだ！ お前だって！」

二人の距離は隔たっている

それでも子狸は前足を差し伸べた

子狸「一緒に……ビーチバレーしようぜ？」

ゴールド「ごめん、何の話？」

子狸「え？」

ノーマル「……え？」

子狸「うん？」

シルバー「え。ああ、うん……」

完食した勇者さんが
スプーンを置いた

勇者「ごちそうさま」

妖精「ごちそうさまでした」

食器を片付けはじめる羽のひとに

子狸が声をかける

子狸「あれ、おれのぶんは？」

妖精「いまこの瞬間になくなった」

席を立った勇者さんが

食堂の惨状を一瞥して

ジョーたちにてきぱきと指示を出す

勇者「あなたは壁の修復をなさい。あなたは船内を身回りして、異常があったら報告。……ああ、あと、それ。こん棒ね。全員没収します」

おれ「紫電三連破！」

妖精「おい」

おれの最後の抵抗もむなしく

おれたちのこん棒は

勇者さんの管理下で保管されることになった

このことがのちに

子狸さんの反乱事件に発展するとは

このときはまだ誰も知る由がなかったのである……

五八、管理人だよ

そ、そうだったのか……

五九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

やっぱりお前こん棒に憧れてるの？

六〇、管理人だよ

べっ、べつにそんなんじゃないよ！

六一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おい。それおれのフレーズだから

六二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おお、かまくらの。久しぶり

アリア家の攻略は済んだのか？

六三、かまくら在住のところにたらない不定形生物さん（出張中

いや。いろいろと試した結果……

大隊長が出陣する事態に発展した

六四、空中庭園在住のところにたらない不定形生物さん

君たち、ちょっと一回、集合してみようか

「勇者会議」 part 1

一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

お前から集まりましたか？

はい点呼

1

二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

2 いい

三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

3 んんっ

四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

真・3 んんっ

五、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

真とかねーから

4ね。おら、喧嘩すんなそこ〜

4。はい次〜

六、管理人だよ

真・よ〜ん

七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

絶対に言うと思ったよ、も〜

真でも4でもねーから〜

5ね、5。次〜

八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（主張中

6

九、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

やだ、クール……

7あああ

一〇、管理人なのじゃ

よかるう、ならば決闘だ

一一、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

なんか混ざった

別の河じゃねーのか？

8

一二、管理人なのじゃ

ふっ、お前か

相手にとって不足なしといったところだな……

一三、火山在住のごく平凡な火トカゲさん（出張中

聞けよひとの話

ちょっと現地に行ってくるわ

9

一四、管理人だよ

ぶれしあ〜ん

一五、管理人なのじゃ

どどりあ〜ん

！？ な、なにをするっ

お、お前は ！？

一四、管理人だよ

おじいちゃん！？

おじいちゃん！

8〜

一五、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中
重複してる上に戻ってる〜

10〜

一六、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

緑のひとグッジョブ）

11）

一七、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

そのまま隔離したって）

12）

一八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

多いよ〜多い多い〜

お前らのオリジナル野郎はどこ行ったの〜？

一九、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

いま忙しくて手が離せないんだと〜

二〇、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

家で、ろくろしてるよ〜

すごい集中力だ〜

二〇、空中庭園在住のところにたらない不定形生物さん

つまり下手人はやつか

逃げやがったな……

あと、羽のひとと歩くひと〜

なんで返事しないの〜？

ジョーたちは事情があるだろうからいいけども〜

二一、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

点呼とか意味あるの？

二二、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

無意味のひとことに尽きる

二三、空中庭園在住のところにたらない不定形生物さん

またこの子たちは！

めーだよ！

王都のんを見習いなさい！

恥ずかしくてもちやんとやっつてるでしょ！

しかも目立たないタイミングを狙い澄ました上で言ってるからね！

二四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ひとの内心を見透かしたかのように言うのはやめてくれませんか

も〜……いいから話を先に進めろよ！

いや、だいたい予想はついてる

人海戦術に打って出たら

騎士団が横槍を入れてきたんだな？

大隊長が動いたということは

山腹軍団はざっと十万と行ったところか

二五、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

億です

二六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

え？ なにが？

二七、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

億。数の単位

一万の一万倍

二八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ああ、単位の億ね

唐突すぎて一瞬なんのことがわからなかった

そうか……

ところで子狸なんだけど

二九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう。子狸な

その後、どうなの？

勇者さんの前で

発電魔法を使ったのはまずかったな

とはいえ、いずれ直面した問題ではある

お前らのことだから

うまく誤魔化してくれたんだろ？

三〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

前回の旅シリーズとの絡みになるのかねえ……

ああ、でも人間たちには

先代勇者のこと、正確には伝わってないんじゃないかなかった？

三一、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

そうだね

人間たちの歴史だと

邪神教徒と魔王がごっちゃになってて

最終決戦は勇者と魔王の一騎討ちだ

邪神教徒どこ行った

三二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

そう。だから、話がつながらないんだよ

安全上、子狸が邪神教徒の子孫ってことは隠しておきたい

史実の上でなら、勇者の末裔にあたる子狸が

魔属性を使ってもおかしくはないんだが……

そのへんは緑のひとに語ってもらったほうが

説得力あるだろ

三三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうだな

話のネタが出来るし

本人も喜ぶと思うよ

三四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

つまりは、誤魔化してる最中なんだよね

お前らが別の河でアリア家の攻略に躍起になってる間

おれたちの子狸さんが

馬術の習得に励んでたのは知ってる通りだ

これが偶然にも

じつくりと話し合う場に適してたもんだから

……まあ、ちょうどいい機会だと思っただんじやないか？

鞭の練習と同時並行で

いろいろとお話しましょうってことになったわけさ

三五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

うん。そうだね

子狸もなかなか強情だから

子狸「なんていうか……新しい」

そう簡単には口を割らないわけよ

勇者さんも負けてない

勇者「反省の色が見えないわね……。わたしに対して、何かと反動的なのは何故？」

子狸「好き嫌いは良くないと……」

勇者「わたしの命令を無視したのは？」

子狸「だって……怒らない？」

勇者「怒らないわ。言っでご覧なさい」

子狸「じゃあ。お嬢ってさ……好きなものばかり食べよつとするでしょ」

勇者さんにとって

この旅は戦いの連続だった

しかし子狸にとって

戦いは生活の合間に過ぎなかった

物の見方が

まったく違うのだ

勇者「……わたしが食べたいと言ってるのに、作ってくれないから

注文が同じになるんですよ」

子狸「逃げてって言うてるのに逃げてくれないし」

勇者「……怨霊種と戦ったときは逆のことを言ってたわ」

子狸「おれもね……むかしは食べられなかったんだよ、魔どんぐり」

勇者「話題を一つに絞りましょう。それがいいわ」

子狸との議論は無益だ

勇者さんは一つの真理を得た

一方、同席しているはずの羽のひとが

妙に大人しいと思ったら

妖精「しっ……！」

黒妖精さんとの再戦に備えて

コンビネーションブローに磨きをかけていた

妖精「大きな一発はいらない。基礎だ……」

ぶつぶつと独りごちている内容が

なんだか怖くて

誰一人として声をかけられなかった……

三五、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

なんだよ。構って欲しかったなら言えよ

照れ臭いから言わなかったけどさ……

お前ら、素材としては悪くないんだよな

いいサンドバックになるんじゃないかってさ……へへっ

三六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

なにを照れる要素があるというのか

ちっとも胸がときめかない

三七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

だれが好きこのんでサンドバックになどなるものか

子狸と一緒にしないで欲しい

三八、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

なんだよ！ むっっ

三九、管理人だよ

おれで良かったら

四〇、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸さんが男前すぎる……

「勇者会議」 part 2

四一、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん

これまでのあらすじ

アリア家に囚われた

鬼のひとたちを救出するべく

立ち上がったおれたちだったが

聖騎士の血統を受け継ぐアリア家は

人外のメイドさんが住まう魔窟であった

夜を徹した強行軍もむなしく

デスマイドの猛攻の前に倒れ伏すおれたち……

一時は諦めかけたおれたちを衝き動かしたのは
鬼のひとたちの声なき慟哭であった

友のため、土にまみれた誇りを取り戻すために
ふたたび立ち上がるおれたち

決意を新たに立ち向かうも

デスマイドを突破するのは困難と思われた……

まさにそのとき

おれB「諦めるのか？」

おれたちの元に現れたのは

一度は袂を分かった分身であった

おれB「勘違いするなよ。お前を許したわけじゃない。だから……貸しにしとくぜ」

おれC「このまま終わるつもりはないんだろう?」

おれD「おれたちのことを忘れてもらっちゃ困るぜ」

おれE「……ふん、おれは代表に従ったまでだ」

おれB「近隣の森から駆けつけてくれたメンバーだ。まだ増えるぜ」

おれF「行こう。お前は一人じゃない」

おれA「お前ら……」

世界各地に散らばった同胞たちが

いま、志をひとつに集結しつつあった

四二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

よう、山腹の

いま、ちよっといいかな?

四三、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

逃げました

四四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ちっ………抜け目のないやつだ

まあいい

いいか、今回お前らに集まってもらったのは、他でもない……
子狸の記憶力が怪しすぎる

ここらで視線を合わせるぞ

まず、国内の山腹シリーズが
アリア領を目指して集結しつつある

大所帯の移動は人目に付かないほうが不自然だから
騎士団との衝突は避けられない

その間、勇者一行を乗せた幽霊船は
さしたるトラブルに見舞われることなく
順調に航海を続けていた

不慣れな乗馬訓練をしいられた子狸が
一週間ほど大人しく巣穴に潜っていたためだ

このポンポコは港町で

魔物しか扱えないとされる発電魔法を
勇者さんが見ている前で使っている

子狸バスターに対抗するためだ

ついでにバウマフ家が

おれたちと何かしらの因縁があるということもバレたが、これは仕方ない

勇者さんは着実に成長している

属性を縛ったままだと

おれたちの子狸さんが活躍できない

スルーしてくれるかと期待もしたが

さすがに魔属性に通じる人間というのは
ふだんテンション低めな勇者さんをして

見過ごせない案件だったらしい

詳細は……

王都の、頼む

四五、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おう。とはいえ、大した話はしてない

筋肉痛にあえぐ子狸に代わって

勇者さんは忙しく立ち回っていたからな

お馬さんのお世話をしようとして

そもそも生態を知らないことを露呈したり

お料理に挑戦しようとして
聖 剣を片手に厨房に立ったはいいものの
何をしたらいいのかわからず呆然としたり

今度はお洗濯だと意気込むも

洗濯物を抱えて甲板で小一時間ほど首を傾げていたり

ならばお掃除はどうかと

所在なさげに倉庫をうろついたあげく

本を見つけて部屋に戻ったり

羽のひとにジョーたちの監視を命じたはいいものの
船酔いを起こして

けつきよく羽のひとに看病されたり

なにげに子狸さんの利便性をおれたちに知らしめた
勇者さんの一週間だった

そんなこんなで

子狸を問い詰めるのは

乗馬訓練の数時間だけで

子狸は子狸で

奮闘する勇者さんを陰からひっそりと見守ったり
きしむ身体を押して彼女の後始末に奔走したりと
終わりのない鬼ごっこをしているようなものだった

一週間も掛けて勇者さんが子狸から聞き出せたのは
子狸の華々しい学園生活くらいなものだ

四六、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）
なんでそうなる

四七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）
発電魔法どこ行った

四八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）

勇者さんは発電魔法について
ちゃんと聞き出そうとしたんだよ

さっきの話の続きな

勇者「これまでわたしは、あなたの生まれや境遇について尋ねるよ
うなことをしなかったわ」

子狸「……そうだね。大切なのは、これから二人で作っていく思い
出なんじゃないかな？」

勇者さんは無視した

勇者「あなたは働き者だし、考えの足りないところはあるけど、わ
たしが接してきた平民は組織をまとめる人間がほとんどだったから、
ふつつの平民はそんなものなのかと思っていた」

ここでおれのツッコミが入る

おれ『全国の平民のみなさんに謝れ』

子狸は素直に応じた

子狸『ごめんなさい、全国の平民のみなさん』

もちろん、このやりとりは勇者さんには伝わらない

彼女は続けた

勇者「それに、大まかな身元はわかっていたの。あなたのお父さまは、マリ・バウマフと言うんでしょう？」

子狸「！ 不定形パンは当たりが出るともう一つもらえるんだ！」

数少ない顧客の一人と見てとった子狸が
営業活動に身を投じた

勇者さんの実家は世界屈指のお金持ちだ
ばうまふベーカリーに差し込む一筋の光明なるか？
おれたちは息をのんだ

勇者「あなたのお父さまは、有名人なのよ。高校時代は、とても優秀な生徒だったと聞いてるわ」

あの元祖狸が高校で得たものといえば
個性的な友人くらいなものである

ふつうに突っ立っているだけで
どこからともなく変人が寄ってくるのだ

君がバウマフか？ という掴みから入る
なるほど、噂どおりの男だな……。という一連の流れを
聞き飽きたと言つて、よく嘆いていた

子狸よ、覚えておいて損はない
肝に銘じておくといい
たいていの変人は礼儀正しい

四九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

真理だな

さて、子狸の身元は勇者さんに筒抜けだった
実家がパン屋とか
ぺらぺらと口走るから、一発で特定されるのだ

天井から吊るされたまま
子狸の拳動が不審になった

子狸「ふ……いや！ な、何でもない……」

あとで聞き出したところによると
渾身のプロポーズを言おうとして踏みとどまったらしい

子狸が人生の岐路に差しかかった一方その頃
勇者さんは核心に迫る

勇者「けれど、雷魔法を扱える人間がいるという噂は聞いたことがないわ。本当は使えるけど隠していた……それはあり得る。魔物と同一視されかねないものね。……あなたはどうなの？」

子狸「え？ おれ？」

もちろん子狸は勇者さんの話についていけていなかった

勇者さんは冷静だ

勇者「そうね、まず……雷魔法を扱える人間はいないとされている。ここまではいい？」

子狸「雷魔法って……もしかして発電魔法のこと？」

ここで、じつはかなり初期の段階からわかっていなかったことが判明する

勇者さんがわずかに首を傾げる

勇者「発……なに？」

ここでおれが子狸にレクチャーする

電気という概念は

人類社会には存在しない

静電気は妖精たちの悪戯ということになってるし
落雷は魔人の仕業だと考えられている

おれ『紫術、雷魔法、発電魔法、起雷魔法、いろいろな呼び方があります。覚えましょう』

子狸『嫌です。一つにしましょう』

生意気にも反発する子狸

おれ『立場の違いがあるだろ！』

海底『自分ルール自重っ』

おれたちの説得を経て

子狸がしぶしぶといった感じで口を開く

子狸「……おれスパーク？」

おれたちのツツコミは割愛させて頂きます

勇者「……はつでん魔法と言っのね。わたしは紫術と呼んでるの。だから、あなたもそうしなさい」

勇者さんの自分ルール発動

子狸「え〜……？　なんだか、にわかになんかこしくなってきたな……にわかにな」

子狸は　にわかにな　を覚えた

勇者「そうね。でも、大切なことよ。あなたの魔法は特装騎士のも

のに近い。たぶん幼い頃から特殊な訓練を積んでいる……そうでしょう？」

子狸「なるほど……」

受け答えがすでに怪しい

ここで自己鍛錬を終えた羽のひとが復帰

妖精『だいじょうぶか？ ついてきてるか？』

子狸『断言はしかねる』

断言はしかねるレベル

おれたちは続行を指示

フォローしようにも

要約しようがない

なんとか子狸の口を割らせるべく

誘導尋問を仕掛ける勇者さんだが

困難であると察したか

素早く手法を切り替えた

勇者「……じゃあ、こうしましょう。あなたが紫術に関して知っていることを、洗いざらい喋りなさい」

じつにわかりやすい

だが、甘いと言わざるを得ない

おれたちは常にバウマフ家の動向を観察してきた

そうして生まれたのが

管理人の言動を

こちらで指定するという

完璧な対応策だ

おれたちに死角なし……！

子狸「めっじゅ〜（鳴）」

五〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おい。誰だ

五一、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

いやあ……

勇者さんと一緒に旅してきた

けっこう経つし

もう子狸が何を言っても違和感ないんだよね

勇者「……………」

子狸「……………」

気まずい沈黙が流れた

滑ったと察した王都のひとが
とっさに子狸に自由裁量権を預ける

子狸「紫術、か」

子狸は、ぼつりぼつりと語り出した……

子狸「あれはいつだったか……。そう、まだおれが幼かった頃の出
来事だ……」

勇者さんは、まじめに聞いてくれる

だが、この話の続きに

発電魔法が絡んでくることはない

かくして彼女は

望みもしないのに

子狸の半生に無駄に詳しくなっていく……

「勇者会議」 part 3

五二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

子狸の半生つて……

それ大丈夫なの？

ああ、だからポンポコ学園物語なのか
お前らが細かくチェック入れてるのね

五三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

さすがに学校で発電魔法を使ったことはないからな

というかお前、わかってて言ってるでしょ？

無理して発言しなくてもいいんだぞ

自分アピールもほどほどにな

五四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

え？ 子狸さんのためについていう発想がお前にはないの？

というかお前、いつまで某パン屋に入り浸ってるの？

なにか帰りたくない事情でも？

治安維持を名目に

用事もないのに街をうろついて時間をつぶす騎士みてーだな

五五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あれ？ ご存知ない？

家に居場所がない騎士たちが

どっだけ治安維持に貢献してると思ってるの？

非番の騎士が

たまたま犯行現場に居合わせて

事件解決した事例なんてごまんとあるんだぜ

地味に物を知らないね、お前さんは

五六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

地味？ いま、地味って言った？

五七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

ええ、言いましたが何か

五八、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

こっちは、だいたいこんな感じだ

火口のが生き生きしすぎてて
見ててつらい

もっとも、すでに手は打ってあるのだが

五九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

！？ お、お前は ！

六〇、火口付近在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

さあ、お前はこっちに来るんだ

抵抗しても無駄だ

言ったはずだぞ

オリジナルはコピーには勝てんな

おとなしく家に帰るんだ

緑のひと、見てるな？ お前もだ

わけのわからん状況にしゃがって……

六一、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

いやだ！ おれは歩くひとが焼いてくれたパンを食べるんだ！

か、かまくらの！ 助けてくれ！

おれたち二人がそろえば無敵なんだ！ そうだろ！？

六二、かまくら在住のところにたらない不定形生物さん（出張中

くちばしの鋭いひとたち、パン食べるかなあ？

歩くひと、いちおう包んでおいてくれる？

六三、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

どう考えても食べないと思うけど……

ほろ苦い初恋の味パンなら、あるいは……

六四、かまくら在住のところにたらない不定形生物さん（出張中

ははっ

おいおい、よせよ

どんな罰ゲームだよ、それ

六五、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

怨霊種のエースと青いの（極地戦仕様）が

出張先でホームコメディを繰り広げている一方その頃……

海上の勇者一行は深刻な問題に直面していた

勇者「集まったようね」

会議室に集結したクルーの面々を見渡して

勇者さんが口火を切った

勇者「リン、資料を」

おれ「はい！」

前もって勇者さんに指示されたとおり

円卓の上に棒グラフと周辺一帯の海図を展開する

ここ一週間

おれが勇者さんのフォローに回れなかったのは
ジョーたちの監視もさることながら

彼女の指示で海図を作成していたからでもある

子狸「ふむ……」

一週間の推移を示すグラフを見つめて

子狸が理解に努めている自分をアピールした

ノーマル「これは……食料の備蓄か？」

子狸「……まさか食料の備蓄では？」

アイアン「ばかな、早すぎる。三週間ぶんは蓄えがあつた筈だぞ」

円卓を囲っているメンバーは

泣く子もだまる勇者一行、三名と

すっかりお馴染みのジョー四人衆

計七名

ジョーたちの船なのに

気付けば勇者さんが船長ポジションにおさまっている

勇者「事実よ。とくに四日目以降の消耗が激しい。まるで……」

そう言つて彼女は

子狸をじつと凝視した

子狸「でっかい鼠さんがいるに違いない」

子狸が即座に断言した

子狸の調教もとい乗馬訓練は

出航した日の翌朝からスタートした

それから三日ほどは役立たずに成り果てたが

だんだんと適応しはじめて

恒例の夜間特訓を再開したのが四日目以降だ

たしかに大きなネズミがいるようだった

シルバー「やってしまったことは仕方ない。対策は。対策はあるのか？」

建設的な意見を述べるシルバージョーに

勇者さんが視線を戻して言う

勇者「あるわ。けれど、あなたたちの意見も聞いてみたいと思ったの。どう?。」

くるりと面々を見渡すと

われ先にと子狸が拳手した

勇者さんが頷いた

勇者「発言を許可します」

子狸「はい！ おれ、さいきん裁縫に凝ってるんだ。あれあれ？ お嬢、その服、三日前にも着てたよね。こんな偶然があっただいいのか!？」

おれ「座れ」

子狸「はい」

アイディアそのものは悪くない

残す課題はタイミングだな

おとなしく着席した子狸が

ちらつとおれを見た

瞬時のアイコンタクトだった

おれはいったん瞑目してから
ぱっと破願して勇者さんに話しかけた

おれ「わたしも賛成ですよ！ リシアさんが新しい服を着てるの
見たいですっ」

勇者「……そう？」

満更でもない様子だ

彼女自身、同じ服を着回すのは避けたいと考えているだろう

一方その頃、ジョーたちは真剣に協議していた

ゴールド「いったん停泊して漁をするか？」

ノーマル「いや、厳しいな。おれたちが関与すれば王種の怒りを買
う」

シルバー「釣りをさせるにしても、現状のペースでは……」

アイアン「最寄りの港に立ち寄ってはどうか？ 魔法で偽装すれば、
二、三日なら誤魔化せるだろう」

ゴールド「……保留だな。リスクが高すぎる」

ノーマル「では無人島は？」

シルバー「悪くない。だが……最短でも三日はかかる。嵐が来ない
とも限らない」

アイアン「そもそも……おれたちは飲まず食わずでも一週間くらいなら保つぞ」

ゴールド「あ、そうだね。問題なかった」

ノーマル「だな。まったく問題ない」

意見をまとめたノーマルが

勇者さんに具申する

ノーマル「現状維持で」

勇者「あなたたちが夜な夜な四人で集まってお酒を飲んでいたのは調べがついてる」

ノーマル「万事休すか……」

と、そのとき。海図を見つめていた子狸が
なにかを発見した

子狸「……!!」

気付いてはいけないことに気付いてしまったかのように
沈痛な面持ちだ

探偵気取りか

子狸「そうか……そういうことだったのか……」

おれ「……」

ためしに放置してみると
子狸がちらちらっと目配せをしてきたが
おれは無視した

未練がましく視線を送ってくる子狸に
勇者さんが合いの手を挟む

勇者「どうしたの？」

恵まれないポンポコに発言の機会を与える
学級委員長のようだった

子狸「いや、その……」

内面を探るように瞳を覗き込まれて
子狸が言いにくそうに口ごもる

六六、管理人だよ

お前ら、おれは大変なことに気が付いてしまった
何を言おうとしたのか忘れたんだが……

六七、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

そんなこと言われても……

海岸線の形がカツコイイとかじゃないのか？

六八、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

深化魔法を使ってみてはどうか

もしかしたら思い出せるかもしれん

さりげなく使っただぞ？

六九、管理人だよ

お前は天才か

わかった。やってみる

おれ「エラルドじつは……」

七〇、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

さりげなくと言ったはず

しかし試みは成功したようだ

海図を見つめる子狸の目が

心なし深みを増した

子狸「ギャラクシイイ！」

いったい何を見たというのか

勇者「……………」

無反応の勇者さんに

子狸が続けて言う

子狸「お嬢」

勇者「なに」

子狸「おれは銀河を見た」

スペースポココの妄言を

勇者さんは聞き流した

彼女が口を開くよりも先に

ジョーたちが反応した

ゴールド「ギャラクシー！ ギャラクシー！」

シルバー「いいぞ！ ひゅーひゅー！」

アイアン「よっ、宇宙狸！」

ノーマル「いいよ！ 輝いてる！」

魔物たちは宇宙が大好きなのだ

子狸「よおし！ お前ら、おれについてこい！」

颯爽と席を立った子狸に
ジヨーたちが群がる

ノーマル「その言葉を待っていた！」

シルバー「胴上げだ！」

わっしょいわっしょいと子狸を胴上げしはじめるジヨーたち

祭りがはじまった

妖精「シューティング スター！」

そして終わった

至近距離から光の散弾を浴びた子狸が
空中で大きくのけぞる

子狸「ぐあ〜！」

アイアン「ポンポコさーん！」

ゴールド「ちいっ………！ 右だ！」

シルバー「おう！」

羽のひとの妖精魔法は
詠唱破棄に攻性の聖属性を連結したものだ

ジョーたちは闇属性の魔物ということになっているので
本来なら致命傷になってもおかしくないのだが
以前に属性を無視してしまったので
ここで倒れるわけには行かなかった

瞬時の判断で二手にわかれた金と銀が
光の散弾を掻い潜って羽のひとに迫る

妖精「マジカル ミサイル！」

あっさり撃退されて吹き飛ば

そのまま壁に衝突するかと思われたが
ジョーたちの再生力が上回った

四散した骨片が渦を巻いて組み上がっていく……

ゴールド「無駄だ。光の精霊に選ばれたお前ならばわかるだろう」

シルバー「感じるはずだ。残された時間は少ないぞ……」

子狸をダイビングギャッチしたアイアンが
二人と合流する

三種のジョーが
つま先立ちになって

そろえたひざをくねっと横に突き出し
両腕で上下に弧を描いた

歩くひとに大不評の大蛇の構えだ

子狸「お遊びは終わりということだ」

三人の背後で子狸が猛虎の構えをとる

統制のとれた動きだったが……

アイアン「あれっ、ひとり足りねえ!」

素早く避難していたノーマルジョーが

ちゃっかりと勇者さんのお茶汲みに回っていた

ノーマル「え? ああ……」

ノーマルは、ためらったすえに言った

ノーマル「まあ、なんだ……座つたら?」

金&銀&鉄&子狸「え? ああ、うん……」

四人は異口同音に肯いて

おとなしく着席した

羽のひとが子狸の肩にとまったのを見届けて

勇者さんが議事進行を再開する

勇者「だいたい出揃ったかしら。では、わたしの案を発表します」

聖 剣を教鞭に見立てて図面を指し示す

子狸と羽のひとにとって見慣れた姿だ

勇者「この航路は、人間たちの船がよく行き来するところなの」

妖精「けっこう近いですね」

合いの手を入れた羽のひとが

勇者さんの言いたいことを察して

小さな手をぽんと打った

妖精「あ、そうか。物資をわけてもらうんですか？」

勇者「いいえ。船というのは外敵の襲撃にもろい。それはお互いさまだから、いちばん警戒するのは船内に乗り込まれること。まず間違ひなく断られるでしょうね」

妖精「じゃあ……」

勇者「作戦を説明するわ」

そう言つて勇者さんは

手短に趣旨を述べた

@決行は深夜

@ジョーたちの闇魔法で風景に溶け込む

@夜陰に紛れて航行中の船に接近する

@夜の散歩に出かける

@つつかり船を間違える

@偶然にも物資を見つけて持ち帰る

七一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

おれの気のせいならいいんだが

海賊行為と酷似しているような……

「勇者会議」 part 4

七二、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

お魚さんたちが陸上では生きていけないように
人間たちにとって深海は死の世界だ

陸上生物最強と言われる緑のひとが
切なさを訴えるほどの高圧環境に加え
摂氏1・5度〜3度ほどの低水温

日の光は海水に遮られて届くことはない
無明の闇が広がるばかりだ

まあ、それはともかく……

接近してくる船を
海面から頭だけを出して見つめる
怪しい人影があった

子狸「……………」

頭を引っ込めて
いったん潜水した子狸が
すいすいと海中を泳いで距離を詰める

人間たちには
海を見たことがないというものも珍しくない

泳げない、泳げるかどうかもわからないという人間が多い中
おれたちの子狸さんは泳ぎが達者だ

ためしに滝登りをさせてみたら

あえなく失敗して下流で回収されたほどの腕前である

ある程度まで近付けば

船の死角に潜り込める

ふたたび海面に浮上した子狸が

ひそかに設置した盾魔法の階段を

日光浴にお出かけするワニさんみたいに這い上がる

子狸「……………」

「迫りくる船を見上げた子狸が

無言で片手を海中に挿し入れた

子狸「ポォラレイ」

水魔法のスペルだ

浸透魔法とも呼ばれるこの魔法は

属性魔法の中で特殊な分類に入る

というより八つの属性のうち

半分以上はどこか変だ

水分子を操作する魔法は

あまりにも生物と密接に関わっているため

属性と性質を完全に分離しきれなかった魔法である

人間たちは火属性に対して優位だの何だのと勝手に解釈しているが
じつのところ水属性は流転の性質を持っている

水量や形態によって性質が変わるということだ

手を伸ばせば大量の水がある海で

最大の効力を発揮するのは言うまでもない

子狸の支配下に落ちた海水が

船を包囲して航行速度を若干ながら削る

完全に動きを止めてしまえば

船上の人間に勘付かれる可能性は高くなる

わざわざ危険を冒す必要はないということだ

航行中の船との相対速度を縮めることに成功した子狸が
船体にとりついて片手をそえる

子狸「アバドン」

肝心なのは隠密行動だ

生成した重力場に

折り曲げたひじを叩きつける

子狸「ブラウド」

首尾良く船体に穴を空けた子狸が
潜入に成功した

すかさず治癒魔法で穴を塞ぐ

なぜか犯罪くさい行為に関しては
手際が良すぎる子狸さんであった……

七三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ホントだよ

その手際の良さを
なぜ日常生活に発揮しないのか

七四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

行動に迷いが見られない

さらつと実行してたけど
なんだ、いまの船体に穴に空けたやつ
なんだか殺人技っぽいんだが

七五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

ここさいきは
子狸さんに肘技を仕込んでる

いや、おれじゃなくて
ジョーたちがね

なんでも鎧を貫通して
内部にダメージを与えるための技らしい

七六、山腹巣穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中）
どう見ても空き巣の手口なんだが……

七七、管理人だよ
狙った獲物は逃さない

七八、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん
お前というやつは……

一部始終を目撃していた勇者さんは
おれが中継している映像を見て
納得が行かないというように小首を傾げた

勇者「……ずいぶんと手際が良いわね」
甲板に安楽椅子を（ジョーに命じて）持ち込んで
すっかりくつろぎモードである

手元のグラスをゆったりと揺らすと
トロピカルジュースにひたった氷が
からんと涼しげな音を立てた

執事よろしく控えているノーマルジョーが
くつろぐ勇者さんの頭上に日傘を展開していた

戦士には休息が必要なのだ

会議室に集まった面々を解散する前に

勇者さんはこう言った

勇者「それじゃ、さっそく練習しましょう」

そついうことになった

くだんの襲撃計画について

もちろんジョーたちは反対したのである

ゴールド「ばかな！ リスクが高すぎる」

シルバー「……内部の人間と鉢合わせになったらどうする？ 迷彩
は万能ではないぞ」

アイアン「おれたちが扱える魔法は、せいぜい中級までだ。本気で
探索されたら、まず見つかると思ってい。考え直せ」

実のある会議ができて

勇者さんはご満悦だった

反論する口調が

かすかに弾んでいる

勇者「いいえ、そうはならないわ。海上での魔法戦はお互いにとって歓迎されざるもの。交渉次第になるでしょうけど、迷彩が破られたときに目の前に現れたのが幽霊船だったとしたら……」

ゴールド「手出しはされない……か？ それは乗組員の気質によるだろう」

勇者「そうね。では、人間が人質にとられていたらどうかしら？」

勇者さんが人質役になるということだ

たしかに相討ちの危険を冒してまで

自分たちのほうから去っていく幽霊船を追うとは考えにくい

シルバー「それでも絶対ということはない！……いや、どんなことにも絶対ということは……それならば……」

シルバージョーは強硬に反対しようとしたが

会議中にジョーたちが挙げた案ならば

絶対に安全という保証はない

いちばん現実的なのが

無人島に立ち寄るという案だったが

空振りに終わる可能性も

勇者さんは視野に入れているようだった

いまから拠点を作っても良かったが
最低でも三日は掛かるというのは事実だ

その間、飢えきつた子狸が

人目を盗んで素潜りに挑戦しないと限らない

潜入メンバーは

子狸のワントップということになった

ジョーたちは泳げないし

先行して船内を調査する子狸と

幽霊船で指揮をとる勇者さんとのつなぎが必要だ

魔法で妨害されることを念頭に入れると

その大役をこなせるのは、おれしかない

そして現在

子狸は今夜の実戦を想定して

幽霊船に潜入したところだ

七九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

無事、船底部に潜入した子狸のアクションは素早かった

「ごろりと床で前転して

壁にぴたりと身を寄せる

子狸「……………」

緊張からか
息遣いが荒い

すっかり没入しているようで
ずぶ濡れのまま小刻みに左右を見渡している

ことシナリオに関しては
演技派を自称するだけのことはあった

子狸「！」

ぴくりと反応した子狸が
壁から身を離して飛び退いた

天井に張り付いていた何者かが
飛び降りてきたからだ

体格は子狸よりも一回り小さい
全身を黒装束で包み
狐を模した面をかぶっていた

子狸が舌打ちした

子狸「ちっ……追っ手か」

正解だからあなどれない

さて、どうしたものか……

まさか、この場面で出てくるとは思わなかった

八〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸、そいつはアリア家の刺客だ

港町で魔法動力船に避難した子供たちがいただる

あの中に紛れ込んでたやつだ

発光魔法でうまく迷彩したつもりだろうがおれたちの目は誤魔化せないぜ

八一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

せつかくスルーしといてあげたのにな……

わざわざ自分のほうから姿を現すなんて意外と考えなしなのかね

狐面「自分の物差しで物事を図るな」

っ……………こいつは……

子狸「!？」

構うな、子狸

気にしなくていい

おれがブロックする

……よし、いいぞ

八二、管理人だよ

あのお面は……

八三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

何か知っているのか!?

八四、管理人だよ

ああ、言うほど狐さんと似ていない

八五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

うん。なんかごめんね

八六、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

用心しろよ、子狸

その子は、異能持ちだ

ファミリーの眼帯

タマさんと同じタイプだぞ

八七、管理人だよ

ふっ、異能持ちか……

八八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あ、こりゃだめだ

忘れてる

まあいいか

相まみえる

狸と狐

狐面の……ここでは少年というひととしておなじ

少年が言う

狐面「……よくわからないやつ。行くよ」

子狸「なるほど。同業者というわけだな」

いつの間にか泥棒にクラスチェンジしていた子狸であった

不用意に行くよとか言うから……

たたらを踏んだ狐面が

つたない口調で言い返した

狐面「ちがう。お前と一緒にするな」

子狸「何が違う？ 何も違いはしない」

大物ぶる子狸

とりあえず否定しておけば間違いないと思っている

狐面「問答はいい」

狐面が仕掛けた

独特な歩法だ

子狸に肉薄して手刀を繰り出す

狐面「グレイル」

これを子狸は

羽のひと仕込みのウィービングで回避

横っ跳びして狐面の側面をとる

子狸「ポーラレイ！」

ずぶ濡れの服から水分を絞り出して

狐さんを捕獲しようとする

狐面「タク・ディグ」

渦巻く水流に目もくれず

狐さんは先に詠唱した貫通魔法に投射魔法を連結

防御を捨てた

破滅的な戦い方だ

子狸「ディレイ！」

射出された貫通魔法と

盾魔法が拮抗して押し合いをはじめ

子狸「待て！　なんで戦わなくちゃいけないんだ！？」

子狸の素朴な疑問

狐面「邪魔。アバドン」

狐面は応じない

八九、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

子狸とは相性が悪いな……

おれたちの手で実戦的にカスタマイズされた子狸だが

一撃必殺の浸食魔法を自重しているため

攻勢に回るのを避けているふしがある

子狸を襲撃した狐面は
実力的にはだいぶ格下だ

ただ、己の身を省みずにくぐりと前進してくる

もみ合いになった二人が

船底部の壁を突き破って飛び出してきた

海面付近に盾魔法で足場を設けて

仕切り直しだ

海上で水魔法を使わない理由はない

狐面「ポォラレイ」

小規模な水竜巻が

子狸に襲いかかる

子狸は困った様子だ

子狸「……イズ！」

紫電を纏った前足で

水魔法を払いのける

子狸「グノ・エリア・ポォラレイ！」

十字を切るように前足を突き上げると

狐面の足元から巻き上がった水流が

彼女を捕獲した

狐面「むっ」

あ、彼だっけ？

まあ、この程度の使い手ならいいだろ

おれたちの子狸さんが遅れを取るとは思えん

あきららかに年下の少女を

あっさりと下した子狸

勝ち誇るうにも

ちっぽけなプライドが許さない様子である

子狸「うぬ……」

狐面「勘違いするな」

狐面が強がりと言った

狐面「これは、アレイシアンさま親衛隊の入隊試験に過ぎない」

子狸「……なんだと？」

子狸の表情が

にわかに真剣味を帯びた

つくづく残念なポンポコである

狐面「この魔法を解け。だいたいわかった」

子狸「いいだろう」

さしたる根拠もないのに

あつさりと口車に乗せられる子狸

だめだ、こいつ

危機感がまるでない

ところが狐面は素直に話しはじめた

おれたちの理解を越えた

何かがはじまるうとしていた

狐面「お前のことは、だいたい調べさせてもらった」

子狸「ほう」

狐面「そこで、これ。クラスメイト百人に聞きました」

そう言っつて狐面が

発光魔法で怪しげなパネルを展開した

アンケートを取ったということらしい

ちなみに

子狸のクラスメイトは百人もいない

狐面「第九位。でーでーでーでー」

セルフ効果音だった

パネルの一角がめくれて

疑問符を浮かべて首を傾げる人物の絵が浮かび上がる

狐面「マフマフって誰？ 一票」

マフマフでもない

子狸「ちょっとショック」

狐面「それでは質問。第一位ははたして？」

子狸「ぬう……」

悩む子狸

はっとして、おそるおそるといった感じで少女を指差す

子狸「……おれ？」

おれだったらどうだということのか

狐面「惜しい」

惜しいのか……

狐面「第七位。一票。経緯はわからないが、窓ガラスを割って自首したらバウマフがやったことになった。すまん」

懺悔じゃねーか

子狸「七位か……」

子狸がうなった

九〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

もしかしたら

話を通じないとかじゃないのか

いや、違うならいいんだが……

九一、管理人だよ

違うと思うけど……

まあ、思いつかないから言ってみる

狐面「正解。でも五位。たまに自分が王国語を話せてるのか不安になる。一票」

たしかに、たまに話を通じないときがあるなあ……

九二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

通じてないのは、お前だけだね

じゃあ、これ

お前「見かけるたびにクライマックス」

九三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

それはありそうだ

狐面「正解。三位。街で見かけたから声を掛けようとしたけど、騎士団に追われてたから静かにその場をあとにした。一票」

ぜんぶ一票なんだな

三位か。いいところまで来てる

あとは……

狐面「ぶぶー。時間切れ」

そんなルールがあつたとは……

狐面「発表します。気になる第一位は。でーでーでーでー」

ゆっくりとパネルがめくられる

「じゅくり……」

九四、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

「じゅり……」

九五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

「じゅり……」

九六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

そうして現れたのは

教鞭を手に行している

女性の絵だった

狐面「じゃん。お前がわたしの教え子の一人であることは変わりない」

！？

まさか

りゅ

九七、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

留年確定したあああああっ！？

九八、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸留年確定！ 留年確定！

号外だ！ 他の河にも伝えてくる！

九九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

頼む！

そうか、とうとう……

なんか、もう逆に感動的ですからあるな……

一〇〇、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

子狸さん！

何かコメントを！ ひとことお願いします！

一〇一、管理人だよ

そういえば、お前らポータとか呼ばれてるよね

一〇二、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ぜんぜん関係ないですね！　ありがとうございます！

「〇三、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

中継映像を見ていた勇者さんが

無言でグラスに口をつけた

勇者「……………」

ためしに聞いてみるか……

おれ「お知り合いですか？」

勇者さんは視線を逸らしてから

諦めたようにかぶりを振って

それから恥じ入るように小さく頷いた

勇者「ついてきてたのね。そうじゃないかとは思ってたんだけど……」

安楽椅子の上で振り返って

ノーマルジョーに言う

勇者「作戦は中止よ。そう伝えて。原因がはっきりしたから」

ノーマル「了解した」

かくして、いま

ひとつの魔法動力船が

海のどこかで

しかし確実に

災難を逃れたのである……

「勇者会議」 part 4（後書き）

注釈

・水魔法

別名、浸透魔法。スペルは「ポーレイ」。

古代言語で「青い力」を意味し、これは「水」を指し示す慣用表現の一つだった。

属性と性質が分離しきっていないため、連結魔法が成立する以前の性質を色濃く引きずっている。

そのぶん扱いは難しいが、例えば圧縮すれば貫通魔法と同様の効果を、固定すれば盾魔法と同様の効果を発揮する。

便宜的に「流転の性質」ということになっているが、正確には魔物たちが使う浸食魔法が貫通魔法と分離した際の名残りであるらしい。

発火魔法や発電魔法とは異なり、水そのものを生成する魔法ではない。そのため、陸上で使った場合は大気中の水分を凝縮する魔法として働く。

環境による影響を非常に強く受ける魔法で、水場や降雨時では他の属性魔法を圧倒しうる。

・異能

魔法では説明がつかない不思議な能力。原理がよくわかっていない。

異様に勘が鋭いなどがこれにあたる。魔物たちの調査によれば、基本的には遺伝によるが、まれに突然変異的に備わるケースもある。

精神に作用するものが多く、アリア家の感情制御は典型的な異能であり、また精神作用におけるトップクラスの異能とされている。

異能を備えたものを、魔物たちは「異能持ち」あるいは「適応者」と呼ぶ。

魔法と比べて目に見える効果があるものは非常に少なく、人間たちは「異能」の存在をあまり意識していないようだ。

ごくまれに誕生する物質作用の異能は妖精の「念動力」と同一視されるが、じっさいはまったく別物である。

「ありあけ、つづき」

一、帝国在住の現実を生きる小人さん（出張中

アリア家は大金持ちだ

世界屈指の大富豪と言っても良い

国民が汗水を垂らして稼いだお金は

最終的に大貴族の懐におさまる

王国とはそういう国だ

快適さを追求したアンティークの数々……

アリア家の人間は無駄を嫌うが

様式美を解さないようでは

貴族社会では無礼にあたる

豪華な応接間だった

ガラス張りのテーブルを挟んで

一人の男が

対面のソファに腰掛けている

アリア家の首魁

アリアパパこと

アーライト・アジエステ・アリアだ

鋭い眼光をしている

王国のと連合国の共謀により
ソファの真ん中に座らされた
おれ涙目

アリアパパが言った

アリアパパ「あれの剣を打つと言うのか」

低い声だった

完全にラスボス級の威圧感がある
どうということなの

おかしいよ、この家……

どうかしてる

アリアパパが
静かに凄んだ

アリアパパ「魔物の、お前たちが」

護衛はいない

たびたび勇者さんがそうしてきたように

アリア家の人間は

まず自分たちを不利な立場に置く

ひとの本質は

優位に立ったときに表れると信じているからだ

アリアパパも同様の手口で

おれたちの命を値踏みしている
命を……量っている

バウムフ家の人間とは
だから根本的に考え方が異なっている
並び立たない

アリアパパの問い掛けに
おれを生贄に差し出した王国のが
代表して頷いた

王国「そうだ」

自分はあるちゃんの凶眼に晒されないからと
呑気なものである
しねばいいのに

王国「悪い話ではないはずだ。お前たち人間が失った技術を、おれ
たちは保有している」

連合のが追隨した
お前もしね

連合「お嬢さんの剣は見せてもらった。いい剣だ。使い手のことを
よく考えてある。だが、シビアに見れば、まだまだ改良の余地はあ
る」

アリアパパは身じろぎ一つせず
おれを凝視し続けている

……いや、睨んでいる

なんなの、これ

「アリアパパ、たしかにそのようだな」

アリアパパは認めた

訪問販売と称して

おれたちが持参した剣は

現行の技術を大きく凌駕している

メイドさんにつかまって

ある種の乗馬訓練を施されたのは想定外だったが

一定の成果を発揮してくれたようだ

いつか見ている

おれの母国、帝国がいつの日か

世界のとっぺんをとる

続きます

追伸

子狸さん、留年おめでとつございます

一、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶてさん

なんでお前らは仲良くできないんだ

母国でもねーし

小人と言つわりにはでつかいのが
アリア家の当主と面談している頃

子狸留年確定の報が
またたく間にこきゅうとすを席卷した

激震、こきゅうとす

本流が氾濫して使いものにならなくなったため
おれたちは避難所の支流に逃れてきたところである

生贄として本流に置き去りにしてきた子狸は
世界各地に散った分身たちの傀儡と化している

子狸「感謝だ。大切なのは感謝だと思う……ありがとう」

感謝の精神に目覚めた子狸はともかくとして
小さなポンポコに連行されてきた狐面の女の子が
子狸の背中に隠れてもじもじしていた

狐面「……………」

借りてきた猫のようである

甲板に上がってきた二人を見て
勇者さんが席を立った

勇者「コニタ」

それが狐面の名前であるらしかった

意地でも子狸の名前を呼ばない勇者さんが
彼女の名を明かしたということは
身内であることの証左のように思える
あるいは……

名前を呼ばれて感極まったか
狐面が子狸の前足をひねり上げて
勇者さんに近付いていく

子狸「なんだこれ、痛え。でも感謝だ。感謝を忘れてはならない」

狐面「アレイシアンさま……」

不安と期待に揺れる声が
お面の中でくぐもって聞こえた

構わず近寄る勇者さんが
片手をかすかに揺らすと
その手に光が灯って
一瞬で刀身を形成した

彼女は言った

勇者「仕事は見つかったの？」

親の庇護が必要な年齢でもなく
また学生でもなく
そして定職に就かない人間を
ひとは無職と呼ぶのだ

狐面「……………」

狐面が沈黙した

その間も、感謝を叫び続ける子狸を
ぐいぐいと後ろから押している

狐面「…………波の音でなにを言ったのかよく……………」

彼女は聞こえなかったふりをした

勇者さんが繰り返した

勇者「仕事は」

狐面「…………マフマフ。わたしは忍だとアレイシアンさまに伝えて」

子狸「しのびか。それもまた感謝だ」

無職が高じると忍になれるらしかった

何者かの指示によるものだろう

子狸が勇者さんに言った

子狸「お嬢」

勇者「なに」

子狸「職業に貴賤はない」

勇者「無職でしょ」

子狸「笑顔だよ」

前足を極められながら

子狸がにっこりと笑った

だから何だというのか

子狸「感謝だ」

けっきょくそれが

だめだ、このポンポコは使いものにならない

狐面もそれを察したか

子狸を甲板に組み伏せて言う

狐面「余計なことを言うな。わたしのことはお頭と呼べ」

子狸「ふっ、それは出来ない相談だな」

勇者さんの目の前で

二人は密談をはじめた

狐面「あなどるな。わたしはお前よりもずっとアレイシアンさまのことを知っている」

子狸「なんだと……？」

狐面「これを見る。パル」

狐面が発光魔法で再現したのは
年端も行かない小さな女の子が
きちんと椅子に座っている画像だった

面影がある

勇者さんのメモリアルに違いなかった

勇者「……………」

しかし子狸は不敵に笑った

子狸「その程度か」

狐面「なに…………？」

子狸「つたない魔法だ。学ぶべきことは多いぞ…………手本を見せてやる。パル・シエル・クラウド！」

子狸の魔法の腕は

いつまで経っても

どれだけ鍛えても二流の域を出ない

だが、それはおれたちの勘違いだったらしい

子狸が空間に投影したのは

勇者さんの立体映像だった

実物の五分の一ほどの大きさだ

二人の見ている前で
映像化した勇者さんが
くるりとターンして
おはよう、と言った

おそろしく高度な魔法だった

どうだ？ と得意満面の笑みでポンポコ

子狸「目覚ましお嬢だ」

時限式の魔法は
減衰の対象になる

人間が扱える魔法は開放レベル3が限度だから
この目覚まし勇者さんとやらを
子狸は定刻に起床して詠唱せねばならない

つまり無意味な
それでいて高難度という
こけの一念を要する技術だった

狐面が悔しげに言う

狐面「なんというクオリティ……」

それはつまり負けを認めたということだ

勇者「……………」

勇者さんは無言で二人を見下ろしている

三、 連合国在住の現実を生きる小人さん（出張中

目覚まし勇者さんが

本人の手で灰燼に帰した

一方その頃……

応接間に立ちこめた重苦しい沈黙を切り裂いて

あーちゃんが不意に言った

アリアパパ「五分やる」

帝国「……ん？」

母国と同じで

なにかと因果を背負う宿命にある帝国のが
にぶい反応を返した

アリアパパは

帝国のんの挙動をつぶさに観察し続けている

アリアパパ「五分だ。俺の目の届く範囲でなら何をしても構わん」

自分を説得してみるといふことなのか？

……おれたちは

さもアリア家にメリットしかないと聞こえるよう話したが

当然ながらリスクはある

アリアパパ「お前たちの要望どおり、あれが使っていた剣は破片に至るまで回収してある」

そう言っつてアリアパパは

犬歯を剥き出しにして笑った

飢えた獣を思わせる

獰猛な笑みだった

ぐっと身を乗り出して

囁くように言う

アリアパパ「だが、こうしてお前たちとの会談の場を設けたことで、俺が背負ったリスクは決して低くない……。わかるな？」

かつて勇者さんは

アリア家の感情制御を評して

健全な感情の働きを損なうものだと言った

しかし極限まで突き詰めれば

嬉しいという感情や

楽しいと感じる気持ちも

自在にコントロールできる

それがアリア家に伝わる異能だ

脅しともとれるアリアパパの発言を受けて

王国の言った

王国「……見返りか？」

しかしアリアパパは
にやっと笑っただけで
矛をおさめた

アリアパパ「わかっていているならいい。その点に関しては、お前たちが考えることではない。だから五分やると……」こう言っている

おれたちの情熱が
どれほどのものか知りたいということなのか？

だが……

おれ「待て。一つだけはつきりさせたい。お前は、おれたちの善意を疑っているのか？」

アリアパパ「善意など」

アリアパパが喉の奥で低く笑った

アリアパパ「いや、信じている。どちらでもいいことだ……。十秒、無駄にしたな」

！ こいつ、まさか……

こきゅーとすの存在に勘付いているのか！？

いや、たえそうだったとしても……

四、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

勇者さんが親衛隊を名乗る少女と再会し
鬼のひとたちが宴会芸を強要されている
一方その頃

五人の騎馬隊が
ひそかに王都を発った

そして早くもおれに絡まれていた

ちーっす

おれ「騎士どもが雁首そろえてお出掛けですか、そうですか。どち
らへ？」

騎士たちが騒然とした

騎士A「ご、五秒だと……？」

騎士B「まさか、こんなことが……」

全身を覆う白銀の甲冑は
王国騎士団の代名詞でもある

どの国でもそうだが
騎士たちは状況に応じて武装を変えるものだ

彼らが身にまとっている重武装は

騎馬戦を想定した制式の装備だった

四人の騎士がお馬さんの手綱を操り
一人の騎士の四方を固めた

中央の騎士が言った

老人の、しわがれた声だった

老騎士「だから言っただろ。おれ言ったよな？ 影武者とか意味ね
ーんだよ」

手馴れた仕草で

兜の留め具を外した老騎士が

他の騎士たちの制止を無視し

素顔を晒してお馬さんを降りる

長い年月を生きた戦士の顔だった

老騎士「おれがいて、お前がいる。それだけだ。そつだろつがよ、
違つかよ。違わねーだろ……なあ、青いの」

大隊長

ジョン・ネウシス・ジョンコネリの出陣だった

おれ「いちだんと老けたね、お前さん」

大将「うるさいよ、ばか！」

おれ「ばかと言うほうがばかなんだよ」

大将「ばーか、ばーか！」

この語彙が少ないおじいちゃんを

敬意をこめて

おれたちは大将と

そう呼んでいる

「失うもの、得るもの」

五、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

子狸速報

本流にて

絶 賛 氾 濫 中

お前らの感謝で前が見えない

—0000ゲットで

教官に特製T A N U K I パジャマ進呈なるかと思われたが

子狸さんの感謝が華麗に—0000ゲット

子狸い……の嵐が吹きすさぶ中

暴徒と化した見えるひとが周囲の反対を押し切って

1 / 1 スケールT A N U K I ぬいぐるみの製作に着手

収集がつかなくなつたため

王都在住の不定形生物さんが

禁断のレベル9

折り畳み式ヘルで

おれたちに制裁を加える

六、樹海在住の今をときめく亡霊さん

同胞たちの悲鳴が聞こえる

騎士A「この森を抜ければ第一のゲートだ……！ 急げ！」

騎士B「！？ 止まれ！ 何かいる」

騎士C「……困まれたか」

鬱蒼と生い茂る木々の中

立ち止まって警戒する騎士たちを包囲するように

おれたちが地面から染み出すように登場する

おれA「お前たちの焦燥が伝わってくるぞ……心地良い調べだ」

おれB「寒い……寒いんだ……」

おれC「手足の感覚がないんだ……ひどく寒い……ここは……？」

おれA「……お前ら、だいじょうぶ？」

騎士A「メノウパル……！ お前たちは、死者の魂を……どこまで
！」

七、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

世界各地で盛り上がっているようだが

魔空間も盛り上がってます

庭園「影ども！ 行け！」

練り上げられた火の宝剣が
千の刃となつて
にゃんこに襲いかかる

ひよこ「ケエツ！」

これを衝撃波で蹴散らすも
少ない傷を負うにゃんこ

ひよこ「エリア・ブラウド！」

ダメージを意に介さず突進するが
影たちに遮られて本体のバスターまで届かない

不眠不休で戦い続ける二人の都市級
その闘争たるや凄まじく
魔都は瓦礫の山と化していた

うず高く積み上がった瓦礫の上で
火の宝剣がふたたび閃いた

バスター渾身の一撃を
にゃんこがくちばしで受け止めて
纏わりついてくる影たちもるとも
大きく翼を広げて弾き飛ばす

にゃんこの瞳が怪しくきらめいたかと思えば
研ぎ澄まされた石の槍が
バスターの足元から突き立ち
黒鉄の鎧を激しく打った

庭園&ひよこ「イズ……！」

たまらず飛び上がったバスターが
火の宝剣のひと振り
石筍を輪切りにした

着地したバスターに
尖塔の壁をぶち破ったにゃんこの
猛烈なチャージが炸裂する

どれだけ鋼を重ね合わせようとも
彼我の体重差はいかんともしがない

木の葉のように吹き飛んだバスターを
にゃんこが組み伏せる

庭園&ひよこ「ロツド……！」

かろうじて原形をとどめていた尖塔が
支点を失って崩れ落ちる中
カツとくちばしを開いたにゃんこを
とっさにバスターが片腕で押しとどめる

ぞろりと生え揃った乱ぐいの牙が
バスターの眼前で大気を食い破った

噛み合わさった凶悪な牙が
くちばしの隙間から覗いている

鳥獣の特徴を併せ持ち
また成熟しきっていない幼体でもあるにゃんこは
本人ベースの変化魔法で
どんな獣にもなれる

もちろん空想上の怪物にも

庭園&ひよこ「ブラウド！」

崩壊した魔都に

目も眩むような紫電が走った……

沈み行く尖塔を

避難を終えた骨のひとたちが
体育座りして眺めている

骸骨A「……どっちが勝つと思う？」

骸骨B「……空のひとじゃねーの？」

おれ「いや、つの付きだろ」

骸骨C「お。姐さん、ギャンプラーだね」

おれ「なんなら賭けるか？」

骸骨D「乗った！」

レベル4同士の死闘を

無力なおれたちは身守ることしかできないのだ……

八、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

軍靴の足音が

何もかもを呑み込んでいくかのようだ

王都のひとが暴徒の鎮圧に乗り出し

見えるのが騎士たちと衝突し

都市級の争いに魔都が崩壊しつつある

一方その頃

海上の勇者一行は平和そのものだ

目覚まし勇者さんの末路に

むせび泣く子狸はともかく

薄く吐息をついた勇者さんが

片手を揺すって聖 剣を散らすと

狐面をねめつけて言った

勇者「家に帰りなさい」

狐面「アレイシアンさま」

少女は構わず勇者さんの両手をとった

狐面「やっとお会いできました」

それが彼女にとって

もつとも重大なことだったのだろうか

勇者さんの手を握ったまま
ぴよんぴよんと跳び跳ねる

勇者さんはされるがままだ

両腕を上下されながら
続けて言う

勇者「コニタ。あなたは戦力にはならないわ。戦いながら魔法を扱
うのは、難しいでしょう？ 騎士ではないのだから。あなたくらい
の年齢なら、それが当然なの」

言外に

おれたちの子狸さんは異常なのだと言っている

戦力外通告された狐面は
うんうんと頷いている

狐面「帰るなら、アレイシアンさまも一緒です。さもなければ、わた
しは死にます」

勇者「勝手にすればいいわ。生きようとしないう人間に、わたしは興
味がないもの」

そう言って両手を振り払う勇者さんに
狐面がまとわりつく

狐面「それは約束がちがう……怒った？」

勇者「いいえ。とにかく、あなたは帰るの。いますぐとは言わないけど、王国に戻ったら街で待機してなさい。迎えを寄越すよう伝えるわ」

立ち直った子狸が

勇者さんの傍に立った

子狸「お嬢の言つとおりだ。事情は知らないが……光るものを持つてる。おれの修行は厳しいぞ」

事情がわかってないなら黙ってればいいのに

子狸の肩にとまった羽のひとが

可愛らしく小首を傾げて言った

妖精「でも、ノロくん。そんなこと言っても、リシアさんのお宝画像は手に入りませんよ？ わたしの目が黒いうちは、お前の好きにはさせませんから」

子狸が目を見開いて反駁した

子狸「おれを見くびっているのか！？ はちみつ一杯でどう？」

妖精「せめてリシアさんの目が届かない範囲で交渉して欲しいです」

子狸「わかった。その件はあとにしよう。二杯でも？」

妖精「しつこいですよ？」

子狸「……いや、だめだな。虫歯になるかもしれない。許可できない」

妖精「お前は、わたしの何なんですか」

子狸と漫才をしている羽のひとを

狐面は興味しんしんといった様子で見つめている

狐面「妖精だ。妖精がいるよ、アレイシアンさま」

勇者「あなた、ずっと見てたんでしょ？」

狐面「やはり実物はちがう……」

実物は違うらしい

狐面の羨望の眼差しに気付いて

羽のひとがにやつと笑う

子狸の肩の上で立ち上がって

びしっとファイティングポーズをとった

静止すること数秒

宙に舞った波飛沫を

鍛え上げられた動体視力で捉え

左ジャブで打ち抜いた

空恐ろしいまでの精密動作だ

子狸「風切り音が尋常じゃない……」

子狸がうめいた

おれ個人の意見だが
妖精らしさをアピールするのに
拳速を披露するのはどうかと思う

しかし狐娘は喜んでいるようだ

狐面「お前とはいいライバルになれそうだ。コニタと言っ」

妖精「はいっ。よろしくお願いします、コニタさん。わたしはリン
カー・ベルって言います」

子狸「……………」

握手を交わす二人を見つめる子狸は
なんだか微妙な面持ちをしている

きつと、自分にとって

あまり嬉しくない未来図を予想したのだろう

ちらつと縋るような目で

おれに視線を寄越してきた

……悪いが、このまま勇者一行に加わるつもりはない

お前は人間なんだから

人間たちと一緒に生きるんだ

おれたちとは違う

九、山腹巢穴在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

一方その頃

アリア家で妙なことになっている鬼のひとたち

腹が決まったようで

王国のひとがちらっと帝国のひとに目配せした

帝国のひとはかぶりを振った

それならばと連合のひとに目を向けると

連合のひとは頷いた

無言の応酬だった

連合「……………」

連合のひとが五本指を立てて

二人の反応をうかがう

帝国「……………」

帝国のひとは反論するように

三本指を立てた

意見が割れた帝国のひとと連合のひとが

揃って王国のひとを見る

王国「……………」

王国のひとは少し悩んでから
三本指を立てた

合意に達した三人が
無言で頷き合う

アリアパパ「……………」

アリアパパもまた無言で
三人の拳動を観察している

この男には
問答無用で周囲の人間を従わせる威圧感がある

勇者さんも大人になったら
こんな感じになるのだろうか

ならない気がする

制限時間は五分だ
残りあと四分と三十秒余

鬼のひとたちが一斉に立ち上がって
ぞろぞろと部屋の中央に移動する

こほんと咳払いした帝国のひとが
ぱっと両腕を広げた

帝国「レジイです！」

連合「ユニイです！」

王国「ジャスミンですう！」

なんかはじまった

帝国「三人あわせて！」

連合&王国「シヨーンコネリー！」

帝国のひとを中心に

びしっとポーズを決める三人

アリアパパ「……………」

アリアパパは

微動だにしない

帝国のひとが片手を上げて宣言した

帝国「シヨートコント。学校」

素早く配置につく三人

ため息をつく王国のひとに

帝国のひとが歩み寄る

帝国「どうしたんだい、ジャスミン？ 元気がないね」

王国「ああ、君は……ええと？」

帝国「レジィ」

王国「そう、レジィ。聞いておくれよ。時間がないから端折るけど、つまり成績が悪くて人生の見通しが立たないんだ」

帝国「なんだって？ ジャスミン、君はもしかしてR&Yを知らないのか？」

王国「R&Y？ はじめて聞いたな。新しいバンドかい？」

軽快な口調だ

帝国のひとが振り返って声を張り上げる

帝国「ユニィ！ ユニィ、聞いたか？」

部屋の片隅で待機していた連合のひとが
パントマイムを交えて二人に歩み寄る

連合「ぷしゅっ。ふい〜ん。ぷしゅっ。呼んだかい、レジィ？」

なにそれ。自動ドア？

いきなり世界観がわからなくなったな……

早足で歩いてきた連合のひとが

王国のひとの肩を軽く叩く

連合「やあ！ この前のバーベキュー、最高だったよ。また誘ってくれ」

王国「そう言う君は、どちらかと言うと恋の炎に焼かれないといったところかな、ユニイ？」

連合「こいつは一本とられたな、ええと、ステファニー？」

王国「ジャスミン」

連合「そう、ジャスミン。2カットほど飛ばして言うけど、レジイから話は聞いたよ。R & Yを知らないだって？」

王国「そうなんだよ。何なんだい、そのR & Yって？」

帝国「僕の台詞だから僕が説明するよ。R & Yは誰でも簡単に、いかい、誰でも簡単に成績が上がる教材のことなんだ。個人の感想だけどね」

王国「おいおい、信じられないな。そんな夢みたいない教材があるもんか」

連合「誰でも最初はそう言うんだ。でもR & Yは確かな実績を上げてる。これは君だから打ち明けるんだけど、じつは仮入会というシステムがあつて、僕かレジイを通してくれれば気軽にお試しコースにチャレンジできる。どうだい？」

王国「本当かい？ なんだか悪いな」

帝国「もちろん口利き料はきっちり貰うけどな？」

王国「ふふ。よく言っよ」

帝国「ははは。冗談さ。半分くらいね。何はともあれ、じっさいに試してみるのがいちばんだ」

連合「よし！ そうと決まったら、さっそくレジイの家に行ってみよう」

二人の肩を叩いた連合のひとが
ふたたび部屋の片隅に戻る

場面が変わったらしい

王国「でも、そんな急に変わるものかな？ 僕は飽きっぽいとい
うか、どんなことも長続きした試しがないんだ」

帝国「心配いらさないさ、ジャスミン。R&Yは安心確実がモットー
だからね。そんな君にも最適なプログラムを用意できる。具体的
に家庭教師を派遣してもらえるんだ」

王国「教材だけじゃなくて教師まで？」

帝国「そう。彼らはプロだから、君の不安をきつと拭い去ってくれ
る。出張料は別途だ。……しっ！ 屈んで」

何かに勘付いた様子の帝国のひとが
その場で屈み込む

連合「オオオオオオオオ……」

帝国「なんだ、猫か」

立ち上がった帝国のひとが続ける

帝国「ザザツ。ユニオン？　こちらレジスタンス。ターゲットの邸宅に潜入した。指示をくれ」

連合「ザザツ。こちらユニオン。確実に仕留める。成功を祈る」

王国「レジィ？　どうしたんだい？」

帝国「気にしなくていいよ。さつきも言ったけど、R&Yは安心確実がモットーなんだ。さっそくだけど、ミッションだ」

王国「いきなりかい？　自信がないよ」

帝国「だいじょうぶ。おちついて、ジャスミン。深呼吸して。ゆっくりと周りを見渡すんだ。どう？　簡単だろ？　僕はプロフェッショナルだからね。僕についてくれば間違いないさ」

王国「なんだって？　驚いたな。どうりで見覚えがないと思ったよ」

帝国「そう？　僕は運命的なものを感じたけど。戦歴は？」

王国「二千以内なら確実にヒットする自信はある」

帝国「わお！　君がああの伝説のソルジャーだったなんて。信じられない」

王国「僕も信じられないよ。ユニイの台詞だしね。なんで戦歴なんて聞いたんだ？」

近寄ってきた連合のひとが

二人の肩に腕を回す

連合「二人とも話しはまとまったみたいだね。体調はどう？」

王国「少し目が霞むかな」

連合「睡眠はたっぷり？」

王国「二日前にね」

連合「家族には何と？」

帝国「ここ一週間ほど妻とは口を利いてないんだ。娘の教育方針でもめてね」

連合「娘さんは味方をしてくれない？」

帝国「なかなか僕の顔を覚えてくれない」

連合「ばっちりだ。よし行こう」

連合のひとが両手を打ち鳴らして

それを合図に三人が一齐に振り返る

アリアパパを指差して

鬼ズ「シヨーンコネリー」

アリアパパ「……………」

おい。にこりともしてない

帝国「……………おい。滑ったぞ」

そう言っつて帝国のひとが

連合のひとの胸を軽く小突いた

連合「は？ おれの責任かよ」

もみ合いをはじめる二人に

王国のひとがぼそりと言う

王国「ツツコミが弱い」

帝国「あ？ 何か言ったか？ おい」

王国「おれのボケを活かしきれてない」

トリプルボケだったじゃねーか

帝国「なんだ、お前。いや、よくわかったよ。お前は昔から何かつーと……………」

連合「おい。喧嘩すんなよ」

王国「いや、元はと言えばお前が……………」

連合「あ？ おれが何よ。言えよ」

帝国「おい。逃げてんじゃねーよ」

王国「あ？ 誰が逃げたよ」

もみ合いをはじめる三人

無言で小突き合ってから

くるりと振り返って

びしつとアリアパパを指差した

鬼ズ「ショーンコネリー」

アリアパパ「……………」

鬼ズ「……………」

きつかり五分だ

無言で席に戻る三人

左側に座ろうとした帝国のひとと

王国のひとが無言でもみ合いになる

帝国「……………」

王国「……………」

今度はリアルファイトだ

神速の踏み込みで懐に潜り込んだ王国のひとが
帝国のひとを投げ飛ばした

見ていると惚れ惚れするような払い腰だった

勝利をおさめた王国のひとが
しれっとした顔でソファの左端に座る

二人がもみ合っているうちに
連合のひとは右端を陣取っていた

絨毯の上で大の字になった帝国のひとが
濁りのない眼差しで天井を見つめている

ゆっくりと上体を起こして

帝国「……くそがつ」

小さく悪態をついた

しっかりとした足取りで歩いて行って
ソファの真ん中におさまる

腰掛けた三人を

アリアパパはじっと凝視している

やがて彼は言った

アリアパパ「いいだろう。あれの剣については、お前たちが好きに

しろ」

鬼ズ「いいの!？」

アリアパパ「常識的に考える。何をしてもいいなどという条件があるものか」

つまり答えはすでに決まっていたということだ

呆然とする三人を

アリアパパは満足そうに見つめて
こう言った

アリアパパ「五分あれば、あの出来損ないが都市級を出し抜くこともできる。参考になった」

「失うもの、得るもの」（後書き）

注釈

・折り畳み式ヘル

禁断のレベル9。対象に地味な単純作業を強いた上で達成直前にご破算になる幻覚を延々と見せる。感覚に訴える魔法なので、体感時間を幾らでも引き伸ばせる。

あらゆる魔法に対して入念に対策が施されていて、受刑者の脱出を自動的に察知して場面が切り替わる（折り畳まれる）ことから、脱獄は困難を極める。夢から覚めたら、また夢だったという感覚に近く、この責め苦の直後は現実と夢の区別がつかなくなるという報告もある。

「おれのおとなりさんは陸上最強生物」 part 1

一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

旅の仲間に狐娘を迎え

ますます肩身が狭くなる子狸

タフな相棒が欲しいと嘆きつつ

お馬さんたちと狐さんのお世話に奔走する日々だ

食糧問題に関しては

子狸と狐娘が釣り担当に就任したことで解決を見た

狸と狐は相容れないものなのか

この二人は何かと競争したがる

狐娘「今日もわたしの勝ち」

子狸「後ろのひとたちは誰だ」

狐娘「わたしは忍だと言ったはず。これぞ分身の術」

子狸「なんてことだ……。まるで別人に見える」

忍法を駆使する狐娘に

子狸は苦戦をしいられる

調理担当は相変わらず子狸だ

自分の生活力に一抹の不安を抱いたのか
一度だけ勇者さんが協力を申し出たのだが

子狸「お前たちと出会えた今日という日を！ おれは忘れない！
感謝のインフェルノ！ ゴル・ロッド・グノ！ 波ーっ！」

勇者「……………」

子狸の本気すぎる調理実習に
二日目以降は姿を現さなかった

朝食を終えたあとは
恒例の乗馬訓練だ

一週間で適応した子狸は
次のステップに進んだ

羽のひとの監修のもと
過酷なG訓練に挑む

妖精「おおっと、ここで急カーブだぁー！」

子狸「くっ、身体がばらばらに砕け散りそうだ……………」

勇者「……………」

暴れ馬と化した三角木馬を乗りこなすに至った
おれたちの子狸さんに死角はない

乗馬訓練と並行して

ポンポコ学園物語も怒涛の展開を迎える

子狸「そのときおれに電撃走る……!!」

勇者「電撃」

子狸「そう、これだ！　ってね」

勇者「……そう」

教官の後輩が学校にやって来て

彼女を騎士団に連れ戻そうとした事件だ

もともと教官は

将来を嘱望された騎士候補生だったらしい

言うまでもなく

発電魔法とは無関係なエピソードのだが

子狸のひとりなりを知るにはいいと思ったのかもしれない

勇者さんは口を挟まなかった

二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

？　そんな事件あったっけ？

三、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あつたよ

こつ言えばわかる？

はじめての鞭打ち事件だ

四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

ああ、あれね

未来永劫、語り継がれるんだな……
教官の晴れ姿は

五、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おれたちは運命共同体だからな

もしものときは子狸も道連れだ

六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

管理人だからな

考えようによっては
全責任は子狸にあると言ってもいいはず

七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中）

むしろ子狸の単独犯だと断言してもいいはず

八、管理人だよ

死なばトレモロという言葉もある

九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）

そんな言葉はない

正しくは、死なばもろとも

死ぬときは一緒ということだ

とにかく……

話を進める

お昼から夕方にかけては
自由時間になる

子狸が芸術に励んだり
裁縫の習熟にあてたり
奇行に走ったりするのが
この時間帯だ

勇者さんは

たいてい読書して過ごす

その傍らで羽のひとは瞑想するわけだが
つい先日

チャクラが開いたらしい

あまりおかしな概念を持ち込まないで欲しいと
せつに願う

新メンバーの狐娘は

布団の上でごろごろして過ごす

狐娘「アレイシアンさま。遊ぼう」

勇者「魔法の練習はどうしたの？」

狐娘「明日からやる」

子狸「……………」

その翌日、甲板で待ち受ける子狸の姿があったが
いつまで経っても彼女は現れなかった

勇者「魔法の練習は？」

狐娘「今日は本を読む日。これ、なんて読むの？」

勇者「どれ？」

狐娘「これ」

勇者「魔界。魔物たちのふるさとのこと」

魔法に頼ることをしない勇者さんは

定時に寝て、定時に起きる

規則正しい生活が身についている

ちなみに狐娘は

子狸にベッドを明け渡すよう強硬に主張したが

これは勇者さんに却下された

勇者「わざわざ戦力を分断してどうするの」

狐娘「しかし」

勇者「あなたは、わたしと一緒に寝ればいいわ。狭いけど我慢なさい」

狐娘「その言葉が聞きたかった」

船内の客室はそう広くない

ベッドを三つ置くのは無理だから

おのずと選択肢は限られてくる

子狸「女狐めえ……」

子狸は悔しそうだった

嫉妬の心が熱く燃え盛る

ときに狐娘は

ふだんお面で素顔を隠している

ごはんを食べるときも

お面をずらして肌の露出を最低限に抑えるので
ポリシーがあるのだろうと思って見ていたら
たんなるファッションだったらしい

お風呂に入るときと就寝時はふつうに外す

子狸「……お嬢、また新しい子を連れ込んだの？」

勇者「……？」

妖精「見分けがついてないみたいですよ」

狐娘は子狸に手厳しい

狐娘「じろじろ見るな」

子狸「おれの弟子をどこへやった！」

狐娘「お前に弟子入りしたつもりはない」

子狸「わけのわからないことを……！」

ヒートアップする子狸に

狐娘が身構える

一触即発かと思われたが

勇者「……部屋の中で騒ぐなら出て行ってもらえる？」

子狸&狐娘「寝ます」

勇者さんに叱られて
いったんは大人しくなる

妖精「きちんと寝ないと大きくなれませんよ？」

羽のひとは狐娘に優しい
人前では猫をかぶっているからだ

一〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

勝手なことを言うな
お前らがろくなことをしないからだろーが

最初の一週間は天候に恵まれた勇者一行だが
二週間目には暴風と大雨に見舞われた

緊急会議が発令されたのは
日付が変わろうかという時刻である

勇者一行が会議室に集合したとき
そこでは、すでにジョーたちが議論を交わしていた

アイアン「いや、だいぶ波が高くなっている。備えは早いに越した
ことはない」

ゴールド「最善を尽くすべきだ」

シルバー「……進路が変わらないとも限らない」

ノーマル「そのつど対応すればいい」

アイアン「そんな余裕があると思うのか？ 一度で成功するという保証もないんだぞ」

近寄りがたい雰囲気である

二の足を踏む狐娘を押しつけて
勇者さんが会議の輪に加わった

勇者「嵐が近付いているのね。状況は？」

子狸「……………」

特訓の真つ最中だった子狸は
体力が限界に達しようとしていた

のそのそと歩いて行って
静かに着席する

ジョーたちが口々に報告した

アイアン「このまま北上を続ければ、遅くとも両日中には直撃する」

ゴールド「早ければ半日後だ」

シルバー「近くに島はない。錨を下ろして耐えしのぶか、あるいは強行するか……二つに一つだ」

ノーマル「おれたちは自然現象には手出しできん。ここの眠そうなポンポコの手には余るだろう」

人間たちにとって嵐は災禍かもしれないが
一方で恵みを受ける動物たちもいる

長い目で見れば

自然現象というのはサイクルするものだから
それを魔法で捻じ曲げれば
必ずどこかで手痛いツケを支払うことになる

そうでなくとも

二番回路に保護された天災に
人間たちが抗うすべはない

円卓に前足を揃えて置いて
うなだれたまま子狸が言う

子狸「わたあめ……？」

子狸のつぶやきに

枕を持参した狐娘が感応した

狐娘「わたあめ」

だめだ、こいつらは役に立たない

おれ「嵐の中だと、わたしは飛ばません。リシアさん、ここは三時間ほど様子を見てはどうでしょう？ 運が良ければ暴風圏を抜けら

れるかも」

とにかく距離を稼いで

ある程度の余裕を見越して錨を下ろすという案だ

不安要素が多すぎるため

慎重に慎重を重ねたい

子狸を除く全員に注目されて

勇者さんは決断を下した

勇者「そうね。まずは針路を保つ……時間の勝負になるわ。一人残して、あとはトリコロールに回って頂戴」

アイアン「え？ トリコ……なに？」

勇者「トリコロール」

ゴールド「ちょっ、ごめん。もう少し大きな声で言ってくれろ？」

シルバー「トリまでは聞こえた。何をしろって？」

「いっら……」

勇者「……………」

勇者さんは少しためらってから
どどこか恥ずかしそうに言った

勇者「トリコロール」

骨ズ「ほう……」

子狸「！」

子狸が覚醒した

カッと目を見開いて跳ね起きる

子狸「おれだアーツ！」

よくわからないが

トリコロールと一体化した子狸が
ぎらついた目でジョーたちを見る

ゴールド「やだ、目がイッてる……」

子狸「お前ら！ 最後の力を振りしぼるなら、いまだろ！」

シルバー「まあ、そうね。女子供の出る幕じゃない」

アイアン「よし、行こう！」

三種のジョーを扇動した子狸が
前足を突き上げて鬨の声を上げた

子狸「トリコロール！」

金&銀&鉄「トリコロール！」

会議室を飛び出していく四人

つい忘れがちになるのだが
船底部の歯車を回す作業に
これといった意味はない

無駄骨だ

無駄骨だ……

――、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

まるでおれたちの存在を否定しているかのようだな

いずれにせよ

濃厚な三週間だった

長い船旅を終えて

そして今日

とうとう勇者一行は

緑のひとの家がある島に上陸した

王種が住まう地である

下船する勇者さんに

おれたちを代表してノーマルが言う

取り戻したこん棒は

しっかりと腰に差してある

ノーマル「名残り惜しいが、ここでお別れだ」

勇者「……そう。あなたたちには借りが出来たわね」

おれ「帰りはどうするんだ？ なんなら迎えに来ても……」

一一、迷宮在住の平穩に暮らしたい牛さん

騎士A「が……あ……」

おれ「……」

騎士B「た、隊長ーっ！」

一一三、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

おれ「……と言いたいところだが、おれたちにも都合があるからな」

勇者「構わないわ。無人島というわけではないから、あまり多くないけど定期便もある」

おれ「すまない。本当に。本当にごめんなさい」

ゴールド「本当にね」

シルバー「うん、本当に……」

ノーマル「心の底から申し訳ないと思ってる」

勇者「………?」

誠心誠意の謝罪に

勇者さんは小首を傾げた

彼女の肩の上では

羽のひとが小さな身体で

精いっぱい伸びをしている

勇者「みなさんは、これからどうするんですか?」

魔王軍に戻るのかということだろう

ノーマル「リリィと合流するつもりだ。あとのことは、それから決める」

波打ち際では

子狸と狐娘が砂のお城を合作している

デイテールにこだわる子狸に対して

狐娘はトンネルの開通に腐心していた

別れの時間だ

黒雲号を連れた勇者さんに

おれたちは一人ずつ言葉を贈る

ゴールド「達者でな。ポンポコについては、あまり気にしないほうがいい」

シルバー「緑のひとよろしく伝えてくれ。光の精霊はお前に宝剣を託し、あいつを寢床に選んだのだらう。仲良くな」

アイアン「魔軍 元帥とは打ち合うな。あのひとは空中回廊の出身だ。槍術も弓術も廃れていったというのに、剣術だけが残った。それは魔法剣士たちの執念だ」

ノーマル「悪くない船旅だった。人型の魔物には用心しろ。あるいは都市級よりも、お前たち人間に近いぶん強敵になるだらう」

おれ「完全な結界は存在しない。覚えておくといい。次に会うときは敵同士かもしれないな。だが、ためらうな」

一四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中）

出航する直前

子狸は骨のひとたちとの別れを惜しんで

抱き合って互いの無事を祈った

勇者さんが

彼らと触れ合うことはなかった

彼女の退魔性は

魔物たちにとって苦痛だからだ

触れ合うこともできないのだと

双方が理解していた

遠ざかっていく幽霊船を
見送り続ける子狸の後ろで

勇者さんが

片手を

かすかに

揺すった

音もなく形成された光の刀身が

ゆらり

ゆらりと

不安定に

揺れている

魔物が魔物を撃つとき

魔法はもつとも実現性を帯びる

であるならば

聖 剣が最大の力を発揮するのも

魔物を討つときに他ならない

子狸「！」

勇者さんが聖 剣を構えたのと

子狸が振り返ったのは同時だった

勇者「やっぱり」

ぼそりと呟いた勇者さんが
聖 剣を振り抜く

いわゆる一種の
死霊魔突斬だった

子狸「デイレイ！」

子狸が格上の相手と互角の戦いを演じるのは
魔法に対する嗅覚が鋭いからだ

飛び上がった子狸が
盾魔法で光刃の侵攻を食い止める

負荷に耐えきれず
力場が歪み、砕け散る

吹き飛ばされた子狸が
肩から海面に落ちた

妖精「っ……！」

直視に耐えないと
羽のひとが目を逸らした

彼女は、たぶんこうなるとわかっていた

かつて鬼のひとたちを斬り捨てた勇者さんが

魔王軍に戻るかもしれない骨のひとたちを
見逃す道理がないからだ

その道理が子狸には理解できない

子狸「なんで……？」

ずぶ濡れの子狸が

浅瀬で四つん這いになっている

勇者さんは目を逸らさない

やっぱりと彼女は言った

ならば、続く言葉は決まっていた

勇者「あなたは庇うのね」

バウマフ家の人間は

常に人間と魔物の間で揺れる存在だ

人間の側につくのか

魔物の側につくのか

子狸「おれは……」

ずっと先送りにしてきたことだから
いま問われても

子狸には答えが出せない

立ち上がることはできても

言葉は出てこなかった

でも、と勇者さんが言った

勇者「それでいいのかもしれない」

聖 剣を散らすと

くるりと反転して歩き出す

立ち尽くす子狸を

肩越しに振り返って

声をかけた

勇者「行きましょ」

子狸「え？」

勇者「備えは必要だと思う。けれど、そうじゃないほうがうまく行くこともある」

勇者さんには

常に最悪の状況を想定して動く癖がある

それ自体は悪くないし

むしろ良いことだ

だが、ひとの心を動かしてきたのは
往々にして

この、ままならない感情だ

砂浜でしゃがみ込んでいた狐娘が

拾い集めた貝殻を高々と掲げている

それらは陽光を反射して
きらりと輝いた

一五、管理人だよ

ああ、びっくりした

バレたかと思った……

一六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、もうこれ完全にバレてるだろ

一七、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

九死に一生スペシャル、おれ

一八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

でも牛さんがお前を待ってる

「おれのおとなりさんは陸上最強生物」 part 1 (後書き)

注釈

・はじめての鞭打ち事件

文化祭に乗じて校内に潜入した騎士候補生（教官の後輩）が、教官を騎士団に連れ戻そうとした事件。

教官の教師としての適性を問われたため、現場に居合わせた子狸が一騎討ちを挑んだ。

見習いとはいえ特装騎士に敵うはずもなく、圧倒的な実力差に打ちのめされるが、まったく屈しようとしないう子狸の姿に教官が感動していた。

しかし思案をめぐらせた子狸の提案で、教官が全校生徒の前でコスプレ姿をお披露目することに。メイド服だった。

のちに教官の手で仲良く鞭打ちされた二人だったが、きちんと和解したようだ。

わかり合えたようで何よりである。

「おれのおとなりさんは陸上最強生物」 part 2

一九、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

鬼のひとたちがアリア家の工房にこもってから
じつに二週間が経過した

音沙汰はいつさいないが

貴族に仕える剣匠は、その機密性ゆえ

高い職人意識を持っている人間がほとんどだ

あらかじめ打っておいた剣を持参したという話であるし
きつとうまくやっていることだろう

そう信じたい

苛められていないか

心配ではあるが……

いま、われわれが真に憂慮すべきは

この島に住んでいるはずの

青いのんと緑のんが

不気味な沈黙を保ち続けていることではないのか

おい。なんか言えよ

二〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

火口の？

一一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

まさかのノーリアクションである

一二、管理人だよ

これは罠に違いない。引き返そう

一三、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

野生の勘によるものか

子狸にしては鋭い見解であった

一四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

知らぬが仏というやつだな

勇者さんが緑のひとに何の用があるのかは知らんが

おれたちにとっては好都合な展開だ

引き返すという手はない

行け、ポンポコ

世界の平和は

お前に任せた

二五、管理人だよ

めっじゅ〜

二六、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

気に入っちゃったの……？

よくわからんが

じつにちよろいポンポコである

二七、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

承諾してもらえたようなので
状況を説明する

勇者一行が降り立ったこの島は
緑のひとが住んでいることで有名な観光スポットだ

地理的には王国領土に近いものの
王種が君臨する島を

自分のものだと言い張る勇氣は
どこの国にもない

嫌いな言葉だが

障らぬ神に祟りなしという言葉もある

本来なら人が立ち入ってはならない魔の領域として扱われるのだが近年は人間になめられているようで

国に属することをよしとしない者たちが小さな集落を築きつつある

帝国兵を装った王国騎士や

王国兵を装った帝国騎士が

定期的に立ち退き勧告を求めてくるのでよそものには厳しい風土だが

観光客が落としていくお金で

島民の生活は成り立っている部分があるため最終的には騙し合いへと発展し

放っておくとゲリラ戦が勃発する

大陸の情勢が不安になっていることから

以前のような活気はないが

死活問題なので

一定数の船の出入りは確保しているようだ

幽霊船が大手を振って入港とかありえないので

我らが勇者一行は

連合国がよく使う密輸ルートを用いて上陸

勇者さんの特命を帯びた羽のひとが

前もって先行調査を実施したため

周囲に人影は見られない

あまり大きな島ではないので
海岸線に沿って歩けば
半日ほどで人里に辿りつけるだろう

密林を突破するルートもあるにはあるが
さして近道というわけでもない

豆芝さんは下船するなり
久しぶりの陸地とあって
嬉しそうに砂浜を駆け回っていた

黒雲号はおちついたものである

このへんは性格の差だろう

狐娘「アレイシアンさま」

拾い集めた貝殻を大事に抱えて
駆け寄ってくる狐娘を
子狸が反復横飛びで迎え撃つ

子狸「いいもん持つてるじゃねえかよう。よう。よう。」

勇者さんをめぐるライバルだからなのか
狐娘と接するときの子狸は
精神年齢が怒涛の勢いで急落する

子狸「ちよつと見せてみるよう。よう。よう。」

狐娘「お前には絶対に見せない」

子狸「ひゅー！」

狐娘は子狸を敵視している

断固拒否の構えをとる彼女に

子狸がへたな口笛を吹いて喝采を上げた

変質者じみた動きで

狐娘の周囲をぐるぐると回っていた子狸が

不意に動きを止めて

森のほうへと視線を振った

子狸「むっ？」

いちおう都会育ちなのに

野生動物じみた直感をしている

火口「……………」

木の陰から

こそつと火口のが勇者一行を見つめていた

子狸と目が合って

にゅつと触手を伸ばす

無言で

どしゅつと撃ち出した

狙いは勇者さんだ

子狸「デイレイ！」

逸早く反応した子狸が

火口のんと勇者さんの間に割り込む

しかし高速で迫る触手は

直角にカーブして力場を回避

子狸の側頭部を撃ち抜かんとする

子狸「!？」

完全に死角を突いた一撃だ

子狸が回避できたのは

直感によるところも大きいのだろうが

ほとんど偶然に近い出来事だった

足場が砂地で踏ん張れなかったらしく

片ひざをついた子狸が

頭上をかすめていった触手に

遅れて自らの幸運を知った

火口「……………」

初撃で仕損じた火口のが

触手を引っ込めて

さっと身を引く

勇者「深追いはしないで」

地形の不利を悟った勇者さんが

簡潔に指示を飛ばした

彼女の肩から

羽のひとがぱっと舞い上がった

妖精「マジカル ミサイル！」

人前でおれたちは這って進むことしかない

最高速で撃ち出された光弾を

火口のは身をよじってかわした

難なくだ

半液状ならではの回避法だった

妖精「なっ!？」

子狸「こいつ……! いままでのやつとは……!」

勇者さんの退魔力を

肉弾戦で突破することは至難のわざだ

精神的に崩れるということもない

だから火口のは

反撃のレクイエム毒針を

徹底して子狸にしぼった

回避に専念した子狸が

砂の上を転がってしのご

子狸「レクイエム部隊か……！」

勇者「毒持ち……」

一般的に魔物は、個体差が激しい種族だと言われている

その象徴とされるのが

毒持ちと呼ばれる

奥義を解禁した青くてニクいやつだ

疎らに差し込む木漏れ日が

小刻みに震える体表を滑り落ち

波打つかのようだ

一撃ごとに抜け目なく

奥へ奥へと後退していく

子狸「誘っているのか……？」

困惑する子狸を

不甲斐ないと見てか

狐娘が参戦した

狐娘「チク・タク・ディグ」

なんのひねりもない圧縮弾を

火口のは訳なく回避する

次に反撃があるとすれば

おそらく彼女が犠牲になる

子狸「下がれ！」

鋭く叫んだ子狸が

砂を蹴って躍り出た

子狸「あいつの狙いはおれだ」

勇者「待ちなさい。きっと伏兵がいるわ」

飛び出そうとする子狸を

勇者さんが制止した

すでに聖 剣は起動してある

死霊魔哭斬を使えないかと試みているようだが
火口のは彼女から見て

全身を露出しないよう移動を繰り返している

たったそれだけのことで

勇者さんの必殺技は封じ込めることができる

実戦経験が

少なすぎるのだ

そう、実戦だ

勇者一行は、ここに来てはじめて
設定が許す限りにおいて

全力で戦う魔物と遭遇したのだ

ここにいる誰よりも

おれたちに打ちのめされてきた子狸だから

火口のんの本気をまざまざと感ずることができた

子狸「移動しよう。森の中だと絶対に勝てない」

その判断は正しい

おれたちは人前で飛んだり跳ねたりはしない

だが触手を使いこなせる個体なら

森の中での三次元運動が可能になる

視界を遮る密林は

魔法の精度を極限まで削るだろう

それらを避けるためには

海岸線に沿って歩くしかない

死を孕んだ鎮魂の狙撃に

おびえながらも……

勇者一行の

逃避行がはじまる

二八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

ちわ

二九、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

待ってたよおおおっ！

三〇、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

あのさあ……

王都のひと？

お前さん、同じ青いのがからってひいきしてない？
なんか叙述が……

三一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

え？ そつ？

いつもこんなもんだよ

な？ お前ら

三二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

むしろ物足りないくらいだ

本気を出したおれたちは

こんなもんじゃない

三三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

青いひとたちが本気を出しはじめた

一方その頃……

コアラ「位置について」

庭園「……………」

コアラ「よーい、スタート！」

庭園「……………！」

黒妖精さんの合図で

黒騎士が華麗なるスタートを切った

魔軍 元帥の

魔軍 元帥による

魔軍 元帥のための

世界最長級マラソンの幕開けである

三四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

お前ら、おれに何させてんの……

「おれのおとなりさんは陸上最強生物」 part 3

三五、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

レベル4同士が衝突した余波で

魔都は跡形もなく崩壊した

叩き碎かれ、隆起した岩盤に刻まれた巨大な爪痕が
戦いの激しさを物語っている

飛散した瓦礫が結晶の砂漠に突き立ち
かつては見られなかった峡谷を
底の知れない闇がたたえている

だいぶ地形も変わった

切り立った崖の上を
順調なペースで走る子狸バスター

庭園「ほっ、ほっ、ほっ」

骨のひとたちの声援に

片手を上げて応える余裕もあつた

瓦礫を撤去していた骨のひとたちが
観衆に加わって嬌声を上げる

片手を上げたまま

コースに沿って曲がった黒騎士の

まっすぐ伸びるつのが
稲光を反射して
きらりと光った

歓声は鳴り止まない

走る

走るつの付き

なぜ走るのか

経緯はこうだ

魔王の騎獣を務めてきた由緒正しき魔獣と
魔王の右腕として辣腕を振るってきた魔軍 元帥の激闘は
後者の敗北という結末で幕を閉じた

惨敗だった

一時は互角に見えた両者だったが
にゃんこが変化魔法を織り込みはじめた頃から
黒騎士は防戦一方となり
一度でも趨勢が傾いてしまえば、あとは一瞬だった

自宅が空中回廊に程近く
誰よりも剣士に詳しいと
常日頃から豪語していた中のひとは
にゃんこの多彩なアクションに対応しきれなかったのだ
手足を砕かれ

砂漠に横たわったつの付きを
子供たちにはお見せできない姿と化したにゃんこが
憐れみをもって見下していた

庭園「……ころせ」

ひよこ「……………」

にゃんこの双眸に宿っていたのは
同情と呼ばれるものだったに違いない

戦いの終わりを告げるように二歩さがると
決着を見届けた骨のひとたちが
わつと押し寄せて
哀れな敗残兵を取り囲んだ

彼らは口々に慰めの言葉をかけた

骸骨A「いや、まあ……仕方ないんじゃないか。な？」

骸骨B「お、おう。ハンデ戦みたいなものだったし。うん」

骸骨C「レボリューションもなしに健闘したんだから、大したもんだよ。うん」

重苦しい沈黙が流れた

青いひとたちは変化魔法に頼らずとも
自由自在に形態を変えることができる

連中が最終奥義とか言っているレボリューションは
じつのところ互いの足を引っ張って弱体化するだけである
周知の事実だった

つまり魔王軍の頂点に位置する黒騎士は

万全の体制にありながら

部下を相手に

完膚なきまでに敗北したのだ

庭園」……………」

黒騎士の視線の先にあるのは
空を覆う分厚い暗雲だけだった

超空間と魔空間は原理的に同じものなので
天候は擬似的なものでしかない

触れてはいけないところに触れてしまった骨のひとが
慌てて言い繕った

骸骨C「あ、いや……。ひ、火の宝剣とか、あんまり意味ない、で
すし……………」

骸骨D「そ、そうだよな。座標起点があるんだから、むしろ不利に
なるっていうか……………なあ？」

だが、魔法ではなく道具という扱いになっている精霊の宝剣は
無詠唱という特性を残しつつも
レベル4に致命傷を与えうるといふ設定だ

反則的な武器なのである

同意を求めて視線を振る骨のひとに
他のひとたちもうんうんと頷いた

しかし、この結末に納得できない勢力も
また存在したのだ

骸骨E「……それでいいんスか？」

一人の骨のひとが
ぼそりと言った

擁護派のひとたちがぎょつとしたのは
誰しもが心のどこかで同じことを思っていたからだ

一同の注目を浴びた骨のひとが
やりきれないとばかりに視線を逸らして言う

骸骨E「おれは……あんたが最強だって信じてたんだけどな。元帥
だろ。何してんだよ」

骸骨C「ちよつ、待てよ！ 元帥だからって……」

骸骨E「いや、言うよ。そうだろ？ じゃあ、おれたちは、なんで
このひとについてきたんだよ」

骸骨C「ちがうだろ！ 元帥はそういう役職じゃねえ！ おれは…
…おれたちは……！」

骸骨E「わかってるよ。わかってる……。いちばん強いのはグラ・ウルーだろ。そんなのわかってる。でも」

魔王が必ずしも最強の兵ではないように

魔軍 元帥とて無敵の兵というわけではない

魔王軍きつての最大戦力は

魔人と謳われる最強の魔獣だ

骸骨E「でも、おれは信じてた。あの魔人にだって、おれたちの元帥は負けないって。そう……。信じてたんだ」

長い……

長い沈黙が一同を包み込んだ

今代の魔軍 元帥は

鬼のひとたちが世に送り出した世界の鎧シリーズ
その五作目にあたる

つの付きという二つ名は

魔王軍を代表する古参兵の呼称であり

歴代の旅シリーズで重要な役どころを担ってきた
魔物たちのヒーローだ

頭上で飛び交う部下たちのやりとりを

甘んじて受け入れていたつの付きが

小さな声で呟いた

庭園「……メイガス・アイリン」

蚊の鳴くような詠唱だった

にゃんこに打ち砕かれた手足が
またたく間に復元する

しかし失墜した権威は

よろよろと立ち上がった黒騎士のつのが

ぴきりと

不吉な音を立てたのを
その場にいた全員がはつきりと耳にした

それは誇りそのものだった

世界の鎧シリーズに共通する
全身を覆う甲冑は

騎士たちの勇姿にあやかっている

つのは彼らとの区別化を図るものであり
逃げも隠れもしないという覇気を体現したものに他ならない

そのつのが

根元から折れて

瓦礫に当たり

こつんと

思いのほか軽い音を立てた

ころりと足元に転がった誇りの残骸を
もはやつの付きですらなくなった黒騎士が

背中を丸めて見つめる

庭園「おれは……」

進むべき道を見失った

迷子のようだった

骸骨E「折れたら直せばいい」

先ほど魔軍 元帥を罵倒した骨のひとが
両ひざを曲げて言った

黒騎士へと差し出した両手の上には
つのが乗っていた

骸骨E「一度は折れた骨だって、つながれば、より太くなる」

庭園「……もう折れないか？」

骸骨E「折れるさ。折れてもいいんだ。また、つなげばいい」

庭園「そうか。そうだな」

片手を差し伸べた黒騎士が
受け取ったつのをぎゅっと握る

おれ「じゃ、マラソンということで」

庭園「え？」

おれ「マラソンだろ」

堕ちた誇りを取り戻すため
魔軍 元帥は走るのだ

そう、これは再生の物語……

おれのロイヤルゼリーは
もう戻らないけど

三六、墓地在住の今をときめく骸骨さん（出張中

大穴なんて狙うから……

三七、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん

うるさい

三八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

経緯はわかった

羽のひとつてさあ……

なんだかんだでレベル4なんだよね
いいバランス感覚してる

分身に代わって礼を言うよ

三九、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

は？ なに言ってるの、お前？

お前はむかしから何かつーと

ひとの心を見透かしたかのようなことを口にする

そんでもって

そういつところに気が付ける自分を

子狸にアピールしようとする

だから末吉なんだよ

四〇、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

おみくじは関係ないだろ！

四一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

思ったより微妙だった……

四二、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

逆にリアルで悲しくなる

四三、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

そんなお前らにお知らせがあります

おれんち、リニューアルすつから！

四四、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

おお

四五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おお

四六、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

おお

間取りは？ もう決めてるの？

四五、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

骨のひとたちと相談してるところだけど

廊下をもっと広くして

おれが乗っかる台座みたいなのが欲しい

石像と見せかけて、じつはおれみたいな

四六、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

いま、ひどいネタバレを見た

ちょっと〜……そういうのやめてくれる？

いざつてなったとき

リアクションに困るんだよ

四七、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

いいじゃん、べつに

わあつとか言ってくれば

目えきらきらさせてさ

四八、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

お前とは、いずれ決着をつけるからな

魔軍 元帥をのした程度で調子に乗るなよ

四九、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

乗ってませんし

五〇、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん
乗ってますし

五一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中
空と羽が不毛な言い争いをはじめた一方その頃……

子狸さんはまじめにがんばっていた

事態はひっ迫している

勇者さんの許可を待たず
前足で砂地を叩き、叫んだ

子狸「デイレイ・エリア・エラルド！」

視力が許す限り最大の規模で
海岸線に防御壁を張る

深化魔法の効果だろう
炎の壁が立ちはだかったような
いびつな形状の力場だ

開放レベル2の魔法なら

レベル1の魔物の脅威を完全に抑えこめる

力場の内側

波打ち際を歩いて行けば

森からの狙撃にはだいぶ対処しやすくなるだろう

この手の魔法を持続するのは

集中力を要するので難しいが

子狸の持続力には定評がある

神経を張りつめずとも

イメージを保てるよう訓練されているのだ

子狸「……よし。行こう」

豆芝さんに歩み寄ろうとする子狸に

「勇者さんが待ったをかけた

勇者「徒歩で行きましょう。馬上だと、いざというときに対処しきれないかもしれない。それに……」

そう言っつて勇者さんは

ちらりとお馬さんたちを見た

妖精「ずっと船の上だったから、急激な運動は控えたほうがいいわ」

不安定な足場で無理をさせると

骨折の危険性があったから

ここ三週間ほど、お馬さんたちはろくに運動をしていない

お馬さんたちと同様
ろくに運動をしていなかった狐娘が同意した

狐娘「うん。急に働くのは良くない」

子狸「言い得て妙だな……」

一理あるとか言い得て妙とか言っていれば
なんとなく賢く見えるのだと

子狸は学習していた

とにかく森は避けて歩く
大まかな方針は決まった

しかし出発してから一分ほどで

勇者一行は自らの計画の甘さを思い知ることになる

狐娘「おしっこ行きたい」

勇者「じつはわたしも」

子狸「……」

子狸は断腸の思いで
変態せざるを得なかった

子狸「……この場で済ませてくれませんか」

勇者「……」

狐娘「……………」

女性陣の視線たるや

氷河期の再来を思わせるものだった

妖精「……………」

とりわけ羽のひとの視線は

子狸の横にいるおれへと

冷たく降り注いでいる

なんですか

五二、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

これがお前の育てた変態だよ

いまどんな気分だ

五三、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

知らんよ

遊びじゃないんだ

子狸よ、言ってやれ

子狸「命が懸かってるんだ」

うんうん

だが勇者さんは一歩も退かなかった

勇者「恥を捨てて生き長らえることに、どれだけの価値があるというの」

子狸「命だろ！」

語彙は少ないものの

子狸さんがいいことを言った

でも打ち返された

勇者「それは、あなたが決めることじゃないわ」

暮らしが保証されている貴族の一員として育ったから

勇者さんは人間の尊厳を重んじる

それでも子狸が反論したのは

骨のひとたち殺害未遂事件の影響によるものか

子狸「おれは間違ってない。好きなひとに生きていて欲しいと願うのは当然だ」

どさくさに紛れて告白した

勇者「……好きなの？」

子狸「ん？ おっと、あぶないあぶない。その手には乗らないよ。お嬢は策士だからね……まったく油断も隙もないったら」

本人は危ういところで回避したつもりらしい

勇者「特殊な趣味をしているのね……」

勇者さんは冷静だ

びっくりするほど脈がない

子狸は大仰に肩をすくめた

子狸「不治の病というやつさ。おっと、これ以上は言えないな」

内股になってもじもじしている狐娘が

勇者さんの服の裾をくいくいと引っ張る

狐娘「アレイシアンさま、変態は放っておいて行こう」

勇者「そうね。行きましよう」

去り際に勇者さんがちらっと子狸を見る

子狸は言った

子狸「わかった。おれが囿になる」

男には

戦わねばならないときがあるのだ

五四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

やだ、この子狸さん男前……

「おれのおとなりさんは陸上最強生物」 part 4

五五、王都在住のとりたらない不定形生物さん（出張中

森は自然の宝庫だ

草木の成長には水が欠かせないから

大きな森には木々を維持するだけの水源が必ずある

植物は大地に根を張るものだから

土地が痩せないよう種を遠くまで運ぼうと

旬の季節には果実を育む

種を運ぶのは動物たちの役割だから

おいしい果実には多くのチャンスが与えられることになる

動物たちの中でも

猛獣と呼ばれるものは

たくさんの栄養を摂取し

それに見合うだけのカロリーを消費することで

アニマル界に君臨することを許された猛者たちだ

人間はどうか？

彼らは森で暮らすには貧弱な生き物である

獲物を追う嗅覚もなければ

捕食者から逃げる脚もなく

肉を裂く爪も

骨を砕く牙も

彼らには具わっていない

子狸「はっ、はっ、はっ」

森を駆ける子狸

妙にしっくり来る構図だが

四足獣が持つ生来のスピードには及ぶべくもなかった

しきりに背後を気にしているのは

追われているという自覚から来るものだろう

縄張りを荒らすよそものを

茂みに潜んだ動物たちが

胡散臭そうに見つめている

樹上では鳥たちがぎゃあぎゃああと喚き

闖入者の存在を一带に布告していた

罠を買って出た子狸だったが

とくべつなことをする必要はなかった

火口のんの標的が

あきらかに自分へと向いていたからだ

勇者一行で

いちばん厄介なのは羽のひとだ

とにかく速すぎるし

接近を許せばサンドバックにされる

狐娘は問題外

つたなすぎる

だが人質としての価値はありそうだ

勇者さんは孤立させてしまえばいい
箱入り娘が一人旅を続けられるほど
自然界は甘くない

子狸は手頃なまとだ

コイツがいなくなれば

勇者一行の生活力は麻痺する

あとは簡単だ

多少つつけば

パーティーは呆気なく崩壊するだろう

子狸「……!!」

子狸が藪を抜けると

横手に立て札が見えた

火気厳禁とある

子狸「しまった……!!」

なにが？

だが火口のんが

ここを決闘のフィールドに選んだのは確かなようだった

子狸「上か!？」

頭上から撃ち放たれた触手を
とっさに子狸は体を開いてかわした

操られまいとする

糸繰り人形のようにだ

動きに騎士ほどの安定感はないが
感覚の鋭さで補っている

退魔性が低い人間は
先触れの感知力が高くなる

だが退魔性が低い……
すなわち魔法への親和性が高い人間は
それだけ魔物のアクションに幅を与えてしまう

雷のように降り注ぐ触手から
子狸は必死で逃げ回る

子狸「チク・タク・デイグ!」

余裕はなくとも詠唱はできる
そうなるよう鍛えた

頭上に前足を突き上げた子狸をあざ笑うように
火口のんは高速で樹上を行き来している

触手の伸縮を利用して

木から木へと渡っているのだ

認識の外へと働きかける

概念的な魔法の使い方は

射程超過の制限に絡めとられる

だが子狸の親和性の高さなら

勘に頼った投射魔法も通るだろう

動きを先読みしたのか

空中で直角にカーブした圧縮弾が

火口のんを追尾する

これを火口のんは触手で打ち払ってガード

反撃に無数の触手を伸ばして

八方から子狸を狙う

子狸「アルダ・グレイル・デイグ！」

子狸の新技炸裂

周囲に浮かび上がった黒球が

高速で回転して触手をなぎ払った

五六、住所不定の特筆すべき点もないてふてふさん

おい。なにしれっとパクってんだ

それ、おれのダークネス スフィアじゃねーか

五七、管理人だよ

違いますうー

おれの新技

暗黒舞踊って言うんだ

五八、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

勇者さんに対抗して

必殺技を編み出したつもりらしい

五九、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

というか

ダークネス スフィアの劣化版だな

規則性がある

六〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

港町で羽のひとを苦しめたダークネス スフィアは

規則性を排除するために

おそらく何通りかの攻撃パターンを

あらかじめ作ってあった

子狸の暗黒舞踊とやらは
スピード重視なのか

それとも力量の不足によるものか
一定の規則性に従って運動している

黒球の隙間を縫って攻撃するのは
火口のんにとってさして難しくなかった

子狸「くっ、強い……！」

暗黒舞踊を解除した子狸が
素早く後退して直撃を避ける

これは無理だな。負けるわ
すでに術中に陥ってる

体勢を立て直した子狸が反撃に出る

子狸「パル・エリア・ラルド！」

骨のひとはごちゃごちゃと何か言っていたが
人間たちの武器が廃れたのは
けっきょくのところ
それが必要とされなかったからだ

槍は手元で伸び縮みしないし
放たれた矢は空中で直角に曲がったりしない
もちろん刃先が分裂するなんてこともありえない

騎士たちがたまに使っている光の鞭は

おれたちの触手を真似たものだ

目には目を

触手には触手だ

子狸「デイグ！ 伸びろ！」

先端が分裂した光の鞭を生成した子狸が
激しい追撃の合間に
前足を突き上げた

幾条もの光線が虚空を走る

……異能持ちと呼ばれる人間がいる
異様に勘が鋭かったり
距離を隔てた人間と交信したりする連中だ

そうした人間たちを
おれたちはどうやって出し抜いてきたか

答えはこうだ

子狸の足元

ひそかに土壌を掘り進んだ火口のんの触手が
ポンポコのお腹を直撃した

子狸「あ！？」

がくりと片ひざを折る子狸

子狸「ぬう……！」

集中すればするほど
人間の視野は狭まる

ふだんは見えるものが
見えなくなる

注入された睡眠欲に抗おうとする子狸だが
しょせん無駄な足掻きだ

おれたちのレクイエム毒針は
肉体に干渉するものではない

火口「……………」

樹上から触手に吊り下がった火口のんが
子狸の眼前に降り立つ

開放レベル1の魔法をぶつければ
それで終わる

……儂い生き物だ

手を伸ばせば届く距離

ひとことの詠唱で逆転できる

しかし、おれたちの奥義を受けたものが
まともに魔法のイメージを結ぶことなど不可能だ

子狸「……お嬢……すまない」

そう言い残して

子狸の上半体がぐらりと揺れた

子狸、敗れたり

火口「……………」

深い眠りに落ちた子狸に

火口のが

ゆっくりと地面を這って近付く

自らのテリトリーに侵入した愚かなポンポコを
見下すかのようだ

きゅ、と身体をねじる

茂みから飛び出した勇者さんが

聖 剣を振り下ろしたときには

火口のんはふたたび樹上へと飛び上がっていた

追撃の死霊魔哭斬は不発に終わる

勇者さんは地面に突っ伏すと

子狸の頬をぴしぴしと叩いて

切れ切れに言った

勇者「なんで……走るの……」

極めて退魔性が高い勇者さんは
聖 剣の秘匿性も相まって
奇襲向きのユニットだ

まず気配が読めない

しかし森の歩き方は素人だ

足音を忍ばせることもできない

だから火口のんにとって

彼女の接近は筒抜けだった

火口「終わりだ」

隠れひそんだ火口のが

はじめて口を開いた

立ち上がった勇者さんは凜としているが

どう見ても疲弊している

子狸を追って無理をしたのだろう

汗と土にまみれていた

火口のは続けた

火口「何故と……言ったな。どうやら自覚がないらしい」

にゅっと触手を伸ばして

子狸の前足に巻き付けた

火口「お前を危険から遠ざけるためだろう。こいつには、お前を守

ろつという気持ちはあっても、守ってもらおうという気持ちはないのだ。だから一人で先行する」

勇者「……………」

勇者さんは、ひたすら呼吸を整えている

火口「じっくりと考えてみることだな。おれは妖精と決着をつけに行く」

この布陣なら

羽のひとは勇者さんに命じられて

狐娘の護衛についているはずだ

なにも言い返さない勇者さんに

火口のは畳みかけた

火口「こいつは連れて行くぞ。文句はあるまい？ お前には、こいつの手を取る資格がない」

ぐいと子狸を引っ張り上げようとする火口のんに

しかし勇者さんの手元で聖 剣が閃いた

半ばから断ち切られた触手を

火口のんがすると引き上げる

火口「……………わからん小娘だ。まあ、いい。好きにしろ」

そう言って、木の幹に触手を巻き付ける

この場をあとにするつもりだ

次の標的は狐娘

そして最後に羽のひとだろう

どのみち勇者さんには

子狸を背負って歩く体力などない

レクイエム毒針は魔法ではないという設定になっているから

退魔力で子狸の眠りを打ち破ることはできない

可能といえば可能なだろうが

火口のが阻止するだろう

子狸を置いて戻るか

それとも羽のひとを信じて朗報を待つかの二択だ

その程度のことは

勇者さんにもわかっているはずだった

火口のんは

勇者さんを羽のひとから引き離すよう画策した

勇者さんは火口のんの裏を掻いたつもりで

まんまと罠にはめられたのだ

いや、たとえどちらに転んだとしても

子狸を欠いた勇者一行は機能しなかつただろう

子狸の引き離しに成功した時点で

火口のんの勝利は決まっていたようなものだ

自然界の厳しさを体験したことがない勇者さんは
火口のんの企みを看破することはできなかった

彼女の負けだ

そして子狸を眠らせたということは……

いまか？　いまなのか？

六一、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そう

奇跡というものは

自分たちの手で掴み取るものだからな

もう逃げられないぜ子狸い……

??「ドミニオン！」

来ました

やぶの向こうから

甲高い少女の声が響いた

放物線を描いて飛んできた魔どんぐりが
空中で閃光を放って爆散する

まぶしい

おれ「ちっ……！ 嗅ぎつけられたか」

光がおさまると

一人の少女が勇者さんの横で

樹上のおれを睨んでいた

??「また悪さをしてたのか、メノウポーラ！」

彼女は足元に転がっている子狸に気が付いて

おお、と女の子らしからぬ感嘆の声を上げた

??「同志ポンポコ？ 同志ポンポコじゃないか！」

土魔法と呼ばれる魔法がある

人間にしか使えない……

いや、正確には二番回路が生み出した

本来は存在しないはずの魔法である

人間なら誰でも使えるというわけではなく

大自然への愛が一定の領域を突破した人間のみが

習得条件を満たすことができるらしい

そして大自然への愛が極限の領域に達した人間は

なぜか判を押したように反社会的活動に走るのだ

もしも子狸が目を覚ましていたら

きっとこう言ってくれただろう

子狸「現れたな、このテロリストめ！」

子狸にとつてのトラウマであり
そして爆破魔の異名で知られる
国際指名手配犯を

ひとは

豊穰の巫女と呼んだ

勇者「同志」

有名人だ

おうむ返しに呟いた勇者さんが
じつは立っているのもつらかったのか
眠っている子狸の横で
脱力したようにぺたんと地面に座った

「おれのおとなりさんは陸上最強生物」 part 4 (後書き)

注釈

・土魔法

特定の条件を満たした人間にしか扱えないとされる魔法。スペルは「ドミニオン」。

土属性、豊穰属性とも呼ばれ、その名の通り土を操ることができ
る。

水魔法と同様、土そのものを生成する魔法ではなく、浸食魔法か
ら分離した魔法の一種だと思われる。

海上でもない限り人間の足元には常に土壌があるため、強力な魔
法とされる。

植物を操ることはできないが、魔改造の実を生育したり兵器化す
ることもできるようだ。

習得するための特定の条件とは、大自然への信仰。

条件を満たした人間は、たいてい自然への回帰を声高に叫びはじ
める。

さらに高じると文明破壊に乗り出すものも……。

「おれのおとなりさんは陸上最強生物」 part 5

六一、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

豊穰の巫女か

さすがパワースポット。大物がいるな

おれの家にもカイザーと呼ばれる猛者がいる……

六三、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

それ、くちばしの鋭いひとでしょ

六四、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

そつですけど？

あれ？ なんか見下してる？

アリア家か？ アリア家ですか？

言っとくけど、人間なんて大したことないぞ
たまたま魔法の使用条件を満たしてただけで

見るよ、この機能的なフォーム

美しい流形線に加え

極寒の地に適応した脂肪の厚みときたら……！

まさしくカイザーと呼ばれるに相応しいぜ

ぼんぽこぼーん！

あ、痛い！ つつつかないで！ ごめんなさい！

六五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

かまくらのが南極の覇者にどつかれている一方その頃……

おれ「くっ、あと一步のところ……！」

勇者さんが巫女と接触したなら

もうこの場に用はない

木の幹に巻き付けた触手をしならせて

その反動で矢のごとく飛び去ろうとするおれを

巫女「デイレイ！」

先の閃光弾に仕込んでいた放射魔法に

盾魔法を連結した巫女が

内向きの力場で一帯まるごと包囲

あえなく弾かれるおれ

六六、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

おい

遊んでないで

さっさと撤退しろ

狐娘を連れて

おれ現場に急行中

お馬さんたちも一緒だ

火口のひとが登場して安心したのか

鳥さんたちは大人しくなってる

にも拘わらず

狐娘は勇者さんの居場所を正確に把握してる

これだから異能持ちは嫌なんだよ

理屈が通用しねえ……

いちおう伏兵には気をつけると言ってるが

脇目も振らず一直線だ

まあ一分近く余裕があるから言わせてもらっけど

なんでお前らは勇者さんに対して厳しめなの？

じっくり考えろとか言ってたけど

悪いのは子狸だろ

言うこと聞かないんだから

勇者さんに責はないよ

お前らは子狸に甘すぎる

六七、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん

そうか？

おれから言わせてみれば

てっふいーは勇者さんに甘すぎるぞ

彼女はパーティーのリーダーなんだから

問題があれば対処するべきだと思う

そもそも子狸が独断専行に走りがちなのは

勇者さんが頼りにならないからだよ

実家の教育によるものか

大局を見る目はあるかもしれんけど

いざ戦いの場になると

細かいところで練度の低さが目立つ

子狸がエキスパートとは言わんけど

六八、住所不定のどこにでもいるようなてっふさん

てっふいーって言うな

あのね、この際だからはっきり言っけど

おれは勇者さんのこと気に入ってるんだ

子狸の嫁として申し分ない素材だと思ってる

六九、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おれは認めんぞ

剣術使いの嫁など……

七〇、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

いや、あのですね、お二人さん……

勇者さんにも選ぶ権利はあると思うんだが……

七一、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

あ？ 子狸さんの何が不満なんだよ

七二、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

はじまったよ……

こうなると長いから

火口の、いいから話を先に進めちゃって〜

七三、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

だから子狸がどうかじゃなくて

おれは勇者さんが気に入ってるから

バウマフ家に嫁入りしてきて欲しいんだよ

七四、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

構わず続行すんなよ！

まったくもう

ポンポコが巣穴に潜ると

すぐこれだよ……

火口の～

七五、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

そうか。勇者さんは頼りにならないか

なら特訓だな。特訓しかない

七六、火山在住のごく平凡な火トカゲさん

おれの出番か

七七、海底都市在住のごく平凡な人魚さん

早いよ。早い早い

いったいどうした

逸る気持ちはわかるけど

おさえて、おさえて

七八、住所不定のどこにでもいるようになってふてぶさん

だが特訓というのは悪くないアイデアだ

本当ならおれが鍛えてあげたいところだけど

勇者さんに妖精サンボが合うとは思えん……

あの骨どもは役に立たねーし……

七九、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

じゃあ歩くひとだな

誰か歩くひと呼んできて〜

八〇、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

あ？ なんだよ

いま忙しいんだよ

あとにしてくれ

八一、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

なんで忙しいんだよ

鬼のひとたちがアリア家にいるんだから

お前はひまだろ

作業中に横槍を入れると

あのひとたち本気で怒るぞ

八二、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中

子狸は寝てんの？

じゃあ、おれもこの際だから言わせてもらっけど

ばつまふベーカリーは装いも新たに

新装開店オープンセール開催してっからあああっ

八三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ポンポコ一家が留守中に
何してくれてんだよお前はああっ

八四、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中）
おれがいちばんうまくパンを焼けるんだよおおっ

八五、かつて管理人だったもの

おい。聞き捨てならねーぞ

おい。ふざけんな

お前におれの味が出せるって言うのかよ!?

八六、湖畔在住の今をときめくしかばねさん（出張中）

あほだろ、お前!

再現する必要なんてな

これっぽっちもねーんだよ!

なんとなくそうじゃないかな〜とは思ってたけど
お前、じつは頭わるいだろ!

この元祖狸が!

八七、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

！ おい！ 火口の！

足が止まってる！

王都の！ 何してる！？

八八、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

ああ、いいよ

王都のんの仕事は子狸が巢穴に潜ってからが本番だから
おれが実況する

軍団のほうは大将を足止めしてるから
スケジュールに余裕があるんだ

最初は顔見せ程度にしようかと思ってたんだけど
いざ構いはじめたら止まらなくなっちまってね

おれぞ「おれだアーツ！」

はい、行ってらっしゃい

騎士A「くそつ、三歩か！」

騎士B「だが悪くない……！」

騎士C「警戒を怠るな！ 囿かもしれんぞ！」

騎士D「狙撃はありません！ 行けます！」

大将「……見世物じゃねーぞ！ 散れ、民間人ども！」

商人A「あ、大隊長っすか。お先っす」

商人B「お疲れっす。いつも大変っすね」

商人C「あゝ。戦争が起きるって本当っすか？」

騎士C「ノーコメントだ！ 近寄るな、下がれ！」

混沌としています

現地に飛びますね

おれ参上っす

どれどれ……こほん

巫女さんの盾魔法に行く手を遮られ

ばよよんと弾かれた火口のが

激動のばうまふべーカリーに気を取られて

硬直した一瞬

その瞬間を

巫女さんは見逃さなかった

巫女「レゴ・タク・ロッド！」

舞うように半歩

誘うように片手を差し出すと

清らかに宙を撫でた手のひらの上で

雪の結晶が踊った

子狸と同じ年頃で

開放レベル3の魔法を扱えるのは

天に愛された

ひと握りの人間だけだ

つまり天才と称される人種である

本来ならば歓迎されてしかるべき

輝かしいまでの才能が

少し立ち位置を変えただけで

毒花のようにほころんで見えた

巫女「ブラウド・グノー！」

彼女を中心として放射された冷気が

急速に世界を白く染め上げる

凍土が走り

雪化粧の氷華が幾重にも咲き乱れた

とつさに勇者さんが子狸を抱き寄せたのは

巫女さんの標的指定が

何を対象としたものなのか
判断しかねたからだろう

盾魔法で退路を断ち
殲滅魔法で仕留める

一見すると一分の隙もない戦法だが
巫女さんは戦闘訓練を受けた人間ではない

大技に頼りすぎだ

巫女さんの封鎖が打ち破られたのは
火口のんが氷雪の牙にかかろうとした
まさにそのときだった

盾魔法は外部の干渉を弾く魔法なので
内側からの干渉にはもろい

今回のケースは内外を反転させているので
外部からの攻撃ということになる

力場を刺し貫いた触手が
狙い変わらず火口のを拾い上げた

火口B「つかまれ！」

火口A「すまん！」

絡み合う手と手

かつて港町で死闘を演じた二人だったが
わだかまりは解けたようである

火口Aを救出するついでに
Bは子狸を回収しようとしたが
これは勇者さんに阻まれた

からくも氷結を免れた火口のんが
矢のように飛んで森の中を駆け去っていく

巫女「逃げられた……!？」

巫女さんは悔しそうだ

標的を捉えきれなかったことで
彼女の魔法はイメージを逸脱して霧散した

おれたち魔物が
致命傷を負うと消滅するというのは
なにもまるつきり嘘というわけでもない

過去に何度か試してみたが
飛び出せ宇宙すると流れ星みたいに燃え尽きて
ぱっと消える

魔法みたいに

今度は三段式ロケットで行ってみようと思う
夢がひろがる

勇者「……………」

火口のんが飛び去って行った方角を
勇者さんはじっと見つめていた

聖 剣はとうに仕舞ってある

これまでずっとそうしてきたように
人前で晒すことは避けたいのだろう

巫女「ん……………」

巫女さんは唇に指を当てて
勇者さんを見ている

おそらく二人は初対面同士で
共通した知人のポンポコは
一向に目を覚ます様子がない

巫女「だいじょう……………ぶ？」

けつきよく無難に声を掛けた

かすかに語尾が震えたのは
声に反応した勇者さんと目が合ったからだ

アリア家の人間は
たったそれだけのことで
他人に恐怖を与える

本能的なものなのかもしれない

過激派で知られる豊穰の巫女だが

ふだんは朗らかな

ふつうの女の子である

勇者さんが言った

勇者「追いなさい」

第一声が追撃指令だった

巫女「え〜……」

巫女さんはこの場を去りがたく感じているようだ

勇者「時間が惜しいの。報酬なら」

お金の力で解決しようとする勇者さんだったが

物音に気付いて指令を取り下げた

勇者「……待って。やっぱりいいわ。この場で待機」

木陰に入ると遠目には

蛍の群れが飛んでいるようにも見えた

羽のひとだ

あとに続くお馬さんたちは

森の動物たちが気になる様子で

しきりに周囲を見回している

獣道もなんのその

茂みの中を腹這いになって

ほふく前進しているのが狐娘だ

巫女「ん……。お連れさん？」

勇者「敬語で構わないわ」

少女が話しにくそうにしているのを察してか

勇者さんは待遇の改善を要求した

茂みを突破した狐娘が

勇者さんに駆け寄ろうとして硬直した

狐娘「！」

勇者さんは子狸を抱きしめたまま

巫女さんの拳動を観察している

その情景を目撃した狐娘が

どう思ったのかを

われわれは知るよしもない

彼女は巫女さんを見つめて

狐娘「……敵は？」

そう言った

巫女さんが答える前に

狐娘は正解に辿り着いたらしい

狐娘「あつちか。……つぶす」

殺意をあらわに駆け出そうとする狐娘を

勇者さんが制止した

勇者「コニタ」

狐娘「……………」

狐娘は勇者さんに従順だ

自分の感情よりも

彼女の命令を尊重するぶん

子狸よりもずっと扱いやすい

とぼとぼと歩み寄ってくる狐娘に

勇者さんは簡潔に命じた

勇者「たくさん走って疲れたわ。手を貸しなさい」

狐娘「……うん。わかった」

差し出された勇者さんの手を

狐娘はぎゅっと握る

お馬さんたちを先導して

合流した羽のひとが

いちおう形だけでもと子狸の身を案じる

妖精「なに寝てんだ。起きろ」

勇者「毒持ちに刺されたの。解毒できる？」

羽のひとは手遅れだと言わんばかりに首を振った

妖精「あいつらの毒に治癒魔法は効きません。毒性は弱いのか、大事に至ったという話は聞いたことないですけど……」

ツボを刺激するので

むしろ健康に良いのだ

勇者さんが頷いた

勇者「そう。……移動しましょう。この子を馬に」

疲弊している様子の彼女を

羽のひとは気遣った

妖精「少し休んでいきますか？」

勇者「いいえ。わたしも馬に乗って行くわ。土魔法の術者がいてくれて良かった」

巫女「……ん？ わたしのこと？」

勇者「あなた以外に誰がいると言っの」

これは勘付かれています

勇者さんの誘導尋問に

巫女さんはあっさりと引っかかった

巫女「同志ポンポコがいるじゃないか」

「おれのおとなりさんは陸上最強生物」 part 5 (後書き)

登場人物紹介

・狐娘

勇者さんがコニタと呼ぶ女の子。本名かどうかは不明だが、「コニタ」というのは「たんぽぽ」のことである。

勇者さんの親衛隊を自称しているが、当の護衛対象からは就職するよう強く勧められている。専門的な訓練を受けた様子もない。

ふだんは黒装束で身を包み、狐を模したお面をかぶっている。必要とあらばあっさりとお面を外すあたり、素顔を晒すこと自体に抵抗はないようだ。

「異能」と呼ばれる不思議な力を持っていて、目には見えない念波のようなものを発信できる。

この「念波のようなもの」を生き物にぶつけて、思念の型を取ることで読心術めいたことができるらしい。

旅がはじまった当初から勇者一行を陰ながら見守っていたが、魔物だらけの幽霊船であるじの身を案じるあまり、軽率な行動に走って見つかる。

そうした経緯から、あるじを危険にさらす不甲斐ない下僕（子狸）を嫌っている。

もともとはアリア家に仕えている技術者集団の一員で、おもに食べて寝ることを研究していたと本人たちは豪語していた。

養ってもらっている身分なので、雇い主の勇者さんに対しては絶対の忠誠を誓っている。つまり彼女以外の人間に雇われる気はさらさらしない。

さいきんになって自分は忍の者とか言い出した。数々の忍法で子狸を幻惑するが、真偽のほどは甚だ怪しい。

「豊穡の巫女」 part 1 (前書き)

注釈

・並行呪縛

魔法の働きを自動化する高等術。開放レベル5。スペルは「エリアル」。「選択」の意。

変化魔法と異なる点は「条件付け」にあり、条件Aに対してBという反応を自動で取るよう設定できる。

この条件付けを緻密に行うことにより、たとえば投射魔法に自動追尾機能を与えることも可能だが、そうした用途は滅多に見られない。おもな使い方はシュミレーター作成で、とくに鬼のひとたち監修のもとファイブスターズがリリースしている「つの付きシュミレーター」のシリーズは高い評価を得ている。歴代の世界の鎧シリーズを駆ってミッションをクリアしていくという内容だ。

協力プレイが可能で、現在のバージョンは一号機〜四号機までの中から搭乗機を選んで出撃することになる。中でも、傑作として知られる三号機は人気が高い。

設定上、開放レベル5を扱えるのは王種のみに限られるため、並行呪縛の存在を知る人間はほとんどいないようだ。

「豊穣の巫女」 part 1

二二三、住所不定のどこにでもいるようになってぶてぶさん
だから右だって、右

二二四、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん
しつこいなあ……

せつかく隠し扉を見つけたのに
放っておく手はないって
さんざん話し合っただろ

二二五、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん
まあ、わからんでもないがな

王都のんと手口が一緒なんだよ
このマップ
全体的に造りがいやらしいっていうか
製作側の悪意をひしひしと感じる

二二六、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中
おれは関係ないだろ

二二七、山腹巢穴在住の現実を生きる不定形生物さん（出張中

まあまあ……例えばの話だよ

お、魔いちごドロップした

火口の〜

二二八、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

おう。すまん

二二九、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

お前、いちいち突っ込みすぎなんだよ

四号機は高機動型なんだから

あんまり前が出るな

だから大人しく三号機にしとけって言ったのに……

二三〇、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

見えるひとが使ってるの見て

ちよつと憧れたんだよ

いいだろ、少しくらい試したって

二三一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん

あのひとの操縦センスは異常だからな
憧れる気持ちはわかるが……

あれ、行き止まりだ

二三二、住所不定のどこにでもいるようなてふてふさん

！

罨だ！

二三三、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

ヒントを出し惜しみしておいて
隠し通路で罨とかつ……

二三四、魔都在住の特筆すべき点もないライオンさん（出張中

性格が悪すぎる……！

誰だよ、このマップ作ったの！？

二三五、古代遺跡在住のごく平凡な巨人兵さん

え？おれですけど……

二三六、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

そんな気はしていた

二三七、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

見た瞬間、やばい、確実に殺りに来てると思ってた

ああ……… 損耗率が30越えた………

二三八、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

さらばだ、火口の

ぼちつとな

二三九、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

お前かよ！？

二四〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

おや、子狸さんに覚醒の兆し

二四一、海底洞窟在住のとるにたらない不定形生物さん
つまり政治が悪い

二四二、かまくら在住のとるにたらない不定形生物さん

一概にそうとは言えまい

民主主義、じつに結構

だが、しょせんは政治の素人だ

二四三、火口付近在住のとるにたらない不定形生物さん

その素人すら納得させられないで
なにがプロフェッショナルだよ

停滞した社会に喝を入れるには
徹底した分権しかない

分権だッ！

二四四、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

熱く語っているところすまんが

そろそろ子狸が起きそうなので
またの機会にしてくれ

では、あらためて状況を説明する

火口のんの襲撃により

あわや全滅かと思われた勇者一行だが
偶然にも通り掛かった少女の加勢により
魔物の撃退に成功する

少女の道案内で

森のテントに辿り着いた一行は
そこでひとときの休息を得るのであった……

子狸「……………」

ぱちつと目を覚ました子狸が
のろのろと上体を起こして
ぼうつと虚空を見つめる

テントの中では

道案内をしてくれた少女と勇者一行が
情報交換をしているところだ

ちなみに子狸が眠っている間
おれたちは人類の未来について
熱く議論を交わしていた

ぼんやりと宙を眺めている子狸に
羽のひとと狐娘がひそひそと内緒話をはじめ

妖精「……テンション低っ。少しがっかりですね」

狐娘「がっかり」

うん、と頷いた狐娘に

子狸は腹を立てる様子もない

二四五、管理人だよ

うーん……

二四六、住所不定のどこにでもいるようになってふてふさん

なんだ？

どうした？

二四七、管理人だよ

いや、なんだろう

巫女さんの夢を見た

今頃どうしているのだろう

二四八、空中庭園在住のとるにたらない不定形生物さん

きつと今頃は
過去のあやまちを悔やんで
更正してくれてるんじゃないか

二四九、管理人だよ

そう？

そうだといいなあ……

おれ、思うんだけど

あのひとつて

巫女「おはよ〜」

おっと本人登場

いやいや……え？

いやいや……

二五〇、王都在住のとるにたらない不定形生物さん（出張中

まさかの本人登場に

子狸さんはいったん認識を拒否したようだ

にこやかに手を振る巫女さんから目を背けて

勇者さんに視線を固定する

勇者さんは、草で編んだ座布団の上に

女の子らしい仕草で座っていた

子狸「おじよっ……」

意識を失う前の

状況が状況だった

跳ね起きた子狸は

勇者さんに駆け寄ろうとしたものの

ふたたび巫女さんと目が合って硬直した

目覚めたばかりで

気持ちと身体がうまく噛み合っていないようだ

巫女さんがにこつと笑った

巫女「久しぶりだね、同志よ」

子狸「……なんだ、夢か」

子狸はそう結論を下して

にこやかに対応した

子狸「お元気ですか」

ふだんならありえない態度だ

巫女「うん、お元気ですよ」

にこにここと

笑顔のまま立ち上がって
歩み寄ってくる巫女さん

子狸も彼女に歩み寄ろうとして

子狸「本物だー！」

即座に逃走を図った

妖精「させるか！」

脱兎のごとく跳ねる子狸を
羽のひとの念動力が捕らえる

子狸が哀れっぽく鳴いた

子狸「てっふいー！？おれを裏切るのか！？」

妖精「てっふいーって言うな！」

子狸「でもおれには弟子がいるからね。愛弟子が。自慢の弟子さ」

ちらちらつと狐娘に合図を送る子狸だったが

彼女はいつにも増して辛辣だった

狐娘「お前と話すことは何もない」

子狸「……あれ？怒ってる？」

狐娘「怒ってない」

子狸「怒ってる女の子はいつもそう言っ……」

人間には人付き合いというものがある

それなのに子狸は自分に正直であることとするから
人間関係が破綻する

余計なお世話というやつだ

それでも子狸は

狐娘を放ってはおけない

力量不足を自覚しつつも

勇者さんを守るうとしていた彼女に
自分を重ね合わせて見ているからだ

子狸「……わたあめ？」

狐娘「……わたあめ」

え？どういうこと？

……さっぱり意味はわからんが

仕方なさそうに応じた狐娘に

子狸は安堵したようだ

そして悲鳴を上げた

子狸「お、お前っ、それ以上、近寄るな！」

気付けば巫女さんが間近に迫ってきていた

ここにここ、ここにここ

巫女さんは笑顔のまま

巫女「女の子をお前って呼ぶのはやめなさいって何度も言ったよね？」

子狸「待て、話せばわかる」

二人の様子を

勇者さんは静観している

子狸に何を訊いても

適当な答えしか返ってこないから

第三者による尋問を期待しているのだ

すっかりおびえている子狸だが

勇者さんの手前、意地になったのだろう

子狸「ぬぬぬ……!!」

自身を奮い立たせて反撃に出た

子狸「お前っ……!! あ、ごめんなさい。君は、まったく反省してないな!!」

巫女「なんのこと?」

巫女さんはすっとぼけた

その態度が

また子狸の癪に障る

ポンポコは憤慨した

子狸「もう騙されないぞ！」

爆破魔の二つ名で知られる巫女さんが

いまだにお縄を頂戴していないのは

彼女の活動を陰で支える

協力者がいたからだ

つまり子狸のことである

ひとの善意を信じて疑わない

お花畑系の子狸にこうまで言わせるのだから

大したものだ

子狸の決意は固いと見て取ってか

巫女さんが神妙に頷いた

巫女「そうか」

モードが切り替わった

巫女「同志ポンポコよ、真実を知るときがやってきたようだな……」

子狸「真実……だと……？」

巫女さんは本気だ

豊穰属性に目覚めた人間は
個人差はあれど

世界のために戦いはじめる

それは善意だ

だから彼女は

優しい嘘を吐くときと同じ心持ちで
ひとを騙せる

自己犠牲の精神で

子狸を聖戦へと駆り立てるのだ

彼女は言った

巫女「この世界は滅びようとしている」

子狸「な、なんだってー!？」

子狸「……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4371s/>

しいていうならお前の横を歩いているのが魔王

2012年1月11日23時53分発行